

混弾のキンジ

caose

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界の物語はその人間が通る道、現象、周りの影響で十人十色。

これはもしもの話の一つ。

これは拙作でもある「予測不可能者 遠山キンジをベースに単品版（他の拙作の他作品とのクロスはなし）であり3次創作と想ってください。れば幸いです。

もしかしたらハーレムはこっちからも出すかも。

目次

放たれた始まり	1
まさかの爆弾?!	7
戦闘開始	11
普通の出会い	17
いざ、SSRへ。	22
天草との対話	28
相手を知るのは大切な事	33
雨の中で通学はご容赦を!	38
バス迄	43
バスジャック制圧!	48
真実の犯人。	54
目的	60
飛行機に入って	66
理子対アリア	71
キンジの心	75
鎧顕現。	79
理子対キンジ	85
呼び出し	91
受けられない内容	96
白雪を探せ	101
白雪を探しにジャンクション。	106
接敵	111
聖魔女対武偵	116
やり対槍	123

話し合い	127
武偵殺し帰還	132
偶には平和も良い	137
秋葉原へ	143
盗みについて。	148
涙流して	153
説明	159
作戦準備	164
『紅鳴館』にいざ出発	169
説明	174
嵐の晩	178
作戦会議	183
作戦会議②	187
作戦決行	190
受け取り場所にテ	194
第40話	199
2人の欠けているもの	205
『ブラド』来る	210
ブラド対天草	215
ブラド対天草 決着	220
あの後	225
対話	229
仕事は何処だ！	233
アリア対カナ	237
祭り見て	242

服が来た。	247
カジノにて	252
砂のバケモノ	257
さらに下へ	262
兄との再会	268
戦いの時迫る	274
作戦会議	279
潜入	284
船内戦闘	289
パトラ戦	294
シャーロックホームズ来る	300
会話	305
第一次シャーロックホームズ戦	310
いざ船内へ	315
更に奥へ	319
金一の言葉	324
シャーロックホームズとの対面	329
第二次シャーロックホームズ戦	334
夢にて	339
進化と決着	345
一つの時代の終わり	351
夏休み	356
粉雪来る	361
帰ろう	367
レキ対キンジ	372

レキ対キンジ後編	377
入学式	383
対決	388
いざ京都へ。	394
新幹線にて	398
電車の中で	403
車内での戦闘	408
ココの話	413
作戦会議	417
新幹線の上で	423
決着	427
写真撮影	433
宣誓	440
派閥決め	444
閉会	449
終わりにて	454
家に帰って	459
緋緋神とは？	463
そして朝	467
役決め	472
夜の教室	478
裁判	483
メイド来る	489
雇ってください！	494
転校生	499

昼飯は驚愕	504
家に帰って	510
起床	516
依頼	521
いざスカイツリー	526
戦いの場は天空	530
闘い終わりにて	536
光	541
屋上。	546
戦闘	552
戦闘Ⅱ	557
戦闘Ⅲ	563
病院にて	572
学園祭	577
SSRへ	582
話し合い	588
祭り巡り	593
鍋	599
襲来	603
敵地へ	607
会議	611
同盟について	616
病院にて	621
調査依頼	626
買い物	632

報告かい	637
運動会・前編	640
運動会・後編	645
運動会が終わって	649
悪夢	654
狩猟者降臨	658
戦いの中の閑話。	664
戦いの後	667
長の会話	672
ホテルへ	680
話し合い	686
いざい桜へ。	692
自己紹介	697
学園に来て	701
転校	705
部活動	710
菓子を食べるがために	715
看板娘現る	720
きス魔	725
保健室での語り合い	731
家に来て	736
とある朝	741
危ない着替え	746
君塚について	751
ロッカーにて	758

レストランにて

食事かい

玉藻が来た。

悪意の

聴取

馬締の目的

思い出

守る

戦い

追いつかれた

妖集結

そして後日談

報酬について

いざ母校へ

帰還

いざ中国へ

香港に着いて。

会議です

武藤と出会う

いざ敵の城へ

ランパオ城に来た

諸葛を見つける

諸葛との対談

戦の前触れ

刀との語り

888

883

877

872

867

863

859

854

849

843

838

832

827

822

818

814

809

804

795

789

784

778

773

768

763

戦い	894
闘い	899
犯罪予告	904
言い合い	908
帰還	911
欧州へと	916
空港にて	921
フランスへ。	925
フランス支部へ	929
フランス支部にて	934
作戦準備	939

放たれた始まり

「全く、客船に爆弾を仕掛けるとは連中も大胆だな。」

大型客船の船上、燃え上がる船の上で男性は悠然と歩き、船の先端まで

たどり着いた。

そこには・・・誰かがいた。

すると男性は懐から武器を構えると・・・こう言った。

「覚悟してもらおうぞ！***」

そして男性は大鎌と短剣を構えて・・・飛び掛かり・・・。

「ああ、朝か。」

そう言つて青年・・・遠山キンジは目を覚ました。

如何やらパンツ一丁で寝ていたようだ。

部屋の中とは言え普通そんな恰好で、然も三月の終わりに着るか普通と

思いたくながまあ本人の事なので仕方あるまい。

そう思うのだが部屋は綺麗にしていた。

その理由は・・・。

ピンポン。

チャイムの音で明らかとなる。

「は〜い、取敢えず着るか。」

キンジはそう言って制服に着替えて扉を開けるとそこにいたのは……。

「よう、天草か。」

「やあ、遠山君。」

目の前にいたのは少々短髪気味の黒髪で神父の服を着た男性「天草 信一郎」。

キンジが一年の時からの戦友である特殊な学科の生徒。

そしてもう一人はと言うと……。

「つてお前も来たのか……松葉。」

「煩いわねって別にアンタの為とかそんなんじや」

「はいはいはい、速く入りましょ。もう4月とは言えまだ寒いんですから。」

天草がそう言って部屋に入った後に少女「松葉 刑姫」も入った。

彼女は根っからの籠り娘であったが2人の協力も相まって面倒くさがりながらも部屋に出るがその原因に対して信一郎はニヤニヤと見ていた。

「「頂きます。」」

互いに食事でもある食パンとコーンスープを食していると松葉がキンジに向けてこう聞いた。

「ねえキンジ。貴方の時計、時間が5分ずれてるわよ。」

「はあ？そんな訳ねえだろうが!?時計も携帯電話も全部同じ」

「ちよつと貸して。」

松葉がそう言つて鞆からパソコンを取り出して調べると松葉はこう答えた。

「これハッキングされてるわね。後でパソコンも見せて。それと他の時計も」

戻しておいたほうが良いわね。」

「マジかよ・・・一体誰がハッキング何て」

「それでは今から急いでやればバスにはギリギリ」

「何言つてんだ天草。お前は今忙しいだろうが、俺と松葉がやるから」

先に行けよ。」

「ちよつと！何で私まで巻き込むのよ!!」

「分かりました、それでしたら向こうで落ち合ひしましょう。」

もし遅刻したとしても理由は話しておきますので。」

「悪いな。」

「いえいえ、これも親友の為ですよ。」

「いや待つてよ！だから何で私まで巻き込むのよ!!」

「電子機器で最も詳しいのは貴方ですからね。『餅は餅屋』です。」

それではご両人共、ちゃんと頑張つて下さいね。」

ではと言つて天草はすつと立ち去るのを見て松葉はギリギリと歯軋りして・・・若干であるが顔を赤くしてこう呟いていた。

「何よアイツ、何時も何時も何か世話焼きでさあ。」

「何言つてんだ？それよか俺はパソコン持つてくるから直しといってくれ。」

俺は部屋中の時計を直すからな。」

「・・・分かったわよ。」

松葉はそう言つて作業に取り掛かった。

「急ぎなさいよ！バスに乗り遅れるわよ!!」

「分かっているって！ああもうナンデ今日なんだよ!!」

キンジは松葉に追い立てられるような感じで下に降りるが・・・
時は既に遅しであった。

「ああ待つて！待つてー！！」

「行っちゃまった・・・。」

キンジと松葉は遠りぎかっていくバスを見て呆然としながら見続けるしか

なかった。

そして松葉はキンジに向けてこう言った。

「どうするのよアンタ！アンタの時計とかのせいでこっちは遅れ損
よ!!」

どう責任取ってくれるのよ!!」

「俺だって知らねえよ！何で部屋の時計が全部狂っちゃまったのか
分からねえんだから!!」

「何で狂うのよ！普通に考えたら可笑しいでしょうが!？」

「可笑しいことが起きているから俺も頭を悩ましてるんだよ!!」

「ああもう！アンタのせいで初日から遅刻よ!!どうしてくれるのよ
もー!!」

初日位はさとブツブツと文句たれているとキンジが自転車を出し
てこう言った。

「乗れ！今なら間に合う!!」

「はあ！如何やって乗るのよ!!ヘルメットは!？」

「武偵用の奴があるから後ろに乗れ!」

速くと言って松葉は分かったわよと言ってキンジの背中に・・・密
着するような感じで座るがそれをキンジは背中から感じる・・・

2つの大きな柔らかいものが当たった感触に顔を赤くしてびくつ

くがもうなったら自棄だと思わんばかりに自転車を進めた。

だがそれを誰かが上から見ていた。

「やっとなんだか。何かイレギュラーがいるようだけどまあいいか。」

そう言っただけでラジコン用のコントローラーを使って・・・何かを操作し始めた。

「これ間に合うわよね!!」

「ああ、このスピードならなって言うかお前ちよつとは痩せろよ! あんまりスピードが出ねえよ!!」

「あんた何デリカシーのない事言っているのよ!!最低!!」

「おわ! 暴れるなって!!」

で
何いちゃついでんだと第三者が見たらそう思うだろうがそんな中

赤いセグウェイが後ろにびったりと着くと声が聞こえた。

『そのチャリには爆弾が仕掛けてありやがります』

まさかの爆弾?!

「は?」

突然の言葉を聞いてキンジと松葉は同時に何言ってるんだと思っ
ていると

セグウェイにある通信機からこう通信が来た。

『チャリを降りやがったり減速したりさせやがると爆発しやがります』

そう言いながら更にセグウェイが後ろからやって来たのだ。

それも・・・UZIと言うイスラエル製の短機関銃付きで。

「ちよつとあれつてUZIじゃないの!」

「秒間10発の9mmパラベラム弾を撃つあれかよ! 然もよく見たら12台も!!」

キンジはそう言いながら自転車を見渡しているとまさかと思っ
て松葉二向けて

こう聞いた。

「松葉! お前が今座っているそこ! ちよつと確認してくれるか!」

「ええ!・・・まさか・・・ないわよねえ・・・」

松葉はそろりと下を触つてみると・・・。

「・・・嘘でしょ・・・?」

「・・・そこかよ。」

マジかよと思っていると松葉は思い切って下にある物が何なのか
と確認すると

こう答えた。

「はあ! プラスチック爆弾って何よこれ!!」

「落ち着け松葉! 大きさはどの位だ!!」

キンジがそう聞くと松葉はこう答えた。

「どう見ても・・・サドル一つ分だから・・・」

「自転車どころか自動車も木っ端みじんじゃねえか。」
キンジはマジかよとそう思いながらこう続けた。

「兎に角人気のない所まで走るぞ！それと援軍も!!」

「天草にでもかけるの!?!」

「他の連中もだ！片っ端から電話するしかねえだろうが!!」

『助けを求めてはなりません。携帯を使用した場合に於いても爆発しやがります。』

「・・・電波受信型って事よね。」

「くそが！何だってこんな事に!!」

キンジはそう毒づきながらもどこかで松葉だけでもとそう思っている。

松葉がこう答えた。

「キンジ！こうなったら何台かセグウェイと銃座を破壊して

強奪するしかないわよ!!」

「無理だろそんなの！今爆弾を背負っていてツて言うかお前がいるから」

「其れってあたしがお荷物って言いたいの!」

「違う！仲間だと思っているからお前を巻き込んでツて言うかお前が

怪我するツて言うリスクがあるだろうが!!」

「そんなのこの学校に入学した時点で大なり小なり皆覚悟は

決まっているわよ!!」

「それでも俺は!・・・俺はこれ以上・・・誰かがいなくなるのは嫌なんだよ・・・!!」

「キンジアンタ・・・。」

未だとそう思っていると・・・松葉はあるものを見て俯いているキンジ二向けてこう言った。

「ちよつとキンジ！あれ!!」

「?・・・!!」

キンジはそれを見て目を見開いた。

何せ・・・武偵校の第二グラウンドに入って近くにある七階建ての

女子寮のマンションの屋上の縁に・・・女の子が立っていたのだ。
武偵校の制服。

足元に迄届くかのような長さを誇る長いピンクのツイントール。
そして彼女は其の儘・・・飛び降りた。

「えええー！飛び降りたー！！」

「おま！まさか自殺だったのか！！」

松葉とキンジはそれを見て驚いたその時に・・・更に驚愕な事が起きた。

突如彼女が・・・飛んだ・・・？

「ねえあれって・・・」

「・・・パラグライダー・・・」

いや、違った。

予め後ろに背負っていたのであろう、パラグライダーが出てきたのだ。

何だと思っほつとしてしていると彼女が・・・こっちに近づいてくるのが見えた。

「ちよー！ちよつと待ちなさいよ！！」

「この自転車には爆弾が」

松葉とキンジがそう言って止めようとする少女は大声でこう言った。

「ほらそこの馬鹿ども！さっさと頭を下げなさいよ！！」

少女はそう言っていきなり七メートル向こうにあったセグウェイを二丁拳銃で、然もパラグライダーの操縦中と言う不利な条件の中で全弾命中と言う

ことんでもない事を成し遂げたのだ。

「嘘でしょ・・・」

「マジかよ。」

松葉とキンジはその光景を見て目を点にしてそう呟くと少女は二丁拳銃を回してホルスターに収めると彼女はスカートのお尻を振り子みたいにして

険しい表情のまま・・・キンジ達目掛けてやって来た。

「ちよつと待ってよーー!!」

「さつきから言おうとしているんだが後ろに爆弾が」

「馬鹿!」

少女は松葉とキンジの言葉を無視してこう言った。

「武偵憲章一条にあるでしょう! 『仲間を信じ、仲間を助けよ』ー
行くわよーー!!」

そう言っただけ彼女は逆さになって・・・某アニメ映画での

空からの救出シーンの如き態勢になるとキンジはまさかと言って
松葉に向けて

こう言った。

「くそー!こうなったら自棄だ!!松葉、俺があの子を掴むからお前は
俺の背中に掴まってる!!」

「わ、分かったわ!!」

松葉も覚悟を決めたようで互いに同時に自転車から飛び移って

暫くした瞬間に自転車が・・・爆発した。

そして3人は其の儘吹き飛んでいくがキンジは不味いと思っ
た。

この先には体育倉庫があるのだが何をとち狂ったのかどうか分
からないが防弾に優れた奴で滅茶苦茶固いのだ。

まあ、それを止める鍵は予算的な都合でぼろいと言う難点があるの
で

キンジはそれを思い出して懐から拳銃を構えて撃って当てた後に

背中に抱き着いてた松葉を下から抱き上げるように自身の前に移
した瞬間に・・・体がそれに当たった。

「あが・・・!」

キンジはそれに当たって一瞬であるが・・・意識を失った。

戦闘開始

「う……痛ってえ……。」

キンジは背中から出てくる激痛に際悩まされながら自身が尻もち着いているような感覚がした後に今いる空間と突入した場所を想定してこう思った。

「(ここは……俺達は体育倉庫に突っ込んで……」

この狭い箱のような場所は……ああそうか。ここは跳び箱の中か。)」

そう、今キンジがいるのは跳び箱の中である。

あの時に跳び箱の一番上に激突した際に外れて三人がすっぽりに入ったのだ。

「(それにしても何故だ?……身動きが取れないぞ?!幾ら何でも跳び箱に

入っているからって身動き取れないしそれに何故か分からないが……何か頭に

柔らかい物が当たっている感触がするのだ。

暖かくて柔らかく、それに何だか甘酸っぱい香りがするのだ。

キンジは視界を確保するためにそれから離れようと両手でムニユつとする

柔らかいナニカを掴むとキンジはこう思っていた。

「(何だこれ?柔らかくて然も指がめり込むってこれは一体何なんだ?)」

そう思い離れると目の前に……松葉の顔が至近距離で見えた。

「(!!松葉!?何でここについてああそうか……俺がこいつを前に

移動させたんだって……あれ?何でこいつの顔が俺の目の前にって言うか

何かこいつ服捲れて……!!)」

キンジはまさかと思って両手を見てみるとそこで目に映ったのは……。

水色のブラジャー越しで胸を揉んでいる自身の両腕であった。

「(!!)」

キンジはヤバいと思って両手を離そうとするとあるラベルが目に入った。

そこに書かれていたのは・・・これだ。

E—86

「(Eって！こいつそんなにあるのかよって言うかやばいやばいやばいやばい！早く離さないとこいつが目を覚めたらあれ)」

そう思っただけで離そうとした瞬間に松葉が・・・目を覚ました。

「ううん・・・あれ？キンジ??って・・・確か私は・・・」

そう言いながら自身の現状を確認した。

捲り上がった制服

狭い密室

目の前には悪友・・・いや、他の存在にも思える男性が・・・自分の胸を鷲掴みしている。

「z x z c x c m c v m n c n x x z !!」

「おいマテ！これには深い理由が」

「このスケベー！！」

「ぼぐふお!？」

跳び箱の中で乾いた音が聞こえた。

「何やってんのよこのスケベ!!」

「冤罪だ！俺は無実だ!!」

「じゃあ何でアタシの胸を揉んでいたのよ!!」

「あれはお前が俺に押し掛かっていたから」

「アタシが起きなかつたらあんた如何していたのよ!？」

「どうもしねえって言うか何で俺がヤル前提だよ!？」

「男は大体がそうじゃないの!？」

「パソコンの動画の見すぎだろうが!!お前ちよつとはって・・・あれ?」

「何があれ?よ！誤魔化そうとしているんじゃないわよ!!」

「なあさ・・・俺とお前と一緒に小さな女の子いなかったか?」

「ああ・・・そう言えばいたわねって言うか何処に行ったのかしら?」

「ここに居るわよ!!」

「?・・・あ、いた。」

キンジと松葉は下から声がするのでまさかと思っているとキンジの

下敷きにされている少女がそこにいた。

「重いわよって言うかアンタら早くどきなさいよ!!」

少女はそう言ってキンジをどかそうとぬぎぎぎと這い出ようとすると

キンジが松葉に向けてこう聞いた。

「刑姫、取敢えずは立ち上がってくれ。ここは狭いからお前が立ってくれると

俺もこの子を出しやすんだ。」

「・・・分かったわよ・・・けど!後でこの礼は必ずして貰うんだから!!」

「はいはい。」

キンジは取敢えずはゲーム代出さなきゃなと思いつながら

刑姫が立ち上がるうとすると・・・キンジが突如刑姫の腰を掴んで座らせ直した。

「ちよ!／＼何よ一体!!／＼／＼」

刑姫はいきなりの事で顔を赤くして言うときんじはこう答えた。

「敵だ!さっきの連中が何台も来ているぞ!!」

「ええ!!」

刑姫は嘘でしょうと思いつながら後ろを振り向くと先ほどのセグウェイの大群がまた来たのだ。

然も何だか数が多くなっている。

「20台も!ちよつとこれは反則でしょうが!!」

「そんな事は良いから取敢えずは反撃するぞ!!」

銃はと聞くと刑姫はこう答えた。

「無茶言わないでよ!アタシの銃は警官が使うタイプなのよ!!
射程距離がそんなにあると思ってるの!?!」

「何でそんなんだよ!!」

「アタシは通信担当よ!荒事は何時もアンタか天草でしようが!!」
刑姫はそう言ってアンタどうするのよとそう言った。

するとキンジは何故だか頭が閃くかのような感じがしているので
ああそうかと

確信した。

「(この感じは弱めだがアレが出てきたか・・・」

だけどこいつは都合だ!!)」

キンジはそう思いながら懐から拳銃を取り出すとある事を想って
いた。

「(悪いが・・・見えてるぜ!!)」

そう思いながらキンジは拳銃を取り出して構えて銃撃が終わった
瞬間に・・・

攻撃した。

突然攻撃した但那場所は全て・・・銃座だけであった。

それも・・・刑姫の銃と一緒にだ。

これにより12台が壊れたがセグウェイが離れていくのを見て
キンジが刑姫に向けてこう言った。

「今だ刑姫!」

「成程ね!!」

刑姫はキンジの言葉を聞いてパソコンを取り出して何か打ち込んで
いると

もう一度セグウェイが出てきた瞬間に・・・刑姫がこう言った。

「これで終わりよ!」

そう言った瞬間に・・・セグウェイが止まった。

「・・・終わった。」

キンジの言葉と同時に一息ついたとそう思っているが・・・

忘れ毎が一つあった。

「いい加減に離れなさいよーー!!」
そう言って少女の言葉と同時に大慌てで外に出た。

普通の出会い

「全く何私を下敷きにして痴話げんかしているのって私が助けたんだから
だから
お礼言いなさいよね!!」

「(良く喋る子だなあ。)」

キンジと松葉が少女を見てそう思っていると松葉がこう聞いた。

「所で聞くけどアンタ誰ヨ?」

そう聞くと少女はこう答えた。

「私の名前は『神崎・H・アリア』!イギリス武偵所属の高校二年生
よ!」

「・・・は?」

それを聞いてキンジと松葉は目を丸くした。

どう見ても小学生にしか見えないと思えるほどであるのだがだが
先ほどの

あの立ち回りを思い出すと確かにと納得がいくがそれでもなあと思
っている少女、アリアはセグウェイに向かって行くと松葉に向け
てこう聞いた。

「ねえ、あれって未だ動くのかしら?」

そう聞くと松葉はこう答えた。

「大丈夫よ、あれが受信していた電波はシャットダウンしたし

万が一動くことがあっても私のパソコンが教えてくれるようにな
っているわ。」

それを聞いてあつそと答えたアリアはセグウェイを観察している
中で

キンジは松葉に向けてこう聞いた。

「それにしてもチャリジャックに遭遇するとはな。」

「世界初ね。」

それを聞いて確かにと聞くと松葉はキンジに向けてこう言った。

「ねえ、キンジ。これってさ・・・まるで『武偵殺し』と同じじゃな
い?」

「!!・・・まさか。」

キンジは一時であるが目を大きく開けると一呼吸してこう答えた。

「犯人は捕まったはずだ。これは模倣犯って可能性があるぜ。」

「まあ、確かに。最初っからプラスチック爆弾何て犯人が奴だとしても

少し大きさに見えるけど・・・それでも用心に越した事は無いわよ。」

それにと言っつて松葉はこう呟いた。

「・・・犯人は本当に外部なのかしら?」

「どういう意味だ其れ?」

キンジがそう聞くと松葉はこう答えた。

「確かに犯人は逮捕されたわ。けど外部であったことに

今回のこれは疑問を抱くわね。」

「?」

「アンタそれでも『探偵科（インケスタ）』の生徒なの?

ちよつとは考えてみたら? 私達が今いるのは何処なのかとか」

「・・・確かここは大体が武偵関係・・・!!おいおいまさかそれつて!」

キンジはまさかと思つて松葉に耳打ちすると松葉は耳元でこう答えた。

「ええそうよ。犯人は間違いなく・・・私達と同じ武偵って可能性が出てくるわ。」

それを聞いてマジかよとそう思っているが確かにと思った。

この島は人工島であり大体が武偵校生徒とその関係者で占められている。

そんな中でこんな騒ぎを起こせれる存在ともならば確かに絞り込めれるだろうが理由が分からないのだ。

いったい何が目的なのだと思つていると松葉がこう言った。

「取敢えず私はセグウェイから発せられていた電波を辿つてみるから

アンタは取敢えずは天草から『アレ』を受け取りなさいよ。

今後間違ひなく必要とされているはずよ。」

「・・・分かった。」

キンジはそう答えた後に取敢えずはと言うとアリアがこう聞いた。

「ねえ、何の話をしているのよ?」

「何でもない。」

「ふーん。」

それを聞いて何だか疑いの眼を向けるがまあ良いわと言ってこう続けた。

「それじゃあ私は『鑑識科（レピア）』に回しておくからアンタたちはさっさと下がりなさい。」

「ハイハイ。」

それを聞いてキンジと松葉は立ち去って行った。

これが後に幾つもの大事件に巻き込まれ、その過程でいろんな仲間と死闘を

繰り広げていくきっかけを・・・。

後に『鬼竜剣のキンジ』と言う異名をもたらすことになるとは未だ誰も知らない。

そして教室。

「成程、それは災難でしたね。」

「ああそうだぜ。その所為でこっちはチャリが吹き飛んでしまったぜ。」

「アタシなんてこいつに・・・胸揉まれたんだから責任取りなさいよね!!」

「馬鹿! 大声でそんな事言うかって言うか誤解だろうが!!」

「何処が誤解なのよ! 間違いなくアタシの胸揉んでたじゃない下着ごと!!」

「だからあれは事故だつて」

「ようござ二人! 何時も何時も毎度のことながら夫婦喧嘩」

「誰が夫婦じゃ!!」

「ギャバン!」

横からそう言って割り込んで・・・キンジと松葉に思いつきり顔面殴られた青年が倒れるのを見て天草が大丈夫ですかと聞くとキンジと松葉は互いにこう答えた。

「大丈夫だ天草。武藤はそんなんじゃくたばらん。」

「そうよそうよ! くたばるんなら大型クレーン車で轢き殺した後にクレーンでもう一度潰さない限り死なないわよこいつは!!」

「お前ら俺を何だと思ってるんだ!」

そう言いながら抗議しているのは190センチ近い大柄の男性

『武藤 剛毅』と言う名前です。『車輛科(ロジ)』と言う主に乗り物の操縦、

整備などに長けた人間なのだ。

ガサツだが整備は一流と言った青年なのだ。

そして全くヨと言って武藤は・・・青年誌を思いつきり広げてグヘヘと読んでいるのを見て天草は大丈夫ですねと呆れ眼でそ

う言うときんじが天草に向けてこう言った。

「天草、一つ良いか?」

「何でしようか?」

「……『アレ』の封印を解いて欲しいんだ。」

「!!……『アレ』がどんなものか分かってですか?」

「ああ、俺の因縁が絡んでいるとなると間違いなくあれがいる。」

頼むと言って頭を下げると天草はまあ取敢えずと言ってこう続けた。

「分かりました。ですが封印は一つだけ解きます。それでしたら只の刀剣の類と何ら変わらないでしょうしね、ですが気を付けて下さいよ……」

完全開放させたら危険な代物何ですから。」

「ああ……分かってる。」

それを聞いてでは後でと天草は自分の教室に戻って行った。

そしてきんじは窓の外をじーっと見てこう呟いた。

「兄さん。」

いざ、SSRへ。

「皆おはようございます。」

そう言っで入るのは武偵校にはあまりにも似つかわしくないほんわかとした教師、『高天原 ゆとり』が入ってきた。

こんななりであるが彼女は武偵校に入る前は凄腕の傭兵であったのだが

頭部に銃弾が貫通した後遺症で戦えなくなったために今ここにいるのだ。

そんな彼女が席に着いた生徒たちに向けてにこやかにこう言った。

「(∩_∩) * ウフフ。じゃあ先ずは去年の三学期に転入してきたカーワイイ子から

自己紹介してもらっちゃいますよー。」

さあ入っでと言っで入っできたのは……ついさっきまでにあつた少女、

アリアであつた。

「へ？」

それを見たキンジと松葉は素っ頓狂な声でそう言っで高天原先生が

彼女についてこう説明した。

『神崎・H・アリア』さん。イギリス武偵校からの留学生で今後とも皆と

勉強するから宜しくねえ。」

そう言っでアリアはキンジと松葉を見て……近づいてこう言つた。

「アンタたちが『遠山キンジ』と『松葉 刑姫』？」

「ああ、そうだ……。」

「それが何ヨ？」

そう聞くとアリアは2人を指さしてこう言つた。

「アンタたち！アタシの奴隷になりなさい！！」

「……………はっ？」

そして時間はトンで昼休み
今2人はアリアから逃げるようにとある学部に向かっていた。

SSR（超能力捜査研究科）

ここでは超能力や超常現象等を駆使して犯罪捜査に役立てると言
う

大義名分の下に行っているのだがこの学科は正直が付くくらい
に……

酷い場所だ。

何せビルの入り口迄にもある朱色の鳥居

入り口付近には右に狛犬・左にスフィンクス
周囲にはトーテムポールや地蔵、モアイ、灯籠が所狭しと置かれて
おり。

頭上にある注連縄には大鈴ではなくチャペルにあるような真鍮の
ベル。

最早カオスとしか言いようのない場所で普通の・・・娑婆に在るで
あろう

あらゆる宗教家が見れば卒倒間違いなしの場所である。

そんな場所に向かっていく中でキンジと松葉は天草を見つけた。

「よう、天草。」

「来たわよ。」

「おや御2人共。今日は散々でしたね。」

天草がそう言うのと2人はこう返した。

「ああ、本当だぜ。世にも珍しいチャリジャックに遭っちゃまった
よ。」

「おまけに変な転校生がアタシたちを『奴隷』だなんて変な事言うも
んだから

質問攻めされて困ったもんじゃないわよ!!」

おまけにまあ色々かねと少し赤面してぶつくさいう松葉を見てあ
あと天草は何か感づいたかのようにキンジを見てこう聞いた。

「遠山君。・・・あれやっちゃったんですか？」

「好きでやりたかねえよ！それにあれはまだセーフ！セーフ!!」

「何処がよ！アウトよあれは!!アタシの胸を鷲掴みして揉んでさ
!!」

「だからあれは事故だつーの！それに何が嬉しくてお前とだ!!」

「何ヨ！こつちだつて何でアンタなんか!!」

「何だと（何よ）!!」

「お二人とも、相変わらず仲が良いですね。」

「何処がだ!!」

キンジと松葉はまるで夫婦漫才の様な感じでそう言うときとと
言って

天草が2人に向けてこう言った。
「速く入りましょう。・・・彼女がこっちに来る」

「キンちゃーん!!」

「前になってもう遅いですね。」

天草はそう言つて振り返つた先にいたのは・・・黒髪の美少女であつた。

腰まであろう長い黒髪。

巫女が着るような服を着た美少女が下駄を履いて走つてきたのだ。

「げー、『星伽』!!」

松葉はその少女、星伽を見て嫌な顔をしていた。

すると星伽と言う少女がキンジと天草と・・・隣にいる松葉を見るや否や

阿修羅の様な顔つきで刀を鞘から抜いてこう言った。

「キンちゃんを惑わす泥棒猫ー!!天誅!!」

「やっぱりー!!」

松葉は星伽に行動を見て最悪だあとと思いながらキンジの後ろに隠れると

天草が2人の前に立つと星伽の刀を両腰に差している8本の剣の内1本を

引き抜いてその攻撃を受け止めると星伽が天草に向けてこう言った。

「どいて天草君!そいつ殺せない!!」

「駄目ですよ星伽さん。彼女は我々の仲間です同級生じゃありません」

んか。」

「そいつはキンちゃんを誘惑した泥棒猫です！」

「違いますよ。松葉さんは誘惑していませんしどちらかと言えばキンジ君が松葉さんを誘惑しているのですよ？」

それは違うと大声で2人がそう言っているのだが知らんなあと
言わんばかりに無視して攻撃を受け流し続けていると星伽がこう
反論した。

「そんなの嘘よ！キンちゃんがそんな引きこもりのオタクと付き合い
うなんて！」

「アンタ目の前に本人がいるのによく言えるわねえ・・・!!」
それを聞いてまあ確かにだけどきと言うと天草がこう返した。

「彼が誰とどの様に付き合うのか何て個人の自由でしょう。それを
決める権利が貴方にあるのですか？」

「私はキンちゃんの幼馴染です！」

「それでは弱いですよ。何より彼が傷ついていた時に助けていたの
は

松葉さんですよ？」

「そ・・・それは」

「キンジ君も松葉さんもあんな感じですけど本当は心の底からお互
いを

信頼し合っています。それを邪魔する権利は貴方にはありませ
ん。」

「・・・!!」

それを聞いて星伽が苦々しい表情を浮かべるとさてとと言って天
草が

こう言った。

「彼らは私に用があるのです。そこをどいてくれませんか？お昼ご
はんも

共にするので。」

「だったら私も」

「生憎ですが先約と用事がありまして・・・キンジ君はどうです？」

天草はキンジに向けてそう聞くとキンジは星伽を見てこう返した。

「俺は松葉と天草と飯にするが白雪とは御免だ。」

「そんな・・・!!」

キンジの言葉を聞いて星伽はへなへなとふらつくかのようにつくつくと

天草は剣を鞘に収めてこう言った。

「それでは用は既に整えておりますので食事と一緒に説明しましょう。」

そう言つて天草はキンジと松葉を案内していった。

天草との対話

キンジと松葉は天草の案内で部屋に入った。

二年生の中に於いて能力が高い又は実力があると言った人間にはこう言った

個人用の部屋が充てられているのだ。

天草の部屋はステンドグラスの窓に向かいあった机が一つずつと言った

こじんまりとした空間であつたがその机の上には・・・一本の剣が鞘と共に置かれていた。

「封印の解除ですが一段階まではやっておきましたので後はキンジさん次第です」

そう言つて天草はキンジのその剣を見せた。

見た目から見て西洋剣。

両刃剣であり柄の下には鎖が付けられていた。

「・・・『鎧竜剣』」

「それがキンジの家に古くからあるつて言う？」

「ああ、と言つてもこれは母親つて言つても俺が生まれてすぐに死んだから

覚えてねえけどこいつは母親の形見なんだ。」

「・・・御免。ぶしつけなこと言つて。」

「良いさ、気にしてはいねえよ。兄さんの話だとかいつは嫁入り道具

だったらしいんだけど一体何の剣なのか分からねえつてさ。」

「それでもそれは業物の一つです。大切に扱つた方が宜しいでしょう。」

天草がそう言うくとキンジはそれを腰に差すと天草はさてと云つて料理を出した。

料理はポトフ、魚と青梗菜のあんかけ、鶏肉のトマト煮、雑炊である。

それらを出すと天草は祈りを捧げてから全員でこう言った。

「頂きます。」

「それにしても奴隷とは穏やかではありませんね。」

「だな、何が言いたいのやら？」

「それにしてもアリアねえ……一年生の終わりについてアンタはそんな時

学校来ていなかったけど有名だったのを思い出したわね。」

そう言いながら食事を進めていると天草がキンジに向けてこう言った。

「今回の件ですが今は『レピア』が自転車の調べをして『インケスタ』が

調査しているようですがそちらは目星はついていいるのでしょうか？」

そう聞くとキンジと松葉が揃ってこう言った。

「実は……。」

「成程……確かに考えてみれば内部犯における犯行と言われれば納得がいきますね。」

「ええ、私はあの送信データから犯人がいた場所の防犯映像を手に入れようと思っっているんだけどそれはキンジにやらせるわ。『餅屋は餅屋』ってね。」

「ああ、今や俺も『インケスタ』だからな、捜査は任せろ。」

「だけど不思議よね・・・『武偵殺し』のオリジナルは確か逮捕されているはずよね？」

「ええ、犯人は『神崎 かなえ』って言う名前でしたね。」

「となると模倣犯か。目的は一体・・・？」

キンジがそう呟くと松葉がこう答えた。

「多分だけどアンタ狙いってのは間違いないわね、目的は分からないけど。」

「そうですね、今後は僕たちが変わりばんこでキンジさんの送迎を見送るって事でどうでしょう？」

「・・・良いわ。さっきみたいにならないように私達がいたほうが時

間が

分かるだろうし。」

「・・・済まない。」

「良いですよ。僕たちは仲間なんですから」

天草がそう言うときンジは恥ずかしそうに頬を掻いていた。

そして夕方。

「今日一日で色々遭ったからね。アタシがアンタのパソコンとかに

ハッキング防止用のワクチンソフトとかをインストールさせておくから

それと時計に関してはテレビとかを見て判断しなさいよ！」

「分かってるよ。俺も流石にあればこりこりだ。」

そう言いながら部屋に向かって行くとある少女が・・・アリアがそこに

座っていた。

するとアリアはキンジがいるのを見て大声でこう言った。

「遅いわよ！私が来ているんだから5秒以内に来なさいよ!!」

「俺はお前に来いなんて言っただろねえだろうが。」

「何よ何よ奴隷の癖に!!」

「奴隷制何て数百年前から消えてるわよ。何？イギリスじゃあ奴隷制が

復活しているのかしら？それともそれがイギリス武偵の流儀なのかしら？」

「!!・・・それは」

「キンジは誰のものでもないわ。そして私も誰のものでもないわ。アンタが

あたし達を所有物なんて思うのならアンタハ武偵じゃないわ。」

「!!・・・ナンデステ・・・!!」

「私達武偵はね、法を犯す人間を取り締まり、正しく、そして誰よりも

仲間を想い、助け合うのが普通なの。アンタが言っているのは只の自分勝手ヨ。」

「アンタ・・・良い根性して」

「それとあんたもあたし達と同じ17歳だったらちよつとは自分が言っていることも考えなさい。癩癩起こして子供みたいに喚くのは良いけど

それを私達に迄巻き込むことが高校生だっていうのかしら？」

「・・・」

アリアはそれを聞いて顔を俯かせて黙っていると松葉はこう続けた。

「どうでも良いけどアンタが言っているのは小学生でもわかるくらい

言葉ヨ？それすら分からないならもういちど小学生からやり直しなさい！」

松葉の言葉を聞いてアリアは唇をギリりと噛みながら俯いたまま部屋の前に

置かれていたキャリーケースを持って立ち去って行った。

「・・・ちよつと言い過ぎたかしら？」

「良いんじゃないのか？松葉の言ってたことは間違いないし俺だつて

同じ気持だ。」

キンジがそう言って松葉を弁護するどころ続けた。

「さてと・・・飯にするけど一緒に喰うか？」

そう言いながら部屋に入っていくキンジを見て松葉はこう呟いた。

「・・・ええ、一緒にね。」

相手を知るのとは大切な事

そして次の日の教室。

「そんじゃあ後は頼むぞ。」

「OK, こつちでも調べておくわ。」

キンジは松葉に向けて頼んだ後にキンジはインケスタによる仕事の依頼を

受けようと思つて専門棟に向かった。

クエストはランクごとに決められており内容次第では昇格や昇給も出来るのだ。

そんな中で……。

「キンジ。」

「……何でいるんだお前？」

キンジは待ち構えていたであろうアリアに向けてそう聞くとキンジは

アリアに向けてこう聞いた。

「お前アサルトだろう？良いのかこんな所で油売つて。」

「アタシはもう卒業できるだけの単位を揃えているから良いのよ。」
あつかんべーとベロを出したアリアを聞いてキンジはこう返した。

「そうか、ならさつきと帰れ。俺はクエストに行くから。」

そう言つてアリアから立ち去ろうとするとアリアはついて行つてこう聞いた。

「ねえ、アンタ普段はどんなクエスト受けているのよ？」

「お前が聞いて何になるんだ？俺はEランクだからそれ用の簡単な任務だよ。」

「アンタ……Sじゃなかったの？」

「よく知つてんな。確かにそうだったけど一学期の期末試験受けていなかったからそうなんだ。だがそんなのはどうでも良いって思つてる。」

「そうね、ランクなんて私もどうでも良いと思つてるからつてそれよりも早く

クエストの内容教えなさいよ!!」

「お前に教える義理はない。」

「ここでアンタに風穴開けるわよ。」

アリアは静かにそう言いながら・・・銃を構えるが元はアサルト出身だったためフンと言いながらキンジはこう言った。

「それがイギリス武偵のやり方なのか？自分の言葉を聞かない奴は銃を向けて

従わせるのが。」

「！ち・・・違うわよ!!」

「それなら犯人に対してか？事情聴取中にやるのか？は！紳士の国なんて

言われているが実際はマフィアもびつくりの脅しがメインの場所なんだな

イギリス武偵局はよ!!」

「違う違う違う！イギリス武偵局はそんな事しないわよ!!」

「だけどお前はやっている、何故だ？」

「そ・・・それは」

「お前も高校生で確かに武偵校じゃあ銃はご法度じゃねえが裏切り者でもねえ奴に武器を向けるのがいけえねえてことぐらい分かってんじやねえのか？」

「うぐ！」

「従わないなら無理やりでもなんてそんなのは餓鬼のやる事だ。それが分かってやってるんならお前は武偵として終わってるぞ。」

「・・・!!もう良いわよ!!」

アリアはそう言わずかずかと足音を鳴らさんばかりに何処かに向かって行った。

「さてと・・・猫探しっと。」

そう言いながらキンジは猫探しに向かって行った。

そして夕方、キンジの部屋。

「それじゃあ刑姫。情報はあるか？」

「ここによ、報酬は？」

松葉はキンジに向けてそう聞くとホイと言って紙袋を渡すと刑姫は

それを見てこう言った。

「ウへへへ、『灰色のシンデレラ』に『蒲公英の貴婦人』のフィギュアに

『時の舞姫』BLUE-RAY全巻！欲しかったのよねえこれ!!」

それを見ていやったーと言わんばかりに刑姫は喜んでいた。

因みに『灰色のシンデレラ』は普通のシンデレラのような作品をベースに

炎を使って継母とその娘達を惨殺すると言う深夜アニメ。

『蒲公英の貴婦人』は若妻が他所の更に上流階級の男に手籠めにされて

言いなりになってしまうと言うR-18のエロゲ。

『時の舞姫』は時間旅行する少女がいろんな人たちや英雄に出会いながら

成長すると言う物語なのだが大体ほかしが目立つ作品のようだ。

「お前そう言うの好きだよなあ。」

「当たり前でしょう！これだけは誰に何を言われても捨てないわ！！」

刑姫の言葉を聞いてキンジはハイハイとそう答えた。

そう、松葉 刑姫はオタクだ。

それも重度の。

だが仮にも女の子だ。

そんなの専門店以外で買うには勇気がいるのでキンジがこうやって恥を忍んで買っているのだが刑姫の嬉しそうな表情を見てこう言うのも悪くないよなあ

そう思ってしまうのだ。

そしてキンジはアリアのある限りの情報を閲覧した。

情報はパソコンからUSB経由で見た。

神崎・H・アリア 17歳 アサルト ランクS

得意武器 ガバメント*2

日本刀*2

得意武術 バーリトワード

家族構成 母親 神崎 かなえ

父親 不明

義娘有リイギリス在住

尚イギリス武偵局において99の犯罪を取り締めた実績あり

「神崎……いつはー！」

「ええ、『武偵殺し』のオリジナル……あんたのお兄さんを殺した

と

思われる人間。」

「その娘が何で俺に・・・!!」

キンジはアリアの事を思い出すとギリりと歯を噛み砕くかのよう
な勢いで

歯軋りしていると松葉はキンジに向けてこう言った。

「落ち着きなさい。アンタが今までどういう思いだったのかは私達
が

よく知っているけど其れとこいつとは何の関わりもない・・・
とは言い切れないわね。」

「・・・俺と接触するために」

「態とやったかそれか・・・今は防犯カメラを片っ端からチエツクし
ているから分かったら電話するわ。」

「・・・悪いな。」

「良いのよ。私達はチーム何だから」

松葉はそう言って部屋から出て行ったのを見てキンジはアリアを
思い出して

こう思っていた。

『『武偵殺し』は内部犯・・・もしアイツならハッキングもあいつか
?・・・

そうになると俺も本気でやらないとな。」

キンジはそう呟きながら鎧竜剣を見た。

鈍色に輝く鞘が夕日をキラリと光らせていた。

雨の中で通学はご容赦を！

「今日は雨ですね。」

「そうだな。」

キンジは天草の言葉を聞いてそう答えた。

今日は天草が作った露の臺の佃煮と海苔の海藻サラダとなっている。

食事しながらキンジは松葉から貰った情報をキンジに向けて話すと天草は

こう返した。

「成程、仇にも等しい人間。そして何よりも貴方との接触が偶然じゃなかったという意味でしょうか？」

「ああ、だが何故そんなことしたのか不明なんだ。あいつが俺と接触して

何か利益でもあるのかと思ってな。」

「確かに一見したらなさそうに見えますが取敢えずは考えておきましょう。」

それではと言ってキンジに向けてこう言った。

「そろそろ出しましょう、何せこの雨模様ですから賑わっている可能性が

あります。」

「ああ、そうだな。」

今回こそはなと言ってキンジも出て行った。

「今回は間に合いそう・・・と言うのは早計でしたね。」

「ああ、まさかここ迄とはな。」

天草とキンジは互いにそう言うって現状を観察した。

今バスは満員で正直なところ生徒たちがすし詰め状態なのだ。

「・・・歩きましょう、こうなったら遅刻も覚悟で。」
「ああ、偶には良いか。」
アサルトにいた時は日常茶飯事だったがなと鼻で笑って2人は歩き出した。

「やっと着きましたね。僕はこれから数学の授業ですがキンジは？」

「俺は国語だ。こうなったらお互いにふけるか。」

「そうですね、でしたら学園のカフェテリアで」

天草がそう提案しかけたと同時に・・・松葉から電話がかかった。

「はい、どうした松葉？」

『キンジ！アンタ今何処よ!?バスの中!?!』

「おい如何したんだ松葉」

『答えなさい！アンタ今何処よ!』

「・・・今はアサルトの体育館前で天草と一時間目つけようかと相談していたところだったけど。」

『そっか・・・良かったー。さっき情報が入ったの。良いよく聞きなやろ。』

『たった今バスジャックが発生。然もあたし達が巻き込まれたチャリジャックと同じ手口でね。』

「!?・・・それってつまり」

『ええ、アタシたちの予測が濃くなったわ。間違いなく『武偵殺し』はこの島の人間で間違いないわ。』

「・・・俺について知っているのは武偵校だけだからな。」

『となると一刻も早く特定しないといけないんだけど厄介事があるのよ。』

「?」

『如何やら特殊なアルゴリズムが組み立てられていて解析に時間が掛かるよ! ああもうこっちから監視カメラの映像を見ようとするとセキュリティが掛るのよ!』

「となるとかなりのやり手・・・コネクト関係か?」

『それかインフォルマかもしれないわ! 兎に角私はこっちに集中するから

バスジャックに関しては・・・不服だけど中空知にさせるからお願いね!!!』

後装備はC装備だからと言って松葉が切るのを確認してキンジは天草にも

同じことを伝えてこう続けた。

「分かりました、それでは僕も準備しましょう。こう見えても私も武偵ですから準備しましょう。」

「助かる・・・行くぞー!」

キンジと天草は互いにTNK製の防弾ベストと強化プラスチック

製の

面当て付きヘルメット・武偵校の校章が入ったインカム・フィンガーレスグローブ・全身のあちこちに食い込むほどしっかりと締めた

ベルトにはキンジは拳銃のホルスターと予備のマガジンが4本。

天草は刀が8本と小鎗が4本後ろに装備されている。

そしてキンジは松葉からメールで『女子寮屋上で待ち合わせ』と書かれていたので来てみると既に3人が来ていた。

「お？キンジか！貴様も来ていたのか!？」

「おお、久しぶりだな『カイズマス』。」

キンジを見るや否や何やら親友のような感じで近づいて来たのがアラビア武偵校からの留学生『カイズマス・イデアス』。

武藤と同じでロジと言う車両専門の科目であり主に船や飛行機などと言った

大型タイプの操縦を得意としているためある意味大型車に入るバスの運転なら

打って付けだなと思っただけともう一人がすぐそこにいた。

「レキも呼ばれていたのか。」

「ああ、神崎が呼んだそうだな。」

カイズマスの言葉を聞いて見た先にいたのは狙撃を主にする『スナイプ』所属のSランク武偵『レキ』がそこにいた。

体の線は細く身長はアリアの頭一つ分高い。

腕は確かで水色のショートカットの美少女であるがその無表情と正確な狙撃から『ロボットレキ』と呼ばれていた。

そして何よりも目立つのは耳に取り付けられているヘッドホンである。

恐らく音楽を聴いているのであろう大人しく体育座りしているレキと反対に

何やら通信機越しで大声で文句を言っているアリアを見つけるとカイズマスが

キンジに向けてこう言った。

「それにしても貴様の事件と同じ手口となると……言いたくないが」
「身内を疑いたくねえってか？」

「!!……ああ、そうだな。だが若しそうなら俺達は仲間銃を向けなければならぬと思うとな。」

「確かに……イヤな職業だよなあ。」

キンジはカイズマスの言葉を聞いてそう言うのと通信を切ったアリ
アが

全員に向けてこう言った。

「時間切れヨ。正直なところもう一人Sランクが欲しかったけど
無い物ねだりだから仕方ないわ。これからヘリで現場急行よ！」
そう言う上空からヘリがやって来た。

これは厄介事だなあとキンジはそう思いながら搭乗した。

バス迄

『それでは皆様状況を説明いたします。』

コネクトの人間でもある中空知の声が聞こえると中空知はこう続けた。

『武偵校のバス《いすゞ・エルガミオ》は男子寮前から何処の停留場にも

停まらずに暴走。車内にいる生とからバスジャケットがあつたこと

が
通報されました。現在60名もの武偵校生が搭乗、学園島を一周した後に

青海南橋を渡ってお台場に入っております。』

「警視庁と東京武偵局は動いて・・・いや、警察は交通整理で手一杯だろうな。」

「それどころか走るバスですから人数も考えたらスピードはけた違いでしょうね。」

「もし図り間違つて街に大爆発など向こうからしたら失態レベルだからな。大方は警察連中は東京からトンネルの中に入ったところを出入り口を塞いで

見殺しと言う手もあるな。」

キンジ達がそう言っているとキンジはエリアに向けてこう聞いた。

「そう言えばお前良く集められたな。」

そう聞くとエリアはない胸を誇るかのようにこう言った。

「当然よ。奴の電波を嗅ぎ付けて事前に準備したからよ。」

そう言うのとレキが全員に向けてこう言った。

「見えました。」

『『『!!!!』』』』

それを聞いて全員が目を見張って何処だと言うも・・・影も形も見当たらなかった。

然しレキはお台場の建物と湾岸道路、りんかい線の更に向こうにある動く

黒い点を見てこう続けた。

「ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵校の生徒が見えます。」

「良く分かるわねえ・・・アンタ視力幾つよ？」

「アリアはレキについてそう質問してレキはこう答えた。」

「左右共に6.0です。」

「「・・・は？」」

それを聞いてレキを除いた全員が互いの顔を見合わせた後にレキを見た。

サラッとソナ超人的な視力があるのかよと驚いているのだ。

レキの言う事を聞いてヘリの操縦者が近づくと確かにいた。

「結構スピード出してるな。」

「この雨である速度ですと急なカーブにぶつかった瞬間にドカンデスネ。」

「然もあれはテレビ局を通過したぞ。見ろあれを、間違いなく今回の公表されるな。」

そう言ってテレビ局の方を見ると確かにカメラや携帯電話でさっきのを

撮っていたのが見て取れる。

するとアリアがキンジ達に向けてこう言った。

「それじゃああたし達はバスの屋上に移るわよ。」

そう言うときアリアは強襲用パラシュートが入ったランドセルを背に背負うと

こう続けた。

「アタシはバスの外をチェックするわ。キンジは車内で状況確認、レキはヘリで追跡しながら待機。他の人間もよ。」

「内側って・・・もし中に犯人がいたら俺だけじゃあ不足だ！」

天草、カイズマス!!」

そう言って天草とカイズマスは互いにキンジを見るとキンジは2人に向けて

こう言った。

「天草は俺と逆方向から侵入！カイズマスは運転席に行け!!お前なら

あのバスを使いこなせれるだろう!？」

「当たり前だ、あの程度ならば脚でも動かせられる。」

カイズマスがそう断言するがアリアはキンジたちに向けてこう言った。

「駄目よ、アンタたちは待機。中に犯人はいないだろうしそれに『武偵殺し』は車内にはいないわよ。」

そう言うがキンジがこう反論した。

「・・・仮に模倣犯だとして」

「本人ヨ！」

「其れじゃあなかったらどうするんだよ?」

「違ったら何とかしなさいよ。アンタならどうにでも出来るはずだわ。」

「阿保か！相手は複数の可能性だってあるんだぞ!?!ここはセオリー通りに

それぞれ時間差で」

「行くわよ!」

「おいマテ!!」

アリアはキンジの言葉など聞かずにバスに向かうと天草がこう言った。

「先に行ってください。ここはセオリー通りに時間差で突入しましょう!」

「俺達もすぐに追いつく!」

それを聞いてキンジは分かったと言って飛び降りた。

だがキンジの場合は久しぶりであった為バスの天井から落ちそうになったが

それをアリアが手を掴んで引つ張ってこう言った。

「ちよつとアンタ！本気出しなさいよ!!」

「阿保言うな!こっちは久しぶりなんだぞ!!」

キンジはアリアに向けてそう反論しながら互いにベルトに装備さ

れている

ワイヤーをバスに向けて射出すると今度は天草達が降りてきたのでアリアは

怒り心頭でこう言った。

「ちよつとあんた達！何で勝手に来てんのよ!？」

そう言うのと天草とカイズマスはこう答えた。

「私達は援軍ですが貴方方だけでこの困難を切り抜けられると言うのには

少々無理があると思いますので。」

「それに俺ならこの程度のバスを操縦することなど造作もないしな。」

「あんた達勝手に」

「神崎！今は内部の制圧が先だろうが!!」

キンジはアリアに向けて大声でそう言いながら伸縮棒の付いたミラーで

確認していると外から窓が開いたので恐らく大丈夫であろうと考

え先ずはキンジが入った。

「よう、武藤。二時間目じゃねえが会えたな。」

「よう・・・全く今日は厄日だぜ。」

「俺を置き去りにしたからだ。それと今回のジャックについてだが」

『キンジ！あつたわよー!!』

キンジが武藤と喋っているとアリアからの通信が来たのでどうしたんだと聞くとアリアから聞いたのは・・・最悪の内容であった。

『《カジンスキーβ型のプラスチック爆弾！見えるだけでも炸薬の容積は・・・》

3500立方はあるわ！！！』

バスジャック制圧！

「3500だと！オーバーキルも大概にしとけよな!!そんななのこのバスどころか電車ですら塵一つ残せないぞ!？」

キンジはアリアの言葉を聞いてそう答えた。

それ何処ろかここら一帯が火の海になる事間違いなしだと確信してしまったからだ。

するとアリアはこう続けた。

『潜り込んで解体を試みーあ!』

アリアの悲鳴と共にドンとバスに衝撃が走ったので外を見ているとキンジは

真つ赤なルノー・スポール・スパイダーが目にと映るとあるものを見て

マジかよと確信した。

『UZIーまた『武偵殺し』かよ!!』

そう言った瞬間に車が離れていくのを見てキンジは入ってきた天草とカイズマスに向けて指示を出した。

「天草！悪いがアイツがこっちに来るかもしれないねえからアリアの方を頼む!!」

「分かりました。」

「カイズマスは運転を替われ！お前ならこの程度の車を操作するくらい
らしい
お手の物だろうか!？」

「任せろ!!」

互いにそれを聞いて動いた後にキンジは全員に向けてこう言った。

「皆はそれぞれ獲物を出せ！あの車をぶつ壊すために手を貸してくれ!？」

「分かったぜキンジ！手前ら俺達武偵校生の意地をこんな事した馬鹿に

分からせてやろうぜ!!」

キンジの言葉に武藤が全員に呼びかけると全員が武器を出してお

お！と答えた。

「と言う訳で合図が来るのでアリアさん！急いでください!!」

「分かっているわよ!!」

天草がアリアを急かしていると天草がこう言った。

「敵車両が接近！恐らくもう一度来るかもしれない！」

『分かった！こつちも準備完了だ！!!』

キンジが天草に向けて無線でそう答えると天草はアリアに向けて
こう指示を出した。

「アリアさん！準備が終わったそうです!!早く上がって下さい!!」

「分かっているわよ！けど爆弾は!？」

「そっちは既に対策はとられていますよ。」

そう言って天草は頭上にあるヘリコプターを見つめた。

『それでは撃墜が確認され次第行動に移ります。』

「ああ、頼む。」

キンジはそう言って通信を切ると例の車が何かしらの行動をする
ために

近づいて来たのだ。

そしてキンジはカイズマスに指示を出した。

「カイズマス！頼む!!」

「任せろ」

カイズマスはそう言って運転席で準備しているとキンジがこう言った。

「皆準備良いな!?!」

『『『『おお!』』』』

それを聞いて全員がそう答えた。

そして例の車がUZIで窓際にいる生徒たちに狙いを定めるとその時に……

バスが突如例の車を塞ぐかのように横に向けるとそこにいたのは……

内部にいた武偵生徒たちであった。

そしてキンジは例の車に向けてこう言った。

「チェックメイト。」

そう言った瞬間に……一斉砲撃が起きた。

ガガガガガと大量の銃声と共に例の車はハチの巣と化して其の儘ガードレール突き破って海に真っ逆さまに墜ちて云った。

「よし！後は……レキ！」

「私は一発の銃弾」

レキがそう呟いた瞬間に狙撃銃を構えた。

「銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。」

何やら詩みたいなき感じがあるがそれでもレキは気にせずこう続けた。

「ただ・・・目的に向かって飛ぶだけ」

そして言い終えた瞬間に・・・パンパンパンと三発の銃声が聞こえた。

そしてギギギンと着弾の衝撃がバスに伝わるとバスの下から何か

が落ちる音がした。

そしてキンジはまさかと思つて運転席にいるカイズマスに向けて指示を出した。

「カイズマス！何かが落ちる音がしたら急加速してくれ!!」

レキは間違いなく爆弾を落とそうとしている!!」

「何！分かった、このスピードを維持する!!もし何か落ちたら

報告してくれ!!」

「分かった！聞いたか天草!?!」

バスの天井

「はい、先ほど確認が取れました。こちらもバスの内部に入ります。アリアさん！入りますよ!!」

天草はアリアに向けてもう一度大声で言うが当の本人は海に落ちた

車の方角を見た後にキンジを思い出してこう呟いた。

「何よあれ・・・何であれがEランクなの・・・。」

『こちら天草です！アリアさんは何やら考え事しているようなので無理やり

入ります！!!』

「分かった！2人が入ったと同時にレキに指示を出す！」

『了解!!』

天草の言葉を聞いてキンジは窓を見てみると天草がアリアと共に入っていくのが見えた。

何故か天草はアリアを担いでいたがまあ仕方ないなと思いキンジはヘリにいる

レキに通信でこう言った。

『レキ！最後の締めを頼む！!!』

そう言うのとレキから来たのは・・・またこの声であった。

『私は一発の銃弾。』

その声と共に爆弾が部品ごとサッカーボールの様に飛び上がった。橋の下にへ・・・海に落ちたと同時にキンジがカイズマスに向けてこう言った。

「今だ！」

「おうよ!!」

キンジの言葉を聞いてカイズマスは最大スピードでバスを走らせてそして・・・

ドウウウウ!!と海中から水柱が盛大に上がった。

そしてぎやぎやぎやとタイヤの急ブレーキ音が聞こえて停止して・・・キンジはこう呟いた。

「取敢えずは・・・任務完了だな。」
そう呟いて雨が降り続ける空を眺めていた。

「あと少しでくくよっしやー！開いたわ!!」
刑姫は自室で情報データを読み取ってやつとこそで映像が見れるように

なったので喜びながらその映像を見た。

「さてさて・・・下手人は一体・・・嘘でしょ。」

刑姫はそう呟いて映像を見た。

写っているのはキンジと自分が巻き込まれた例の車がいた場所付近の防犯映像。

そこに写っていたのは間違いなく武偵校生の服。

そしてその人間はキンジ達の・・・すぐ近くにいた生徒であった。

真実の犯人。

「本当なのか松葉。」

「ええ本当よキンジ。間違いなくよ。」

松葉はキンジに向けてそう答えると天草がこう続けた。

「ですが彼女ならばあり得ますね。彼女が所属しているっていうよりも

彼女の特技を考えれば間違いなく。」

そう言うときンジは松葉に向けてこう聞いた。

「松葉、**は何処だ？」

「携帯電話の位置情報を使えばまあできない訳じゃないけどここ迄やるとなると

ダミーに捕まる恐れがあるわよ。」

「となれば彼女が何処に行きそうな場所を絞り込む必要がありそうですね。」

天草がそう言つて何処だと思つているとメールが届いたのだ。

「誰です？」

「さあな。」

キンジは天草の言葉を聞いてそう答えて携帯電話を取つてメールを確認して・・・目を見開いた。

「どうしたのよキンジ？」

松葉がそれを聞くとキンジはメールを2人に見せて・・・同じく驚いていた。

「それで・・・どうするのよっ。」

松葉がそう聞くとキンジはこう答えた。

「俺は・・・」

「着いたぞってここなのか？」

キンジに向けて・・・カイズマスが大型車を運転してそう聞くとキンジは

こう答えた。

「ああ、ここだ。済まないが少し待つてくれないか・・・20分して帰ってこなかったり店の中で騒ぎが起きたら直ぐに逃げろ。良いな」

キンジはカイズマスに向けて重々警告するかのようになんて言うがカイズマスはこう返した。

「ふざけるなよ、俺はお前の強さはよく知っているし俺達は仲間だ。仲間は何があっても助け出すのが当たり前だ。何かあったら不知火達に

声をかける。」

「・・・お前本当はお人よしだろ？」

「そうかもな。だが貴様よりは冷淡だと思っている。」

「そうか・・・後は頼む。」

それを聞いてカイズマスは分かったと答えた後にキンジ達とはある店。

『クラブ・エステーら』と言う高級カラオケボックス店に入った。中にあるバー・ラウンジには仕事帰りのOLやデート中のカップ

ル、

武偵校生徒が芸術品みたいなケーキをつついて食べていた。すると松葉がキンジに向けてこう聞いた。

「こんな場所じゃ銃撃戦になってでもしたら怪我人が出るわ。」

「その時は天草は避難の誘導を、他の連中と頼む。」

「分かりました。」

「松葉はこの事を先生たちに知らせておいてくれ。俺が足止めしている間にな。」

「・・・アンタまさか」

「死ぬ気はねえよ、今はな。」

キンジは松葉に向けてそう言いながら・・・腰に差している『鎧竜剣』を

触っていた。

すると・・・声が聞こえた。

「キーくウーんー！」

そう言つて奥から小走りして現れたのは・・・キンジと同じインケスタの武偵『峰 理子』である。

彼女は何時も制服を改造してヒラヒラのフリルで彩った物にして
いるのだ。

然も小さい身長でアリア並だが胸部は結構でかい。

おまけに金髪でおバカな印象が強いが彼女には一つの才能がある
のだが

今は伏せよう。

そんな中でキンジを呼んだであろう『峰 理子』は松葉と天草を見
ると

ぷくーつと頬を膨らませてこう言った。

「あー！いけないんだよキー君。女の子が呼んでいるんだつたら一
人で

来なきやあいけないじゃないか！反則だよそれ、ゲームじゃあそ
うのは

ルール違反です。」

そう言いながら頭の上に小指を乗せて鬼みたいな感じだぞーと言っているようにぶんぶんとしているがキンジはそんなの知らんと言わんばかりに

『峰 理子』に向けてこう言った。

「それで、メールには大事な話があるって言うから来たんだ。早く話せ。」

「ぶー、あわてんぼうは貫い手が少ないんだぞー。」

「そんなの俺の勝手だろうが。」

キンジは『峰 理子』の言葉を聞いてずばっと一刀両断して答えるが

『峰 理子』は仕方ないと言わんばかりにこう答えた。

「分かったよー、それじゃあお部屋に入ろう!!」

そう言って『峰 理子』はキンジを捕まえてとてててとててと言うかのように

個室に入ってしまった。

個室の中はアール・ヌーボー調にかざりつけられたかのような

2人部屋であった。

4人だと少々狭く感じるがこれはこちらの不備と言う思いでキンジの真後ろに

松葉と天草が左右に立ちながら隣に座った『峰 理子』を見ていた。

一方の『峰 理子』は松葉と天草に対してはいないような感じできこやかに

笑いながらこう言った。

「今回は理子が呼び出しちゃったから理子がゼーンぶおごったげるね。」

そう言いながら『峰 理子』はミルクティーを飲みながらテーブルに

置かれているモンブランを口にしてしているとキンジが『峰 理子』に向けて

こう聞いた。

「それで、お前は何故俺を呼んだ？」

「ケーキをあーんしてくれたら答えてあげるよ。」

「ふざけるんなら・・・お前を豚箱にぶちこむぞ」

・・・『武偵殺し』」

それを聞いて『峰 理子』は・・・これまで誰にも見せたことがなかった

好戦的な

笑みを浮かばせてこう答えた。

「へえ……等々アタシに辿り着いたってか遠山キンジ。」

「!!!」

それを聞いて3人は武器を構えようとする『峰 理子』は手を出して

こう答えた。

「まあ待てよ、アタシがお前を呼んだ理由がまだだったよな？」

「ああ……答えろ『武偵殺し』。お前は模倣犯の可能性を視野に」

「違えよキンジ。お前の知っている『武偵殺し』はそいつじゃねえ。」

キンジはそれを聞いてまさかと言うと『峰 理子』はニヤリと

狂気的な笑みを浮かべてこう返した。

「そうさ、アタシだよ。アタシが本当の『武偵殺し』だ。」

目的

「・・・何だと・・・!!」

キンジはそれを聞いて目を見開きながら理子に喰いかかるうとすると松葉と天草がキンジの両肩を抑えてこう言った。

「抑えなさいキンジ。」

「相手の動向を探るのも武偵の仕事ですしここで彼女を取り押さえたい

気持ちには分かりますが落ち着いてください。」

それを聞いてキンジは分かったと言って座ると理子はキンジを煽る様に

こう言った。

「オイオイ、アタシは手前の兄貴の仇だぜ？そんな悠長に構えて良いのかよ?」

「喧しい、速く手前の目的を教えろ。」

キンジがそう聞くと理子はにこやかにこう答えた。

「へへへ、私の目的はただ一つ!」

「経験値稼ぎだよ♪」

「!!!」

キンジ達は理子の目的を聞いて目を見開くが理子はこう続けた。

「何せジャックだからねえ。何回もやればそれなりの武偵が調査に来るでしょう?だ・か・ら、理子の経験値稼ぎの為に利用したんだよ♪」

「手前・・・そんな事の為に・・・兄さんを!!」

だとキンジは机を思いつきり叩くが理子はそんなの気にせず

こう続けた。

「まあね、君のお兄さん滅茶苦茶強かったからさあ・・・

勧誘したんだ『イ・ウー』に♪」

『『イ・ウー』・・・』

「それが貴方達の組織の名前ですか？」

キンジに変わって天草がそう聞くと理子はこう答えた。

「その通り♪だからさあ・・・キー君も来なよ『イ・ウー』にさ。

兄弟揃って私と」

「・・・ふざけんな。」

「はい？」

理子は何でと黙っているとキンジはこう答えた。

「手前の言う通り兄さんが生きているとしてもだ、あの正義超人みたいな
兄さんが手前みたいなのテロ組織に入っているとは思えねえ。そんなの信じる訳ねえだろうが!!」

キンジは理子に向けてそう言うのと懐に手を忍ばせてこう言った。
「逮捕するぜ『峰 理子』容疑は爆弾を使用した殺人未遂と無線兵器

使用に伴う銃刀法違反だ。」

そう言うのと松葉と天草も武器を構えようとするので理子は・・・
ニヤリと笑ってこう言った。

「何でアタシがこんな所を待ち合わせ場所に選んだと思ってるんだ

？」

「何・・・まさか!!」

キンジはそれを聞いて目を見開いた瞬間に・・・爆発が起きた。

「!!!」

キンジ達は突然の事で驚いて外に目を向けた瞬間に今度は・・・

壁が爆発したのだ。

「ハッハー！方が一に備えて仕込んで良かったぜ遠山キンジ！」

そう言いながら理子は壊れた壁に向かうとキンジに向けてこう言った。

「そういやアリアは今日の夜7時の羽田にあるイギリス行の

チャーター便に搭乗して帰るって話だぜ!!今行けば間に合うかもな!!」

じゃあなと言って笑いながら立ち去るのを見てキンジはくそ!と
言っ

て地団駄踏むが松葉は今の理子の言葉を聞いてまさかと言ってキン
ジに向けて

こう言った。

「ねえちよつと待ってキンジ!あいつ経験値稼ぎって言ってたけど
その多くが爆弾で大体が大型の乗り物だったわよね!」

「・・・ああ、兄さんの事で俺も調べていたからな『武偵殺し』に
ついてな。」

キンジがそう言うのと松葉はこう続けた。

「今まで『武偵殺し』は乗り物関係で最初は嫌がらせ程度だったけど
少しずつ大きくなって最終的には大人数が乗る程の乗り物になっ
て

また小さい乗り物に戻るを繰り返していた!そしてあいつが今回
狙うのも

勿論大型。」

するとそれを聞いた天草も片手を顎に添えてこう続けた。

「先ほど彼女はこう言ってましたね。『アリアは今日の夜7時の羽
田にある

イギリス行のチャーター便に搭乗して帰る』と。」
それを聞いてまさかとキンジは2人を見回すと松葉と天草はこくりと頷いた。

そう・・・彼女の次の狙いは・・・。

「「アリアとイギリス便のチャーター機!!!」」

「キンジ!こつちだ!!」

「カイズマス!大丈夫か!？」

「ああ!いきなり駐車場に止まっていたトラックが無人だったがいきなり爆発したと思えば今度は建物だ!今中にいた武偵校生が避難誘導していて援軍を送る様に伝えている!!これから他に爆弾があるかどうかを

調べるそうだから俺達も」

「カイズマス！悪いが今すぐ羽田空港に行ってくれないか!？」

「何言ってるんだ！今は爆弾の」

「もう無えよ。」

「・・・何？その根拠は??」

カイズマスはどうしてと聞くとキンジはこう答えた。

「車の中で話す！今すぐにイギリス便に乗らないと・・・兄さんの惨劇が

また繰り返される。」

「!!」

カイズマスはそれを聞いて驚いた。

今度は飛行機だ。

何かあったら間違いなくあの時以上になると分かってしまったのだ。

キンジの兄が消息不明になったのは豪華客船・・・つまり海だ。

あの時は脱出用のボートがあったから良かったが今回はそうではない。

空の上で何かあれば間違いなく助からないと知っているからだ。

そして暫くしてカイズマスはこう答えた。

「・・・分かった。乗れ！車の中で聞こう!!」

そう言つてカイズマスは車に乗せるとキンジはこう答えた。

「助かる!!」

そう言つて3人は車に乗り込んだ。

「何だって！犯人は『峰 理子』で『武偵殺し』の張本人!!」

「ああ、間違いない！あの時防犯カメラの映像には理子が映っていた。

丁度ラジコンの電波内だ！それに考えてみれば理子は変装の名人だ！

あのバスジャックの時に生徒の一人に化けていたとしても不思議じゃない！だからあの時丁度良くあの車が現れたんだ!!」

「もしそれが真実だとして動機は何だ!?!」

「分からねえ！あいつは『経験値稼ぎ』って言ってたけど本当かどうか

分からねえから急いでくれ!!」

「分かった！今なら後20分で羽田空港だ！間に合わせるぞ!!」

しっかりと捕まってると言ってカイズマスは更に車のスピードを上げた。

現在17時35分。

残り・・・1時間25分。

飛行機に入って

午後17時55分。

羽田空港入り口

「良し着いたぞ！飛行機は分かるか!？」

「ああ！確かイギリス便のチャーター機だ!!」

「・・・それなら19時発の便だ、余裕で間に合ったが問題は」

「ああ、理子を見つけ出す。あいつは変装の達人だからもう既に忍び込んでる

可能性が高いな。」

キンジの言葉を聞いてカイズマスが頷くと天草がこう提案した。

「取敢えずは飛行機に搭乗しましょう。先ずはそれからです。」

そう言うのと確かになどキンジがそう言っただけで向かって行った。

「スミマセン武偵校です。少しですが中に入っても宜しいでしょうか?」

「宜しいですが一体何事で?」

飛行機と空港を繋ぐ通路の出入り口付近で職員がそう聞くとキンジは

こう答えた。

「・・・これは未だ仮定なんです。ハイジャックされるという声明がありました。」

「!!」

「それで中に入って確認したいのでそれと中に武偵校生徒がもう一

人いますのでその人・・・『神崎・H・アリア』とも合流したいので中に」

「はははい！今すぐに!!」

それを聞いて職員はどうぞと言って中に入れてくれた。

そしてキンジと天草と松葉とカイズマスは揃って内部に入った。

するとキャビンアテンダントがキンジ達を見て来るとキンジは先ほどの事を

伝えた後にアリアのいる場所は何処かと聞いて・・・個室に案内された。

「確かこの飛行機は『ANA600便』だったからあの有名な『空飛ぶリゾートホテル』だったな。」

「二階はバーで二階は総勢12部屋のセレブご用達の飛行機。」

「おまけに片道20万円って無駄に高い正にハイジャックするにはうってつけの飛行機よね。」

「理子が何故ここを・・・いや、分かり切っていたか。」

キンジはそう言つてその目的をこう考えた。

「(目的は兄さんと同じように有名な武偵を殺す事。それだったら確かにアリアはうってつけの鴨だ。)」

そう思つて内部に入ると既にアリアがそこに座っていた。

「き、キンジ!？」

「呼び捨てするようになって言った覚えはないぞ。」

キンジはアリアに向けてそう言うのとアリアがじろりと睨んでこう聞いた。

「何の用ヨ。」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「お前に教えておこうと思つてな

『武偵殺し』がこの飛行機に忍び込んだぞ。」

「!!」

アリアはそれを聞いて目を見開きながらキンジに問い詰めた。

「何でアンタが『武偵殺し』がいつ来るのか知ってんのよ!?

どうやって知ったの!!だってあれは」

「そいつは簡単だアリア・・・『武偵殺し』が俺に直接接触したからだ。」

「直接って・・・正体を知っているのでしょうか!?!早く教えなさい!

アンタはアタシの」

「知りたいのなら教えろお前の目的を。」

「・・・アンタには関係」

「松葉は情報についてはプロだからお前の身の回りの事は熟知している。」

お前には血の繋がらない妹がいる事も・・・お前の母親が服役していることも」

「ママは犯人じゃない!!」

アリアはキンジの言葉を遮るかのようにそう言うところ続けた。

「ママは犯行時刻ずっと私と共にいたわ!イギリスにずっといたわ!!

証拠だつてあるのに日本政府はそれを一蹴してママを刑務所に入れたのよ!

懲役892年なんて言う長期間・・・ううん、間違いなく終身刑。

だからアタシはママを助けるために幾つものミッションをクリアしてきた!

アタシのパートナーになれる人間を探しながら・・・日本まで来てやっと見つけたのがキンジだったのに・・・アンタにはもう仲間がいた。

大勢の仲間にも恵まれて・・・教員室でアンタのこれまでのミツシヨンデータを見て何人ものAランク相当の連中とグループを作ったアタシとは正反対・・・アンタをバスジャックの時に見て・・・内心嫉妬したわ。アタシが逆立ちしても

手に入れられない仲間を手に入れて・・・アンタを手に入れればアタシもって思ってた・・・けどアンタハアタシの誘いを断り続けてた！

アタシのパートナーになれるのはアンタだけなのにアンタは・・・
アンタハ・・・!!」

そう言うときアリアは等々・・・顔を俯かせてこう呟いた。

「イギリスに戻ってもう一度探そうと思って・・・」

アンタ知っているんでしよう？アタシの二つ名。」

「ああ、『カドラ』、双剣双銃の名前とアリアのもう一つの意味・・・『独唱』つまりたった一人の曲。それらを統合して

『たった一人の双剣双銃の使い手（カドラのアリア）』。」

それがお前だというとき等々アリアはこくりと頷くしかなかったが
キンジはこう続けた。

「まあ確かにお前みたいなSランク武偵に見合う奴なんてそうはいないし

パートナーって言うよりドレイだって言ったほうが気が楽かもしれないねえが

お前は一つ大切なことを忘れてる。」

「・・・？」

アリアはそれは何だとそう思っているとキンジはアリアの目の前に立って

こう言った。

「仲間ってのは欲しいんじゃないから作るんだ。上から目線じゃなくて

心の底から助けたいって思う連中と・・・お前にもいたんじゃないか周りに？」

お前が見ていないだけでと言ってぶくーと頬を大きくしてプイツ

と逸らす

が
キンジはこう続けた。

「大人になれアリアお前に足りないのは相手に合わせる協調性だ。それをやって初めて俺達武偵は戦えるんだ。」

良いな」とキンジはこう続けた。

「お前に教えるぜ、『武偵殺し』の正体を。」

「!!」

アリアはそれを聞いて誰だという目線をキンジにぶつけているとそれはとキンジが言う前に……。

パーンと銃声が飛行機内に響いた。

理子対アリア

「銃声！」

「飛行機の中で!？」

「ハイジャックですかね?ここって金持ち多いですから。」

「だが客員名簿を見れば誰がいるのか分かるはずだが
其れすらしていなかったら雑な計画をするな。」

「そんなこと言っていないで速く出るわよ!!」

アリアの大声を聞いて取敢えずはとキンジが扉の前に立つて少し開けた後に全員が出てきた。

カイズマスはショットガンとマシンガンを使う広範囲型である。

そして彼らの目の前に現れたのは・・・アテンダント・・・いや。

「お前やっぱり変装が上手いな。いい加減に正体明かせよ・・・理子
!」

キンジがそう言うのとアテンダントは自らの顔を掴んで・・・ビリビリと破ると

中から・・・理子が現れた。

そして松葉が理子を見てこう言った。

「あら、三回目は直接顔を合わせるのね《武偵殺し》。」

「!こいつが!？」

アリアはそう言ってガバメントを引き抜くと理子はアリアを見てこう言った。

「よう、初めましてだな《神崎・H・アリア》、

いや『神崎・オルメス・アリア』と呼んだ方が良いか?」

「アンタ・・・一体何者!？」

アリアは自身の名前にあるオルメスを聞いて目を見開いてそう聞く
くと理子は

こう答えた。

「そうだな、ここまで来たんだから冥途の土産って意味で教えてやるよ。」

「アタシの名前は《峰 理子 リュパン4世》だ。」

それを聞いてキンジはこう呟いた。

「リュパン・・・アルセーヌ・リュパン！フランスの大怪盗のか!？」

「せいかりい、そうだよキー君。あの有名なリュパンだよ〜♪」

理子はお茶らけた様子でそう言うところ続けた。

「けどさあ、家にいた人間は理子の事を《理子》って呼んでくれないんだよ〜♪どいつもこいつも使用人共迄《4世》《4世》《4世》《4世》《4世》《4世》って耳に聒聒が

出来る位にさあ・・・。」

「そ、それがどうしたっていうのよ?・・・4世の何が悪いっていうのよ!」

アリアははつきりそう聞くと理子は・・・目玉をひん剥いてこう言った。

「悪いに決まってるだろうが!アタシは数字か!?只のDNAの塊なのか!!」

違う!アタシは《理子》だ!数字じゃないって言うのにどいつもこいつもアタシを《4世》って呼びやがって畜生がー!!」

理子は大声を上げそう言いながら天井を見上げてこう言った。

「アタシは曾お爺様を超えなければ一生アタシじゃなくて

《リュパンの曾孫》としてしか見てもらえないし扱ってもらえない・・・だからアタシは《イ・ウー》に入ったんだよ!この力を得たことでアタシは

もぎ取るんだよ!!『理子』としてのアタシを本当の意味で手に入れる為にな!」

そう言うとき理子はアリアを見てこう続けた。

「やっと思つたぜオルメス4世、アンタを倒すためにアタシは今まで9人もの武偵を葬って来たからな。やっ和本気出せるつてもん

だぜ？

手前とアタシの曾お爺様達の対決は引き分けとして幕を下ろしたから100年ぶりに優劣付ける為にアタシはお前の為に役割果たせそうなやつを見繕って

やっつたんだぜ〜？」

理子はアリアを見てからキンジを見ると天草がこう聞いた。

「何故遠山君だったんですか!?他にも神崎さんのパートナーになれそうな人はいたはずですよ!!」

天草がそう聞くと理子はああそれなと言っつてこう続けた。

「そんなの《教授（プロテクション）》に聞いてくれよ？アタシは

指示された通りにそいつをアリアと引き合わせるようにしただけなんだぜ？」

「《プロテクション》…それが貴方達の組織のボスの名前ですか？」

天草がそう聞くと理子はこう答えた。

「まあそんなとこだな。さてと、来いよアリア。決着つけようぜ!!」

理子はそう言っつてワルサーP99を二丁持つて構えるとアリアは賺さずに

バンと床を蹴つて理子に迫った瞬間に互いに近接拳銃戦に入った。

武偵校の制服は全て防弾仕様となっているため本来ならば頭部を狙うのが

セオリーなのだが武偵校ではあらゆる状況下においても殺人を禁ずるといふ

決まりごとが暗黙の了解として存在しているため互いに射線を読み、

腕を搦めとり、躲すという格闘技の様な戦いなのだがキンジと天草は万が一に

備えて《鎧竜剣》と刀を構えて待機していると…その時が来た。「はー！」

アリアは弾切れになったと同時に理子の両腕を両脇で締めた瞬間に

キンジと天草は賺さずに首筋に切っ先を向けた。

本来ならばここで終わりだと誰もが思うであろうが理子はアリアに向けて……こう言った。

「カドラ……奇遇よねアリア。理子とアリアは色んな所が似ているよねえ。」

「家系にキュートな容姿、それと……2つ名。」

「「？」」

アリア達は一体何言っているのだとそう思っているとりこqはこう続けた。

「アタシも同じ名前を持つてるのよ？ 《カドラの理子》……だけどアリア」

「手前のカドラは只の出来損ない！こいつが本当の《カドラ》だ！」
そう言った瞬間に天草はキンジに向けて大声でこう言った。

「遠山君半歩下がって！」

「!!」

キンジは天草の言う通りに下がると先ほどいた場所に……髪がナイフを持って突き刺そうとしてきたのだ。

何でだとそう思っていると理子はアリアの拘束を……力だけで振りほどいた。

「!!何で?!」

解けたと言おうとした次の瞬間に理子はアリアに向けてこう言った。

「何だ……勝負にもならねえや……!!」

そう言った瞬間にアリアは理子の蹴りを諸に喰らって其の儘……飛行機の後ろの壁まで……吹き飛んでいった。

キンジの心

「神崎!!」

キンジは悲鳴の様に声を上げてアリアに向かった後に天草達は理子を見ると

理子は……。

「アハ……アハハ……アハハハハハハハハハハは!!見られましたか

曾お爺様!? 108年という歳月を経て遂にこの理子が勝利致しました!

完膚なきまでのこの勝利!自分の力すらコントロール出来ておらずおまけに

パートナーがいてもこのざま!!これでアタシは《理子》だ!《理子》に……

本当の意味でアタシになれるんだ!!」

アハハハハハハハハハハと狂ったように笑う理子を見て何かしらの狂気を感じた

天草はアリアを抱えたキンジに向けてこう言った。

「遠山君!ここは一端退きましよう!!今時間は……18時27分!!ここから

離れましよう!」

そう言つて天草は持っていた日本刀の1本を賺さず投げるも理子は

それを髪で防御するが……全員はその間に逃げた。

すると理子はニヤリと笑つてこう言った。

「きやははハッハ!今更外に逃げようとしても無駄だよ!!何せここは

既にゲートが閉ざされているんだから!!」

きやははハッハと言いなながら鬼ごっこだねえと日本刀を持って歩き始めた。

キンジ達は取敢えずと先ほどのアリアの部屋に入ってアリアをベッドに横にさせて松葉に如何だと聞くと松葉はこう答えた。

「正直なところ素人のアタシじゃあ分からないけどあれ程の蹴りを加えられたのよ。人間の足は体重を体で維持させるために標準の3倍ほどの筋力を使っているのは知っているわよね？その蹴りをこの体で喰らって只で

済むわけないじゃない！それに壁が凹むほどのあの蹴りの威力から見て

3倍どころか10倍と見繕わないと計算が合わないわよ!!」

松葉がそう言うときイズマスがこう切り出した。

「それほどの力をあの華奢な体でどうやって出しているのだ？」

「恐らく肉体改造を受けているはずです。そうでなければ元来より筋力が他人の数倍の密度を誇っていた？・・・いやないですね、そうになると日頃の食事だって

大食い選手権に出る人たち並になる事くらい確実です。」

カイズマスの言葉に対して天草がそう続けるが取敢えずはとキンジは

天草達に向けてこう言った。

「兎にも角にもあいつを倒さない限り兄さんがどこで今何しているのか

全然分らないからどうやって倒すのかを考えようぜ。」

そう言うとき松葉がこう反論した。

「ちよつとアンタ何言っているのよ！あいつの髪見たでしょう!？」

まるで生物みたいにうねうねと動いていたしそれにあいつの力は強力すぎるわ!!ここは応援を呼ぶのが定石でしょう!？」

松葉がそう言うといやと天草がこう答えた。

「ここで応援を呼んだとしても間違いない焼け石に水でしょう。でしたらここで倒すとはいかなくとも動きを封じるといふ手があります。」

「どうやってよ!!」

松葉がそう言つて天草を睨みつけた瞬間にキンジは腰に差ししている剣、

《鎧竜剣》を見てこう答えた。

「こいつを使おう、天草封印を解除してくれ。全部だ」

「駄目です!その剣が何で封印されていたのかももう忘れたんですか!?!」

天草がそう言つてキンジを止めるがキンジはこう返した。

「だけどこのままじゃ俺達は全滅で神崎も死ぬ。」

それにと言つてこう締めくくつた。

「俺はお前らを失いたくない。兄さんの為じゃない・・・」

ここに居る皆を守るためだ!!」

そう言つてキンジは頼むとそう言うが天草はこう返した。

「その剣の封印を解くこと自体は僕は反対です。」

「天草!」

「ですが!・・・もし君が本気でそれを使うというのなら・・・剣は其れに

応えるでしょう。」

そう言い終えた瞬間に・・・外から声が聞こえた。

「アリア〜、何処かなあ?来ないならこつちから来ちやうよ〜?」

そう言いながら何やら・・・がしやんという何かが壊れる音と悲鳴が聞こえた。

「ぐ・・・グウ。」

アリアは魘されながら拳銃を取ろうとすると側にいた松葉がそれを遠ざけて

こう言った。

「何やっているのよアンタは！怪我人なんだから大人しくしなさいよ!!」

「煩い・・・アタシが・・・アイツを。」

そう言いながら痛いという感情を我慢しながらアリアは立ち上がろうとする

キンジはアリアをベッドに押さえつけてこう言った。

「ここに居ろ。俺がケリを付けに行ってくる。」

「・・・アンタじゃ・・・無理ヨ。」

「無理なんて今行ったら俺は俺じゃなくなる。それにな、

ここで俺が引いたら本当の意味で俺は武偵じゃなくなる。」

それは嫌だと言ってこう締めくくった。

「俺は俺の為に・・・俺を信頼してくれる皆のために戦う。ただそれだけだ。」

そう言うときンジは全員に指示を与えた。

「松葉、お前はここに残って応援を呼んでくれ。空港の警備班にもこの事を連絡。」

「分かったわ。」

「天草は結界を張って守ってくれ。」

「分かりました。」

「カイズマスは万が一に備えて操縦席に、俺が道を切り開く。」

「分かっている・・・気を付けろよ。」

「ああ、分かっているさ。」

キンジはそう言うとき全員に向けてこう言った。

「それじゃあ手前ら・・・いっちょよ行きますか!」

「オオオオオオ!!」

鎧頭現。

キンジはアリアの部屋から出ると理子はキンジを見てこう言った。

「おやおやくく？何でキー君が来るのかなあ？アリアはくく??」

「お前がぶっ飛ばしたせいで今部屋の中だ。」

キンジは理子に向けて《鎧竜剣》の鞘を抜いて刀身を露わにすると

理子は

にこやかに・・・狂気的な笑みを浮かべてこう言った。

「へえ・・・手前が相手か？オルメスの相棒はパンピーポジションか

らの

推理解決の手伝いなんだぜエ？」

「そうか、なら俺は手前の描いている物語をぶち壊す。」

「やれるもんなら」

理子はそう言って髪にあるナイフと2丁の既に弾丸の装填が終わっている

ワルサーP99を構えてこう言った。

「やってみろ!!」

そう言ってワルサーから火が吹こうとしたその時に・・・キンジの背後から

刀が現れてワルサーに向けて投擲した。

「!!」

マズイと感じた理子はワルサーを守ろうとするが其の儘ワルサーを弾き飛ばした。

「ちいー」

理子は毒づきながらナイフを使ってキンジを追い詰めようとする
とキンジも

懐からバタフライナイフを出して二刀流で挑んだ。

ガギイインと互いの剣から金属が当たる音が聞こえた瞬間に理子
は

キンジに殴りかかるがそれをキンジは寸でのところでそれを回避
して

ワンステップで後ろに下がると理子はキンジに向けてこう聞いた。「ねえねえキー君、一緒に来ようよ《イ・ウー》へさ？お兄さんも一緒だよ〜？」

「それ以上兄さんの事を喋っていると手前の其の舌斬り捨てるぞ。」

「其れは嫌かなあ・・・手前の両腕壊してから連れて行くぜ!!」

そう言つて理子はナイフを両手に持つて中華拳法の様なアクションを披露した。

「こいつ体術もかよ!!」

ただ完壁なんだよとキンジはそう思った次の瞬間に・・・理子の足が見えた。

それをキンジが《鎧竜剣》の刀身で受け止めるがキンジは其の儘吹き飛ばされてしまった。

「がはー」

キンジは肺から空気が無理やり吐き出されるような感触に気を失いそんな感覚を覚えるがキンジはそれを己の意志で立つ事は出来たが歩くことが出来なかった。

「(クソ・・・足が動かねえ・・・!!)」

キンジはふら付きながらも《鎧竜剣》を握っているがそれを見た理子は

笑いながらキンジに向けてこう言った。

「WWWキー君そんなんじゃないやア理子りんは殺せないよ〜♪

アリアを食べちゃう前に・・・こいつらをぶつ殺すところ拝ませるよ。」

そう言つて理子は天草達に狙いを定めるとキンジは心の中でこう叫んだ。

「(ふざけるな！手前みてえなテロリストにこれ以上俺の大切な仲間を！・・・

家族を!!・・・俺が守りたいって決めた人たちを失わせて・・・

「たまるかよー!!」

「ーそれがあなたの願いですか?」

「くく!!」

キンジの頭の中から誰か・・・女性の声が聞こえるが女性はこう続けた。

「ー貴方は仲間を守るために・・・家族をこれ以上失わせたくないがために

その剣を振るうのですか?

「くくああそうだ、俺にとってこいつらは俺を・・・俺であるがままに

してくれたからな。

「ーならばその願いに答えましょう。」

「くく何?

「ーその願いが本当ならば剣は・・・いえ、剣に封印されたその竜は貴方に

応えるでしょう。

くくどういう意味だ!?

ー言葉通りの意味です。

そう言うときんじの脳裏に巨大な門の向こうにいる……

紫に近い腰まである長髪と服、そして何よりも何だか……懐かしい様な

そんな感じの女性がきんじに向けてこう言った。

「剣の名を教えましょう、そして己の守りたいと願う者たちと共に戦いなさい。遠山きんじ。その剣の名は」

「ウオオオオオオオオオオオ!!」

「!!」

突然キンジが大声を上げるので理子と天草とカイズマスが驚いて
キンジの方に目を向けると杖代わりにしていた《鎧竜剣》を床に突
き刺すと

キンジは大声でこう言った。

『『インクルシオ』ー!!』

その声と同時に柄の部分が刀身にせりあがるかのようにスライド
して

キンジの周りに煙の様なナニカが立ちこんだその時にキンジの後
ろから・・・

ナニカが現れた。

「何だアレハ・・・？」

「鎧か？」

「遠山君、あれを解き放ったのですね。」

天草はそう言つてキンジの方と突如現れた鎧の顔が・・・

複眼で十字に瞳を持ち、ずらりと並んだ牙を持つバケモノに姿を変
えた。

そしてキンジを覆うかのように鎧の様なナニカはキンジを包み込
むと

キンジの姿が変わり始めた。

全身に鎧が付けられ顔には先ほどの鎧と同じフェイスマスクが。

背中には2本のバスターソードが装備され僅かであるが紅くなつ

ていた。

そして何よりも右手には大型の槍が、左手には大型の6連装型のリボルバーキヤノンが装備されていた。

「おいおいおい・・・何だよあの武器聞いてねえぞ!!」

理子はそれを見て慌てているとキンジは鎧の感触を確かめるかのように

武器を腰に収めてにぎにぎして・・・理子に向けてこう言った。

「理子。」

「!」

「俺はお前を絶対に許せねえ。」

「遠山キンジ! 武偵としてではなく一人の人間として! 手前と同じ境遇の連中の無念を晴らすために手前をぶっ飛ばす!」

理子対キンジ

「行くぜー」

鎧を身に纏ったキンジはそう言って左手にある大型リボルバー
キャノンを

腰に横向きにマウントした後右手にある槍、ノインテーターを
使って理子目掛けて突進すると理子はそれを避けて蹴りをお見舞い
しようとするもノインテーターの

槍の持ち手を利用して理子の腹目掛けて穿った。

「ぐふおー」

理子はそれに伴って少し態勢を崩した瞬間にキンジは更に追いか
むかのように

裏拳を理子の顔めがけて殴りかかろうとするも理子は嫌さずにキ
ンジの腕に

手乗せるような感じでまるで新体操の様に回りながらキンジの
顔めがけて

蹴りを喰らわせ返した。

「ぎんごー」

キンジは少し頭に衝撃が走ったがそんなの関係ないと言わんばか
りに

理子の腕を掴んで飛行機の壁にぶつけさせた。

「あがあ!!」

その後舌打ちして遠ざかると理子はキンジに向けてこう言った。

「おい、手前の鎧って一体何製だよ？アタシの蹴りでも壊せねえつ
てトンでもねえ固さだぞそれ！」

理子はキンジに向けてそう聞かされたがキンジはこう答えた。

「分からねえよ俺だって、けどなあ、お前をぶちのめせれるって事は
確かだぜ？」

そう言うのとキンジはノインテーターを構えてこう言った。

「さてと、まだやるか？」

そう聞くと理子は腕にある時計を見て……ニヤリと笑ってこう言っ

た。

「へ、手前とは決着付けてえところだけだな……もう時間のようだぜ？」

そう言った瞬間に空港から……爆発音が聞こえた。

「空港の中から!？」

キンジはまさかと思うっていると理子はにこにこことこう答えた。

「へっへー、こういう事もあろうかと予め細工していたんだよねえ♪。」

ああでも大丈夫だよキー君、ちゃんと人のいない換気扇とかに爆弾仕掛けてるし

あれって音は大きいけど威力がそうないから精々火傷程度で済むから

だいじょうぶい!」

「手前……それでも武偵か!!」

「その前に私は『武偵殺し』にして爆弾魔だからねえ。これで失敬して

もらうねエ♪」

そう言った瞬間に理子は懐から……爆弾を手にして投げつけた。

「伏せろー!!」

キンジは天草達に向けてそう言った瞬間に……閃光が辺りを輝かせた。

「閃光弾か!!」

キンジはそう言って暫くすると光が収まるが……そこに理子はいなかった。

「クソが!!」

何処行っただけと言ってキンジは通路に向かって走っていった。

「手前、ここにいたのか。」

「そうだよ、本当なら飛行機が飛んでいる時にしたかったんだけど」

「今なら普通に帰れるからねえ。」

理子はにこにここと笑ってそう言うときんじに向けて再度こう聞いた。

「ねえさキー君、一緒に来ようよ。『イ・ウー』にさ、お兄さんも待って」

「手前……それ以上言うときんじ憲章捨てて武偵やメテでも手前をコロスゾ！」

そう言うときんじを構えるきんじであった。

武偵はどんなことがあつたとしても殺人をしてはいけないという鉄の掟が

存在しておりそれを破れば武偵ではいられなくなるのだ。

するとうくと唸る理子は暫くしてこう答えた。

「それはまずいなあ、キー君には武偵のままできて欲しいしそれに
くく

手前を探す手間を省くにはそれしかねえしな。」

「!!」

キンジは理子の猟奇的な瞳を見て強張ると理子はキンジに向けてこう言った。

「そんじゃあなキンジ、手前とは何時か必ず決着付けておくぜ!」
そう言った瞬間に後ろが見えなかつたのだがあれは・・・爆弾だつた。

それらが爆発して壁に穴が開いて理子は飛行機の翼向けて走りながら

逃げていった。

「待て理子!」

キンジは理子を追おうとするが外を見て何かが来るのが見えた。
少し明るい感じで何だと目を凝らしてよく見てみるとそれは・・・
最悪なものであつた。
それは・・・。

「ミサイル!?!」

嘘だろうとキンジは飛行機の中にいる人たちを避難させるべきかと考えているとミサイルは其の儘・・・滑走路目掛けて落ちた。

「な!?!」

キンジはその爆発音に驚くが理子の姿が見えない事から畜生とそう感じているが今はまだ後悔している時ではなかつた。

何せ彼は・・・武偵なのだから。

爆発音の後に天草達がやってくるとキンジに向けてこう言った。

「遠山君!直ぐに空港内にいる人たちの手当てと避難を行いましよ
う!」

我々の仕事は未だ終わっていません!!」

天草がそう言うのとキンジ仮面の中で歯軋りしながら・・・こう答えた。

「・・・分かつた。」

そう言うときんじの鎧が解除されて元の剣に戻り避難活動を始めた。

羽田空港内で起きたテロ事件に伴い軽症者8人だけで済んだが滑走路の破壊と飛行機の被害が凄まじいだけではなく武偵の一人

が
これをしたという噂まで飛び交う次第であり正直なところ武偵局はこれの火消しで忙しくなっておりきんじ達に至っては武偵局局員から今回の事件については

他言無用で言われる始末であった。

そんな中でアリアはと言うと・・・。

「私もう少し残るわ、ここにいれば理子にリベンジ出来るしね！」
そう言うって悔しそうな表情を浮かべるアリアがそこにいたがまあ取敢えず

言う事と言えば一つ。

「これからも厄介事が続きそうだな。」
そう呟くが帰ってくるのは・・・鳥の鳴き声だけであった。

呼び出し

あれから数日が経ったある日の事朝食中にキンジがこう呟いた。

「そーい、やあそろそろ『アドシールド』だな。」

そう言うがアドシールドとは簡単な話武偵版オリンピック（学生限定）である。

すると天草達もこう続けた。

「そう言えばそうですね、私は超偵ですから関係ないですけど。」

「アンタらの所って確か主に雑用だったわね？アタシは受付ヨ。」

天草の言葉を聞いて松葉もそう言うのとアンタハと聞いてキンジは頭に？を

浮かべるがこう続けた。

「アンタどうするのよ？インケスタでもあるんでしょ？僅かなデータだけで犯人を見つけてるって奴。」

「ああ、そう云やあそうだったな。」

「去年は何でもありの格闘戦（銃も剣も何でもあり）でしたからね。」それを聞いて天草はクスクスと笑っていた。

何せあの戦闘に際はキンジに対して集中砲火を受けておりそのせいで

ちぎっては投げちぎっては投げと正に無双みたいな感じになってしまい正直なところ迷惑だったと本人曰くだがそう言っていた。

「まあそのおかげでいろんな所から勧誘がありましたから良かったじゃありませんか。」

「ふざけんな！俺はもうやらないぞ！！今年は裏方に専念する！！」

「其れは勿体ない、今年も貴方の活躍を楽しみにしている面々がいらつしやるかもしれませんよ。」

「いねえよ絶対に！第一俺今はEランクのインケスタ」

「アンタの実力知っている人多いから無理があるんじゃないの？」

「うぐ・・・!!それでも俺は裏方だ！」

そう言うってキンジは白米をもぐもぐと食べていた。

そして学校。

教務科の前にある掲示板にキンジ達はそれを見て驚いていた。
その内容は・・・これだ。

『生徒呼び出し 二年B組 超能力捜査研究科 星伽白雪』

「へえ、あいつがなあ。」

キンジはそう呟いて掲示板を読んでいた。

何せ白雪はキンジ関連が無ければ間違いなく優秀生である。

偏差値75で生徒会長、園芸・手芸・女子バレー部部长、生活態度
も

上記のことがなければ正に模範的と言えるがカイズマス曰く。

「あやつは間違いなく執念深くて何するか分からんぞ?」

そう言っていたがまさにそうである。

「然し妙ですね、遠山君の件でしたら1年前に呼び出しがあっても
不思議ではないの?」

「そう考えれば妙ね? アイツナニカしたの他に?」

「俺案件じゃなかったとするなら何だろうな？」

キンジの言葉を聞いてうくくと唸っていると松葉はこう答えた。

「まあアタシらに何の関係もないから良いんじゃないの？」

「そうですね、それではまた。」

「ああ。」

そう言つて3人はそれぞれの教科のある教室に向かって行った。

だが世の中因果は巡るとはよく言うものであった。

昼休み、その際にはキンジは天草達と良く食事をしており無論カイ
ズマスも

同席してある。

すると放送の呼び出しがかかった。

『二年A組 探偵科 遠山キンジ、今すぐに教務科に向かせよ！』

「は？」

キンジはハンバーグ定食のハンバーグを食べている中で呼び出し

が

掛ったので何でとそう思っているが天草がこう言った。

「遠山君、食事は僕らが見ておきますから速めに言ったほうが良いですよ？」

教務科に誰がいるか分かりませんが待たせると・・・最悪な事が」

「!!分かった!?!それじゃあ後頼む!!」

キンジはそれを聞いて顔を青くして素早く教務科に向かって行つた。

東京武偵校に於いて最も危険なエリアが三か所存在する。

一つはキンジが一年生時に所属していた(強襲科【アサルト】)。

ここは武偵校の中で最も過激で生傷が絶えないどころか重傷者や・・・

死人が出る所であり必ず1クラス中2人が卒業写真時に欠席者を意味する縁に・・・この場合は遺影代わりで扱われている。

2つ目は地下倉庫(ジャンクション)

ここにあるのは武偵がよく使う物資などがあるが大抵が・・・

火薬や燃料と言った燃えれば間違いなく大惨事になる場所である。

無論そこには各科に必要な物も揃っており必要な物は大抵そこにあるというのがそのうたい文句である。

そして最後に今キンジが向かっている場所・・・教務科(マスターズ)である。

だがそこはまさに・・・恐怖の世界と言っても過言ではない。

何せこの学校にいる教師は全員が全員・・・危険人物なのだ。

前職が他国の特殊部隊・傭兵・マフィア・殺し屋・軍内での規律違反者などなど上げればキリがないくらいに社会の闇が見えそうな人たちが勢ぞろいなのだ。

勿論真面もいるがそれは少数である。

そんな場所に何でとキンジはそう思っているがキンジは来てし

まった以上

仕方ないと覚悟を決めて扉を開けるとそこにいたのは……。

「神崎に……げ、白雪。」

「キンちゃん！」

白雪はキンジを見て少し嬉しそうな表情をしているが何でこの面子と

思っているともう一人が白雪達の目の前に座っていた。

だらしなさが際立つ黒いコートを着て腰には黒革のホルスターとそれに収まっている『グロック18』。

目は据わっていて年中ラリツテイル事間違いなしとも言われる……尋問科（ダキユラ）に於いて吐かせた人間数知れず犯罪者にとつては

死刑の方がまだマシとも言われる最悪な尋問菅

「よく遠山く来たカ〜？」

この間延びした声色して煙草を吸っているこの女性の名前は……

『綴 梅子』である。

受けられない内容

綴はキンジが座るのを確認すると三人に向けてこう言った。

「今さあ〜星伽についてただけど〜色々と〜あつてさあ〜。」

大変なんだよねえとそう言いながらどう見ても正規で買ったとは思えない

乾燥した奴を出して近くにある英語辞書を持ちながらこう続けた。

「今〜こいつ〜『魔剣（デュランダル）』に〜コンタクト〜された〜らしい〜」

のよねえ〜?〜」

『『魔剣（デュランダル）』・・・噂とかなら聞いたことがあります。』

「そう〜この〜数年〜の間〜何人もの〜『超偵』が〜攫われてるん〜」

だよね〜」

「だがあれは所詮は都市伝説」

「いえ・・・実在するわ『魔剣（デュランダル）』は。」

キンジが言いかけている中でアリアがそういうと綴はこう続けた。

「そう〜、レザドからのレポートに〜SSRからの〜予言もあるし〜」

「ですけど私はその・・・ボディーガードとか・・・幼馴染の・・・

キンちゃんの身の回り」

「あ、そういうのはもう間に合ってるから大丈夫です。」

「そんな!!」

星伽はそれを聞いてガビーンとしているがキンジは知らんと言わんばかりに

綴に向けてこう聞いた。

「先生、SSRの予言は誰が?」

「ん?〜確か〜天草〜だったよ〜」

それを聞くとキンジは分かりましたと言って星伽に向けてこう言った。

「白雪、もうすぐアドシアードだからその間ボディーガードでもつ

いている。

下手したら洒落にならないぞ。」

「あ、あのねキンちゃん。それで何だけど。」

「?」キンジはそれを聞いて何だと聞くと綴がこう答えた。

「星伽はくアンタにくボディーガードく頼みたいんくだつてく。」

「はあ?何言っているんですか??普通ボディーガードは同性つて

決まっているでしょう?」

「そうく何だけどく本人がねくどうしてもつてさあくく。」

受けてくれないかつて聞くとキンジはこう聞いた。

「それつて強制ですか?」

「いやくこれはく自由く。」

「アリアがいるのは?」

「アサルトからのく推薦くく。」

「でしたら俺は断ります、こいつがいると部屋が酷いことになりま
すから。」

主に松葉に出会った瞬間からなと言つて出て行こうとすると星伽
が大声で

こう言つた。

「待つてキンちゃん!キンちゃんはあの女に騙されて」

「俺の仲間に向けて言うんじゃねえ!」

「!!」

キンジの大声を聞いて星伽はびくりとするとキンジはアリアに向
けて

こう聞いた。

「お前の部屋つて確か女子寮だよな?」

「・・・ええ、そうよ。」

アリアは何やらキンジに対して顔を見せずにそう答えるとそうか
とキンジは

こう言つて出て行つた。

「俺は今回の事は何も聞いていない、それで良いよな綴先生。」

「・・・OKく。」

綴はそう答えると煙草を吸い始めた。
そしてキンジは出て行った。

「成程、確かに星伽さんが狙われていると私が予言しましたが遠山君に

ボディーガードとは。」

「あの女どんな手段を使ってもアタシ達をキンジから

離れたいんでしょうね。」

天草と松葉が互いにそう言いながら昼食を再開しているとキンジがこう言った。

「今俺はアドシアードの準備もあるからな、それにアリアなら大抵の事は

何とかするだろうが何故アイツも?」

キンジはあいつは攻める派で守るのには適していないのにとそう言っている

恐らくと天草がこう答えた。

「イ・ウー関連・・・でしょうかね?」

「!!・・・成程な。」

あり得そうだなとキンジはそう言いながら残ったハンバーグをこ

飯に乗せて

搔つ込みながらこう考えていた。

「(恐らく『魔剣(デュランダル)』もイ・ウー関連なればアイツが出るのも納得がいくな、アサルトからの推薦って言うよりもあいつ自身身が

売りこんだって所だがボディーパーガードに付け込んで俺も巻き込ませようと白雪の奴

考えていたようだな。)」

そう思いながら食事を終わらせるとキンジは2人に向けてこう言った。

「取敢えず俺達はアドシアードに向けて準備するしかないだろうな。」

「そうですね、私も遠山君も裏方の、松葉さんは放送ですしね。」

そういうと天草はキンジに向けてある事を聞いた。

それは・・・キンジの腰に差している剣についてだ。

「遠山君、その剣はあれ以降どうですか？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、前にあの鎧の姿になってから何だか振っている間も今までよりも

軽くなった気分がするけど何だ？」

キンジがそう聞くと天草は慌ててこう答えた。

「ああいえ、初めて見たのでその後の体の調子が気がかりだったのですが

大丈夫のようですね。」

そう言いながらお茶を啜っているが彼が何故こう聞いたのかの理由は・・・

以下の事であった。

「(可笑しい、あの時寄鎧が顕現した際に感じたあの悪寒は一体何だったダ?)

まるであれは・・・この世の生き物ではないナニカを垣間見た様な・・・

そんな感じでした。」
そう思いながら当面は様子見ですねと天草はそう思いながら今後の事を
考えていた。

そして時を経て数日後。
アドシアードの日がやって来たがあるメールを見て驚いた。
その内容は・・・これだ。

『星伽白雪が行方不明、これを見た生徒は至急搜索すべし。』
という・・・何しているんだと言わんばかりの内容であった。

白雪を探せ

「遠山君、メール読みましたか？」

「ああ読んだ、ケースD7『事件かどうか分からないが保護対象が行方不明になったから顔見知り』が探せて奴だろ。」

「アドシアード期間中のケースDだからあのバカ何してんのよ!？」

天草がキンジに向けてそう聞くと松葉は怒り心頭でそういった。

何せ閉会式に向けて色々準備しなければいけないってのに何やってんだと

そう思っているのだがキンジはもしやと思っただけ聞いてた。

「もしかしたらデュランダルに関係するんじゃないのか？」

「!!」

それを聞いて天草達がまさかと思っているとアリアを見つけた。

何やら怒り心頭で何処かに連絡しているようだったのでキンジは

松葉に向けて

こう聞いた。

「松葉、監視カメラを使って白雪がいた場所を顔認識で調べてくれるか!？」

「もうやってるわ!けど監視カメラは多いから認証したとしても何処に行くか

見当が・・・あったわ!」

「何処だ?」

キンジは松葉にむけてそう聞くと松葉はこう答えた。

「場所は・・・これは排水溝に近い処理場ね、ごみ処理用の大型トラックがあるから間違いないわ。」

松葉はそう言って監視カメラの映像からそういうとキンジは2人に向けて

こう言った。

「よし、松葉はここで案内を。天草は俺と一緒に行くぞ。」

「どうしたんだキンジ、そんなに慌てて?」

キンジが準備しようとしたその時にカイズマスがドリンクを持つ

て飲みながら

やってきたのでどうしようかと思っているとカイズマスはこう切り出した。

「何か任務か？」

「「「「「「」」」」」」」

それを聞いてヤバいなとそう思っているとカイズマスはこう続けた。

「その表情だと何か訳アリって所か・・・それで？何処に行きたいんだ？」

「「「へ？」」」

それを聞いてキンジ達は目を丸くするがカイズマスはこう答えた。

「俺だって武偵の一人だ、秘密裏の任務に対して詮索はしないしお前らの任務だとするならちよつとばかしたが厄介事何だろう？

それだったら俺は何も聞かずにお前らを目的地まで運んでやるさ。」

そう言つてカイズマスはニヤリと笑うとキンジは仕方ないなど言つて

こう続けた。

「それじゃあここから排水溝の近くにあるごみ処理場のトラックが通っている場所つてあるか？」

そう聞くとカイズマスは暫く考えて・・・こう答えた。

「そこら辺で近いとなると・・・第九排水溝だな。専用の通路があるから

そこ経由で行けば近いぞ。」

「どれくらいで着ける？」

「そうだな・・・普通なら30分も掛らないが今アドシアードで歩行者天国が

幾つかあるからそれを避けてだと・・・1時間くらいはかかりそうだな

普通だと。」

「・・・マジかよ。」

キンジはそれを聞いて項垂れているとカイズマスはニヤリと笑ってこう続けた。

「まあ道路を使えばだが・・・あれを使えば10分も経たずだな。」
そう言ってカイズマスは上空にある気球を見せると・・・
キンジはニヤリと笑ってこう聞いた。

「風は？」

「上々だ、今なら8分で着ける。」

そういうとそれじゃあ行くぞとキンジはそういうと天草とカイズマスも続いた。

「良く許可が下りたな。」

「ああ、丁度撮影が終わってたらしいから借りれたんだ。」

カイズマスはそう言って気球を操作しながらキンジと天草を連れて

上空を飛行していると天草がキンジに向けてこう言った。

「遠山君、神崎さんが走っていますよ。」

「？」

どれどれとそう言いながら下を見渡そうとするとカイズマスが双
眼鏡を

取り出してキンジに渡した。

「これじゃなきゃあ見えないだろう？」

レキじゃあるまいしとそう言ってキンジに渡すとキンジは悪いと
言って貰って

アリアに視線を向けるとアリアは何やら通信しながら同じ場所に向かつて

行っていた。

「成程な、裏道なら規制に引っかかることなく目的地に着けそうだな。」

「どの位掛かりそうだ？」

「そうだな・・・50分って所かな？」

カイズマスは言いながらも直ぐ目的地だぞとそういうとキンジはカイズマスに向けてこう言った。

「カイズマス、綴先生にこの事を伝えて応援を呼んでくれ！」

それと交通についてだけでも取り逃がした時に備えて熱探知機で探す様に

伝えてくれないか？」

「分かった・・・気を付けろよ。」

カイズマスは気球を地上に下ろしてそういうとキンジはこう答えた。

「ああ分かってるさ、行くぞ天草！」

「ハイ！」

そう言って2人は地上に降りて白雪がどこにいるのかを探した。

「ここら辺だよな？」

「ええ、ごみ処理場の近くって臭いですね本当に。」

天草は鼻を服で覆いながら探していると・・・キンジがあるものを見つけた。

それは・・・。

「この蓋・・・繋ぎ直したような感じがするな。」

「どれですか？」

天草はキンジの言葉を聞いて何処だと聞きキンジが指さすと

天草はキンジに向けてこう言った。

「これは超能力で塞いだ後デスネ、一度溶かしている所から見てここですね。」

「一体どこに繋がっているんだ？」

キンジはそう言って生徒手帳の地図情報から調べると・・・顔を青くした。

「どうしたんです？」

キンジの表情を見て天草はどうしたんだと聞いて手帳の中身を見て・・・

ゾツとしたような表情になった。

この排水溝が繋がっている場所が・・・場所なのだ。

「おいおいおい、こんな所でって冗談だろ・・・」

「こいつはジャンクションじゃねえか!!」

白雪を探しにジャンクション。

ジャンクション。

それは武偵校が保有する武器庫及び各科目の生徒たちが使う備品保管庫の

総称である。

もしそこで何かあれば間違いなく・・・大惨事となること間違いなくだ。

キンジと天草はそれを感じて最悪だと確信してすぐ様に中に入った。

武偵校の地下は船のデッキみたいな多層構造になっており地下二階からが

水面下となっているためそこ迄は会談で駆け下って立ち入り禁止区画行の

エレベーターに入って緊急使用のパスワードを打ち込むも・・・

エレベーターは動かないので何故かと思っていると天草がこう聞いた。

「もしかしたら白雪さんを誘いこんだ人間がやったのかもしれないね？」

エレベーターに何かしらの細工を施したのでは?!

「となると・・・あれだな。」

キンジは天草の言葉を聞いてそう呟くと・・・変圧室に入り込んだ。その片隅にはマンホールのような物があつてそれを開けると・・・穴があつた。

キンジ達は非常用の梯子の保護ピンを外して梯子を下におろした。本来ならばパスワード認証とカードキー、武偵手帳に内蔵されている

非接触型のICを使わなければいけないのだがキンジはそれをしてる間に

天草はそこからさらに下にある梯子のパスワード等を解析しており其の儘

ボイラー室、更にその下に降っていった。

無論梯子は錆びているため結構痛いのだがそんなの関係なくキンジ達は其の儘下に降りて行った。

そして最深部についたキンジ達は片隅にある使われていない資料室に入って

内部の状況の資料を携帯の画面の明かりを頼りに覚えて静かに……奥に向かって行くとキンジは天草に向けてこう聞いた。

「暗いな。」

「ええ、侵入者が電気を落としたのでしようね。」

「唯一の明かりは非常灯……携帯は圏外。」

「屋内基地局がやられているのでしょね、カイズマスさんに言っておいて

正解でしたね。」

「ああ……後は俺達ってか。」

キンジがそう呟くと天草は少し笑いながらこう言った。

「ふふ、そういえば久しぶりですよね？この状況になったのは」

「ああ、確かにな。一年は俺達でクリアしていたものな。」

「そうですね……あれから色々とありましたですしね。」

天草はそう言いながらキンジと共に進んでいった。

ジャンクシヨンの廊下は広く、左右に弾薬棚が連ねておりそこには『KEEP OUT』やDANGER』等警告が多数ある為銃は駄目だと確信した

キンジは『鎧竜剣』を抜刀して天草は6本の剣の内の1本を抜いて曲がり角に向けて刀身を向けるとそこに・・・白雪が映っていた。

「いましたね。」

「ああ・・・後もう一人いるしな。」

天草とキンジは互いにそう言っつて話の内容を聞こうとしていた。

「どうして私を欲しがるのデュランダル。大した能力もない・・・私なんかを」

「矢張り実在していたんですねデュランダル。」

「ああ、都市伝説並だと思っつていた事が現実に起こつていたとはな。」

天草とキンジは互いにそう言いながら話を聞き続けた。

「裏をかこうとする者がいる。表が裏の裏である事を知らずにな。」

「・・・女の声？」

「時代がかっていますが確かに女性ですね・・・松葉さんと連絡が取れれば

声紋分析で正体は分かるのですが。」

何と間が悪いと天草はため息交じりでそういうと声はこう続けた。

「和議を結ぶとして偽り、陰で備える者がいる。だが闘争ではさらに

その裏をかくものが勝る。我が偉大なる始祖は陰の裏、すなわち光を身に纏い、

陰を謀ったのだ。」

「何の話しているんだあいつ?」

「光を纏って・・・陰を謀る・・・始祖となると彼女は一体?」

天草は誰の事を差しているのかと思っているがそれはそれとして女性は

こう続けた。

「敵は陰でステルスを錬磨し始めた。我々はその裏で

より強力なステルスを磨く。その大粒の原石・・・それも猪武者の如き

武偵しか守られていない原石に手を伸ばすのは自明の理だ。

不思議がる事はないのだ白雪。」

「猪武者って。」

「ええ・・・アリアさんでしょうね。」

彼女は決めたことは何が何でも思い通りにしようとしていましたからねと

そう呟くと女性はこう続けた。

「だが逆に遠山キンジに至っては要注意していた。」

「キンちゃんの事を・・・?」

「俺の事か?」

「そうですね。」

天草がそう言うのと女性はこう続けた。

「奴は日本で初のSランク武偵に上り詰めた学生。

然も現役を倒すともなれば更に危険度は上がるものだが・・・貴様と奴との不仲は調べが付いていたから狙って正解だった。」

「私とキンちゃんは仲悪くないもん!」

「イヤ悪いだろ。」

「知らぬは本人だけですな。」

白雪の言葉を聞いて呆れていると女性はこう続けた。

「奴の武力はさることながら最も恐れるべきは・・・奴の仲間だ。」

「・・・あいつらの事」

白雪はそれをきいて目を細めるが女性はこう続けた。

「そうだ、ステルス持ちにネットワークのスペシャリストに
乗り物のエキスパート。奴はそういうスペシヤルな人材を引き込
む才能を

保有している・・・まるで我がしその如く光を身に纏い人々を導い
ている。」

「・・・俺がか?」

キンジはそれを聞いておれって導いてネエゾとそう思っている
と・・・

女性は白雪に向けてこう聞いた。

「フォロー・ミー、白雪。お前の様な逸材が身も心も捧げるべき人物
の下に・・・『イ・ウー』にな。」

接敵

『「イ・ウー」・・・だと?!」

「僕たちは如何やら又もや縁のある組織と出会ってしまったね。」

キンジと天草は互いにそういうと女性は・・・こう言った。

「だがその前に・・・邪魔者を消すでしょう。」

「!!」

それを聞いて2人は互いに箱の後ろから出てくるとキンジは暗がりにいる人物に向けてこう言った。

『『デュランダル』!お前を未成年略取の現行犯で逮捕する!!』

そう言つてキンジは白雪の前側に向かうが白雪はキンジに向けてこう言った。

「来ちゃダメ!逃げてキンちゃん!!武偵は超偵には勝てない!!」

「でしたら・・・いればいいんでしょう!」

白雪の言葉に対して天草は日本刀の一本を抜き放つて・・・キンジに向かっていたフランスの銃剣『ヤタガン』の刃をぶち当てて弾くとキンジは天草の日本刀を逆手で受け止めてキンジは其の儘向かって行くと暗がりにいる女性の声がかう言った。

「ちい!伏兵を忍び込ませていたとは!!」

「戦いの常套手段だと思ふんだがな!!」

そう言いながらキンジは暗がりの中で僅かに見えた銀髪の髪を見たが

暗がりにはいた女性は退いてこう言った。

「私の策を愚弄した罪を贖ってもらう!」

そういうとキンジの手首に何かが・・・巻き付いた感触を感じた。
「これは！」

「一緒に来てもらおう！」

そういつた瞬間にキンジは其の儘・・・引っ張られていった。

「うおわ!?!」

「遠山君！」

「天草！白雪と一緒にここから出ていろ!!」

そう言いながらキンジは・・・闇の中にへと消えていった。

「クソ！ここは・・・未だジャンクションの火薬庫かよ!!」

キンジはそう言いながら周りを見渡していると・・・暗がりから声が聞こえた。

「貴様はどうやってこの場所を突き止めたのだ？」

答えろとそういう言いとキンジは頭を掻きながらこう答えた。

「簡単だ、あいつの情報は顔認識システムを使って調べた後に

ここに向かったって言う位置情報を確認したから気球を使ってここ迄来たんだ。」

「成程気球か、それならば速く来た理由に見当が付いた。私の考えが正しければ普通に行っていたら1時間はかかっていたからな。」
それならばというところ続けた。

「2つ目、どうしてここだと分かった？」

「つい最近開けられた跡があったからな。それでだ」

文句あるかと聞いてみると暗がりにいる女性はこう言った。

「ほう……理子の聞いた通り貴様には優秀な仲間を率いる才能に恵まれているようだな。」

「まあ……確かにあいつらは優秀だな。俺よりも数十倍にな。」

キンジは自虐気味にそういうのが暗がりにいる女性はこう反論した。

「どうかな?」

「?」

「私からすればそこまでの人間を束ねられる貴様こそ優秀だと思っている。」

「何言つてんだ?俺は只の武偵だよ。」

「そうとも言えないぞ?民草の中には優秀な人間が束ねるからこそ戦に

勝利できていると歴史がそう証言している。……まるで我が先祖の様に」

「先祖?」

それを聞いてちぐはぐだと感じていた。

「(こいつの先祖は確か陰で策を弄する一族だったはずだ、

だけど今言ったこいつの言葉はまるで真逆だ。まるで表舞台で活躍したような……そんな感じのする。)」

そう思っていると暗がりにいる女性がキンジに向けてこう言った。

「貴様も来ないか『イ・ウー』に。貴様の才能ならば我々は更に多くの同胞を

纏めれることが出来るが?」

どうすると聞くとキンジはこう答えた。

「生憎だがお断りだな。俺はそんなのはいらねえし俺が只……

仲間と一緒に仕事をしたい。ただそれだけだ」

そういうと暗がりにいる女性はこう言った。

「この上はスーパーコンピューターがある部屋がある。そこで貴様と決闘を

所望したい。」

「決闘……随分古風だな。」

「付いてこい。」

暗がりにいる女性は其の儘上に繋がるハッチを開ける音がして其の儘だったため恐らく開けたままなのであろうと感じたキンジはこう思っていた。

「(どうする？正直な所あいつのいう事に耳を貸すことなんてないし

それに白雪の奪還は叶ったんだ。ここでトンズらしても)」

そう思っていると・・・上から声が聞こえた。

「ああそうそう、もし貴様が来なければこの中に水を大量に浸水させよと

思っている。逃げようとしたら水が入って貴様らは終わりだ、特に貴様は未だしも下にいる連中は間違いないだろうな。」

「！お前」

「そうされたくはなかったら付いてこい。排水系のシステムは既に壊しているから直すのは無理だろうしな。」

「あんにやろう・・・本気でやりあいたいようだな。」

キンジは頭に来たぞとそう思いながら梯子をよじ登っていった。

6階は主に情報関係の武偵が使うスーパーコンピューター機器を扱う場所であり本来ならば拳銃等は使えるのだが松葉の事を考えキンジは『鎧竜剣』を抜いたまま辺りを見渡していると・・・声が聞こえた。

「ようやく来たな。遠山キンジ」

「!!」

キンジはその声が来て身構えるとキンジの目の前に・・・一人の少女が現れた。

銀髪の髪を2本の三つ編みでそれを旋毛辺りで上げて結った切れ長の眼の・・・キンジと同一年位の少女が。

「お前が『デュランダル』か？」

キンジは『鎧竜剣』を構えてそう聞くと少女はこう名乗った。

「初めまして遠山キンジ。私の名前は……」

『30代目ジャンヌダルク』だ。」

聖魔女対武偵

ジャンヌダルク

15世紀に於いてイギリスとフランスで起きた百年戦争をフランスの勝利に

導かせた聖女。

然し裏切りにより処刑されるがこの時の彼女の享年は19歳。

然し彼女はその子孫だと言ってきた。

然も30代目とも公言している。

それが真実なのかどうなのかをキンジは確信できないと思うこう聞いた。

「お前・・・自分の事を『ジャンヌダルク』と言ったな？」

「ああそうだ。」

「だが可笑しい、ジャンヌダルクは19の時に火刑で死んで子供がいたと考えても

それだったらフランス軍がその子をプロパガンダにしても

可笑しくなかったはずだが・・・何故出なかったんだ？」

キンジがそう聞くと彼女はこう答えた。

「簡単な話だ、あれは影武者だ。我が一族は策謀を得意とする一族で

表向きは聖女と持て囃されていたがその実魔女としてその正体を私達は

歴史の闇に隠しながらもその誇りと名、知略を時代を経て形を変えて

子々孫々に至るまで伝えてきた。そして私がその30代目だ。」

そう言う彼女・・・ジャンヌダルクはキンジに向けて手を差し伸ばして

こう言った。

「フオローミー、キンジ。リュパン4世の策謀を切り抜け、私の策をここ迄狂わした人間はお前が初めてだ。貴様のそのカリスマ性はここでも、

『イ・ウー』でも高く評価され、優遇されるであろう。」

そう言つてジャンヌダルクはキンジを勧誘するがキンジはこう聞いた。

「それに俺が『ノー』で答えたらどうするんだ？」

「その時は貴様をここで始末する、その力を敵として見れば厄介この上ないのでな。」

そう言つとジャンヌダルクはキンジに向けて剣を抜くところ続けた。

「さて、答えを聞いていないがどうする・・・来るか否か？」

そう聞くとキンジは鼻で笑つてこう答えた。

「答えは勿論・・・『ノー』だ。」

「そうか・・・なら仕方がない。排除する！」

そう言つとジャンヌダルクはこう説明した。

「貴様の剣がどんな剣であろうがこの『デュランダル』はいかなる武器であつても壊れないぞ？」

そう言つとキンジはああそうかよと言つて『鎧竜剣』を突き刺してこう言つた。

「インクルシオー!!」

そう言つとキンジの体は鎧で覆われた。

そしてキンジは持っている槍を突き刺して大型のバスターソードを1本抜いて

もう1本はバランスが悪くなるという思いなのであろう、外して其のままの状態にして・・・戦闘が起きた。

「やっと着いたわ！『デュランダル』！未成年略取未遂で逮捕よつて・・・白雪アンタ何やってたのよこんな所でってアンタ確か・・・天草だったわね？」

アリアがそう言つて怒り心頭ながらも天草を見ていると天草はこう答えた。

「ええそうです、白雪さんはアリアさんをお願いします。私は遠山君を

助けに行かないといけないので。」

「キンジが！案内して天草！！『デュランダル』は私の獲物」

「だったら私も行く！キンちゃんを放つてはおけないもん！」

アリアと白雪はそう言つて天草に近寄るが天草は首を横に振つてこう答えた。

「其れは出来ません。」

「何だよ（なの!?）!!」

2人が揃つてそう聞くと天草はこう答えた。

「アリアさん、貴方の任務は白雪さんの護衛です。私情で任務放棄等

先生たちが聞いたなら最悪折檻ものですよ。」

「うぐ。」

「それから白雪さんもですが此度の原因は貴方の対応の甘さが原因です、命令を聞かなければどうなると書かれているかもしれないが武偵においての

サインの出し方位貴方も学んでいると思われませんか？」

「う．．．けど．．．けど」

「けども何ありません。そんな中途半端な覚悟でここにいるのでしたら．．．大人しくこの学校から出たほうが貴方の為になると思われますよ。」

「．．．．．」

「正直な話貴方方はお荷物以外の何物にもなりません。

もう直ぐ松葉さんが呼んだ援軍が到着するかもしれませんがそれ迄大人しく

待っていてください。」

「じゃあアンタハどうなのよ!？」

アリアは天草に向けてそう言っただけでこう続けた。

「アンタだってお荷物じゃないの！偉そうな事を言っただけ」

「私は貴方とは違って客観的に見て判断しています、貴方の悪い癖は

何でもかんでも一人で何とかするか自分が決めたお気に入り以外

信用しないという所です。武偵憲章の第一条を本当の意味で理解しなければならぬのは貴方です『神崎・H・アリア』。」

「何ですって．．．!!」

「『仲間を信じ、仲間を助けよ』。これは仲間を思うのでしたらその仲間が

今どうしたいかを感じ取り、そして尊重して助け合って成長し合う。

それが仲間です、其れを貴方は一つでもしたことがありましたか？」

「．．．．．」

「と言う訳で私の役目は暴走する貴方方を引き留めることが遠山君の為に

出来る事です。早く上に行きなさい。」

「．．．何でアンタはキンジを信じられるのよ?」

アリアは唇を家鴨のようにしてそう聞くと天草はしれっとう答えた。

「簡単です、『仲間』だからです。」

「ハアアアアアアアアア！」

「ウオオオオオオオオ！」

ジャンヌダルクとキンジの戦いは苛烈を極めていた。

周りにあったスーパーコンピューター機器は何機かが壊れておりバチバチと

火花が上がっている中で戦闘を続行していた。

ジャンヌダルクは剣をぶつけながら何やら息を吹きかけているがキンジは

そんなの関係ないかのように攻撃していた。

・・・ジャンヌダルクは魔女、その能力は氷である。

今までやっていたのは凍気でキンジの鎧を凍らせようとしているようであるが

如何やら聞いていない様子であるのだがジャンヌダルクはその攻撃に対して・・・愉しいという思いがあった。

自分の策をここ迄真正面から食い破るキンジに対してもっと戦いたいという

本能が燃え始めていた。

まるで・・・火刑される前の炎の様に。

そして互いに一辺離れるとジャンヌダルクはククククと笑いながらこう続けた。

「まさかここ迄とはな遠山キンジ．．．いや、キンジ。」

「お前を少し見誤っていた．．．だからここからは全力で戦うから．．．」

間違えたら死ぬぞ。」

そう言ってジャンヌダルクは懐から．．．小さな鉱石の付いたペンダントを取り出して．．．こう呟いた。

r
o
n

やり対槍

「Balwisyall Nescell gungnir tron」

その言葉を紡いだ瞬間に・・・彼女は光に包まれた。

「何だこれは!?!」

キンジはそう言ってオレンジ色の眩い光を見て鎧越しから腕で光を遮った。

その中ではジャンヌダルクの鎧・・・いや、真っ裸になった。

そして彼女の周りに幾つもの・・・楽譜の様な物体が浮かんでいた。それらはジャンヌダルクの体に巻き付いて・・・新たな鎧を作り出した。

足には漆黒とも言わんばかりのブーツ。

体はオレンジ色のぴっちりしたスーツを着て、腕にはガントレット、

そして右腕には巨大な槍が持つており頭部にはヘッドギアが装着された。

そして現れたのは・・・オレンジと白のツートンカラーの鎧を身に纏った

ジャンヌダルクがそこにいた。

「何だそれは。」

キンジがそう聞くとジャンヌダルクはこう答えた。

「これは神器から生まれた兵器・・・『シンフォギア』だ。」

『『シンフォギア』・・・』

「ここから・・・第二ステージだ!」

推奨BGMFAIRY TAIL22番目のOP『明日を鳴らせ』
「うおわ!?!」

歌い出したと思えばジャンヌダルクは槍でキンジ目掛けて叩きつけてきた。

その威力は正しく先ほどよりも強いものであった。

「ハアア!!」

更にジャンヌダルクはその槍を使って猛攻する中でキンジはそれに対して

バスターソードで迎え撃った。

「何時までもやられているだけとでも思ったか!!」

「ハン！それでなくては面白くない!!」

ジャンヌダルクはキンジの言葉を聞いて鼻で笑ってそう言いながら

槍を床に刺すと突如槍の刃が・・・左右に分かれたと思いきやそこから・・・

大量の電流が辺り一帯に流れるがキンジはそれを跳躍で躲すが・・・スーパーコンピュータ機器が突如として全て壊れて・・・電源が落ちた。

『SURIZARINN ← → BORUTE』

照明も。

「くそ！」

キンジは毒づきながら辺りを見回していた。

何せ光源がなく自家発電もおじやんなのだからとそう感じた。

然しジャンヌダルクは闇の中で・・・こう言った。

「クククク、闇の中では身動きも取れないとはな。用意したかいがあつたというものだ。」

「どういう意味だ！」

キンジがそう聞くとジャンヌダルクはこう答えた。

「簡単だ、私は夜の闇の中で戦っていたからな。慣れているのさ」

「成程な。」

キンジはそれを聞いてヤバいなどとそう感じていた。

何せ自身はいまだ見えないのに相手は見えるという正にワンサイドゲームに

なりえない状況の中で戦うのだから当然とも言えよう。そしてジャンヌダルクはキンジに向けてこう言った。

「ぎあー！第三ステージだ!!」

大声でそう言った瞬間に槍がキンジ目掛けて・・・投擲された。

「!!」

キンジはヤバいという直感を頼ってバスターソードをその方向に
向けると

槍が・・・弾かれた。

「くそー!」

キンジはそう毒づいて下がるが・・・ジャンヌダルクはその程度で
は

止まらなかった。

上下左右に回り込んでまるでキンジをいたぶるかのように攻撃し
てきた。

そしてジャンヌダルクはキンジに向けてこう言った。

「そろそろ鎧も限界ではないのか?」

「・・・」

キンジはそれを聞いて畜生とそう思っていた。

何せこれまでの攻撃でバスターソードに罅が入っていたからだ。

クソとそう思っているとジャンヌダルクはキンジに向けてこう
言った。

「終わりにしよう遠山キンジ、貴様を『イ・ウー』に連れて行って

白雪を連れていけなかった免状とさせてもらう。」

そう言うのと槍から・・・蒼白い光が見えた。

「!!」

キンジはその淡く白い光を見てあそこかとそう思っているがジャ
ンヌダルクは

キンジに向けてこう言った。

「遅い! 『オルレアンの水花』!!」

貰ったとジャンヌダルクはほくそ笑んでいたが・・・そうはいかな
かった。

キンジは腰に装備されているリボルバーキャノンを・・・
光が見えた場所目掛けて構えた。

武偵憲章に基づいて殺す事は出来ないが・・・無効にする手段など幾つもある。

「(それがこいつだ!!)」

キンジはそう思いながらリボルバーキャノンの引き金を・・・弾いた。

すると弾丸は其の儘勢いよく・・・光の少し下目掛けて当たった。するとそこから・・・火花が散らしてジャンヌダルクの居場所がはつきりと分かった。

「(そこだー！ー！)」

キンジはそう思いながらリボルバーキャノンを投げ捨てて・・・其の儘ジャンヌダルク目掛けて突っ込んだ。

「しまったー！」

ジャンヌダルクはこれを狙っていたのかとそう思ったが時すでに遅しとは

この事だ。

弾かれたことで数瞬遅くなった攻撃に対してキンジは・・・いつの間にか

持っているノインテーターをジャンヌダルクに対して向けられていた。

「(何時の間に)!!)」

ジャンヌダルクはそう思っているが其の儘キンジは・・・槍を叩き落すと其の儘組み落として・・・床にぶつめた。

「!!)」

ジャンヌダルクはその痛みにヤバいと感じたが当のキンジは組み伏して

ジャンヌダルクに向けてこう言った。

「ジャンヌダルク、お前を逮捕する。」

平坦にそう言うがジャンヌダルクはそれを聞いて・・・こう呟いた。「そうか・・・まあ、貴様みたいな奴ならば・・・悪くない。」

話し合い

ボーカルの不知火とギターを演奏しているキンジ、そしてドラムを叩いている

天草によつて・・・アドシアードの閉会式が執り行われた。

壇上ではアリア達チアリーダーに扮した格好を着ているがその中に一人・・・

追加の人材が混ざっていた。

その人間は・・・。

「で・・・でもやっぱりこんなの」

「あーもうー！ここ迄来て言ってるのよ!!ほら出るわよ『白雪』!!」

そう・・・白雪が加わっているのだ。

元々オファーがあつたのだが星伽の家の仕来りにヨつて遠慮していたらしいが

今回の事件の責任の一環と言う訳でSSRの教師の許可も得られてしまったがために

ここにいます。

然し踊っている彼女たちはキンジにとって・・・悪夢でしかないのだ。

HSRにならない様に配慮しなければならぬ為に音楽に集中しなければならぬのだ。

そんな中で・・・彼女達のポンポンを拳銃の空砲で散らばして

花吹雪が舞つた処で終了となつた。

「よう、キンジ。これから打ち上げあるんだけどよ？一緒にどうだ」
武藤がそう言うがキンジはこう返した。

「悪い、俺今からダキュラの綴先生に呼ばれてんだ。」

「はあ!?!お前何したんだよ尋問のプロに呼び出されるって・・・心を燃やして強く持てよ。」

「何怖い事言ってるんだ!」

キンジはそう言ってる天草にも話すと天草はこう答えた。

「分かりました、松葉さんにも言っておきますけど・・・何も起こさないで下さいね?」

「俺がいつ問題起こしたんだ?」

「え?女性関係だと何時も」

「じゃあ行ってくるぜ!」

キンジはそう言って出て行った。

ダキュラは取調室がある為この学園内では実演と演習用に使われているのだが

今キンジは中に入って目の前にいる少女・・・30代目ジャンヌダルクと真ん中に

綴先生が同席している感じで入っていた。

あの後逮捕されて取り調べる際にジャンヌダルクは条件としてこう提示した。

『条件として遠山キンジと取り調べに同席してもらいたい。』

そう言われて今いるのだ。

そしてキンジは先ずはとこう聞いた。

「取敢えず聞かすがジャンヌダルクは襲名時の名前と思って良いか?」

「ああ、そうだ。」

「ならお前の本名を聞きたいんだが。」

「本名か・・・既に捨てた身の上だ。ジャンヌダルクと呼んでくれても

構わない。」

「・・・分かった、ジャンヌ。お前ら『イ・ウー』は何の組織だ?」「我ら『イ・ウー』は互いの技術を盗みあい、学び合う我々全員が教師でもあり生徒でもある。」

「まるで学校だな・・・それじゃあ『プロテクション』は誰だ?ボスの名前は」

「・・・知らん。」

「・・・は!?あつたこと位あるだろう!」

キンジは大声でそう聞くがジャンヌはこう答えた。

「私は会っていない。会えるのはナンバー2の『ブラド』だけだ。」

『『ブラド』・・・そいつは何処にいる?』

キンジはそう聞くがジャンヌはこう答えた。

「其れも知らぬ、知っているとするなら奴は隠れることに関しては天才的だ。」

狼を使って情報収集すると聞いている。」

「狼ね・・・じゃあアジトは何処だ?」

世界中に何か所ある?とそう聞くとジャンヌはこう返した。

「私達のアジトは移動式だ。各地を転々とし、テロリストや裏組織、国家の中枢から資金提供されている。」

「まるで何でも屋だな・・・じゃあ攫った超偵は何処にいる?」

「其れは『ブラド』の管轄内だ。私は実働しただけに過ぎん。」

「詰まる話分らないって意味だな?」

「そうなるな。」

そうかとキンジは溜息ついていた。

攫われた超偵達の居所は不明。

アジトも不明で然も国も関与しているとなれば捜査は難航するだろうなと

そう思っているとキンジはこう聞いた。

「それじゃあもう一つだが何で俺が相席限定で今のを教えたんだ?」

ジャンヌは恐らく実働部隊でいなくなっても想定内という程度の

人材であろうと思ったキンジはそう聞くとジャンヌはこう答えた。

「簡単な理屈だ・・・貴様に興味が湧いたからだ。」

「興味？」

「戦士たるもの自らを倒した人間の名を聞くのは当然の理屈だ。そしてお前は

私を組み伏して倒した。超偵である私に対して、本気で戦った私に對してだ。

だからこそ知りたいのだ。貴様が何者なのかを・・・間近でな。」

「お前が俺を間近に見る機会なんて」

「ああそう言えば司法取引でこの子武偵校に入学してアンタと同じインケスタになるから。」

「もうねえって・・・はあ!?マジかよ!!」

「そんでお前今日からこの子の監視役として同居って事になっていくから

そこんとこ宜しくねえ。」

「ふざけんな!そもそも俺がいるのは男子寮だし女史が入れるわけ」

「そういうと思って今引越し業者がアンタらの為にこの島にあるワンルームマンションに引越させたから後は宜しく〜。」

「何時の間になって決定事項かよ!!」

「ああそれとお金は警視庁と法務省が前金で払わせたから気兼ねなく

寛いどいてねエ。」

そんなじゃと言って出て行く綴を見て八方塞がりかよと思つていと

ジャンヌはキンジに向けてこう言った。

「今後不自由かもしれないが・・・不束者ですがよろしくお願ひしま

す。」

「それ違う意味!!」

頭を下げるジャンヌを見てキンジはツツコミを入れるがもう駄目だと思いつながらこう考えていた。

「俺の学生生活と一人暮らしはアリアに関わった時点で終わってたのかなあ。」

そう思いながら天井を見つめている・・・キンジであった。

武偵殺し帰還

あれからというもののキンジはジャンヌとの共同生活と言う難問に日夜自問自答しているが答えなどでないまま数日が過ぎた。

寝る所か取敢えず別個にしないかと言う案を出そうとするが綴先生曰く。

『アンタこの子の監視が仕事だから相部屋ねえ。』

ならば風呂とかはと聞くとそれは流石に別だと言ってくれた。

良かった！神は死んでいないとそう思っていたが綴先生はこう続けた。

『ああ、けど通学は一緒ね。仕事も同様だから。』

最悪だー!!とOrzしてしまったがまあ何とかするしかないよなこれ。

そんなこんなで数日間共同生活していた。

「「「頂きます。」「」」

最近では恒例となったこの食事もジャンヌが加わったことでパーティリーが

広がった。

比較的に和食が主立っていたため洋食が加わって少し風景も変わった。

先ず部屋であるが女性でもあるジャンヌは着替えは別々の部屋でやっており

服とかは部屋の中に入って対応している。

買い物は共同で行い武器の方は剣が1本に加えて自身が保有するベレッタ（通常型）の同型をやった。

そしてあのペンダントであるが内容が内容だけに当面の間は学園が預かることと

相まった。

無論最初天草達は警戒していたが取敢えずはそれも薄まり始めていた。

そして4人が登校してキンジとジャンヌは同じインケスタである為同じ授業を

受けていた。

そんな中で・・・事件が起きた。

それは・・・。

「たっだいまー!」

「!?」

キンジはその声の主・・・理子を見て目を見開いて驚いていた。

あれ程の騒ぎをしたにも関わらず今更何で戻ってきたのかとそう思うと

本人がこう説明したのだ。

本人曰く4月からアメリカからの長期の極秘犯罪捜査で

アメリカに行っていたという昨日帰ってきたのだとそう言った。

「皆ー!!おっひさしぶりー!!りーりんが帰って来たよー!!」

教壇に立ってそう言う・・・あほな連中が喜んで集まっていた。

彼女はクラスのマスコットの存在で人気者なのだ。

性格は明るく、おバカキャラで定着しているため男女それぞれ警戒心なく

人気なのだ。

そんな中でキンジ達でしか正体を知らない。

・・・『武偵殺し』が彼女であると。

武偵少年法と言うのがあがあるがこれは内容的には少年法と一緒に犯罪を犯した

未成年の武偵の情報は原則公開禁止にされているのだ。

その理由も同じで人権上の配慮とかがあるのだが・・・これに対して一言。

お前らそれを遺族の目の前で言えるのか？

それとも手前らが同じ苦しみを味わない限り理想論ばかりを口走るのか？

まあ、これは作者の地の分であるがどちらかといえば内容次第で公開すべきだと思っている。

本題に戻るがそのプロフィールをやり取りすることは武偵同士の間でも

禁忌とされており知ることが出来るのは被害者と限られた

司法関係者のみとなっていて武器を持った少年少女に対して配慮すべきなど

人道上の理由云々の前に人としてやって良い事と悪い事の区別が付けない人間に

武器を持って良いのかと議会では度々議論となっておりこれを悪法として

消滅すべきだという意見が意外と結構出ており近々改正されるという動きがある。

「成程、ですがなぜ武偵局は彼女を取り締まらないんでしょうね？」

「恐らくは『イ・ウー』に関係のある者達が彼女に対してのアクションを慎むようにと政府が念を押ししたのであろう。」

「最悪ね、犯罪者をのさばる様にするなんて！」

「松葉、あまり大声で言うべきではない。・・・我もあのミサイルでもし死人が出ていたら間違いなく手錠を詰めさせようと思ってる。」

「だが『イ・ウー』にそれだけの影響力を持っているとなると関係者も危ない・・・俺らの家族が狙われるって事も念頭に置かないとな。」

キンジの言葉を聞いてちいい！と舌打ちしているとジャンヌがこう言った。

「その本人が来たぞ。」

「!!!」

それを聞いて前を向くと・・・理子がにこやかにやって来た。

「ヤッホー、キー君、シー君、カー君、ケーちゃん！」

誰がケーちゃんよと松葉はそう言うがそんなの気にしないとわんばかりに

理子はキンジに向けてこう言った。

「おやおや？もしかして転校生!?うひょー!!銀髪の美少女となんて流石キー君、攻略が早い早い。」

うりうりくとそう言いながら肩を突いているとキンジはうつとおしそうに

こう聞いた。

「何でお前がここにいる？何が目的だ？」

「あれあれ〜そんなこと言って良いのかなあ?・・・うつかりとこ
こで

「戦つちまいそうだぜ〜?」

「!!!」

それを聞いて全員が構えると理子はこう続けた。

「大丈夫大丈夫、りこりんはここで何もしないし君達には
用があるんだよねえ。」

「・・・用?ですか。」

天草はそれを聞いて不審ね目つきでそう聞くと理子はこう答えた。

「そうそう、今度のテストが終わって週末にね。秋葉原に行くんだ
けど

キー君達も来なよ!りこりんが奢つてあげるから!!」

じゃあねえと言って立ち去るのを聞いて天草はこう聞いた。

「どうします?遠山君。」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「簡単な事だ・・・毘と分かっているも潜るしかなさそうだな。ジャ
ンヌ、お前即席でジャミングって出来るか?」

そう聞くとジャンヌはこう答えた。

「即席ともなるとちよつとな、私は主に情報から作戦を立てるタイ
プ

だからな。」

「そうか、・・・何とかするしかないな。」

それを聞いて全員はこくりと頷いた。

偶には平和も良い

翌日からテストが始まった。

午前中は立て続けに一般教科の筆記テスト(ジャンヌ立ち合いの元での勉強の結果成績は何とか。)を終えると昼食後はスポーツテスト。八種目全てを終わらせたキンジ達はテスト会場でもある第2グラウンドの隅で

座り込みながらこう喋っていた。

「それにしても今日は平和ですね。」

「全くだな、俺もこう言う日常であって欲しいな。」

「其れはそうとだけだよ・・・大丈夫か松葉？」

「・・・」

「正に死人だな。」

ジャンヌはそう言って倒れている松葉を見下ろした。

正直な所俯せになって寝ているのでむにゆりと育ちの良い胸が形を崩しながら

見えているのでキンジは極力見ない様にこう聞いた。

「お前本当に体力無いんだな。」

「・・・煩い。」

「ならば私が鍛えてやろう、毎日8キロのランニングをすれば来年頃には」

「そんなのやったら私死ぬわよ!!」

「あ、元気になった。」

カイズマスは松葉の声を聴いてそう言うかと天草がこう言った。

「夏休みが終われば我々は此の儘チームを組んだとするならポジションは

どうするか話し合いませんか?暇ですし。」

「そうだな。」

キンジはそう言ってどうするかと話している中でそういえばとキンジは

こう言った。

「次の生物って確か『小夜鳴』先生だったな。」

「ああ、そういえばそうだったな……」

あの先生よくこんな学校に入れたよな。」

カイズマスはそう言っただけで遠い目をしていた。

小夜鳴とはアンビキュラム（救護科）の非常勤講師をしている遺伝子学者だ。

未だ20歳なのに海外の大学を飛び級で卒業するほどの秀才でイケメン。

まるでトレンディドラマに出てくる美青年で聖人の様な性格で礼儀正しく

誰にでも敬語と言う武偵校では最も珍しいタイプの教師である。

「確かに……一体どんな経歴があるんでしょうね？」

「本当よね……そう言えば噂だけと聞く？」

「「「？」」」

全員松葉に耳を傾けて何だろうと思っていると松葉はこう答えた。

「小夜鳴先生の部屋に入った生徒が……何故か分からないけど倒れることが

よくあるって。ネットだと生徒に何か実験してるんじゃないかって噂だけど

本当なのかどうか。」

それを聞いて全員うくくと唸っているとキンジとジャンヌはこう言った。

「それじゃ俺達テストがあるからこれで。」

「そうですか、こんばんはカレーライスにしようとかと思っっているのですが

ジャンヌさんはカレー如何ですか？」

「所望する、体を動かすとカロリーが必要だ。」

「分かりました。」

天草の言葉を聞いて2人は生物のテスト会場に向かって行った。

『『『小夜鳴先生ー!!』』』』

キヤアアアアアア!!と黄色い声援が響く中でキンジとジャン
又は

一番後ろの席に座りながらこう言った。

「それにしても本当に人気者だな、小夜鳴先生は。」

「……」

「どうしたジャンヌ？」

「いや……何だか嫌な気配がしてな。」

「？」

キンジはジャンヌの言葉を聞いて何だと思っていると……
後ろから声が聞こえた。

「ダーリン♪」

理子がそう言ってキンジの左隣（右はジャンヌ）が座るとキンジが
こう言った。

「何でここに座るんだよ。」

「良いじゃん良いじゃん、そう言わないでさあ。」

そう言っている……今回のテストでもあるDVDが流れ始めた
のだ仕方なくそっちの方に視線を移そうとすると……ムニユンと柔
らかい物体が

キンジの左腕に当たった感触がしたので何だと思っていると……

「……………(*^▽^*)」

理子がキンジに抱き着いていたので……足を思いっ切り踏んだ。

「!!!」

理子はギャアアアアアアと言う表情をしながらキンジに離れる
と・・・

地に戻ったのか小さな声で声色変えてこう言った。

「手前、良い度胸してるじゃねえか!？」

「こっちは真剣に勉強してるんだからお前も離れろ。」

「け！つまらない奴だぜ。まあ良いさ、お前とは話しなけりやあ
いけねえからな。」

そう言っつて少し離れる理子を見てジャンヌに向けてこう聞いた。

「何だったんだアイツは？」

「・・・さあな。」

ジャンヌはそう言っつて互いにテストを再開した。

因みに妨害があった部分はジャンヌが予め作ったカンニングペー
パーを

使わして貰った。

「雨か。」

「降っているな。」

キンジとジャンヌは互いにそう言っつて空を眺めていると・・・松葉
がやってきてこう聞いた。

「あんた達傘ないの？」

そう聞くと2人はそうだと頷いてどうするかと言っていると松葉
がこう答えた。

「だったらこっちの傘貸すからあんた達使いなさいよ、私は予備用の傘使うからさ。」

松葉はそう言って鞆から小型の傘を出して大きいほうをキンジとジャンヌに渡すとジャンヌはこう答えた。

「・・・ならば私がそっちの小型を使おう。」

「は?」

「?」

キンジはジャンヌの言葉を聞いて何でと思っっているがジャンヌはこう続けた。

「私は少し離れてやるからな、・・・それにお前はな。」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

松葉はジャンヌにまさかと思っ顔を赤くしているとそれじゃあといっ松葉の傘を取っキンジと松葉の2人は相合傘にさせるようにした。

「・・・一緒に来るか?」

「・・・うん。」

松葉はキンジの言葉に対してそう答えて・・・互いに相合傘で歩いて行った。

「ウウウウウウ・・・泥棒猫くく!!!」

その光景を白雪はハンカチをギリりと口に加えて苦々しく見ていた。

秋葉原へ

秋葉原

またの名を『武偵封じの街』

秋葉原は常に多くの人間でごった返しており銃が使いにくく例え使えたとしても

路地が入り組んでおり犯人の追跡にも四苦八苦するのだ。

そんな中で理子が何を言うのか分からないが自分たちは最初から理子の術中に

嵌っているのではないのかと錯覚しそうになった。

そしてキンジ達はここだなと理子がテストの際に自身の鞆の中に入れていたであろう紙には場所と時間が書かれておりキンジ達は万が一に備えてと言う事で犯罪組織のアジトに突入する時と

同じ動作（本来なら松葉は通信の為いらないのだが）で扉のノブにそつと掴んで互いにこくりと頷いて・・・キンジがそれを開けると目の前に広がるのは・・・。

「(ゴ)主人様、お嬢様、お帰りなさいませー!」

メイド服を着た少女達がキンジ達に向けてそう言って挨拶した。

ここは・・・メイド喫茶なのだ。

何でここなんだよとそう思っているがキンジは別の意味で頭が痛くなりそうであった。

「(何でここなんだよ胸元とか脚とか見えてるし俺帰りてえ。)」

そう思っているが仕方ないだろうな実際。

キンジ達は其の儘彼女達に案内されるがままに奥にある個室に向かって行くと

入った先に広がっていたのは・・・。

「何だこの部屋？」

「理子の趣味みたいよね。」

「・・・落ち着かなさそうですね。」

「目がやられそうだがな。」

キンジ達はそう呟きながらピンクと白を基調とした・・・

少女趣味全開な部屋であったがために項垂れていると・・・

キンジは既にいる人間がいたことに驚いてその人物に向けてこう聞いた。

「何でいるんだアリア？」

「私も理子に呼ばれたからよ。」

ブスツとした表情をしている中でアリアはジャンヌを見てこう言った。

「理子に聞いたけどアンタもなの？ 『司法取引』。」

「まあな、だが私が口にしたのは『ブラド』に言われて拉致した超債の

受け渡し場所と時間、それと協力してくれた裏組織の面々ぐらいだがな。」

「それってママの事も」

「無論喋った。なんなら裁判の時に証人として向かう事も出来るが。」

「・・・分かったわ、取敢えずはね。・・・けどもし何か仕出かすものなら」

「貴様が私に勝てるのか？ 理子にも勝てなかった癖にな。」

「!!」

「おいマテアリア、ここで銃刀類はご法度だぞ！」

キンジがそう言うのとチツと舌打ちしてドカリト座るとキンジ達に向けて

こう言った。

「それにしても遅いわね理子の奴、もしこれが嘘だった数穴よ数穴!!

それに何なのよ外にいたあの胸じゃなくてあの格好！ 幾ら給料が良くても

あれはないわ!!イギリスなら兎に角日本で着るなんて場違いよ!
恥ずかしいわよ!!あたしだったら絶対に着ないわ!!絶対絶対

あんなもの着ない!!」

「何時お前に来て欲しいって頼んだんだ?」

キンジはそれを聞いて誰も聞いていないのになとそう思いながら
こう考えていた。

「何でお前がそう言うんだって言うかお前さつき胸とか言ってい
たよな?

お前のコンプレックスが丸聞こえだぞってそれにあの服をお前が
来ても

精々子供の仮想衣装にしかなんねえよってそれだったらな

あ・・・。」

キンジはそう思いながら松葉とジャンヌをチラリと見て

先ほどの彼女たちの服装を思い出した。

ジャンヌはスタイルはモデル体型で手足はスラリとしているため

間違ひなく似合うだろうなと思ひながら松葉の方は・・・。

「(やばいやばいやばい!松葉は色々とやばい!!)」

むっちりとしているがスタイルは悪くないどころかちゃんとして
おりに

事故とはいえ胸を見てしまったがためにそれが見えるようなタイ
プだと

分かった瞬間にキンジは頭を切り替えようとこう考えた。

「(それにしても何で俺達を呼んだんだ理子の奴は。)」

そう思いながら水を飲んでいると外から・・・声が聞こえた。

「理子様お帰りなさいませ！」

「「「「!!!」」」」

それを聞いてキンジ達は目を見開いて互いに武器を構えると少女達の声が

また聞こえた。

「Σ(。▽。ノ)ノキヤーお久しぶりー!!」

「理子様がデザインされた新しい制服お客様に大好評何ですよー!!」

声から察するに如何やら理子はここではVIPで常連のようである。

キンジがそう思っていると扉が開かれて出てきたのは・・・。

「ごっめーん遅刻しちゃったー!急ぐぞブ〜ン!!」

魔改造したフリルの付いた武偵制服に縞々のタイツ、首には巨大な鈴を付け、

両腕には大量のフィギュアやゲーム等がぎっしり入った袋を

飛行機の真似なのであろう翼の様に広げており袋を提げ乍ら席に座った。

それを見たアリアが大声でこう言った。

「アンタもしかしてそれを買っていたから遅くなったの!？」

「いやあ、限定物とかが色々あってさ。つつい。」

そう言いながら理子は近くにいるメイドに向けて注文した。

「理子は何時ものパフェとイチゴオレ!キー君と天草君とカイズマ

ス君には

マリアージュ・フレールの春摘ダーズリン。ケーちゃんには私のと同じ奴でそのピンクのは適当に桃マンでも投げつけておいてね!!」
理子は勝手に全員の注文を終えるところでこう言った。

「さてと、食べながら説明するからよく聞いておいてね。」

「「「「「」」」」」」

それを聞いて一体何なんだとそう思っていると理子は・・・
とんでもない事を口にした。

「皆で理子と一緒に泥棒して欲しいんだよねえく。」

「「「「「」」」」」」ハイ?.....」

盗みについて。

「理子・・・お前何言ってるのか分かってんのか・・・」

「うん知ってるよ！その為にここで待ち合わせにしたんじゃない!!」

武偵校の近くの店だと怪しまれるからと何の悪びれも無しでそう言いながら

パフエを食べているのを見てアリアは大声でこう言った。

「ふざけないわよ！リュパン家の人間と食事しているだけでも恥なのに」

ここに来て盗みを手伝えだなんて末代までの恥ヨ不祥事よ！そんなの乗る訳には」

「乗る乗らない以前に手前はあたしに協力しないなら手前の母親の裁判の際に

証人として立たねえぞ。」

其れでも良いのかと聞くと理子はこう続けた。

「其れに手前はあたしに負けてる、既にリュパン家がオルメス家よりも

上の立ち位置にあるって事も忘れて貰っちゃあ困るぜ。」

「ぐぬぬぬ!!」

アリアはそれを聞いて悔しそうに理子を睨みつけていると天草が理子に向けて

こう言った。

「峰さん、彼女をいじめるのはそこまでにしてどうして我々にその様な事を依頼するのですか?」

「もしかしてシー君って反対?」

神父だからと聞くと天草はこう答えた。

「盗みは悪です、ですが内容次第では協力しなければならぬのもまた悪。」

これこそ主が私に与えられた試練として乗り越えなければならぬのでしたら

挑むのも神父としての務めです。」

そう言つて十字架を刻むと分かつたよと言つて理子はこう続けた。
「ええとさあ、他の皆は？」

そう聞いた。

カイズマス

「俺はキンジがやると言うなら乗る、それに俺の役目は皆を目的地にさせるのが

仕事だ。依頼されたならどんなブツでも運ぶのが俺の仕事だ。」

「いやいや運び屋みたいな仕事じゃないから。」

松葉

「アタシも大体は後方支援が主立っているしキンジがやるつて言うならやるわ。」

まあ、アンタに対しては色々と言いたいことが幾つかあるけど今はその言葉は飲み込んでおくわ。」

ジャンヌ

「私も全員と同じだ、遠山キンジの意見に私も従う。」

「へえ、あのジャンヌがそこ迄他人に信頼しているなんて

どういう心境の変化？」

理子が面白がつてそう聞くとジャンヌは少し微笑んでこう言った。

「そうだなあ、一つ言うならば・・・面白そうだからかな？」

そしてキンジ

「それでキー君は？」

理子がそう聞くとキンジは暫くしてこう答えた。

「俺の聞きたいことに答えて貰う、それが条件だ。報酬については別途で話したい。」

「オツケー、キー君が聞きたいことつて・・・お兄さんについてでしょ？」

「！！！！」

それを聞いて松葉達は目を思いつきり見開いて驚いていた。

キンジの兄が生きているという情報を理子が何故持っているんだと

そう思っているとキンジは重く口を開いてこう答えた。

「・・・分かった、受けよう。」

「うんうん、素直な子は理子大歓迎だよ〜!!」

理子がそう言うのとアリアを見てニタリと悪い笑みを浮かべてこう言った。

「それで、アリアはどうするのかなあ〜?」

そう聞くとアリアは滅茶苦茶怒り心頭な表情を浮かべながらこう言った。

「・・・分かったわよ。」

「え?・・・なあに聞こえなく〜い?」

理子は耳元に手を置くような感じで意地悪そうにそう聞くとアリアは等々・・・こう答えた。

「分かった分かった分かりました!!!アンタの計画に従うわよー!!」

「よく言えましたー♪」

理子はそれを聞いて本当に良い笑顔でそういうとそれじゃあねと紙袋からノートパソコンを開いて起動させつつテーブルに置くとジャンヌが

理子に向けてこう聞いた。

「それで理子、作戦はどんな風にするのだ?そこについても

説明してもらおうぞ。」

「そっちについても問題ないよ先生!理子りんは何時だって作戦は完璧に

考えるからねえ。」

そう言っているとキンジがジャンヌに向けてこう言った。

「そういえばお前の組織って全員が教え合ってたよな?」

「そうだ、理子が私に教えたのは作戦の立て方と変装術だ。」

そして私は機械を使った変成術を理子から教わっている。」

そう言っていると理子はこう説明した。

「横浜郊外にある『紅鳴館』、見た目は只の洋館で地上3階、地下1階の

計四階建ての家なんだけどこれが鉄壁の要塞何だ。」

そう言いながらキンジ達はその館にある詳細な見取り図と仕掛けられた

数多の防犯装置についての資料がまとめられており少しタスクバーを触ってみると侵入経路に逃走手順などが想定されるケースごとに日時に応じて

事細やかにしていることに驚くとジャンヌは理子に向けてこう聞いた。

「それで理子、これは何時からだ？」

「え？先週から。」

「合格点だな。」

「やったあ!!」

理子は喜んでいるようであるがこつちからすれば驚きだ、何せこんな計画本来ならば半年は確実なのだ。

そして理子はこう続けた。

「理子のお宝はこの地下金庫にあるはずなんだけど・・・」

理子一人じゃ無理だから息の合った優秀な2人組と誘い役、それと外部からの連絡役が必要なんだけどそれにヒットできるのが

キー君達って事。」

「確かに我々でしたら息も合いますしそれなりに対応できますね。」

天草がそう言う Aria はこう聞いた。

「ねえ、理子。一つ聞いても良い？」

「良いよ〜。」

理子はどうしたのと聞くと Aria はこう答えた。

『ブラド』、『イー・ウー』のNo.2はここにいるって本当?」

涙流して

『ブラド』、『イ・ウー』のNo.2はここにいてるって本当?」
アリアは理子に向けてそう聞くとアリアはこう続けた。

「いたら逮捕しても構わないわよね?知っていると思うけどブラドは

あんだ達と同じで一緒にママを冤罪で逮捕させた仇の一人でもあるんだからね。」

そう言うが理子はこう答えた。

「あー、それムリ。ブラドはここ何十年も『紅鳴館』に帰ったつて言う

報告がないしあそこには管理人さんと同居している

ハウスキーパーしかいないらしくてそもそも管理人さんも殆ど不在なもんだから

正体が掴めないつて言うよりもその前にお前じゃブラドに勝とうなんて

無理に決まってるだろう?」

「無理ですつて!アタシの嫌いな言葉はね

『無理』、『面倒くさい』、『だるい』なのよ!!」

「んなもん知った事ねえよ、戦いつていうのはな。勝った奴が正義、負ければ悪、それが自然のルールだ。人間はそれを知識と理性でカバーして今の世界を作るが結局アタシらは獣と変わらねえ。単に武器があるつてだけで

本性はそんなもんなんだよ!アタシに負けた癖にブラドを逮捕だなんて

そんなもん一生かけても無理なんだよ!」

「無理じゃないわ!」

「無理だ!世の中な、無理つて分かって初めて大人として前に進めるんだよ!!」

成功する奴なんかそれでこそ天性の才能を最大限に

発揮できる奴だけなんだよ!!」

「やってみないと分からないじゃない！」

「やらなくても分かるわ！手前なんてブラドに手も足も出ずに負けるのが

目に見えてるつつうの!!」

アリアと理子は言い争っているが確かに理子の方が言い分は正しい。

無理と言うのは人間が持つ諦めでもあるがそれと同時に自身の限界を見極め

それを中心に来ることを見つけてそれを学び進んでいくのが人間である。

アリアの場合は未だ子供が意地を張って頑張っているように見えるが

それでは何時か自身の限界を見極めてしまった時に立ち直れなくなることも必須だ。

これ迄失敗などしたことすらなくたった一人で全てを成し遂げてしまった事から

自己中心的な発想をするようになったアリアが折れれば崩れ落ちるのが

目に見えている。

そんな中に於いてキンジは話を変えようと思って理子に向けてこ

う聞いた。

「それで、お前は俺達に何を盗んで欲しいんだ？」

そう聞いた。

と言うよりもアリアの機嫌を良くさせるだけではなく対象が分か

らないと

何を盗れば良いのか皆目見当がつかないのだ。

すると理子は声のトーンを1トーン下げたこう言った。

「・・・理子のお母様がくれた、十字架」

「あんたって本当どういう神経してるの!?!」

アリアは等々怒り狂って机に乗り上げて理子の胸倉掴もうとし

て・・・

天草によって腕を掴まれた。

「落ち着いてくださいって言うのは無理かもしれませんが遠山君、

彼女をここから遠ざけてくれませんか？ここからは私が一対一で話し合っ

て見ます。」

「・・・出来るのか？」

「私は神父ですから。」

「いい加減に放しなさいよこの神父擬き!!」

「お前は少し落ち着け!!」

「アンタは黙ってなさい!!」

「むぐぐ!?!」

キンジはそう言ってアリアの両腕を抑えてジャンヌが両足を抑えて口を

松葉がポケットからハンカチを取り出して口に突っ込んで其の儘退室した。

「すみません、後ハーブティーを2つ。」

「かしこまりました、ご主人様。」

天草はメイドに向けてそう言った後にメイドがケーキと一緒に持ってきたので

どうしてですかと聞くとメイドはこう答えた。

「これは理子様のお友達にと思って私達が作ったので遠慮しなくて食べてください。」

お土産分のありますし何時もお世話になっているのでと言って立ち去って行くと天草は取敢えずはと言って理子に向けてこう聞いた。

「峰さん、貴方は先ほど母親から貰ったと言っています貴方のご両親は？」

「・・・2人とも理子8つだった時に。」

「・・・そうでしたか。」

「アリアが羨ましいよ、アクリル板越しでも・・・ほんの少しだししても

会えるんだから。けど理子には誰もいない・・・たった一人なんだ。」

そう言うのと理子はこう続けた。

「理子を取り返して欲しいって言った十字架は・・・」

理子が5つの誕生日に貰った大切なものなんだ。それでこそ命の次に

大切なもだった・・・なのに・・・ブラドは私からそれを取り上げた・・・

悔しくって悔しくって堪らなかった・・・逃げ出した時だって本当なら

あの十字架も」

理子は涙を流しながらそう言う・・・天草は理子を優しく抱きしめて

こう言った。

「へ・・・」

「辛かったのですよね？」

「・・・」

「悔しかった、悲しかった、そして何よりも貴方は最初にあった時から

自分を隠しているような感じで笑っていました。」

「……理子の事知らないくせに」

「ええ知りませんよ、ですがこれだけは言えます。」

「？」

「泣いてください。」

「!!」

「泣いて怒って笑って悲しんでそう言うのが人なんです、だから今だけは……本当の貴方に……自分であった時の貴方に戻っても誰も責めませんよ。」

天草がそう言うのと理子は静かにこう呟いた。

「……お前ってアタシの事なんでもお見通しなんだな。」

「神父ですから。」

「答えになってねえよ……だったら一つ良いか？」

「ハイ。」

「……此の儘でいいから……此の儘で良いからさ……。」

「泣かせて・・・」

「良いですよ。」

「!!!」

「理子はそれを聞いてまるで今まで我慢していた何か壊れたかのようには」

泣き始めた。

今まで一人の時でしか出なかった涙を誰かの前で流している。

それはまるで・・・小さな幼子の様な感じであった。

説明

「成程な、それでだが。」

「ええ、潜入は遠山君と神崎さんとジャンヌさんにするそうです。」

「私達は？」

「我々は作戦終了時に遠山君を所定の場所に送り届ける事で万が一に備えて」

「護衛として配置されるそうです。」

あの後天草は理子から詳しい説明と配置について秋葉にあるファミレスで（ジャンヌは初めてであったことからドリンクバーの時点で説明が必要であったが）

簡単に説明するとキンジがこう言った。

「だけど大丈夫なのか？ハウスキーパーがいるんだろう？」

すると天草はこう答えた。

「ええ、ですが彼らは如何やら所要で休暇届を提出しており」

急遽2人程募集しているそうなんです。如何やら峰さんは派遣会社の営業を装って

接触、データを改竄して3人に増やして採用させたそうですよ。」

「・・・油断も何もあったものじゃねえな。」

キンジはそれを聞いて頭を抱えている中でキンジはジャンヌに向けてこう聞いた。

「そういえば聞きたいんだが一つ良いかジャンヌ？」

「何だ？」

「ブラドと理子の関係って一体何なんだ？」

「私も気になりますねエ、大事な物を奪われるという事は彼女とそのブラドとは近い関係にあるそうですし。」

キンジの言葉を聞いて天草もそれに続いて聞くとジャンヌは暫く考えて・・・

こう答えた。

「・・・分かった、だがあまり聞いて気持ちの良いものではないからそれを承知しておいてくれ。」

ジャンヌはそう言いながらレモンティーを飲んで初めにこう言った。

「自由の為だ。」

「自由?」

それを聞いてキンジ達は何でまたとそう思っているとジャンヌはこう説明した。

「理子は少女・・・8歳の頃に監禁されて育ったのだ。」

「!!!」

それを聞いて全員が目を見開いて驚くがジャンヌは更にこう続けた。

「理子の体系が小柄なのはその影響だ、当時は碌に食べ物を食べさせてくれなかつたらしくてな。服装もそうだ、衣服に足しての

あの強い拘りや執着心は当時理子が纏っていたのはボロ布だったからだ。」

「ちよつと待てよ!リユパン家は怪盗だが高名な一族だったはずだろ!」

「ああ、何度も没落しては必ず復活するという別名『不死鳥貴族』とも

呼ばれているようであったがご両親は理子の死後没落してな、使用人たちは散り散りになってこれまで盗んだ財宝は全て四方に散らばった。

最近聞いた話だが母親の形見でもある『アリンジャー』を

取り返したようだがな。」

「そして彼女はどちらに?」

天草がそう聞くとジャンヌはこう答えた。

「そして理子は親せきと騙ったブラドによってルーマニアに渡って囚われて

監禁された。大体だが6年と言った処だ。」

「そんなに・・・!!」

松葉はそれを聞いて口を両手で塞いでいた。

そんな長期間に何かされるなど女性としても最悪なものだからだ。
「それがブラド、またの名を『無限罪のブラド』と呼ばれている……

・・・『鬼』だ。」

「『ハイ?』」

それを聞いて天草を除いたキンジ達は何寝ぼけたこと言っているんだと

そう思っているがジャンヌは更にこう続けた。

「今から三代前の双子のジャンヌダルクと初代アルセーヌ・リュパンと組んで戦って引き分けたと先祖からの記録でそう書かれていた。更にこう続けていた、

奴は銀の弾丸をモノとせず剣で貫いても木の杭で打ちぬいても死ななかつたそうだ。」

「あの、ジャンヌさん。もしかして貴方が言っている『鬼』とは……『吸血鬼（ヴァンパイア）』ですか?」

「そうだ。日本では『キューケツキ』と言うのだな、覚えよう。」
ジャンヌはそう言うところ続けた。

「何故だかわからないがブラドは理子に異常なほど固執しているな、

檻から自力で逃亡した理子を追って『イ・ウー』に現れて理子はブ

ラドと戦って

負けたのだが成長著しかった理子を見てこう提案したそうだ。」

「提案？」

カイズマスが其れは何だと聞くとジャンヌはこう答えた。

「『理子が初代リユパンを超える存在に迄成長してそれを証明できれば
もう手出しはしない』との提案だ。」

「だから遠山君をアリアさんのパートナーに仕立て上げようとして裏工作していたのですね。」

合点がいきましたと天草がそう呟くと松葉はこう返した。

「こつちからしたらたまたまったものじゃないわ！酷い目に遭ったんだから!!」

そう言うくとキンジはジャンヌに向けてこう聞いた。

「奴が吸血鬼だとして銀の弾丸も聞かねえとなるとどう戦ったらいいんだ？」

そう聞くとむと言つてジャンヌはこう答えた。

「奴は昔バチカン市国から送り込まれた聖騎士の秘術によつて自身の弱点に

一生消すことが出来ない目の文様が描かれたのだ。」

「其れって何処か分かるか？」

キンジがそう聞くとジャンヌはこう答えた。

「私が知っているのは3つ、左右の肩と右脇腹、後は何処か知っているのは『イ・ウー』のリーダーだけだ。」

「成程な、取敢えずは分かったが潜入する際に何か注意事項とかなかったか？」

キンジが天草に向けてそう聞くと天草はこう答えた。

「ええ、あるのとすれば一つですのでジャンヌさんに後で部屋に来て欲しいと

言っていましたね。アリアさんに至ってはもう解決済みだからと言っていますので。」

「其れって一体何なんだ？」

キンジがそう聞くと天草はこう答えた。

「先ほど僕らが行っていたメイドカフェの服を着せる為に寸法測りたいそうですよ？」

「「へ？」」

キンジ達はそれを聞いてジャンヌを見ると当の本人は・・・。

「ナナナナナナナ・・・。／／／／／／／／／／／／」
顔を赤面にして慌てていた。

作戦準備

「イヤッホー！よく来たねジャンヌってキー君も来てたんだね！」
「お前が何するか分からねえから来たんだよ。」

キンジは理子に向けてそう言うのと理子はジャンヌに向けてこう言った。

「さあさあさあ、ジャンヌも入って入って！早く早く!!」

そう言いながら理子は素早くジャンヌの真後ろにすつと入って後ろから押しながら入っていった。

「さてとジャンヌ、まずは寸法から図るから服脱いで？」

「ハアアアアアアアアア!」

キンジとジャンヌはそれを聞いて驚いたが理子はこう続けた。

「だってアリアの場合はあの子寸胴みたいなスタイルだから大体見当つくけど」

ジャンヌみたいに高身長だとぶつちやけ3サイズ測らないと分からないじゃん。」

「だったら他の連中にすればいいだろう!?女子ならば松葉とか」

「駄目、ケーちゃんもキー君の盗みの時のサポートをさせるんだから戦闘も出来るジャンヌがうってつけだもん!!」

さあさあさあ、早く早くとジャンヌに急かすとジャンヌはこう言った。

「ならば遠山に見られない様に」

「え？見られたいの??個室でやるんだけど」

「.....」

ジャンヌはそれを聞いて目を丸くした後の自身が口走ったことに対して

真っ赤になり始めているので理子は其の儘ジャンヌの背中を押して部屋に入れると

キンジに向けてこう言った。

「それじゃあキー君ジャンヌ借りるけど・・・覗かないでね♪」

「誰が覗くか!!」

キンジの怒声を聞いてもそんなじゃあねえと言いながら部屋に入っていた。

数分後。

何やらガタガタと音がするのだがキンジは座って待っていると……部屋の扉が開いた。

「それじゃあキー君、ジャンヌのメイド姿ご披露!!」
そう言っただけで現れたジャンヌは……別人であった。

確かにモデルみたいなスタイルをしたジャンヌだがそれがメイド服姿であっても……違和感がなかった。

頭に付けられているレースとフリルを重ねたカチューシャは二段構造になっており豪華な代物である。

黒いワンピースの胸元はざっくりと開かれておりそこには何段も重ねた

純白のフリルが露出していた。

更にエプロンではミニスカートの前面上部までは白いカクテルエプロンで短く覆っており対照的にバックの帯は長く、尻の上で大きく蝶々結びされていた。

短いスカートの中からふわっと広げる4, 5層の白いペチコートが幾重にも

重なっていることからまるでカーネーションにも見えた。

それを見たキンジはポカーンとしている中でジャンヌがこう聞いた。

「に……似合うか?」

そう聞いてジャンヌはこう続けた。

「別に本心で言うが良い、似合わないのならそれで良いのだ。

昔から背丈が高くて私みたいな女には似合うものではない」

「いや悪い！どっちかと言うと見惚れていたから。」

「見惚れて!?何社交辞令を」

「イヤ本当に綺麗だなあつて思つてな。」

「／／／／／／／／／」

ジャンヌはそれを聞いて真っ赤になっている中で理子がこう言った。

「そんじゃあジャンヌ！キー君に向かって『お帰りなさいませご主人様。』つて言つてみて〜。」

「!!」

それを聞いて2人は驚くが理子はさあさあさと攻めるのでジャンヌは

小さな声で分かつたと言つてこう言った。

「お、お、お、お、お帰りにさいませご主人様。」

真っ赤な顔でそういうのがキンジはおおとそう言つて互いに・・・気まずい

状況となったが理子は後とは言つてこう続けた。

「あとはキー君の執事姿と作戦の後詰だねエ。集合場所はモノレール駅前で

6月13日から二週間の間『紅鳴館』で活動開始、目的は理子の十
字架！

皆で頑張るぞー!!」

えいえいおーと言つてはいるが正直な所・・・大丈夫なのかとそう
思いたい。

そして当日。

あの後アリアの場合は理子における集中特訓をさせられて当面は大丈夫だろうと思っっている。

そして今回の潜入作戦期間中武偵校生徒としては欠席する訳なのだ。理子が既に『民間の委託業務を通じたチームワーク訓練』と称して書類をマスターズに

提出すると・・・簡単に通ってしまった。

完全に手抜き感ありありだがまあ通っただけまだマシだ、何せ素直に

盗みを働くなんて書いた日にはその日が命日となるであろう。

ここでフォーメーションであるが潜入チームはキンジ、ジャンヌ、アリア。

理子は遠隔で連絡を取って作戦立案、松葉はそのサポート、天草は必要な機材の調達、カイズマスがそれらの輸送と意外にベストなポジションであった。

そんな中で淡いシフォンピンクのワンピースを着ているアリアが現れた瞬間に

キンジに持たせようとするジャンヌがこう言った。

「アリア、自分の荷物は自分で持て。他人に無言で押し付けるのは礼儀がなっていないぞ。」

「何ですって!!」

「私は本当の事を言っただけだ、それともそれが『オルメス』の流儀か?」

「!!!」

アリアはそれを聞いて正に怨敵を睨むかのような目つきをしていると・・・

声が聞こえた。

「キー君、アリア、ジャンヌ、チヨリーツス！」

そう言っ
て現れた人間を見て……キンジは目を見開いて驚いてこ
う呟いた。

「か……カナ。」

『紅鳴館』にいざ出発

「理子・・・それは一体何なんだ。」

キンジは理子の変装している姿に内心怒っていた。

カナはキンジにとつて・・・大切な存在なのだ。

すると理子はこう答えた。

「くふふ、理子ってブラドに顔割られてるでしょう？防犯カメラなんかには

映った日には理子りんヤバいからさあ、変装したの。」

「だったら・・・だったら他の顔になればよ！」

何で寄りにもよつてカナなんだ!!」

「カナちゃんが理子りんが知っている中で世界一の美人だからだよ？」

それにキー君にとって大切な人だからさ。理子りんキー君の好きな人のお顔で

応援しようと思っただけど怒った・・・!!」

理子にはこやかにそう言つて首を傾げた瞬間に・・・首筋に『鎧竜剣』が

寸でのところで止まっていた。

そしてキンジは・・・女性相手に対して何もしてはいけないと言う家訓すら

知ったことないと言つた・・・憤怒を通り越して冷徹になった目つきで

こう言つた。

「理子」

「!!」

「今回は大目に見るが次に俺の大切な場所にずかずかと土足で踏みつけるんなら・・・それ相応の覚悟を持ってよ。」

「ええと・・・例えば？」

理子がそう聞くとキンジは理子に向けてこう答えた。

「簡単だ・・・お前の居場所をブラドの住んでいる奴に話して

そこに来させる。」

「!!?」

理子はそれを聞いて突如として顔を青くしてびくびくと震え始めた。

ジャンヌから話を聞いていたが確かにこの言葉は理子にとっては正に恐怖である。

また牢屋に・・・いや、今度はもっと酷い場所に連れて行かれると考えた瞬間に理子は吐きそうな顔つきになった瞬間にキンジは理子に向けて

こう締めくくった。

「分かったか、次やったら俺はお前の大切にしている自由を壊す。

イイナ。」

「わ・・・分かったよ。」

それを聞いて理子は恐怖の表情でそう答えるとキンジは『鎧竜剣』を

鞘に納めるとこう言った。

「それじゃあ行くぞ。」

「あーああ、分かった。」

ジャンヌはそれを聞いて少しびくついたがキンジに同行した。

そしてアリアはキンジの殺気を感じてこう呟いた。

「あれがインケスタのEランク、間違いなくアイツはSランクの・・・アサルトの上級者の殺気ね。」

そう呟きながらついて行くのに対して理子は・・・苦々しい表情でこう呟いた。

「あの野郎・・・何時かコロシテやる!!」

そしてキンジ達は京浜東北線の電車に乗っているとジャンヌがこう聞いた。

「遠山、一つ良いか？」

「何だ？」

「先ほどのカナについてだ。」

「……………」

「貴様にとって彼女は最も大切な存在であることが見て取れた。」

そしてそれを土足で踏み荒らした理子が間違いなく悪いと言う事もまた事実だ。

私は貴様のあの顔を見て理子が悪いと言う事が断定できる。」

「まあそれでアイツが俺に何かしらの意地悪か仕返しがあると考えた方が

良さそう」

「其れはないだろう。」

「？」

「理子はああ見えて真面目で努力家だ、自身を取り戻したい物を他人に頼むと言うのにそれを邪魔立てするともなれば本末転倒だな。其れにだ。」

「？」

「私はお前を知りたい、だからお前を殺させはしないと私が誓おう。」

「……………」

「どういたしましてダナ。」

ジャンヌはキンジの言葉を聞いて笑みを浮かばせてそう答えた。

そしてキンジ達は横浜郊外にある『紅鳴館』に辿り着いたのだが……立地条件最悪じゃねと言いたいほどの家なのだ。

何せ鬱蒼とした森の中で昼なのに薄暗かったのだ。

そして館もまた……不気味と言う言葉が相応しいであろう。

まるでホラーゲームに出てくる『呪いの館』みたいな洋館なのだ。

写真で写っていた時はちゃんとした別荘みたいだったのに

今では見る影すらない。

更に言えばこの禍々しい光景は他にもあった。

周囲を囲む鉄柵はドンヨリトシタ黒雲目掛けて真っ黒な鉄串を空目掛けて

突き上げており更にその内側にはバラでも咲いているのかどうか分からないが

茨の茂みが続いていた。

恐らく屋敷の前半分くらいはあるはずだ。

おまけに今日だけなのかどうかも疑問なのだが薄気味悪い霧がもやっと辺りに流れていた。

止めに蝙蝠が飛んでいった。

「……何よこれ……呪いの館?」

アリアがそう呟くとキンジはこう答えた。

「お前それは言わない様にしていたのに。」

「ただでさえこの状況だ、作戦時には逃走ルートの見直しも必要になりそうだな。」

ジャンヌがそう言って辺りを見回していると……理子は引き攣った笑顔で

インターホン慣らしてこう言った。

「初めまして、正午から面会のご予定を頂いている派遣会社『藻月の労働所』から来た者です。本日よりこちらで家事のお手伝いをさせて

頂きたくハウスキーパーを三人ほど連れて参りました。」

「おい理子マテ、その会社はこの間労働基準法違反で取り潰されたはずだぞ。」

「だからジャン、あそこ小さな会社だから新聞に小さく書かれていなかったから丁度良かったんだよ〜♪」

そう言つて扉が開いてその管理人を見て・・・キンジ達は顔を引きたらせた。

そう、こここの管理人が・・・見知った存在なのだから。

「い、いやー。意外なことになりましたねえ。アハハハツハ。」
小夜鳴先生がそれだからだ。

説明

小夜鳴先生の案内で館に入ったキンジ達がまず目にしたのは色あせた

年代物の旗であろう、狼と槍の紋章の入った旗が飾られていたがアリアはそれを見てビビっていたがキンジ達はある方向を見てこう呟いた。

「そういえばだけど小夜鳴先生の腕何でギブスしているんだ？」

そう聞くとジャンヌがこう答えた。

「聞いた話だが如何やら検査中に女性用の着替え室の窓から狼が入ったらしくてな、それで怪我したと聞く。」

恐らくブラドの関連であろうがなと言うとキンジは更にこう聞いた。

「はあ？ブラドって狼を飼っているのかよ？」

「ああそうだ、奴は世界中に狼を解き放つてそこから情報を

手に入れてるそうだ。」

「・・・某世界中を練り歩いている数字がコードネームのスパイみたいだな。」

そう呟きながらキンジ達はホールに入った。

そしてアリアとジャンヌと理子がソファに腰かけるとキンジは座る場所が無いから立ったまま話を聞くことにした。

然し小夜鳴先生はキンジを見てこう言った。

「遠山君、そんなところで座っていないでってああ、座る所がないよね。」

ちよっと待っててね、今椅子を」

「ああ良いですよ、その前に先生怪我人なんだから座ってて下さい。」

「そうですか・・・それでしたらすみません。」

小夜鳴先生はそう言って座るとキンジはこう聞いた。

「それにしても小夜鳴先生ってこんなに大きなお屋敷に住んでいるんですね？」

正直な所驚きましたよ。」

「いやー、ここは私の家じゃなくて親友の家なんですけど

私って元は研究者でしょう？時々ですけどこの研究施設を借りることが

屢々あつたんですけど彼がこう言ってくれたんですよ、『遠い所から通うとは

お前のやっていることは非効率的だ、俺様は一年の殆どを外出しているんだが

その間に不審者や泥棒とかが入ったりここの管理もあるから暇な時で良いから

管理人でもなっておけ』と言われましてね。

それでここを任せてくれることとなつたんですが・・・

私ってすぐに研究に没頭してしまう癖を持っているのでその間に色々遭って

トラブルに発展してしまいそうですから寧ろハウスキーパーが武偵で

然も君達でしたら寧ろ心置きなく何とかできそうですよ。」

「そうでしたか。」

キンジはそれを聞いて取敢えずは採用できそうだなとそう思っていると

理子が小夜鳴先生に向けてこう聞いた。

「然し私も驚いております。まさか偶然学校の先生と生徒と言う

御関係であられたことにですがこれはご主人様がお戻りになられたら

ちよつとした話のタネになりますますがまあ契約期間中にお戻りになられたのですが

今どちらに？」

理子は小夜鳴先生に向けてそう聞いた。

ブラドがいれば間違いない戦闘に発展（主にエリア）しそうであると同時に

エリアはと言うとそれを聞いて内容次第ではとそう思っていると

小夜鳴先生は

こう答えた。

「いやあ、彼は今とても遠くにおりましてデスネ、正直な所彼が何しているのか知らないんですよ。」

「ええと・・・親しいんですよね?」

「ええ、彼と私はとても親密な関係なんですが直接話したことが無いものでしてだから何時もは録音で聞いているんですよ。」

「(何だそれは?)」

キンジはそれを聞いて何だか謎かけみたいだとそう思っていると

小夜鳴先生はもう片方の手で契約書にサインすると理子が3人に向けて

こう言った。

「それでは私はこれで失礼いたしますが皆さん、

ちゃんと仕事してくださいね。」

特に遠山君がとそう言うときンジはそれを聞いてへいへいとそう答えた。

そして理子が去った後キンジ達は小夜鳴先生について行って2階にある

自分達用の部屋に案内されると小夜鳴先生はこう説明した。

「スミマセンねえ、この館の伝統と言うよりも彼の趣味でして

ハウスキーパーさん達は男女ともに制服を着る様に決まっておられまして

昔仕立ててもらった制服がそれぞれのありましてね、

サイズが合った奴がありましたらそれを着て下さいね。仕事につきましては

前のハウスキーパーさん達が簡単な資料を台所に置いてあると聞いていますので

それ読んでから適当にやってほしいんですよですけどすみません。申し訳ありませんが

私は研究とかで多忙でございまして地下の研究室に籠り気味の生活をしているので皆さんと遊んだりすることが出来る時間があまり

とれませんので

本当にすみませんねエ。」

「いや良いですよ小夜鳴先生、俺達は働かせてもらうんですから遊ぶとか

そういう目的で来たわけじゃないので。まあ、研究に何か壁にぶつかった時は

相談位は乗りますよ？何も出来ないかもしれないかもしれませんが。」

キンジがそう言うのと小夜鳴先生は頭を掻きながら笑ってこう答えた。

「いやあ、そう言ってもらえると嬉しいですよ。もし暇になったら1階の遊戯室にビリヤード台があるんですよ。私も偶にそこ使わせてもらって

リフレッシュしているんでああ、ラシヤは今回に備えて新品な奴に張り直させているので大丈夫ですよ。」

そう言うのとそれではと言って小夜鳴先生は三人に向けてこう言った。

「それじゃあ早速ですが失礼しますね、夕食の時間になりましたら教えてくださいねエ。」

そう言いながら小夜鳴先生は螺旋階段を降りて行って研究室に籠った。

「そんじゃま・・・働きますか。」

「そ・・・そうね。」

「そうだな、先ずはこの館全体の実際の状況を把握しよう。」

三人はそう言うって着替える為に部屋に入っていった。

嵐の晩

そして全員は着替えて（理子が作ったのと同じ奴）それから数日間
は

仕事をしながら館の防犯カメラのタイプや視界の最大角度、館内に
ある防犯設備のチェックや小夜鳴先生の行動パターン（大体は研究施
設に籠っているが食事と

バラの手入れの時だけは外に出ている。）を観察して1週間が経つ
た。

七日目の午後十時半過ぎの女子用の部屋。

「雨か。」

ジャンヌはそう呟きながら外を見ていた。

ゴロゴロと遠くで雷の音が聞こえた。

「これが日本の梅雨というものか、これほど降るとはフランスでも
滅多にないな。」

そう言つてベッドに目を向けるともう一つの方に・・・何か巨大な
物が

包まっているような物が見えたのでジャンヌはそれに向かってこ
う言つた。

「何しているのだ『神崎・H・アリア』？」

「!!」

アリアはそれを聞いてビクツとした様子で少しずつ顔を出すと
ジャンヌを見て

慌てた様子で毛布から出てこう言つた。

「べべべべ別に怖くないんだから！これはたたたたた只の・・・そう
!!

練習よ!!練習!!」

「・・・私は何も言つてはいないぞ?」

「うぎゅ!!」

アリアはそれを聞いてぎくりとした表情になつてると今度は・・・
ピカピカガガンと雷が近くで落ちたのかどうか分からないが近

いことぐらいいは
分かった。

あまりの近さに少しびくりとしたジャンヌはそれを聞いて窓の方に目を向けた。

「近いな、これは荒れる。電波状況も場合によっては最悪になりそうだから

理子との通信は嵐が過ぎる迄待つ・・・またか。」

ジャンヌはアリアが再び布団に包まっているのを見て呆れていると・・・

もしかしてと思って少し笑ってこう聞いた。

「お前もしかして・・・雷が苦手なのか？」

「!!」

それを聞いてびくりとしたアリアを見てジャンヌは成程なあと
言っ

てこう続けた。

「ハハハハアリア！貴様何時も人に対して大見え切っている割には

案外可愛らしく小さな子供みたいな事するんだな!!」

「子供ですってぴやああ!!」

またもや雷がなったのでアリアはまたもや布団に潜り込むとジャンヌは

やれやれと呟いてアリアが潜っている布団毎アリアを抱きしめる

とこう言った。

「大丈夫だアリア、雷が止む迄私がこうしてあげるからその儘でいろ。」

「う~~~~!!」

「・・・歌でも歌うか。」

ジャンヌはそう言って小さな声で歌を歌った。

それは小さい時に母親が歌ってくれた歌。

フランスの子守歌を。

夜12時。

「?電話・・・ジャンヌ??」

キンジは携帯電話の着信を見てそう呟くと電話でこう聞いた。

『キンジ、済まないが来てくれないか?』

「?」

それを聞いて何だと思いつつながら部屋に向かうとそこで目にしたのは。

「何が起きたんだこいつは?」

ジャンヌの腕を掴んで寝ている布団に包まって寝ているエリアがそこにいた。

「何があつたんだお前ら?」

「ああ、実はな・・・」

「雷がな、こいつがねえ。」

困ってしまったているのだがどうするどうすると思えがまとまらなかつた。

何せ互いにこう言う展開は・・・体験したことがないのだ。

キンジは松葉といつも一緒の時があるのだがここ迄親密になった事など

滅多にないために経験値があまりにも少なくジャンヌに至ってはそれすら、異性と話すことなど家族以外になかったがために経験が無いのだ。

その為かこう言う展開はどうするべきかと言う思考が至らない中で3人に・・・電話が鳴った。

「!!」

アリアの携帯は今机の上に置いてあるため・・・って言うよりも熟睡している為取る気配が無い為キンジとジャンヌは互いの携帯を取って・・・背中合わせにして電話を取った。

・・・何だかわからないがまるで初体験をする男女のようである。

因みに相手は理子であったがために対応をどうしようかなどまるつきり考えていなかった。

作戦会議

『ハロハローー!!皆起きてるかなあ!!?って・・・アリアは?』
理子が電話の向こうではっチャケテイルトジャンヌがこう答えた。

「ああ、あいつならば今寝ている。先ほどの嵐で雷が精神的に
疲れているのであろう、ゆっくりと寝ている。」

『イヤちよつと待ってナニソレ今お眠って理子りん怒っちゃうぞー
ー!!』

「喧しいぞ理子、それで定期報告何だが。」
キンジがそう言っているところ続けた。

「アリアによればだがやっぱり地下金庫の中なんだがその十字架は
青くて

ピアスが付いているってやつらしいがそれか?」

『そうーそれだよキー君!!』

「やっぱりあったぜー!!と大声で嬉しながら聞いているがジャン
ヌが

こう続けた。

「だが諸問題が一つ、小夜鳴先生は一日の殆どを地下の研究室で過
ごしている。

古典的だが誰かが小夜鳴先生を誘いだす必要がある。」

ジャンヌがそう言うのと理子はOKと言ってこう締めくくった。

『そっちは内容次第じゃあ理子りんだけじゃなくてジャンヌ達にも
考えて貰うから後宜しく。』

「そんじやと言って電話を切るとキンジはジャンヌに向けてこう
言った。

「それじゃあ俺は寝るわ。」

「ああ、お休み。」

ジャンヌはキンジに向けてそう言って互いに寝た。

潜入10日目

「本日は山形牛の炭火串焼き。本日は柚子胡椒和えでございます。」
キンジはそう言つてドームみたいな銀の蓋を開けて小夜鳴先生に見せるが

これ西洋風だと言うがまさにおままごとそのものとも言えよう。
因みに夕食はアリアとジャンヌが交代制で作っていることとなつているが実際はジャンヌが一人で作っている。

理子による猛特訓によつてオムライス程度ならば作れるようになってはいるが

その他のメニューともなればキッチンで超常現象が起きると言うのだ。

例えるならば何かを焼こうものなら炭になるかダークマターに、
煮込めば沸騰して爆発、切る物ならば包丁がすつ飛んで天井や壁に突き刺さると言つた事が起きてしまう為ジャンヌが担当となつてはいるが

何故串焼きなのかと言うと・・・これは本人の希望なのだ。

置かれていた資料によればこう書かれていた。

『毎晩肉の串焼き・焼き方：表面を軽く炙る程度のレア・微注意：
香辛料に大蒜不可だけしか書かれていなかった。』

これ栄養バランス大丈夫なのかと思いたいほどだ。

何せ野菜0なのだから。

然しそんなの聞く必要は無い為にキンジはそう思いながら串から肉を取り出して食事を始めた。

尚賄としてキンジ達は野菜付きの串焼きにして食べている。

そして夕食後、小夜鳴先生は古い洋物のレコードをレコーダーに入
れて

ノイズ交じりのノクターンを聞いていてこう呟いた。

「F i i B u c u r o s . . . 」

と月光に照らし出された庭の薔薇垣を見ているとアリアがこう聞
いた。

「D o a m n e , t e l a i v o r b a r o m a u a . . . ? 」

F i i B u c u r o s . . . ? (あらっ、

ルーマニア語ですか? 素晴らしい。)

アリアが小夜鳴先生の空になったグラスに赤ワインを注ぎながら
そう言った。

何の言語だと思っているとジャンヌがこう説明してくれた。」

「あれは恐らくルーマニア語だ、ブラドとの会話で

そうなっているかもしれないが今の言語に日本語特有の言葉が無
かったぞ。」

「どういう意味だ? 」

「良いか遠山、本来人間の言葉と言うのは方言と同じで住み慣れた
場所の言語は幾ら直そうと努力しても治らない所がいくつか出てく
るんだ。だが小夜鳴先生にはそれを全く感じられなかった。まる
で・・・。」

キンジはジャンヌの言葉を聞いてまさかかと思っただけでこう反論した。

「おいおいおい待てよ、奴は日本人だぞ? 幾ら何でも国籍を

偽造するにしては奴のお前の言っていた通り方言を基にするなら
何であんなに流暢に・・・!! 」

キンジはまさかと思っているがジャンヌがこう言って終わらせた。

「遠山、これは仮定の話だ。理子には報告するなよ、良いな?」

「・・・分かった。」

キンジはそう言って話しを終わらせると突如小夜鳴先生がアリアに向けて

こう言った。

「17か国語・・・うんぴったりだ!数字的にも合っているし!!」

「何ですか先生?」

突然のことでアリアが呆然としているがそれは今まで話し込んでいた

キンジとジャンヌも何だと思っていると小夜鳴先生がこう答えた。

「君は17か国語話せるらしいね!実は今咲いている薔薇は

私が品種改良した薔薇で丁度17種類の薔薇の長所を集めた優良種なんです・・・名前を未だ付けていなかったのです。丁度良い名前が無くて・・・

ですがあなたの事を聞いてしつくりと来ますよ!!あの薔薇の名前を『アリア』と呼びましょう!!フィー・ブッコロス(素晴らしい)!

フィー・フェリチート(嬉しいですよ)!!アリア!!」

小夜鳴先生はそう言ってキンジ達に向けてこう言った。

「君達もこつちに来て飲みましょう、私が目を瞑っておきますから。」

そう言うと更に三人分のグラスをキンジが持つてくるとそれに赤ワインを注いでこう言った。

「それでは皆様、今日と言う嬉しき日に乾杯!!」

「乾杯。」

そう言って夜が過ぎていった。

作戦会議②

その夜深夜。

『理子、キンジ、ジャンヌ。不味いわ掃除の時に調べただけど…地下倉庫のセキュリティが前情報よりも強化されていたわ。』

『それもそこまでやるかくらいの嚴重さよ。物理的に鍵は南京錠と通常の鍵に加えて磁気カードキー、指紋・声紋・網膜キー、室内の赤外線センサーもだけど感圧床まであるわよ。』

『何じゃそりゃ!?!』

『完全に我々対策だな、恐らく小夜鳴先生は我々の事をブラドに教えて』

『それでブラドが対応策を小夜鳴先生に教えたのであろうな。自分の身の安全も』

兼ねて』

『アリア、キンジ、ジャンヌの順でそう言っているがキンジは頭を悩ませていた。』

『何せそんなセキュリティの高さなど米軍の機密書類保持に使われる』

『金庫よりも嚴重だからだ。』

『鍵の嚴重さで普通なら諦めてしまうのに更に赤外線ですれをクリアしたとしても』

『感圧床を踏めば警報が鳴って終わり。』

『たかが十字架一つだけの為にここ迄嚴重に隠すあたりブラドが何故そこ迄するのか疑問が残るが。』

『すると理子がそれを聞いてこう言った。』

『よし、そんじゃあプランC21で行くかア。キー君、アリア、ジャンヌ、何にも心配いらなからねえ?どれだけ嚴重な金庫も理子にかかれば』

『そんなものお茶の子さいさいで絶対にお持ち帰りなのだあ!!』

『…ハイテンションだなこいつ。』

『大方こいつ夜型何でしょう?普通こんなに元気じゃないわよ…』

そう聞くとアリアはこう答えた。

『彼は研究熱心だわ、おびき出したと仮定してもすぐ研究室のある地下室に戻りたがると思うわ。』

『然もアイツも理子と同じ夜型だぜ？いつ寝ているのか全く分からん。』

何の研究をしているんだと聞くとアリアはこう答えた。

『此間ちよつとお喋りした時に聞いてみたけど・・・何か遺伝子工学と

品種改良って言っていたわ。』

『それってあの先生の役職その儘ね。』

『遠山君、神崎さん、先生を何分ほど迄地下から遠ざけられますかね？』

天草がそう聞くとアリアはこう答えた。

『普段の休憩時間を考えて・・・10分ね。』

『10分・・・うゝん、最低でも15分欲しいけどアリア色気ないし。』

『何ですってー!!』

アリアがそれを聞いて怒っていると理子は慌ててこう言った。

『そんじゃあそつちは理子が頑張るから堕ちまーす!!』

そう言つて理子が切れたのを聞いてジャンヌがこう呟いた。

『遠山、10分〜15分。其れまでに出来ることをやっておこう、私も手伝う。』

『済まないジャンヌ。』

『平気だこれくらい。』

ジャンヌはそう言つて切るぞと言つて切った後キンジも電話を切つて寝た。

作戦決行

そして最終日の午後5時。

キンジ達の契約終了1時間前に作戦が決行された。

打ち合わせ通りにエリアが小夜鳴先生に例の薔薇について聞いたと言う

口実を作らせておびき出すことに成功したことをジャンヌが通信で告げた。

『こちら犬、ターゲットは猫の誘いに応じた。』

「了解、こちら鼠。何時でも準備できてるぞ。」

キンジはそう言いながらアサルト時代によく来ていた特殊部隊用の装備を

身に着けていた。

これはカイズマスが定期的（宅配業者に成りすまして）に持って来てくれた

装備品でオープンフィンガーグローブ、赤外線ゴーグル、

ケブラー繊維のポーチ付きベストである。

そしてキンジは潜伏期間の間にコツコツ掘っていたトンネルの蓋にしていた

遊戯室のビリヤード台の床下を開いて中継器代わりになっている携帯電話から

インカムで音声が行くかテストした。

「聞こえるか理子？これから土竜が畑に入る。」

『よく聞こえますよー？キー君。ここからはケーちゃんの言う事よく聞いて』

対応してね♪』

「分かった、松葉。そっちはどうだ？」

そう聞いて向こうにいる松葉はこう答えた。

『問題ないわよ、今そっちのセキュリティシステムに侵入したわ。』

合図と同時に赤外線センサーを消すから。』

「分かった・・・出来れば感圧床も消して欲しいな。」

『無茶言わないですよ！いきなり追加の防犯システムが加わったのよ!?』

赤外線センサー止めるだけありがたく思いなさいよね!!』

「ああ分かった分かった、これが終わったら夏休みに秋葉原で何か奢ってやるから大人しくしてくれ。」

『良いわ！約束ヨ!!良いわね!!』

松葉はそれを聞いて通信を切るとキンジはこう呟いた。

「・・・マジで金卸さないとな。」

そう言いながらトンネルの中に入っていった。

「こちらキンジ、土竜は蝙蝠になった。」

キンジは小声でインカムを通して松葉に通信していた。

兎にも角にも短時間でターゲットのブーツを手に入れなければなら
ないため

ある意味大胆な方法を命令してきたのだ。

その名は『モグラ・コウモリ（モール・バット）』

先ずは地上からトンネルを通って穴を伝って金庫室まで行って

その天井から逆さぶりの状態で手に入れると言う計画なのだ。

感圧床を考慮した計画で元々赤外線センサーしかないと高を括っ
ていた為

この計画にしたのだ。

そして金庫室の天井に着くとキンジはその事を松葉に伝えると・・・

部屋の中で赤外線センサー用のケーブルを発見したジャンヌとそのデータを貰った松葉の

2人掛かりでセンサーをストップさせた。

これはもし松葉の方でトラッキングされたとしても

ジャンヌがサポートしてくれるためある意味良い布陣なのである。

そしてそれを聞いたジャンヌと松葉が同時にハッキングして

監視カメラのデータを偽装して赤外線センサーを止めた。

『こちら梟、赤い鉄条網は溶けてなくなつたわ。』

『こちら犬、蝙蝠は幽霊と変わった。』

松葉とジャンヌの言葉を聞いてキンジはローブを引っかけて下まで降りて

陳列棚の上に無造作で置かれている十字架を奪い取って懐から

本物そっくりに偽装した十字架を寸分違わぬ位置に置いた後

キンジは急いでローブを伝って天井に戻るとジャンヌから通信が来た。

『こちら犬、ターゲットが地下に戻るがそちらは？』

『こちら幽霊、目的は達成。帰還する。』

それを聞いてキンジは天井に蓋をして去って行った。

「「ありがとうございます。」」

「いえいえ、こちらこそ助かりましたよ。また来てくださいな。」

キンジ達が武偵制服姿で挨拶すると小夜鳴先生はてきぱきと挨拶して

また地下室に戻って行つた。

そしてキンジ達はカイズマスの運転で理子がいるであろう横浜駅から程近い

横浜ランドマークタワーに向かう道中で天草が十字架を見てこう言った。

「これがその十字架ですか。」

そう言つてまじまじと見ていると天草はキンジに向けてこう言つた。

「遠山君、この十字架を見てどう思いましたか？」

「?・・・見た感じ変わった奴だなとは思つてはいるな・・・それが??」

どうしたんだと聞くと天草はこう答えた。

「これに使われている金属・・・何なんでしょうねと思ひまして。」

「・・・確かに、青い十字架なんて普通ないもんな。」

キンジはそれを聞いてそう答えると天草は十字架をキンジに返してこう言つた。

「遠山君、『鎧竜剣』を持つてきました。」

「サンキューな、それにしてもこれ・・・入用だな。」

「ええ、我々は嘗て彼女を敵と認識して戦いましたからね。」

万が一に備えての対策です。」

そして私もと言つて天草はある刀を出した。

それを見てキンジは・・・背筋がぞわつとするような感覚に襲われるような感じでこう聞いた。

「天草、何だその刀は?」

そう聞くと天草はこう答えた。

「これは私の先祖が使つていた刀で妖刀なんです、

理子さんが何もしない事に越したことはないのですがね。それとジャンヌさんの例のネックレスも持つてきました。・・・

何か嫌な予感がするもので。」

天草はそう言いながら空を見上げた。

今にも雨が降りそうな・・・そんな天気である。

受け取り場所にテ

キンジ達はそれからみなとみらい21の中核でもあるオフィスビルに

向かって行った。

これは今回の仕事で分かった事であるが理子は台場のバスジャック以外では

こうやって近代的なホテルやビルに拠点を構えて陣取っているよ
うだ。

十字架の受け渡し場所は屋上と言われているが

キンジは万が一に備えてと言う意味でジャンヌにある事を頼んでいたのだ。

それが・・・これ。

「遠山、これが例の物だが本当に良いのか？」

「ああ、前に俺達は酷い目にあつたからな。これで・・・

何とかなるって訳じゃねえがないよりはましだ。」

そう言つてジャンヌから受け取つたのは青い十字架の偽物である。

万が一、理子が裏切つて敵対した時に備えての隠し玉であるが

泥棒稼業が本職でもある理子からすればこんな偽物ちやつちいい
かもしれないが

あるだけましと思えばなと思うしかないと思つていた。

キンジ達は其の儘武器を構え乍ら屋上に向かつて行き屋上のヘリ
ポートに着いたがこの時空は暗雲であり今でも降りそうな勢いな
のだ。

すると・・・

「キーくウーん！」

理子が駆け寄ってきたのでキンジは少し遠くであるが胸元からそれを見せるように出してこう言った。

「約束だ、お望みの物だ。こつちの要件も満たしてもらおうぞ。」

「分かっているよキー君。プレゼントはリボンの中にあるから解いて」

「駄目だ、今までお前は嘘と本当を混ぜ込んでやっていたから証明する為に」

自分でそのリボン解いてもらう。」

「ちえー、皆して理子りん虐めるー！」

「ウソ泣きは良いから早く出せ。」

キンジの言葉を聞いてハイハイとそう言いながらリボンを解くと中からUSBメモリが出てきたのだ。

「これだよ、この中にアリアとキー君が欲しい情報が入っているんだよ♪」

「よし、天草悪いが。」

「分かっています、ですが万が一の時は」

「ああ、確実に倒す。」

キンジはそう言って本物を見せた十字架の手中にある

偽物の十字架とすり替えさせて天草に渡して理子と交換させた。

「やったー！それじゃあ理子りんもう・・・皆用無しって事で良いよな!!」

理子はそう言ってワルサーP99を天草の頭に狙おうとした次の瞬間に

天草は懐からナイフを取り出して理子から離れた瞬間に全員が武器を構えた。

「やっぱりそう来たな理子！」

「当たり前だろうが遠山キンジ！約束の物を偽物とすり替えやがって

契約違反だろうが!!」

「当たり前だろうが！手前は今までそうやって来たんだからお相子だろうが！」

キンジはそう言って『鎧竜剣』を構えると理子はキンジに向けてこう聞いた。

「なあ遠山キンジよ、『繁殖用雌犬（ブルード・ビッチ）』って言葉聞いたことあるか？」

「・・・ナンダそれは？」

キンジは聞いたことが無かったのでそう答えると松葉がこう続けた。

「聞いたことあるわ、腐った肉と泥水しか与えなくて狭い檻の中で人気の犬種を大量に殖やすって言う下種なやり方よ。」

そう言うとき理子はこう続けた。

「そうそうその人間版ってさ・・・考えたことある？」

「・・・いえ、そんなの考えたくないわね。」

松葉がそう答えるが嫌な表情であった。

当たり前であろう、女としてそんな最悪なの考えたくないのだから。

すると理子は・・・怒り狂ったかのようにこう言った。

「ふざけんなふざけんな！ふざけんな!!アタシは只の遺伝子かよ！

アタシは数字の『4』かよ!!違う！違う違う違う!!アタシは理

子だ!『峰・理子・リユパン4世』だ!!』『5世』を産むための

只の機械なんかじゃねえ!!」

そう言っている中でジャンヌはもしかしてと言っただけでこう続けた。

「お前はブラドに脱獄するまでの数年間・・・」

「ああ、まあ処女は喰われなかったが今まで酷い事の繰り返しだ。

殴られ蹴られて無理やり口に髪に体中奴の体液で汚されて実験道

具のように

扱き使われて実際に人体実験でアタシの体はもう普通の人間じゃ

ねえよ。」

そう言って理子はキンジに向けて・・・

いや、持っている十字架であろう目を向けてこう言った。

「母様が言ってた。『ソレハリユパン家の全財産を引き換えにして

も
釣り合う宝物なのよ』って言ってアタシはそれをブラドから盗られ
ない様に

口や尻の中に押し込んで見つからない様にしていたんだ。そして
あの時

その十字架・・・いや、その金属の力でアタシは檻から逃げることに

成功したんだ!!そしてブラドのクソ野郎によつて造られたこの力
と

その金属でアタシは今度こそ自由を手に入れる!!その為に手前ら
には

アタシの踏み台になって貰うぜ!」

そう言って理子はワルサーP99とナイフを一つずつ構えると

キンジは全員に向けてこう言った。

「あいつのパワーは段違いだ!俺とジャンヌが主体で攻めるから皆
は援護」

「ふざけないでよ!アイツはワタシが倒すわ!!リベンジよ!」

「馬鹿言うな!あの馬鹿力にお前が勝てる確率があるとでも思っ
んのか!?!」

「ウグググ!」

アリアはそれを聞いて悔しそうな目つきをしていると・・・

理子の後ろでバチィイ!!と言う音と同時に理子の眼が強張って後
ろを振り向くとそこにいたのは・・・。

「何で・・・お・・・前が。」

「行けませんね峰 理子さん。補修です。」

小夜鳴先生が大型のスタンガン持って立っていたのだ。

第40話

「『小夜鳴先生!!!』」

キンジ達は小夜鳴先生を見て大声で言う。小夜鳴先生はこう答えた。

「遠山君、神崎さん、ダルクさん、おや？天草君もいらっしやるじゃないですか？スミマセンがちよつとの間・・・動かないでいてくれますか？」

小夜鳴先生はそう言いながらギブスを外すと出てきたのは

痛々しい腕ではなく・・・シャチみたいなカラーリングが施された拳銃が出てきた。

「・・・『クジール・モデル74』」

キンジはそれを見てそう呟いていた。

これは社会主義時代のルーマニアで生産されたオートマチック拳銃だが

武偵でもない彼がなんでそんな珍しい武器を持っているんだと思っている・・・

下からグルルルと・・・大きな銀狼が喉を鳴らして現れたのだ。

「何だこいつは!?!」

「狼・・・ですね。」

「気を付けなさい!こいつら前に武偵校の女子着替え室を襲った奴らよ!」

アリアの言葉を聞いてなんつう下心丸出しの犬なんだとそう思っている

そう思いながら武器を構えていると小夜鳴先生はこう忠告した。

「ああ、動かないで下さいね皆さん。皆さんが今いる場所よりも動こうとすると・・・あの子達の餌になってしまいますので。」

そう言うのでキンジが少し爪先を動かそうとした瞬間に狼達が・・・キンジに対して睨みつけたのだ。

狼と言えばブラドは狼を使うと聞くのでもしかしたら自分がいないときは

小夜鳴先生の指示に従うようにと命令されているんじゃないかと考えるが

それでは辻褃が合わない。

先ず第一に彼とブラドは会っていないと言う。

それが本当ならば如何やって従うんだと考えてしまう。

それならばドウヤツテと思つて考えていると「紅鳴館」で

ジャンヌが言つた事を思い出した。

『良いか遠山、本来人間の言葉と言うのは方言と同じで住み慣れた場所の言語は幾ら直そうと努力しても治らない所がいくつか出てくるんだ。だが小夜鳴先生にはそれを全く感じられなかった。まるで……』

「……!!そういう事かよ小夜鳴先生アンタ俳優になれるんじゃないか?」

「それそれは、まあ貴方方の学芸会演技に比べれば賞は取れるでしょうね。」

互いにそう言っていると三頭目の狼が現れて理子の武器を奪つてビルの縁迄運んではキンジ達の足元に捨てている中で小夜鳴先生はこう言つた。

「皆さん動かないで下さいね、この銃は30年前に生産されたタイプで

粗悪品なものですので。引き金に一定の緩みがあつてもし何かあつたら……」

「……リユパン4世を射殺してしまったら勿体ないですよねえ？」

「「「!!!」」」

それを聞いてキンジ達だけではなく理子ですら目を見開いて驚いていた。

理子の正体を知っているのはキンジ達だけであり箝口令を敷かれている為

小夜鳴先生程度では知るはずもないと思っていたのに何故とそう思っている……キンジがこう答えた。

「簡単だよなアンタガ『ブラド』であり『小夜鳴先生』なんだから。」
「やっぱり!!」

アリアはキンジの言葉を聞いて合点がいくわねとそう言うがキンジは

こう続けた。

「但しアンタらは……『二重人格』だ。」

「え?」

アリアはそれを聞いて何言っているのと同じく思っているとキンジはこう続けた。

「アンタこう言っていたよな?『いやあ、彼は今とても遠くにおりまして』

デスネ、正直な所彼が何しているのか知らないんですよ。』って。

最初はメル友位かなと思っていたんだがいきなり警備システムがレベルアップしたことに驚いていたがアンタの中に『ブラド』がいて

そいつが警備システムの操作をしたんなら話が早くてな。」

「成程な、それならば我々の演技に対して中から忠告すること位楽に出来ると言った処だな。」

キンジの推理を聞いてジャンヌもそれなら合点がいくと

そう言うとな草はこう続けた。

「そして貴方がここに辿り着けたのはそこにいる狼たちが十字架の匂いを追って来たのでしょね？恐らくは奪われた時に備えて人間の嗅覚では

判断できない程の匂いを十字架に染み込ませて追って来た。

そういう所ですかね？」

3人の言葉を聞いて小夜鳴先生はにこやかにこう答えた。

「F i i B u c u r o s、素晴らしいですね遠山君、ダルクさん、天草君。

ここが学校であつたなら貴方方に満点に近い点数を与えていますよ。」

「満点近い・・・未だ隠していることがあるって所ですね。」

「ええ、遠山君。君は実に素晴らしい人材です、『アサルト』では

現役武偵を倒して学校始まった以来の入学と同時にSランクに昇格、

ですが可の事件を機に試験をボイコットしてEランクのインケスタに

異動となつていますが成程探偵としての腕前は

既にその『出来損ない』のエリアとは比べ物にならないですね？」

「!!」

エリアはそれを聞いて動こうとした次の瞬間に狼達がエリア目掛けて

襲い掛かろうとしたので動きを止めると小夜鳴先生はエリアに向けてこう言った。

「大丈夫ですよアリア、貴方と同じ境遇の人間がここにもいますから。」

「……誰よそれは？」

「……お前……だったのか。」

「理子!？」

小夜鳴先生が何か言う前に理子が目覚めるが小夜鳴先生は理子をまるでゴミのようにゴミのように蹴りつけるところ続けた。

「今からもう十年前って言った処ですね？私は嘗てブラドに依頼されて

彼女の遺伝子情報を調べたことがあるんですよ。遺伝子とは面白いものでしてね、父と母両名の長所だけを得ることがあれば短所だけと言う事もありまして

それで調べてみたら」

「やめ……ろ……言うな。」

理子は息も絶え絶えでそう言うが小夜鳴先生は嗤ってこう言った。

「リュパン家の血を引いていながら欠陥品だったんですよ彼女は
!!」
それを言った同時に遠くで雷鳴が響き渡った。

2人の欠けているもの

『リユパン家』の能力が・・・遺伝されていない・・・だから理子はジャンヌの言うように。」

「其れなら合点がいく、何時も理子は生徒として出席していたからな。」

ジャンヌがそう言っている中でアリアはこう呟いた。

「・・・こいつも私と同じ。」

そう小さく呟いている中で理子は額をヘリポートの床にぶつけて押し付けていた。

恐らくはキンジ達に心の底から・・・敵に対して聞かれなくなかったと

そう思っている中で小夜鳴先生に言われたことにショックだったのだ。

然し小夜鳴先生は理子を足で踏みつけながらこう続けた。

「ご自分の無能さについては自分がよく知っているでしょう4世さん？私はそれを遺伝子工学的に彼に対して報告しただけであり何も非がありません。」

だが然しそれだけではない、私が投与した『超人血清』を投与しておいて

先代のリユパン3世の様に一人で盗むことどころか精鋭を率いたつもりでしょうが

結局あなたの考えること位お見通しなんですよ？単純な力があつても

それを行使することができない半端者・・・それが貴方なんですよ！！

そう言いながら小夜鳴先生は理子を更に強く踏みつけると小夜鳴先生は懐から・・・キンジがすり替えた偽物の十字架を取り出してこう言った。

「また教育のやり直しですかね？4世さん。人間の限界は遺伝子とその人間が持つ肉体の性能で決まります、ですから私はその肉体の力

をブーストさせる為に

血清を・・・第二次世界大戦でドイツが試作段階で破棄した薬を私が解析して

投与したにも関わらずに遠山キンジに負け！私にもお得意とも思われる策にも勝てずこの有様!!所詮優秀な遺伝子を持たない人間風情が！肉体の器が小さな貴方如きが努力したところですぐに限界を迎えるんですよ貴方の様に!!」

そう言いながら小夜鳴先生は偽物の十字架を理子の口に押し付け乍らこう言った。

「ほらすっかり口に含んでおきなさい、昔そうやっていたでしょう？

口の中にこれを入れてね！ガラクタの貴方にお似合いの物ですよね本当に!!」

そう言いながら小夜鳴先生は理子を再び足で踏みつけている中で理子は

何もできない自分に対してか小夜鳴先生に対してかどうかわからないが

理子はう、う、と哀れな嗚咽だけが途切れ途切れに聞こえるがその行動に

キンジは意味不明だと思わんばかりにこう思っていた。

「(何であそこ迄小夜鳴先生は理子を嘲って罵っているんだ?)

お前自身がブラドって言うのは分かっているからなのか?

それとも何か理由が?)」

キンジはそう考察している中でアリアが甲高い声でこう言った。

「いい、いい加減にしなさいよ！それ以上理子を虐めて何の意味があるって

言うのよ!?!」

そう言う和小夜鳴先生はアリアに向けてハント鼻息鳴らして笑いながら

こう言った。

「おやよく言えますね神崎さん？いえ、『神崎・ホームズ・アリア』さ

んでも呼ぶべきでしょうか？」

「!!」

アリアは何でそれをお思っている中でキンジはこう言った。

「ホームズ・・・おいおいおいまさかあのかよー!」

「彼の有名な『シャーロックホームズ』、成程前に理子さんが貴方に
対して

オルメスと言うのは『HORMES』。イギリスでは『H』の発音が
無いですからね。我々では『ホームズ』と呼びますがこれでは関連性
が出ない訳ですね。」

天草がそう考察している中で小夜鳴先生は天草に向けて拍手して
こう言った。

「素晴らしいですね天草君、君は矢張り賢い子だ。」

遠山キンジのブレインとも呼ばれその実力はグループの中でも上
位に付くほどと

書かれていましたが本当のようですね。」

そう言うのと小夜鳴先生はこう続けた。

「その通り、彼女は母親の無罪の証明のタメニ幾度もの武偵として
の作戦を

一人でクリアしていましたが『シャーロックホームズ』において欠
かせないのは

何だと思えますか？」

はい遠山君と言ってキンジはこう考えた。

「・・・仲間か?」

「ふくむ、まあ正解としましょう。本当は『相棒』ですが同じなの
で

大丈夫でしょう、その通り彼女には自分と釣り合う相棒が欲しかっ
た。

だからこそ彼女は元Sランク武偵であった貴方に声を掛けて

幾度も勧誘していましたが哀れなアリア、全然耳も貸してくれず
おまけに実家では無能扱いですからねえくく。」

「アンタどうしてそれを!!」

「おやおや何言っているのですか？ 私は狼たちからの情報を貰っているのですよ？ 私が知らない事なんてないに等しいですからね。」

「グウウウウ!!」

アリアは怒り心頭の様子であるが小夜鳴先生はこう続けた。

「彼女もまた理子と同じく遺伝子に欠陥があつたんですよ！ 然も欠けていたのは推理力！ 直感があつても推理力がない只の猪侍!! 正に武力でしか活躍できない

オルメス家の落ちこぼれ!! 全く愉快ですねえ？

片や盗むに必要なトリツキーな思考力を持たない怪盗、

片や推理力が欠落した探偵！ これ程の面々がいるともなれば最早欠陥品の

寄せ集めの何者でもないですねえ!!」

アハハハツハと笑っている小夜鳴先生を見てアリアは既に殺していやるとも

言わんばかりの表情をしているとジャンヌがこう聞いた。

「何故そこ迄2人を陥れるのだ？ 理由を問う。」

そう聞くと小夜鳴先生はこう答えた。

「簡単ですよジャンヌ・・・」

『俺』が出てくるのに必要だからだ。」
その時見えた小夜鳴先生の瞳はまるで・・・狼のようであった。

『ブラド』来る

「成程、それがお前の中にいる『ブラド』って奴か？」

キンジがそう聞くと小夜鳴先生……いや、『ブラド』はこう答えた。

『まあそんな所だな遠山キンジ、よく俺の存在に迄辿り着いたことには
敬意を払うぜ。』

「お前に褒められても嬉しかねえが何故お前は未だ理子をいたぶる
？」

何が目的なんだ？」

『おいおい遠山キンジよ、お前ならもう俺の変身条件の法則を知っ
ていると』

思ってたがハズレか？それともヒントと洒落込まねえと解けねえ
のかよ？』

「……お前兄さんの血を」

『正解、俺様が表に出るには必要な事。それは《絶望》を見て
それがトリガーとなる、然も観客がいれば猶の事な。』

「……下種だな。」

『褒め言葉と思つて受け止めるぜ。』

ゲババババババと酷い笑い声をあげるところ続けた。

『そういやあ小夜鳴の奴俺の中で講義したい……勉強させてえこと
があるって言っているが俺が代打で喋っておくがジャンヌがいるつ
て事は《イ・ウー》についてお前どの位知っているんだ？』

そう聞くとキンジはこう答えた。

「《イ・ウー》は学校みたいな存在で全員が教師であり生徒、互いに
自分の能力を教えあう事で内部における実力の向上を図るってのが
目的だったのは聞いた。」

『まあ正解だな、だが俺達はそうではなく……能力を写す。

詰まる話がコピーしあつて強くなるって方法だ。血を使つてな。』

「成程、ジャンヌさんの言った通り彼は吸血鬼のようですね。」

天草がそう言うと『ブラド』はこう答えた。

『正解だ、俺はそれで600年間交配なんつう獣じみたことはしねえ。遺伝子情報を写し取って自分を強化し続けたのさ。そして小夜鳴はそれを人工的に

使えるようにして誰でも出来るようにさせたのさ。

『レトロウイルス』って奴を使った選択できるDNA導入でな。』

ま、後は本人に聞いた方が早そうだがなとそう言っているところ、天草がこう答えた。

『『レトロウイルス』、確か『天然のナノマシン』とも呼ばれている遺伝子治療や遺伝子研究を行うことが出来ると言われている特殊なウイルスだと聞いたことがあります。』

「成程な、それを使って誰と誰の遺伝子が相性が良いのかと判断するって

言った処か？」

キンジは天草の言葉を聞いてそう答えると『ブラド』はこう答えた。『その通りだ、それから俺達は優れた遺伝子を集めるっツウ仕事で武偵校に

入り込んで相当数の血液を手に入れることに成功したのさ。」

「成程な、お前らそうやって血を盗るから貧血で倒れた生徒達が出てきたって訳か。」

それならあの噂も納得だなとキンジがそう呟くと『ブラド』がこう言った。

『俺は今まで色んな興奮で出てきたが何百年も経つ内に飽きてしまつてたんだがお前の兄貴のおかげで俺様はまた出ることが出来たんだぜ？』

感謝するぜとそう言うと『ブラド』は全員に向けてこう言った。

『それじゃあ・・・始めようぜ!!』

そう言った瞬間に・・・変異が起こった。

ビリビリとこ洒落たスーツがまるで紙みたいに破れ始めてその下にある肌が

白に近い肌色から赤褐色に変色したと思いきや体中の筋肉や骨から

ポキ、バキリと嫌な音をたてながら盛りあがっていき最後に
何やら蔦の様な模様をした刺青が白く浮き出ていた。

然しキンジはその場所を見てこう思っていた。

「(あれがジャンヌの言っていた弱点か：それにしても何だありやあ!?)

吸血鬼って言うよりも『ジキルとハイド』のハイドみたいじゃねえか!!)」

正にそっちに近いよなとそう思っていると『ブラド』は全員に向けて

こう言った。

「C a m a i f a c i . . . いや、日本語で言ったほうが良いよな?」

『初めまして』と言っておくぜ。」

そう言うときンジはこう言った。

「まるで『ジキルとハイド』だなお前は? まあ、薬を使わない分そっちの方が汎用性高そうだけどな。」

そう言うとき『ブラド』は笑ってこう言った。

「ゲバババババ! 当たり前だろう? アイツと俺は古い親友でな、アイツが使っていた薬は俺の僅かな血液を培養して複製して作り上げたつまり俺がオリジナルって奴だ。」

ゲバババババと笑ってそう言うがあれって真実だったのかと

キンジはもう笑うしかねえなとそう思っていると『ブラド』は理子の頭を掴んでこう言った。

「よう4世、久しぶりだな『イ・ウー』以来って所だが俺様が人間に変身できるって事は知らなかったよだな?」

『ブラド』がそう聞くと理子がこう言った。

「だま . . . したな、『ブラド』 . . . !! お、オルメスの末裔を斃せばあ、

アタシを . . . 解放 . . . するって . . . 話 . . . 『イ・ウー』で

「其れは手前が遠山キンジに負けたからだぜ?」

「ぐう . . . !!」

「お前はやっぱり檻の中だブルート・ビッチ、少し放し飼いにしておけば

おもしろえ事になると思って期待したんだが出来損ないのホームズに勝った如きでいい気になるわそのガキに負けるわ盗みの手際も作戦の立て方もお粗末で

手前何学んでたんだ役立たずが!!」

「が・・・ああー!」

『ブラド』が少し手の力を強くすると理子は苦しそうにうめいているので

少し和らげてこう言った。

「もう手前は檻に戻っつけ、そんでそうだな・・・適当な奴と交配させて

5世でも製造させるか?それとも俺とヤルカ?お前の体だと間違いない

ぶっ壊れちまうこと間違いなさそうだがまあ仕方ねえよな

俺から逃げたんだから。」

「あ・・・ぐう・・・。」

理子はうめいているのを見て『ブラド』は理子に空を見せてこう言った。

「さあよく見ろこの光景を!これがお前の最後のお外の光景を!!

これが人生最後だからな!!」

ゲバババババと汚い笑い声をあげる『ブラド』を見て頬から

大粒の涙を流している理子は・・・天草を見て手を差し伸ばして・・・こう言った。

「……た、す、け、て……天草……。」

ブラド対天草

「……た、す、け、て、……天草……。」

「ええ、良いですよ理子さん。」

理子の言葉を聞いたと同時に……天草は嫌さずに狼達の間を縫つて

出てきたのだ。

狼達は天草を見てすぐ様に行動に移そうとしたのだが……
キンジとジャンヌ達が狼たちの行く手を阻んだ。

「こっからは通せんぼだぜ！」

「躑の時間だ。」

そう言つて互いに二頭の狼相手に戦闘を始めた。

「ほお、一人で立ち向かうか……そう言うのは勇氣じゃなくて蛮勇つて

言うんだぜガキが！」

ブラドは天草に向けて嘲笑しながらその大きな爪で引き裂こうとすると天草は腰に装備されている日本刀を二本抜刀してその爪を……受け流した。

「ほお。」

ブラドは感心しながらも今度は足で踏みつけようとするが右手にある刀を

ブラドの足元目掛けて放つて突き刺すとそれを踏み台にして躲した。

「やるな……だが空中なら!!」

逃げ場がねえよなとそう言つてもう一度爪で引き裂こうとすると

天草は・・・

背中に手を伸ばして・・・何かを引き抜いた。

そしてそれと同時にブラドの指が・・・全て切り裂かれた。

そして天草は掌をジャンプ台に見立ててもう片方の腕の手首部分を切り裂いて

腕力が少しだが弱まった隙にブラドから理子を奪還することに成功した。

「何!?!」

「彼女は返して貰いますよ。」

天草は理子を抱えながら離れるがブラドはさせるかと言わんばかりに

少し腕力が落ちた左腕で掴もうとするが・・・何か当たった感じがしたので

振り向くと・・・既に倒れている狼たちと共に拳銃を向けているキングジを見た。

「手前・・・俺の狼たちを殺したのか?」

「まさか、神崎が全部倒した。」

俺は何もやってねえよとそう言うともまあ良いと言ってブラドはこう言った。

「どうせこんな傷すぐに癒えるさ、理子を捕まえるのはその後・・・?」

ブラドはそう言って・・・何か違和感を感じて見みるとそれに気づいて

悲鳴を上げた。

「な・・・な・・・ナンダこれはよー——!!」

そう言って自身の腕を見てこう続けた。

「手前天草!俺に何しやがった!!」

答えろと言うと天草はこう答えた。

「ああ、簡単ですよ普通に斬っただけです。」

そう言うとならブラドはこう反論した。

「ふざけんじやねえぞクソガキが!俺様の再生能力はこんな傷一瞬

で

治せるはずなのに未だ治らねえどころか血が出続けてやがる!!

一体どんな絡繰りでこうなったか答えやがれ!!」

ブラドはまるで血相を変えた様な表情でそう聞くと天草はこう答えた。

「・・・貴方は遠山君に対してはヒントを出さなかった癖に自分の事になると

ヒントを出せと命令する、まさに獣そのものですね貴方は。」

「貴様・・・!!」

「まあ良いですよ、答えます。答えはこの刀です。」

天草はそう言って刀を見せると・・・ブラドは目を見開いて驚いてこう言った。

「手前・・・そいつは・・・魔剣か!」

「貴方方風に言えばそうなりますが日本ではこれは『妖刀』と呼ばれています。」

そう言うとその刀についてこう説明した。

『妖刀 村正』、この刀は斬った人間の心臓に呪殺の刻印を刻ませることで

死に至らしめると呼ばれる妖刀。それ故に我が一族が嚴重に保管されていましたが貴方の事をジャンヌから聞いて取り寄せたのです。本来ならば既に死んでいる

貴方ですが恐らく心臓の代わりにその刺青が役割を果たしているようですが・・・貴方は後何回で死ねますかね?」

「!!」

それを聞いてブラドはヤバいと感じた。

こいつは自分を確実に殺すために武器をこさえてきたのだと確信したのだ。

恐らくジャンヌから3つまでは弱点が明らかになっておりあと一つが

明らかになれば自分は終わりだと感じたからだがかこうも思っていた。

こいつらは武偵、ならば自身は殺されることはないんじゃないかと
そう思っているよ。天草はブラドに向けてこう言い放った。

「そう言えばこのクエストは武偵法としては違法であり

報告出来ない案件ですからねエ。報告出来ないと言う事は

今ここで死人が出たとしても誰も分からないという事ですよね？」

「!?!?!」

それを聞いてブラドはこいつ殺す気だと確信してキンジ達を見る
が……

更に最悪だと思った。

既にここに居るのは敵だらけ、然も自分の再生能力は天草の妖刀で
封じられているのも同然である為どうするべきかと思つて……ア

リアを見て

こう言つた。

「アリアー！お前の母親の罪の99年は俺だぞ!!俺が死んだらそれは
闇の中だ!!証言が欲しけりゃ俺に協力」

「大丈夫ですよアリアさん、こいつは少し懲らしめなければなりま
せんし

貴方との約束などどうせ破るに決まっていますよ？」

天草はアリアに向けてそう言つたとアリアは暫く考えて……天草に
向けて

こう聞いた。

「生かすのは本当なのよね？」

「ええ。」

「……分かつたわ、アンタを信じるわ。」

アリアはそう答えると今度は理子がこう聞いた。

「何で……アタシを助けるんだ？」

そう聞くと天草はこう答えた。

「簡単ですよ、助けてと言われれば助けるのが当たり前だからで
す。」

そう言つと理子に向けてこう続けた。

「貴方はここに居てください……貴方の心に巣くう魔物は

ここで討ち取りますから。」
そう言つて天草は妖刀『村正』を構えた。

ブラド対天草 決着

「ふざけんじゃねえぞこのクソガキが！その前に手前をぶっ殺して」

「・・・誰を殺すって？」

ブラドが大声で言っている中で・・・突如キンジが背後に回り込んで

そう言いながら・・・リボルバーキャノンで腹部を抉って破壊した。

「ゴアアアアアア！手前!!」

どうやってと言う前にまた・・・消えた。

「消えたダト！それに匂いもしねえ!!一体どうやって!？」

「言うと思っっていますか？」

天草がそう言って先ずは右の模様をを切り裂くと・・・模様が白から赤黒く

変色した。

「ギャアアアアア！力が!!力が抜けていくダトー——!!」

ブラドはそう言いながらその牙で噛み殺そうと口を開けるが・・・右目に銃弾が

当たった。

「ぐお！誰だやりやがったのは」

「遅い。」

キンジの声と同時に足の腱を・・・斬り裂いた。

「畜生が！また」

今度はどつちだと思っって耳を立てようとすると・・・。

「私を忘れていませんか？」

天草が治りかけた右目とは逆の左目に日本刀を突き刺すと同時に

それを新体操の様にグリーンと回転しながら左肩も切り裂いた。

「ギャアアアアア！やめろー——！！」

ブラドはそう言って最早指すらない腕で振り払おうとすると

治りかけていた脚が何かに滑って転倒すると何でと思つてやつとこそ治つた右目で見てみると・・・ジャンヌが冷気で周りを氷で薄く覆つていた。

「手前この雑魚がー——！！」

ブラドはそう言って左手の掌だけでヘリポートを破壊して

コンクリートの石を弾こうと構えた瞬間にアリアの銃弾が腕に命中すると日本刀で突き刺した。

「いい加減にしろこの出来損ないがー——！！」

「煩いわねブラド！」

「煩いだ!?ホームズ家の欠陥品で理子にすら勝てねえ文字通りの出来損ないがよく言うな!!」

「アンタみたいな奴には分からないだろうけどね先天的な遺伝は確かに人間の能力をある程度決めてしまうかもしれないけどそれ以上に

人間は

努力や鍛錬で自分を後天的に高めることが出来るのよ!理子に何も

遺伝していないって言うけどね、理子はちゃんと努力したから私に勝つた!

それが証明!!私だつてそれを」

「ゲババババババ!馬鹿か手前は!?手前の言葉を聞いてみるが手前はその

努力すらしてねえから理子にすら勝てなかつた事になるんじゃないのかおい!」

「だから!それを証明」

「無理だな!才能に加えてだが人間はそのポテンシャルすら遺伝子が限界を

設計しているんだ!!手前みたいな猪武者みてえな脳みそしかない

奴にそんな真似できねえよ!!」

「この犬が！」

「じゃあ手前は只の野良猫だな！野良猫は野良猫らしく毒ガスにやられて死んでろ!!」

ブラドがそう言つて立ち上がった瞬間に……脇腹の紋章が斬られた。

「ギャアアアアアア！クソがー——!!」

ブラドはそう言つて天草に対して踵落としをくらわそうとした。流石にヤバいと感じた天草は方向転換する為に『村正』が折れるのを覚悟で

突き刺そうとした次の瞬間に……とある光景を目にした。

「……理子さん。」

何と理子が天草を守るためにブラドの踵落としを受け止めたのだ。すると理子は天草に向けてこう言つた。

「アタシは何時までも守られるだけの人間じゃねエエ!!」

そう言つて理子はブラドの足を押し上げると天草に向けてこう言つた。

「今だ天草!!」

「ハイ！」

それを聞いて天草はブラドの足を使ってジャンプして

ブラドの目の前に出てくると天草はブラドに向けてこう言つた。

「そう言えば貴方私が頭に来た時ですが……よく鼻を守っていませんね？」

「!!」

「そして遠山君からすれ違った際に聞きましたが……貴方の口の中に

白いナニカがあつたと言っていました。」

「あ……アアアアア!!」

「そして私を噛み殺そうとした時に見えましたよ?……」

……同じ模様が。」

そう言った瞬間に天草はブラドの下顎から上にかけて……斬り裂いた。

すると斬られた個所が斬る落とされるとそこにあったのは……

白い模様であった。

「ブギヤアアアアアアアアアア!!」

するとブラドの体中から赤黒い煙が立ちこみ始めた。

「如何やらブラドの力の秘密はあの煙……これまで摂取してきた血液が

その正体のようですね。……遠山君!!」

天草がそう言った瞬間に悶え苦しむブラドの目の前に……刃先が氷漬けにされたノインテーターを持ったキンジが現れた。

そしてその儘突き刺すと……刺された個所から蒼白い焰がブラドを

焼き始めた。

「ギヤアアアアアア! 何でだ!! 聖なる十字架じゃねえはずだろうが!?

何故だ——!!」

ブラドがそう言った瞬間に……キンジがこう答えた。

「何言ってるんだ? 聖なるものならあるぜ?? 今手前の腹にな。」

「まさか! まさか!!」

「そうです……僕と理子さんの十字架が氷漬けられ刃先の中に仕込んでいたんですよ。」

「ヒギヤアアアアアア! だいいだいいだいいだいいだ!!」

ブラドがその痛みに対して狂ったかのようにそう言いながら……
後ろに下がっていった。

「待てブラド!!」

キンジがそう言った瞬間にブラドは……足を滑らせて下に……
落ちて云った。

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

ブラドは悲鳴と同時に……地上まで落ちていった。

嘗ては人間を下に見ていた吸血鬼は今……自ら下に向かって落ちて
いった。

あの後

そして数日後

武偵校に戻った後キンジ達は今回のあらましを教務課にいる蘭豹に報告して咎めを受けようとしたがそれらは全て・・・黙殺された。無論タダと言う訳ではなくこの一か月間に行われた違法行為について咎めない事と引き換えにブラドの一件については永久に口外しない様にと言う厳命が下った。

そして内容については東京と神奈川の両武偵局と県警、警視庁、検察庁、

東京地裁から大量に書類にサインしなければならなかった。

如何やら彼らもブラドについて内々的に調査していたようであったそうだ。

ブラドはあの後逮捕されたようだ。

体の中に十字架ぶち込まれて数百メートル下迄落されたのによく生きているなど

キンジはそう思っていたが・・・少し違う。

ブラドは瀕死の重傷であった。

然も吸血で克服したであろう全てがぶり返り・・・いや、更に悪化してしまい

陽の光を浴びれば全身から火が噴き出して数百倍の痛みが襲い掛かり、

にんにくを嗅ごうものなら痙攣して倒れ、木に触れただけで酷い痛みに襲われて

十字架など見ただけで発狂し言葉だけで酷く恐怖してしまったそうだ。

まあ自業自得だな。

キンジとアリアの願いについては後日天草経由でOKを貰った為アリアは喜んでいた。

そしてキンジの周りについてだが・・・少し変わった。

「シー君！一緒に帰ろー——！！」

「すみません、これから教会でお手伝いがあるので。」

「だったら理子も行くー！！」

「あまり燥がないで下さいね。」

「うん！」

最近だが天草と理子が一緒にいる状況が多くなったのだ。

そしてそれはキンジ達ともよく出会う為偶に話すこともしよつちゆうある。

そんな中で理子はキンジに向けてこう言った。

「お前の兄さんの居場所はここに書かれてる、時間も書いてあるから行け。」

「・・・ありがとうな。」

「勘違いするなよ、アタシは只借りを返したただけだ。」
じゃあなと言って理子は天草の方に向かって行った。

「ここか。」

キンジがジャンヌを連れて向かったのは人工島から少し離れた風力発電所。

その一角でとある女性が座っていた。

「・・・カナ。」

キンジはそう言ってその女性に近づくと女性はキンジに気づいてこう言った。

「・・・キンジごめんね、《イ・ウー》は遠すぎたわ。」

「・・・じゃあ何で帰ってこなかったんだカナ！・・・いや・・・

・・・兄さん。」

キンジが静かに・・・だが怒るような声でそう言うときカナはキンジに向けて

こう言った。

「ねえキンジ・・・」

・ ・ ・ ・ ・ 一緒にアリアを殺さない？」
その言葉が風の音と共に響いた。

対話

「一緒にアリアを殺しましょう。」

「!!」

それを聞いてキンジとジャンヌは目を見開いて驚くが特に驚いているのは

キンジの方である。

兄『金一』は文字通り正義の味方を地で行くような性格で弱い人たちの事を

最も良く考えて行動して時には無報酬で戦った事もある程の人間である。

まあその所為で武偵局から苦情がありそれに対して金一牙出した答えがこれ。

「じゃあこれからは御握り一個と言う事で。」

『ちゃんと金銭でしなさい!!』

この答えに本気で電話の向こうの人間は怒ったそうだ。

まあそんなマイペースではあるがそれでもちゃんと依頼を達成しているのが

厄介でもある。

「……どう言う意味だ兄さん？」

「？」

「……応答がないぞ遠山。」

ジャンヌがそう聞くとキンジは頭を掻きながら耳打ちしてこう言った。

「悪い、兄さんは『カナ』の状態になると自分が『金一』であることを

認識しないんだよ。」

「……つまり今の『金一』は『カナ』と言う人格を表向きにしている事だな?」

「まあ……早い話が二重人格と思えば良いから。」

そう言っている……カナはジャンヌを見てこう言った。

「あらジャンヌ?どうしてキンジと2人で来たの?」

そう聞くとジャンヌは自身が今キンジと行動を共にしていることと

其の経緯を伝えると暫くしてカナはキンジに向けてこう言った。

「キンジ、良かったわ。私キンジが何時彼女が出来るのかと

心配していたんだけどもうその心配はないのね。」

「今のを聞いてどうしたらそうなるんだカナ!?!」

キンジは大声でそう言うがカナはジャンヌに向けてこう言った。

「ジャンヌ、キンジはこう見えてちゃんと尽くす人だから心配しないでね。」

それとキンジ、こう見えてジャンヌは可愛いもの好きだから何か髪飾りとか

指輪とか上げたら絶対喜んでくれるわよ。」

「何でそこ迄話が跳躍するんだ!!」

キンジとジャンヌは揃って大声でそう言うのと暫くしてカナはこう聞いた。

「それで?一緒にアリアを殺す件なんだけど?」

受けると聞くとキンジはこう聞き返した。

「何でアリアを殺すんだ兄さん?理由を聞かせてくれ。」

そう聞くとカナはこう答えた。

「理由は簡単ヨキンジ。アリアは巨凶の因由、巨悪を討つのは義に生きる

私達遠山家の天命だからよ。」

「義ね……俺からしたらそんなので武偵を辞めたアンタに……

一発殴ってやりたいと思ってきたぞ」

キンジはそう言いながら鎧竜剣を抜刀しようとする……バン!

と

銃声の音と同時に持っていた柄を手放してしまった。

「くうー！」

キンジは痺れている腕を摩りながらこう考えていた。

「『不可視の銃弾（インビジブル・バレット）』か、あれはカナ……いや、

兄さんと昔見た西部劇を兄さんが模倣してそして技として昇華させたあの力。

滅茶苦茶早い早撃ちで撃たれるまで認識できないあれは厄介な技だぜ！」

そう考えながらどうするべきか考えているとカナはこう口遊んだ。

『『出エジプト記』32章27……汝ら各々、劔を帯びて門より門と営の中を

彼処此処に行き巡り、その兄弟を殺し、愛しきものを殺し、

隣人を殺すべし』……ついてきなさいキンジ、今のアリアは簡単に仕留められる。」

そう言って手を差し伸ばすがキンジはカナに向けてこう聞いた。

「アンタ理子から聞いたが……『イ・ウー』に居たって本当なのか？」

そう聞くとカナは唇を噤んで……こう答えた。

「そうね、いたわ。けどこの話は出来ないわ。」

「生憎だが俺達は既に3件も巻き込まれている、危険なんて武偵になつて

既に出てきているさ。」

「それでも……出来ないわ、けどアリアを殺せば『イ・ウー』は崩壊する。」

『どういう意味だそれは!?!』

ジャンヌはそれを聞いて驚くがカナは尚もキンジに向けてこう言った。

「ねえキンジ、私の言う事無視したことない貴方なら分かるはずヨ？」

「アリアを殺せば全てが終わる。」

そう言つて尚も手を伸ばすがキンジが出した答えは・・・これだ。

「悪いがそいつは断るぜ。」

銃を向けたのだ。

「・・・どうして？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「俺はアンタガ行方不明になってどんだけ辛かったか分かるか？」

じいちゃんにはあちゃんもどう言う思いであの事故の事を思つていたか

分かるか!?アンタは義の為と言つて家族を捨てておきながら

今度はその家族に殺しを頼むだなんて虫が良すぎると考えたことないのか!!

俺は今ある仲間の為に・・・カナ、いや『遠山金一』。

アンタをテロ組織『イ・ウー』構成員として逮捕する!!

それが俺の・・・義だ!」

そう言つてキンジは・・・銃を下すとカナはこう聞いた。

「どうして下すの？」

「俺がここに来たのはアンタガ何で俺から消えたのか

どうして『イ・ウー』に行つたのかを聞きに来ただけだ。

それでそれが答えならもう何も聞かないって決めていたからな。」

じゃあなと言つて去つて行くのを見てカナは・・・こう呟いた。

「・・・強くなったねキンジ、けどあの男を倒すにはまだ足りないわ。」
そう呟いて・・・去つて行つた。

仕事は何処だ！

「・・・何だと!？」

キンジは掲示板に貼られている内容を見て驚いていた。
内容はこうだ。

『2年A組 遠山金次 専門科目(インケスタ)1,9単位単位不足』
「た・・・単位不足だと・・・!」

キンジはそれを見て驚いているが致し方あるまい。

何せこれ迄エリアによって巻き込まれた事件で専門の任務に支障
を

及ぼしていたからだ。

「マジかよ・・・。」

「まあ仕方ないわよね、こればかりは。」

「だが貴様が留年するなら私もそうなれば良いがな。」

「止めておけそんなの、カツコ悪いぞ。」

キンジはジャンヌに対してそう言うところ続けた。

「仕方ねえ、こうなったら何か仕事かないか見つけないとな。」

単位が丁度良い様な奴をと言うとジャンヌと松葉がコネクトの情
報を使って

探していると2人揃ってこう言った。

「あったぞ(わよ。)」

そう言って出したのはどんな学科であろうともOKな奴があった。

『港区 カジノ 《ピラミディオンの台場》私服警備・・・単位1,9』

「ありがたいな2人共ってまあ夏休み中にするともなれば他のも
見ておきてえんだが。」

そう聞くと松葉とジャンヌが互いにこう言った。

「まずは港区で大規模な砂金盗難事件の調査ね、単位は1,7」

「微妙だが取敢えずは保留だ。」

「こっちは同じく港区工業用砂鉄盗難事件の調査だ、単位は0,9」
「半分って所だな、そいつは上のが終わってからにすれば十分って

所か。

他には?」

キンジは松葉に向けてそう聞くと松葉は少し乾いた笑みを浮かべてこう言った。

「港区の砂礫盗難事件単位は0, 5」

「また砂かって多すぎるだろ其れ! どんだけ砂が欲しいんだよ同一犯だろそれ!」

キンジは今までの窃盗事件についてそう言うとは確かにと2人はそう思っていると思っていると私服警備の所である事に気づいた。

「詳細は

『帯剣若しくは帯銃。必要生徒は4名で女子推奨、被服の支給あり。』か、

俺と天草とジャンヌと松葉で丁度か。」

そう言つて取敢えずと言つて登録申請しよとするが2人に向けてこう聞いた。

「お前らどうする?」

そう聞くと2人はこう答えた。

松葉

「まあ、アンタが大変なんだし受けるわ。」

ジャンヌ

「私はお前を見ているからな、近くで見るとしたら一緒に受けると言うのも

一つの手だな。」

それを聞いて天草にメールを送ってみると本人も了承して受けることとなった。

そして暫くして3時間目は体育・・・プールで水泳であった。

然し担当でもある蘭豹は生徒達に向けてこう言った。

「拳銃使いながら水球やれ、2，3人死ぬまで。」

そう言っただけで帰って行った。

どうすると不知火に聞くと取敢えずは受けてみようといっただけで受けたが

殆どがふけたので出来ない事を悟った。

そう言う事なので2人でプールサイドのデツキチェアに腰かけると

不知火がこう聞いた。

「そういえばだけどき遠山君。」

「?。」

「最近だけど松葉さんだけじゃなくてジャンヌさんとも良い関係作っているって聞くけど本当?。」

「ぶー——!!」

キンジはそれを聞いて唾を吐くとゲホゲホと咳しながらこう聞いた。

「誰だそれ言ったの!。」

「武藤君だよ?最近遠山君松葉さんとジャンヌと食事する風景が多いから

三角関係なのかなってCVRでも噂になってるよ?。」

「CVR・・・理子か!。」

キンジはそれを聞いて武藤と理子が喜んで噂を流しているであろう光景を

思い浮かべてギリギリとしていると不知火はこう続けた。

「それ聞いて最近白雪さん凄い暗い表情と言うよりも何だか・・・

近寄りが見たい雰囲気醸し出しているからね、取敢えずは警告と

真実が聞きたいんだ。それとだけジャンヌさんと同棲しているって噂

あれ本当?。」

矢継ぎ早に聞くその言葉に全員が耳を揃えているとクソと思っただけでキンジはこう答えた。

「・・・ジャンヌとは、一緒に暮らしてはいるけど同棲って奴じゃ。」
『『ウソダー——!!』』
「!?!」

男性陣の悲鳴を聞いてキンジ達は驚いていると男性陣はこう言っていた。

「嘘だろ！昼行燈のキンジがあのだジャンヌさんと！」

「松葉って言う美巨乳はぶらしているくせにジャンヌさん迄!!」

「然も一緒に暮らしているって完全に同棲じゃねえかよ——!!」

そう言いながら血涙流しているがキンジは更にこう続けた。

「いや待てお前ら！確かに俺達は一緒に暮らしているけどあれは綴の提案」

「綴って先生公認かよ——!!」

「クソが——!!」

完全に何言っても誤解は解けないなと思っていると不知火は爆弾を落とした。

「そういえば遠山君最近は何で然もジャンヌさんとお揃いだから怪しいなっとは思ってたけど。」

「ああ、それか。あれは一緒に食事しているうちに食費とかを考えてジャンヌが作ってくれてな、俺も悪いなと思っているからアイツの手伝いとかで

食器洗ったり兎に角出来ることからしているな。」

「（・・・完全にそれって夫婦だよって言わない方が良いなこれ。）」
不知火はそれを聞いてそう思っていた。

暫くして武藤がロジとアムドの面々引き連れているプールに来たところを

キンジが飛び蹴りして叩き落したというのは完全に序の話である。

アリア対カナ

そしてキンジ達が授業を終えるとある事を松葉から聞いた。

「キンジ、今アリアが札幌武偵の子と戦っているらしいわよ。」

「へえ、一体誰なんだよ?」

そう聞くと松葉はこう答えた。

「ええと確か・・・《専無 カナ》って名前らしいわよ? 凄い美人の茶色の長髪を三つ編みにした美人ヨ。」

「!!」

キンジと近くにいたジャンヌはそれを聞いて驚いてすぐ様に向かうとする。

キンジは松葉に向けてこう聞いた。

「場所は何処だ!」

「えええと・・・第一体育館ね。」

「ありがとう!」

そう言ってキンジ達は第一体育館に向かった。

ド前に

アサルトが使う体育館は少し違っていた。

コロッセオと渾名されているスケートリンク状の楕円形フィールド

生徒達が防弾ガラス越しで喝采を説いていた。

そんな中でキンジとジャンヌが進んでいく中でこう言う声が聞こえた。

「札幌武偵校にあんなスゲエ女子がいたなんて聞いた事ねえぞ!」

「神崎の無配伝説もこれで終わりかもしれないねえな。」

「どうなってんのよあの銃撃! 全然見えないじゃないの!!」

興奮気味でアサルトの生徒達が口走っているがキンジはそれを聞いて

間違いないと思っただけだがまさかこんな大観衆の前で殺すわけないだろうと

思っていたところであるしそれなら担当している教師が止めるはずであろうと

思っていたが・・・最悪が付く人間がそれであった。

「やれやれやれや！どつちかが死ぬまでヤレや!!」

と言いながら防弾ガラスの衝立の上で2メートル級の長刀何本も背負っている

この長身の女の名前は《蘭豹》。

19歳で香港に於いて無敵と呼ばれている武偵でその後直ぐに実習教員として

教職に就いたのだが・・・あまりの凶暴性に加えてその馬鹿力から各地の武偵校を転々としているようである。

そして闘技場を見るとアリアとカナがいたが形勢はカナが絶対的に優勢であり、アリアは片膝ついていてのに対してカナは涼し気な・・・憂いの表情を

浮かべながらこう言った。

「おいで、神崎・H・アリア。もうちよつとで良いから貴方を見せてごらん？」

そう言った瞬間にいつの間にかであるがバン！と銃声が鳴ったと同時にアリアが見えない足払いにかけられたかのように前のめりになつて倒れた。

血飛沫が上がらなかつた事を考えたら防弾制服の何処かに命中したのであろうとそう思っただけであるがあれは弾丸を貫通させれないだけであつて衝撃は通じるのだ。

然しそれは被弾個所に金属バットで殴られたかの様な痛みを齎し当たり前所次第では内臓破裂で死ぬこともあるのだ。

本来こう言うのはC装備の着用を義務付けられておりこれらは武偵法違反に

該当するのだが《蘭豹》はそんなの知らんと言わんばかりにこれをやっているのだ。

これにより死者も出ているのにも関わらずである。

「おい《蘭豹》やめさせろ！また停職喰らうぞ!!」

そう言うが《蘭豹》は大きな瓢箪で酒を飲みながらこう言った。

「おうおう死ね死ね！教育の為に、大観衆の前で華々しく死んで見せろや!!」

「……こいつはもう駄目だ。」

キンジはそれを聞いて頭を抱えているとジャンヌがこう言った。

「遠山、奴からは殺気が感じられんぞ。」

「何だと……?」

「お?そこに気づくとはコネクトにするには勿体ねえな

《ジャンヌ・D・ミシエラ》。」

「ミシエラ?」

「……私の本名だ、ジャンヌ・Dは家名として受け継いだものでミシエラが本名だ。」

「何で言わなかったんだ?」

キンジがそう聞くとジャンヌはぼつりと……こう答えた。

「……可愛いから。」

「は?何だって?」

キンジがもう一度とそう聞くとジャンヌは……こう答えた。

「可愛いからだ！私の見た目的に合わないから言わなかったただけだ!!」

それだけだと言って顔を真っ赤にしてそう言うときンジはこう返した。

「そうか?お前綺麗だから結構いい名前だろ?」

「な／／／／／!!」

ジャンヌはそれを聞いて耳まで真っ赤にするがキンジはこう続けた。

「其れに自分の名前が気に入っているんなら今後は俺も使うぜその名前、

俺達はもう一緒に暮らしているんだから気にするなよ。」
キンジがそう言うのとジャンヌはそれを聞いてこう言った。

「な．．．ならば呼んでくれないか？．．．私の名を。」

「ああ、良いぞ。《ミシエラ》。」

「／＼／＼／＼．．．ありがとう。」

真っ赤になつて俯くジャンヌと頬を搔いて取敢えずは成り行きを見守ろうとするキンジ達を上から見ていた《蘭豹》は何やら．．．いやな顔でこう言った。

「けー！ ションベンガキどもがいちゃつきやがって!!」

酒が甘くなつちまうと瓢箪がぶ飲みしながらそう言っている間に．．．

決着がつきそうであった。

「さっきの．．．銃撃．．．《ピースメーカー》ね。」

「よくわかったわね、性格にはコルトSAA。よく分かったわね。」

「マズルフラツシユと．．．銃声．．．骨董品だから．．．いまいち．．．思い出しにく．．．かった．．．けど。」

肩で息しながらアリアがそう言っていると．．．カナは冷ややかにこう言った。

「そう．．．けどその程度ね。」

そう言うのとサラに一撃与えた。

「ぐ．．．うう。」

アリアは食らいながらも立ち上がろうとすると．．．カナはキンジを見て

出口に向かって行ったのでアリアは大声でこう言った。

「未だ勝負はついていないわよ!」

「もう終わっているわ、これが実戦なら貴方もう何回死んでいるのかしらね?」

にこりと笑いながら．．．今度は見えるように《ピースメーカー》を出して

こう言った。

「寝ていなさい。」

そう言うときアリアの丁度・・・心臓少し上ら辺に向かって放った瞬間に
アリアは・・・倒れた。

祭り見て

アリアはあの後メデイカの生徒によって応急治療された後に保健室に直行された。

怪我は大したことは無いようであるが養生の為にと一泊となった。そしてキンジとミシエラが家に帰ると・・・何故か扉が開いていた。

「?あれ、俺閉めたよな??」

「ああ、間違いなく閉めていたぞ。」

そう言っただけで開けて気を付ける様に中に入ると・・・。

「兄さん。」

カナが寝ていたのだ。

ソファアの上でぐっすり。

「何故・・・ここに?」

ミシエラがそう言うのとキンジは恐らくと言ってこう答えた。

「カナ状態になっている兄さんは常時神経系、特に脳髓に過大な負担が掛る為

長時間の睡眠を余儀なくされており最大10日前後の《睡眠期》を必要とし

それが終わると・・・カナから金一に戻るのだ。

そして暫くすると・・・カナが眠気眼の状態で起きた。

「ん?・・・キンジ。」

「おはようカナ、何でここに居るんだ?」

「キンジに言わなきゃいけない事があったから。」

それでと言うとカナはミシエラを見てこう言った。

「あ、ジャンヌもおはよう。今日は晩御飯一緒に良い?」

「・・・その前に理由。」

キンジはこのマイペースはとそう思っていると先ずはとカナはキンジに向けて

こう言った。

「おめでどうキンジ、よく私の殺気・・・まあジャンヌがいたらしいけど

無いって事が分かったから取敢えずは及第点。」

「あ、そ。」

「そして私達の家々に代々伝わる剣を良く解放したわね。」

「あれは土壇場だったしあれが無かったらヤバい事が結構あったな。」

「キンジはやればできる子、例のあれに関しては初代よりも高い潜在能力を

秘めているのに昔から女の子に対しては奥手の《やる気のない実力者》って

感じで女の子に対しても悪い人がいたら手を出すけど其れこそ今の私達に

必要な力なのかもしれないね。」

「当たり前だろう？女だからって守ってあげるだけじゃねえ、

女でも俺達男を守る奴だっているんだ。互いに守って守られて

丁度だろう？」

キンジのその言葉を聞いてカナはこう答えた。

「そう・・・それもまた時代なのね。」

「カナ？」

キンジはそれを聞いてどうしたんだと聞くとカナは何でもないと言って

こう続けた。

「気を付けなさいキンジ、あの子・・・アリアは誰かが支えないととんでもない方向に突き進んでしまうからね。」

そう言っただけはこれでお終いと言うと・・・ミシエラがこう言った。

「2人とも食事だぞ、今夜は《馬刺し》と野菜サラダ。」

「おお、分かったぜミシエラ。」

キンジのその言葉を聞いてそう答えるとカナは何やら頭に？マーク浮かべて

こう聞いた。

「ねえキンジ、ミシエラって？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、アイツの本名だよ。今日初めて知ったがこれからはそう言おうと

思ってたな。」

それを聞いてカナはへくくと・・・何やら生暖かい目を向けていると

キンジは何でと思って聞いて見た処こう返した。

「(*?▽?)フフフツ♪、今に分かるわキンジも。自分と彼女との関係が

変わればね。」

「?。」

何じやそりやと思っっているがカナは其の儘台所に向かって行きキンジも向かった。

そして7月7日、武偵校では緊急任務との関係もあつて夏休みが始まった。

そんな中でキンジ達は全員浴衣を着て・・・夏祭りに繰り出していた。

天草は理子に連れられて色々と見て回ることとなり、カイズマスは今日と言う日に備えて予め予約しておいたボートを使って花火の見える場所を

確保する為のチェックに、そしてキンジは・・・

松葉とミシエラと共に時間まで歩いていた。

「キンジ、あれは何だ？」

「ああ、あれは綿あめだな。」

「あれって結構ねばつくけど美味しいわよねえ。」

ミシエラの言葉を聞いてキンジと松葉が説明した後に買って食べながら歩き、

その後も互いにシエアしながら全員分を買って集合場所に向かった。

そして川岸に行ってカイズマスが乗っている船に乗ってキンジ達十理子が

花火を見ながら食事を堪能していた。

そんな中キンジはミシエラを見た。

白に赤い金魚が彩られた浴衣を着て団扇を仰ぎながら見ている

ミシエラを見て・・・キンジは少しドキツとしてしまったがまあ取
敢えずは

他の物見ようと思っていると何処からか・・・虫が入って来た。

カMEMシみたいな虫でありキンジはそれを目で追うと・・・

ミシエラの足に止まった。

「!!」

ミシエラはそれを見て驚いて立ち上がろうとした瞬間によろめい
てしまって・・・右足が椅子にぶつかりそうになった瞬間に・・・キン
ジが嫌さずにそれを止めた。

「おい大丈夫か!？」

「ああ・・・大丈夫・・・!!」

ミシエラはキンジが・・・すぐ近くで・・・

然も体を密着させるかのような感じで近くにいる事に驚いて・・・
悲鳴を上げた。

「キヤアアアアアアア!!」

ミシエラは赤面状態になってキンジから離れた後に・・・小さな声
で

こう言った。

「・・・すまない・・・ありがとう。」

「お・・・おお。」

キンジはそれを聞いて取敢えずはと思っているが・・・キンジはま
だ知らない。

これから更に試練が待ち構えていることに。

服が来た。

あれから解散したキンジ達はミシエラと共に家に帰ると家の前に段ボールが

置かれていた。

「何だこいつは？」

キンジはそう呟いて万が一に備えて家から離れた庭で鎧竜剣でインクルシオになってから開けることにした。

もしも爆弾であったことに備えてである。

そして開けてみると入っていたのは・・・服や小物であった。

添え付けの手紙を見ると宛先はキンジが単位不足によって受けた任務である

カジノ会社からの備品であると書かれていた。

「ええと何々『来場者の気分を害さない為に客、又は店員に変装した上で

警備していただけるようによろしくお願いいたします。』か。」

「確かに、カジノとは言え娯楽施設の一つだ。武偵でもある我々がいては満足に楽しめなさそうだしな。」

懸命だなとミシエラがそう呟いているとキンジとミシエラは互いに

箱の中身にある物を見ることなく服を取り出して互いの部屋に入った。

男女同棲みたいで然も監視とは言え部屋まで一緒と言う訳にはいかないため互いの部屋で着替えることと相なった。

説明書によると店側から役が与えられておりキンジは『青年IT社長』と言う

設定であり中にあるのは如何にも成金ギャンブラーの様な風貌でフォーマルスーツとサングラス、男性用香水が同封されているが上記2つは防弾性になっていた。

「へえ、結構しつかりしているしサイズも合うな。」

キンジはそれを着てそう言っていると・・・ミシエラの部屋から声

が聞こえた。

「何だ・・・これは。」

「?どうしたんだミシエラ?」

「ととと遠山待て!今は入るn」

恐らく入るなど言おうとした瞬間であつたのだろうキンジが迂闊にも中に入ると

そこにいたのは・・・うさ耳のカチューシャを付けてバニーガールの衣装を

身に纏つたミシエラがそこにいた。

「・・・・・・・・」

互いに無言になつているがキンジはこう思つていた。

「(・・・綺麗だな。)」

そう言わざる負えなかつた。

何せバニーガールの服はスタイルの良い女性が着るものである為
ミシエラみたいに細身であるがスタイルが整つたよく言うモデル
体型が

着た事により何故か分からないが・・・目を背くことが出来ないのだ。

お椀型でしつかりとした形の整つた胸部、腰は細くそしてそれなり
にあるお尻と付いている兎の尻尾が可愛らしいのだが当の本人はと
言うと・・・。

「／／／／／／／／／／」

赤面になつていたので、そして等々我慢の限界が来たのかミシエラ
は大声出してこう言った。

「出ていけー!!」

「ウオオオオ!!」

キンジはそれを聞いて驚いて外から出て行つた。

『アハハ、そんな事があつたんですね。』

「笑い事じゃねえぞ天草、俺は危うくあれになりそうだったんだぜ!?」

キンジは大笑いしている天草に対して怒り心頭でそう言うが天草はこう続けた。

『こちらも荷物が届きました、僕は店内で『ディーラー』役です。』

「それじゃあ松葉・・・まさか。」

『ええ、そのまさかですよ？良かったですね遠山君。』

兎さんが2匹見れますよ?』

「嘘だろー!!」

キンジはそれを聞いて最悪だと思っていた。

ミシエラだけでもヤバいのに肉感的に色んな意味で破壊力があり
そうな

松葉までもがそうであると知った瞬間にこの仕事間違いだつたの
かもしれないと悟つたのだから。

そんな中で・・・ピンポンと規則正しいインターホンが鳴つたの
で

まさかと思つてインターホンの映像で確認すると・・・。

「白雪。」

白雪がそこにいたのだ。

何故いるんだと思つてみると白雪はキンジに向けてこう言った。

「あのうキンちゃん・・・言わなきやいけない事があつて・・・入つて良い?」

「ちよつと待て、少し時間をくれ。」

キンジは不愛想にだがそう言つて下に行く前にミシエラがいるで
あろう

部屋の前でこう言った。

「ミシエラ、白雪が来ているからお前は下に行くなよ？変に勘繰られそうだし

それとだ・・・迂闊に入って悪かった。余りにもその・・・綺麗だったから

見惚れてな、今日の晩御飯は俺が奢るからどっかで食べるにでも行くぜ。

じゃあな。」

そう言っただけでキンジは下に降りる中でミシエラは言う・・・

先ほどのキンジが言った『綺麗』と言う言葉を反芻しながら足をパタパタと

動かしながら喜んでいた。

「綺麗・・・綺麗。」

(*?◇?) フフフツツと機嫌が良かったのだ。

「それで白雪、なんか用か?」

キンジがそう聞くと白雪は突如スケッチブックを取り出して何かを書いていると・・・書いたものを見せてこう聞いた。

「キンちゃん、こう言うの見ていない?」

そう言っただけで見たのは・・・凄くうまい絵であったので何だそれと聞くと白雪はこう答えた。

「あのね、これはどうも使い魔らしいの。」

「使い魔ってお前俺達は皆S研用語を知っているわけじゃないん

だ。」

「えつとね、日本でいうと式神。」

「映画にあるあれみたいなか・・・コガネムシに見えるけど?」

「うん、これはスカラベ。タマオシコガネだけど見てない?」

「ああ・・・皆と祭りに行った時にミシエラの所に来た虫だったな。」

「ミシエラ?」

「ジャンヌの本名だ、確かに来たが?」

それだと聞くと白雪はキンジに向けてこう聞いた。

「キンちゃん今度警備の仕事なんだよね?」

「ああ。」

「じゃあ私も」

「駄目だ、上がり症のお前じゃ無理だし人数は揃っているしそれに・・・」

アイツらの事を邪魔者扱いするお前を加えたくはない。」

「ま、待ってキンちゃん!未だ話は」

「もう終わったから早く帰る!」

そう言っただけで白雪を無理やり外に出すと白雪はどんと扉を

叩いていた。

キンちゃんキンちゃんと大声で言う為にああもうと思いつつもそこから立ち去った。

カジノにて

7月24日。

キンジはお台場にあるカジノに客として警備することとなった。既に天草、ミシエラ、松葉の3人がスタッフとして潜入している為、キンジは時間差で入ったのだ。

この都営カジノ『ピラミディオン台場』は二年前にカジノが合法化された際に

建造された一号店であり全面ガラス張りのピラミッド型の施設として

運用されている。

自動ドアを抜けて入った中はクーラーが効いていると同時にレーザー光線で彩られた噴水のあるエントランス・ホールに出てチェンジカウンターに向かってこう言った。

「両替を頼みたい、今日は青いカナリアが窓から入って来たから今日はきつとツイてる。」

これは合言葉である。

青いカナリアとは逆の意味で武偵校の制服は赤茶色な為反対の色である。

そして作り物の一千万円分（もしポカしても自分たちに損0）を色とりどりのチップに換えて貰った後キンジは少し大きな気分になっ

た。カジノに向かった。

一階は海と隣接しているプールの上で水上バイクを操縦しているバニーガールがおりそれを見ながら鼻の下を伸ばしているお客さんがいるが

中にはとんでもない人間も混じっていた。

この一階にあるのは安価に楽しめることができるスロットマシン・

詰る所パチスロが多くある。

観光客から若者と言った常人が大半を占めている為ここは問題な

さそうだなと

思っていると・・・後ろから声を掛けられた。

「おおおおお客様、オオオオ飲み物はいいいい如何でしょうか？」

「・・・大丈夫か松葉・・・!!」

キンジはその声を聴いて松葉と確信して振り向いて・・・驚いたのだ。

バニーガールとなった彼女は色々ムチムチな場所がありぶつちやけた話細身だがスタイルがちゃんとしているミシエラとは打って変わったタイプとなっていた。

特にヤバいのがその胸であり以前に事故とはいえ揉んでしまった記憶を

思い出してしまいヤバいと確信したのだ。

そしてキンジは松葉から胸元から顔に視線を向けなおすところ聞いた。

「其れで聞くがミシエラは？」

「ああ、ジャンヌ？・・・何よジャンヌの方が良いって言うの？」

「そうじゃなくて位置の確認だ、何処なんだ？」

「水上バイクで飲み物出してるわ。」

そう言っ指さしている方向を見ると確かにいた。

「ドリンクは如何かな？」

「ア、ハイ。」

そう言っ立ち去るその姿はどちらかと言えば女子受けしないかと

そう思いたいところである。

「まあ、確かにジャンヌの方が受けがいいけど私だってそれなりに。」

何やらぶつくさ文句たれているが肉感的にこっちの方がどちらかと言えばと

男受けするだろうと思ってはいるが・・・言ったら

何言われるか分かったものじゃないから黙っっているとキンジはこ
うも聞いた。

「それで天草は？」

「ああ、アイツならこの向こうにあるマネー・ホイールで仕事しているけど」

本人曰くあそこは魔窟って言われているから気を付けてね。」

「おお、分かった。其れとジュース貰つとくわ。」

そう言つてキンジはオレンジジュースを持って向こうに向かった。

奥にあるフロアはトランプやマネー・ホイールと言つた高額チップを

賭けている場所であり客層はマジヤバい人間しかいない。

きちんとスーツを着た男性にドレス姿の美女、モバイルPCを持つて

眼鏡を光らせるがり勉に目つきが間違いなくヤの付く仕事の人間などがいる。

「確かにこいつは魔窟だな。」

そう呟きながらキンジはお客さんの振りをしながら周りを歩いていると何やらホールの一隅に於いて人だかりが出来ていたので何だろうと思つてみると

いたのだ。

・・・天草が。

「く・・・俺が3500万円もすられるとは貴様中々だな。」

「お褒めに預かり光栄です。」

天草は金ボタンのチョッキを身に纏つておりにこやかにだがルーレットを

指揮していた。

だが・・・3500万円もすられるのならばもうやめた方が良いんじゃないかと私はそう思う。

「では次の賭けを行いますか？行うのでしたらルールにのっとり100万単位で行われます。」

「・・・良いだろう！ここは運を天に委ね残り半分を全部黒に賭けよう!!」

そう言つて黒に全てのチップをつぎ込んだ男であるがその目付きが何やら

鬼気迫る物でありこれは間違いなく何か起きかねないと判断したので

キンジは横から割つて入るとこう言った。

「ちよつと待つてくれ、この勝負は俺も加わつて良いか？」

「構いませんよ？勝負は何時でも歓迎です。」

それを聞いてキンジは取敢えずと言つて1枚のチップを見せて

それを赤に乗せると天草はこう説明した。

「それではルールですがこの場合はどちらかの勝利となつて

この試合の決着となります。掛け金ですがどちらかが勝利した場合

二倍の配当＋私が保有する残金の半額が加算されますので。」

そう言うと天草はボールをルーレットの中に入れた。

ボールはくるくるとルーレットの縁を滑り・・・カツカツと仕切り板の上で飛び落ちた場所が・・・。

「赤の23, ②人目のプレイヤーの勝利となりましたので36倍＋現在

私が所有する金の半分・・・チップ800の半分の400が配当されます。」

「・・・マジでか。」

拝啓爺ちゃんばあちゃん。

俺・・・億万長者になっちゃいました。

砂のバケモノ

『ウオオオオオオオオ！』

それを聞いた途端に観客が全員総立ちで拍手しているがもう片方の男が

立ち上がって天草二に向けてこう言った。

「インチキだ！こいつはインチキで私を陥れたんだ!!」

大声でそう言うが周りの反応は・・・空白であった。

それどころか何言ってるんだこいつと言わんばかりの目をしていると

男は天草を睨みつけてこう続けた。

「お前たちどうせインチキで成り上がったのだろう！訴えてやる!! 貴様も貴様も俺の全権力を使つて」

陥れてやると言い終える前に天草は自身が持っていた棒で・・・男の喉元に一撃を与えると男は吹き飛んだだけではなく息がしばらくなつて倒れそうになっていると

キンジは男に向けて・・・彼の方に殺気を放ってこう言った。

「オツサン・・・これ以上騒ぎを起こすとツブスゾ。」

「・・・!!」

男はその殺気に対して恐怖した瞬間にキンジは懐から拳銃を取り出して・・・

後ろにいた人間の様なナニカに向けて放った。

「キャアアアアアアア!!」

女性の一人がそれを聞いて悲鳴をあげると客が全員逃げたがキンジが攻撃した

人間・・・いや、それとは違う頭が人間ではなくジャツカルの頭をした何かは

何事もなかったかのように持っている三日月型の大斧を振り上げると天草は

それを素早く避けたがナニカは机を両断すると天草は『村正』を構えて

キンジに『鎧竜剣』を投げ渡してこう言った。

「気を付けてください遠山君、こいつらは『蟲人型』と言うゴーレム。詰まる話が無人兵器ですが直に触れると呪われますよ。」

それを聞いてキンジはだっただらと言ったこう続けた。

「触るんじゃないくてぶっ飛ばしやあいい話だろうが!!」

キンジはそう言いながらインクルシオを展開してノインターターで大斧を弾いて

両腕を斬り落とすが・・・斬った個所が砂の様になった瞬間に再生したのだ。

「何だこいつらは!？」

まるで砂じゃねえかよと言った処である事を思い出した。

ここ最近砂の盗難ばかりが相次いで起きていることに。

「まさかここ最近の砂の盗難は」

そう言いかけっているとナニカは大斧をキンジ目掛けて振り抜こうとすると天草がそれを村正で防御してこう言った。

「考え事するんですしたらこれが終わってからにして下さい!」

そう言いながら攻撃する天草に対してキンジは少し考えて・・・こう言った。

「天草! そいつらを一か所に集めてくれ!! 考えがある!」

「・・・分かりましたと言いたいところですがねエ。」

天草はそう言っただけを見た。

何せ更に・・・10体近い敵が辺りに出てきたのだ。

一体何処からかとキンジは仮面の中でギリりと歯軋り鳴らしている・・・

天草の耳に付けてあるイヤホンから声が流れた。

『ねえ何があったのよ!?! お客さんがいきなり下に押しかけて来るんだけど!?!』

松葉がそう言うとうそだと天草は松葉に向けてこう聞いた。

「すみませんが松葉さん、一つ宜しいですか?」

『?』

「今スグにシステムをハッキングしてほしいんですが出来ますか

？」

『何をハッキングする気よ!?!』

松葉がそう聞くとキンジは大声でこう言った。

「スプリングクラーだ! それだけで良い!!」

それを天草はイヤホンを取って伝えると向こうにいる松葉はこう答えた。

『O・K。それだけならすぐに終わるわ!』

そう言うときンジは天草に向けてこう言った。

「よし! 2人がかりでこいつらを」

「いいや、3人だ。」

そう言う声が聞こえた瞬間に水上バイクで二階に来た・・・

ミシエラが現れるや否や持ってきた2本のシャンパンを人型のナニカに

ぶつけた瞬間にミシエラは割れて中から出てきたシャンパンデ濡れた個所に

氷が張られた瞬間にナニカは砕け散った。

「水でこいつらを止めるのならば私の能力でこいつらを凍らせれば確実に止めれるぞ。」

そう言った瞬間に松葉が全員に向けてこう言った。

『ハッキング終了! 何時でも良いわよ!!』

それを聞いた瞬間に天草はこう言った。

「全体に満遍なくかけてください!」

『了解!』

それを聞いて松葉はスプリングクラーを起動すると上から大量の水が降り始めて

ナニカ達が濡れて云った瞬間に見た目が変わり始めた。

全身が白から黒茶色に変わって動きにくくなった瞬間にミシエラが能力で辺りを凍らすと雨の様に降っていた水はダイヤモンドダストとなって美しく降り注いで

ナニカ達は硬くなって・・・動かなくなったと思いきや自壊した。

「それで?こいつら一体何なのよ?」

松葉がそう聞くとミシエラと天草は氷から何かを探して・・・ある物を見つけた。

それは・・・虫であった。

「コガネムシ・・・前に見た奴だなミシエラの足にいた。」

「・・・成程な。」

「ええ、そう言う事でしょうね。」

「?・・・何がだ。」

キンジは何かに気づいたであろうミシエラと天草に聞くと2人はこう答えた。

「こいつらが大元だ、恐らくS研という式神・・・コントロールシステムの

メインシステムだ。」

「そしてそれらをこれ程多く操れるとなるとそれなりの使い手らしいですね。」

天草がそう言うときシエラは思い出したかのようにこう言った。

『『イ・ウー』にも同じ奴が一人いた。』

「誰だそいつは？」
キンヅがそう聞くとミシエラはこう答えた。

「『砂礫の魔女』《パトラ》。世界最強も魔女で元『イ・ウー』の
ナンバー2だった女だ。」

さらに下へ

『砂礫のパトラ』、それがこいつらを動かしていた奴か？』

「ああ、元No.2だったがブラドとの決闘で敗れた後納得がいかにあろうことか『教授（プロテクション）』相手に奇襲を行ったのだ。奴は元来より出世欲が

常人離れしていたから退学された後に奴は自分の組織を立ち上げたという

噂は聞いたことがあるが何故ここを狙ったんだ？』

ミシエラがそう言ってパラミデイオンを怪しく思いキンジに向けてこう言った。

「済まないがこの地図をこっちの携帯に転送してくれないか？

何か分かるかもしれない。」

「建設時の情報も付けるか？」

「ああ、頼む。」

キンジの言葉を聞いてミシエラはそう答えて周りを物色していると携帯から返事が届いた。

『一応調べておいたわ、換気扇の数とここ数か月の電力消費量と他のカジノとの

比較の差と来客人数、トラックの監視モニター迄調べておいたわ。』
そう言うのと確かにと夥しい程のグラフや数字が立て続けに出てきたので

眩暈がしそうだなとキンジは暫く目を離すがミシエラはそれを目で追っていくと・・・ある所で目を見開いた。

「何かあったかミシエラ？」

「ああ・・・とんでもないものがな。」

ミシエラはそう言って携帯に出ている情報を見せるとキンジと天草も同じように

目を見開いて驚いていた。

その理由が・・・これ。

「見ろ、排気管用のダクトの数と使われる電力量を私なりに計算し

たが

多すぎるのだ。」

他にもあるぞと言ってこう続けた。

「エレベーターの使用頻度、来客数と出る人間の数も合っていないし

建築に使われている水道管に至っては階段が設置されているとい

う
情報があつたぞ。」

「妙ですね、何か運ぶためでしょうか？裏手に船着き場が設置されています。」

「それにトラックの搬入口だが異常だ、2，3台入れば十分なのに10台以上入っても大丈夫ってどんだけだよ!？」

キンジはそう言ってそのトラックが入ってあるであろう場所の情報を見ると

ミシエラはこう続けた。

「ここら辺で近い場所となれば」

「お前たち何している!」

途端にやって来たのは・・・支配人であった。

支配人はこう続けた。

「何していたんだ貴様ら!折角入れてやったのに襲撃なんて起こしやがって!!どうしてくれるんだ弁償は出来るんだろうな!？」

等とどやかく言ってくるのでキンジは携帯電話に書かれている情報

支配人に見せてこう聞いた。

「アンタ俺らに隠し事があるだろう?」

「!!ななな何のことだ」

「電氣量にトラック、換気扇その他諸々の数々一体何しているんだ
アンタハ?」

「いや・・・それは・・・その・・・」

支配人は何やら言いにくそうな顔をしているとミシエラがこう
言った。

「行くぞ、何かあるかもしれない。」

「そうですね。」

「ここに居たつて罅が明かないしな。」

天草、キンジもミシエラ of 言葉を聞いて向かおうとすると支配人が

3人の前に立ち塞がってこう言った。

「駄目だ!そんなことしたら私は身の破滅だ!!」

そう言つて立ち塞がるとキンジが出てきて・・・支配人の腹を思いつ
きり殴つて失神させて通つた。

「ここがそうか?」

「ああ、間違いなくこの下だ。」

ミシエラはキンジに向かつてそう言うとキンジと天草はエレベ
ーターの扉を

力任せに開くとエレベーターはなかったがキンジはこう言った。

「俺が先行して向かう、2人は制服を使って下に下がってくれ。」

「分かりました、両手を巻けば急ごしらえですが手袋代わりになり
ますしね。」

「では行くぞ。」

ミシエラがそう言うのと先ずはキンジがインクルシオを纏ってから降りて

それに続いて天草とミシエラがロープ（無論服で手を守っていません。）を

伝つて下に降りていった。

そしてエレベーターに降りて中に入るとミシエラが携帯電話を使って配線をジャックしてエレベーターの扉を開けると目の前に広がっていたのは・・・

とんでもない光景であった。

「何だよ・・・これ。」

それは・・・男女がくんずほぐれつしたり檻の中にいる人間が猛獣に喰い殺されたりしているのを笑ってみる人たちが大勢いたのだ。

すると近くにいた恐らくボディガードであろう、キンジ達を見てこう言った。

「おい貴様ら、ここはVIP専用の娯楽施設だ！見られた以上は」
殺すと言おうとした瞬間にキンジは透明になってすぐにその男を殴り飛ばした。

「!!」

ボディガードの男は何が起きたのか分からないまま吹っ飛ばされた。

すると音が聞こえたのであろう、何だと思っているとキンジは大型のリボルバーキャノンで天井に向かって放つて爆発した瞬間にこう言った。

「武偵校だ！全員人権侵害の現行犯で逮捕する！」

「後違法売春と薬物使用もです！」

「大人しくしてもらおうぞ!!」

・
・
『イ・ウー』
へ!
」

兄との再会

そして暫くして……。

「良しこんなもんだろ。」

「大体は捕縛しましたし薬物等は保管済みです。」

「其れとだが今松葉から電話が来たぞ、直ぐに応援が来るそうだ。」
ミシエラが2人に向けてそう言った。

周りにはボロボロになった恐らくSPであろう面々がボロボロになつて倒れており

客はと言えば全員1人のベルトを使って数人を縛り上げており

商品とされていた人々は解放されている中で……声が聞こえた。

「酷い事するのう、妾の社交場でここ迄暴れるとは。」

「!!!」

その声を聴いて全員が構えるとステージ壇上から……人が下から現れた。

裸と見間違えること間違いのない程の過激な衣装を身に纏つたお
かっぱ頭の

美人が出てきたのだ。

ツンと高い鼻と恐ろしくプライドの高そうな切れ長の眼、大きな輪
になった

金のイヤリングを付けて額にはコブラを模つた黄金の冠を被つて
いた。

胸当ては冗談のように細く、その上から黄金の飾りがジャラジャラ
と言う様に

胸を覆っており腰回りには細い金の鎖で留めた帯の様な絹布を一
本垂らしていた。

『砂礫のパトラ。』

「あいつがかー!」

キンジはミシエラが呟いた名前を聞いて驚いていると『パトラ』は
キンジ達を見てこう言った。

「よくもまあここ迄暴れたのウ?これでは妾のビジネスが滞つてし

まう。」

「ビジネス・・・まさかこれは貴方が！」

「その通りじゃ、金を返せない又は金を借りた儘高飛びしたり逃げた

人間どもをここで商品として売り払い時には慰安婦、時にはサンドバッグ代わり、

時には近い棄ての労働者として、兵士として妾が仲介人となって送るのじゃ。

こ奴らの体内にある内蔵も血も肉も全てが妾の物。何しても文句は言われまい？」

「ふざけんじゃねえぞー！こんなことしておいてタダで」

済むのかとキンジが言いかけた瞬間に『パトラ』の背後に・・・男性が現れた。

夏だと言うのに全身黒の服と長手袋を身に纏い首元には白い毛皮の様な物が

付いていた。

然しキンジが驚いていたのはその男性の・・・正体であった。

「兄さん」

兄、遠山金一が現れたのだ。

カナメから人格が元に戻った金一がキンジを見てこう言った。

『『鎧竜剣』・・・そうか、やっと発現したのか。俺ではなくお前がと

は

運命とは皮肉とも言うべきか。」

そう言つて金一はこう続けた。

「キンジよく聞け、俺達がこれから何をするのかを。」

「……」

キンジは何だと思つて聞いていると金一はこう返した。

「俺と『パトラ』はこれから『イ・ウー』に乗り込んで

『プロテキシオン』を討つ。」

「!!!」

それを聞いて驚いていると金一はこう続けた。

「その為の武器は俺達が持っている。」

そう言つて麻袋から見える紅い髪の毛を見て……キンジはこう言つた。

「アリアか？」

「そうだ。」

それを聞いて金一はあつさりと答えると金一はこう続けた。

「俺は『第二の可能性』……『お前とアリアが《イ・ウー》を滅ぼすと言つ

可能性を一時考えていたがお前はその気はない事が分かつてホツとしていた。」

そう言つと金一はミシエラに向けてこう言つた。

「ジャンヌ、お前の事はカナメを通して見ていて既に言っているが俺からも一つ言つておきたい。」

「……何か言うのは自由だが我々の事をとやかく言われたくないものだな。」

「ハハハなあに、簡単な事だ……」

「……どうか頼む、《キンジを支えてやって欲しい》ただそれだけだ。」

「其れならば松葉達も。」

「そうだな、キンジにはもう多くの仲間がいる。俺の様に全てを一人で

やってのけてしまつて孤独になつてしまつた俺よりも……先代達よりも。」

そう言つて俯くが暫くしてこう締めくくつた。

「キンジ、これは俺からの警告だ。《イ・ウー》には手を出すな、それが俺が兄として言える言葉だ。」

そう言つと『パトラ』が金一に向けてこう言つた。

「はよいくのじゃ金一！妾を『退学』させた報いは『プロテクション』で

償わせてやるのじゃ!!」

「ああ、今行く。」

金一はそう言つて向かおうとすると……キンジが透明化を解除して

金一の目の前に出てこう言つた。

「生憎だがそれではいどうぞつて言うほど俺は大人じゃないから

な。」

それを聞いて金一は溜息ついてこう言った。

「はあ・・・良いかキンジよく聞け、『イ・ウー』は只の超人育成機関ではなくあらゆる軍事国家ですら手を出せずについて超能力を備え、核武装した

戦闘集団にしてテロ組織だ。奴らの中には世界侵略と言うとんでもない事を

仕出かす連中がいてな。俺は反対派でもあり純粹に実力を伸ばそうとする連中と

接触して情報を聞き出して見つけたのがアリアだ。」

「だがアリアは『イ・ウー』を憎んでいるぜ。」

『プロテキシオン』を見れば意識を変えるだろうがそれは俺の思っているものとは違う。」

「金一!!」

「ああ分かっている、今行く。」

そう言った瞬間にキンジが・・・吹き飛んだ。

「遠山君!」

「キンジ!!」

2人が驚いていると金一はキンジに向けてこう言った。

「キンジ、お前は来るな。これが俺としての最後の仕事だからな。」

そう言って・・・突如煙幕が辺り一帯を覆った。

「!!」

ミシエラ達はいきなりの事で驚いていると声が聞こえた。

「キンジ、俺はお前こそが可能性だと信じているぞ。」

その声が聞こえて暫くして・・・金一は姿を消した。

戦いの時迫る

「遠山君！大丈夫ですか!？」

「大丈夫かキンジ!!」

天草とミシエラが互いにキンジを心配しているとキンジはインクルシオを解除してこう言った。

「ああ大丈夫だ、威力は強かったがそんなに痛くはない。」

そう言いながら立ち上がるとキンジはミシエラに向けてこう聞いた。

「ミシエラ、一つ良いか?」

「ああなんだ。」

『『プロテクション』』って言う奴はアリアにとってどんな奴か分かるか?」

「・・・済まないが謁見できるのは幹部クラス・・・

それこそブラドやパトラだ。私では見ることも出来ない。」

「なら『イ・ウー』だが2人はどうやって行くか分かるか?」

「其れならば方法は一つ・・・と言うよりもこれしかない。」

「?？」

一体何なんだと思っているとミシエラはこう答えた。

「・・・魚雷で行く。」

「・・・ハイ?」

それを聞いてえ?マジかと2人は完全にそう思っていた。

何で魚雷なんだと思うのと同時にしがみ付いていたのかよと思っ
ているが

ミシエラはこう続けた。

「正確に言えば一人乗りように改造された潜航艇だな、第二次世界大戦時に

日本が海中特攻兵器として使われていた人間魚雷『回天』をベースにして

長距離航行を可能にした奴だ。私ともう一人潜入した奴がいてそれならば行けるはずだ。」

成程などキンジはこう考えていた。

「まあ考えたらテロリスト集団をお人好し（、・▽・）ノヨロシクみたいな感じで入らす真似は流石に無いだろうし理子が起こしたミサイル事件で

気が立っている時に入国審査クリアできるはずねエもんな。」

納得いくなとそう思っていると天草がこう聞いた。

「其れは今どこに？」

「理子も含めて3機ほどある、人数的には一機に付き2人が限界と言った処だ。」

「となると全部含めますと6人となりますね。」

「ああ、だがそれほどの人員・・・それもパトラと戦える奴なんて限られるぞ?。」

ミシエラの言葉に頭を悩ませていた。

只でさえ凄腕の武偵である金一に加えて元とは言え

No.2と名高いパトラ相手ともなれば必然的に戦える相手は限定されるしミシエラはどうだと聞くとミシエラはこう返した。

「私は水があれば戦えるのだがもし奴にピラミッドがあれば

勝てる見込みが0としか言いようがないな、奴はピラミッドの中では

ほぼ無敵状態だからな。」

「限定的最強ともなれば・・・やりようが限られますね、超偵は自分に適したフィールドにおいては能力が跳ね上がりますからね。」

天草はそう言ってどうするべきかと考えていると・・・キンジはある人間を思い出したが・・・どうだろうと考えていた。

何せ今までの事を考えると正直な所協力してくれるかと言えるわ

けが無いのだ。

だが戦力不足である事も真実、ぶつちやけた話猫の手も借りたいほどなのだが

更に問題があった。

それは・・・これ。

「6人なんてどうやって集めれば良いんだよ。」

正にこれだ。

キンジのコミュ障は言つての通りでそんな急にともなれば浮かぶのが一人だけ。

「(不知火・・・事情を知らない奴と一緒にどうだよそれ!? だけどなあ。)」

背に腹は代えられないと思い電話しようと考えておりそしてもう一人ともなれば思いつく人間が・・・彼女しかいないし正に空いている人間だろうなあと思

いながらもこう考えていた。

「・・・こうなったら背に腹は代えられねえな。」

そう思いながらキンジは天井を眺めていた。

その後カジノで起きた人身売買と違法薬物使用と保持で現行犯逮捕された面々はその殆どが大企業の社長や職員、更には政府の中核にいる奴ら迄いたためか

てんてこ舞いになっている中でキンジは蘭豹先生にアリアが誘拐されたことと

その中に自身の兄貴が関わっていることを伝えると蘭豹先生はキンジに耳打ちでこう言った。

「後で職員室に來い。」

そう言つて離れていった。

そして調査の為にキンジ達を蘭豹先生が中に入ると何と本来ならば

帰っているであろう教員達が全員集まっていたのだ。

そして蘭豹先生がこう言った。

「ほんでお前これからどうするんや?」

キンジにそう問いを聞く蘭豹先生だったがキンジはこう答えた。

「俺は正直な所アリアなんてどうでも良いですけど『イ・ウー』を放置していたらこれからも被害が拡大する恐れがあります。」

「お前・・・これは今までのヤクザ潰しとは次元が違うって事を考えてか?」

「ハイ。」

キンジは睨みを利かす蘭豹先生二向けて力強くそう言つたと暫くして・・・

蘭豹先生はこう呟いた。

「・・・全く、お前はやっぱりアサルトだな。」

そう言つたと蘭豹先生はこう言った。

「よおし分かった!武器は好きなもん幾らでも持つていけ!!

援軍がいるなら特別講習で形でアタシら教員も向かう!それで出立は何時だ!!」

「それは」

キンジがそう言いかけると・・・携帯電話が鳴り響いた。

「ああスイマセン俺です。俺だ如何した？」

キンジが電話の向こうにいる人間に向けてそう聞くとこう答えた。

『キンジ朗報だ、全てのセッティングが整った。第七格納庫に来てくれ。』

「分かった、直ぐに向かう。」

キンジがそう言って電話を仕舞うとキンジは蘭豹先生に向けてこう答えた。

「今日です。」

作戦会議

キンジはあの後不知火ともう一人に電話を取った後ロジにある船舶用のドックに入った。

「嫌に匂うな。」

キンジはそう呟きながら中に入って奥に進むと・・・カイズマスがこう言った。

「キンジこつちだ!」

そう言ってキンジが向かうとそこには・・・魚雷があった。

「二応理子が持って来てくれた奴で3基、調整は終わっているし機材も

準備オーケーだが誰が来るのだ?天草は決定として。」

そう聞くと・・・。

「キンちゃん!」

先ずは白雪が嬉しそうな表情でやってきた。

「やっと私を選んでくれた・・・あの泥棒猫じゃなくて私を・・・!!」
そう言いながら涙を流しているのを見てカイズマスは耳打ちしてこう聞いた。

「本当に大丈夫なんだろうな?何かしやしないかと我は心配だぞ?」

「大丈夫だ、俺が監視するしまさか白雪があほな事を俺の目の前で
するとか

ないだろうしな。」

そうか?と疑い深い目をしていると・・・ミシエラがやって来た。

「キンジ、こつちは何時でも行けるぞ。」

「武器の方は大抵のは揃えておきました。」

天草がそう言って全員分のC装備を持って来て白雪はじろりと睨んでみると・・・更に2人やってきた。

「遠山君お待たせ、いきなりだったけど来れたよ。」

「悪いな不知火、今この状況で来れて且つ即戦力になれるのはお前
と・・・

お前も来たんだな『詠』。」

「あら遠山君？呼んできてももらったのにその言い草は何なんですか!?」

ムーと頬を膨らませる淡い金髪で張り出すほどの大きい胸を持った少女

『青岩 詠』はこう見えてもアサルトに所属しており戦闘能力(特に近接戦)が

高いが赤貧である為アルバイトをして過ごしているのだがキンジ

が
一年の頃からの中でありこれまでは長期任務の為武偵校では
公欠扱いとなっていた。

「それでだけど僕たちはどの担当にするの?」
まだ決めてないでしょと聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、取敢えず今回の目的は救出が第一になっているが相手が相手だ。超偵は天草と白雪とミシエラに、残りは・・・裏切ったプロの武偵に充てようと

思っている。」

「丁度3・3だね、それにしてもだけど・・・やつと僕たちを
頼ってくれて嬉しいよ遠山君。」

「え?」

「皆知っているんだよ?君が危ない橋を渡っていること位は
重々承知しているんだけど『武偵憲章第4条《武偵は自立せよ》』つ
て出てるから皆影から心配していたんだけど要請されていなかった
から何もしなかったんだ。

だからこそ僕と《青岩》さんが皆の代表として遠山君を助けるから
宜しくね。」

不知火がそう言うのを聞いてキンジは少し恥ずかしそうにしてい
ると《青岩》もこう言った。

「遠山君、あのお兄さんの時私は何も出来ませんでした。

私にバイトの紹介してくれたどころか両親の借金まで面倒掛けて
貰ったのに

私は何も返せてはいません。だから今回は精一杯頑張りますから期待してください!!」

キンジの目の前でフンと鼻息荒らして両手を前にすると・・・その爆乳が

腕に挟まるかのように形を変えてキンジは慌てて視線を逸らした。

「それじゃあ全員集まったから説明するぞ。」

カイズマスがそう言うのと全員がその説明を聞いた。

「今回お前たちを送るこの魚雷、正式名称は

『海水気化魚雷（スーパーキャピテーション）』で本来は高速度での魚雷兵器を

嘗て日本軍が使っていた特攻兵器『回天』をベースにしつつ中身は最新鋭の

ステルスシステムが搭載された奴で恐らくはメインコンピューターで

到着場所をインストールした後は其の儘作戦終了まで待機して終わったと同時に

帰還するようにプログラミングされていることが分かった。そこでだ、

衛星システムを使ってエリアを連れ去った連中の顔写真を元手にして調べたところ例のカジノから出ていった船があり調べてみたら船籍番号から会社名は

『レッドサン観光会社』で所属はエジプト。主な仕事は観光業だが

キンジの話を基にするなら奴らは観光会社で観光客をここに送って薬や

人身売買等で収益を得ていたんだ。客だが売る人間と売られる人間を別個にして

観光に偽造すると言った嫌味な方法だな。

社長は『クレシア・プラリナ』という生まれはアメリカという設定になっているがこいつは偽名だろうな、奴の船はここで一旦止まって移動しているが衛星で

見ようとするとジャミングされて分からない事から察してここだと推測できる。

話は戻すがこの魚雷は時速107ノットと言う速度で潜航できるため

まあ大体9時間で着くというのがこちらの計算だ、先生方はお前らが到着したと

同時に飛行機で現場に急行することになっているから先行部隊は先に

アリアを救出することを第一とするように。」

カイズマスがそう言い終えると全員が顔を見せあつて頷いているとカイズマスはこう加えた。

「忘れない様に言っておくが内部には色々と機材があるが既に自動操縦で

操作するようになっていいるから絶対に触るんじゃないぞ?」

良いなと言うとキンジ達がそれぞれ乗り込んだ。

乗る人間だがこうなっている。

①キンジ、白雪

②天草、ミシエラ

③不知火 詠

この様になっており全員が中に入ると蘭豹先生が全員に向けてこう言った。

「ほんじゃまアタシが言う事と言ったらこれ一個や・・・」

全員生きて帰って来い!死んでもやぞ!!」

そう言うときンジ達は全員了解と言ってハッチを閉めて・・・
それぞれ向かって行った。

潜入

キンジ達がアリアがいるであろう海域に向かってかれこれ10時間経過した。

朝の7時に出勤したとして既に10時間が経過した。

そして内部に搭載されているソナーを見てみると幾つもの巨大な物体の反応が

確認されたのだ。

「何だこれは?」

「キンちゃん、何かあったの?」

白雪がそう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、何か感知したようだ。ちよつと潜望鏡で確認してみる。」

そう言つてキンジが潜望鏡が出せるくらいの深度迄上にながって
見てみると

そこで目にしたのは・・・自然の神秘であつた。

「すげえな、鯨がこんなにな。」

そう、巨大な物体の正体は鯨でありその吐き出される水柱があつたのだ。

然もシロナガスクジラで絶滅危惧種にカウントされているタイプ
なので

貴重な光景である。

すると通信が来た。

不知火『遠山君、今の見たかい?』

キンジ「ああ、中々の光景だな。」

ミシエラ『これ程のシロナガスクジラを拝める日が来るとは

良い事もある物だな。』

互いにそう言つてキンジ達はその間を進むと霧の向こう側で船の
様な

シルエットが見えたので確認してみるとそれは・・・キンジにとつ
て

因縁深い物であつた。

「ア・・・アンベリール』号・・・！」

豪華客船『アンベリール』号。

金一が失踪し自身がアサルトからインケスタに映ったあの事件の船が

そこにいたのだ。

沈没したはずだとそう思っていたが恐らくサルベージされたのだろう、

かなり改造されていた。

タンカーの様に見える甲板の上には巨大なピラミッドが増設されている為喫水線が沈みそうな位に低くなっていた。

『パトラは自身の力を最大限に引き出すためにあれを造った様な、

奴は超偵におけるランクは25G。世界最強の魔女に数えられる程だ。』

「詰まる話俺達はアイツの得意なフィールドで戦う

羽目になつているといふ訳か。」

『そうだ、私達がああ船に入った時点で奴が動くかもしれないから気を付ける。』

ミシエラがキンジに向けてそう言った後に全員は潜水艦から出てきて

ロープを投げて引っかけて上に上がっていくと船の上は最早船とは言えないものとなっていた。

ピラミッドは頂上部分がガラス製となっており周りは砂で出来た陸のような

部分が増設されており更には10メートルはあるであろうパトラの座像が

四方にそれぞれ一体ずつ存在していた。すると白雪がそれを見てこう言った。

「これ・・・かなりアレンジされているけど古代エジプトのアブシベル神殿を模しているけど凄い魔力だよ。これ全部魔力で造っているし多分だけど

鯨たちもそれで操っていると思うよきつと。」

そう言うのと天草達もこう続けた。

「恐らくは魚雷や潜水艦対策なのでしようが大型限定ですね、だからこそ」

小型艇を使う僕らにはなんの見向きもしなかったのでしょうね。」

「然しあいつの自身に対する評価は過剰評価も大概だな、前よりも悪化していると見た方が良くぞこいつは。」

ミシエラはパトラの座像を見て頭を搔きながらそう言った。

確かにまあ自己顕示欲が大き過ぎるなと思いつつ思っていた。

「(だからこそ『イ・ウ』を追い出されたんだろうな、内部における不和を取り除くために)」

キンジがそう思いながら周りを見ていると不知火がこう言った。

「皆、こっち来て。トンネルがあつたよ！」

それを聞いてキンジ達が見てみると確かにだが砂で出来ている様な

感じであつたがために万が一を考えなければならぬと思つてこう言った。

「よし、皆慎重に行くぞ。これで万が一砂の中に閉じ込められたら窒息するからな。」

それを聞いて全員が警戒して中に入った。

だがそれは杞憂であつた。

分かれ道だらけで迷路のようになってはいるが通路には恐らくは道標であろう、上に向かえる階段のある場所に篝火が燃えていた。

恐らくこれはキンジ達の挑戦状も含めているのであろう。

《我々は逃げも隠れもしない、我々に勝てると思うのならな。》

そう言っている様な感じであった。

そしてその儘上に上って行くと巨大な扉がそこにあった。

鳥や蛇で描いている象形文字（ヒエロクリフ）があったので天草達が解読するところ答えた。

「キンちゃん、ここは《王の間》らしいよ。」

「詰まる話がここにパトラと遠山君のお兄さんがいるという事ですね。」

「全員武器を構えておけ、何時でも戦えるようにな。」

そう言うとき白雪が自身の頭に結っている白いリボンに手を掛けようとする

キンジを見て辞めるが他は違っていた。

不知火は銃を、詠は背中に背負っているバスターソードを、天草は《村雨》を、ミシエラは今回の戦闘に伴い封印を解除されており嘗て最初に

キンジに対して使った赤い宝石があるネックレスを、

そしてキンジは《インクルシオ》を顕現させた。

そしてキンジが扉に手を付けるか否かの所で・・・扉が自動的に開いたのだ。

そして中を見て驚いたのだ。

中には豪華な絨毯が敷かれた床石も室内を取り囲む石柱も、奥に据えられている巨大なスフィンクス像が全て黄金であったのだ。

すると突如として・・・声が聞こえた。

「よくぞ来たのう、極東の愚民ども。」

「「「「!!!」」」」

全員が声があつた方向を見るとスフィンクス像の真下に玉座があり

そこにいたのだ。

「よう、久しぶりだなパトラ。」

「ほう、よく来たのウ。遠山キンジ。」
パトラがそこにいたのだ。

船内戦闘

「よう、パトラ。お前を逮捕するぜ『未成年略取』と『違法賭博及び人身売買』」

その他諸々込みでな！」

そう言つて全員が武器を構えるとパトラはニヤニヤと笑つてこう言つた。

「何ゆえ妾が貴様らの極東の猿共はこの『王の間』に入れてやったと思つておるのじゃ？」

「自首だと嬉しいのですがね。」

天草は村正を構えてにこやかに笑つてそう聞くとパトラはこう答えた。

「けちをつけられたくないからじゃ。」

「けち・・・何をだ。パトラ。」

ミシエラがそう聞くとパトラは・・・怒り心頭でこう言つた。

「妾は『イ・ウー』の連中に妬まれておるのじゃ！ブラドを呪い斃したにも

関わらずに奴らは妾の力を認めなかつたのじゃ!!『ブラドは天草の持つ

村正によつて打ち負かされた』と言いおるのじゃぞ?!群れるなど弱い生き物の

習性じゃと言うのにあ奴らは妾を・・・妾を!!」

「・・・小さいですわね貴方。」

「何じゃと!?!」

詠の言葉を聞いてパトラは更に怒りを露わにするが詠はまるで小さな子に

諭すかのようにこう続けた。

「有史以来人類は常に仲間を作り、国を作り、栄華を極めていました。た。王がたった一人で国を作れると言えますか？

たった一人で広大な国を作りましたか？いいえ違いますわ！私達

は常に仲間と共に駆け抜けてきました！常に共に行動し、そして今ここにいる！！

それに引き換え貴方は常に一人、自分の力を過信している貴方には誰かと共にいたいと言う願いが無い限り誰も答えはしませんわ！！」

「貴様・・・！！」

詠の言葉を聞いてパトラはギリギリと歯軋り鳴らしているが当の本人は

にこやかに笑っていた。

するとパトラは遂に逆切れしてこう言った。

『『イ・ウー』の次の王はアリアではない妾じゃ！妾が貴様らを倒して

アリアの命を握って話せば・・・王位を譲るに違いないのじゃ！！』

「哀れだなアイツ、自分の夢ばかりを見て何も考えてねえ。」

キンジはそう言ってパトラを見ていた。

自分の考えが全てで自分の考えとは違う事＝悪と言う阿保めいた理論に

魅入られているのだ。

そう言う人間ほど自分の夢が壊れていくと自暴自棄になって

何をしでかすか分かったものではないからだ。

然しそれを聞いたパトラはむきーつと地団駄踏んでこう続けた。

「聞くが良い愚民どもが！妾は常に先を見て動いておる！

今回も『イ・ウー』の女王となった後の事を考えておるのじゃ！！妾

はのう・・・

・・・男は嫌いなものじゃ！変な気分になって嫌になる、女王になつたら

側近は美女で固めて後で使う奴らは呪い殺さずに封じようとしてジャンヌや

リュパンの曾孫を呪おうとしておつたのに貴様らが

邪魔立てしたせいでー！！

「呪い・・・成程、ミシエラさんの足元にいたり理子さんの周りにいた

あのコガネムシは貴方の刺客と言う事ですね、王を語るには随分と姑息で正に小悪党なやり方ですね。」

天草がそう言うときんじがこう続けた。

「其れに手前のやり方は絶対に無理だな、どんだけ男が嫌いだからって手前らは所詮は傭兵みたいな仕事をしているから男とは切つても切れねえんだよ。」

手前の言っていることはまるで我儘なクソガキが言っていることと

同じなんだよ！！

それを聞いて遂にパトラは激昂してこう言った。

「もう良いーここに居る女は皆妾の僕にして男はここでコロシテヤル！！」

そう言った瞬間に辺りの建物が全て・・・砂金に変わった。

「！！！！」

全員が突然の事で驚いているときんじが全員に向けてこう言った。

「皆近くにいる奴とペアになるんだ！なるべく離れるな！！」

そう言った瞬間に・・・きんじは背後に何かあると気づいて鎧竜剣を

背後に向けた瞬間に・・・パトラが曲刀をきんじ目掛けて振り下ろされたのだが

それを受け止めたのだ。

「貴様!!」

「俺から先とは・・・運がねえなお前!!」

「何・・・!!」

パトラは何だと思つた瞬間に・・・背後から攻撃が来ることを感じて避けた。

それは槍。

機械仕掛けの様な形状をした槍の先にいたのは・・・一人の少女であつた。

「ジャンヌ!!」

「私が怖いか?パトラ。」

「怖いじゃと!撤回せよ!!妾はエジプト一国程度では収まらない!いずれはこの世の女王になる存在じゃぞ!銀氷の魔女よ!

その言葉霸王(ファラオ)に対する冒瀆としれ!!」

「は!隠れて虫に命令を出して自分はこんな悪趣味で低俗な船に籠っている

貴様のどこを王と呼べるのだ!裸の王様も大概なものだな。

ああ済まないな、カジノでは地下にいたから所詮は穴倉の中で悪趣味な事をして

稼ぐ『成金の土竜』と呼んだ方が正しいかな!!」

そう言いながら攻撃してくるのでパトラは防戦一方の中でこう言った。

「は!妾はこのピラミッドの中では無限の魔力。つまり無敵なのじゃぞ!!

貴様等直ぐに」

「お前は何か勘違いしているようだなパトラ。」

「何じゃと?」

「確かに貴様はピラミッドの中では無限の魔力だ、だが貴様は・・・無敵に等なれない。」

何故ならと言つた瞬間に・・・パトラの腹部から強烈な痛みが襲い掛かつた。

「な・・・あ・・・!!」

何故と思つて振り向くとそこにいたのは・・・インクルシオを纏っているキンジが自身の背後にいたからだ。

「何時の間に・・・」

「よそ見している暇などあるか!!」

ミシエラはそう言つて槍の取っ手部分で今度は腹部の中心に穿つた。

「がは」

パトラはあまりの攻撃に肺の中の酸素が吐き出されたと同時にふらふらになりながら立ち上がるところ言つた。

「さてと付き合つてもらうぞパトラ、貴様の『砂上の王の椅子』が崩れ落ちる迄な!!」

ミシエラがそう言つたと同時に攻撃が始まつた。

パトラ戦

「クウウー！何なんじゃこれは!？」

パトラはそう言いながらも黄金の丸盾を作って防御しようとする
と……。

「後ろが留守だ。」

「がは」

インクルシオによって透明化しているキンジが攻撃して……。

「力が弱まったぞパトラ！」

ミシエラが自身の氷結能力を使って丸盾を突き破って貫く手前
で……。

パトラが曲刀で往なすも続けてきた蹴りに対応できずに蹴り飛ば
された。

「ごほ。」

壁に激突して酸素を吐き出したパトラは憎らしい表情でキンジ達
を

睨みつけていた。

何故自身の魔力が通用しないのか？

何故無限の力を手に入れた自分がここ迄追い込まれているのかと
思っている

ミシエルがこう言った。

「確かに貴様は無限の魔力を持っている。」

「？」

「このピラミッドの中では無限の魔力で貴様の能力は最大限に
引き出されている……だが一つだけ引き出されていないものがあ
る、

それが何か分かるか？」

それを聞いてパトラは何じゃと聞くとミシエラが何か言おうとし
た

ところで……

・・・何処かで声が聞こえた。

「体力ヨ。」

「!!」

キンジとミシエラは今の声を聴いてまさかと思つて周りを見て・・・その人間が見えた。

茶色に近い長髪を三つ編みで編んで現れた絶世の美女に・・・化けた存在。

「兄さん。」

「久しぶりねキンジ。」

遠山金一改めカナが現れた。

2人が互いに身構えているとカナがこう答えた。

「確かにパトラはこの中では魔力が最大値迄上がれるけどその代わりに体力は

其の儘変わらないから能力は上がつても実力は其の儘、だからこそ戦闘経験が高い2人のコンビネーションには付いて行けない。それが貴方の敗因よパトラ。」

「馬鹿な・・・あり得ない。」

『『あり得ない事はありません。それが世の中のルールよパトラ。』』

「うぐ・・・。」

パトラは苦々しい顔をしていると・・・カナがにこりと笑つてこう言った。

「そういえばだけど・・・攻撃しなくて良いのかしら?」

「?」

パトラはそれを聞いて何じやと思つていと・・・突如としてパト

ラが

縛られたのだ。

「!!!」

それを見てキンジ達が驚いていると・・・砂嵐が収まったのだ。するとよく見たら巨大な例のバケモノが天草達と戦っていたのだが

それが崩れるかのように崩れたのだ。

「一体誰が・・・？」

キンジがそう呟くと・・・上から声が聞こえた。

「貴方がカナの弟？」

「！誰だ!!」

キンジが銃を向けるとそこにいたのは・・・小柄な少女であった。黒髪ツインテールの少女が持っているヨーヨーを使って近くにあらゆる柱目掛けて放って括った後にまるでアクションスタントマンの様に移動して下に着くと

キンジに向かってこう言った。

「初めまして、私は『月詠 調』。カナの相棒、貴方の事は
ずつと監視していたわ。」

それを無表情でそう告げた後にもう片方の腕にあった・・・ヨーヨーの糸を見てカナに向けてこう言った。

「カナ、これで良い？」

「ええ、よく頑張ったわね『調』。」

「うん、だから褒めて。」

「よしよし。」

カナはそう言っつて『調』の頭を撫でていた。

まるでねこの様な感じだなと思っつていと『調』はこう続けた。

「それとアリアなんだけど取敢えずはホールの椅子に寝ているから後で回収するの?」

「そうね、ここに長居するつもりはないしね。」

そう言っつていと・・・パトラが大声でこう言っつた。

「ええい離さぬか無礼者が!妾を誰と心得ておる!!」

いずれは世界のフアラオにもなるこのイギヤアアアア!!」

「煩い黙っつて、これ封印するのに集中するんだからうっつかりどっか

が

吹き飛んでも知らないよ。」

「!!」

パトラは『調』の無表情の奥にある確かなる目を見て恐怖して黙ると

『調』はこう続けた。

「大体貴方は何時も下に見るから負けるんじゃないの?私にすら勝てないもん。」

「!!」

パトラはそれを聞いて怒りを露わにして何か言おうとした瞬間に『調』が指で糸を弾くとパトラの全身から血が噴き出した。

「Q?!!」

パトラはその痛みで悶え苦しむと『調』はこう続けた。

「分からない?この『対魔力封印』用に編み込んだこの糸は魔女連合から

貰つたものだから貴方の魔力はもう使い物にならないって事が?」それを聞くもパトラは余りの痛みで泣きそうになっているが・・・カナが何かを感じて全員に向かってこう言っつた。

「皆海から離れて!!」

そう言っつた瞬間に・・・船が大きく揺れた。

「な・・・ナンダ!？」

キンジがそう言うのが全員船の揺れに対応するために近くにある柱に掴まったり

剣で床を突き刺して暫くして収まった瞬間に・・・何かを感じた。

「遠山君!」

「ああ、天草も気づいたか!？」

天草とキンジがそう言っていると殆ど全員が・・・震えていた。

「キンちゃん・・・怖いよ。」

「何だこの悪寒は?」

「寒くて・・・震えが止まらないですわ。」

「カナ・・・怖いよ。」

「大丈夫よ『調』!」

カナ『調』に向かってそう言うが自身も震えていた。

正直な所キンジも震えている中で・・・ミシエルがこう言った。

「この悪寒・・・まさか!？」

「おいミシエラ!？」

突然ミシエラが何かを感じたかのように外に出てみると・・・

先ほどの鯨どころか鳥一羽も姿が見えないのだ。

そしてアンリベル号のすぐ近くの海面が盛り上がって・・・現れたのだ。

潜水艦が。

「これは・・・潜水艦?」

キンジがそう言うのとミシエラがこう答えた。

「そうだ、あれこそ『イ・ウー』の本拠地・・・潜水艦『ボストーク』号。」

当時のソ連から強奪した潜水艦だ。」

「マジかよ。」

キンジがそう言った瞬間に・・・吹き飛ばされた。

「遠山!？」

キンジが吹き飛ばされたのを見てミシエラが近寄るとカナが出て・・・

こう言った。

「キンジ、あれこそが『イ・ウー』の『プロテクション』よ。」

「あれが・・・リーダー。」

キンジは少し痛みがあるがそれでも船の柵を掴んで見てみると現れたのは

一人の男性。

ひよろ長い瘦せた体。

鷲鼻に角ばった顎

右手には古風なパイプ、左手にはステッキを持った20歳ぐらいの男性

するとカナが・・・その男性の事をこう呼んだ。

「あれこそが『プロテクション』・・・『初代シャーロックホームズ』よ。」

それは全ての武偵の大元にして最強の存在。

アリアの先祖でもある『シャーロックホームズ』その人であった。

シャーロックホームズ来る

『初代シャーロックホームズ』って嘘だろ生きてんのかよ!』
何年生きてるんだアイツはとキンジが大声でそう言うとかナはこ
う続けた。

「そうよ、あれは『モリアーティ』との決戦で滝に落ちた後も生きて
いて今や『イ・ウー』のトップ。そして奴こそがボストーク号を強奪
した世界で

最も手を出すことすら出来ない犯罪集団よ。」

カナがそう言いながら拳銃を構えようとすると・・・シャーロック
ホームズが

ニコリとキンジ達を見て笑ったのだ。

「何?」

キンジはそれを見て嘘だろうと思っていた。

ここから結構離れているはずなのに何でこちらに向かって笑みを
浮かべたんだと思っていると・・・水面に2本の白い線が見えてカナ
がこう言った。

「皆何かに掴まって!!」

そう言った瞬間に・・・船の船底が爆発して水飛沫を上げた。

「!!!」「ウワアアアアア!!!」「!!!」

全員それによって悲鳴を上げながら掴まっていると・・・声が聞こ
えた。

「ちよつとここ何処よ?! 一体何があつたのよ!!」

「今この時にアリアが起きたのかよ!!」

恐らく今の爆発であろうと考えていると・・・アリアを見てカナが
こう言った。

「キンジ! 今すぐアリアを彼に会わせないで!!」

「?」

キンジは何でと思っているとアリアはカナを見てこう言った。

「カナ———!! アンタには夏休みの時の借りがあるのよ!!」

今この場でリベンジして倍返し・・・して・・・。」

アリアはそう言いながら視線の先にいるシャーロックホームズを見て……

目を大きく見開いて驚いていると……アリアは尻もち着いて座ってしまおうと下から黒煙が上がっているのに気づくや否やキンジが中にいる不知火達に向かって

こう言った。

「不知火！船尾側に救命ボートがあるはずだ!!それを使って脱出しろ？」

「遠山君は!？」

不知火がそう聞くとキンジは前を見て……こう言った。

「俺はちよつと野暮用」

と言った瞬間に……天草達が現れてこう言った。

「抜け駆けは厳禁ですよ遠山君。」

「天草。」

「そうだよ遠山君、ここまで来たんだ。最後まで付き合わせてよ。」

「不知火。」

「キンちゃんがいるのに私だけ出ていくなんて正妻として許せない

よ!!」

「イヤ何言ってるんだ白雪。」

「私はまだ遠山さんに借りを返していませんのでそれまでは地獄の果てまでも

付いて行きますよ。」

「詠。」

「遠山、ここに居る全員がお前の指示を待ち望んでいる。さあ、命令しろ。『シャーロックホームズを逮捕する』と。」

「ミシエラ。」

キンジは周りを見てこう思っていた。

「(全く馬鹿ばかりだな本当に。)」

そう思いながらもキンジは立ち上がってこう言った。

「ようし……そんなじゃ一丁暴れますか」

「待って。」

「？」

キンジはアリアが止めるとアリアはこう続けた。

「ねえ可笑しいのよキンジ、何でご先祖様がここに居るの？」

何で目の前にいるの??ねえこれってどう言う事ヨ説明してよ!!」

アリアは突如キンジの胸倉掴もうとすると・・・カナがそれを止めて

アリアに向けてこう言った。

「アリア、直観力が高い貴方ならもう分るでしょう？」

「・・・違う。」

「貴方の目の前にいるのは『シャーロックホームズ』。」

「違う。」違う」

「そして彼こそが貴方の追っている組織。」

「嘘だ・・・嘘だ。」

『『イ・ウー』の『プロテクション』よ。』

「ウソダウソダウソダウソダ———!!」

アリアは悲鳴交じりで否定しようとしてこう続けた。

「そんなの嘘よーご先祖様が生きているわけないしそれ以前に生きていたとしても何で『イ・ウー』のボスなんて・・・そうか！アンタらがグルになってご先祖様を馬鹿にしているのねきつとそうヨ!!」

アリアはそう言っただけで全員を睨んでいるがこれは一種の現実逃避に何者でもない。

だがそうしなければ恐らくアリアの精神は持たないであろうと思っただけで

調はアリアを見てこう呟いた。

「可哀そうな人。」

そう云う中でキンジはカナに向けてこう聞いた。

「それにしてもあいつこの炎の中と言うよりもどうやってここ迄来るんだ？」

そう呟くと・・・ミシエラがこう言った。

「忘れたか遠山。」

「？」

「奴はブラドがやっていた事を間違いないとやっているはずだぞ？」

「アイツがやっていた・・・まさか!？」

「能力の複製、間違いなく彼はそれをすると言っているのですね？」

その答えを天草が言った瞬間に・・・それは起きた。

綺麗な白い塊がシャーロックホームズの周りを覆い始めるとミ

シエラが

こう呟いた。

「ダイヤモンドダスト。」

「成程な、それか。」

キンジがそれを聞いて成程なと言っていると海が凍るだけではなく炎が

雪と風によって飛ばされていくのが見えた。

そしてアンリベル号に着くや否や今度は舳先に架けられていた黄金の階段を

砂金に戻してシャーロックホームズの周りを漂うのを見てキンジはこう呟いた

「全く・・・正にラスボスだなこいつは。」

そう言いながらキンジはシャーロックホームズを見ていると彼はアリアを見て・・・にこりと笑ってこう言った。

「もう逢える頃と推理したよ。」

会話

「もう逢える頃と推理したよ。」

『！！！』

それを聞いて全員が身の毛よだつとはこの事だと言わんばかりに全員（アリアを除いて）が臨戦態勢に入る中でシャーロックホームズは歩きながら

こう言った。

「卓越した推理は予知に近づき、未来を予見できる。僕はこれを

『条理予知（コグニス）』と呼んでいるのだが世の中そううまくいかないようだね？何せ私が見た予知とは全く違う展開なんだから。」

そう言いながらカナを見てシャーロックホームズはこう続けた。

「カナ・・・いや遠山金一君、君の目的は同士討ちじゃないかね？」

「くー。」

「仲間割れを引き起こしてあわよくば僕の首と言った処のようだが僕が来たことでそれはおじやんだ、だが君には仲間がおり彼女が君のHSSの発動者なのかな？」

シャーロックホームズはそう言って調を見るがキンジはそれどころではなかった。

「(やっぱりこいつHSSの事を知っている!?)」

HSS（ヒステリア・サヴァン・シンドローム）の略称であり性的興奮により

自身の保有する力を発揮できるのだ。

然しまあそれが未だ幼い女の子対象ともなるとキンジはこう考えていた。

「(我が兄ながら完全に犯罪案件になっちまうな。)」

そう思っていると・・・調はこう反論した。

「違うよ。」

「?。」

「カナは私をそう言う風にしなかった、テロリストに拉致された私を救ってくれて私は本当に感謝している。だからこそ私はカナの為

に戦う、

例えばどんな結果になろうとも。」

そう言いながら調はカナ近寄るとカナもありがとうと言って手を握ってくれた。

まるで・・・親愛している親子の様に。

「ふむ・・・ならばいいね。」

シャーロックホームズはそう言ってカナから眼を離すとキンジを見てこう言った。

「君が遠山キンジ君だね？鎧を纏ってはいるがまあ君である事は確かだろうね。」

「そいつはどうも。」

キンジはぶつきらぼうにそう言うのとシャーロックホームズはキンジの周りを見てこう言った。

「矢張り多いな。」

「？」

「いや、こちらの事だよ。僕の名前は・・・まあ嫌と言うほど僕は映画やら

書籍とかで取り上げられているから言わなくても良いかもしれないけどいけど

可笑しいね、僕は君にこう言わなければならないようだ。今ここに僕を

紹介してくれる人が一人もないからね。」

そう言いながら一泊於いて・・・こう名乗った。

「初めまして遠山キンジ君、僕がシャーロックホームズだ。」

そう言って自己紹介をしてきたがキンジはそれを聞いて合点がいったと

思っていた。

こいつは本物だ！と

偽物とか俳優や精巧なロボットとでも思いたかったが

そんなちやちな物ではないと思っているとシャーロックホームズはキンジから

アリアに視線を移してこう言った。

「アリア君。」

「!!」

シャーロックホームズの言葉を聞いて呆然としていたアリアがビクツと

身体を伸ばすとシャーロックホームズはこう続けた。

「時代は移り変わってゆくけれど、君はいつも同じだ。ホームズ家の淑女にのみ伝えられるその髪型を君はきちんと守ってくれていたんだね、それは初め、

君の曾おばあ様に命じたのだ、何時か君が来ることは私は推理していてね。」

「・・・何・・・ですって・・・!?!」

カナはそれを聞いて驚いていたのだ、そこ迄昔に推理していたのかと

思っていたからだ。

最早それは神の領域としか良いよが無いぞと思っているのだ。

そんな中でキンジはノインテーターを使って叩き潰そうと考えていると・・・シャーロックホームズはキンジを見ずにこう言った。

「用心しないといけないよ？鋭い刃物を弄んでいるといつか

その手に怪我する羽目になるかもしれないよ。」

「・・・クソが。」

何もかもお見通しかよとそう思っただけでキンジはノインテーターを背中に

マウントさせるのを見てシャーロックホームズはこう続けた。

「アリア君、君は美しい。そして強いんだ、ホームズ一族の中に於いても

最も優れた才能を秘めた天与の才を持っているのにも関わらず

『ホームズ家の落ちこぼれ』、『欠陥品』と呼ばれてその能力を一族に認めてもらえない罅はさぞかし辛かっただろうね。だが僕は君の名誉を

回復させれるどころか欲しい物が手に入るのだ、君が望むもの、君が欲するものがその手に納められるんだ。」

そう言うときシャーロックホームズはアリアに手を差し伸ばしてこう言った。

「おいでアリア君、君の都合さえ良ければおいで。悪くてもおいで、そうすれば・・・」

・・・君の母親は助かる。」

「!!」

それを聞いてアリアは目を大きく見開いたがそれを聞いていたキングジは畜生と思ってこう続けた。

「あれじゃあまるで人さらいその儘じゃねえか！アリアが欲するものを

態と提示させて自分から行く様に仕向けさせて俺達が動きにくくなるように

しているじゃねえか！」

そう思っていた、普段のアリアならばこの様な事は聞かないが自分

が欲しい物が目の前にあるのだ。

地位も名誉もそして権力と・・・母を取り戻すと言う願いが。

そしてアリアは何か言いかけるとシャーロックホームズはアリアを抱きかかえてこう言った。

「さあ行こう、君の『イ・ウー』へ。」

そう言って再び歩き出したのだ。

第一次シャーロックホームズ戦

「そういえばアリア君は未だ学生だったよね？『イ・ウー』らしくこれからの『復習』をしようじゃないか。」

そう言つてシャーロックホームズは自身が着ている長いコートを一瞬だけであるがまるで紙飛行機のように広げてボストーク号の前方にある流水群へと

軟着陸させたのを見てキンジは何じやありやと思つているとカナがキンジに向けてこう言つた。

「キンジ！今すぐシャーロックホームズを逮捕するわよ！！」

「はあ！何今更」

「アイツはこの日本籍の船、アンリベール号で未成年略取を行つたわ！」

つまり私達は合法的に奴を現行犯逮捕できるつて事ヨ！！」

そう言つたと突如としてカナが指示を与えた。

「ジャンヌ！氷を張つて道を造れる！？」

「無論だ！」

「それと天草君と不知火君と白雪ちゃんたとえばと……詠さんで良いのよね？」

「「ハイ！」」

「貴方達は私とキンジと一緒に突入するから合わせなさい！！」

「おい待てよ兄さんつて合わせるつて」

「当たり前でしょ、今の貴方と仲間達を私は信用しているから……一緒にあいつを逮捕しましょうキンジ！！」

「……あ。」

それを聞いてキンジは嬉しくなったのだ。

嘗ては兄に『一緒に行きたい』とせがんだ時は……こう言われたものだ。

『そうだな・・・何時か、お前が俺の様になれたらな。』

そう言つて一度も組んだことなどなかったが今は違つたのだ。

相手は最早一人で如何こうできる相手ではない。

たった一人で超能力者勢力や裏組織を束ねられるカリスマ性と実力を持ったシャーロックホームズと言うオリジナルの偉人相手に普通ならば

心が折れる所をカナ・・・いや、金一は屈しなかったのだ。

そして闘う意志があるかどうかと聞いてキンジは・・・こう答えた。

「ああ、当たり前だろうが！俺達はその為に来たんだからな!!」

そう言つて全員が・・・船から出ようとする調がこう聞いた。

「カナ、私は？」

そう聞くとカナはこう答えた。

「貴方はパトラを連れて脱出しなさい、貴方は未だ15歳。武偵には未だ早いから脱出艇に乗ってなさい。」

良いわねと言つと調はこう答えた。

「うん分かつた、だから言うね。」

「？」

「・・・気を付けて。」

「ええ、分かつてるわ。」

カナの言葉を聞いて納得したのであろう、今度はグルグル巻きにするパトラは怒りながらこう言った。

「ちよちよちよ待つのじゃ妾をグルグル巻きにしてどうすむご!？」

「引きづつた時にバラバラにならない様にする為。」

そう言つと又もやパトラからもごもごど声が届くがそんなの知らんと

言わんばかりに引きづつて行つた。

するとカナは全員に向けてこう言つた。

「それじゃあ皆！アリアは救助してシャーロックホームズを逮捕す

るわよ!!」

「「「「おオオオオオおおお!!」「」」」」

それを聞いて全員が号令をかけ、下にある流水に飛び乗ると途端に

ミシエラが全員に向けてこう言った。

「皆、この寒さを何とかするために結界を張る!!その中ならば体温は

そう下がらぬから離れるな!!」

そう言うと同時にミシエラはダイヤモンドダストで辺りの

シャーロックホームズが作ったダイヤモンドダストを吹き飛ばして全員で

走り出した。

ギシギシと巨大な流水同士が触れ合った事で軋む音が聞こえ、霜が走る流水に積っている中でカナは全員に向けてこう言った。

「皆、シャーロックホームズが見えたわ!!拳銃を持っている子達はこれで応戦よ!!」

そう言うってシャーロックホームズを捉えた瞬間にカナは拳銃を向けて

こう言った。

「シャーロックホームズ!!」

そう言うってカナが撃つもシャーロックホームズの10メートル後ろで・・・火花を上げて弾き飛ばしたのだ。

『銃弾撃ち（ビリヤード）』

「マジかよ。」

『銃弾撃ち（ビリヤード）』とは銃弾を銃弾でまるでビリヤードの様に

弾き飛ばすことをさしており漫画ならよくあるが実際にそれが出来る人間など

皆無と言っていい程の攻撃手段である。

然もそれをカナ（金一）の得意技である『インビジブル』で攻撃してきた事に

どれだけ強いんだとキンジはそう思っているとカナがこう言った。

「キンジー！」

「分かってる!!」

キンジはそう言っただけでカナの前に立ってノインテーターで撃ち落とす。

今度はインクルシオの背部にマウントしているリボルバーキャノンで

攻撃した瞬間にシャーロックホームズは一瞬驚くも拳銃一発で真ん前で爆発させて凌いだ。

「クソが！」

「だったら僕も!!」

「私もですわ!!」

そう言っただけで不知火も放って詠は左腕部の装備されているハンドガンで攻撃するもそれすらも弾くとそれをカナはもう一度放って再び弾いた。

それらが繰り返される中で白雪が背部からある物を出した。

それはアメリカ軍の正式採用マシンガン『M60マシンガン』。

普通ならば大型車両と連結しなければ使えない程重い銃なのだが白雪は

それを持ってどこぞの未来からやって来た殺人サイボーグの様に持って

攻撃してきたのだ。

「!？」

いきなりのそれに流石のシャーロックホームズ目を見開いて驚いたのであろう

すぐ様に対応を変更したシャーロックホームズは……

とんでもない事をしたのだ。

まるでバルーンの様にネクタイとスーツがビリビリと破いた瞬間に……それは訪れた。

イイエアああああアアアアアアアアアア!!
空気が・・・衝撃波がキンジ達を襲ったのだ。

いざ船内へ

イイエアああああアアアアアアア!!

シャーロックホームズから放たれたその衝撃波がキンジ達に襲い掛かった。

「何だこいつは!」

「み・・・耳が!」

「悲鳴!」

「何なんですかこれは・・・!!」

「頭に響く・・・!!」

「あぐ・・・!!」

キンジ達がそれを聞いて耳を塞いだ瞬間（キンジは耳を塞げれない為倒れそうになっている）。

そして音が静まっていくのを感じた後にキンジは倒れそうになったところを

ミシエラに肩を貸してもらった。

「悪いな、ミシエラ。」

「何を言っている、私達は仲間であろう?」

そう言っているとカナ・・・いや、金一がこう言った。

「何故・・・解けて?」

そう言っていると言つきが金一に戻っていたのだ。

「一体何が」

どうなっていると言おうとした瞬間に・・・パーンと銃声が鳴り響いた。

「!!!」

キンジ達が驚いていると目に映ったのは・・・。

「兄さん!」

心臓ら辺から血を流し始めている金一の姿がそこにあつた。そして倒れる寸前で白雪が金一を受け止めてこう言った。

「お義兄さん!」

「嫌なんか変なルビ入ってねえか?」

白雪の言葉を聞いてキンジがそう聞くが白雪はこう続けた。

「これ・・・心臓に穴が!？」

「ああ・・・どうもそうらしい・・・」

「ナ?!」

キンジは金一の言葉を聞いて驚いていた。

何時の間にとそう思っていると金一はこう続けた。

「多分だが・・・プロテクションは俺の『HSS』を解析して対抗策をばばー!」

「喋らないで下さい!!」

白雪がそう言つて心臓ら辺に恐らくは治療なのでであろう手から

光が灯っている中で天草も加わつて治療する中でキンジに向かつて

こう言つた。

「遠山君、ここは僕と白雪さんが治療しておきますので速く救出に。今この中で動けていて且つ指揮能力があるのは貴方なんです。」

だからと言う中で・・・突如として金一が立ち上がるうとしてこう言つた。

「なら・・・俺も向かう」

「動かないで下さいお義兄さん!」

「金一さん、今動けば貴方は死にます。ここは動かないで治療に」

「いや・・・今が丁度だ。」

そう言つてグググと立ち上がるうとしている中でキンジはなにか違和感を

感じていた。

「(何だこの感じは?今までのヒステリアモードとは何かが違う・・・これは一体?)」

そう思っていると金一はこう答えた。

「良いかキンジ・・・よく・・・覚えておけ・・・好機の・・・一瞬は・・・」

無為の・・・一生よりも・・・勝る・・・勝つために・・・今『イウー』を

滅ぼす事こそが・・・大儀だ!!」

分かっているなとそう言うのとキンジは金一の目を見て・・・何も言えなかった。

まるで・・・此処が死に場所であることが分かったかのような目だ。

それを見てキンジは・・・暫くしてこう答えた。

「・・・分かった。」

「キンちゃん?!」

「遠山君!?!」

それを聞いて白雪達は驚くがキンジを見てこう答えた。

「・・・分かったよキンちゃん、けどもう少し治療させて!」

「其れだけは譲れませんので。」

そう言つて暫く治療した後キンジ達は艦橋の側面にあつた

梯子をよじ登つて開け放たれていた耐圧扉に一人ずつ出て安全を

確認した後

全員は武器を構えて螺旋階段を駆け下りた先にあつたのは・・・劇場の様な広大なホールであつた。

「ここは展示室だ、あらゆるものが陳列されているんだ。」

「ああ・・・確かにこいつはスゲエな。」

キンジはミシエラの言葉を聞いてそう答えた。

全層をくりぬいて作った高い天井から磨き上げられた天然石の床を

巨大なシャンデリアで照らし出されておりその床には恐竜の骨格

標本や

絶滅種や既存種の動物のはく製が並び立っていた。

「これだけでも数百億の価値はありそうですね。」

詠が下世話な事言っているが確かにそうだろうなキンジもそう思っている

一つの扉が無造作に相手いるのが分かった。

そしてキンジはこの状況に対してミシエラ二向けてこう聞いた。

「分かっている、迎撃が無い事を察するにこれもプロテクションの命令だろうな。」

そう、本来ならば迎撃があっても可笑しくないのでに敵の姿すら見えない。

これが異常なのだがそれがシャーロックホームズの命令と言うならば

それだけ彼のカリスマ性が優れているというものであろう。

そんな中でキンジ達は更に部屋を探した。

扉の向こうにあった螺旋階段を降りた先にはあらゆる魚が入れられていた水槽や人工太陽光で照らされた植物園、鉱石の標本、長い布のタペストリーや

革表紙の本が並ぶ広大な書庫、黄金のピアノと蓄音機の並んだ音楽ホール、

中世から近代にかけての武器や甲冑が集まっている小ホール、インゴットや各国の紙幣が山積みになされた金庫などがある部屋を金一の指示の元突入して暫くして

出てきたのは・・・土が敷き詰められた部屋であった。

正面の壁には巨大な油彩の肖像画が掛けられておりそれぞれの絵の前に石碑や

十字架、六芒星の碑が一つずつ並べられており始まりの碑にはこう書かれていた。

『大日本帝國陸軍超人師団長初代伊U潜水艦艦長 昭和拾玖年捌月』

それを見てキンジはこう呟いた。

「まさかこの肖像画って・・・歴代『イ・ウ』の艦長の墓か？」

更に奥へ

「まさかこの肖像画って・・・歴代『イ・ウー』の艦長の墓か？」
「正確には遺影だがな。」

キンジの言葉に金一がそう答えると絵を見てこう言った。

「肖像画の日付から逆算すると如何やら『イ・ウー』とは第二次世界大戦中に

枢軸国で構成された超人兵士育成機関と言ったもののようなのだが配線と同時に

彼らは自分達の存在は同盟軍に洩れさせない様にするために暗部になったと

言った処だが・・・代を変えるうちに裏組織のトップに迄

上りつめてしまったがために他国にその存在が行き渡ってしまったようだな、

初代と二代目は日本帝国軍人とナチスだったのに対して三代目からは

アフリカ系の女性となると恐らく彼女は当時の無政府状態で在った

アフリカ大陸の裏組織でそれなりの地位のようだったらしい。四代目は

車いすの中国人、こちらも政府としては未だ小さかった中国から逃げたと

言った処だ、それに彼女の功績には『天安門事件』の際に構成員を逃がす

手伝いもしているらしいな。五代目はこの雄々しい髭と顔つきから見てアラブ系、

中東の出身みたいだな、幾つかの裏組織とコンタクトを取っていたようだが

それすらも『プロテクション』に乗っ取られたという所だな。」

金一がそう言いながらシャーロックホームズの描きかけの肖像画を見て・・・

ナニカに気づいたかのように肖像画に耳を当たらせるとキンジ達に向けて

こう言った。

「キンジ、如何やらこの先に入り口があるそうだぞ？」

「何・・・確かに、少しだけ風の音がする。」

キンジもそう答えると詠が左腕部二装備されている榴弾搭載型ハンドガンを付けて全員に向けてこう言った。

「皆さん下がって下さい!!」

そう言った瞬間に詠が撃ち放った瞬間にシャーロックホームズの肖像画どころか

近くにあったアラブ人の男の肖像画迄吹き飛ばしたのだ。

爆炎の中から出てきたのは：隠し通路と下り用のエスカレーターが見えて

キンジは全員に向けてこう言った。

「よし、皆分かっていると思うが俺達の目的はあくまでもアリアの救出が第一、シャーロックホームズは第二として扱い2人同時だった場合に備えて俺と兄さん、

ミシエラ、天草、詠で対処するから白雪と不知火は隙を見てアリアを救出して

それで俺達も隙を見て脱出する。良いな？」

そう言うと金一を除いた全員が頷くとキンジは金一に向けてこう言った。

「兄さん分かっていると思うけど」

「いや・・・凄いなお前は。」

「?。」

「もうここ迄大勢の人間に指示を出せるほどまでに迄成長するなんて本当に・・・もう俺がいなくても大丈夫になったんだって思うと嬉しくてついな。」

ハハハハと笑っている金一を見てキンジは胸が熱くなると金一はこう言った。

「俺はお前を信じる、例え何があったとしてももう俺はお前から姿

を消さないと誓おう。だから・・・帰ろうぜじいちゃんとはあちゃんが
いる巣鴨に。」

どやされるかもだけどなと言うとキンジは笑っただけで何も言わ
なかったが

内心は・・・同じ理由だったのだろうと思う。

そしてキンジ達はエスカレーターで下って辿り着いた場所は・・・
教会であった。

大理石の床には見渡す限りラテン語で文字が彫られており椅子
が・・・ない。

何でと思うよ本当に!?! どうしてないのどうやって祈るのここだと
キンジは

そう思っている中で他の場所も見た。

何かの儀式に使うのであろうかどうか分からないが壁際や側廊に
は

生け花を生けた白磁器のツボが飾られておりその奥には唯一の光
源でもある

複雑なステンドグラスが高く聳え立っている。

そしてその下に・・・アリアが祈りを捧げるかのような膝を付いて
いると

キンジがこう言った。

「アリア。」

「!!」

アリアがそれを聞いて驚いて振り向くとキンジがこう言った。

「さっさと帰るぞ、シャーロックホームズが来る前にここから脱出
して」

「私……残るわ。」

アリアがそう言うのとミシエラがこう聞いた。

「何故だ？我々は貴様を助けに来たんだぞ。」

そう聞くとアリアはこう答えた。

「アタシはここに残るわ、これからは……ここで曾お爺様と暮らすわ。」

「其れはどういう意味か説明してもらいましょうか神崎さん？」

天草がそう聞くとアリアはこう返した。

「あんた達には分からないだろうけど貴族には……一族には

果たすべき役割を正しく果たす事を求められるのよ。出来なければいけないように

扱われて……アタシは卓越した推理力を誇るホームズ家で唯一その力を

持っていないばかりに皆からいらない物扱いされてきた、それでも

私は曾お爺様を尊敬しているし憧れてもいるわ、探偵でもあり武偵の祖でもある

曾お爺様に少しでも近づこうと思つて武偵になつて……その曾お爺様は

生きていて私を後継者に選んでくれたのよ！ホームズ家の出来損ないと呼ばれた

私が認められた事の思いがあんた達には分からないでしょうね!!」
そう言つてアリアはこう締めくくつた。

「ここにいればどうしてママが『イ・ウー』によつて無実の罪を押し付けられたのかが分かるわ！この事件の裏にある闇を暴いて私はママを

救い出して」

そう言いかけて……金一がドスノ効いた声で……こう言つた。

「言いたいことはそれだけか小娘が。」

金一の言葉

「言いたいことはそれだけか小娘が。」

「な……何ヨアンタ！引つこんでなさいよアタシはキンジと話しを」

「黙れ小娘が！ピーチクパーチク喧しいわ!!」

「ひい!？」

アリアは金一のドスノ効いた声に恐怖すると金一はこう続けた。

「貴様黙って聞いていれば『曾お爺様を尊敬している』とか

『曾お爺様に近づきたい』とか『貴族は果たすべき役割を正しく果たす』とか

『曾お爺様から認められた』とか言って結局の所貴様は只『人に認められたい』、『自分がホームズ家に相応しい』とか言われて自己満足の為に武偵やっているだけの只のガキ風情が舐めているのかこの仕事を!？」

「な……舐めてなんていないわよ！私だって私なりのやり方で

曾お爺様の様に」

「先ずそこから駄目だと言うのだ貴様は！」

「何ですって！憧れの人の様になりたいって思っただけがいけないのよ!？」

「全部と言うよりも貴様は武偵であろう、ならば何故奴を逮捕しない?？」

「当たり前でしょう！曾お爺様よ!!武偵の祖にして只の天才じゃ済まない

次元の……強くて完璧で歴史上最も強い人」

「歴史上に於いて最も強いなど誰が決めた？偉人英雄など世界中に数多くいるし

一騎当千の豪傑もいた。中国ならば『呂布』、『関羽』、『張飛』、『趙

雲』と

言った武芸に特化した人間がいれば『司馬懿』や『孔明』と言った知略の達人、

日本ならば『信長』、『信玄』、『勝家』、『政宗』、『幸村』、『総二郎』、『隆盛』、貴様の国にもいたであろう？ そう言う偉人たちが？」

「そ．．．それでも曾お爺様の方が何倍も」

「俺もキンジもだがもし先祖にあったとすればお前の様に最初から諦めたりはしない。」

「へ？」

「例え先祖だろうが何であろうがもし彼らが悪事に染めているのだとするならばどんな手を使ってでも俺達はその組織を叩き潰して義を全うする、

俺達遠山家は何かあったとしても力を持たない者達の味方であり続けるさ。そして何よりも．．．先祖が強いからって最初から諦める位の心意気であったならば

武偵等なつてもいないさ。」

金一はそう言いながら三つ編みを解いて現れたのは．．．身の丈ほどの

大鎌である。

「来い神崎・H・アリア、貴様に武偵とは何なのかをその身に刻ませてやる。」

そう言いながら金一が鎌を構えるのを見てキンジは耳打ちしてこう聞いた。

「大丈夫なのかよ兄さん、アンタ女倒せれるのかよ？」

そう聞いたのだ、遠山家にとって女とは守るべき存在であると言う遺伝子的設定がまるで呪いの様に課されており戦えるのかと聞く

と金一は

こう返した。

「まあ確かに今の俺じゃあ駄目かもしれないが一つだけ言うておくぞ．．．

「……今俺はアイツを女とも思えないと言うよりも守る価値すらない」

大阿保と言うのが分かった今武偵として彼奴にはこの業界に今必要なのが

「なんなのかを叩き直して教えてやる。」

「……分かった、気を付けてくれよ兄さん。」

「ああ、お前達はサッサと行け。これはお前達の案件なんだからな。」

金一がそう言ってキンジを下げらせるとキンジは全員に向けてこう言った。

「行くぞ、ここは兄さんに任せる。」

それを聞いて天草達も黙って奥に向かおうとするとアリアがそれを見て

こう言った。

「行かせないわよ！曾お爺様のいる場所には誰も」

行かせないと言いかけた瞬間に……銃声が轟いた。

それはアリアの足元に着弾するとアリアは金一の手……何時の間にか

持っているピースメーカーを見て目を見開いて驚くが金一はアリアに向けて

こう言った。

「さあ来い小娘、お前に本当の武偵がどう言う者なのかを教える。」

まあ最もと言ってアリアに向けてこう言った。

「貴様みたいな相手が分かった時点で諦めた拳句にテロリスト等に身をやつす程度の心構えしかなく母親を助けると言いながらもその母親を陥れた連中に尻尾を振るような半端者のホームズ家のなり損ない程度には丁度いい居場所だな。」

「今・・・何て言った?!」

アリアはそれを聞いて怒るが金一は更にこう続けた。

「本当の事であろう、ホームズ家に認めて貰いたいがために武偵になったとしても武力一辺倒で誰も関わらずに人の弟を無理やり

相棒にさせようと拳銃を向けるような見た目其の儘の小学生並みの精神しか・・・いや、貴様みたいな幼稚園児並みの心しかなく只々シャーロックホームズの真似事しか出来ない五流の武偵が良い気になるなよ。」

「五流ですって!!むぎー!!アンタみたいな奴は風穴風穴風穴フルコースよ!!」

そう言いながらアリアは二丁のガバメントを抜き放って攻撃しようとした

瞬間に・・・銃声と同時にガバメントが二丁共弾き飛ばされた。

「どうした?俺を風穴させるんじゃないのか?」

「むぎやー!!」

アリアは怒り心頭で今度は刀を振り下ろして攻撃を始めるがそれは鎌の取っ手部分で軽く受け止めながらこう言った。

「どうした?今度は刻みか??これでは確かにホームズ家の出来損ないとい

呼ばれても致し方ないな。」

「取り消しなさいよ!アタシは出来損ないじゃない!!アタシはやつと

曾お爺様に・・・武偵の祖に認められて」

そう言った瞬間に金一は・・・ピースメーカーを0距離で腹部目掛けて放った。

「いふ。」

その衝撃でアリアは酸素を吐き出されてよろめくが金一は其の儘アリアを鎌で殴り飛ばしてこう言った。

「アリア、お前は確かに奴に認められたかもしれないが確かにシャーロックホームズは武偵の祖だがな……」

……奴の死と同時に何故武偵は無くならなかった？」

それを聞くがアリアは目を血走った状態でガバメントを拾って……急所、然も頭部目掛けて放つが金一はそれを鎌で防御しながらこう言った。

「そうだ、武偵はその後の大勢の人達の力で作られたのだ。時代が変わろうとも変わらない『義』を貫いたのだ、貴様みたいに猿真似しか出来ない愚か者ではなく自らの信念に従った者達がな!!」

そう言った瞬間にアリアのガバメントを鎌でもう一度弾き飛ばすとそれと同時に金一はピースメーカーを構えてこう言った。

「お前はもう一度自分が何なのかを見極めて来い！」

そう言っつてリボルバーが空になるまで撃ちまくってアリアを失神させると金一はアリアに向けてこう言った。

「貴様はもう一度己を見直してこい。」

そう言っつて金一はキンジ達が向かった道を通って向かって行った。弟を守るために。

シャーロックホームズとの対面

金一にアリアを任せておいたキンジ達は奥にあった扉を開けて暫くすると・・・

幾つもの鋼鉄の隔壁があつたのだ。

それをミシエラが携帯電話のネットワークを利用して解除させると

自動ドアの様にいろんな角度から開き始めた。

「全く、一体この先は何だと言うのだ？」

ミシエラがそう言うと言とキンジがこう聞いた。

「お前ここに来たことないのか？」

「ないな、ここは間違いなく『プロテクション』しか知らない場所だろうな。」

「そしてこの先にシャーロックホームズがいるという事ですね。」

天草がミシエラに対してそう言うと言とミシエラは間違いなくなどそう言うと言と・・・

後ろから足音が聞こえたので何だと思っていると現れたのは・・・金一であった。

「兄さん！神崎は!？」

「アイツならば今頃おねんねだ。」

そう言う中でキンジ達は通路の床が排水溝にかけられるような格子組の耐蝕鋼に変わっているだけではなく左右の壁にある

アクセスランプがチカチカと光っているのを見て不知火がこう呟いた。

「こんな風になると潜水艦だから間違いなく水系だろうね、エンジンとか。」

そう言うと言と金一は前方にある・・・ラジオハザード、放射性物質に對する

注意喚起のマークが描かれていた。

「ここで終点となりますと敵は間違いなくここでしょうね。」

「気を付けてキンちゃん、この先にいるのは人間とはまた違うのだ

よ。」

詠と白雪がそう言うのとキンジはこう答えた。

「入るぞ、ここで終点だとするなら全員拳銃を構えてくれ。」

詠、お前の榴弾って散発式ってのあるか？」

「無論です、と言っても殺傷能力が低く若しも核動力に当たったらと思いますと」

そう言いながら詠が顔を青くするが金一がこう言った。

「その心配はないだろうな、動力機関は尻尾ら辺に集中するが」

「ここは甲板とほぼ繋がっていると行って過言ではないからな。」

恐らくだがここは・・・ミサイルの発射台かもしれないな。」

「！！！！」

それを聞いてマジかよとそう思っているとキンジが全員に向けてこう言った。

「良し、俺がインクルシオになって中に入るから皆は後ろに続いてくれ。」

「待てキンジ、相手はおれの防護服を貫通させた奴だぞ？」

インクルシオだからってスパア弾にあたって平気と言う保証はないぞ?。」

「其れでも誰かがやらなきやあいけねえだろ？」

「でしたら僕と白雪さんの術で遠山君の鎧の防御を上げると言うのは

どうでしょう?。」

「そうだね!キンちゃん私は私が守るから!!」

ふんすと鼻息荒らす白雪を見て不安だなあと思っているとミシエ
ラが

キンジに向けてこう言った。

「キンジ、私の氷の一部だ。これを心臓近くに囲むように配置しているから・・・死ぬな。」

「ああ・・・分かってるさ。」

キンジはそう答えた後に天草と白雪の術も付与されてインクルシオになって

扉を槍で破壊して入るとそこで目に映ったのは……衝撃的な光景であった。

パツと見て歴史の教科書にあるであろうパルテノン神殿の様な見えなくもないがあれは石材で作ったのに対してこれは鉄だ。

そう……あのマークから連想する巨大物体は一つしか思いつかないのだ。

ICBM

大陸間弾道ミサイルであるそれは弾頭次第では都市一つを破壊する事など

造作もない代物である。

「くそー何処の国で作られて買ったんだこんなもん!」

北かそれとも中東辺りかとそう思っていると……何処からかぶつ……ぷつと音が聞こえていた。

音量が上がって分かったその歌の名前は……

「《魔笛》か、随分と洒落たものを出してくるなシャーロックホームズ。」

金一がそう言うとか確かにシャーロックホームズがそこにいた。

アンプに繋いだ蓄音機の隣にいとキンジ達を見て数歩近づくとううむと言ってこう呟いた。

「矢張り違う……」

「は……」

「いやこちらの話だ気にしないでくれ、さてと。君達は私を見てこう思っているであろう?『これで終わり』だと?とんでもない、それは早計というものだよ諸君?」

「どういう意味だ『プロテクション』。」

ミシエラがそう聞くとシャーロックホームズはこう答えた。

「簡単だよ、僕にとってこれは一つの記号……言うならば

『序曲の終始線(プレリユード・フィーネ)』と呼んでおこうと

一つ聞きたいがアリア君は何処だろうね?この講義にはアリア君もいなければ

始まらないのだがね?」

シャーロックホームズはまるでわざとらしそうにそう聞くので不知火は

こう答えた。

「彼が・・・金一さんが倒しました。」

「ほお？」

それを聞いてシャーロックホームズの表情が少し難しくなると金一は笑って

こう答えた。

「あんな武偵と言うのがどう言う者か分からん奴に少しお灸をすえただけだ。」

「それは困るね、この講義にはアリア君がいなければ成立しないんだ。何せ・・・」

・・・これは遠山キンジ君とアリア君が奏でる協奏曲に必要な物なのだから？」

「俺とアリアが奏でるってあんな協調性のない奴とは御免だな。」

それにと行ってキンジはこう続けた。

「俺には仲間がいるからな、手前を逮捕するため二ここまで来たんだ!!」

そう言うときんじを中心に全員が武器を構えると

シャーロックホームズはやれやれと言ってこう続けた。

「こう言うのは私の主義に反するのだが・・・仕方ないね。君を倒して
アリア君と共に協奏曲を奏でさせてあげよう。」

第二次シャーロックホームズ戦

その言葉と同時に攻撃が始まった。

不知火が拳銃で攻撃するがそれをシャーロックホームズは潜水艦上でやった時と

同じくビリヤードで弾き返そうとして・・・不知火はこう言った。「そうしてくれて良かったですよ。」

その声と同時に全員の間になんか小さな太陽が現れた。いや、太陽ではない。

これは・・・閃光である。

閃光弾、それも武偵が使う特別な奴で銃弾なのに手投げ弾としても使えるのだ。

そしてキンジ達に向けてこう言った。

「今だよ!!」

不知火はそう言って・・・両目を瞑ってそう言った。

あの時不知火はシャーロックホームズに悟られないように両目を開けていた為

今の不知火は両目を潰された状態なのだ。

そして金一がシャーロックホームズに鎌を向けてこう言った。

「これで終わりだ!!」

そう言って金一は鎌の取っ手部分をシャーロックホームズに目掛けて

当てようとして・・・それを杖で止められたのだ。

「何?」

金一はそれを見て驚いている中で離れるとシャーロックホームズはこう言った。

「うん、今のは知恵を回したようだね?仲間を犠牲にしても僕を倒そうとするその覚悟は立派だったし通じていたよ?・・・

60年前だったからね。」

「どう言う意味だ・・・?」

金一は何やら疑い深くそう聞くとシャーロックホームズはしれッ

とこう答えた。

「僕は自由何だよ、60年前に毒殺されかけてね。」

「「「「「!!」」」」」」

それを聞いて全員が驚いているがシャーロックホームズはこう続けた。

「これを知っているのは誰もいないんだ、何故なら僕は見えているように

振舞っていたし実際に視覚頼りの君達よりも自分の周囲の事くらいは

よくわかって言っていてね、まあ初めの頃は推理力オンリーだったけどね。

そのおかげで『コグニス』使えるようになったから良かったよ

不幸中の幸いって奴だね。今は音や気流の流れでまあ大体分かるけどね

今なら理解できるヨ? 金一君、君の心音が高くなっている事とかね。」

「くうー」

金一はそれを聞いて苦虫を噛み潰したような顔をしていたのだ。

それはつまり今の彼にはあらゆる攻撃に対しての対応策を取られてしまうと

考えたからだ。

「(キンジの透明化は匂いで分かっけしめい聴覚、触覚で居場所が

分かっけしめい。残る味覚は口呼吸から得た情報で俺達が誰なのかを

特定されると言っけしめい、確かにこいつはちよつとやそつとじゃ

無理かもしれなけい。・・・それなら!!)」

金一はそう思いなけいながらキンジ達を見ると・・・こう思っけい。

「(成程、全員それなりに根性が据わっけいいるな。)」

全員が目をぎらつかっけいいると金一は全員に向っけいこう言っけい。

「良し・・・行くぞ!!」

そう言っけい今度は金一が拳銃で攻撃しけい。

ピースメーカーを使った攻撃に対してシャーロックホームズはビリヤードで

撃ち落とそうとして放ち・・・大爆発が起きた。

耳がつんぎくほどの音にシャーロックホームズは慌てた様子であつた。

何故これを予測していなかったんだと思つていと・・・ある事を仮説として

考えていた。

ピースメーカーはリボルバーであり弾丸を装填して使用する。

ならばどうして自分は予知できなかったのかと思ひ・・・まさかと思つていた。

「まさか彼は・・・ロシアンルーレットで当てたのか!?!」

何という起点の転換だと思ひながらもこう続けた。

「(だけどそれならば後ろに気配を集中して遠山キンジを)」

そう思つていと・・・前から声が聞こえた。

「シャーロックホームズ!!」

「!?!」

何故遠山キンジの音がするんだと思つて・・・こう考えた。

「(まさか彼はあの爆発の中から・・・だがあの威力の中でどうやってここ迄!?!)」

そう思つていて・・・金一はこう呟いた。

「貴様は彼らを安く見た・・・それが敗因だ。」

そう・・・これは即興で行つた作戦なのだ。

キンジが突撃する際に予めミシエラがキンジに託した氷の力がまだ残っており

その力である爆炎の中に飛び込んでも平気であったのだ。

それだけではなくミシエラが最初に使っていた剣を右手に、左手には

詠が使っていたバスターソードを持っておりそして何よりもキンジの両腕に・・・札が張られていたのだ。

白雪と天草の札がキンジを守っていたのだ。

するとシャーロックホームズは杖を・・・いや、あの爆発で砕けて露わになった仕込み剣をキンジ目掛けて貫こうとした瞬間に・・・雷球がキンジを襲った。

「!!!」

それを見て全員が驚く中でシャーロックホームズはこう呟いた。

「いやはや、まさか『予習』の技まで使わせるとは遠山キンジ君。

やはり君こそアリアと協奏曲を奏でるにふさわしい相手だ、後はアリア君を」

そう言っている間に・・・キンジは大声出してこう言った。

「マダダー———!!」

「!？」

シャーロックホームズはそれを聞いて驚いているとキンジの両腕

にある

武器が・・・光り輝き始めたのだ。

するとミシエラの剣から氷が、詠の剣からは炎が、そして体中に・・・雷が流れていた。

そしてキンジはシャーロックホームズに向けてこう言った。

「これで終わりだシャーロックホームズ!!」

そう言っって・・・

「やはり君は相応しい男であった。だが・・・まだ甘いね。」

インクルシオの鎧が何かに貫通したかと思いきや・・・風が吹いて
キンジを

吹き飛ばした。

夢にて

「(一体・・・何が)」

キンジは内心そう思いながらも・・・吹き飛ばされたのだ。

「キンジ———!!」

金一は悲鳴交じりでキンジに近寄ろうとして・・・シャーロックホームズが放った攻撃で金一自身も動けなくなった。

「雷・・・だと」

「ああこれは本来ならば予習と行きたかったんだが彼の実力があまりにも

予想以上だったから繰り上げてしまったんだ。いやはや、紳士は時間

ルーズではいけないのだが速くしてもいけないとは中々だねえ。」

シャーロックホームズがそう言っていると今度は・・・周りで濃霧が立ち込めた。

「これは斬り?」

「キンちゃん!!」

「動かないで下さい白雪さん!!」

天草がそう言うが白雪はそれを聞かずに其の儘内部に入ると

シャーロックホームズが剣を振り下ろそうとするがそれを察知して受け止めた。

「ふむ・・・中々やるね。」

「よくもキンちゃんを!!」

そう言いながら攻撃しようとするシャーロックホームズは白雪に向けて

こう聞いた。

「その頭の髪留めは取らなくて良いのかい?」

「!!」

それを聞いて目を見開いた白雪を見てシャーロックホームズはパンチを繰り出そうとした瞬間に・・・天草が割って入ったが腕を斬ることは

出来なかった。

「その武器を喰らうのは不味いようだね。」

「ええ、綺麗に斬れますので要注意です!!」

そう言いながら攻撃をする最中であつたがミシエラと詠がキンジと金一に近づいて手当てをしていた。

2人共酷いけがで特にキンジが酷かつた。

心臓付近に赤い痣みたいなのが見えておりこれが原因なのかと思つていると

ミシエラがキンジの呼吸が無い事を感じ最悪だと思つていた。

「息をしていない!心臓に何か強い衝撃を加えられているようだ!

そっちは?」

「こちらは失神しているようですが大丈夫です!けど・・・キンジさんが!!」

そう言つて慌てているとミシエラは・・・仕方ないと言つてこう言つた。

「人工呼吸だ。」

「・・・え?!」

「人工呼吸を行う!私が心臓マッサージを行うから読、頼む!!」

「そそそそそれつてつまり私がキンジさんに」

「今は緊急事態だ!交代交代で心臓マッサージと人工呼吸を行つて遠山を助けるんだ速く!!」

「ハハハハイ!」

詠はミシエラの声を聴いて驚いている中でこうも思つていた。

「(そう言えば私は貴方に助けられてばかりでした・・・だからこれは恩返しの一環です!)」

そう、恩返しと思つて詠はキンジに・・・口づけして人工呼吸を行つた。

「――あれ？俺動けない、どうしてだ。死んだのか？」

「貴方は何故戦うのですか？」

「――それは兄さんに頼られたから」

「違います、貴方が戦う理由はこの戦いではなく何故貴方は未だ武偵を

続けているからです。」

「――それは・・・俺は。」

「――ただ一つ、皆に救ってもらったからだ。」

「ならばどうするか分かりますね？」

「――立ち上がるか？」

「そうです、立ち上がりなさい遠山キンジ。貴方が信じ、そして……
貴方を

信じてくれる仲間の元へ帰りなさい！遠山キンジ！！

「貴方の思いと力を持って！！」

「う……ン。」

「遠山（キンジさん）!!」

「ミシエラ……詠。」

キンジはそう呟きながら起きあがるところ聞いた。

「兄さんは!？」

「今安静にしている、もうじき目覚めるはずだがお前こそ大丈夫だったのか!? 心臓が一度止まりかけていたんだぞ!？」

ミシエラは慌ててそう言うときんじはこう答えた。

「ああ大丈夫だ、何とか……未だ戦える。」

そう言って立ち上がろうとして……よろめく寸前に両肩に

何かを掴まれたような感触を感じたので見てみると……ミシエラと詠がキンジを支えていたのだ。

そしてミシエラがこう言った。

「無理するな遠山、私達は仲間だ。お前が立ち上がろうとするなら私達がそれを支えてやるからお前は私達を頼れ。」

「今まで貴方が支えてくれたように。」

ミシエラと詠が互いにそう言うのを聞いてキンジはそうかといつて

温かい気持ちになっていくと……金一が目覚めたのだ。

「あ……ぐ。」

「兄さんー!」

キンジは金一に近寄ると金一はうめきながらこう続けた。

「キンジ・・・よく聞け・・・鎧竜剣に・・・ついてだ。」

「鎧竜剣？」

それを聞いてキンジはいつの間にか腰に収まっている鎧竜剣を見ると金一は

こう続けた。

「それは・・・母方の・・・先祖が・・・使っていた・・・武器・・・元は・・・言い伝えだが・・・竜から・・・造られたと・・・聞いた。」

「竜？・・・なんじゃそりや？」

「分からん・・・だが・・・こう・・・聞いた。」

昔々ある所に竜がいました。

竜はあらゆる環境を物ともせずあらゆる攻撃を退かせ、体を作り変えることができるのでした。

先祖は妹に頼んでその竜を討った後その竜の骨で剣を造りました。その剣は鎧を纏う事が出来、あらゆる戦で勝利を納める中で妹はこう言いました。

——兄上、この剣にはかの竜が眠っておられます。

それを聞いて戦終わりしその後には剣は封印され鬼が現れる迄封印されましたとさ。

「だが．．．それには続きがあつたんだ。」

「続き？」

「そう．．．嘗て．．．その剣を．．．使おうとした．．．武將が．．．使用して．．．喰われて．．．死んだ。」

「!!!」

それを聞いて3人は驚いているが金一はこう続けた。

「そして．．．気づいた．．．兄は．．．妹にしか．．．使えない事に．．．

そして．．．妹を討つて．．．封印して．．．3代目で．．．使用され．．．

使つたのは．．．僅か．．．数人．．．そして今．．．お前は．．．選ばれた．．．その剣は．．．持ち主が．．．先代よりも．．．強ければ．．．纏う事を．．．

許す劍．．．そう．．．お前は．．．俺よりも．．．強いから．．．戦え．．．

キンジ．．．義の為に．．．そして．．．仲間の為に。」

良いなと言うとキンジは頷いて鎧竜剣を抜くのを見て金一はこう呟いた。

「(ああ．．．お前は矢張り．．．誰よりも強い正義を持つてるんだなキンジ)．．．頑張れ」

「インクルショー——!!!」

進化と決着

インクルシオ、それは生きた武器。

強い力又は可能性を持つ者に自身でもある鎧を与えることができる力。

そしてそれは所有者が強くなればなるほど・・・進化すると言う物だ。

「何だこれは!?!」

シャーロックホームズはそれを感じて恐怖した。

これまで体験したことすらない絶対的強者に対する動物的恐怖心が

シャーロックホームズに刻み込まれていた。

そしてそんな中で天草はこう思っていた。

「これはまるで・・・竜。」

キンジの背後に現れたインクルシオの鎧がキンジを覆うかのように包む中で

複眼の瞳と牙の顔が現れるとキンジの鎧が造り変わったのだ。

まるでラプターみたいな見た目をした鎧

背面部にはリボルバーキャノンやバスターソードがあったのがなくなり

その代わりに両手にはトンファアのような剣が、両脚にはリボルバー

見たいな物が

足首に付けられていた。

そして何よりも尻尾のように折り畳まれていたノインテーターが腰に付けられており背面部には巨大な翼が生えていた。

最後に頭部だがバイザーの様なマスクになっておりまるで・・・小さな竜である。

そしてキンジはシャーロックホームズがいるであろう方向霧の中から

見つけて・・・一瞬の速さでシャーロックホームズに肉薄した。

「ウオらあ！」

「!!」

シャーロックホームズはキンジの声を聴いて嫌さずに防御しようと

両手を前にした瞬間に・・・蹴り飛ばされて吹き飛んだ。

「がは」

シャーロックホームズは肺の酸素が無理やり出されるような感覚に

襲われたと同時に何時の間にとそう考えている間にもキンジは

もう一度肉薄して殴り飛ばそうとすると雷球が

キンジの目の前に出てきた瞬間に・・・キンジの腰に付けられている

ノインテーターを振りかざして破壊した。

「!!」

シャーロックホームズはそんなと思いながらも今度は水を射出しながら

風を出すそれが全てが・・・当たらなかつた。

全てを躲したキンジは両手にある爪状のブレードを展開したと同時に

シャーロックホームズは持っている剣で応戦しようとした瞬間に・・・

剣が砕けたと同時に自身の腕が斬り落とされるのを感じた。

「な・・・に」

シャーロックホームズはそんなバカなと思っ
ているがキンジはお構いなしに

翼を広げて飛翔してノインテーターで叩き潰そうとするが半歩離れて

回避することに成功したのだ。

・・・残った腕と引き換えに。

然しキンジは何か違和感を感じて・・・こう言った。

「お前は偽物だな、血が出てねえ。」

「ああ・・・分かってしまったか。」

そう言っ
て両腕を無くしたシャーロックホームズは砂になって代わりに

現れたのは・・・左腕を失ったシャーロックホームズであった。

「君は本当に素晴らしいよ、アリア君のパートナーに君を選んだのは

正解だった。」

「嬉しい、未だそんな戯言言ってるどぶつ飛ばすぞ。」

「イヤイヤ本当だよ？だからこそ

私は君とアリア君をパートナーにしようとして・・・彼女達を
けしかけたんだがね？」

「・・・どう言う意味だ。」

キンジは声色を低くしてそう聞くとシャーロックホームズはこう
答えた。

「何、これから起こりえる戦いに備えて君達には強くなつてもらわ
なければ

ならなかつたんだ。意志を貫くためには力が必要だからね、

だからこそ僕はギリギリ死なないような相手を段階的にぶつけて
いく

『武力の急騰（パワー・インフレ）』という手法を使ったんだ。」

「・・・まさか手前・・・!!」

キンジはそれを聞いて仮面の中で奥歯を噛みしめていると

シャーロックホームズはしれつとこう答えた。

「その通りだ、僕はコグニスを持ってそれに当たったんだが、僕の予想を大きく裏切る事だらけだ。峰理子君はアリアに勝っただけではなく」

人体改造で強化されているシジャンヌを連れている。ブラドはその天草君が勝ってしまいパトラなんてあの様だ、全く何が起きているのか

分からないが一つ分かる事と言えば・・・如何やら私は神に見捨てられたと

言う事だけだね。全く言ったドウシテ」

「もう喋るな老害。」

「?」

シャーロックホームズはどうしたんだと思っていると・・・

怒り心頭になっているキンジがシャーロックホームズに向けてこう言った。

「確かに強くねえと意志は通らねえけどな・・・正しくなきやあ

その意志を通しちやあいけねえって言うのが分からねえのか手前は！やっぱ手前はアリアと同類だな!!自分勝手に自己中心的で自分の思い通りにならないと

気が済まねえ只の老害だ!!」

「嘗て1世紀前は私が必要であったように今の時代にはアリア君が必要なんだ、その為に必要な事と何故分からない?」

「手前の時代と今じゃ違うんだよ老害が！俺達の流儀を手前の時代
錯誤な

やり方で狂わそうとするならまずは・・・

・・・その考えを改めさせてやる!!」

そう言つてキンジはノインターターを構えるとシャーロックホームズは

拳銃を構えた。

恐らくインビジブル・バレットで攻撃するのであろう、だがキンジ
は

そんなの関係ないとそう思っている。

これまで自分の自由に動けたかもしれないがそうはいかねえと思
いながら

キンジは・・・突貫するがシャーロックホームズはこう呟いた。

「それはもう何回も味わったよ。」

そう言つて放つた瞬間に・・・当たることなく文字通り目にも止ま
らぬ速さでシャーロックホームズに肉薄した。

「覚悟しろよクソ野郎！」

「!？」

「手前が今までやってきた悪事で人生狂わせた連中の拳を喰らつて

反省しろや——!!」

「こがああああああああ!!」

シャーロックホームズはその拳を顔に諸に喰らって・・・

壁にめり込むような形で吹き飛んでった。

一つの時代の終わり

「勝った・・・な。」

金一その言葉で決着がついた。

シャーロックホームズは壁に埋まるかのような感じで倒されたところを

見ていたがためにそう言うかと天草もこう言った。

「ええ・・・僕たち武偵の勝利です。」

そう言った瞬間に全員が・・・突如として膝を床について倒れそうになっていた。

何せ相手はあのシャーロックホームズだ、全神経を尖らせていたがために

脱力してしまったのだが相手が相手であつたがために無理も無からう。

するとキンジも・・・インクルシオが解除されてしまったのだ、強制的であることからタイムリミットだったのだろう。

インクルシオが解除されたと同時に倒れそうになっていた、一度斃されてもう一度戦う事となったのだ。

然も進化しているがために性能に対して体が追い付かなかったのかもしれない。

「う・・・ぐ。」

キンジは息を荒らしている中で懐から・・・手錠を取り出した。

『シャーロックホームズ・・・お前を・・・逮捕する。』

そう言つて手錠をかけようとした次の瞬間に・・・泡が目の前に現れて・・・

爆発した。

「がは」

「遠山！」

「キンジさん!!」

「キンちゃん!!」

「遠山君!!」

ミシエラ、詠、白雪、天草、不知火が互いにキンジの駆け寄りをする

と
シャーロックホームズがキンジ達に向けてこう言った。

「まさか・・・僕が負けるとは意外だったよ・・・時間が過ぎようとしている・・・速く始めないとね。」

そう言うとシャーロックホームズが拳銃を持って・・・光輝き始めたのだ。

「!?!?!?!?!」

それを見て全員が何だと思っていた。

赤く輝くシャーロックホームズは拳銃を空に向けた瞬間に・・・鏡の様な何かが現れた。

「暦鏡」

白雪がそう呟くと映ったのは・・・アリアに似た少女であった。だが見た目が違っていた。

ピンクのブロンドではなく金糸の様な亜麻色のツインテールで瞳の色も紺碧色であった。

背中が開いたサマードレスを着て誰かと喋っているのが見える

と
シャーロックホームズは拳銃をアリアに向けてこう呟いた。

「未だ条件が満たされていないが・・・仕方ないね。」

そう言った瞬間に・・・アリアに当たって鏡が消えた。

「今のは・・・何だったんだ?」

キンジがそう呟くと天草がこう答えた。

「あれは『暦鏡』と言って時と空間を超えて対象を見ることが出来る業です、

ですがそれを使った場合対象の時間に干渉できることから禁術に指定されていますが・・・彼はそれを破った。」

天草は怒り心頭で村正を構えてこう言った。

「貴方は禁忌を犯した・・・その末路がどんな風なのか

貴方は知っていますよね?」

そう言うがシャーロックホームズは只・・・笑ってこう言った。

「それがどうしたんだい？」

何も悪びれもない様子であったがためにギリりと歯軋り鳴らして
天草は

斬り捨てようとその時に・・・地響きめいたものが揺れた。

「何だ!？」

「潜水艦が沈むのですか!？」

詠がそう云う中で辺りで白い煙が足元に立ちこんでいくのが見え
た。

「まさか・・・ミサイルを!？」

「!!!」

不知火の言葉聞いて顔を青くする面々、何せICBMだ、何処に
落ちるのかや

どんな弾頭なのかと想像するとシャーロックホームズがこう言っ
た。

「これは全て脱出艇だ・・・私が死ぬことで彼らは元の組織に戻るだ
けだ。」

そう言うシャーロックホームズが・・・白髪になり始めていたのだ。
するとシャーロックホームズは全員に向けてこう言った。

「逃げなさい、ここはもうすぐ火の渦だ。」

それを聞いて全員がどうするかと思っていると・・・金一がこう言っ
た。

「・・・撤退するぞ、こいつはもう動けない。」

それを聞いて全員が頷いて出ていくのを見て
シャーロックホームズはキンジに向けてこう言った。

「遠山キンジ君・・・君に名を与えよう。」

「「「「「?」」」」」」

それを聞いて全員が何だと思っているとシャーロックホームズ
は・・・

こう言った。

「『竜騎士（ドラゴナイト）・キンジ』・・・その2つ名だ、
大事にしたまえよ。」

そう言い残してシャーロックホームズはガクツと・・・息を引き取つ
た。

それを見た全員が出て云った後にシャーロックホームズは内心こ
う思っていた。

——ああ、遠山キンジ君。どうか、アリアを……私の大切な子孫
を
導いてやってくれ。

イ・ウー事件はこの日終結したが……キンジ達は知らなかった。

これが長い長い戦いの……序章でしかなかったことに。

夏休み

それから1か月間キンジ達は缶詰め状態で武偵校に来ていた。

あの後教員達が向かった時には既に終わった後で蘭豹先生は暴れられないせいで

怒り心頭であったが綴先生は捕まえているパトラの尋問で・・・
良い笑顔をしていたのでキンジ達は内心合掌をしていた。

そして武藤とカイズマスが『アンリベール』号を、

先生たちがボストーク号を操舵して帰還した時には全員死んだように眠っていた。

そして眠りから覚めて目にしたのは・・・泣き顔状態での松葉がそこにいた。

それを見たキンジはバツが悪そうな顔で謝ると松葉はこう言った。

『約束として今度どっか連れて行きなさいよねー!』

そう言った後に政府関係者を名乗る男が現役の武偵を連れて『イ・ウー』について根掘り葉掘り聞かれた後にこう言われた。

「事後処理は我々がやるからこの事は永久に他言無用。」
そう言うが蘭豹先生はそれに対してメンチ切ってこう言った。
「お前ら餓鬼どもが死ぬ思いでやって来たのに言葉が其れだけで然も

上から目線とは良いご身分だなおい!なあにが事後処理だ!!手前らの

実力が無いからこいつらが頑張ったのに礼も何もなしで言うとは頭どうかしてんじやねえのか手前は何か

こいつらにしてやらなきやいけねえって言う大人としての態度は

ねえのかごら!!?」

それを聞いて政府関係者は何だと!と一触即発状態であったが現役の武偵も

こればかりは彼らが正論だと言って味方せずであったがために彼は渋々

こう聞いた。

「それで・・・望みは何だ?」

それを聞いて全員がそれぞれこう答えた。

天草

「先ずは報酬として一人に付き口止め料も含めてそうですね・・・

『5億』はどうでしょう? 『イ・ウー』と言う巨大な裏組織一つを滅ぼしたのですそれくらいがベストかと。」

ミシエラ

「私が要求するのは私の罪に関する記録の完全抹消だ、

私が『イ・ウー』に関する証人尋問の不参加も含める事。」

不知火

「僕はあまり望まないけどあえて言うなら遠山君のお兄さんに関する悪意のある情報を発信してきている旅行会社の訴追かな? 遠山君あれで結構参っているし

同業者から見てもあれを放置することは許されないからね。」

カイズマス

「我からはそうだな・・・『アンリベール』と『ポストーク』の所有権だ、

前者は豪華客船であるから私のプライベートシップとして使いたいし

『ポストーク』はあれを我らの移動用居住船として使いたいからな。」

詠

「私からはそうですね・・・私が懇意にしている孤児院に資金援助してもらえるとありがたいですね。」

金一

「俺はそうだな・・・俺の死亡通知の取り下げと祖父母と弟に対して

行った

過激な報道に対する賠償金と謝罪だ、それ以外は望まない・・・いや待てよ

もう一つだが俺が保護している調の戸籍を俺の妹として登録して欲しい。」

キンジ

「俺からは皆に迷惑かけちゃったからこれを単位として加えてくれ、

それとカジノでの人身売買についても＋する事だ。」

松葉

「私からはそうね・・・新しいパソコンが欲しいわね、未だ世間に出ていない

最新型が一つ欲しいわ。」

それを聞いて天草の金について以外は何とかすることに成功して報酬であり

任務として扱われた。

アリアに関してはだが裏切りをしようとしたことが分かったため

その対応と彼女の母親が無罪である証拠がある為政府関係者は思う様に

身動きとりづらくなっているためこれ以上の介入が無くなった。

それとだが白雪は望みに対してこう答えた。

「わ・・・私はその・・・キンちゃんとそういう」

そこからは政府関係者は思考を止める程長い内容であった。

そしてやつと1か月たって武偵校から出ることが出来たキンジ達だが世間は

この様に変わった。

先ずは金一が行った救出で誰一人欠けることなく助けくれたことに對して

言われようもないパッシングを行ったとしてネットから情報を提示した人間が

逮捕されただけではなく旅行会社の社長を筆頭に経営陣の殆どが

逮捕された。

容疑は保険金詐欺とテロリストに対する資金提供等が含まれており倒産した事。

金一とキンジの祖父母に多額のお金が入った事。

全員のランクが一つ（キンジは特例でA）上がった事。

そう言うのがあってキンジはこれからメンバーと白雪と共にお疲れ様会を開こうとして自分の家に向かって行くと家の前に誰かがいるのが見えた。

五芒星の家紋が入った風呂敷を今時包んで背負い、赤い唐笠を日傘にしている

黒髪セミロングの・・・白雪を少し小さくしたような感じの少女がそこにいた。

すると少女はキンジを見て嫌な表情をしてこう言った。

「やはり私の悪い予感は当たっていたようですね。」

そう言う少女を見て白雪はアっと言ってこう続けた。

「粉雪!？」

「キンジ、誰よこいつ?」

「遠山、こいつは何者だ?」

「キンジさんこの方は?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、あの子は『星伽 粉雪』。白雪の妹だ。」

「正確には義理の妹で何時も白雪におんぶされていたがな。」

金一が補足すると『粉雪』と呼ばれる少女はキンジを見て・・・
大声でこう言った。

「やっぱりお姉さまは私が『託』で予見した通りこの悪しき武偵校で
魔性の武偵遠山様にたぶらかされていたんですね!!」

粉雪来る

「何しておられるのですか姉さま！こんなに夜遅くまで男性と遊び歩くなんて、

お姉さまは不衛生です！あ、あんなに精練で星伽巫女の鑑とまで言われていた

お姉さまが・・・よりにもよって男性と夜遅くに!!」

何やらギャーギャー言っているが近くにいた金一が頭を抱えてこ
う呟いた。

「そういえば星伽の決まりって酷いが付くほど旧時代っぷりがあつたな。」

「そうなの?」

「ああ、兎に角決まり事には厳しすぎる事で俺もキンジもそれを見ていたが

あれは・・・虐待以外の何者でもないぞ。」

調の問いに対して金一がそう答えると粉雪と呼ばれていた少女は
こう続けた。

「そもそもお姉さまの門限は5時迄なんですよ！そして就寝が

8時と決まっておりますし星伽の決まりです!!」

「・・・今時の小学生ですらもうちよつと遅いわよ。」

ナニコレ昭和なのと松葉が頭を抱えながらそう呟いていると粉雪
はキンジ達の

家の玄関に手をかけて・・・開かないのでじろりとキンジを睨んで
いると天草が

こう聞いた。

「星伽さん、この子の態度どう見ても酷いと僕はそう思いますが
星伽はどの様な教育をしているのですか?程度が知れますよ?」

「貴方!星伽を愚弄する気ですか!!」

「愚弄も何もあなたの行動そのものが星伽を陥れていると理解でき
ないのですか?貴方のやっていることが||外から見た星伽の評価を
下げていることと

理解してくれないといけないのでは？」

「グウウウウ！」

粉雪は天草の言葉を聞いてグヌヌぬと齒軋り鳴らすかのように天草を睨んでいる中でキンジはこう言った。

「さっさと入るぞ只でさえ暑いんだからよ。」

「それじゃあ兄さんお茶は冷蔵庫で冷やしてるからそれ飲んどけよ、この部屋に布団敷いておくから。」

「ああ、ありがとうなキンジ。それにしても済まないな

今日は泊めてくれるなんて。」

「良いさ、どうせ近いうちに爺ちゃんたちの家に行く予定があるから今日は皆で家に泊まる予定だったからな。」

そう言っただけでキンジは台所から巨大な鉄板を取り出しているとそう言えたと

キンジから離れて白雪の隣で座っている粉雪を見てキンジはこう聞いた。

「そっか、いやあ何で来たんだ？ 『託』がどうたらって話だけど？」

それを聞くと粉雪はハイと言ってこう続けた。

「遠山様は求婚されます、今月中に。」

「！！！！！！！！！！」

それを聞いて全員が驚く中で松葉は慌てた様子で粉雪に詰め寄ってこう聞いた。

「ちよ！誰なのよ一体！！ここに居る誰かなの！？教えなさいよ！！」

「わわわわ分かりません！お姉さまではない事は確かですがそれ以外は」

「落ち着け松葉！まだ何か言おうとしていることがあるかもしれないのだー！」

「そうですよ松葉さん！落ち着いて！！」

ミシエラと詠がそう言つて松葉を粉雪から離れさせるとこう続けた。

「私が見えたのは女性の誰かが遠山様に求婚した描写ですので

それ以外は分かりませんが私の『託』は

お姉さまの『占』ほどではありませんが的中しますし

私のは内閣総理大臣にも書状で進言をしたことがある程なので間違いありません！！」

以上ですとそう言うと言つて白雪の手を取つて立ち上がつてこう言つた。

「さあ姉さま行きましょう！私はやる事終わらせましたので

共に星伽に帰って祭祀や神楽やあの例えようもない程美しい舞を手とり足取り

教えて貰つて姉妹皆で膳を頂き同じ臥所で眠り・・・

ああ、そこで色々な表情をされるお姉さまを想像するだけで粉雪はもう・・・で、デジタルビデオカメラを何台も購入しておきたいほどに！！」

「・・・兄さんこの子もうヤバくないか？」

「ああ、俺から見てもこいつは犯罪者になるタイプだ。」

キンジと金一そう言つて粉雪を見ているが・・・白雪はこう答えた。
「私は帰らないよ粉雪。」

「・・・え？」

粉雪は何故と聞くと白雪はこう答えた。

「私はここでやる事が沢山あるの、星伽から出たことで

今まで見れなかったものや星伽については成しえないあらゆることが分かったの。

それにこんな私の事を必要としてくれる人達がいるって分かるから

星伽には帰らないよ。」

「そ・・・そんなお姉さま・・・ここにはお姉さまは穢れてしまいません！

この様な下劣で乱暴で金銭を用いて武力を使うと言う清廉あるお姉さまが

その様な場所に」

「・・・いい加減にして、それはここに居る皆に喧嘩を売ると一緒つて

分からないの？」

調が静かにそう言うのと粉雪は何ですかと言うが調はこう続けた。

「彼らが武力を使うのは弱い人たちがそれを必要としているから、

彼らはそれに答えているだけ。犯罪者は突然として行動するからそれに備えなきややってられないのって分からない？」

「そのような問題に巻き込まれる需要側にも一定の責任が」

「それさ・・・殺された人達の遺族に向かってそう言えるの？」

「!!」

粉雪はそれを聞いてうぐと息を詰まらすと調は粉雪の目の前に迄近づいた。

小柄な調に対してまるで粉雪は大型の動物と相対するかのような恐怖の瞳を浮かべさせているが調はこう続けた。

「彼らは何もしていないのに突然としてその命を奪われたり一生その傷と

生きて行かなければいけない、そんな中でそれ言って・・・誰が納得するの?」

「・・・・・・・・」

「貴方は武偵をどう思っているのか分からないけど少なくとも私みたいに

この人たちに救われた人達が大勢いるって事も理解して。」

「それに貴方の言っていることはまるで自分は悪い事すらしていないとでも

言いたげですが知ってますか?そういう人ほど何かあって巻き込まれた際に

誰も助けてくれないと言う現実がある事を?」

天草が目を細めてそう言うのと粉雪は怒りで赤面してキンジ二向かって

こう言った。

「貴方が・・・貴方のせいで姉さまは!!」

「粉雪!!」

白雪は粉雪に向けてきつく言うがそれを聞いて粉雪は・・・泣きそうな表情で立ち去って行った。

そして全員どうするかと聞くとキンジはこう答えた。

「どっかで飯食か。」

そう言って家から出る準備を始めた。

帰ろう

「あの後白雪から電話があつたが如何やら粉雪の奴帰つちまつたよ
うだぜ

兄さん。」

「そうか、まあ大方白雪ちゃんに怒られただろうが自業自得だ。」

「其れに彼女のあの目……まるで何もかも自分の思い通りになると
思っている

子供の様ね。」

調がそう呟くと確かになどミシエラはこう続けた。

「あの言動はまさにそれだ、己が言いたいこと言つてそれが
どの様な結果になるやも考えようともしない。」

「それにしても彼女何がしたかつたのでしようね?」

詠がそう聞くが不知火はこう答えた。

「さあね、僕からしても聞いてて得にならなさそうだから聞かなか
つたけど

多分白雪さんを星伽に戻したかつたんじゃないのかな?」

「それにしてもあれは言い過ぎだ、ああいう輩は一度痛い目見なけ
れば

学ばん。」

カイズマスもそう言つて……ステーキを食べていた。

そう、あの後彼らはステーキ店でステーキを食べていたのだ。

然も上級の奴を食べており無心で食べていた中でキンジが言つて
きたので

この会話となつた。

「それじゃあ俺は明日実家に帰るけど皆はどうするんだ?」

そう聞くとそれぞれこう答えた。

不知火

「うゝゝん、僕は予定なしかな?これと言うとなると『イ・ウー』の
残党との

戦闘に備えて武器の新調もしておきたいなあつて思つていてね。」

カイズマス

「我は今回手に入れた潜水艦と客船を改修だな、今後の我らの海上の

拠点とするがためにロジの者達と共にこの学校に残る。」

天草

「僕は教会の清掃があるのでそれをして炊き出しとかにも行きま
す。」

ミシエラ

「私は遠山と共に行くぞ。」

詠

「私も・・・宜しければ宜しいでしょうか？」

そう言っただけでどうするかって話の時に・・・電話が鳴った。

キンジは何だろうと思っていると出てきたのは・・・

自身の『戦妹（アミカ）』であった。

『戦妹（アミカ）』とは一年間上級生が下級生の面倒を見たりする・・・
早い話弟子入りするような感じで色々学ぶのだがそのキンジの『戦
妹（アミカ）』から通信が来たのだ。

『お久しぶりです師匠、退院おめでとうございます！』

「おお、お前は元気だなあ・・・『柳生』。」

『ハイ師匠!!』

「師匠言うな。」

そう言っているのは『柳生 百恵』、キンジの『戦妹（アミカ）』で
所属はレザド。

大型の仕込み武器を入れた傘で攻撃すると言う古風なタイプであ
る。

一体何があったんだと聞くと『柳生』はこう答えた。

あ、はい。師匠は恐らく知らないでしょうが我が校のサッカー部がダムダム弾を密造していたのを見付かって全員停学2週間ですて全国高校サッカーCS二次予選に出場できないと言う理由で選手を集めておりますが如何せん理由が理由だけに

集まったのは私を含めて5人・・・それも女子ばかりである為男性を

一人程欲しておりました師匠か又はお知り合いに頼んで欲しいと思っております。』

「・・・そうだなあ・・・今チームメイトがいるから聞いてみるぞ?」
『助かります。』

そう言つて事情を説明すると・・・カイズマスがこう言った。

「そういえば暇な奴が何人かいるからそいつらに頼もう、我が電話で

聞いておくからキンジ、お前に報告しておく。」

「助かった、後で『柳生』に報告しておく。」

そう言つて今回はお開きとなった。

そして次の日、キンジは金一、ミシエラ、調、そして詠を連れて浅草にある
実家についた。

「古風な場所だな。」

「まあ確かに家つて古いよな。」

ミシエラの言葉を聞いてキンジがそう答えてインターホンを鳴ら

すと・・・

祖母が現れた。

「あらキンジお帰りなさい・・・金一も良く帰って来たわね。」

「・・・祖母ちゃん俺」

「ソウイウノハなしよ、家族なんだから先ず言う事は？」

祖母がそう言うのと金一は暫くして・・・こう答えた。

「・・・只今。」

「そう、それよねやっぱり。お菓子はもう準備しているからお爺さんが
待ってるわよ。」

そう言って全員中に入って行った。

そして祖父が今にいとキンジと金一と・・・ミシエラ達を見てこ
う聞いた。

「おナンドその子達？お前たちのコレか？」

そう言って小指を指すと・・・祖母がそれをへし曲げるかのように
掴んだ。

「いだだだだだだだだだだだ母ちゃんヤメテ！」

「あらら、何か変なこと言っているからダメてるだけよお爺さん？」

祖母はそう言って・・・ジト目で睨んでいるがために祖父は怖いと
思いながら

指を下げると金一は頭を下げてこう言った。

「2人とも御免、今まで心配かけてしまった。任務については言え
ないがこれは遠山家の義」

「そんなのどうでも良いんだよ。」

「へっ？」

祖父の言葉を聞いて何故と聞くと祖父はこう答えた。

「生きているって分かっただけ良いって事だ、心配することはねえ
よ。」

「爺ちゃん」

「ま、それはそれとして飯は寿司だから一緒に喰うぞ。」

「ああ・・・アア。」

金一はウルウルと涙流してそう答えた。

この日はキンジにとっていい日であったが・・・世の中良い事と悪い事が互いに入れ代わり立ち代わりに怒る事ってよくある事なのだ。何せ・・・。

「キンジさん、私と結婚してください。」

唐突に・・・それも意外な人間からプロポーズされたのだから。

レキ対キンジ

「キンジさん、私と結婚してください。」

「……ハ？」

キンジはその声の主……レキの言葉を聞いて何だと思っていた。レキはスナイプのエースでありキンジも前はお世話になったことがある

武偵である。

彼女の獲物は『ドラグノフ狙撃銃』

これまでのスナイパーライフルにはなかった美しい程の細身なフォルムの癖に
耐久性と信頼性が高い事から世界を代表する銘狙撃銃に該当されている。

そんなまあ……結婚と言う色気な事言うかとキンジはそう思っている。

無口、無表情、何考えているか分からないと言う無の三拍子が揃っている

この少女がそんな事考えるのかと思っているとレキが近づいて来たので

ワンステップして避けてこう聞いた。

「何の真似だレキ？」

「遠山キンジさん、貴方はアリアと敵対しました。結ばれない確率は高いですが

念には念を入れてしないと貴方を『ウルス』には出来ない。」

『ウルス』？……何だそれは？」

「家族と言う意味です。」

そう言うときンジはこう答えた。

「……何で俺なんだ？」

「風は貴方だと言っているからです。」

「風？」

キンジはそれを聞いて中二病みないな事言ってやがると思ってい

ると

キンジはこう答えた。

「断る。」

「何故ですか？」

「風が何なのか知らねえが一つ言うぜ、俺に銃を突き付けて家族になれだ？」

冗談じゃねえぞ俺はお断りだ。」

「何故です？」

「分かり切った事だ、家族って言うのはなレキ、『絆』の問題だ。」

「絆」

「そうだ、相手を信じて信じられて互いに補い合ってそう言うのが家族だ。」

けどお前のは家族を作るにしてもやっちゃいけないことだ、そういうのは

脅迫であって武偵以前に人間としてやっちゃいけない事だ！」

そう言うがレキは一度目を閉じて・・・こう返した。

「キンジさん、それは貴方の価値観です。私にとって異性とはそのようにまどろっこしいせずに・・・奪うものですから。」

「そうかよ・・・だったらその考えを改めさせなきゃな。」

キンジはそう言いながら鎧竜剣を構えると・・・突如として何かキンジ目掛けて襲い掛かった。

「な?！」

突然の事で驚く中で鎧竜剣が奪われるのを見て誰だと思っていると

そこにいたのは・・・巨大な狼であった。

「何だあいつは!？」

キンジはそれを見て驚く中でレキはこう言った。

「それでは始めましょうキンジさん。」

「畜生が!!」

キンジはそう言って非常階段に降りて下がって行って駐車場に向かっ

た。近くにある大型車両を盾にして拳銃とナイフを構え乍らこう言っ

た。「クソがあの子、まともじゃなかったのかよ!」

キンジはレキの性格と言うよりも倫理観の欠落に驚いていた。

あれは間違はなく本気の日であったとそう思いながら腰にある鎧竜剣の鞘を見てこう続けた。

「あれが無いとインクルシオになれないか・・・

あれには結構助けられたからなあ。」

そう呟くとキンジは意識を切り替えてこう言った。

「兎に角アイツが何考えているのかはつきりしなきゃいけない、こんな事するとはなと思うが吹っ掛けられた以上はぶっ飛ばす。」

キンジはそう言った矢先に・・・狼が現れた。

「ちいー!」

キンジは狼の飛びつきを躲すが何かを感じて・・・伏せた。

地面には銃弾がめり込んだような跡があった。

「流石エースだなおい。」

そう言うのと再度狼が襲い掛かろうとした瞬間に・・・煙が辺りを巻き込んだ。

「!!」

キンジと狼は何だと思っているとキンジの手に何かが弾かれて云ったような

感じがした。

「何があつたのですか師匠？」

「おお、柳生か。まあ色々となつて言うか何であそこにいたんだお前？」

キンジは目の前にいる豊かな銀髪をツインテールみたいに纏めて
いる

右目に眼帯を付けた少女、『柳生 十香』を見ると柳生はこう答えた。

「あ、はい。師匠から紹介された人達のおかげでクエスト達成できたので

そのお礼と思ひまして何やら師匠が呼ばれたような感じであつた
が為追つて

来たのですがこれは何が？」

「まあ色々だな、あの狼とスナイパーに追われている様な感じ
伏せろ！」

「うわ!？」

キンジはそう言つて柳生と共に走っている中で一緒に路地に入
ると

銃弾の跡があつた。

「ああクソつておい大丈夫か……」

キンジはそう言つて柳生を見て……言葉を失つた。

何せ今キンジの手には……柳生の胸を掴んでいたのだ。

「し……師匠／＼／＼／

柳生は赤面しているとキンジはやばいと思つて下がると謝つた。

「悪いその・・・本当に」

「いえそんなこちらこそつまらぬものをもって又来ました師匠！」

「またアイツかよー！」

キンジは襲い掛かってくる狼を見て避けて去って行くとキンジはどうするべきかと思っていた。

狼は恐らく匂いを追って来たのだと思っていると匂いが効きにくく尚且つ

あのレキのスナイパーを避けることができるという一石二鳥の方法はないかと

思っていると・・・ある物を見た。

「なあ柳生、ちよつといい考えを浮かんだが乗るか？」

「師匠の作戦でしたら喜んで。」

そう言うのと柳生はキンジの考えを聞いて・・・こう答えた。

「其れなら確かに何とかかなりますがですが学園手前ともなれば」

柳生がそう言いかけるとキンジの携帯の電話が鳴った。

相手は誰だと思っていると出てきたのは・・・彼女であった。

「遠山どうしたんだ遅くなっているぞ。」

「ミシエラ!？」

ミシエラであった。

レキ対キンジ後編

「ミシエラ!どうしたんだ一体!？」

『遠山か、貴様が遅いものだから心配して電話してみたのだが何かあったのか?』

「ああ!現在進行形でな!!」

そう言っただけでキンジが説明するとそう言えばとミシエラがキンジに向けて

こう言った。

『少し前の事だ、未だ私が《イ・ウー》にいた時だがプロテクションが

モンゴルにいとある民族に勧誘した時の事だが彼女たち全員の思想が

まるで戦士の様な風潮であったと言っていたがレキの言葉は確かにそれに近いな。

それに風と言っていたが彼女達も同じことを言っていたからもしかすれば

レキは彼女達と同じ部族の一員かもしれんな。』

「部族・・・モンゴル系は確か放牧民族だったよな!？」

『ああそうだ、そして彼女達のスナイパーとしての技術は全員トツプラシクで

裏の仕事にも精通している。恐らく手に入らないと分かれば貴様を殺すだろうな、

お前の戦妹毎。』

「ふざけやがって・・・どうするべきか考えているところだけど何かいい方法あるか!？」

キンジがそう聞くとミシエラがこう答えた。

『奴には狼がいる、そいつがお前を追い回しているとなると

匂いをばら撒くと言う手があるがそれは愚策だろうな。今どこにいる?』

「今下水道から出た処だ!臭くて堪ったものじゃ」

『よし……今ならイケるだろう。』

「ハアどういう意味って……成程そう言う事か。」

「遠山さんの姿が無い？逃げた処から鏡経由で追います。」

レキはそう呟いて周りを見渡していると……狼、いや……自身
が

新たに加えた仲間である『ハイマキ』の姿を確認したが

何やら『ハイマキ』の様子が可笑しい事に気づいて近くを見ると……

それは下水道に繋がるマンホールがあった。

「成程、ハイマキの追跡から逃れるためにあの中ですか。」

ですがここから近くのマンホールは既に把握済みです、逃げられは
しません。」

そう言っただけで辺りを見渡して暫くして……夜になってしまった。

「来ない？……まさか！」

レキは珍しく慌てている様子でキンジの家がある方角に射線を移
して……

影が見えた。

「あれは遠山さんの……逃げられました。」

そう言っただけでどうするべきかと考えて……背後から声が聞こえた。

「チエックメイトだ。」

「!!」

その声を聴いてまさかと思って振り向いた瞬間にいたのは……キン
ジと十香、更に天草とミシエラと詠達もそこにいたのだ。

「……あれは罠でしたか。」

「まあな、あれは松葉とカイズマスに頼んで即席の人形を置いて

貰ったんだ。」

「どうやって買ったの？」

「それはこうだ。」

キンジはそう言って説明した。

数分前

「匂いで俺達がいる事を隠すのか？」

『そうともいえるが狼がその程度で騙せるとは思えんから私と天草も

そっちに向かおう。』

「だけど集団で行ってバレるって危険性が」

『それについては秘策がある。』

「秘策だと？」

『ああ、松葉とカイズマスには罠になって貰って我々が家にいると
言う幻を

レキに対して時間差で見せる。その前に私と天草が術で結界を
張って匂いを

抑え込む、そしてお前達は武偵校から少し離れたマンホールから出
てきて

私達と行動を共にしてレキを追い込むぞ。』

「と言う訳だ。」

『ハイマキ』はどうやって」

レキの言葉に対して詠がこう答えた。

「簡単ですよ。私が作ったもやしに天草さんが魚肉ソーセージを買ってくれたおかげで簡単な炒め物をしておいてみたらすぐ様に飛びつきましたよ?」

『ハイマキ』……。」

レキは少し遠い目をしているがまあ所詮は動物であるがためにそれは致し方が無い。

するとレキはキンジに向けてこう聞いた。

「それで私は如何しよう?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「簡単だ、お前の目的が聞きたいだけだ。何で俺なんだ?」

キンジがそう聞くとレキはこう答えた。

「風がそうしろと言っていたからです。」

「風って誰だ?」

「風は風です。」

「そうじゃなくて一体どんな人物かって話」

「風です。」

「……」

それを聞いてもう駄目だなと思っているとキンジはこう言った。

「取敢えずは俺を狙うのはやめてくれるか?」

「仕方ありません、勝負は貴方の勝ちです。貴方の言うままに。」

そう言うときンジはレキに向けてこう言った。

「それじゃあもう俺には近寄らないで欲しい、風の命令でも絶対だ。」

「・・・分かりました。」

レキは少し考えてそう答えた。

これを持ってこの戦いは終結したのだ。

「それにしてもアイツ一体何がしたかったんだ？」

キンジがそう呟くとミシエラがこう答えた。

「分からないが貴様に何かあったとしか言いようがないぞ？」

「そんなの俺は知らんぞ？」

「ならばどうにもならんな。」

ミシエラがそう答えるとキンジは十香に向けてこう言った。

「ありがとうよ助けてくれて、おかげでやばかったぜ。」

「いえこちらこそ！師匠の助けになるのでしたら喜んで！」

十香は嬉しそうにそう言うと言がこう提案した。

「今日は遅いので私達とご飯食べませんか？今日はよく頑張りましたし。」

「そうだな、って言うかお前予定ってあるか？」

キンジがそう聞くと十香はこう答えた。

「いいえありませんって言うかありがとうございますお食事致します!!」

「そうか・・・なら帰るか。」

キングはそう言いながら全員と共に家に帰った。

入学式

9月1日、日本全国にテ2学期がスタートする日である。

武偵校ではこの日に伴って世界初の武偵校でもあるローマ武偵校の制服に則って『防弾制服・黒（ディヴィーザ・ネロ）』を着ると言う伝統がある為全員が

黒い制服を着ているのだがこれを一般人が見たら間違いなく軍隊か

ヤクザの葬式としか言いようが無からう。

そんな中で校長の緑松が如何やら中国からの留学生を受け入れている様であり

確かに見慣れない人間もいるなどそう思っている中でアリアを見つけるが

何やらキンジをみただけで犬歯丸出しで威嚇していたのだ。

如何やらシャイロックホームズを倒したことが彼女にとって

気に入らなかつたらしく今でもこの様な感じである。

その後は如何やら武偵女子の中で戦闘型はパフォーマンスを兼ねて始業式後の

セレモニーでマーチング・バンド（バトンは拳銃又は剣）である。

それをする為にキンジの女性陣の中でミシエラと詠を見送った後どうするべきかと思っていると・・・後ろから声を掛けられた。

「遠山君隣良いかい？」

「ようキンジ、ダブらねえで済んだみてーだな。」

そう言うのは模範の様にきちんとした身なりでいる不知火と無精ひげ生えまくりの武藤の姿がそこにあった。

「ようお前らなんだ一体揃いも揃って。」

そう聞くと先ず不知火がこう答えた。

「僕はこの間の任務が終わったから武器のメンテをしていたんだけど
ど

遠山君聞いた話だけドレキさんを相手取ったって本当なのかい？」

「ああまあな、危うくだったぞ？柳生がいなきや負けてたぜ本当

に。」

「ああ、去年遠山君の戦妹になったっていうあの銀髪の子？」

「畜生羨ましいよなおい！あんな巨乳を戦妹にして

好き勝手出来るんだからよ!？」

「阿保か！俺と柳生はそんな関係じゃねえぞって言うかそんなこと言うために

来たのかお前ら!!？」

キンジがそう聞くと不知火がこう答えた。

「いや、今度の『修学旅行Ⅰ（キャラバン・ワン）』についての話し合いをしようと思っっているんだけど遠山君はどうするんだい？」

不知火がそう聞いてきてそうだなと思っていた。

『修学旅行（キャラバン・ワン）』とは二年時に於いて二回修学旅行が行われており生徒間におけるチーム編成の最終調整を兼ねている

ものである。

大体2〜8名で構成されたチーム編成でありキンジは現在自身を含めて

松葉、天草、カイズマス、ミシエラ、詠の以下6人のメンバーとなっており

途中配備の際には一年間の契約として扱われている。

そしてこのチーム編成は国際武偵連盟（IADA）にも登録され、進路が分かれて解散することになったとしてもチーム虚力の際には

組織の垣根を超えて良いと言うルール設定がなされている。

「俺はいつも通りのメンバーだけどお前は？」

キンジがそう聞くと2人はこう返した。

不知火の場合

「僕はアサルトから何人かで組む予定だよ？」

武藤の場合

「俺はロジとアムドの混成チームだ、女子もいるけど『平賀 文』

だからなあ。」

色気が欲しいよなあとぶつくさ文句を垂れ流していると不知火はこう聞いた。

「遠山君の場合だとどうだろうね？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「そうだな、インケスタは俺とミシエラ、超偵は天草、通信が松葉、ロジがカイズマスでアサルトは詠だからまあ大体が……強襲か？」

「まあ遠山君ってアサルトだったからそっち系だろうね。」

不知火はそう言いながら笑いながら全員学校から出ていった。

始業式が終わった後羽根つき帽子とマーチ衣装を着ているミシエラ達を

見に行くかと思いつながらキンジ齒其れに向かって行って……後悔した。

ミシエラの綺麗なスタイルが際立っていてバトン代わりにしている

ベレッタを投げ乍ら踊りそして……詠を見つけた瞬間にキンジは素早く

視線を逸らしたのだ。

そう……詠のスタイルの良さが原因なのだ。

腰が細いくせに胸とお尻が大きく特に胸が暴れるほどよく揺れるがために巨大なまるでバズーカの様なレンズを付けたカメラで撮つ

ている人間がいたのでキンジは注意しようとした瞬間に・・・他の生徒達はその男の写真を辞めさせた。

「ハイハイごめんなさいね工、撮影許可が下りていないと撮れませんよー。」

「ちよ、ちよつと待って」

「はい連行。」

そう言いながら引きづられて行く男を見てほっとして祭りから遠ざかろうとしていると・・・シャボン玉が浮かんでいるのが見えた。

それを見てキンジは何だと思いながら裏路地に入った。

「そーいや今日は『水投げ』の日だったな。」

『水投げ』とは校長の母校で行われた企画でありこう言われているそうだ。

『始業式の日には誰でも水をかけても良い』

とまあ・・・変なルールだったのが何を如何勘違いすればなったの
であろうか、振じりに振じって

『徒手であるならば誰が誰に喧嘩を吹っ掛けても良い』と言う風に
歪曲されてしまった喧嘩祭りに姿を変えたのだ。

そんな中でキンジは路地に入って・・・こう言った。

「出て来いよ？いるのは分かっただぜ？」

キンジがそう言う・・・声が聞こえた。

「あいや？よく分かったね？日本（リーベン）の武偵校
中々骨のある奴いるね。」

そう言いながら現れたのは・・・巨大な鎌とガントレットを身に着
けた

黒髪の・・・アリアに酷似した少女が現れたのだ。

対決

「何か用か?」

キンジがそう聞くと少女はこう名乗った。

「私(ウオ) 名前『ココ』言うね、お前名は?」

そう聞くとキンジは自身の名前を述べると『ココ』は突如として驚いていた。

「アイヤー! アイヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ!!」

其の儘『ココ』が酒を飲もうとすると・・・キンジが止めてそれを没収して

こう言った。

「おいマテお前未成年だろうか?」

「ナニスルね返すね! 『ココ』は昨日で14歳ね!!」

「それ完全にダウトだからなお前!」

キンジがそう言うのと『ココ』はぷくーつと頬を膨らませてこう言った。

「だったら無理やり返してもらおうネ!」

そう言うのと『ココ』は大鎌を振り下ろすがキンジはそれを鎧竜剣で防ぐが

左手のガントレットで『ココ』はキンジを殴った。

「がふー!」

キンジはそれを諸に当たって吹き飛ぶと『ココ』は酒を取って飲んでこう言った。

「さてと・・・ここからが本領ネ!」

そう言うのと千鳥足で近づいてフラフラと大鎌を振るが・・・予測が出来なかった。

「おわ!」

「避けるなネ!」

そう言うのとすぐ様に『ココ』はまるで蛇のようにキンジの首を・・・締め掛かった。

首締めは技の中でも最も拘束力が強く、絶対に外れないし然も彼女

の場合は

髪の毛を使つてまるであやとりの様な感じで首に絡めて締められているので

紐の様な感じとなつてしまつており意識がもうろうとしている中で

キンジはなにか熱いナニカを感じるとキンジはそれをある現象と似ていることから

キンジはチャンスと考えて・・・『ココ』を壁にぶつけるか腕に噛みつくか

どちらが・・・『ココ』にとつてより傷つけずに済むかと言う阿呆かと言う事を

内心考えて無理やり意識を・・・ヒステリアモードを解除して

キンジは壁に体ごとぶつけようとして・・・何者かが2人の間に割つて入ってきた。

「これは流石に了承できませんよ留学生さん？」

すると現れた男性・・・天草が現れるや否や村正を鞘ごと使つて

叩き潰そうとした瞬間に『ココ』はすぐ様に離れるとキンジは倒れ

そうなどころを踏ん張つて耐えていると『ココ』はこう言った。

「へえ中々やるネお前使えそうね。」

そう言うのと『ココ』はキンジに向けてこう言った。

「私は『万武(ワンウー)』『ココ』『万能の達人』ネ。キンチ0点後
でまた追試ね再見(ツアイチエン)」

そう言つて立ち去つて行った。

「あれが中国の武偵ですか、聞いた話ですが向こうでは得意な事に重点を置いて達人を量産すると言った目的があるらしいですよ？」

「そうか、それにしてもあれには参ったぜ。まさかあれが俗にいう『酔拳』か。」

「酔えば酔うほどに強くなる、然も武器を使えば態勢を取る時のタイミングが付きにくいですからどうしても後手に回る。強いです、ね彼女は。」

「天草、今のは黙っててくれないか？下請けに負けたなんて分かった日には」

蘭豹先生にどやされる。」

「分かってますよ遠山君、流石に中学生に殺されかけたなんて聞かれたら」

折檻物ですからね。」

そう言っているとキンジと天草は別れていった。

その後キンジはミシエラと合流するとある場所にへと向かって

行った。

装備課（アムド）

ここは地上1階で地下が3階と言う逆バージョンの棟である。

セキュリティー厳戒な一階から下におりていくと・・・無数の銃器がラックに

廊下一面に並んでいたのだ。

そんな剣？とした場所でキンジはとある部屋についた。

表札には恐らく部屋の主であろう『ひらがあや』とひらがなで書かれていた場所にノックすると声が聞こえた。

「はーい！開いてますのーだー。」

そう聞いてキンジが開けて中に入ったそこは・・・物だらけの場所であった。

大小様々な工具、古今東西の銃の部品、コイルやねじ、グリップ、プラスチックケースに収められた何百種類もの部品が雑然と天井まで

積み重なっておりまるで鋼鉄のジャングルのようだと思っていると

キンジは奥にある作業台で女兒向けのアニメを垂れ流しながら溶接作業をしている見た目小学生だが実際はキンジと同じ年の『平賀

文』遮光ゴーグルを取って

キンジとミシエラを見ると『文』はキンジ達を見てこう言った。

「おおー！何時もだけどジャンヌと一緒になのだやっぱり2人は出来ているのだ！」

「ふぎけるな、速く例のブツ出してくれないか？」

「出来ているのだ！2人はお似合いなのだ!!」

「あんなあ話を聞け、ブツ」

「出来ているのだ！」

「……もう一遍言ううと今後一切依頼しないぞ。」

「……御免なのだ。」

『文』はそれを聞いてヤバいと感じて謝るとキンジのブツを出してきた。

「ハイ、『デザートイーグル』！改造は既にしていて

マガジン・エジエクトを速くして3点バーストとフルオート機構も付けたのだ！」

そう言っ手渡すと重みはあるが持てない程ではない事とフィット感を

確かめた後にそれと云って『文』はミシエラに向けてこう言った。

「それとジャンヌさんが持ってきたこの宝石のだが加工し直してブローチに入れるようにしておいたのだ！見たことなかったから

大変だったのだ!!」

そう言っ手渡されるとキンジ達に向けてこう言った。

「それではまたのご利用を待っているのだ！」

そう言っ2人は出て云った後帰り道にキンジはミシエラに向けてこう聞いた。

「ミシエラそれってもしかしてだが。」

「ああ、これは返してもらってな。今後必要になるからな。」

そう言っジャンヌダルクの意匠を模ったブローチを握りしめていた。

そう・・・聖遺物が入ったブローチを。
『ガングニール』を。

いざ京都へ。

そして9月14日、修学旅行の日がやって来るもその配られた旅程氷を見て・・・

呆然としていたのだ。

何せ書かれていることが・・・最低限な事しか書かれていないからだ。

『場所 京阪神（現地集合・解散）』

1日目京都にて社会見学（最低

三か所

見学して後にレポート提出の事）

2日目自由行動（大阪か神戸の

都市部の見学）』

「引率0、内容は最低限で完全に自己責任での行動。泊まるのも俺達が決めるってこれ完全に職務放棄ってレベルだぞ本当に。」

キンジはそう言いながらため息ついていると松葉がこう言った。

「しようがないじゃない？何せ『武偵たるもの自立すべし』って武偵法に

記載されてるほどなんだから。」

「其れでもこいつはねえだろ？」

「まあ確かにそうですね、ですがそのおかげで

僕らはカイズマスさんの親から紹介してくれたホテルに泊まれるんですよ？

然もVIPルームで。」

天草がそう言うとかイズマスはこう答えた。

「その通りだ！今日は思う存分楽しむが良い!!」

ハハハと笑いながらカイズマスは駅弁を食べている中でミシエラがこう言った。

「気がかりなのは遠山を狙った留学生、確か『ココ』と言ったようだな?」

「ああそうだが・・・知っているのか?」

キンジがそう聞くとミシエラはこう答えた。

「ああ、と言っても私の知っている『ココ』とは違うがな。」

「どういう事だ?」

「私の知っている『ココ』は《イ・ウー》に武器や物資等を調達する時に

利用している運び屋なのだが奴は確か眼鏡をかけていて黒髪も

そんなに長くなかった筈だから違う人間かと思うが・・・

一応気には掛けておけ。」

「おう分かった、取敢えずまずはこれからだな。」

キンジはそう呟いて新幹線から降りて先ずはと言つて何処行くかを聞いた。

「取敢えずだが寺を3つ回るから先ずは王道の金閣寺と銀閣寺だが最後の一つは何処にするかだが・・・どうする?」

キンジは全員に向けてそう聞くが全員が唸っていると・・・詠が手を上げて

こう言った。

「それでしたら《三十三間堂》はどうでしょうか?あそこは武偵はあまり行かないタイプですのでもしかしたら他の人達とは違った感想文が書けると思いますけどどうでしょう?」

それを聞いて暫く話し合うとそこに決まった。

三十三間堂は古来より弓矢の腕を試すと言ういわば《流鏑馬》を行っていた場所であり中には幾つもの仏像がずらりと並んでいた。そこで見終わった後この後どうするかと言っている中で天草がこう言った。

「それでしたら少し早いですがお昼にしませんか？京都には色々とも名物があるらしいですから食べ歩きすると言うのも一興かと？」
それを聞いてじゃあ行くかとなつて向かったのは・・・とある湯豆腐屋である。

大体の人間はラーメンの本店に行くのだがキンジ達は時間つぶしも兼ねてと

言う理由で綺麗な庭園を見ながら湯豆腐を食していた。

「これが湯豆腐か、豆腐とはこうも色々味が変わるのだな。

まるで《キツシユ》の様な感じだな。」

ミシエラはそう言いながら豆腐を掬っていると松葉がこう言った。

「そうよねえ、ネギとか調味料次第でここ迄主役を出せるってまるでどっかの誰かさんみたいよねえ？」

「どっかのつて誰の事だ？」

「さあねえ。」

そう言いながら松葉は豆腐を頬ばっていた。

そして彼らが泊まるホテルについてのだがこれがまた・・・豪勢であつた。

「よく来てくださいました《フィルデス》様。」

「うむ、明日までここを使う事となつているから宜しく頼むぞ？」

「それはそれは御鼻頂にありがとうございます、お父様には何時も何時もお目にかけて下さっていますので。」

支配人がそう言うに従業員の人達がキンジ達の荷物を取って

ストレッツチャーに置いて部屋まで運んでいった。

中はそれはそれは豪勢な物でこんな所に来て良いのかとキンジは
そう思っているとかイズマスがこう答えた。

「構わんぞ？父上が予約してくれてな、さあ後は風呂に入つて食事
と参ろう！」

そう言ったが無論食事も風呂も豪勢でありこれは忘れることが出
来ない

修学旅行だなとキンジはそう思っていた。

これは序だがアリアは理子、白雪、レキと仕方なく組んだのだが
《ココ》の襲撃があつて結局は止まっていた旅館から出て行つて白雪
のいる分寺迄歩いて行つたと言う序話があつた。

新幹線にて

キンジ達はその後大阪や名古屋の都市部観光を楽しんだ後に山陽・東海道新幹線のぞみ246号東京行きにグリーン車に入った。

これもカイズマスが裏から回してくれたおかげでいい席だなと思いいゆつくりと座って出発した。

そして暫くしてとうとうと眠りそうになると・・・天草がこう呟いた。

「・・・妙ですね。」

「？」

「新幹線の速度が思ったよりも・・・遅くありませんか？」

「・・・何？」

キンジはそれを聞いてスピードを確かめようとするカイズマスがこう言った。

「確かにな、こののぞみ246号100キは余裕で出せるのにこのスピードは

大体80キと言った処だな、この速度では車を使った方が速いぞ。何かあったのかとそう言う・・・車掌さんが現れた。

「お休みの所・・・失礼します。」

そう言うのと車掌は頭上への持つラックと座席下を素早くチェックすると・・・

脂汗を掻きながらそそくさと去って行くのを見てキンジはこう言った。

「何かあったようだな？」

「その様ですね、松葉さん宜しいでしょうか？」

「OK、1分で終わらせるわ。」

そう言ってパソコンを引っ張り出すと通信記録や電波状況などを事細かく

調べていると・・・ある音声データが残っていた。

それを松葉はイヤホンで聞いてみると……とんでもないことが伝えられていた。

『のぞみ246号聞こえるか!』

《はいこちら246号、どうしましたか?》

『たった今通信が入ってその新幹線尉爆弾が仕掛けられていると脅迫電話が

掛ったのだ!!!』

《!?!》

『規定以上のスピードで走行すると爆発させると脅迫が掛り然もその爆弾が

爆発した場合数キロ範囲で被害が起こると映像付きで来たのだ!

至急246号はスピードを90以下で走行し向かってくる武偵を乗せた新幹線と

合流するまで耐えてくれ!!!』

《りよ……了解!》

「……大変の事が起こってるわよ。」

「「「「???」」」」

そして説明を聞くとキンジ達は集まって会議を始めた。

無論他のお客さんが聞くことが無い様に手振り信号で伝えていた。

「(どうする)?」

「(どうすると言われましても我々はこれを知ってしまった以上対応するしかありませんね)」

「(先ほどの車掌の行動は恐らく爆弾探し・・・だが我々のバッグ程度ではこの新幹線を丸ごと爆発させる事など不可能だぞ?)」

キンジ達がそう言うと言いつつミシエラ達がこう言った。

「(恐らくだが荷物ではなく何処かにバラバラに置かれているか・・・車体の下かだろうか)」

「(それはないわね、チェックはちゃんとしているだろうしテロリストだったとしてももうちよつとマシヨ?)」

「(もしかすれば・・・何処かに大きなものが確実に入れそうなどころに

隠してあるのではないでしょうか?)」

詠の言葉に全員がそれを検討した上でじゃあ何処なんだとそう思っていると思つて

キンジがこう言った。

「(取敢えずは全員幾つかの車両を見て回るぞ、他の武偵達にもこの事伝える。)」

「「「(了解)」」」」

全員がキンジの言葉を聞いてそう答えると無言のまま全員立ち上がって

行動を開始した。

「不知火、ちよつと良いか？」

「？」

不知火はどうしたんだと思って近くにある自動扉と車両の間に行く

キンジがこう聞いた。

「車掌のあの動きどう思った？」

「・・・成程僕たち案件だね？」

「ああ、勘が良くて助かるぜ。ちよつと悪いけど他の車両で大きなものが

入れそうな部屋を見つけているんだ。」

「となるとトイレしかないけど入っている人がいるかもしれないね？」

「ああ、だから部屋中のトイレを探しているんだがグリーン車は全部大丈夫だったから残りはこっちだ。手伝ってくれないか？」

「勿論だよ、僕もこう言う事に関してはプロだからね。」

不知火がそう言う・・・車内放送が流れた。

『お客様にお知らせいたします、当列車は名古屋にテ停車する予定で

ありましたが不慮の事故によって停車いたしません。名古屋でお

降りの予定の

お客様方は大変ご迷惑かと思われませんが今暫くの辛抱を宜しくお願ひいたします、事故の解決が出来次第・・・最寄駅から臨時列車で名古屋まで

お送りいたしますので大変申し訳ございませんがご協力のほどよろしく

お願いいたします。尚、付近に不審な荷物・不祥事がございましたら

乗務員迄お知らせください。』

「何言ってるんだ運転手は!？」

キンジがそう云う中で色々とぶー垂れている人間がいたが・・・

一人大声を上げる男性が立ち上がってこう言った。

「こらあ!車掌出せ車掌!俺は名古屋で降りなきゃいけないんだよ

!!

もうドームには客が入ってたんだぞ俺が誰だか知ってるのかよごら

あ!!」

「おいあいつって。」

「うん。『鷲尾 習』、タレントで俳優と歌手やっている・・・女性関

係で

問題が多数ある人間だよ。」

不知火がそう言う・・・『鷲尾』は大声でこう言った。

「大体不審物って何だよ・・・爆弾でも仕掛けられたのかよええ!」

そう言った瞬間に・・・あたりの客がどよめき始めたので他の武偵達が

落ち着かせようとして・・・新幹線が加速した。

電車の中で

「何だ!？」

足元が突如揺れて全員が一斉に後方によるめいたのだ。

「何が起きたんだ!」

キンジがそう聞くと外を見てカイズマスがこう答えた。

「速度が上がったんだ!今までとは打って変わったこの速さから見て

命令されたのだろうな!!」

カイズマスがその速度から恐らくとそう言うのと車両の自動ドアにある

電光掲示板に文字が流れた。

——【只今の速度 130 km】——

すると今を見て鷺尾を中心に車両後部にへと行って・・・壁に埋め込まれた

ドアコックの蓋を高そうなライターで叩き始めているのを見て天草がこう言った。

「彼は恐らくこのスピードの中で出ていくつもりです!」

「正気!どつかでぶつかって複雑骨折か其の儘バラバラ死体よ!」

天草の言葉に松葉が驚きながらそう言ってカイズマスが押さえつけよとすると

鷺尾は未だ駄々こねてこう言った。

「放せ放せ放せよ!俺は名古屋に行くんだあ!!」

「こんなスピードの中で飛び降りればそれでこそ地面か川のシミミみたい

体がミンチになるぞ!」

そう言いながらカイズマスは鷺尾の腕を極めて床に叩き伏せる

と・・・
アナウンスが流れた。

『この列車は どの駅にも停まりません 東京まで ノン・ストツ
プで

た。

「19時22分。」

「?」

一体何の時間だと思っているとカイズマスはキンジに向けてこう言った。

「制限時間だ、この新幹線が東京駅に何処の駅にも停まらずに此の儘

3分おきに10^{キロ}加速した場合のだ。」

「今18時2分だから後80分って所だな……こいつの最大加速ってどの位だ?」

そう聞くとカイズマスは頭の中で計算して……こう返した。

「この新幹線はN700系、東海道区画における営業最高速度は時速270^{キロ}だが……40分後つまり19時ごろにはそれを超えてしまうが最早こいつは走る凶器だ。

安全走行など二の次で車体やレールの負担が計り知れぬ、最悪何処かのカーブで曲がり切れずに脱線するかという危険性があるが

この線路にはカーブがあっても緩やかであるから何とかだろう。」

「……最高……何も考えずに爆走するとどの位になるんだ?」

キンジがそう聞くとカイズマスは暫くして……こう返した。

「設計限界速度は350〜360……だがこれは公に報告されている奴で

本当はどの位なのか知っているのは本社の幹部クラスであろうな。」

それ以上は分からないと両手を上げて降参している中で松葉がこう続けた。

「19時3分ごろにはその位よ、けど東京駅に着いた時には410 km……」

もうこいつは走る爆弾ってレベルじゃすまないわ。」

そう言っつて松葉がパソコンで計算した情報を伝えると……近くに
来た

武藤が補足した。

「噂程度だがこいつは397^{km}まで出したって話は聞いたことがあるがよ、本当はどんだけのスピード何るのか誰も分からねえんだ。410 kmだ？」

もう完全に未知の領域だぜ？」

そう言っているよ……不知火がトイレのドアをガチャガチャとしているよ

キンジに向かってこう言った。

「遠山君！ここのトイレこんな時なのに開かない！」

「そいつだ！ミシエラ達をこっちに戻すぞ」

そう言ってキンジが電話を掛けようとすると……向こうから電話が掛った。

「ミシエラか！爆弾が」

「遠山、こちらも見つけたぞ。」

「まさかまだあったのかよ!?!」

そう言っているとミシエラはこう答えた。

『ああ……爆弾の起動スイッチだ。』

「!!何処だそれは!?!今松葉をそつちに」

『今代わる。』

そう言って暫くすると……聞き慣れた声が聞こえた。

『助けてシーくーん！りこりんこのままじゃあお漏らしして漏電
して』

2つの意味で爆発しちゃうよー!!』

「・・・なアにこれ〜?」

車内での戦闘

「厄介ねこれ、確かにスイッチが内蔵されてるわ。然も感圧だから重さが1グラムでも狂えばその場でドカンよ。」

「ふええエエエエ、助けてシー君！さつきイチゴ牛乳飲んでたからお腹がゆるゆるだよ〜!!」

「落ち着いてください理子さん！動いたら間違いなく爆発しますよ！」

天草が慌ててそう言っているとキンジがこう言った。

「トイレで怪しい部屋があった、16号車のトイレ。運転室前のだ、ミシエラの話によればだが恐らく爆弾の可能性が高いと思ってる。運転手と車掌にこの事伝えて列車の連結を破壊して遠ざけさせる。」

「そんな事したら間違いなく辺りが大パニックじゃないの！」

「今は外見たら分かるだろうが大体新幹線が通る場所は山の中だ、トンネルに入ったら出る前に連結器を破壊してトンネルの中で爆破させて

列車を埋めさせる。」

是しか今の所有効な手段がないぞとエリアに向けてそう言うが当の本人は

納得していないがそれはキンジの計画には全面的に反対したいのに

その理由が見つからないからだ。

そして全員が集まるとキンジがこう言った。

「よし、最後列だから全員を前に避難させる。ここを空っぽにさせたら弾薬で

急ごしらえの爆弾にして連結器を破壊、アムドの奴がいるか？」

「おうよ、一人いたぜ。」

武藤がそう言うときんじはこう続けた。

「よし、そいつに簡単な爆弾を作らせるんだ。他の連中は乗客の誘導」

そう言いかけた瞬間に運転室の中から・・・ガンガン！と鳴る音が聞こえた。

「・・・皆構えろ。」

キンジがそう言った瞬間に理子と天草以外の全員が武器を構えた瞬間に

現れたのは・・・ココであった。

「貴方はあの時の！」

「你好キンチ、ここで立直ネ。」

清の民族衣装を身に纏ったここで歯そう言いながら大鎌を構える
と

キンジは辺りを見渡していた。

運転席には女性運転士が半ベソかきながら運転しており他にいたのは・・・

妊婦の女性であった。

脂汗を掻いていることから体調を崩したのだろうと思っていると
ミシエラが

こう言った。

「遠山！私は医療経験がある、彼女は私がかするからお前達は
奴を！」

「分かった！」

そう言うとな知火がキンジに向けてこう言った。

「遠山君！ここは2チームに分けよう！！僕たちが連結器の爆破で

君達は彼女を！！」

「・・・分かった。」

何とかしてえがアイツ強いぞとそう言うとな知火は笑ってこう
言った。

「知っているよ、遠山君は逆境になると強くなるって事がね。」

「買い被りだな。」

そう言うが不知火は笑って立ち去るとキンジを飛び越えてアリア
が出てくると

ココはアリアが持つ日本刀を鎌で受け止めるとアリアとココは互

いに

踊るかのように座席を飛び移りながら戦っていた。

するとアリアはココに向けてこう言った。

「よくもあの時はやってくれたわねココー！初対面の時の

あれは偽名だっただけじゃなくて闇討ちするなんて卑怯よ『ツアオ

ツアオ』!?!」

「其れは欧州人の間違った呼名ね、イ・ウーではシャーク様がそう呼んだネ。

だからココは皆にそう呼ばせてたけど魏ではこう言うね・・・

・・・『曹操(ココ)』！これが正しい呼名ね！」

『曹操』・・・三国志の英雄かよ今度は。」

後2人も出るのかよと内心毒づきながらもキンジは身構えていると

妊婦と共に避難していたミシエラが大声でこう言った。

「気を付ける遠山！奴は『万武(バンフー)』!!あらゆる武術に精通しているぞ!!」

それを聞いてマジかよとそう思っていると事は動いていた。

ココは両袖の長い袂を鰭のように羽ばたかせていると中から香水の容器のような物を取りだすところ言った。

『爆泡珠(バオパオチュウ)！』

そう言ってシュツと噴出した瞬間に車内に胡麻粒レベルの

小さなシャボン玉がアリア目掛けて放たれると理子は慌てながらこう言った。

「アリア気を付けろ！『爆泡(バオバオ)』は気体爆弾だ!!アタシは

イ・ウーで見たけどシャボン玉が弾けて空気中の酸素と混ざると爆発するぞ!？」

「!？」

それを聞いたアリアはきゅつと足音を鳴らした瞬間に……バチイイイイイイイと激しい衝撃と閃光が車内一帯を襲った。するとアリアの後ろにあったシートが何席かなぎ倒され車に轢かれたかのように吹き飛ぶとアリアはうめき声をあげていた。

「あ……うぐ。」

「大丈夫アリア！」

白雪がそう言うときンジは詠と共に近接戦闘で挑むことにした。

大鎌とあの気化爆弾とどっちがマシかと言われれば鎌の方だと思っ

インクルシオの剣で応戦しつつ要素要素で詠の援護があった。

「これはちょっときついね！成程これがキンチの実力って訳ネ！」

ココはそう言いながら戦闘をしていると詠に向けて蹴りを放とうとすると詠は持っている榴弾を一つココ目掛けて放つとココはやばいと悟って蹴らずにすると

キンジはそれをも避けて床に当たると……煙が立ち込めた。

「煙幕!？」

ココはまさかと思っていると香水の容器を下に向けて『爆泡（バオバオ）』で

爆発させてその衝撃で両者が吹き飛んだ。

『『がアアアアアア（*・D・*）!!!!』』

三人が吹き飛ぶとココはまた袖を振って中から細長いナニカを出す

こう言った。

『『双火筒縛禁（シャンホートンフージン）』！』

そう言った瞬間に鋭い噴射音を上げて4発のロケットが

それぞれアリア達とキンジ達がいる方向に向かって行くとアリアと白雪、

キンジと詠を左右を通過すると……その間に僅かに見えたワイヤー

によつて

互いに体を押し付けるかのような形で縛られた。

「うにゆ！」

「きやあ！」

「うおわ?!」

「きやあ！」

互いに全身が縛られると互いに転倒した。

ココの話

「びえええエエエエエ！助けてシー君マジ理子色んな意味で何もかもが

終わっちゃうよ～～!!」

「大丈夫ですからって動かないで下さい遠山君大丈夫ですか!!」

天草がそう聞くとキンジはこう答えた。

「おお・・・多分。」

キンジはそう言うが・・・ヤバいと思うっていたのだ、理由がこれ。

「キ・・・キンジサン・・・キツイです。」

「おま動くなつてああヤバいってお前のは!？」

キンジはそう言いながら自身の胸の上にある・・・詠の爆乳を見て目を逸らしながらそう言った。

自身が知っている女性陣の中でトップランク（最下位はアリア）の胸部装甲に

キンジは内心あれになってしまったら最悪の展開だぞと思いながら脳内で

羊を数えている中でココはアリア達を観察しながらこう言った。

「ふ～～ん、これがアリアね。写真を見た時はココと同じで可愛い思ったけど、

実際会って見るとココの方が可愛いね。きひ」

「ココ!!」

アリアはそう言いながら白雪の下敷きにされていると白雪の方も見た。

「ふ～～む、中々の上玉ネ。まあこのデカイ脂肪モツテイル女結構好き多いネ、

超偵だから金持ち裏稼業皆喜ブ。」

きひひと笑っているとキンジの方に行くところ言った。

「キンチお前欲しい人材ネ、あらゆる組織欲しがる。ウルス先手出そうとした、

けど失敗したネ、ココ横から奪い取るね。」

そう言うと言を見てこう言った。

「お前も中々上玉ネ、キンチと一緒に儲けられる。これから乱世お前見た目良し

力良し、頭良しネ。3揃ったお前《ランパン》で優遇するね。」

《ランパン》・・・それがお前が所属している組織か？」

キンジがそう聞くとココはそうネと笑ってこう続けた。

「《イ・ウー》の所にいたの金になるからネ、けどお前ホームズ勝った。

《イ・ウー》バラバラなった、世界中の結社・組織・機関

パワーバランス崩れたネ。だからココビジネスでここ爆破するヨ。」

そう言うと言いながらこう言った。

「この新幹線ジャックサイドビジネスある、さっき日本政府と日本の路線会社にそれぞれ前者300億人民元、後者5700万人民元要求したよ？払えばそれで良し

払わなければドカンね！」

そう言うと言は香水の容器を見せてこう言った。

「これと同じ奴お前が見つけたトイレ仕込んでいるネ、バオバオのデモンストレーション兼ねている。さっき使ったのはICC、あそこ1㎡積んでいるね。」

指さしながらそう言う言がキンジはそれを聞いて顔を青くした。

さっきのでもICC、その百万倍ともなれば電車事辺り一帯が吹き飛んで

トンネルの中だと新幹線が通り抜ける前にその衝撃波と爆風で新幹線は脱線して

吹き飛ばし噴火したかのように山が爆発して他の建築物にも被害が

起こってしまう。

「バオバオ、見えない爆弾ある。どこでも隠せる、誰にも気づかれな
い名品ネ。派手にぶつ飛ばせば、注文世界中から来るネ。ココ大儲け

で《ランパン》の

女帝の地位買うヨ。キンチとお前は香港の《ランパン》城へ連れて行くね、そこでココの手足となつて働くネ。アリアともう一人は買い手着くまで幽閉する。

きひひひひひひ!!」

ココはそう言うがキンジはこう反論した。

「悪いが俺はお前の手下にはならねえぞ? こう見えても武偵としてやっていかなきゃいけねえからな。」

キンジがそう反論するがココは笑いながらこう言った。

「良将、最初は皆そう言うネ。でも人の子には欲有るネ、中国は地大物博人多。何でもある国ネ、魏の兵法書では『敵将が若い男の時、女責めにすれば

自分の部下に出来る』と言われてるネ、お前の好みの女100人美しいそうネ。その女の様に胸の結構ある女集めていっぱい与えるネ。」

「ふざけんなそんな事したら武偵法云々の前にはつ倒すぞ!!」

「・・・遠山君からしたらそれって現在進行形ですけど拷問ですもんね。」

天草はキンジの体質を知っているのですそれはある意味悪夢だなとそう思っているとキンジはこう反論した。

「俺は將軍じゃねえぞ、どちらかと言えば兵士みたいに敵を倒すようなもんだぞ。」

キンジがそう言うがココはこう返した。

「キンチ、お前特別な存在ネ、そういう人間普通から阻害される常識ネ。」

表の世界息苦しいなら裏の世界で派手に暴れる方がお前の為ネ、優れた存在何時か他の組織にも引つ張り出されるヨ?」

そう言った瞬間に又もやガタン!と・・・窓の外の景色が加速し始めた。

【――只今の時速 180 km】

「ううう・・・主よ・・・身元に・・・ぐす・・・ふえ・・・近づか

ん。」

「前の奴クリスチャンかよって天草この紐何とかしてくれ!？」
キンジが天草に向けてそう言うのと天草はこう返した。

「……すみません、理子さんが中々離してくれなくなつて。」

「置いて行かないでシー君!りこりん一人にしないでー!!」

「……打つ手0。」

キンジはそれを聞いてガビンとしているとココは時計を見てこ
う言った。

「アイヤヤヤヤ!喋ってたらこんな時間ヨ。ココデートの準備があ
るネ。」

そう言うときココは先ずアリアと白雪を引きづっていくとアリアが
こう言った。

「あ……アタシ達をどうするつもりよ!」

「離してー!」

白雪もそう言うがココは袖からカラビナ・フックを取り出して
アリアの紐に付けるとこう答えた。

「お前達もう何も出来ない、知る必要無いネ。」

そう言うときココは……天井の扉を開けて上に上がっていった。

作戦会議

「ああクソ！何とかしねえといけねえのにつておい詠！動かないでくれ

色々やばいんだぞ!!」

「そ・・・そんな事言われましても・・・息が。」

そう言っている詠の顔は何やら危険な様で顔を青くしていた。

胸が圧迫しているがために息がしづらくなってしまっており何とか出なければ

死んでしまうと言う生物の本能によるものであろう、体をねじ込みながら

這い出ようとしていると・・・再び電車の速度が上がった。

「きゃあー！」

「うおわ?!」

詠とキンジはその時揺れてしまったがために詠の白雪ですら敵わないと

言われている爆乳に・・・顔を埋めてしまったのだ。」

「むぐ!？」

キンジはそれにももの見事に挟まれてしまつてその中にある詠の・・・

芳しい女性の匂いを嗅いでしまったのだ。

汗ばんだ谷間の中で匂う少し甘めなそれにキンジの中で何かが・・・沸騰するかのよう現れようとしていた。

「(ああヤバいなこれ・・・こいつはもう・・・

……完全だわこりゃ。」

「(ゴゴ)ゴメンナサイキンジさん！直ぐにどきますからって動けない……！」

詠はそう言いながら何とか這い出ようと動いていると突如として詠の視界が・・180度変わったのだ。

「きゃあー！」

突然の事で身構えることなく床が頭に当たりそうになると今度は垂直になって立っているかのような感じになると何か音がカランと聞こえたのだ。

「？」

何だと思っただけで見て見るとすぐ下にナイフがあったのだ。

それをキンジが掴み取って詠に手渡すと詠はそれを使ってワイヤーを

斬り落として2人が離れると詠はキンジに向けてこう聞いた。

「キンジさん大丈夫でしたか!?息できなくなっていますませんでしたか!!」

詠が慌ててそう聞くとキンジは立ち上がって・・・にこやかに笑って

こう答えた。

「ああ大丈夫だ詠、俺は今息をしている。だから心配しないで欲しい……俺は君の笑顔が見たいんだから。」

「ふええ!？」

詠はそれを聞いて自身の顔の真ん前に迄来てそう言うキンジを聞いて

顔を真っ赤にしていると理子と一緒に座っていた天草がこう言った。

「・・・なっちゃいましたね遠山君？」

「ああ、如何やらなってますまったようだ。」

「その状態ですと君が女性相手に戦えるとは思っていませんので詠さんを

先頭にして戦ってください、遠山君は援護に徹底。良いですね？」

「ああ、それは重々承知の上だ。」

キンジがそう答えるとそう言えばとこう言った。

「だったらアリア達も助けよう、今2人は上にいるから彼女達を+すれば」

「でしたら私も加えて下さい。」

「レキ？」

キンジは突如としてそう言うレキを見ているとレキはこう続けた。

「私でしたらアリアさん達のワイヤーを寸分違わず2人に当てることなく

斬る事が可能ですのでどうですか？」

そう聞いていたのだ、この間殺そうとした相手に対してよく言えるなど

天草はそう思っているとキンジはこう返した。

「大丈夫だよレキ、俺はもう怒っていない。俺は君を許す、それでどうだい？」

「分かりました、それとですが爆弾の設置が終わったらしいですの
で直ぐに」

「其れなんだが皆に説明しないといけないからそっちに行きたい。」
「・・・分かりました。」
レキがそう言つて案内した。

15号室では妊婦が脂汗を掻いてお腹を押さえていた。

「どうしたんだい？」

キンジがそう聞くとミシエラがこう答えた。

「ああ遠山か、彼女が産気づいたらしくてな。今こちらの女医と共に

手当てと同時進行で出産の準備をしているのだ。

そう言っている中でキンジは武偵達を電話で集めさせてココの情報と

自身が喰らったバオバオの性能と威力とそして・・・その悪魔的破壊力について

説明し終わると全員がマジかよと顔面蒼白状態になっているとそれでもキンジはこう続けた。

「今動けるのは俺達だけだ、『鷹根』、『早川』、『安根崎』は1号車、4号車と5号車の間はミシエラ、11号車と12号車の間を松葉がカイズマスと一緒にになって見張つてくれ。武偵校・警視庁・鉄道公安本部に

この事伝えて爆弾の解除方法を模索だ。」

「それでキンジ、俺はどうするんだよ？」

武藤が笑みを浮かべてそう聞くとキンジはこう答えた。

「お前は新幹線の運転手の代理だ、本人は今天草と一緒にあって讚美歌歌って

落ち着かせているが運転は無理だろう。お前が運転してくれ、場所は

爆弾の真後ろで3分に付き10kmの加速って言う繊細な作業が出る操作だが

やれるか?」

キンジは武藤に向けてそう聞いた、凶り間違えれば死ぬ確率がダントツに高い

そんな場所に親友を置いて行けるのかとそう思っていると武藤は満面の笑みを

浮かべてこう返した。

「お前なら逃げるのかよ?」

「・・・そうだな、頼むぞ武藤!」

「おおよ! 任せておけ!!」

「それで最後に不知火だがお前は対テロリスト訓練の経験が豊富だから

7号車と8号車の間。俺と詠、レキがココを銃刀法違反と監禁の容疑で逮捕する。

後1時間しかないがあの子に教えてやらないといけない・・・

・
・
・
・
・
子供はお家に帰る時間だって事に。」

新幹線の上で

キンジ、詠、レキの三人はコネクトである松葉から片耳に挿すことができる。

骨電動式簡易インカムを受け取って通信していると不知火から通信が入った。

『…遠山君、不知火だけど緊急事態？かな。7号車にテレビスタツフが

数人乗っていたらしくて今回の事事件だって知ってから車両にある無線LANを使って放送しているらしいよ。』

「放送…この状況でか？」

『うん、嬉しがつていたよ。スクープ現場に居合わせることが出来てって

大喜びしていたけど。』

「もし俺らに対してアホナこと言っている奴がいたら客の誰かにスタンガンあつたら貸してもらって痺れさせて眠って貰ってくれないか？」

『アハハ…それは強引だね遠山君、それだと僕らは飛行機の中で旦那さんが事件解決するのを待つキャリアアウーマンじゃない？』

「ハハハハ、だったら俺達はこれから飛行機にヘリコプターで飛び乗る

最も運が無くて悪運が強いニューヨーク警察官かよ？」

『ちなみに僕は《2》よりも《4》が好きかな。』

「俺は《1》だな、これが終わったら映画見るか？」

『良いねえ、何処かでポップコーンでも買おうよ。君の奢りでね。』

「ああ、生きてたら食べるぞ。」

そう言つて互いに通信を切るとレキがキンジ達に向けてこう言つた。

「キンジさん、踵鉤爪（ヒールフック）を使つてください。今回の戦いは

スピードがあるので特にキンジさんと詠さんは近接戦闘ですので

特に嚴重にして下さい。」

そう言いながらレキはドラグノフを整備してキンジと詠は近接戦
闘用に

鎧竜剣と大剣の点検をしていた。

そして先ずは詠が先行すると言う事で梯子に手を掛けるとキンジ
は詠の手を・・・上から包むかのように覆った。

「な！何するんですかキンジさん!?手が」

「梯子や階段を上る時だけはレディー・ファーストの例外だよ。」

「レディー・ファースト・・・あ！」

それを聞いて詠はすぐ様に気づいてこう言った。

「じゃ・・・じゃあお願いします。」

そう言つてキンジを先に行かせるように顔を赤くしながら下がっ
ていく詠を見てキンジは先に屋上に開いた四角い出口から夜空広が
る外にへと身を乗り出した。

「!？」

キンジが出た瞬間に最初に思ったのが風圧と気流である、時速20
0 km超えで走る新幹線の屋上にある気流がスパイク頼みであるが立
ち上がって見て見ると

そこで目にしたのは既に16号車後部迄移動していてそこに1つ
だけある

パンダグラフの手前に設置されていた大きな装置で光信号を送っ
ているココと

何やら聞こえないがギャーギャー喚いているアリアと白雪がいた。

「(気づかれてないな。)」

そう思いながら空気抵抗を極力抑えようと前屈みになると・・・バ
タンと

今出てきた出口の蓋が閉ざされた音とごとごとと上がつて来てい
た詠が落ちた音が聞こえるとキンジは舌打ちしてこう言った。

「くそー！罨かよ!？」

そう言つて・・・背後から大鎌出して現れたもう一人のココが現れ
るとキンジはそれを鎧竜剣で受け止めるともう一人のココがこう

言った。

「炮娘！金次出来了（パオニャン！キンジが出てきた！）」

「猛妹！按住它（メイメイ！押さえろ）！」

そう言うと言っていたココが4つんバイになると成程などとキンジはこう呟いた。

「成程な、お前ら三姉妹か？大方そのバオバオ作ったのがミシエラの言ってた

金次第で何でも造るって言う開発屋でお前らは攻撃型だな？」

そう言うと言っていたココ①がこう言った。

「その通りね、だけど間違いあるネ。」

そう言っているとアリアが何か言っているのが見えたので口パクから

何かを予測すると・・・嘘だろうと思いつながらこう言った。

「お前ら4姉妹かよ？然も狙撃タイプの。」

「お、あつちにいるアリアが言ってたこと聞いたネ？正解ヨ。

私達一人一人それぞれ得意毎で補って最強なたネ、

だからこそ『バンフー』と呼ばれているネ。」

「ある意味最強のチームだな、だが2人にはお仕置きしないとね。」

そう言いながらキンジはナイフと鎧竜剣を構えていると大鎌を
持った

ココ②がこう聞いた。

「キンチお前・・・HSS、なっているか。どうやったネ。」

そう言うと言っていたココ①がこう言った。

「あの金髪女使ったネ、あの女ヤツタアルネ。」

そう言いながら赤面する2人を見てキンジはこう確信した。

「（この子達そう言うのに耐性が無いんだな。）」

そう思いながらサブマシンガンを構えているココ①がココ②に向
けて

こう言った。

「気を付けるネ猛妹、今のこいつ危険ネ。」

「是、炮娘。何にせよ・・・HSS相手に余力持ちながら戦う、

無傷で捕獲無理ある。」

そう言いながら互いに殺気を出し合っているのを見てキンジはこっからが本戦だなど思っている……足元にある出口が突如として爆発した。

「!!」

キンジも含めてココも目を思いっきり見開いていると爆炎の煙から

現れたのは……詠であった。

「ふー、何とか出れました。」

「はい、ですが少々大雑把かと思えます。」

その後ろからレキが現れてそう云う中でココ2人は嫌な顔をしていた。

「ちい!まさか強行突破するなんてなんて連中ネ!」

「然も一人は蕾姫(レキ)、3対式は想定外」

「いえ、5対2よ。」

「!!」

そう言つてココ①の背後から……アリアの声が聞こえた。

如何やら出てくれたようで白雪も一緒であった。

そしてアリアはココたちに向けてこう言った。

「ココ姉妹!あんた達を逮捕するわ!!」

決着

「これはヤバいヨ猛妹。」

「そうネ、 炮娘。」

ココ2人はこの展開に対して冷や汗を垂らしていた。

元々はキンジとアリア達を孤立させた後に1人ずつ拉致する計画であつたのだが

アリアは自分達が引き分けれるほど強くキンジの方は常に誰かがいて

対応しづらかった事から今回の強行作戦に打って出たのに裏目に出たことに

嫌な顔をしていると新幹線がトンネルに入ると同時に先ずは猛妹がキンジ達目掛けて大鎌振り下ろそうとするとそれを詠が大剣で防ぐとレキがドラグノフに

銃剣用のナイフを装備して貫こうとするもそれをガントレットで受け流して蹴り技を喰らわせようとするとならそれをキンジが両腕で防御して受け止めた。

「邪魔ネー！」

「悪いがそうはいかないものでね。」

そして炮娘はマシンガンで攻撃しようとするとなら白雪が腰に差してある刀を使って防御しながら迎え撃っているとアリアがすぐ様に撃ってマシンガンを

弾き落とした。

「ちいーコンビネーションが!？」

そんな中でトンネルから出ると眩い光がキンジ達に降り注いだ。

バラバラバラバラと言う音の出どころを聞いていると上空に報道用のヘリが

何機も上空に舞っていた。

如何やらマスコミは爆発に巻き込まれない様に上空から撮影しているようだ。

そしてキンジは2人に向けてこう言った。

「ココ姉妹、投降して武器を捨てろ。逃げ場なんてないぞ。」

そう言いながらベレッタを構えているが何故だか・・・闘志を失ってはいなかった。

一体なぜだと思っていると報道ヘリの中にあつたユーロコプターAS365（ドーファン）が車両後方から現れたのだ。

「何処の報道局だよ死ぬ気かって・・・まさか!」

そう言うて目に映つたのは・・・三人目のココが操縦していたのだ。

「最後のお客さんって最悪だな本当に!」

キンジはそう言いながらヘリの下降気流に押されて詠達のいる方向迄

後退させられた。

よく見るとヘリにはマシンガンが装備されているのに気づいて

舌打ちしているとヘリからマイクでこう言った。

『炮娘待たせたね、猛妹の所へ行くよい。』

「是、狙姐。」

炮娘はそう答えると民族衣装の飾り紐をほどきながら車両の右側面に

ダイブすると・・・服が開かれていちまいの布として広がっていき・・・

パラシュートと化したのだ。

そして新幹線をC字に移動していくと猛妹の援護に入った。

キンジ達は目の前にあるこのヘリコプターを相手に如何やって戦うかと

思っていると・・・歌が聞こえた。

「Balwisyall Nescell gunnir tro
n」

「ミシエラ!？」

キンジはその声の主が分かった瞬間にヘリコプターが・・・光線によつて

上部にあるプロペラが壊されて其の儘落ちていったので狙姐はいきなりの事だったので慌てて新幹線の上に飛び乗るとシンフォギアを身に纏ったミシエラが現れて其の儘取り押さえられた。

「あがー！」

「ここ迄だなココ。」

そう言うのと今度はレキがドラグノフで構えると放った銃弾が猛妹の足を撃つて其の儘彼女の足が踏ん張りが効かなかつたのである、倒れ込むと

それを見た炮娘の一瞬の間を突いてアリアが彼女に対して頭突きを見舞いして

動けなくなつた所を脚で踏んづけて手錠をかけた。

するとミシエラが取り押さえている狙姐は笑つてこう言った。

「「きひひひひひひひひひひ!!」」

①「竜虎相博お前達道連れね。」

②「ココ達の負け違う有るよ、バオバオで皆吹っ飛ばバーカバーク
!」

③「お前達戦うしか能無し、ココ達とは違うネ。」

そう言つて侮辱するとキンジはくすりと笑つてこう言った。

「確かに俺達は戦う事しか能がないがけどな・・・お前達みたいに無
い者同士で助け合えば可能な事つてあるんだぜ?」

そう言うのと背後から警笛が聞こえて現れたのは・・・救援新幹線が
現れたのだ。

「皆お待ちかねあややの参上なのだー!爆弾のスイッチは

もう松葉ちゃんが解除したつて言つてるからあややは中にある爆
弾の空気を

取り除くのだー!!」

そう言いながら直径1m弱のチューブの中から文は工具箱や消火
器材等の中に

入れると救援新幹線は其の儘スピードを緩めて去つて行った。

そして暫くすると・・・スピードが遅くなり始めていった。

「嘘ね・・・日本人がこんな事出来るなんて。」

「平和ボケの・・・こいつらに。」

「負け・・・タ。」

そう言つて項垂れるのを見るとキンジは更にこう言った。

「済まないが君達には未だ償わなければならぬ事があるんだ。」

「「?」」

「下にいる仲間達からのSETTUKYOUだ。」

それを聞いて三人は顔を青くすると更にこう続けた。

「それとだが中国政府からだ君達の席は既に消したそうだから安

心して

「後から来る中国警察と共産党達が有難いお迎えがあるから
覚悟しておくことだね。」

それを聞いて青から白に変わって恐怖通り越して口から魂が出て
くる始末だが

まあ自業自得だなど思っている。

そしてその儘キンジ達はココ達と共に新幹線に戻ってまず最初
にあるのが・・・武偵達における私刑だ。

「アンタ何しとんじやごらああ!!」

「痛い痛い痛いヤメテ骨折れルー!!」関節技

「武偵が何面汚してんだこのおたんこなすがー!!!」

「ぼぎやぎやぎやぎやぎやぎや!!」顔に拳骨

「人様に迷惑かけてその根性叩き直してやるよごらー!!」

「あバババババババババババババババババババババババババババババ
た。

い
そしてこんなのが終点まで続いてその後は綴先生からのありが
い・・・

地獄すら生ぬるい精神的拷問によって彼女達は心身共々プライド
事

擦り潰されていき政府からの使者が来た時には最早初期の勝気溢

れた目付きが

一気に消えて終始恐怖してしたようだが・・・まあ自分が蒔いた種であるから

処理も自分たちでやれと言う事であった。

写真撮影

そしてキャラバン・Iが終わってシルバークが終わって
最初にあるのは・・・チーム編成である。

この日に備えてカイズマスは態々イタリアにある武偵制服会社か
ら

全員分注文してくれたらしくその日に着替えた。

防弾制服・黒（デイヴィーザ・ネロ）、チーム登録で使われる

その制服を着ている面々はなんとまあ・・・マフィアさながらの光
景である。

ミシエラ、松葉はちゃんと着ているのに何故か詠は・・・胸の谷間
が見えるようになっておりキンジはなるべく見ないようにしてある。

そしてチーム申請の際に天草に書かせたところこの様な結果に
なった。

メンバー

○ 天草 信一郎（SSR）

◎ 遠山 キンジ（インケスタ）

松葉 刑部（コネクト）

カイズマス・イデアス（ロジ）

ミシエラ・J・ダルク（アンビキュラム）

青岩 詠（アサルト）

チーム名『金龍（こんりゅう）』

「ちよつと待て何で俺がリーダー格!？」

天草じゃねとキンジがそう言っていた。

天草は人格も良く更に頭も良い為何でと思っていると天草はこう
答えた。

「え?これは遠山君が適任ですよ??皆さんで決めたんです。」

「俺の決定権は!？」

キンジがそう聞かすが5人全員こう返した。

「「「いや遠山（君）キンジ【さん】以外に考えられない

【ません】」「」」」

「……嘘だろおい。」

キンジはそれを聞いて頭を抱えている中で屋上に着くと既に蘭豹先生が

待ち構えていた。

「ようしお前から一番最初だな歓迎するぞ！その前に一つ言っておくことがある！」

耳かっぼじってよく聞けやと言うので何だと思っていると

蘭豹先生はこう告げた。

「お前らみたいに長年コンビ組んだ人間が其の儘チームになる事はしょっちゅうあるが大抵が解散してしまうために救済措置として向こう数週間……この場合は確か学園祭があったからそれまでによく考えろよ餓鬼ども!!」

以上とそう言つてカメラを構えると全員が揃つて別々の体勢になった。

天草は持っている6本の刀を見せながら背中にある村正は見せない様に背中で

隠し、松葉は眼鏡を斜めにして太陽の反射で目が見えにくくするようになっている

カイズマスは逆に不遜な目つきでカメラを見て視線は横に浮いているような感じで立ち、ミシエラは首に付けてあるガングニールの寶石が見えにくくするように

光らせて詠は少し笑顔になりキンジは鎧竜剣を見えない様に隠しながら立ち、

代わりにベレッタを見せつける様に構えた。

そして蘭豹先生が全員に向けてこう言った。

「良し！9月23日11時59分チーム『金龍（こんりゅう）』——承認・登録！」

そう言つてパシャと撮られた。

まさかここからさらに増えることとなろうとは当の本人たちは考えもしなかった。

「それではチーム編成におけるフォーメーションですが前衛が遠山君と

青岩さん、サポートは僕とミシエラさん、カイズマスさんと松葉さんが

バックアップで宜しいですね？」

天草がそう言うのと全員が異常なしと言って答えると天草は全員を解散させた。

そして家に帰ろうとするとミシエラがこう言った。

「遠山一つ良いか？」

「？何だ一体。」

そう聞くとミシエラはこう答えた。

「来週なんだが零時ちようどに集まりがあるから来てくれないか？」

「何だよそれ？俺が来て良いのか？」

集まりって俺がいて大丈夫なのかよとそう思っているとミシエラはこう答えた。

「当たり前だ、お前が出席しなければ意味が無いのだ。」

そうやって何の集まりだよとそう聞くとミシエラはこう答えた。

「・・・当時の『イ・ウー』メンバーとその面々が所属する裏組織で会議が

執り行われるのだ。」

「な!?!」

嘘だろと思ったがミシエラの表情を見てマジかよと言うと

ミシエラは

こう締めくくった。

「場所はお会場にあるピラミデイオンのカジノ、今は立ち入り禁止に

なっているから誰も来ない。ちゃんと来いよ、これはお前が・・・

いや、

私達が始めてしまった事だからな。」

そう言っつてミシエラが去って行くのを見てキングはマジかよと思
いながら

空を見ていた。

そして零時少し前、その日キングとミシエラは中に入ると既に来客

が来ていた。

「間もなく零時です。」

「レキ、お前も来ていたのか？」

キンジがそう言うのと突如としてカジノのエントランス・ホールの照明が

付いたのだ。

「な・・・何でって・・・ナンダあいつ等？」

キンジはそう言って前方にいる面々を見た。

傍から見ればコスプレ集団に見えなくもないがキンジの第六感は完全に別の事を思い出した。

これまで見てきた『イ・ウー』の面々だ、するとその中で一人が現れて

キンジに向けてこう言った。

「先日は『ランパオ』のココ姉妹たちがとんだご迷惑をかけて

申し訳ありません。」

そうやってきたのは細めの色鮮やかな中華衣装を身に纏った丸眼鏡をかけた

男性がそう言うとその足元で・・・ゾゾゾと何やら黒い影・・・いや、

それではないナニカがあつてそれらが集まって出てきたのは・・・モノクロカラーで不吉なゴシッククロリータ衣装の黒いフリル付き傘を持った

金髪ツインテール少女が現れるともう一人現れた。

そしてその隣には銀髪の長髪をウェーブにしているロングドレスの様な

服装をした・・・小柄なのに巨乳な少女がそこに立っていた。

更にその奥にいたのは・・・人ではなかった。

「——ヴん。」

そう言って出てきたのは三メートルはある・・・鋼鉄のバケモノだ、肩にはロケットランチャー、両腕にはガトリングがんを持っていて更に

その向こうにいるのは白い法衣にグラマラスな体を包み込んで十字架の様な帯剣を背負っているシスターにその真逆に漆黒のフード、とんがり帽子、肩には

大ガラスがいる典型的な魔女に……今まで見たことが無い程の胸を持った

が
メイド服姿の少女にアリアよりも小柄で……猫か何か分からない

動物系の耳を頭に付けた梵字が足搔かれた藍色の和服を着た少女に和服を着て

白髭を蓄えたどう見ても堅気ではない風貌をした男性に他にも

まあ色々な面々がいる中で見知っている人間がそこに座っていた。

それが……遠山金一であった。

「兄さん！それに調も!!」

「やあキンジ、久しぶりだな。」

「……眠い。」

そう言つて船を漕いでいるのを見て少し微笑ましく思っていると金一が

キンジに向けてここにいろと言つたと金一は全員の前に立つてこう言つた。

「では始めようか、各国の機関・結社・組織の面々達よ。

『宣誓会議（パンティーレ）』！イ・ウー崩壊後に始める求めるものを巡つて

闘い、奪い合う血で血を洗う戦争を……

・
・
・
・
G
o
F
o
r
T
h
e
N
e
x
t
・
・
次へ進むために！
」

宣誓

「バンティールに集いし各国の組織・機関・結社の方々よ、先ずはこの私遠山金一が敬意をもって奉迎したい。」

金一がそう言つて頭を下げる中でキンジは何で俺がとそう思つていた。

周りにいるのは間違いなく敵、それもイ・ウー崩壊でバラバラになつた面々が

殆どであり一触即発ムードであつた。

「(取敢えずはミシエラとあの狐っポイ子供は味方で兄さんは．．．どうだろう、味方つて訳じゃないかもな。)」

そう思いながらどうしたら良いんだと間違いなく場違いな感じを漂わせながら

キンジは空を仰いでいると金一がこう続けた。

「初顔の者もいると思うので序言しておこう。ここに居る誰もが嘗て諸国の闇に

自分を秘しつつ武術・知略を伝承し、その時代の中で求めるものを巡つて

血で血を洗う戦いを繰り広げてきたがイ・ウーの隆盛と共にその争いを

一旦休止したが．．．崩壊してしまつたがために今また砲火が開かれようとしている。」

そう言つてその殆どが．．．キンジに向けてじろつと見ていた。「．．．マジで。」

完全に敵地じゃんと思ひながら頭を抱えているとミシエラがこう言つた。

「まあ落ち着け遠山、今お前に対して見ているのは戦力として見てくれている事だ。うまく立ち回れば勢力次第では対価も

中々な物かもしれないぞ?。」

「その前に死ぬ確率が高そうだけどな。」

溜息交じりでそう言つと．．．柔和そうな艶のある甘い声が聞こえ

た。

「……皆さん、あの戦乱の時代に戻らない道はないのでしょうか？」
そう言うのは碧眼のシスターの服を着た……冗談かよと言いたいばかりにデカイ大剣を持った女性がそう言うところ続けた。

「バチカンではイ・ウーを必要悪として許容しておりました、高い戦力を有するイ・ウーがどの組織とどういった同盟をするのかを最後まで沈黙し続けたことにより誰も『イ・ウーの加勢に入った敵』という最悪の状況にならなかつた事から

長きにわたる休戦が実現できたのです。その尊い平和を保ちたいと言う

切なる願いの元ここへ参つたのです。平和の体験に学び、皆さんの英知を以て

「和平を成しえて無益な争いを避けるために」

「出来る訳がねえだろメーヤ！この偽善者が!!」
そう言うのは如何にもと言う感じの黒っぽい魔女の服に右目に逆
卍を

斜めにした……欧州の長い歴史において最も忌むべき存在、旧ナチスドイツの証『ハーケンクロイツ』が刻まれていた。

そして残った紅い左目でぎろりとメーヤと呼んだシスターを睨みつける

「こう続けた。」

「手前らちつとも休戦してなかつたじゃねえか、デユツセルドルフ
じゃ

アタシの使い魔を襲いやがった癖に平和だあ？どの口でほざきやがるんだ

この牛女が！」

そういう魔女に対してメーヤと呼ばれたシスターは……こう返した。

「黙りなさい『カツェーグラツセ』。この毛皮らしい不快害虫が、お前達魔性の者共は別です。存在そのものが地上の害悪、殲滅して絶滅して

根絶する事に何も躊躇い等ありませんし生存させておく理由が

旧約（アンティコ）・新約（ヌオヴオ）・外典（アポクリファ）含めて

聖書（セビア）の何処にも見当たりません。然るべき祭日に聖火で黒や気にして屍を八つ裂きにしてそれを別々の川に流す予定を立ててやっているのですから……ありがとうございますと言いなさいありがとうございます！ほら言いなさいありがとうございます！！

ありがとうございます!？」

「……あの人真面かかって思っていた俺が恥ずかしい。」

「いやむしろこの会議でああいいながらも未だ銃弾どころか剣すら出ない辺り

未だ真面な方であろうな、普通ならばこう言う話し合いしながらも攻撃していることが普通だと聞いたことがある。」

「……マジかよ。」

これでまだマシって何なんだと思っていると……『カツェ』と呼ばれた少女が笑いながらこう言った。

「ぎゃははは！おうよ戦争だ!!街に舞ったお前らバチカンの戦争だぜ!？」

こんなチャンス一生のうちに一度あるかないかって奴だから腕になるってもんだ!そう思わねえかヒルダ！」

そういう……背中に巨大な蝙蝠の翼を生やしたゴスロリの少女に向けて

そう聞くと当の本人はこう答えた。

「そうねえ、私も戦争大好きよ。良い血が飲み放題だしそれに
気に入った奴がいたら持ち帰れるしね。」

そう言いながらキンジに向けて紅い……牙をギリリと見せつけた。
すると『メーヤ』は『ヒルダ』に対してこう言った。

『ヒルダ』……一度首を落としておきながら未だ生きているとは
しぶといですね。」

「首を落としたくらいでドラキュリアが死ぬとでも思っているなら
やっぱり

バチカンはおめでたいですわね？お父様が離してくださいさつた何百
年前の話と

全く変わっていないわ。」

ほほほほと笑っていると細めの中国人男性がこう言った。

「和平と仰っていますが『メーヤ』さんそれは不可能です、元々我々
には長江（チャンジャン）の様に長きにわたり黄河（ホアンホー）の
様に入り組んだ因縁や同盟の好があったのですからね。」

そう言うと金一は全員に向けてこう言った。

「ここに居るものは全員浅はかならぬ因縁がある、それを忘れろと
は言わんし

今この瞬間に戦いは始まってしまったのだ。初めてしまった以上
終わらせなければならぬこの戦争に勝たなければ未来が無いと言
うのもまた事実、ならば戦うしか生き残れないと私はそう思っている
が何か言いたい事はあるか？」

そう聞くと全員何もなかったので金一はこう言った。

「よし、それではバンティールレのルール説明に移行したい。」

派閥決め

「それでは互いに言いたいことが言い終えたことを確認したところで
ルール説明を行うが古来からの規則に則って3協定の復唱と行う。」

金一がそう言うのと以下のルールが提示された。

- ① 何時いかなる時に於いても誰からの挑戦をするべし、戦いは決闘に準ずるが
不意打ち・闇討ち・密偵・奇術の使用又は侮辱は許す。
- ② 際限なき殺戮を避ける為に決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる。
- ③ 戦いは主に『師団（デイン）と眷属（グレナダ）の双方の連盟に分かれて
行う。この往古の連盟は歴代の烈士達を敬う故、永代改めぬものとする。

「それではだが俺は生憎どちらも加わらない云わば中立派とするが他の面々は

どうする？」

それを聞いて辺りがざわつき始めた、師団か眷属のどちらかにすると言った中で

いち早く中立を選ぶと言うこの身の軽さに全員が驚いているが暫くして落ち着くと

それぞれどちらにするかと云う中でミシエラはキンジに向けてこう言った。

「遠山、お前はどちらに加わるんだ？」

「？・・・いや考えてねえな。」

「そうか、中立になる事も含めて考えておけ。この選択一つで未来が

決まるのだからな。」

「ああ・・・分かった。」

キンジがそう答えるとメーヤがこう言った。

「ああ神様、再び劔を取る私をお許し下さい。我らバチカンは元より

この汚らわしい眷属どもを伐つ『師団』。殲滅師団（レギオ・ディーン）の始祖です。」

そしてカツエとヒルダはこう返した。

「ああ、アタシは当然眷属だ。メーヤと仲間になれなんて死んだって御免だ。」

「私は生まれながらの闇の眷属、眷属に加わる事に何の意味も持たないわ。玉藻貴方もそうでしょう？」

そう聞いた玉藻と呼ばれた狐少女はこう返した。

「すまんのおヒルダ、儂は今回『師団』じゃ。未だ仄間のみじやが今日の星伽は基督教会（キリスト）と盟約を交わしているソウジャからな。それに姉上からは

今回のこの会議には絶対に今回の敵型を注視せよといわれておるからのう。」

そう言うとキンジを見てこう聞いた。

「それで今代の遠山ヨ、お主はどちらに着くんじゃ？」

『!!』

それを聞いて全員がじろりと睨みつけた。

何せキンジは今回の戦争の云わば原因であるのだがその戦闘能力は間違いなく

欲しい逸材であるがためにどっちに着くんだとそう思っている
と・・・

共にいたミシエラがこう答えた。

「済まないが遠山は未だこの状況にまだ理解していないようである

から

取敢えずの所は保留としてくれないか？」

「ならば僕もだ、リバティー・メイソンは無所属だ。」

そう言う霧の最も奥にいるトレンチコートの美男子がそう答えた、触れれば切れそうな程鋭く、危険な印象がした。

「――L.O.O。」

そう言うのは三メートルはあるロボット、それを見て金一がこう言った。

「ああ、『L.O.O』と言うんだよなお前。君がアメリカから来たのは知ってはいるが意思疎通の方法が分からないため『黙秘』って事で良いか？」

「・・・L.O.O」

そう言つて頷いた、恐らく内部に誰かがいるのかなとそう思っていると・・・

元気な声で少女がこう言った。

「――『眷属』――なる！」

そう言うのはトラジマ模様の毛皮を着た・・・本人以上の大きさを誇る

巨大な斧を片手で振り下ろしてこう言った。

『『ハビ』――眷属！』

そう言うのとトレンチコートを着た美男子が近くにいたメイドに向けて

こう聞いた。

「それで・・・君達はどちらに着くんだ？」

そう聞くと青に近い銀色の髪をした・・・超乳と言わんばかりの下乳を

見せつける少女がこう答えた。

「我々『MI6』はどちらにも付きませんが、私個人も同じく。」

そう答えて会釈すると残りの面々もこう答えた。

「私達ウルスは『師団』に付くことを代理宣言させて貰います。」
レキがそう言うのと先ほどの中国人もこう答えた。

「ランパンの大使、『諸葛 静幻』が宣言いたしました。私達は『眷属』、

ウルスのお姫様は私達のビジネスを阻害するのに一役買ってしまったからねえまあ貴方も例外ではありませんよ遠山様？」

「あああ……あれか。」

キンジはあの新幹線騒動を思い出すと……ヒルダがキンジに向けて

こう言った。

「一つ言っておきますけど私の所は御免ですわよ……」

……私の父ブラドの仇が同じ場所には殺せませんしね。」

「……お前アイツのか。」

「ええそうですわ……貴方のせいでお父様はあの様な臆病者になり下がってしまったその責任を死んで取って貰いますわ……!!」
そう言つて去つて行くのを見てキンジはマジかよと思つていと
ヒルダと共にいた少女と目を合わせると何やら慌てふためいて……
あわあわとなつている所を見て何だかなあと思つていと……
ピエロみみたいな派手な衣装を着た携帯音楽プレイヤーを白いイヤ
フォン事

足元がしゃんと捨てるとこう言った。

「ちっ、美しくねえなおい。強い奴が集まるかと思つてきてみりやあ

何だよこれ？使い走りの集いじゃねえか！無駄足だったぜ。」

そう言つて立ち去ろうとすると……金一が止めてこう聞いた。

「ならば聞くがお前はどっち側だ？」

そう聞くと男はこう答えた。

「簡単だ、強い奴を倒せればどっちでもいい。」

「ならば無所属だな。」

「おおよ……全殺ししてやるぜ。」

そう言いながら……透明になって消えていった。

閉会

それを見送った後金一は全員に向けてこう言った。

「それではこれにて閉会としよう、尚バンティール地域の地名を基に名付ける慣習に従って『極東戦役(Far East Warfare)』、略してFEWと呼称する事する。

各位の参加に感謝と武運を祈って……

……今ここで戦わない奴は今すぐ帰るように。」

「え？」

キンジは金一の言葉を聞いて何故と思った瞬間に……ヒルダが影の中に入った

瞬間にキンジに向かって来たのだ。

「遠山逃げろ！30秒は縛る!!」

ミシエラがそう言った瞬間に剣を刺すと影の動きが鈍り始めたので

キンジはすぐ様に月明かりがない建物の影の中に入って辺りを見渡したら……

メーヤとカツエが互いに戦っているのが見えた。

カツエは古い西洋軍人が使うようなナイフを右手に、左手には

旧ナチス・ドイツ時代に将兵御用達であった命中率抜群の拳銃『ルガーP38』で

攻撃するがメーヤはそれを……僅か9mと言う距離でありながらも
何事もない様に攻撃を再開していた。

「これは応援しないとヤバい奴だぞおい！」

そう言いながら拳銃を構えようとする……何かの視線に気づいた。

「右か!？」

キンジはいち早くそれに気づいて左の柱に身を移すと先ほどまでいた処に……銃弾が抉りこまれていたのだ。

一体誰だと思つて見て見ると……下手人はすぐに見つけた。

「あの子か。」

そう言つて見えたのは……銀髪長髪の少女がルーレット台を支え代わりにしてスナイパーライフル『PSL』を構えていた。

「ルーマニア製のスナイパーライフルか……厄介な奴を！」

あれつてレキと同タイプの設計思想なんだぞとそうぶつくさ言いながら

ベレッタを構えようすると……辺りにいる面々のうち数人が海の方を

向いていると……その数秒後にドルるるるるるるというエンジン音が

聞こえた。

「この音つてモーターボートか？」

然もなんか……近いぞとそう言いながら見て見ると運転席にいる人影が

月明かりと共に姿を見せた。

その相手は……彼女であった。

「SSRに網を張らしておいて正解だったわ！あたしの目の届くと

ころに

出て来るとはその勇氣だけは認めてあげるから大人しく逮捕されなさい

ヒルダーー!!」

「神崎……あいつかよ。」

助っ人と言うか完全に火に油を注ぐ様な奴じゃねえかと頭を抱えていた。

「LLOO」

ぎゅいんと例のロボットが駆動音を上げて振り返るとアリアは遠目であったが

何かに気づいてガバメントを抜いて大声でこう言った。

「手下を連れていたのね! キンジ!! いるなら援護しなさいよ!!」

「……生憎だがこっちはそれどころじゃねえんだよなあ。」

そう言いながらミシエラのいる方向に目を向けると……ヒルダ相手に

戦っていた。

ヒルダは三又の槍を持ってミシエラを追い込んでいるがミシエラも

槍を出そうとするがその隙を与えてはくれなかった。

「くそ……完全に分断された!!」

そう言いながらどうするべきかと思っていると……再び銃声が聞こえた。

アリアの方から放たれた銃弾はあのロボットがいた場所にある……ウオーターライダー（今は完全に止まっている）の支え棒に当たると

錆びついていたのであろう集中砲火を浴びせられてウオーターライダーが崩れてロボットの頭上に落ちていった。

「L0」

「アハハ！来た来た!!」

先ほどの大斧を持った少女が嬉しながらぶん回している……ガキンと音が鳴った。

「ぎゃー！」

先ほどまでPSLを使っていた少女が銃から離れているよう
でよく見ると

PSLが壊れていたのだ。

「兄さん!?!」

「キンジ、お前はミシエラ達の方に行け!それとアリアをヒルダに
近づけさせるな!!奴はイ・ウーから『緋色の研究』・・・緋弾につ
いての情報を握っているぞ!?!」

『『緋色の研究』って何だよ一体?!?』

「良いから行け!これが終わったら説明する!!」

そう言いながら金一はコルトを構えているとキンジはすぐ様に
ミシエラの方に向かって行った。

「ミシエラ!ヒルダは!?!」

「奴はアリアを見てどこかに姿を晦ました!ここは一端逃げろぞ、
私がダイヤモンドダストを使って霧と同じにするから」

「あいつは『緋色の研究』?って言う奴を知っているって言った!
兄さんがあいつをアリアに近づけさせるなって言った!!」

「ヒルダが!・・・しまった奴の目的は」

そう言ってアリアがいるであろう方向を見るとそこで目にしたの
は・・・

アリアの首筋に牙を突き立てていたヒルダがいた。

数秒前

「さあアンタヒルダの手下なんでしょう？何処にいるか吐きなさいよ!!」

「るー……るー……」

アリアはそう言いながらロボットから出てきた……スクール水着みたいな

紺色のコスチュームを身に纏ってその上にはジャラジャラと勲章を付けていた

小学生くらいの少女が何か言うとするがるーとしか言わないがためにアリアはいらいらとしていると……声が聞こえた。

「M i | a ? . f i d o r i t s | f i v e n i t a i

c i d u p | c e l | a m v e r i f i c a t . I n s e

c t e d e v a r | c a ? i c u m a r z b u r a

? i p e f o c (良 く 確 か め て か ら 来 れ ば よ か っ た の に ね え 。

まるで飛んで火にいる夏の虫)」

そう言つてヒルダはアリアの首筋目掛けて……首筋を噛みついたので。

アリアの体が体の周囲に緋色の光の靄が発露し始めたのだ。

「何だ……あれは？」

何がどうなっているんだと思っていると手毬はヒルダに向けてこう言った。

「ヒルダお主……『殻金七星』破り迄知っておったか！」

「光栄に思いなさい、史上初よ。人類が殻分裂を拜むことが出来るなんて。」

そう言っていると手毬はキンジに向けてこう言った。

「遠山の、アリアがここに来てしまった事が運の尽きじやが一つは儂が

必ず戻すから手伝えメーヤ……何しとるんじやお主。」

「動けませくくん！」

「煩いから止めた。」

「外せやガキがー！！」

「貴方もガキ。」

「うるせえわ！！」

調がメーヤとカツエを縛って動きを止めていた。

「ああもうこんな時にー！」

「私がヤル！」

「すまん！！」

するとミシエラが手毬に向かってそう言うと言くと手毬はそう返して……ばしゅー！と白煙を上げて元の玉藻に戻った。

そして玉藻は耳や尻尾を逆立てて巫女が持つような御幣をアリアに向けて

握って構えるとアリアの体から……緋色の光球があちこちに飛び散り始めたのだ。

「何だ……これは？」

キンジは一体何なんだと思っていると玉藻はその内の一つを御幣の柄で

受け止めるとそこに光球を御幣の両端を押してアリアの所に戻した。そしてミシエラはと言うと……光の玉をテニスの玉の様に弾き飛

ばして見事

アリアに戻って行った。

そして残った光球は・・・ヒルダ、カツエ、ハビ、諸葛に行き渡ると

ヒルダは彼らに向けてこう言った。

「その殻は『眷属』についたご褒美よ、それにこれはお父様の仇共への

嫌がらせに丁度いいでしょ？私一人よりも厭らしくてね。」

そう言っただけヒルダは銀髪長髪の少女を呼ぶとそれを・・・服の中にその大きな胸の谷間に無造作に入れるとこう言った。

「其れは貴方が持ちなさい、無くしたら・・・分かるわよね？」

「!!・・・は・・・ハイ。」

その言葉を聞いて少女は恐怖しながらもそう答えるとハビと呼ばれた少女はその光球をお手玉みたいにし遊んで最後に口の中にペロンと口の中に放り込むと

獣の様に4つ足で走って去って行った。

「おい・・・もう良いだろう。」

「御免、それは渡せない。」

「って言うと・・・思ってたぜ！」

カツエはそう言うと・・・大ガラスがその光球をパクリと加えると其の儘飛び去って行った。

「調！その鳥を捕まえるんだ!!殻金を奪われたら元も子もない!？」

「分かった。」

そう言っただけカツエの方を緩めてヨーロッパで弾き落とそうとする・・・

カツエはニヤリと笑ってこう言った。

「甘いぜ！」

そう言っただけ大道芸みたいに跳躍して離れると未だ縛られているメーヤに向けて

こう言った。

「じゃあなメーヤ！またどつかで会おうぜー!!」

そう言つて去つて行つた。

そして諸葛は懐から細い竹筒を取つて光球を中に入れてこう言つた。

「これはありがたいですね、計画以上の手土産です。すぐにランパン城に戻つて分析いたしましたしょう。」

そう言つて立ち去ろうとするとヒルダはこう聞いた。

「あら帰るの？レキを殺すならあの子私の頭を撃ちぬいたから加勢してあげても良かったのに？」

「いえいえ、私は後方担当ですし君子危うきに近寄らず。正攻法で戦うなど

軍師のする事ではないので。」

それではと言つて・・・煙幕缶を投げて消えていきヒルダはこう呟いた

「じゃあ私も今夜はこれくらいにしておくわ、行くわよ『クリス』。」

「はい、ヒルダ様。」

『クリス』と呼ばれた少女はそう言つて影の中に消えていくヒルダとは別に

アリアが乗り捨てたボートを奪つて何処かへと姿を消すとキンジを見て

ヒルダはこう言つた。

「また逢いましよ遠山キンジ。」

そう言つて影の中へと去つて行き残つたのは・・・キンジを除い

てミシエラ、玉藻、金一、調、メーヤだけとなった。

そして霧が晴れて月明かりが届いた時には・・・何もかもが終わった後で

あった。

家に帰って

「遠山！アリアは大丈夫なのか!？」

「ああ！・・・気を失っているって所だな、今の所は問題ない。」
キンジの言葉を聞いてミシエラはホツとしていると金一が現れて
ミシエラに向けてこう言った。

「ジャンヌ、お前は悪くない。今回は間が悪かったただけなんだ、
アリアが来たこともだがヒルダが『殻金七星』を破る事が出来るな
んて

誰も予想すら・・・成功するなんて誰も思わなかったんだ。」

そう言う調がこう聞いた。

「この子気を失ってるの?」

「ああ、だが俺はこれに関して・・・こう言う案件については専門外
だから

SSRの専門に聞いた方が得策だろうな・・・そういえば調、シス
ターの女の子は
今どうしている?」

金一がそう聞くと調が指さした方向に視線を移すとそこにいたの
は・・・

「ふえ〜〜ん、速く解いてください〜!!」

海老みたいにじたばたしているのをみて良しと言ってこう続けた。

「キンジ、お前はミシエラと共に家に帰ってくれないか?俺は散っ
て行った

殻金七星を追って行く、今なら一つくらいならば盗れる筈だからな
!」

調の事も頼むと言って去って行くのを見ると・・・玉藻が姿を現し
てこう言った。

「遠山、儂はこれから『鬼払結界』を張って守りを固めるから後の事
は

メーヤとミシエラに聞いててくれ。」

ではなど言って去って行くのを見てキンジは暫くしてこう言った。

「それじゃあ・・・帰るか。」
キンジはそう言つて残つた全員を連れて行つた。

アリアを背負つて家に帰る傍らキンジ達はメーヤと共に・・・
コンビニで買い物をしていたのだ。

今回は色々あつて寝れないなと思つていることと明日の朝ご飯を
考えて簡単だがパンとか買つている中でメーヤはと言うと・・・酒を
大量に買つていたのだ。

シスターなのに良いのかと思つているとミシエラがこう答えた。

「超偵は自分の能力を使う時体力やカロリー、果ては命まで削る事
があるから戦つた後には大量のナニカを経口摂取しないと能力が使
えずに

最悪死んでしまう事があるから人によつては様々で私は水で

彼女は酒というのだな。」

「それでもあの人幾つなんだよ？酒買えるのかよ？」

キンジがそう聞くと・・・メーヤがこう返した。

「大丈夫です！こう見えて私18歳ですしイタリアでは16歳から
飲んでいい事になってるので大丈夫です!!」

ふんす！と・・・詠以上にあるであろう爆乳を前に揺らすかのよう
に張ると・・・揺れている為キンジはすぐ様に視線を逸らした。

そして暫くして取敢えずの食糧を確保して家に帰るとキンジは調
に向けて

こう言つた。

「今日の所はお前は俺の部屋で寝てろ、アリアも一緒つて・・・
布団用意しておくから見張りがてら頼む。」

「分かった。」

調はそう答えるとキンジはアリアを自分のベッドに寝かせて調は

その隣の床に布団を引いて置いた。

そしてキンジは一階に降りると何やら・・・ガサガサと音がしているので

見て見るとそこで目にしたのは・・・キッチンの中で何かを探している

玉藻の姿がそこにあつた。

「アンタ確か・・・結界張っているんじゃないか？」

何でいるんだと聞くと玉藻はこう返した。

「うむ、そつちは既に終わっているからもう。」

お前に話さなければならぬ事があつて来たのじゃがここには神棚はないのか？

信仰心が足らんぞ遠山の。ところでここには水飴はないのか？」

「そんなのねえって神棚は仕方ないだろ？買う義理ねえし俺達みたいな奴は

神頼みした奴が死ぬって言うのが相場で決まってるから買わないんだ、

それと水飴なんてねえぞ。あるのと言えばヨーグルト位だ。」

そう言うのと玉藻はおおこれかと言って匙、匙と言ってスプーンを取り出して

食べ始めたのだ。

「何勝手に喰ってんだか。」

キンジはそう呟きながら冷蔵庫から麦茶を出して飲もうとしていると

玉藻はキンジを見てこう言った。

「ふむ、これが今代の遠山か。嘗て那須野で会った遠山と瓜二つじゃな？」

初めて会ったとは思えんがまあ・・・ちよつと昼行燈で根暗な所はありそうじゃがじゃあほれ、玉串料を払ってくれ。」

そう言って背中に背負つてあるランドセルみたいな木箱を見せてそう言う

よく見てこう言った。

「これって賽銭箱・・・ああそう言う事か。」

そう言つてキンジは500円玉を入れてやると玉藻は何やらほくほくした様子であった。

するとキンジは玉藻に向けてこう聞いた。

「なあ聞きてえんだが・・・さっきのあれ何だったんだ」あの光は一体？」

そう聞くと玉藻はこう答えた。

「うむ・・・そうじゃな、教えておいて無駄には無かろう。

メーヤとミシエラも聞いてくれないか？」

それを聞いてミシエラと酒を飲もうとしていたメーヤが玉藻に視線を向けると

玉藻はこう名乗った。

「儂は『白面金毛の天狐』、妖怪じゃ。儂ら一族は古来より

人と色金の間柄を見張り、濫用・悪用を防いできたがその幾星霜に於いて

まあ色々と世界中と和平したり戦つたりしておつたがアリアの色

金は・・・

これまでにない程の色金・・・

・・・『緋緋色金』と呼ばれる700年前に帝を誘惑し、戦をばら撒いた

最悪の存在じゃ。」

緋緋神とは？

「緋緋色金とは戦と恋を最も好む輩で700年前はそれを封じていた者は

それに取り込まれてしもうて当時の帝を誘惑して戦を仕掛けさせたのじゃ、

そして最後には遠山侍と星伽巫女によって討ち取られた後当時の巫女達と

儂らは『殻金七星』を造ったのじゃ。特殊な殻を鍍金の様に被せて『法結び』……これは超能力を使う時にある繋がりでありこれによって緋緋神の力のみを

使用する事が出来それ以外の……『心結び』と呼ばれる感情の繋がりのみを

絶つことが出来るのじゃが質量が大き過ぎる色金は過剰にどちらも繋がってしまつて最終的にそ奴が緋緋神になつてしまふ。」

そうなたらこの世は乱世じゃなとそう言うときんじはこう聞いた。

「……もしそうなたた場合の対処法は何だ？」

きんじがそう聞くと玉藻は……こう答えた。

「殺せ、躊躇なく殺すのじゃ。誰でも構わぬからこ奴を殺さなければ

さつき言つたような事が起きるぞ。」

玉藻は目を鋭くさせてそう言うときんじはそれじゃあとこう聞いた。

「新しくそれは造れないのか？一度造れたのならまた」

「無理じゃ、数多の金剛石、青玉、紅石、翠玉諸々の材料を集めさせて百余人の

巫女達総出で錬成させれば良いのじゃが色金が殻金と馴染ませるには100年かかる。今この者の中にあるのは2枚、残り5枚を造りなおすのと小娘が

緋緋神にならんためとするならこの戦に参加した方が良からうな。」

そう言うときんじは時間を見てこう聞いた。

「どの位でこいつはその緋緋神になっちまうんだ？」

最初は巻き込まれてまあ色々遭って今でも最悪だがそれでもアリアは

武偵の仲間である事から取敢えずは助けるべきなのかとそう思っている

玉藻はこう答えた。

「・・・分からねのう、こればかりは誰も試したことが無いと言うよりも

試す理由も勇気もないからな。今日明日なる訳ではないから大体・・・数年と

言いたいところじゃが山勘じゃしそれに姉上にも聞かなければいかんから

ずれることも考えておくが良い。」

そう言うときんじはどうするべきかとそう思っている中で玉藻はこう言っ

て出でいった。

「兎にも角にも今必要なのは眷属共が奪って行った残り5枚の奪取と

アリアに返還するべきことじゃがメーヤよ、お主はこれからどうするのじゃ？」

玉藻はメーヤに向けてそう聞くとメーヤはこう答えた。

「勿論です！あの魔女は・・・カツエは必ず仕留めて見せます!!

今回のバンディーレの和議に失敗してしまった以上このままで

は・・・宗教裁判にかけられて破門十八つ裂き刑にされて十字架などない無縁墓地にあの女と

地獄迄一緒だなんて・・・そんなの耐えられません!!」

そう言いながらあんパンの袋をビリッと破いて食べながらこう続けた。

「せめてソレダケハ完遂させて見せます! 『殲滅科(カノツサ)』の単位が

足りていませんしね!!」

『殲滅科(カノツサ)』・・・こつちで言うSSRと言った処だな。確かローマにあるぞとミシエラがそう言うのと成程なとキンジはこう考えていた。

「(この人イタリアから来たって言うたから地理的に合っているって所だな、然しこの面々が味方か・・・前途多難だなこいつは。) キンジはそう思っているとミシエラがメーヤに向けてこう言った。「メーヤ、今日はここに泊まって行かないか? ベッドメイキングは終わっているぞ?」

「え、良いんですか!? ありがとうございます! 最終バスに乗って始発の飛行機に乗るまで空港で寝ようと思っていたものでしてあお神よ感謝しますアーメン!!」

そう言うって部屋に案内されるとキンジは玉藻に向けてこう聞いた。「アンタはどうするんだ?」
そう聞くと玉藻はこう答えた。

「儂は一度京都に戻るわい、姉上にこの事報告しなければいかんしそれに・・・久方ぶりに『憑龍』を纏えられる遠山侍が現れたからう。内容と次第においては

お主を何処の勢力に付くも関係なく支援してやるわい。」

『『ひょうりゆう』?』

キンジは玉藻に向けて何だそれはと聞くと玉藻はこう返した。

『『? 龍』、剣となりながらも今でも生きておる強靱な魂を持つ存在。

其れの名前じゃ、儂らはそう呼んでおり『鎧竜剣』とはお主の母方の先祖が付けた俗称じゃ。」

「・・・インクルシオがなあ。」

『『いんくるしお』か・・・良い名じゃ、今風で呼びやすいわい。』
じゃあのうと窓から出ていくのを見送った後キンジはソファに腰
かけると

ミシエラが現れた。

その手には毛布が持つてきており如何やら考えていることは同じ
だなと

そう思いながらこう言った。

「さてと、明日に備えて寝るか。玉藻は帰ったぞ。」

「そうか・・・なら明日の朝は大人数になりそうだ、兄さんは恐らく
調を迎えに来るかどうか分からないが取敢えず待っているか。」

「そうだな・・・寝よう。」

ミシエラがそう言うのとキンジは床に寝ようとするミシエラがこ
う言った。

「お前何処で寝る気だ？体に悪いぞ。」

「?・・・お前はソファに」

「離れて寝るぞ、それくらいは空きがある。」

そう言うミシエラは左隅に行くとキンジは右隅で寄って互いに
寝るが

時間を経て2人の寝姿は・・・互いの肩に寄り添うような形となっ
て

眠りについた。

そして朝

「ん・・・もう朝か。」

雀が外で鳴く音と共に目を覚ましたキンジはうとうとしながら何故ここにいるかと思っていると自身の頭が・・・ミシエラの肩に乗っていることに

気づくと同時にミシエラの頭も同じようにキンジの肩に乗っていることに

気づいて・・・ヤバいと感じた。

「(やばいやばいやばいぞ！何で俺とミシエラが同じ様に寝てるんだって言うか

俺達確か離れて寝ていなかったか!?)」

何でと思つてみると・・・ミシエラが魘され始めているのを見てまさか起きるかと思つてみるとミシエラが目を覚まして・・・キンジの顔を見て・・・

ぱつと起きた瞬間にソファーの手すり部分に当たって落ちそうになるのを見て

キンジはすぐ様にミシエラの手を掴むと其の儘・・・落ちてしまった。

「ウワアアアアアア！」

「キヤアアアアアアアア！」

キンジとミシエラの悲鳴と同時にドシンと言う音が聞こえると・・・何時の間にかだがキンジが下になっているとミシエラに向けてこ
う聞いた。

「いててて・・・大丈夫かミシエラ・・・!!」

「ああ・・・こっちは何とか・・・!!」

2人の言葉がその場で途切れた理由は・・・現状にあった。

「あ。」

今2人はキンジが下、ミシエラが上と言った感じでミシエラが

キンジの胸の上に抱きしめられるかのような感じとなっているのだ。

「／／／／／／／／／／！！」

それを分かってしまつて互いに赤面になつて離れるとこう思つていた。

「何やつてんだおれは女を抱きしめてどうするんだおい！」

危うくヒスつちまう所だつたじゃねえかつて言うかミシエラつて・・・

綺麗だつたなあ。」

「(け・・・結婚前の女が男に抱きしめられてああ・・・あんな状況になつて・・・何ドキドキしているんだ私は!!)」

そう思つていると・・・キンジは起き上がつてこう言つた。

「ちよつと顔洗つてくるから飯(、・▽・;)ノヨロシク!!」

「ああちよつと?!」

ミシエラはキンジの突然の言葉に驚いているがこの時2人は失念していた。

今この家には2階に2人と・・・一階にもう一人いる事を忘れていた事を。

「ハアア・・・何やつてんだ俺は？さつさと顔洗うか。」

キンジはそう言つて洗面所兼風呂場のバスルームに入ると・・・とある女性を見てしまったのだ。

裸の・・・金髪の女性を。

「・・・・・・・・」

キンジと・・・メーヤは互いに沈黙している中でキンジは何故と眼を点にしながらも・・・見てしまったのだメーヤの全裸を。

あんなに巨大な剣を振るっているのに細い腕、シャワーしていたのであろう

玉のような雫を肌が弾いて落ちており、そして何よりも・・・細い腰に反して

大きい・・・メロンの様に大きな胸と尻。

「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／！！！！」

キンジはそれを見て素早く出ようとしたと同時に・・・悲鳴が響いた。

「キヤアアアアアアア!!」

「ウウウウウウ／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

シスターの服に着替えたメーヤはキンジに対して赤面ながらも

ソファアの後ろで・・・正座しているキンジに対してうるんだ目で見ている中で

更にその周りには・・・悲鳴で起きたアリアと調が両隣にいますアリアは

こう言った。

「やっぱりこうするなんてキンジは変態スケベね！」

「けど忘れていた事とこれまでの習慣から見ても弁護の余地あり。」

「何言ってるのよ！こいつは裸を見たのよ!!こ言う伊奴は徹底的に」

「貴方の御爺様がキンジに負けたからって八つ当たりは良くない。」

「ナナナナナ何言ってるのよ！私は武偵として」

「本当にそう言えるの？」

「アンタ良い度胸ね・・・そこ直んなさい！調教してやるわ!!」

「返り討ちにしてあげる。」

互いにそう言いながら戦いそうになって・・・ミシエラがこう言った。

「お前達食事するが食べたくないなら外で戦え。」

「頂きます。」

2人はそれを聞いてすぐ様に武器を収めてテーブルに向かって行った。

今日の朝ご飯は昨日買った食パンをサンドイッチにしたものと

玉ねぎとキャベツの入ったスープであった。

そしてミシエラはキンジにも食事だぞと言うとキンジはおおと力なく

立ち上がりながら席に座って食事を始めようとすると・・・トント

ノックする音が聞こえたのであいつ等だなど思っただけで扉を開けると天草達がいたので中に入れるとメーヤを見てえ？何でと思っただけで取敢えず後で説明すると言っただけで食事を始めた。

そして食事を終えてキンジは天草に対して緋緋神について言う頭を抱えて

こう言った。

「其れは最早大變の域を軽く超えた惨事ですよ遠山君。」

「ああ、それでだがお前は」

「まあ僕にも連絡が来ましたが師団として行動しますよ、それよりも

殻金を奪われたのは痛いですね。」

「ああ・・・神崎には何も言わない様になっている、もうすぐアイツの母親の裁判らしいからな。」

そう言いながらカレンダーを見ていると調がキンジに向けてこう言った。

「キンジ、金一が迎えに来たから私これで・・・じゃ。」

そう言って出ていくのを見送った後メーヤはこう言った。

「それでは私も・・・カツエは私が地獄に堕としますので!!」

そう言いながら立ち去るのを見て・・・キンジはどうするべきかと考えるしかなかった。

役決め

そしてキンジ達が学校に行くと同時にメーヤはキンジに向けてこう言った。

「それでは私はこれで、カツエを必ずや滅しますのでは。」
そう言っただけで今日の便でイタリアに帰って行った。

そして4限目の合同LHRにて全員が集めた中で蘭豹先生が全員に向けて
こう言った。

「ガキども！それじゃあ文化祭でやる『変装喫茶（リストランテ・マスク）』の
衣装決めをするぞ!!」

天井に向けてドバン！と威嚇射撃しながら蘭豹先生がそう言う
と……

綴先生が全員に向けてこう言った。

「よし、そんじゃあ各チーム同士で待機ごほごほ！」

「咽る位なら吸うな煙草。」

「まああれが綴先生らしいからね。」

松葉がそう言うのと天草がこう言った。

「遠山君、そろそろくじ引きの箱が来ましたよ。」

「おおそうかって……柳生か、あの時は世話になった。」

「いえいえ師匠の頼み事なればこの柳生どんなことでもして見せませす！」

ふんすと鼻息荒らしてまるで犬みたいだなと全員が思っているとくじ引きの箱を見てこう思っていた。

「（これって……場合によっちゃあだが命がけなんだよなあ。）
そう思いながら中を見ていた。

『変装喫茶（リストランテ・マスク）』は各人が着ている衣装の職種を……

完全にしないといけないのだ。

これは武偵生徒の潜入捜査技術向上と共にそれらを客に見せつけ

て武偵の良い所をアピールすると言う目的があるのだが真面目にやらないと

教務課オールスターズによる・・・恐ろしい懲罰が待っているのだ。間違いなく死ぬこと間違いなしなのだ。

そんな中で柳生はキンジにくじ引きの箱を寄せてこう言った。

「それでは師匠、引き直しは一度限りであるためご武運を祈ります！」

「頼むから良いの出てくれよう。」

そう思いながらガサガサと手を入れて探していて手を取って出てきたのが・・・

これ。

『神主』

「ダウトだ、白雪にバレたらたまったもんじゃねえ。」

そう言うともう一度引き直して出てきたのが・・・これ。

『警官（警視庁巡査）』

「良しやりやすい奴だ、よく見かけるから何とかなる。」

そう言っつて離れると次は天草であった。

そして天草が引いたのがこれ。

『探検家（イン・イ・ジョー・ズ風）』

「・・・これは、映画見ないと分からなさそうですね。」

カイズマス

『SP』

「うむ、我はこれか。父上と共にいたからこちらは何とかできるであろう。」

そう言うのと次は女性陣であった。

松葉

『婦警』

「キンジと同じタイプね、アイツとコンビ組めるのかあ。」

(▽▽、*)ウフフと内心笑いながらルンルン気分でした。

ミシエラ

『ウエイトレス（アットホーム・カフェテリア）風』

「わわっわ私がウエイトレス何てない(ヰノ▽▽、)ナイナイ引き直しだ!!」

そう言っ退いたのが……これ。

『シン○レラ』

或る意味……学園祭にて真面なのが出てきた。

「／／／／／／／／／／／さっきのと交換!」

「スママセンが師匠の親友であっても引き直しですので我慢してください。」

「ウウウウウウ／／／／／／」

そう言っ赤面状態で去るのを見て最後に詠が出てきて引いたのが……これ。

『バニーガール』

「成程これですかア……古着屋にありますでしょうか?」

「お前の衣装はCVRに行っ身体測定を受けて貰っオーダーしろ!」

金は俺が出す!!」

「ええ良いですよ別に!古着屋に行っ買ってきますから!!」

心配しないで下さいと言っているのを見てキンジは……頭を抱えていた。

何せ詠はスタイルが抜群であるがために普通のならば間違いなく下手したら……ずれて見えるんじゃないかと危惧していたのだ。

そんな中で一部・・・ドタバタが起きていた。

場所は如何やら・・・アリア達がいる場所であった。

「何があつたんだ？」

「ええ、ちよつと聞いてきます。」

柳生がそう言つてアリア達の近くにいた一年生に聞いてみて暫くすると

戻つて来て・・・内容を説明した。

「如何やらくじ引きの内容が納得できない様子です。それで暴れている様子です。」

「・・・一体何だつたんだ？」

その内容はというと・・・柳生はこう答えた。

「小学生だそうです。」

「「「「「・・・」」」」」

それを聞いて暫く黙っていると次の瞬間に・・・笑い声が響き渡つた。

「あはははははは小学生つてぴったしカンカンじゃねえかアイツにハハハ！」

「遠山君・・・笑つちや・・・いけませククク・・・。」

「貴様も笑っているではあはははは!!」

「アイツに丁度いいじゃないのそれっといーひひひひひひひひ!!」

「何と・・・まあ・・・哀れなwwwwww。」

「確かに・・・丁度・・・良い・・・ですね。ぷぷぷぷぷぷぷぷぷぷ。」
そう言いながら思い思いに笑いながら暫くすると暴れるアリアに
向かって

蘭豹先生がずおつと現れて掴むと其の儘・・・ジャーマンスープレッ
クスを

叩きこまれた。

そして蘭豹先生はアリアに向けてこう言った。

「おいおいおい神崎くく？お前何言ってるんだああ??決まったもんは
ちゃんと従えやごらあ！」

「そんなの認められないわよって言うか小学生だなんて貴族として
恥」

「じゃあその恥・・・ここで捨てろや!!」

そう言って其の儘30分間蘭豹先生による・・・プロレス技祭りが
執り行われて

アリア本人が自分から「私は小学生をやります」と言うまで延々と
続いた。

困みにだがアリアは其の儘保健室で養生を取った。

夜の教室

『変装喫茶（リストランテ・マスク）』の衣装は全員が前述したとおり

自前で用意するのだが締切日が存在しておりそれを過ぎれば……教務課オールスターズにおける悪夢の体罰コースが待ち構えているのだ。

そんな事がある為全員それだけは守っているのである為締切前夜ともなれば

夜の教室に集まって徹夜で仕上げると言う……ここだけ普通の学校と

変わらないような光景が広がっている中でキンジとカイズマスは互いに自分の衣装のチェックをしているのだがここでもう一つ大切な事がある。

それは……ちゃんと使用済み又はリアリティーを追及しているのかどうかである。

その為キンジは使用感を出すために新品の警官制服を揉んだりバツジを

下に引っ張ってピンの穴を広げたりしカイズマスも同じようにしており

違う所と言えば裾を引っ張って戦闘をしたと言う感じを出していた。

そしてそんな中で壁際にある衝立で区切られた場所がありキンジは何なんだと

思っていると……武藤がキンジに向けて声を掛けた。

「キンジ来いよ！そっちはベストポジションじゃねえぜ。」

そう言いながら……消防士の格好をしている武藤がキンジを連れてひそひそと

囁きながら衝立ゾーンに回り込みながらこう言った。

「こっちだ、この角度からだとよく目を凝らせば女子の影が薄く見

える。

集中力を保てればシルエツトショーを楽しめれるぞ!!」

「はい、痴漢行為で逮捕だ。カイズマス手伝ってくれ、こいつを隅にある掃除道具入れにぶち込む。」

「オオ分かった、お前もいい加減に学べ。」

そう言う目潰しして痛がっている武藤をカイズマスが足を掴んで

其の儘引きづって行った。

全く何やっているんだと思って戻ると・・・松葉がやって来たのだ。

「キンジ、アンタ終わったの?」

松葉はそう言いながら・・・青い警官制服を身に纏った松葉が現れたのだ。

ムチムチとしたスタイルだが太っているわけではなくきちっとしているが

キンジはそれを見て内心こう思っていた。

「(イヤなに来てんだよって言うかお前色々危ないから!ていうか

お前何だその姿は!!着崩しているのかって胸谷間が見えてるぞ!?)」

キンジはやめてくれと思いつつながら松葉に向けてこう言った。

「それじゃあ取敢えずは共同でやるぞ?互いに位置確認してオーダーを聞いたり食事を回したりする。」

「そうね、そんじゃあその流れでしましょ。」

そう言いながらよいしょと言って座るとキンジは何でだと思つていると

松葉はこう答えた。

「アリアなんだけど・・・何か凄い目つきなのよねえ胸とかについて言うか

詠に至つちやあ親の仇レベルよあれ。」

「成程な。」

完全に怨み全開だなとそう思っていると衝立ゾーンから……ミシエ
ラが

現れたのだ。

それを見て男性陣は……ポカーンとしていた。

ドレスを着たミシエラはまるで……童話に出てくるお姫様みたい
に

見えたのだ。

青いドレスと頭に被っているティアラ（模造品）と足元にある特別
に造った

強化窓で使われる素材製の靴まで付けていたのだ。

それを見てキンジすらポカーンとしていて……ミシエラは赤面
して

こう言った。

「わ……笑いたければ笑うが良い、こんな姿どうせ私みたいに背の
高い女には似合わない」

「いや凄いい合っているぞ、本当にお姫様みたいだなあつて
思っちゃまうほどだ。」

それを聞いてミシエラは……あうううと赤面しながら顔を俯かせ
ていたが

耳まで真っ赤な為間違いないと恥ずかしがっているんだと思ってい
ると最後に……詠が出てきたがその姿は……キンジを除いた男性
陣全員が

ウオオオオオオオオ！と雄たけびを上げる程破壊力があつた。

白い兎耳が付いたバニーガールであるが……サイズが間違いなく
合っていないなかったのであろう胸がぎちぎちで今にもあふれ出しそ
うな位と

なっておりお尻もぎちぎちで正直な話何時服が壊れるのか冷や冷

や物であり本人も合っていない事も自覚しているであろう前屈みになつていたがそれが胸の谷間と

大きさを強調するかのような感じとなつている流石のキンジもそれは流石に

やばいと感じて胸を見ない様に詠の顔をちやんとがんみで見ていると

詠はこう聞いた。

「あの・・・遠山君・・・似合い・・・ますか？」

「お・・・やつぱお前合っていないだろサイズ、直ぐに専門の奴頼んで

準備してもらえ。先生達には俺から話す。」

頭を抱えてそう言うと言は暫くして・・・こう答えた。

「は・・・はい、矢張りそうしますって可笑しいな・・・前にサイズ確認した時・・・よりも・・・大きく」

なつているのかなとそう言いかけて・・・悲劇が襲い掛かった。

前屈みになつているがために重さに耐えきれなかつたことと

ハイヒール等履いた事すらなかつたがためにバランスを崩して其の儘

キンジ目掛けて・・・転んでしまったのだ。

「キャア！」

「うおわ!？」

キンジは慌てて詠の肩を掴んで抱きしめるようにして受け止める
と其の儘・・・詠が抱き着いたのだ。

「よ、詠お前何してんだよって離れろ!!」

そう言うと言は・・・赤面してこう答えた。

「と・・・遠山君・・・脱げちゃいました・・・。」

「・・・え?まさか・・・。」

「ハイ／＼／＼／＼／＼」

詠は恐る恐る聞くキンジに対して赤面出そう答えると頭を抱えて
こう呟いた。

「マジかよ。」

そう言うしかなかった。

その後は着替えのある場所までキンジが素数を数えながら服がある衝立ゾーンの手前まで連れて行ってミシエラ達に頼んで服を支給してくれるように頼んだ。

・・・因みにだがバニーガールの色は水色であった。

裁判

「それはまた・・・大変でしたね。」

「プハハハハハ！何ソレどこの『To Loner』なのきやははハッハー！」

キンジと詠との出来事を聞いて天草はアハハと苦笑いしながら頭を掻いて

理子は大爆笑をしていた。

今の天草の衣装はフェドラー帽子にレザージャケット、ズボンも同じタイプでありよく見れば砂ぼこりや傷などが目立っており更には研究用の日誌や色んなものが入ったカバンがあるがこれも同じようでありリアリティーを追及していた。

そして理子だがテンガロンハットを被って厚手の生成ブラウスを胸の前で結んで

臍は丸出し、革のチョッキとブーツをちやんと着てデニムのミニスカートの裾には

短い麺みみたいな革紐がびっしりと並んでヒラヒラしていた。

まるで映画に出てくる衣装だなど思いながらキンジはこう続けた。

「まあ後で蘭豹先生に報告したらな・・・」

『ああ・・・まあそう言う事なら仕方ないからな、特例にしといてやる。』って

呆れた顔でそう言ってたぜ。」

「・・・ある意味貴重な状況ですなそう言うの。」

天草はそれを聞いて物珍しそうにそう言うと言えはと理子に向けて

こう聞いた。

「お前こんな所で油売ってて良いのかよ？自分のチームはどうなんだよ?!」

キンジがそう聞くと理子はこう返した。

「ああ大丈夫大丈夫、ゆつきーがアリアを小学生にさせる様に教育中だからね。先生って言う役職があるから。」

「アイツが教師ねえ・・・まあ一定の事は目を瞑れば優等生だからなアイツ。」

キンジはそう言っていると・・・隣の教室では何やら騒ぎが起きていた。

「おい確かお前らって隣の教室使ってるよな?」

「あああれね・・・まあ大丈夫でしょう、レキぽんがいるし。」

そう言いながら缶コーヒを嗜んでいる理子であった。

そして次の日、キンジはミシエラを連れて東京裁判所に来ていた。

この日はアリアの母親の裁判が執り行われておりキンジは外で待っていると・・・ミシエラが出てきた。

「遠山、終わったぞ。」

「それで・・・どうだったんだ?」

罪状はと聞くとミシエラは何やら言いにくそうにして・・・こう答えた。

「有罪だ、懲役536年のな。」

「はあ！あり得ねえだろそんなの!?!だってお前や理子が証言台に立ったんだろ!!」

それを聞いてキンジは嘘だろうと思っていた、何せあの中国の3姉妹に

ブラドの情報があつたにも関わらずに有罪と言うとなるとその裁判官は本当に

裁判官なのかと疑いたくなる様な状況であるのだ。すると後ろから・・・理子が現れてこう続けた。

「それに今回の裁判どう見ても異常だぜ？傍聴人もマスコミも誰もいねえし

検察側の主張なんて支離滅裂も良い所だ、この裁判・・・

何か裏がありそうだぜ？」

そう言う・・・迎えに来た天草がこう言った。

「そうなりますとその彼らですら抗え切れない程の証拠を提示しないと

いけないと言う事ですね。」

そう言うときンジはこう言った。

「となると残ったイ・ウーの連中を引っ張り出す・・・やっぱ参加しなきや

いけねえって事かもなア。」

そう呟きながらキンジは天草に向けてこう言った。

「取敢えずは飯にするか、近くに焼き肉屋があつたからそつち行くとするか?」

「良いですね、偶には豪勢にしましょう。」

「そうとなればいざしゅっぱーっ！」

そう言うって天草を引っ張っていくのを見てキンジはミシエラに向けて

こう言った。

「俺達も行くとするか。」

「そうだな。」

そう言って天草達を追いかけられるかのように向かって行くところがある事に気づいた。

「今日は渋滞が多いな。」

「・・・そう言えば確かにな。」

ミシエラはキンジの言葉を聞いてどうしたのだと思っていると・・・爆発音が聞こえた。

辺りにいた人達は何なんだと慌てているのを見てキンジはこう言った。

「ミシエラ！ここに居る人たちを避難誘導してくれ!!天草いるか!?!」

「はいここに!!」

そう言って手を上げるとキンジは天草に向けて指示を与えた。

「天草！お前も避難誘導を手伝ってくれ!!人手が欲しいんだ!?!」

「分かりました！理子さんすみませんガ」

「分かってるよシー君、停電の原因探れでしょ♪」

そう言って道路に出て停電のある方向に向かって行った。

そしてキンジも追う様に向かって行った。

そして停電の状況となる数十秒前

に
アリアは泣きながら弁護士でもある『連城 黒江』の乗っている車

乗っていた。

どう見ても母親の無罪は分かり切っているはずなのに何でどうしてと

混乱しており泣くことしか出来なかった。

他のメンバーは他の護送車に乗っており母親が一番最後にいる。

そして暫く走っているとき、渋滞していることに気づいたのだ。

「変ねえ？何かあったのかしら??」

『連城 黒江』はそう言いながら信号を見ると・・・信号が

付いていなかったのだ。

故障かと思っていると・・・突如車激しい放電音がバチバチツと響き渡った。

「!!!」

それを聞いてアリアは椅子の下に隠れると今度は・・・信号機が突如として

爆発したのだ。

「な・・・何よ一体!?!」

そう言いながら外に出ると・・・護送車の後ろ部分から放電音が響き渡った。

「ママ!!」

アリアはそう言って向かって行った。

そしてそこから少し離れたカフェテリアにてとある少女がコーヒーを

飲んでいた。

水色の髪に整った顔立ち、そして何よりも・・・机の上で存在感を

放つその胸が周りの視線を釘付けにさせていた。

モデルかアイドルかなと誰かが言っている中で爆発音が聞こえてパニックッテいる中でメイド服姿の少女は落ち着いた様子で辺りを観察して・・・

あるビルを見てこう言った。

「あそこですかね。」

そう言っレレジに行っお札だけ置いて去っ行く

大きなギターケースを持ってそのビルに向かいながらこう呟いた。

「さて・・・お掃除と行きましようか？」

そう言っ向かいのビルに向かっ行っ。

メイド来る

「一体誰がって……ママ!」

アリアはそう言って後方の護送車にいる母親に向かって一直線に走ると……

影から少女ヒルダが現れた。

「ヒルダ……写真では見てたけど合うのは初めてね!」

そう言って拳銃を向けた瞬間に……それが一瞬で弾き飛ばされたのだ。

「!」

アリアはその感触に狙撃かと思って辺りを見渡そうとすると……日傘を持ったヒルダがアリアの目の前に現れてこう言った。

「粗野ね貴方、私はあんまり戦いたくないのよ? 日の光が大嫌いなんだから。……けどね、『貴方達』は私のお父様の名誉を侮辱したわ。その代償として先ずは……あなたのママをここで殺してあげるわ!!」
そう言うときアリアは目を大きく開けて背中から刀を二本取り出してこう言った。

「そんな事させるものですか!」

そう言って猪突猛進で突撃しようとして真つすぐに最速に向かうときアリアが

ヒルダの影を踏んだ瞬間に……ヒルダが少し力んだ。

「ん」

「キヤアアアアアアア!!」

突如としてアリアが悲鳴を上げてその場で倒れた。

「あ……が」

「だからあ……そんなに血の気を多くした姿を見せないでよ。我慢できなくなっちゃって今ここで『食べちゃいたいくらい』何だから。」

そう言ってアリアに近づこうとすると……影が濃くなったので後ろを見て……何もないのに回避した。

そして先ほどまでヒルダがいた場所に……ズガンと音が鳴り響い

た。

「へえ、そんな事が出来るなんて流石ねえ・・・遠山キンジ。」
そう言うと言音が鳴り響いてアスファルトに穴が開いた場所に・・・
インクルシオを纏ったキンジが現れたのだ。

「バンテイレ以来ね、あの時殺しておけば良かったかしらね？」

「御託は良いからさっさとかかって来いよ？」

「・・・ムカつくわね貴方は、・・・相手しなさい『4世』。」

ヒルダがそう言った瞬間に・・・突如として理子がキンジ目掛けて
蹴りを

放ったのだ。

「理子ー！」

「・・・」

キンジは理子の顔を見て・・・クソと思っていた。

未だトラウマがあるのかよと思いつながら理子の蹴りや攻撃を受け
流しならも

体勢を立て直そうとするとヒルダはとあるビルに目を向けていた。

何やら苦々しそうな表情をしている中でキンジも理子を突き飛ば
して

その方向を見ると・・・遙か上空に星ではないナニカがきらつと輝
いていた。

「あれは・・・嘘だろおい！」

キンジはそう言って驚いていた、それはイ・ウーの一味が逃亡した
際に

使われていた大陸間弾道ミサイル『ICBM』であった。

それが何でと思っているところある事を予測した。

「ああクソ！ここにきて援軍かよ!!」

そう言っている・・・声が聞こえた。

「遠山そっちは大丈夫か！」

「理子さん大丈夫ですか!？」

「ミシエラ！天草!!」

「!？」

理子はそれを聞いて嫌さずに車の間をすり抜けてどこかに向かつて行った。

そしてその儘ミサイルが落ちて・・・地面に突き刺さったのだ。

「一体誰が出るんだ？」

キンジはノインテーターを取り出して構えると・・・側面のハッチが開いた。

「・・・？」

倒れていたアリアは何だと思つて視線を向けると現れた人間はこう言った。

「危ない所だったね、君がアリアだね？一目でわかつたよ。」

そう言つて出てきたのは・・・海外の武偵であろう灰色のブレザーを着た

美少年が白馬の王子様宜しく出てくるとヒルダに向けてこう言った。

「ヒルダ、君は如何やらこの世で最も傷つけてはいけない人を傷つけたね。」

声が普通よりも高いが美少年はそう言つて紋章入りの鞆からサーベルを右手に、そして左手にはSIG SAUER P226R（シグザウアー）またの名を『シグ』というイギリスのSAS、アメリカのSWATが好んで使うエリートご用達の

オートマチック拳銃を構えてこう言った。

「君にアンラッキーなお知らせが3つある、一つはこのカンタベリー大聖堂より恩借した芯はスウェーデン鋼だが刀身を追う銀は架齢400年以上の十字架から

削り取つた純銀をフォイルしたもの。2つ目は法化銀弾（ホーリー）、

それも君が慣れていないプロテスタント教会で儀式済みの純銀弾だよ。

君は御父上ほど僕らとの戦いを経験していないようだ。そして3つ目は・・・

僕は怒っている、ヒルダ。君がアリアを傷つけたことを」

そう言っているとはアリアは美少年に向けてこう言った。

「気を・・・つげな・・・さい、あ・・・いつ・・・仲間・・・いる。」

「大丈夫だよアリア、それも僕が倒して」

「そのお方でしたら先ほどお逃げになりましたよ?」

「「「「!!!」」」」」

それを聞いて全員が何だと思って見て見るとそこにいたのは・・・前話に登場していた例のメイドであった。

一体誰だと思っているとメイドは・・・全員に向けてスカートを掴んで

少し上げて深々と頭を下げてこう言った。

「お初にお目に掛かります、私は『M I 6』所属イギリス武偵の

『ダイアナ・ドーン』と申します。」

以降お見知りおきをとそう言うのとキンジに近づくと『ダイアナ』はこう聞いた。

「貴方が遠山キンジ様ですか?」

「あ・・・ああそうだ。」

「お初に目に掛かります、貴方の事は聞き及んでおります。今日貴方と

出会える機会があると思ひまして来た次第でございます。」

「一体・・・ナンダ?」

キンジはそう聞くながらノインターターを構えると『ダイアナ』はこう答えた。

「私を貴方の下で働かせてくださいご主人様♪」

「「「「「」」」」」」」

まさかの爆弾発言であったが当の本人は笑顔でそう聞いた。

雇ってください！

「雇ってくださいって……どう言う意味だよアンタ？」

「其の儘の意味でございます、私を貴方のチームに入れて欲しいのです。」

そう言ってお辞儀すると……キンジにドがつく程に近づいてこう続けた。

「私こう見えても何でも出来るんです！食事の支度から戦闘迄全てをこなすことが出来ますしそれにその……何でしたら床にて夜の」

「お前ちよつと待て落ち着けて何したいんだお前は?!」

「ですから貴方に雇って貰いたいと」

「いや待て俺ん家で何したいか聞きたくないし考えたくも無いって言うか頼むから何で俺なんだって話なんだが!!」

キンジはダイアナに向けてそう聞くとダイアナはこう答えた。

「はい、この度のバンテイーレに伴い『MI6』はどちらに着くかで論争となつてしまい中立派となつておりますがこの時世です。どちらに着くにしても我々は仲間を集めなければなりませんませぬが貴方もどちらにも付いていないため

同盟を組みたいと思います次第で」

「言っていることは分かるが何で雇って貰いたいつてなるんだ意味わからん。」

キンジはダイアナに向けてそう聞くとダイアナはこう続けた。

「先にも申し上げた通り我々は同盟を欲しております、でしたら実力も合つて

あの中で勝ち目がありそうなのは貴方でしたので同盟の証として私を連絡係にして

貰いたいでございます。」

ダイアナがそう言うがキンジは少し悩んでいた、味方が増えるのはありがたいが

正直な所チーム編成は現状で充分なのにここで追加するのは如何だと

思っているのだがダイアナはこう続けた。

「貴方のチームについても理解しておりますし私こう見えて何でもできます!」

「其れは分かっているがウチは既にSSR、ロジ、コネクト、インケスタ、

メデイカ、アサルトがいる中でお前は何か出来るんだ?」

そう聞くとダイアナはこう答えた。

「ハイ、私は攻撃が主立っておりますが内容次第では潜入も出来ません。」

「・・・レザド（諜報）か、ウチにはいねえがアミカにいるしそれに」

「其れと拷問も出来ます!」

「胸張って言うなってダキュラ・・・どうするミシエラ、天草?」

そう聞くとミシエラと天草は暫くしてこう答えた。

「私は良いと思うぞ、我々は一点特化型が多いから多様性のある人材は

欲しい所だ。」

「まあここ迄言われますとね・・・必死さが伝わると言いますか。」

そう言うと言えたとキンジは天草にバンティイレの事

聞いているんじゃないかと思っていると天草はこう言った。

「ああそれとですが僕もバンティイレにつきましてはメールで聞いていますので一応僕も師団派になりますね。」

「・・・そうか。」

それを聞いて何かあれば駆けつけるぞと言うと天草もお礼を言う

と仕方ないと言ってダイアナに向けてこう言った。

「よし、俺達のメンバーに入れてやるが既にチーム編成は終わっているから

外部からの委託って感じで一年間の契約って事で良いな。」

「ハイ!宜しくお願いします!!」

そう言う・・・背後から声が聞こえた。

「もう良いかね君達?」

「ああそうだな・・・手前イ・ウーの生き残りか何かか？」

キンジがそう聞いた瞬間にミシエラと天草が互いに武器を構えると美少年は

溜息交じりでこう言った。

「人に名を聞くときは自分から名乗るのが礼儀じゃないのかい？」

「生憎だが仲間でもねえしそれ以前にあんなの乗っている奴の言葉を誰が

信じるかよ。」

そう言つてノインテーターを構えていると美少年は仕方ないと
言つて

こう名乗つた。

「やれやれ、随分野蛮だな。だがそう言うのであれば言わなければ
ならないのが貴族の情けだね、初めまして遠山キンジ。僕の名前は
『エル・ワトソン』だ。」

『ワトソン』・・・オイオイオイ待てよアリアはホームズで
お前がつてマジかよ。」

「マジですよキンジ様、彼は確かに『エル・ワトソン』。」

《リバティ―・メイソン》の隠密部隊の人間です。」

「流石女王陛下直属の暗部組織だね、僕達の事を既に知っている
は。」

「いえ、貴族名簿に貴方の名前が記されていましたので知っていた
程度です。」

「そうか、紹介ご苦労であつたがじゃあ僕がここに居ることは
知っているよね？」

そう聞くとダイアナはこう答えた。

「ええ、貴方とアリアが許嫁であること位知っております。」

「許嫁つて・・・今時なるんだなそう言うの。」

キンジはまるで遠い世界だなと思つてしていると『エル・ワトソン』
は

アリアに向けてこう言つた。

「さあ、僕が来たからにはもう心配いらぬよ。君は僕が・・・

絶対に守ってあげるからね。」
そう言う『エル・ワトソン』の眼はまるで……アリア本人を
見ているようではないとそう思っていた。

そして『紅鳴館』廃墟。

嘗てブラドが使っていたこの館は既に廃墟となっており雑草が少
し

生い茂っている中で……ヒルダが銀髪の少女に向けてこう言った。

「何故攻撃しなかったのかしら？」

「も……申し訳ありません、邪魔が入りましてそれで。」

「そう、けどまあ良いわ。嫌だったけどこれでアイツとの約定は
果たし終わったけど……援護しなかったイヌには躰が必要な様ね
？」

「ヒイイイイイイイイ！助けて誰かー！ー！！」

それからと言うのも痛いとかユルシテとか言う声と共に肉を叩くような音が

聞こえる中で・・・廊下の隅っこで震えて蹲っている理子が体育座りしながら

恐怖していた。

嘗て自分もブラドに酷い事された身としては助けたいが・・・体が動かないのだ。

トラウマが蘇って言う事聞かなかったら殴り蹴られて凌辱されたあの時の恐怖が蘇る中である事を思い出していた。

・・・天草と共に教会の手伝いをしていたあの時の事を。そして理子は小さな声で・・・泣きながらこう言った。

「シーン・・・助けてよ・・・。」

そう言いながら少女の鳴き声を聞く事しか理子には出来なかった。

転校生

その日キンジの教室には2人の転校生・・・エル・ワトソンとダイアナが現れた。

高天原先生が全員に向けて「マンチエスター武偵高とイギリス武偵高から

カッコイイ子と可愛い子が来ましたよ〜。」と言って来たのだがまさかかよと

思っている中で2人が自己紹介すると男子勢がダイアナに向けて聞いていた。

「前の学校では何してたんですか!」

「前の学校では全ての教科は一定の成績を収めております。」

「可愛いな!アイドルみてえだ!!」

「生憎ではありません、メイドです。」

『よっしやー!生メイド来たー!ー!ー!!』

何やら喜んでいるなあと思っていると一人がこう聞いた。

「じゃじゃああさ!何部に入るんだ!」

「そうですねえ・・・。」

そう言うとダイアナがキンジに近づくと・・・こう聞いた。

「ご主人様はどちらにいますか?」

「ふふお!?」

まさかのこっちかよと思っていると周りの視線(特に男性陣)がまるで槍に貫かれるかのように見られているなど思っていると・・・ミシエラがこう答えた。

「遠山は帰宅部で何もないぞ、ちなみに私も同じだ。食事や家事の当番は

交代制だから後でシフト調整させるぞ。」

《!?!?!》

それを聞いて殆ど全員がキンジをじろっつと見ていると・・・何やら声が聞こえた。

「聞いた?遠山キンジ、ミシエラさんと一緒に暮らしているって?」

「嘘でしょう！あの女たらしまさか女を寮に連れ込んで？」

「何て奴だ、勇者だぞ。女子を男子寮に入れるなんて。」

「いや待て、確かキンジの奴寮から一軒家に引っ越したって話だぞ？」

「ええじゃあ本当に同居！」

「あの昼行燈等々俺らよりも先に大人の階段上っているなんて…！！」

「いや待て、アイツには確か松葉や青岩も周りにいたはずだぜ…まさか!?!」

「クソが！じゃあ何かアイツ既に4股って何だよあの野郎白雪さんがいながら

他にも美少女で然も超乳メイドって俺達には何も無いのにアイツにはあるって

神は何処まで不公平なんだよー！ー！！

そう言っているが松葉と青岩は別だしミシエラに至っては司法取引の一環だぞと内心そう思っているとダイアナに向けてこう言った。

「なあ聞きてえんだけどお前って俺のチームに入りたいんだよね？」

「はい、その通りでございますが？」

「何で…ご主人様？」

「はい、遠山様はリーダーですし私にとっては主となるお方ですので

精一杯の御心をこめてご主人様でございます。」

「…だつたらでいいがご主人様はやめてくれ、むず痒いし遠山キンジか

キンジで良い。」

「ですが」

「頼む。」

キンジがそう言って頭を下げると暫くして…ダイアナはキンジに向けて

こう言った。

「でしたら・・・キンジ様とお呼びしてもよろしいでしょうか？」

びくびくしながらそう聞くとキンジは・・・溜息ついてこう答えた。

「もう・・・勝手にしろ。」

「ありがとうございますございますキンジ様!!」

わーいと言って喜びのあまりジャンプして・・・勢い余ってその大きな胸が

どでかく揺れるのを見てヤバいと思って窓の方に目を向けるも背後の・・・

殺意の塊に冷や汗がダラダラ出ているとダイアナがそれを見てキンジに向けて

こう言った。

「キンジ様、お汗をかいておられますよ！今すぐ拭いて差し上げます!!」

「いや待ってって大丈夫だからってイヤ本当についておい!!!」

そう言いながらも結局拭かれるもその際に胸元の・・・大胆に開けている

谷間を見て何も考えるな無になるんだと思いつつながらそれを受けていると・・・

エル・ワトソンが赤面しながらこう言った。

「と・・・遠山キンジ・・・き、君はそうやって多くの女性と・・・破廉恥な!」

「いや何でだよってその前にこの状況何とかしろ!」

そう言いながら結局HRはグダグダな感じで終わった。

その後も授業においても一般ではダイアナとミシエラの教えによつて

頭に入る中でエル・ワトソンも全ての問題を回答していた。

「んじゃあ俺はインケスタだからって・・・何だこの車？」
キンジはそう言いながらその車を見ていた。

イギリス製の車『ノーブル・オートモータイブM600』。
スポーツカーの専門企業であり最近発売されたばかりの新車じゃ
ねえかよと

思っていると扉が開かれてそこから出てきたのは・・・ダイアナで
あった。

「ご主人様お迎えに参りました。」

「お前確かダキュラだよな？」

「はい、その通りでございますがキンジ様が待つておられるバスは
アサルト生徒同士による社内乱闘がありまして駆けつけた蘭豹先
生が其れに

怒られてバスを横転してしまつた次第でございましてお迎えに参
りました。」

「・・・授業は？」

「既に粗方習得済みでございますのでどうぞ。」

そう言つて車に乗せて3人が出る中でそれを見ているサングラス
をかけた・・・エル・ワトソンがキンジを見てこう呟いた。

「覚えているが良い遠山キンジ・・・アリアのベストパートナーは
僕なんだ・・・!!」

「それで、俺を迎えに来た本当の目的って何なんだ？」

キンジがそう聞くとダイアナがこう答えた。

「エル・ワトソンは間違いなく『イ・ウー』のメンバーです。」

「矢張りか。」

それを聞いてミシエラがそう呟くとダイアナはこう続けた。

「それとですがこの度のヒルダに伴いましたは何やら裏があると思われると思います。」

「ヒルダ・・・あの吸血鬼か、ブラドの娘だって話だが何だ？」

「はい、今回の撤退は何やら作為的な物を感じられます。」

幾ら苦手な武器とは言えあそこで大人しく引くのが可笑しいので。」

「・・・確かに、ブラドもそうだったし注意するなら

天草の『村正』だしな。」

あの魔蔵を斬るだけで停止させることができる妖刀ではなくなど

そう思っているとダイアナはこう言った。

「取敢えずは今『M I 6』にて情報を精査中ですので詳しい事が分かりましたら

ご報告させていただきます。」

「・・・分かった、頼むぞダイアナ。」

「!!ハイキンジ様!このダイアナ、必ずや任務を全うしてご覧淹れましてこの戦に勝利を献上いたします!!」

そう言ったダイアナはまるで・・・嬉しそうな感じであった。

昼飯は驚愕

そしてインケスタの授業が終わればその儘体育の授業で
キンジはバレーをしている中で・・・ヤバいと感じて一歩下がろう
とすると

カイズマスが割って入ってその為を撃ち飛ばした。

「遠山、分かっていると思うが。」

「ああ分かっているさ、あの野郎間違はなく故意だ。」

そう言つて2人の目の前にいる・・・エル・ワトソンを見ていた。

然も試合中の事故と偽る様に時間差での攻撃をしてくるのでカイ
ズマスも

何とか応戦して・・・試合が終わつた。

僅差で負けたがどうも釈然としなかつた。

お昼休み。

「ご主人様こちらへどうぞ、準備は整っております。」

「お・・・おお。」

キンジはダイアナが用意した食事に・・・ちよつとだが引いていた。
何せ用意しているのが・・・凄いからだ。

メニュー

前菜 ほうれん草と粗挽き薄切りベーコンのサラダ

スープ グリーンピースを磨り潰したポターージュ

魚料理 きびなごの天ぷら

肉料理 チキンの照り焼きバターソース

ソルベ 胡麻豆腐の黒糖仕立て

メインディッシュ 神戸牛の霜降り和牛の鉄板焼き

サラダ 黒豆の入ったグレープフルーツ入りサラダ

ライス 鉄板焼きの油で作ったガーリックライス
デザート アップルパイ
コーヒーマシナモンローストしたキリマンジャロ
以上を食した後何だか居心地悪くなりそうだなと思っていると
ダイアナはキンジの弁当を食していた。
「こちらの中々良いお味ですね、こちらはご主人が好きな手合いと
もなれば」

勉強しないと。」
そう言いながら美味しそうに食べていた。

因みにメニューがこれ

小松菜と魚肉ソーセージのソテー

烏賊と秋ナスの酢漬

枝豆を湯がいた奴

以上の物である。

因みにそれを見ていたミシエラは・・・フンと鼻息荒らして食べていた。

尚エル・ワトソンはグヌヌと唸りながらステーキを食べていた。

次の授業はプールであるがこちらは温水プールである為何時でも受けれるのだ。

そして何故かエル・ワトソンは周りの埃をポンポンと入念に払ってテーブルの横に広げて何故だか・・・女座りしようとしていたのだ。しかしすぐに体操座りになった。

何がしたいんだと思っていると蘭豹先生が自身の獲物をスターター代わりに放ってこう言った。

「よーし餓鬼どもープール20往復しやがれ!!サボった奴は即ケツにぶち込むからそのつもりでいろやー！ー！！」
そう言っつて即座に出ていった。

まあ縦横どつちか言われてなかったが為キンジ達は横20周で済まして

後は自由時間だと言っつて泳いだり遊んだり駄弁ったりしていた。そんな中でキンジは昼結構食ったからなと思っつてもう数週泳いでいて

終わって上がろうとすると・・・目の前にタオルがあつたので誰だろうと思いながらお礼を言おうと思っつて顔を上げて・・・溺れかけた。

「キンジはあまりの事にすつころんでもういとどプールから出てき

て

その人間の顔を見てこう言っつた。

「いや待て何でいるんだダイアナ！ここは男子しかいないはずだろうが!？」

女子は体育館だろうがと言うと・・・水着を着ていたダイアナがこう答えた。

「そちらでしたら未だ体操服が無い身ですので今日の所は

自由授業とさせて貰っつておりますのでご主人の厄介になろうかと思われましたが・・・ご迷惑だっつてでしょうか？」

そう聞いてダイアナが少し・・・うるんだ目をしていたのでヤバイ

と
思
っ
て

キンジはこう答えた。

「いやこれはありがたいって言うか・・・助かったぜ。」

「!!お褒めに預かり光栄でございます(主人様!!)」

そう言っ
て喜
ん
で腕
を胸
の前
で組
ん
でし
ま
っ
て
キン
ジ
は...

見
て
し
ま
っ
た
の
だ。

挟
ま
れ
た
胸
の
谷
間
の
中
で
揺
れ
る
そ
れ
を。

「?!?! (何でそんな程度で喜ぶんだって言うか何で・・・)

そ
ん
な
水
着
な
ん
だ
よ
ー
ー
ー
!!)」

そ
う
言
い
な
が
ら
キン
ジ
は
ダイ
アナ
の
水
着
を
チ
ラ
リ
と
見
た。

白
い
肌
に
白
い
水
着
と
言
う
正
当
に
見
え
た
ビ
キ
ニ
で
あ
る
が...
と
に
か

く
危
な
い。

特
に
胸
の
中
央
部
分
に
も
う
一
つ
谷
間
が
見
え
て
お
り
細
い
紐
が
そ
れ
を
ま

る
で
辛
う
じ
て
守
っ
て
い
る
と
言
う
そ
ん
な
感
じ
で
あ
っ
た
が
為
直
視
で
き
な

い
が
他
の
男
子
生
徒
達
は

そ
れ
を
見
て
ウ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
!と
歓
声
を
上
げ

て
い
た
が

エル・ワトソンはサングラス越しで見ながらこう呟いた。

「ふむ、遠山キンジは女子に弱いと聞いていたが成程確かにそうだ。

だがそれと同時にそんな人たちに信頼されていると言うのもまた

事
実
か、

対
応
次
第
で
は
敵
味
方
に
な
る
事
も
念
頭
に
置
か
な
い
と
い
け
な
い
な。」

そ
う
言
い
な
が
ら
空
を
眺
め
て
い
た。

そ
し
て
エル・ワトソンとダイアナがリストランテ・マスクエの

くじ引きをする事となったが転入生の場合は自作はしない代わりに

たった1回でしか引けず変更なしと言うルールに於いて2人は何するんだと思つて

注視して決まったようだ。

エル・ワトソン 女装

ダイアナ バイクレーサー

「いや何でそんなのあるんだ!？」

「まあ文化祭とは言え武偵高ですからねえ。」

「お前案件だな、後は任せた。」

「嘘だろあり得ねえ!？」

キンジはダイアナの衣装に対して天草とカイズマスから押し付けられてしまい

何でと思つている中で着替え終わつてカーテンを開けて・・・男性陣の殆どが

雄たけびを上げていた。

そこにいたのはライダースーツを着て・・・胸元を開けたダイアナが

そこにいた。

無論矢張り見えてしまつておりサイズが合わないのであろう

今にもさらに下に下がりそうあ感じがしている中でキンジに近づいてこう聞いた。

「如何でございましょうご主人様このお姿は？」

「お・・・おお、良いんじゃない・・・ねえか（揺れなきやな）」

そう内心思いながら評価を与えていると女性陣の方も黄色い声援を上げていた。

そこにいたのは・・・ボーイッシュな感じをして普通に着こなしている

エル・ワトソンを見てキンジはこう思っていた。

「あいつ・・・はまりすぎてねえか？」

そう呟くと天草とカイズマスもこう答えた。

「遠山君もですか？僕もそう思っていました、それに彼の仕草には違和感を感じますしね。」

「お前もか、我もそうだ。何かよからぬこと考えなければ良いが。」

互いにそう言いながら見ているとダイアナがキンジの・・・耳元迄近づいて

こう言った。

「ご主人様お気を付けください、彼は何かを隠しております故。」

「・・・分かった、後で松葉達にも報告しておく。」

「では。」

そう言つて下がったが内心こうであった。

「(アアアアアアア！胸が背中につて柔らかくなって言うか何で0距離って

やめてくれヒスリソウナンダカラーー！！)」

家に帰って

そしてキンジとミシエラが家に帰るとその前に……ダイアナが立っていたのだ。

するとダイアナはキンジ達に向けて会釈してこう言った。

「お帰りなさいませご主人様、お食事の準備ですが中に入れてもらえませんかでしょうか？」

そう言うが正直な処キンジは……これ以上女の子が増えることに対して

拒絶したいところだが拒絶したら今度はあんなうるうると涙ぐんで詰め寄るであろう事が目に見えているがそれでも想っていると……ミシエラがこう答えた。

「分かった、家にいれるとは言っていたからな。入って良いぞ。」

「はあ！」

「仕方なかろう、騎士として一度言った事を取り消すわけにはいかないからな。」

「……分かった、入れ。」

キンジはそう言うて鍵を開けて中に入って言った後にダイアナも中に入った。

夜だがメニユーがこれ。

牛肉のホロホロ煮

パンプキンマフィン

これであった、恐らく昼の事を想定して軽めになっているのだなと思っている

ダイアナがこう答えた。

「この量ですが後は就寝ですし余計な体重増加は仕事に差し支えま
すので

この量なのです。」

それを聞いてキンジ達は成程など言って納得して食事した。

そして食事が終わるとキンジは銃の点検をしている中でダイアナは

自身の武器を出した。

アタツシケースから出てきたのは巨大な・・・大剣であった。

自身の身の丈の半分程度であろうがそれでも大型であるがために
どうやって使うんだと思っているとそれを軽々と持ってポンポン
と

手入れしていると風呂から上がったミシエラがこう言った。

「遠山、風呂はどうする？ダイアナを入れておくか？」

そう聞くとダイアナはこう答えた。

「いえ、私はメイドですので最後に致しますのでお先にどうぞ。」

そう言いながら手入れをするのを見てキンジは分かったと言って
立ち去って

ミシエラがこう言った。

「それじゃあ私は自分の部屋に入るがお前の部屋は既に出来てい
る、

部屋は一階の空き部屋だからそこで寝る事だ・・・遠山の部屋に間
違って

入ろうと考えるなよ?」

そう言うときダイアナは・・・暫くしてこう答えた。

「・・・畏まりました。」

「本当だろうか?」

その間を感じて疑うがまあ大丈夫だろうと思って上に上がって暫
くすると・・・ダイアナは立ち上がってこう言った。

「それではこちら準備と参りましょう。」

「ふ〜、いい湯だぜ。．．．少し寒いかな。」

そう言いながらキンジは窓を全開にして風呂に浸かっていた。

風呂の匂いでヒスったら洒落にならないが為こうやって窓を開けてから

風呂に入っているのだ、無論初代の様に体見せつけて性的興奮などないが

流石に寒いのもう匂いは無いだろうなと考えて窓を閉めて体を洗おうとして

風呂から出て向こうから．．．声が聞こえた。

「ご主人様、お湯加減は如何でございましょうか？」

「．．．ダイアナ、どうしたんだ？」

「いえ、お湯加減を聞きに来たのですが宜しいでしょうか？」

「ああ大丈夫だ、この位が丁度良いし何時もの事だから気にするな。」

そう言っているとダイアナが．．．裸になって扉を開けてこう言った。

「でしたらお体をお流しいたしましょう。」

「!!!」

そう言ったのと同時に入って来たので何でと思って速攻でもう一度

湯に体を浸からせるとダイアナはこう聞いた。

「どういたしましたかご主人様？」

そう言うときんじは．．．慌てながらこう聞いた。

「なななな何でお前入ってって服は!？」

「服などお風呂に入るのですしたら不要ですしそれに私はご主人様の忠実な僕として忠誠を誓っているが為ご主人様の身の回りのお世話をする事こそが私のお仕事で存在意義ですのでこの様な事粗末な事です。」

ではと言って体を洗おうとするとキンジは待て待てと言ってこう続けた。

「俺は自分で洗うから大丈夫だ！」

「駄目です私がお洗い致しますので。」

「だったら離してくれて何でこんなに力強いんだお前!!」

キンジはそう言いながら無理やり出そうとするダイアナに向けて
そう言うとうと

ダイアナはこう答えた。

「私こう見えても銃火器持ったこともありますのでこの位どうと言う事は
ありません。」

「イヤ大丈夫だって分かった分かったからってタオルぐらい巻かせ
ろ!?!」

キンジのそう言う声が聞こえる中でミシエラはと言うと・・・これ
だ。

「?何やら大声だが(*?▽?)フフフツ♪、これはこれで良い衣装
だ。」

そう言いながら鏡の前でロングのメイド衣装を着て喜んでいた。

ミシエラはこれまでの教育からこの様な少女趣味を持っており部
屋には

幾つかだがそういう類のがあるのだ(無論キンジはそんなこと知ら
ない)。

「ではお背中御流しいたします。」

「ああもう・・・勝手にしてくれ。」

そう言っているのだがダイアナはキンジの背中を洗っていた。

そして暫くするとダイアナは・・・とんでもない事を口にしたのだ。

「はい、今度は前を御流しいたしましょう。」

「いや待てそれはやめろって前に行こうとするなー！ー！！」

キンジがそう言ってダイアナから離れようとするるとダイアナはこう答えた。

「駄目です、僕として最後までやる事こそが仕事ですのでさあ御前を御向けに。」

「いやだから大丈夫だってこつちの話聞けー！！」

そう言ってもみくちやされてダイアナは・・・滑ってキンジ目掛けて

倒れたのだ。

そしてドシャと音がして暫くするとキンジがダイアナに向けてこう聞いた。

「おい大丈夫か？」

「アアハイ、申し訳ありませんご主人様・・・!!」

「おいどうしたって・・・!!!」

どうしたと思つてキンジはダイアナが・・・赤面しながらも凝視している方向を見て何だと思つているとそこには・・・

タオルが？がれてしまつて露わになつた自身の・・・

下の分身がそこにあつたのだ。

然もびくびくと上に向いておりそれを見ていたダイアナは赤面して・・・

こう言った。

「ご……コレガ殿方の……そうですね、これを沈めるのもまた僕としてのお仕事ですしそれに……お零れに預かるのもメイドとしての役割ですので

その……私初めてですのでもしかしたら不都合があるかもしれないませんがその……お沈め致します。」

そう言いながらダイアナは……キンジの下の分身に向けて

口を少し開け乍ら向かって行くのを見て本能的にヤバいと感じて

ダイアナの頭を掴んで離しながらこう言った。

「おいお前ナニしようとしているんだって嫌な予感がするっていうか
止めろお前!!」

「大丈夫ですご主人様! 私処女ですのでお後に私をそれでお子をするの……

ご寵愛を賜りたく」

「いや待て自分大事にしろって言うかこのSS 18禁になるからって

止まれーーー!!」

そう言いながら攻防がまたしばらく続いた。

因みにだが長風呂してしまっただがためにこの2人出た後に頭を抱えながら

キンジが自室に向かいダイアナは……キンジの自室に行こうとしていたので

頼むからやめてくれと命令でどうにか言う事聞かせて事なきを得たが当人は

こう思っていた。

「まさかと思うがこう言う生活が続くんじやないよな?」
そう思いながら眠りについたのだ。

起床

朝日が窓に差し込む今日この頃キンジはあの夜の事は夢だと思おうと

考えながら起きようとする布団の中に・・・ダイアナが入っていた。

「おはようございませうご主人様。」

「ドわああアアアアアアア!!」

キンジは自身の真正面にいるダイアナを見て驚いて布団から飛び出るとダイアナはこう言った。

「ご主人様お食事の用意ですが今日は私ではなくミシエラ様が作っておりますので出て下さいね、服は既に準備しておりますのでは。」
そう言っただけで出ていくのを見てキンジはポカーンとしながらこう呟いた。

「・・・もうちょつと普通に起こしてくれお願いだから。」

そう呟きながらキンジは制服に着替えた。

今日の朝食

白ご飯

大豆ハンバーグの甘酢かけ

豆腐とわかめの味噌汁

以上となっておりキンジ達が食事を終えて学校に着くと・・・

全員ダイアナの武偵制服を見ていた。

下乳の谷間が見えるようになっており上が見えないという点はキンジにとっては

救いのように感じるがどこかしらエロスを男性陣は感じていた。

そしてキンジの隣にいますと言う事で男子の殆どが血の涙を流している

羨ましがっていた。

そしてキンジはアサルトの講義室で『戦略Ⅰ』

(これはリーダーになった人間が受ける必須科目である。)を受講して帰ろうと

思っていると・・・門の前でダイアナとミシエラが待っていた。

「・・・何でいるんだ？」

そう聞くとミシエラがこう答えた。

「ああ簡単だ、こいつ一人だと何するのか分からんからな。」

「・・・お前風呂でのあれ知っているのか？」

「いや、まあやりそうだとは思っていたな。」

「じゃあ助けるよ！仲間だろうが!？」

「済まないが流石に風呂は無理だから自分で何とかしろ。」

「見捨てるんかよ!!」

何だか傍から見たら夫婦漫才に見えなくもないがそんな中で帰ろうとすると・・・コネクトの裏口から数人の女子がキャツキャツと笑いながら出てきたのだ、然も持っていた箒を鉄柵の向こうにある人工林に投げ込むと一人がこう言った。

「『なつちー』、後は宜しくねー!」

そう言つて女子たちは商店区目掛けて行つてしまった。

「・・・誰かいるのか？」

キンジはそう言つてがさごそと音がする方向に向けて歩いて目を凝らして

こう聞いた。

「・・・中空知か？」

「!!」

その声を聴いて少女『中空知』が驚いてびくびくつと慌てているかのように

身震いしながらこう言った。

「そそそその声ハハハハと、おと、とおやま、おとこ、おとこやま君!」

「遠山だつて言うかお前こんな所で一人で何やってんだ？掃除にしちやあ

お前一人つてどう言う事なんだ？」

そう聞くと『中空知』はこう答えた。

「は、はい、でも、その、私、他の当番の人達に、頼まれちゃったので。」

『『中空知』、それは頼まれたではなく押し付けられたの間違いではないのか?』

「全くですね、掃除の心得を全く理解していないあのお方たちの為に

貴方が犠牲になることはありませんよ。」

ミシエラとダイアナが揃ってそう言うときンジは捨てられていた箒を一本取るとこう言った。

「手伝うぞ、一人だと夜中になっちまいそうだな。」

「あ、あ、別に、いいんで・・・ひひっく、ひっく、ひっくー!」

「しやつくりか其れ?」

キンジは『中空知』のそれを見て何緊張してんだよと思いつつながらこう言った。

「手伝うからお前はゴミ袋を頼むぞ。」

「ならば私もビニール袋の方に行って拾うのを手伝おう、手は多い方が良い。」

「でしたら掃除は私が、メイドとしての技をご覧いただきましよう。」

そう言ってそれぞれ掃除を始めている中でミシエラは『中空知』に向けて

こう聞いた。

「そう言えばお前眼鏡はどうしたんだ?落としたのか?」

そう聞くと『中空知』はこう答えた。

「あ、あ、眼鏡。これはその、じゅ、授業で。不調でして、顔にボールが、

えっと、体育の授業で、バレーボールが、ぶつけられちゃって、眼鏡が、

不調でして、その」

「ああ分かった、つまるところがバレーボールが顔に当たって今眼鏡が

無いんだな。」

それを聞いて『中空知』はごくごくと頷くとこう聞いた。

「お前金はあるだろう？予備の眼鏡位持っていないのか？」

そう聞くと『中空知』はこう返した。

「ええと、その、ほほほ欲しい、機材、あつて、それ、で」

「金欠と言う訳か、遠山頼みたいことがあるのだが」

ミシエラがそう言うときんじはこう答えた。

「分かった、これもなんかの縁だし休みに買いに付き合つてやるよ。」

「つつつつつ、つき、（ノドー。）あう。。。あわわわわわわわわわわわわわ。」

「お前本当に一度落ち着けて終わらないぞ掃除。」

キンジはそう言いながらも掃除を終わらせた。

そして帰ろうとするときんじはキンジに向けてこう言った。

「ああそうだ、松葉に依頼していた事があつたから私は女子寮に行くのだが・・・一緒に来るか？『中空知』と相部屋だぞ。」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ俺は良いkがダイアナはドウダ？」

そう聞くとダイアナはこう答えた。

「無論私は何時でもご主人様と共にで。」

そう言うときんじが「中空知」が・・・更に慌ててこう言った。

「ごごごごごごごごご主人様、それ、つまり、そういう、ええ、2人、は、

同居、まさか、この、人も!？」

「はいそうです、ご主人様のいる所に私は何時でもおられますから。」

ダイアナはそう答え乍ら微笑むとひええエエエエと言つて『中空知』は

こう続けた。

「そそそそれって、つまり、そういう、関係、もう、既に、にににに肉体、関係」

「いや待て『中空知』！ちよつと落ち着けて!?!」
キンジはそれを聞いてここで言うのは不味いと考えて『中空知』ヲ
落ち着かせようと更に時間を食ってしまった。

依頼

何とか落ち着かせた中空知に対して当の本人は未だ赤面であるがそんな事

もう知らねえと言わんばかりについて行く中でキンジはミシエラに向けて

こう聞いた。

「それにしても何調べてたんだお前？松葉に頼るってどんなことを??」

キンジがそう聞くとミシエラはこう答えた。

「うむ、私はエル・ワトソンが怪しいと感じてな。何故貴様に対してあそこ迄敵対心を露わにするのが気になって調べさせたんだ。」

そう言っていると中空知の案内で女子寮に入って部屋に入るとそこはまさに・・・魔窟であった。

部屋の中はその殆どが音響機械であったのだ、ラックに積まれているのは

無数のスピーカーや高そうなアンプが黒い机を半円形に囲んでいた。

黒塗りにしている防音壁には色とりどりのヘッドホンがぶら下がっており

さらに進むとラジオ局のミキサ―室の様な部屋には古今東西の通信機が

整然と並んでおり処理用のPCや無線機だけではなく50機種もの携帯電話が

置かれていた。

アクセスランプが至る所でピカピカ点滅しておりそんな中で窓際に双葉の鉢・・・小さなプラカードでこう書かれていた。

『トオヤマクン』と書かれたそれを見た瞬間に中空知は・・・ビュンと

今までにはない程の早業でヘッドホンの空き箱にそれを隠すかのように入れると

中空知は慌ててこう言った。

「ちちちち違います！わ、私、しよ、植物に話しかけたりとかはしていません！！そそそそこ迄孤独じゃありませんよ！わ、それとそっちの小部屋には

何もありません！！不測の事態に備えて買いだめした、ふふふ不埒な下着とか、

お酒はありません!？」

それを聞いてキンジ達はこう思っていた。

「「(ああ、こいつ【この人】隠し事とか以前に犯罪とかそういうのに向いていないな【いなさそうですなえ】)」「

そう思いながら松葉の部屋はと聞くと中空知はこう答えた。

「松葉さんは、そちら、です」

そう言つてぴつと指さした・・・【松葉の部屋】と書かれた扉が見えたので

一応ながらノックしてこう言った。

「おおい松葉ー、俺だキンジだけど。」

『き、キンジ!？』

部屋の奥から何やらがしゃんとかどたどたとか音がするよう聞こえるなあと思つていると更に声が聞こえた。

『アアアアアアア!!この間買ったばかりの漫画がコーラまみれにー!？』

後で弁償させてやるー!？」

「おれ・・・悪くないよな。」

キンジはそう言いながら暫くすると・・・扉が開いた、内側からガチャガチャと音を立てることから間違はなく内側に鍵があるんだなと確信すると

開けた先にいたのは・・・はあはあはあと荒く息を吐いている・・・制服姿の・・・後ろにある脱ぎっぱなしのジャージからして着替えたんだなと思つていると松葉は3人に向けてこう言った。

「・・・入り・・・なさい・・・よね。」

「お・・・おお。」

キンジは松葉から放たれるその気迫に少しびびったりしながらも大人しくついて行った。

松葉の部屋の中は中空知とは違った意味で同じであった、アニメのDVDに

ゲーム機、フィギュアなど多種多様な物が棚や箱の中にぎっしりと入っており

更には机の上には報告書なのであろう、紙の束が乱立していた。

然もその隣には漫画が所狭しと棚積みされていて専門店なのかと言わんばかりの状況となっていた。

そして松葉は小さな冷蔵庫からジュースを取り出すとキンジ達に向けて

こう聞いた。

「それで？私に何の用ヨ？」

松葉はキンジに向けて少し赤面しながらぶっきらぼうにそう聞くとキンジはこう答えた。

「いや、俺じゃなくてミシエラ何だがお前何か頼まれたんだろ？」

そう聞くとあああれねと言って松葉は机から資料を取り出すとミシエラに手渡してこう言った。

「はいこれ、依頼料はいつも通りに送っていればそれで良いから。それとだけどアンタ何であるの転入生に向けて調べさせてツて・・・アンタまさかああ言う」

「生憎だがそう言う物ではない、それに私はああ言う回りくどいやり方をする

手合いなどこちらから御免だ。」

そう言ってミシエラは資料を見てみると感心するかの様子でこう言った。

「凄いな、たった数日でここ迄調べられるとは優秀なんだな。」

「当たり前でしょう？うちじゃあこれくらいできなくてどうするのよ。」

そう言いながら海苔せんべいを食べようとするミシエラはある一文を見て

こう言った。

『『西欧忍者（ヴェーン）』、これが奴の2つ名って・・・この部分は合っているのか？』

「ビンゴよ、何だったらアイツの戸籍登録書と学籍登録書

もう一度ハツキングを見せてあげるわよ。」

それを聞くと一体何なんだとキンジが聞くとミシエラはこう答えた。

「とんでもない奴だ、これを見ろ遠山。」

ミシエラはそう言ってキンジに資料のある部分に指さすと

キンジはそれを見て・・・目を大きく見開いて驚いていた。

一体何でとそう思っていると・・・松葉はパソコンのから音が鳴るのを聞いて

すぐ様に飛びついて調べるところ言った。

「エル・ワトソンが動いたわよ、場所は台場1―9―1。ホテル日航東京3階にある

コンチネンタルレストラン『テラス・オン・ザ・ベイ』の個室を使っているわね？どうする？ウチの使っているEXカーディオイドレーザーマイクなら音声迄

モニタリングできるけど？」

それを聞いて科学すげえなとキンジはそう思っているとミシエラはこう答えた。

「いや、少し待とう。奴が動いたらもう一度教えてくれ、
奴には聞かなければならない事が出来た。」
ミシエラはそう言っつて資料を見せながら動きを見計らっていた。

いざスカイツリー

そして暫くすると松葉がこう言った。

「アリアとワトソンが動いたわ、建造物の反射音を再補足。

2人は車で移動開始、都道482号線を北東で移動速度は56^キ。
未だ速度継続中。」

「北東ともなると行先は何処なんだ？」

キンジがそう呟くとダイアナが何やら携帯を操作すると地図情報と共に行先を

ピックアップした映像を見せた。

「恐らくですがこのまま進めば青海線となります。」

「となると電車に乗り継ぐ・・・いや、そうなるとしても

何の目的なんだになりそうだ。」

そう言っているると松葉はワトソンが運転する車の進路からとある場所の一覧を見せた。

「二応アイツが行きそうな場所をピックアップしておいたけど車の追跡は

続行させるから後は頼むわよ。」

そう言うのとそれと言ってキンジに向けてこう言った。

「アンタ気を付けなさいよ、何時もアンタ危険な事に巻き込まれてるんだから！」

「おお、分かっている。じゃあ行ってくるぜ。」

「行ってきなさい。」

キンジと松葉は互いに短い言葉であるがそれだけ信頼していると言う

証拠であることを認識したミシエラとダイアナは少しむっつとしていた。

そしてキンジとミシエラがダイアナが運転している車において

まずはミシエラがこう切り出した。

「遠山、これは私が松葉に頼んで調べて貰ったワトソンの経歴だが奴は矢張り『イ・ウー』だと推測されるだろうな。それに奴め、正々堂々をしない理由が」

「これとは何とも情けないな。」

「まあ武偵校じゃあこう言うのは幾つかあるし俺も一年の頃は一人か二人学年にいたから慣れてはいるが何故奴が偽ってまで神崎って言う」

「歩く爆弾に言い寄るかだな。」

全く意味わからんぞと言っていると恐らくだがとミシエラはこう答えた。

「奴はアリアの信頼を勝ち得ようとしているのではないか？」

「信用だと？」

「ああそうだ、あそこで自分がアリアの母親を華麗に助けると言う功績を」

「見せつけることでアリアの信頼を勝ち取り自身をパートナーだと認めさせることであろうがその目論見は我々の手で台無しになったんだ。」

「成程な、だからこそ俺達を目の敵にしていたのか。」

「ああ、全くいけすかん奴だ。貴族と言うのであれば正々堂々と立ち向かえと思いたいな本当に。」

「そう言っていると今度はダイアナがこう切り出した。」

「其れとですが『M I 6』からの報告ですが如何やら『リバティー・メイスン』はグレナダ側に着くと言う情報が入りましたのでこちらはデインとして」

「行動する事が決まりましたのでご報告させて貰います。」

「ダイアナがそう言っているとキングジの携帯から松葉がかけてきたのだ。」

「才才俺だ、そっちは何か進展あったのか？こっちは今482号線に向かっている。」

『OK、こつちからの報告なんだけどアイツら汐留JCTを通って行っただけ』

そこからは不明ヨ。今そつちから監視カメラをハッキングしてアイツの居場所を

探知しているからもう少し時間頂戴。』

「オオ分かった、じゃあこつちは位置を特定してみるから。」

じゃあなと言って通話を切るとダイアナがこう言った。

「そこからですと押上に行きそうですね。」

「押上・・・もしアイツがヒルダと会おうとしたら何処だと思う?」

「そうだな・・・出来るだけ人が無くて出会いやすい場所。」

「それでいて気づかれなく且つ隠れやすい場所となりますと。」

そう言つて暫く探していると松葉から再度連絡が来た。

「おお松葉、それで分かったか場所?」

『ええ、近くのコンビニの防犯カメラからだけ真つすぐ行つて

その先にあるのは・・・『東京スカイツリー』よ。』

「東京スカイツリー・・・だと?」

キンジがそう言うのとミシエラとダイアナが目を大きく見開いて地図を見ると

コース的には確かにここだと確信すると車は猛スピードで向かつて行つた。

「まさかここだとはな。」

「ああ、考えてみれば隠れやすくて人気など今はない。」

「それにまさかこんな所に来るなんて誰も考えつかないでしょうしね。」

キンジ達はそう言つて駐車場にあるワトソンの車を見つけてキン

ジ達は

ここだなと確信してキンジが金網を超えて入って中から
ミシエラ達を入れようとする・・・背後から聞き慣れた声が聞こ
えた。

「おや、遠山君にジャンヌさんにドーンさん。どうしたのですか
ここに何か用でも？」

「!!・・・ナンダ天草か。」

「何だとは酷いですね遠山君。」

天草がそう言っつて現れると何やら大きな花束を持って現れたのだ。

「何だその花束？」

そう聞くと天草はそれを見せつけてこう答えた。

「ええ、理子さんから頼まれましてお届けしに来たんですよこちら
に。」

それで皆さんは何か？」

そう聞くとキンジは事のあらましを説明すると天草はこう言った。

「成程そうですね、となれば理子さんが頼んだこれは・・・

そういう意味でしたか。」

そう言っつて自分しか分からないナニカを感じ取って笑みを浮かべ
ると

天草はこう言った。

「でしたら参りましょう、この戦いは如何やら僕たちにとって
因縁深そうですね。」

そう言っつとキンジは全員に向けてこう言った。

「よし・・・行くぞ。」

「「オオオオオオ!!」」

そう言っつて全員武器を構えて向かって行った。

戦いの場は天空

そしてキンジ達は工事用の簡易エレベーターを乗り継ぎながら上へと向かって行って見えたのは・・・まるで航空写真から見る東東京の夜景であった。

「・・・綺麗だな。」

「ああ、この様な時ではなくちゃんと完成してから来たかったな。」キンジの言葉にミシエラがそう言つて眺めていると柱の一本に横線の隣に

『350m』と言う数字が書かれていた第一展望台に着くとキンジ達は

すぐ様に侵入した。

すると携帯電話から着信が来てみて見ると松葉であったので出て見て

状況を説明した。

『成程ね、分かったわ。こっちはあんた達が何しているのかを今からドローンで飛ばして見てみるから安心して暴れなさいって言うか

まさか信一朗がいるって言うのはありがたいわね。』

「ああそうだな、これからワトソンと戦闘する事となるが気を付けておくよ。」

『ええ、気を付けなさいよ。』

松葉がそう言つて電話を切るとキンジは・・・何処にいるか分からないが

ワトソンに向けてこう言った。

「ワトソン、何でお前が神崎と組もうとしているのか理解できないが

一つ言うとしりゃあお前は最低な奴だ。何せ神崎の母親を

牢屋にぶち込む様な連中の仲間だったもんなお前、正直に言えば間違いない

お前は独房行だから姑息な手を使って・・・ヒルダって言う女と手

を組んで

あんな三文芝居で逸らそうと考えたようだが俺達がそれを止めちまったからって

理由で俺を付け狙ってたようだが・・・随分薄汚いやり方でやるんだなあ

イギリスの貴族様はよ!!」

「・・・何しに来た。」

キンジの言葉を聞いて左前方からワトソンが現れたのだ、如何やら先ほどの言葉で挑発に乗ってきたようだがワトソンはこう続けた。

「何故ここに居るんだ？君はアリアとは関係ないはずだ。」

「ああそうだな関係ねえよ、俺からすればアイツも俺を目の敵にするから

正直な所うんざりしてたんだがな・・・手前のやり方が気に食わなくて

ここまで来たんだよ。」

文句あるかと言うとミシエラがこう言った。

「貴様は遠山を敵視しているがそれだけではあるまい・・・」

「・・・羨ましいのだからこいつが。」

「何・・・？」

「お前と遠山とでは違うからな、何せ・・・嘘偽りの強襲で人気を取

ろうとする元イ・ウーとシャーロックホームズを討ち取った男とでは格が違うからな。」

「君は……僕に恨みでもあるのか……!!」

ワトソンはミシエラの言葉を聞いて怒りの眼で睨んでいるとふんと鼻息で

一蹴してこう続けた。

「それにお前とアリアは婚約者だと言っているようだがそれも出来ない、

何せ貴様は……

……『転装生（チエンジ）』何だからな。」

「!!」

それを聞いてワトソンは驚いた表情でミシエラを見ているがミ

シエラは

こう続けた。

「お前の事は武偵高の生徒記録に理由も記載されていたからな、それを見る事など容易い事だ。それを引いたとしてもだ、貴族でありながら

嘘をついて自分の方に向けさせようとするその気概に騎士として腹立たしいと

思ったままだ!？」

ミシエラはそう言いながら構えているとダイアナがこう言った。

「貴方方『リバティイ・メイスン』がグレナダに帰属する事になると言う噂は

既に『MI6』がサーチ済みです、何が目的か分かりませんが
「デインンとして看過する訳にはいきません。」

そう言つてダイアナは背中から大剣を抜いて構えるとワトソン
は・・・

こう呟いた。

「・・・5個。」

「「「？」」」

それを聞いて何だと思つてしているとワトソンはこう続けた。

「グレナダが5個、デインンは2個。これはアリアの殻金の保有し
ている数だ。」

そう言いながらワトソンの方から・・・プシュと言う音が聞こえた。

「(多分無針注射の音だ、そしてこの状況で使われたのは間違いな
く・・・

『ネビュラ』か?)」

ミシエラは先ほどの小さい音から薬の用途迄考えたのだ、『ネビユ
ラ』とは

日本では禁止されている武偵用の中枢神経刺激薬で一時的に集中
力が増し、

夜目も効くようになる強襲専用のドラッグで使用後の副作用とし
ては

頭痛や吐き気、そして一時的な近視状態に陥るのだ。

恐らく自分達を殺す気であるだろうと確信したミシエラは万が一
に備えて

使用したのだなと思つてしているとワトソンはこう続けた。

「そうさ、僕は君が羨ましかった。男である事も、君が持っている才
能も

何もかも全部がね。だが僕はアリアを守るためにグレナダに加
わつて欲しいと

思つていたんだけど当の本人は・・・断られたよ、

『ママを牢獄に送った連中の仲間になるなんて死んでもならないわ!!』と

言われてね。仕方なく薬を使って眠らせてここに連れて来たんだけど

君達が来たことは計算外だったからね……本気で潰してもらおうよ。」
そう言って闇の中から現れたのは……完全装備しているワトソンである。

黒一色の防弾・防刃ベスト、脚には鋼鉄仕込みのコンバットブーツ、背中には長いマントの様な防弾マントを纏っていた。

まさに完全にキンジ対策だと分かるかのような見た目であるとキンジに向けてワトソンはこう言った。

「イギリスの武偵は自衛のための殺人は許可されている、そして僕は治外法権を認められた王室付きの武偵。つまり君をこの国で殺したとしても罪に問われることは無い。」

「はー！流石はイギリスの貴族様だな、手前の言うとおりにならねえ奴は

殺すなんて手前らの頭は中世で時が止まってんじゃねえのかよ！」

「……これ以上の無礼は僕でも我慢できないぞ遠山キンジ……!!」

「無礼だ？手前らが俺達に向けて色々やって来たじゃねえか!？」

キンジとワトソンは売り言葉に買い言葉で喧嘩腰になっていると全員が武器を構えるとワトソンはキンジに向けてこう言った。

「遠山キンジ、生糸一対一で決闘を申し」

「悪いが悪党の言葉は信用ならなくてな……フルボッコさせて貰うぞ!!」

そう言ってキンジは鎧竜剣を持ってワトソン仁挑みかかったと同時に

全員が左右から攻撃してきた。

そしてワトソンが構えたとその時が……戦闘の始まりだ。

そして屋上

「始まりました・・・ヒルダ様。」

銀髪の少女がそう言うのとヒルダはそれを聞いてそうと言うと・・・
今だ寝ているアリアに向けてこう言った。

「さあ起きなさいアリア、貴方と遠山キンジと天草信一朗をこの手
で・・・

殺しておきますわお父様の仇でしてヨ！」

おほほほほほほと高笑いするヒルダがそこにいた。

闘い終わりに

まず初めに攻撃を始めたのはワトソン、足音もなく駆けてきて野戦用の漆黒の

ククリナイフで右手首・・・拳銃を持っている腕ごと斬り落とそうとしたが

キンジはそれに対して・・・態と拳銃を棄てた。

「!?」

それを見て一瞬だが目を丸くしたワトソンであったがキンジは

その隙に左手にある鎧竜剣を使ってククリナイフを砕こうとして振り上げて・・・弾き飛ばした。

「ちいー!!」

「その程度かワトソン!」

キンジはそう言って更にもう一度攻撃を与えよとするとワトソンは

ヤバいと感じて後ろに下がってスリーブガンの要領でSIG S A U T E R P 2 2 6 Rを出したワトソンが即座に連射するもキンジは正直すぎるのであろう鎧竜剣と・・・

銃を棄てた際にこっそりと出したバタフライナイフと2つ使って銃弾を・・・

斬り裂いたのだ。

『銃弾斬（スラツシユ）』

キンジが新たに手に入れた技、それは剣を使って銃弾を切裂くと言

う
また人外が使うかのような技である。

それを見たワトソンは嘘だろと思っていると横からミシエラが銃

を
剣で斬り裂いた。

「ちいー!」

ワトソンはそれを見て慌てていると左から天草が腹部目掛けて一撃を与えた。

「ぐう！」

「やはり防弾チョッキでしたか、硬いですが難度は低そうですね。」
それを見たワトソンはキンジに向けてこう言った。

「汚いな君は、男ならば一対一はしないのかね？」

「俺からすりやお前みたいに演技しなけりやあ

信用を得られないような奴に言われたくねえな!!」

「それに貴方はディーンの敵ですので攻撃するのは当たり前です。」

そして背後からダイアナが大剣で斬る落そうとした瞬間に……

ワトソンは口からぷつと何かを噴出した。

「!!」

ダイアナは左目の瞼に直撃するとダイアナは一端離れて小さな針を抜くが

その隙を突いてワトソンはダイアナの左目に体を向けて攻撃しようとして……

足元に何か当たる音がしたのでワンステップ下がった。

「大丈夫ダイアナ！」

松葉が……キンジが棄てたベレッタで攻撃したのだ。

「あの女……!!」

ワトソンはそれを見て憎しみの様な表情で松葉を睨むが……

右からキンジが……剣の柄でワトソンの顔を殴った。

「あ……が！」

「悪いが薬使った程度じゃあ俺達は倒せねえぞ!!」

キンジがそう言ってワトソンをよろめかせた瞬間にミシエラが前面に現れて

こう言った。

「これで終わりだ!!」

そう言つて氷を出してワトソンの足を凍らせると其の儘・・・殴り飛ばした。

「がアアアア!!」

そしてその儘ワトソンは・・・倒れていった。

屋上

「如何やらワトソンは負けました。」

「そう、なら始末しなさい。どうせ全てが終わつたら処分するつもりでしたし。」

ヒルダがそう言つて・・・少女を送り出した。

「そうか・・・僕は負けたのか。」

「ああそうだ、何故お前はそこ迄アリアに固執するんだ？お前は奴を使つて何する気なんだ。」

キンジがそう聞くと柱で繋がれたワトソンはぼそぼそとこう答えた。

自分とアリアとの婚約は先々代の当主が・・・

つまりシャーロックホームズ本人との密約で婚約したが冬に生まれたのが

自分であり女性であると同時にホームズ家にはその事を内緒にしたこと。

そしてアリアとの出会いから今までを話した。

どう考えてもアリアが領かない事から強硬手段に打って出たが今に至る事。

「養子とかはしなかったのか？それか性転換の手術とかは？」

キンジがそう聞くと天草がこう答えた。

「彼女はキリスト教です、所々でその様な所作がありました但理由が

それでしたら納得です。キリスト教は自然に従う事を是としているので

性転換は悪手なんでしょう。」

「そして結社では養子は駄目だから僕は男として育てられた。」

ワトソンがそう言うところ続けた。

「僕は負けた、アリアはこの上だが強敵だぞヒルダは。君達では危ういだろうな。」

まあそれはそれでいいがなとそう呟くとキンジはワトソンに向けてこう聞いた。

「それでだがダイアナに何をした？」

「ああ、彼女には麻痺毒を使ったんだ。君に対する攻撃として

使おうとしたのだが・・・僕は君が羨ましいよ。」

「？」

キンジは何だと思っているとワトソンはこう続けた。

「君にはこれほど強い仲間がいる、そして君は彼らに対する信頼に
応えている。本当に僕が欲しい物を全部持っている・・・妬ましいね。」

ワトソンがそう呟くところ言った。

「僕の懐には解毒剤がある、彼女に与えてくれ。それとだが

彼女の近くにいる女の子についてだが」

そう言いかけた瞬間にワトソンの頭部から・・・何か貫いて

出血するのが見えた。

パン！と後から音がして全員がその方向に目を向けるとその瞬間に・・・

巨大な光球がワトソンを襲って・・・光が全員を襲った。

光

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」
その光を見て全員が悲鳴を上げながら吹き飛ばされていった。

「ああ．．．クソ、完全に目をやられた．．．皆．．．大丈夫か．．．？」

キンジがそう言って全員は．．．こう答えた。

「こちらも．．．完全にやられました．．．気配は感じますが臆気で。天草がそう言いながら目元をマッサージしていると他の面々もこう答えた。

「大丈夫です、視界は良好。左目だけですが未だ戦えます。」

「私は．．．何とか行ける、少し休めば見えやすくなる。」

ダイアナ、ジャンヌがそう答えるとキンジはこう呟いた。

「奴らはどつちから撃つたと思う?」

「恐らくですが．．．近くの階段から撃つたと思いますが追撃しないと考えると

既に撤退した後かと思えます、今動けるのは完全にもなると全滅です。」

「．．．今動けるのはダイアナだけか、じゃあ戦闘力は半減しているって事で良いんだな?」

キンジが天草に向けてそう聞くとダイアナはこう答えた。

「申し訳ございませんご主人様、ですが必ずお役に立って御覧に入れます。」

「無茶するな、怪我人なんだって．．．ワトソンはどうなった?」

薬持っていたよなと聞くとダイアナはこう答えた。

「ワトソンは．．．死んでおります、薬はありましたが一本が精々で後は

中枢神経刺激薬が一つ。」

「お前が2つとも持つてる、薬は今のうちに使っとけ。ワトソンの死因は

あの銃声か？」

キンジは考えられる中での死因を考えて聞くとダイアナはこう答えた。

「いえ、そちらは掠ったと言うよりも後頭部に傷が入るかのよう
細く入っておいりましてそこから血管経由で心臓目掛けて電流を
通して

ショック死したと言う所ですね。」

「其れとですが恐らく脳が死んでいますね、それほどの電流ですと
内部で

高圧電流を浴びて其の儘高熱によって脳内の水が沸騰したんで
しょう。」

其れしか考えられませんと天草の言葉を聞いてキンジはそうか
と・・・

力なく答えた。

敵だったとはいえ死なせたくはなかったとそう思っているのだ、
するとダイアナはこう答えた。

「おまけに1対2ですがそれでもやらなければなりませんので・・・
参ります」

そう言っ立ち上がろうとするとキンジはダイアナにある物を渡
そうとして

こう言った。

「待てダイアナ・・・渡すものがある。」

「!!それは何でございましょうかご主人様!もしよろしければ其の
儘

ダイアナをご主人様の側妾として」

「いや待てやめろって言うか何だか分からないが何だろうな・・・
嫌な予感がつて・・・誰かが来る!」

「!!!!」

それを聞いて全員が構えると下から・・・カンカンカンカンと

音がしてきたのだ。

一体誰だと思つて構えていると・・・聞き慣れた声が聞こえた。

「ええと・・・皆さん大丈夫でしょうか？」

「・・・ナンダ詠か。」

「何だつて何ですかそれは!？」

詠が来たのを聞いてそう答えたのに対して詠は酷くないですかと
そう答えた。

「それで・・・お前何でここに？」

キンジがそう聞くと詠はキンジに対してこう答えた。

「はい、松葉さんに頼まれてここに来たんですがここに来た途
端に

雷が落ちた様な音が聞こえたので来てみればこの状況だったんで
すが・・・

一体何が？」

詠がそう聞いたのでキンジが答えると詠はこう返した。

「でしたら私も向かいますよ、戦力的にはこれで互角です。」

「それに薬も効いてきましたので今なら全力で行けます。」

ダイアナがそう答えるとキンジは改めてと言つてある物を手渡し
た。

「俺が持っているナイフはお前が、デザートイーグルは詠、

それと松葉にはベレッタを渡しておくから・・・死ぬなよ。」

「でしたらこちらは剣を一本ずつ渡しておきますので。」

「私からは魔力を幾つか出しておく、万が一に備えて使え。」

天草、ジャンヌがそう答えると3人はそれを持って……上に向かって行った。

「ねえさ……撃つて……来ないわよね？」

松葉が半ばビビりながら歩くのを聞いてダイアナはこう答えた。

「恐らくですがタイムラグがあるのでしよう、それとですが松葉さん。

あのカメラ見てどう思いますか？」

ダイアナがそう聞いて目の前にあるカメラを見て……こう答えた。

「あれって作業用じゃないわ、広角カメラだしよく見たら埃とか汚れが無いわ。」

「でしたらあれは敵の……と言う事ですね。」

「成程、あれで私達の戦いを見ていたのでしょうか。そしてワトソンの敗北と

同時に行動を起こして彼女を口封じで殺した。」

そんな所でしょうねとそう言いながら450m迄上がりと言う看板から更に上に

上がって行って第二展望台に着くとそこにあつたのは……柩であつた。

何でと思っているとダイアナは何かを感じて……こう言った。

「伏せて下さい。」

そう言つて全員伏せると松葉の頭があつた個所に銃弾が……届いたのだ。

「ひいえ。」

「あのままですと松葉さんが危なかつたですね。」

詠がそう言っていると・・・声が聞こえた。

「よく来たわね、歓迎するわ。」
そう言って現れたのは・・・ヒルダであった。

屋上。

「お久しぶりヒルダ、貴方ともう一人そこにいるスナイパーさんが全戦力だと

思つて良さそうですね。」

ダイアナはそう言いながら大剣を構えるとヒルダは笑いながらこう答えた。

「あら気が早いわね、全く泥臭い事を平気でするのね貴方達は。」

「やっぱり人間は美しくないわね。」

「美しくない・・・ですか?」

詠がそう呟くとヒルダはこう続けた。

「ええそうよ、お前達人間が名もなき雑草なら私達吸血鬼は手入れの行き届いた

温室の薔薇そのものなのよ。点が与えたデザインからすでに違つて」

「へえ、その割にはアンタのパパはキンジや信一郎に負けた事はどう思うのかしら?」

「・・・」

「何も言えないようね、アンタら吸血鬼なんて人間がいなけりや只の蝙蝠人間・・・それにあんたの雷撃なんて対策を講じていれば一つや二つは余裕で」

「黙れ」

「!!!」

それを聞いて全員が何故だかナニカがぞわつとする感触を覚えているとヒルダは

松葉に向けてこう言った。

「お父様だけなら未だしも私を……この私を侮辱するとは良い度胸ね貴方は……クリス！その女は殺さないで私の前に引きつづてきなさい!!これ以上伴い屈辱を与えて殺してやりたいから!!」

「……分かりました。」

そう……クリスの声が聞こえた瞬間に放とうとした瞬間に……ナニカが

上空からクリス目掛けて突き刺したのだ。

それは……インクルシオの槍であった。

「!!!」

それを見て松葉は……こう言った。

「遅いじゃないの……キンジ」

「悪い、ちよつと遅れちまった。」

そう言つて現れたのはインクルシオを纏つたキンジと……隣に立っている

メーヤの姿がそこにあつた。

「メーヤさん、当たつたか?」

「いえ、ですがスナイパーライフルは破壊出来ましたのでこれで戦鬪力は

半減ですが目が見えない中よく当てられましたね。流石カナさんの弟様!!」

「ああ・・・ありがとうな。」

それを聞いてキンジは正体を明かすのは駄目だなど思っていると
メーヤの隣で・・・視界が回復し始めている天草がこう言った。

「理子さんは何処かにいるはずです、僕は彼女を」

「シー君見つけた♪」

「!!!」

理子の声を聴いて全員が背後を振り向いた瞬間に理子が天草目掛
けて

目にも止まらぬ速さでやって来たのでジャンヌが天草の後ろにつ
いて

受け止めようとするも一緒に吹き飛ばされていった。

「やあやあやあシー君、理子に会いに来てくれたんだね。嬉しいよ
本当に。」

「こちらこそ・・・まさか貴方もヒルダに付くとは厄介ですね本当
に。」

「・・・まあねえ、りこりんこう見えてヒルダとは仲良かったか」

「嘘ですね。」

天草がそう言うところ続けた。

「貴方と彼女がどう言う関係か知りませんがこう見えて私は神父ですの

人の相談役とかで聞くうちにその人がどういう悩みを持っているのか分かるようになっていましたがこうやって目を封じられたおかげで貴方の・・・心の声ですら

聞けるようになりました。」

「へえ・・・じゃあ今理子は何考えているのか分かるって訳?」

何なのさと聞くと天草はこう答えた。

「助けて・・・そう聞こえます。」

「へえ・・・そうなんだ。」

理子がそう言った瞬間に目を細めて・・・こう言った。

「じゃあ・・・始めよつかシー君。」

そう言つて髪の毛を動かして・・・カドラになると天草は腰に差し
ている

剣の一本を抜くとジャンヌに向けてこう言った。

「私が理子さんを止めて見せますから援護の方を」

「任せろ、互いに視界が未だ完全と言う訳ではないからな。直感で
やるぞ。」

「ええ、それでは行きましょう。」

そう言つて互いに獲物を出して構えると・・・戦闘が始まった。

そしてキンジとメーヤはと言うと……。

「降りたが大丈夫かメーヤさん？」

「はいキンジサン、こちらは大丈夫です。」

キンジはメーヤを抱きかかえて降りた後にクリスの居場所を探っている……インクルシオが何かを感じてその方向に目を向けたと同時に視界が

まるで赤外線センサーの様に赤くなってクリスの居場所が特定できたのだ。

「インクルシオの進化が此処までになるなんてな……こいつは助かるぜ。」

キンジはそう言ってクリスのいる方向に目を向けるとこう言った。

「お前が『雪音クリス』か？」

「……貴方は一体何ですか？」

クリスがそう聞くとキンジはこう答えた。

「お前の事はメーヤさんから聞いた、お前の家族は昔テロリストに殺されたことを。そしてお前は色々あってヒルダに買われたことを。」

そう言うくとクリスはこう答えた。

「はい……私の父と母は有名な音楽家で世界中を回って……ある時

南米に行きました。が当時政治が不安定で或る時に私達がいたホテルにテロリストが押しかけてきて……ママをパパの前で犯して。パパをママの前で殴り殺して。ママと私は其の儘連れ攫われて……そしてブラドに……ひぐ。」

クリスはその時の実験を思い出して泣き始めるとメーヤはこう言った。

「ですが何故です、貴方でしたら逃げる事なんて」

「無理です……私……怖くって……それに『イ・ウー』について

もヒルダに見られて・・・逆らうとまた・・・怖くて・・・!!」
そう言つて震えているとだからと言つてポケットから・・・見慣れ
た宝石が

現れるとキンジは何だと思つた瞬間に・・・歌が聞こえた。

K i l l t e r I c h a i v a l t r o n

戦闘

「この歌めいた奴は・・・まさかあの子も!？」

キンジはクリスから流れるその歌にジャンヌと同じだと確信した瞬間に・・・光がクリスを覆った。

紅いインナーが姿を見せるとクリスに覆う様に纏、その上から

白いマントが装備され耳には特殊なヘッドホンの様な装備が付いてその手には

長距離用のスナイパーライフル型ボウガンが装備されていた。

「くそが! さっきの光でインクルシオの暗視モデルが仇になりやがった!!」

キンジはそう言いながら暗視を解除して通常モードに戻ったが視界は

未だ戻ってはいなかった。

「ぼやけたレベルか・・・スミマセンがメーヤさん。」

「分かっています、こちらで援護しますので共に。」

そう言ってメーヤは大剣を構えるとクリスは長距離型ボウガンを構えて

こう言った。

「本当はこう言う事しなくなかったけど・・・ゴメンナサイ!」
そう言いながらこちらにも戦闘が始まった。

「ええい役立たず共が! 私自らがあの子達を相手どらなければいけないとは!」

「よそ見とは余裕デスネ。」

ダイアナはそう言いながら大剣を持ってヒルダ相手に戦っていたが

ヒルダは鞭を使ってその大剣に絡みついたと同時に・・・雷を使っ

て

ダイアナを感電させて大剣を離させた。

「うぐー！」

「これで先ずは一人……！」

「よそ見しては駄目です！」

すると詠がそう言いながら腕に装備されている小型ボーガンから弾丸を放つと

煙幕が出てきた。

「小細工な事を!!」

ヒルダはそう言いながら出てくる場所を確かめようと雷球を放とうとした

瞬間に……左からナニカが来るのを感じて雷球を放って当たったのは……

薬の入った無針注射器であった。

「フエイク……しまった！」

ヒルダはヤバいと考えて背後に向けようとした瞬間に……銀色の剣が

ヒルダの鞭を切裂いた。

「それはまさかワトソンの」

「私が回収しました、万が一に備えてでしたが幸運ですね。」

ダイアナがそう言った瞬間にヒルダは貴様と言って一端枢迄下がると

箱から出てきたのは……小型のチェーンソーであった。

「何よあれ！ホラー映画見過ぎじゃないのアイツ!!」

松葉はそう言いながら拳銃を構えていた、自分は足手纏いだって事くらいは

分かっているが為援護するんだと思っているとヒルダは松葉を見てこう言った。

「マズハオマエカラダー！」

そう言っつて電気力を使って音速の如き速さで松葉に向けて走つて

チエーンソーを松葉に向けて振り下ろそうとした瞬間に・・・銃声が鳴ったと同時にチエーンソーの鎖部分が・・・破壊されたのだ。

「・・・あら起きたのね・・・アリア？」

ヒルダがそう言っただけで視線の先にいたのは・・・起きたアリアであった。

「未だ眠いけど・・・アンタを逮捕できると思えばまだいけるわよ！」

天草達と言うと・・・。

「くそが！やっぱやるなお前!!」

「其れはそれはどうも。」

天草はそう言っただけで理子相手に剣戟しながらも相手どつていた。

既に視界の殆どは能力を使って回復しているがために2人で応戦している。

天草は理子に向けてこう言った。

「そういえばデスけど最近良い水が手に入ったんですよ！」

天草はそう言いながら理子のナイフを相手取っている中で足音を二回ほど

鳴らすと理子はこう答えた。

「おおそうかよ！じゃあ手前の剣でそれしたらせてみなよ!!」

そう言いながら理子も2回ほど足音を鳴らしていた。

それを聞いてジャンヌは何だと思つて居る中で2人の戦闘は続いていった。

「この間血の滴る殺人者が教会に懺悔しに来たんですよね！」

「ああそうかよ！そいつは笑い種だなおい！んでそいつどうしたんだよ!!」

「ついこの間ですけどヤクザに捕まって魚の餌になってしまったそうです！」

「ハハハハハ！いい気味だぜ世の中よく来てんなアおい！」

そう言いながら攻撃を続けていた。

そしてキンジ達はと言うと……。

推奨BGM 『紅蓮華』

クリスは歌いながらボーガンで攻撃を始めた、これまで同様遠距離であつたが

それこそが彼女の持ち味でありこれまで紛争地帯と言う特異な環境下で

磨き上げられた才能とも言える。

遠距離からなのでキンジはどうやっても苦手なタイプであるがため

近づけないのだがそんな中でメーヤは大剣で弾きながら向かっているとクリスはメーヤに向けてこう言った。

「貴方何者？」

「只のシスターです！」

そう言いながら近づいて行くのを見てクリスは仕方ないと思って武器を変えた。

突如としてボーガンが・・・弓矢に変わったのだ。

「!!」

それを見てメーヤ達が驚くがクリスは尚も攻撃を続行して

2人を近づけさせない様になっているのに畜生と思っていると

キンジはメーヤに向けてこう言った。

「メーヤさん！俺が先頭に立ちますからあいつの事を頼みます!!」

キンジがそう言うのとメーヤは分かりましたと言ってキンジの背後に隠れるように大剣を構えているとキンジは足元のリボルバーを回転させると

キンジはこう言った。

「捕まってくれ!!」

そう言うのとキンジは翼を大きく広げて・・・爆発と同時に飛び立ったのだ。

戦闘Ⅱ

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

キンジはリボルバーの爆発力を生かしてクリスの目の前まで一瞬で跳躍したのだ。

「嘘！この距離だと」

アウトレンジが取れないと言いながら何とか後方に下がろうとして後ろ向きに

ジャンプしようとした瞬間に・・・キンジがノインテーターを投げ飛ばして

クリスの持っているロングレンジボーガンに当てて・・・弾き飛ばしたのだ。

「キャー！」

それが当たって弾き跳んでしまったのでしまったと思っっているとキンジは

其の儘・・・クリスに抱き着くかのように捕まえると其の儘ゴロゴロと転がりながら着地した。

「は・・・話して離して放して！」

「生憎だが離すわけにはいかねえんだよ・・・お前あいつに脅されたのか？」

「!!」

それを聞いて目を大きく見開くとキンジはこう続けた。

「お前の事はダイアナから資料が届いてそこからだがお前が何時もまだ暑い時に長袖着ているって聞いたからインクスタとして聞くぜ、お前はアイツに虐待されてんだろ？」

「・・・・・・・・」

それを聞いてクリスの動きが弱まるとキンジはこう続けた。

「お前はアイツに酷い目合ってるって言うなら・・・俺達が救ってやる！」

「!!」

「お前が助けてって言うのなら・・・いや、俺達は何があってもオマ

エヲ守る！」

「・・・無理だよ・・・だってアイツは不死身」

「不死身だ?! 生憎だが俺達はその不死身相手に一回勝ってる!! 俺達は

今まで助け合ってここまで来れたんだ!?! だから・・・俺達を頼れ。」
キンジがそういつてやつとのこととで視界が回復したその目でクリスの眼を見ると

クリスは・・・涙交じりでこう答えた。

「じゃあ・・・一つ言うね・・・」

・・・助けて・・・!!」

「それでこの間毒消しのつぼゲームで造ったんだけどよ! これが全然効かねえキャラで困ってんだよ!!」

「アハハ! 理子さんはゲームがお好きですから攻略は難しくしないでしよう!」

「その通りなんだけどよ! 毒の種類がこれまたわからねえから裏技使って

散らばったパズルクリアしようとしてあと一歩なんだよなあ!!」

「でしたら・・・仲間を使えば良いじゃないですか!？」

「!!・・・そいつは良い提案じゃねえかって言いてえけど誰とだよ!？」

「其れは決まってるじゃないですか・・・」

・・・僕達です!!!」

天草がそう言った瞬間に理子の眼が・・・何やら焦点が合わないような

感じになっているのを察知したジャンヌはまさかと思っていると天草はこう続けた。

「僕たちは嘗て手を取り合いました! 貴方は既に縛られている存在じゃない!! 貴方は既に自由なんです!?! そうじゃないと言えるのならばまだあなたは

そう思っているに過ぎません・・・自分を解き放つて下さい理子さん! 貴方は既に貴方何です!!」

天草がそう言って理子のナイフを一刀で全て弾き飛ばして喉元に突き刺す手前で止まると理子は鼻で笑ってこう言った。

「へ・・・ここで止めるとはアンタも甘いな。」

「生憎ですが私は神父です、人間相手に殺生はしませんが・・・人を傷つけるのに快樂的思考を持つ人間に対しては容赦はしませんよ。」

天草がそう言うのと理子は天草の耳元で何か囁くと天草はそうですかと

言った瞬間に理子はこう言った。

「チャンスは一回、例の剣はヒルダの所……決めるならそこだぜ。」
「ええ……タイミングは任せて下さい。」
天草の言葉を聞いて互いに構え直した。

「ヒルダーーーーー!!アンタにはママの犯罪の証言台に立って貰うわよ!!」

「無礼者の小娘が!!」

ヒルダはアリアに向けてそう言っているとアリアはむきー!と
言って

こう続けた。

「誰が小娘デスツテ!アンタの方が小娘じゃないの!!」

「あらそうでしょうかね?私の体つきは貴方に比べれば美しい物よ
?」

ヒルダはそう言いながら胸を大きく見せるかのように寄せるのを
見てから

自身の胸を見て……怒り心頭でこう答えた。

「むきやああああああ!!アンタは風穴地獄決定よーーーーー
!!」

「あら可哀そうに?けど良いわよそう言うのも、貴方のその体が私
にすり寄ってくるのが楽しみで仕方ないですわ!!」

そう言いながらヒルダは雷球を放ちまくっていた。

「キンジサン、お怪我は!?」

「こっちは平気だ、やる事があるから手伝ってくれるか?」

「構いません! 殲滅科としてやって見せます!!」

メーヤがそう答えるとキンジはこう言った。

「よし、それじゃあ・・・ジャンヌを呼んでくれ。作戦会議する。」

そしてキンジ達がジャンヌ達のいる方向に集まると理子も加わったので

まあ取敢えずだと言ってクリスから聞いたことを言うと言うと理子はこう呟いた。

「畜生が・・・そうなるとあれを使うしかなさそうだぜ?」

理子はそう言いながら近くにある花束を見てそう言うと言おうと天草がこう続けた。

「でしたらいい考えがありますよ?」

「「「「「」」」」」」

一体何なんだと思っていると天草作戦を聞いて理子はニヤリと笑っていて

クリスは顔を青くしているとキンジがこう言った。

「大丈夫だ、俺がお前を絶対に守ってやるさ。」

「・・・本当に?」

「ああ、約束したからな。」

当たり前だろうと言うとクリスが顔を赤くしていたので天草はやれやれと

思いながらこう言った。

「では皆さん、作戦通りに行動してくださいね。」

それを聞いて全員頷くとキンジはこう言った。

「そんじやあ・・・いっちょ暴れるとするか。」
そう言って全員が準備を始めた。

戦闘Ⅲ

「いい加減に逮捕されなさい！」

「あらあ！弱い犬程よく吠えるとはよく言えたわね!!」

ヒルダの言葉にアリアは自身の事だと感じて怒りを露わにしながら攻撃を

続けている中でこう思っていた。

「(あいつもブラドと一緒にあの呪印があるはず・・・見た限り

左右の太ももに一つずつがあるけどあと半分が何処かね・・・)」

そう思っているとヒルダはアリアに向けてこう言った。

「私の魔蔵の場所を特定しようとしているのね？」

「!!」

それを聞いてアリアはしまったと思っているとヒルダはこう続けた。

「けど残念・・・貴方が勝てる確率は既に・・・0ヨ。」

ヒルダがそう言って雷球を作って・・・攻撃しようとしていた。

「貴方に対してはこの攻撃で貴方を心肺停止状態にさせてはく製にして可愛がってあげるわ・・・緋弾を抉り取ってね!!」

そう言ってピンポン玉の様な形状から・・・野球ボールからバレーボールと

大きくなっていた。

しまったと思っていると・・・ヒルダのいた枢が突如として爆発したのだ。

「な・・・何故！」

爆発したんだと思っているとその向こうに・・・ボーガンを構えたクリスを見つけたのだ。

「クリス貴様ーーーーー!!」

ヒルダがそう言って何かしようとした瞬間に・・・アリアの目の前にシャボン玉が現れたのでそれを見た瞬間にある事を思い出しすぐ様に下がった後

ヒルダに当たった瞬間に爆発したのだ。

「ガハ．．．！」

一体何故と思つているとヒルダはそれを見た。

見たのは．．．天草と共にの極小の香水瓶を持っていた理子を見て．．．

怒髪天を衝く勢いでこう言つた。

「理子ーーーーー!!クリスーーーーー!!」

そう言つた瞬間にヒルダは力を放つた。

「グぎいいー！」

「キャー！」

理子とクリスが互いに耳についている蝙蝠型のイヤリングが破壊されたのだ。

「理子さん！」

「クリス!?!」

天草とキンジが互いに2人の下に駆け寄ると天草がこう言つた。

「遠山君、直ぐに2人を病院に連れて行かないと!これには毒が仕込まれてるんです!!」

「何．．．クソが!」

キンジは天草の言葉を聞いて畜生と思つていると空から雨が降り始めると同時に理子とクリスがこう言つた。

「シー君．．．この毒は10分で死ぬ奴だから．．．よく聞いてね。」

「遠山さん．．．これは忠告ですのでよく聞いてください。」

そう言つたとクリスは．．．とんでもない事を言つた。

「ヒルダの魔蔵は・・・刺青から違う所にあるの。」

「「!!!」」

それを聞いてキンジ達が驚くがクリスはこう続けた。

「ヒルダは前に手術して・・・魔蔵の全てを他に移植したんだけどその場所を知っている闇医者も殺しているから正確な場所は知らないの。」

私もねと言うと理子はそうかよと言って・・・にひと笑みを浮かべて

こう言った。

「だったら猶更こいつが・・・いるよな?」

そう言っただ束を見せつけるとこう続けた。

「そんじゃあ・・・計画を話すぞ。」

そう言っただ理子の計画を聞いて・・・メーヤがこう言った。

「では私が奴を引きつけますのでその隙に。」

「俺も手伝うぜ、天草。悪いが詠と松葉に頼んで理子とクリスを」

「いや待て遠山・・・アタシとクリスにやらせろ。」

「「!!!」」

それを聞いてキンジ達が驚いていると天草がこう反論した。

「駄目です理子さん! 貴方方は毒に侵されてます!! 今すぐ病院に行かないと

貴方方が」

「こいつはアタシとクリスの過去に蹴り付けなきやいけない案件な

んだ！」

理子がそう言って3人はうぐと思つている中でクリスがこう続けた。

「私達はヒルダやブラドに酷い目に遭つた……だから私達は過去との因縁に決着を付けなきゃいけないの……だからお願い。」
そう言うのを聞いて3人は2人の強い覚悟に押されてしまい……キンジはこう答えた。

「……分かつた、お前らの過去に因縁を付けさせるのに手を貸すよ。」

「遠山君！」

「遠山さん!!」

2人はそんなと思つているがキンジはこう続けた。

「こいつらは命を賭けて過去との因縁を絶とうとしているなら俺達がどうこう言つて止める事なんて出来ねえよ。」

それにこいつらの眼は本物だ。」

だからだと言うと2人は理子とクリスを見て……分かつたと言つて

天草がこう続けた。

「分かりました……ですが僕達もサポートに回りますので……確実に仕留めて下さいよ。」

それを聞いて理子とクリスが頷いた。

「ああもう……貴方は本当にムカつきますわ……!!」
ヒルダがそう言うのとアリアはこう言った。

「ヒルダ……アンタを逮捕するわ！そしてママの裁判に付き合わせてもらうわ!!」

そう言つて刀を構えているとヒルダは空を見て……こう呟いた。

「ああ良いわ今日は、こんな好天の日に戦えるなんて本当に幸運よ貴方達……」

だって貴方達は吸血鬼の『第3形態（テルツア）』を見れるのだから。」

そう言った瞬間にトライデントを取り出して真っ白な……

雷光がヒルダ目掛けて直撃した。

「「「キヤアアアアアアアアアア!!!」」」

アリア達はその光に驚いて伏せると暫くして現れたのは……
全身を雷光で覆っているヒルダがそこに立っていた。

「何よあれ……。」

「まるで……悪魔ですね。」

「あれが吸血鬼の変身ですか……。」

ダイアナ達がそう言っているとヒルダは……ニヤリと笑ってこう答えた。

「ああこれね、お父様はパトラに呪われていてねえ。」

『第2形態（セコンデイ）』で天草にやられたけどこの形態だったら

私達は無敵なのよ……そう！最強よ!!」

そう言うヒルダはこれ迄よりも巨大な雷球を作るとアリアに向けて

こう言った。

「アリア、貴方ははく製にせずはこの世から消して緋弾のみにして後は遠山キンジと天草を殺して……お父様の仇を取るのよ!!」
そう言うヒルダは巨大な雷球を出すとこう言った。

『『雷星（ステルラ）』、これこそ私達吸血鬼の奥義ヨ。

これで貴方達はお終いヨ!!」

そう言っていると理子とクリスがヒルダの前に出ると・・・理子がこう呟いた。

『人生の角、角は花で飾るのが良い。』アタシのお母様の言葉だ。」
そう言っていると理子は向日葵を向けてこう言った。

「これがアタシ達の答えだヒルダ。」

「私達は闇から・・・光に向かう。」

クリスの言葉を聞いてヒルダはこう呟いた。

「私は嫌いなよ、太陽みたいで憎たらしい・・・!!」

「だからこそお前を倒すのにうってつけなんだよ・・・ここには最高のスナイパーがいるからな!」

理子がそう言っていると向日葵の花束が解き放たれて出てきたのは・・・

散弾銃であった。

それを見たヒルダは・・・ハツという顔をしたと同時に理子がこう言った。

「くふふ、良いよヒルダ。最高のアングルだよ。」

「初めて見たよ、貴方のその顔。」

そう言うと2人揃ってこう言った。

「ファイヤー・ブツコロス!」

そう言ったと同時にショットガンから弾丸が放たれた。

散弾銃の弾丸は通常とは違い放って数秒後には・・・100発以上の
の

小型の軟鉄弾が全身に命中する。

「うあ!?!」

ヒルダはそれに全身にくまなく当たってしまったと同時に

ヒルダの体内に溜っていた電流が全身に・・・一瞬で流れたと同時に

に

火に包まれた。

「キヤアアアアアアア!!」

全身に包まれた炎がヒルダを包んでいると背後からキンジとメーヤが

ステルスから現れて大型の槍と・・・ワトソンが持っていた剣で切裂いたのだ。

「があああああ!!この私が・・・これは悪夢・・・悪夢何だわ・・・だつて・・・可笑しい。」

「いいえ可笑しくはありません、貴方は敵に回す存在を誤りました。貴方が悪夢と言う・・・私達人間と言う主が守る存在を。」

メーヤがそう言うと持っていた十字架と銀弾をキンジに手渡すとキンジはそれをヒルダの胴体に殴りつけるとそこから新たに青い焔が溢れ出してきたのだ。

「ギガああああアアアアア!!ごんんだ!!ごんだじどぎのぎや

げんじちゆなんて・・・!!(こんな!こんな酷い事が現実なんて!!)」

ヒルダがそう言いながらキンジ達から離れようとして・・・展望台の縁に

手をかけてしまつて・・・其の儘墮ちてしまつた。

「ギャアアアアアアアアアア!!」

ヒルダの悲鳴と共に其の儘彼女は・・・落ちてしまった。

父親と同じ様に体内に十字架を付けられたまま・・・地面に叩きつけられるのだ。

「・・・最期は父親と一緒にか。」

キンヅがそう呟くと同時に理子とクリスが・・・倒れてしまったのだ。

「理子さん!」

「クリス!!」

2人が駆け寄ると理子とクリスはこう言った。

「えへへへ・・・やっと全部が終わったね。」

「私達・・・やっと・・・!!」

クリスはそう言いながら泣いていると松葉がこう言った。

「アイツ落ちちやっただけだし・・・私達大丈夫なの?」

「まあ良いだろ?我々はこの戦争の序盤で勝利したのだから。」

「そうですね、私達は勝ったんですから。」

「それよりも病院に行かなきゃいけないな、ダイアナ頼むが。」

「車でしたら用意できてます。」

「それでは行きましょう!速く2人を病院に!!」

「でしたら私はあの女を!!」

「待てよ・・・アイツも病院だ・・・アタシらは武偵だぜ?」

理子がそう言うのを最後に全員下に向かって行った。

そしてヒルダはと言うと・・・。

「ああ・・・ごんな・・・ごんなの・・・びゆめだ（ごんな・・・
ごんなの夢だ）」

現実逃避しながら眩くしかなかった。

そう・・・これは現実なんだから。

病院にて

式連戦続けたその夜からキンジ達は理子とクリスのいる武偵病院の

ICU前の廊下にあるベンチの上で目を覚ました。

インクルシオの能力を使った反動であろう、筋肉痛と同時に目の痛みが

気になっていた。

そんな中キンジは未だ起きて祈っている天草を見てこう言った。

「天草、ICUから報告は？」

「未だ来ていません、第一展望台に付いた時には心肺停止状態でしたし

僕はジャンヌさんの魔力で体内の毒を何とか止めていましたがそれは只の

騙し技でしかありません。」

そう言っていると『治療中』のランプが消えた。

「理子さん！」

「クリス!!」

天草とキンジが中に入ると上体を起こしていたのだ、麻酔の影響で呆然としている様であったが矢常呂イリンがこう言った。

「彼女達の毒は厄介だったけどこっぴどくやっつけて治せたのは彼女達が投与された毒は

一般的な神経毒だったから対応出来たわ、けど実はもう一人・・・厄介な患者がいるのよね。」

『矢常呂』先生がそう言うところある患者のデータ映像を見て・・・キンジと天草が揃ってこう言った。

「ヒルダ!?!」

そこで映っていたのは・・・全身包帯だらけでギプスが付いているヒルダの映像があった。

「良くあの怪我で生きているなあいつ。」

「・・・本当にですね、父親よりも高い所から落ちたのに良くもまた。」
そう言っていると『矢常呂』はこう続けた。

「散弾銃の弾丸計107発全弾摘出と同時に魔臓の摘出と縫合もしていいんだけど」

初めてだったから後で専門の魔病棟に移す予定何だけど・・・日の出ごろから

悪化し始めてるわ、その原因が血液不足何だけど・・・彼女の血液型が

珍しいタイプなのよ。」

「!?」

2人はそれを聞いて一体何なんだと思っていると『矢常呂』はこう答えた。

「B型の『クラシーズ・リバー』型って聞いたことある?」

「いやないです。」

「そりゃあそうよね、この血液って170万人に一人と言われる血液で

ホモサピエンスの『クラシーズ・リバー・マウス』から取られているんだけど

これを扱っているのがシンガポールの血液センターだけで取り寄せるのに

2日はかかるんだけど彼女の命は持って今日の朝から昼にかけて・・・残念だけど彼女を諦めるか・・・2人の血液から提供してもらうしかないわ。」

「!!」

それを聞いてキンジ達が驚くが『矢常呂』はこう続けた。

「2人の血液型がそれなのよ、今助けられるのは貴方達だけなの・・・だから」

「おやめになった方が良いかと。」

「!!!」

キンジ達3人が驚いて見て見るとそこにはメーヤがいてこう続けた。

「彼女はドラキュリア、然も彼女達を甚振って追い込んでいました。今更助けたところで彼女が反省するわけではありませんしこれは主から与えられし天罰です、彼女は今咎を受けるべきだと私はそう思っています。」

そう言っていると全員がどうするべきかと考えていると・・・
理子とクリスがこう言った。

「良いよ、採れば。」

「私も別に構いません。」

「!!!」

4人がそれを聞いて驚くがメーヤが反論した。

「駄目ですよお二方! 彼女は眷属!! それに彼女は貴方方を今まで甚振り

楽しんでいた魔女!? 彼女は今すぐ焼き殺してその灰を泥に交じつて

捨てるべきです!!」

「また・・・大胆だな。」

「いえ、この位でしたら教会では通常ですよ?」

「え、嘘だろそれ!？」

キンジは天津の言葉を聞いて過激かよと思っていると理子とクリスは

こう続けた。

「別に、あんな奴殺す価値もないし理子が殺すのは価値ある奴だけだし。」

「それに私達は彼女にお怨みはありますが殺したとしてもそれでは後は

何も出来ません・・・やるんなら永久に後悔するほどじゃないと。」

「(女の憎悪・・・怖エエエ・・・)」

キンジはそう思いながらクリスを見ていると『矢常呂』はこう言った。

「それじゃあ・・・輸血の準備するからここにいてね。」

そう言っつて部屋から出るのを見た後メーヤは2人に向けて呆れた目で

こう言った。

「全く貴方は良くも悪くもお人好しですね。」

そう言っつとメーヤはキンジと天草に向けてこう言った。

「お二人とも、今回はありがとうございます。これで殻金をアリアさんに

返却することが出来ました。」

そう言っつとキンジはメーヤに向けてこう聞いた。

「それでアリアなんだが・・・あいつ何しているんだ?」

ここにはいなかったぜと聞くとメーヤはこう答えた。

「アリアさんですがそちらは今ワトソンさんの遺体を確認した後現在一人で

極東戦役を調べている所です。そちらは・・・専門の人間に言った方が

速いかと。」

「そうだな・・・分かった、専門の人間に言った方が速いな。」

そう言っつとメーヤはキンジと天草に向けてこう言った。

「お二方は間違いなくパラディンです、今後ともよろしくお願いいたします。」

それとですとメーヤはキンジに向けてこう言った。

「貴方は私の裸を見ましたね？」

「今更何言ってるんだ!?!」

キンジはメーヤに向けてそう聞くとメーヤはこう続けた。

「まああれは事故でしたが・・・神に身を捧げた身としてはこれは穢れですので責任として・・・」

・・・私を娶ってくださいませよね♪」

「・・・ハアアアアアアアアア!!」

この日病院の中でキンジの悲鳴が聞こえた。

学園祭

地球温暖化、今年はそのせいで台風シーズンが早くも終わった中
とある場所で・・・台風が巻き起こっていた。

「主よ、今日の食事に感謝します。アーメン。」

「頂きます。」

「・・・頂こう。」

「頂きます・・・。」

「・・・(きつい)」

キンジはそう思いながら胡桃入りパンを食しているが・・・味が全然
しないのだ。

何せ今家には何時ものメンバーに加えて・・・メーヤとクリスマス迄も
が
加わっているのだから。

おまけに詠や松葉、ミシエラから睨まれながらデあるがために食事が
が

進みづらいのだ。

「(何でこうなったんだ?)」

キンジはそう思っているのだ・・・そう、それは病院の時に遡る。

「私を娶ってくださいますか♪」

「ハアアアアアアアア!」

それを聞いてキンジは何だと思っていた、何で娶る等と言うのか
まるつきり意味が分からないとそう思っているとメーヤはこう続
けた。

「貴方は私の裸を見ました、神に全てを捧げた私の体を!!」

「いや確かに見たけどあれは事故」

「最早私は神に仕える事すら出来ないのです! だったら責任とつて
下さい!」

涙交じりでそういうその言葉に周りの医者たち(特に女性陣)が:
冷ややかな視線を向けてくるのでまさか嵌められたか!?!とそう
思っている中でメーヤはこう締めくくった。

「私のこの身はその時から貴方の物・・・そして私を貴方達の下にい
ることです」

師団は貴方方遠山派の方々を無碍に傷つけることはしないでしょ
う。」

『!?!』

それを聞いて全員が目大きく見開いているとクリスがこう呟い
た。

「あ、そうか。極東戦役で私達の存在が厄介になった時の人質。」

「ええそういう所です、既にヴァチカンには報告済みでイタリアの
武偵校には

転校の手続きは終わっていますのでこれから宜しくお願いします
ね・・・

遠山キンジさん♪」

「・・・嘘～～～～ん。」

キンジはその言葉に対してそう答えるしかなかった。

そしてこの家にメーヤが加わってしまいある意味天国と地獄を行ったり来たりするキンジであった。

「結論から言いますとワトソンの死亡を確認、家は跡継ぎ不在と殻金に対しての報告怠りと勝手な陣営変更で彼……いえ。彼女の遺体は引き取られることなく

日本の無縁寺にて埋葬されることとなったそうです。」

昼時メーヤはお肉を全員で食べている中であの後の報告を行っていた。

ヴァチカンからはキンジの監視と出来るならば戦役後に味方として

取り入れるための懐柔としてメーヤが派遣され、ヒルダは完全回復したが父親同様恐怖が芽生えたのである。今では自分の能力であった雷と金属類に対して恐怖心と同時に今まで下だと思っていた人間の……自分のペットの様に思っていた

理子とクリスの情けで命を拾った事に対しての屈辱諸々で生かされていることに

対して恥ずかしさと憎らしさが前面に出ているようだ。

現在ヒルダは誘拐と暴行で超偵専用の刑務所で判決の日を派遣された

エクソシスト監視の元過ごしているようだ。

そしてイギリスでは『リバティー・メイソン』は『MI6』の傘下に降ってしまい身動きが取れにくくなっているらしい。

それとキンジ達だが今回の一件で眷属側からすれば敵対勢力でもある

師団と同等の立ち位置になった事から正式に師団に入ることと

なってしまうのだ。

そしてメーヤの立ち位置だが3年であることと卒業単位に向けて動かなければいけないが為当面は別行動（家には住む）となった。

そして数日後・・・文化祭が始まりキンジ達は変装食堂で働いているが

表にいるのは女子が見目麗しい男性陣だけでキンジはと言うと・・・ここにいた。

「ほいお皿追加洗つといたぞって未だ来るのかよ？」

皿洗いをしていたが理由がこれ・・・。

「そんな根暗そうな目つきのポリ公はおらんやろ!!」

「理不尽!!」

酷い理由だなと思っっているし何で厨房班迄もが変装するんだよと思っっていると

蘭豹先生はこう答えた。

「簡単や、交代制やからな。」

それを聞いてああそうなのねと思うしかなかった。

そしてその理由が・・・今来た。

「平賀ーーーーー!!お前に比べりゃあ全員マシや!!身長伸ばしてから
出直してこい!?!」

「あやややややーーーー!!」

蘭豹先生がそう言いながら平賀・・・顔面をとんでもない位に化粧

で

塗ったクツテいる儘中華鍋に放り込まれていった。

酷いなど思っていると蘭豹先生はキンジに向けてこう言った。

「よし、お前イケヤ。アイツよりはまし。」

そう言われてサツサと行けと言わんばかりに押し出されて見ると

そこは・・・

或る意味酷状況であった。

女性陣が全員仮装をしているがために目の付けようがヤバいなと

思っている中で・・・とある席にいる面々を見てこう思っていた。

「うげ、メーヤさんとクリス。」

そう、両人がいたのだ。

メーヤは今回普通の服であろうロングスカートに少し薄手の長袖を着ていて

クリスもそうであるが・・・ゆったりな服なのに胸の方はぎちぎちと言う

最悪な光景にキンジは行きたくねえと思つてそこから離れようとして・・・

「あ、キンジサンスミマセンご注文したいんですけど。」

「キンジ、こっち来て。」

「・・・何でだよ。」

キンジはそう呟きながらメーヤ達のいる方向に向かって行ったが・・・その間を男子勢に睨まれることとなったのは言うまでもない。

SSRへ

「それで・・・何の御用でしょうかお嬢様方？」

「はい、今回殻金についてで玉藻様がお見えになる事を伝えに来たのです。」

「私は誘われてきたの。」

キンジの問いに対してメーヤとクリスが互いにそう答えると別した後で良いじゃねえかと思っているとメーヤはこう続けた。

「其れとですけど今日の夕方ごろ予定はありますか？」

「いや、ねえけど。」

「でしたら玉藻様ともう一人来ますのでその方の紹介をしておきますので。」

絶対ですよと言うとキンジはああと答えるとメーヤはこう続けた。

「それでは注文ですね、私は軽食を一通り全部。」

「私は・・・その、ミルクとか。」

「分かりました、少々お待ちください。」

そう言っってキンジは離れるが終始男性陣からにらまれるこの状況に

もう嫌だとそう思っていた。

そして夕方、キンジは学生服を着直してメーヤ達と合流するとある場所に

向かって行っていた。

その場所が・・・ここである。

「ここって確か戦闘訓練用の廃墟ビルだろ？」

「はい、ここで玉藻様ともう一人が待っておられます。」

そう言っただけで学園祭中と言う事もあってビニールシートで覆って入れない様に

立ち入り禁止していたのだが周りに誰もいない事を確認して中に入ると・・・

2人ほど人影が見えた。

一人は低身長で武偵校のミニサイズ・セーラー服を着た玉藻と・・・もう一人玉藻に比べて高身長で金髪の・・・爆乳の女性がそこに立っていた。

「!!」

キンジはヤバいと思って胸から顔に視線を向けなおしてその女性を見た。

狐目の様な細い目。

金髪で腰まで掛る程の長髪。

黄色の着物を身に纏った女性を見ると女性はキンジに向けてこう名乗った。

「お初めまして遠山はん、うちは京都で妖怪たちのまとめ役をさせて

貰っております・・・『八坂』と申します。以後宜しゅうお願いいたします。」

「あ、これはどうも。遠山キンジです。」

「遠山はんのことは先代からよく聞いておられますが確かに初代と同じ目ですねえ。」

コロコロと笑っていると玉藻はキンジに向けてこう言った。

「よくやったのウ遠山の、まさかヒルダを討つだけではなく殻金を手に入れるとは矢張り遠山の者は一味も二味も違うのウ。」

この人が玉藻の姉かよとそう思っているのだ。

すると『八坂』は玉藻に向けてこう言った。

「それでは玉藻、妾達も参ろうぞ。何せ事は急ぎじゃからのウ。」

「そうじゃな、と言う訳で遠山侍ヨ！儂を」

「駄目じゃぞ玉藻、此度は妾が呼んだのに尚且つ我儘言うのは道理が

違うではないか？」

「ムウウウウウ!!」

玉藻は『八坂』の言葉を聞いてむうとしているが仕方ないのウと言つて

歩くこととなったがキンジは『八坂』に向けてこう聞いた。

「其れでだけだよ・・・どつちに行くんだ？」

そう聞くと『八坂』はこう答えた。

「うむ・・・」

・・・星伽のいる所じゃが？」

「・・・マジかよ。」

それを聞いてキンジは頭を悩ましているとクリスがこう言った。

「それじゃあ・・・天草さんだっけ？その人も連れてくるのは

駄目でしょうか？」

一応知っていますしと聞くと『八坂』はこう答えた。

「（。ㇿ。ㇿ）ウムそうじゃのう・・・良かろう、その者も連れてこさせましよう。」

それを聞いてキンジは内心ほっとしていた。

そしてキンジ達はSSRに向かうとキンジは『八坂』に向けてこう聞いた。

「ええとき、聞きたいんだけど良いか？」

「？」

「ごっつて・・・神様同士喧嘩しそうなんだけどアンタたちのにはどうなんだ？」

そう聞いて来たのだ、宗教的ちゃんぽんなこの場所をどう思っているのかと

聞くと『八坂』はこう答えた。

「どう思うでしょうかと聞かかれても・・・まあ宜しいんじゃないんやろか？」

どの神様も目指す場所は皆同じやろうからそう眉間に皺寄せへんでも

よかもんやないでしょうかのう？」

「・・・そう言うもんなのかねえ。」

キンジは『八坂』の言葉を聞いてそんなものなのかと知っているはずはと言ってキンジは天草の部屋に入ると丁度よく天草がお祈りを終えて

帰ろうとしていたのであろう、準備をしていると天草はこう言った。

「あれ遠山君、どうしたんですか今日は？何かありましたか?？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「まあ色々あるんだが天草・・・お前今日予定あるか?？」

そう聞くと天草はこう答えた。

「ええとですねえ、これから理子さんと食事に行く約束をしておられまして。」

「時間は？」

「私が出てからでいいと言っていたのですが何かあるのでしょうか？」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ・・・ちよつと極東戦役についてだけど・・・良いか？」

「・・・でしたら理子さんも呼んで良いでしょうか？彼女も関係ありますし」

それに今回の事について彼女も言いたいことがあるでしょうし。」

「・・・分かった、向こうからは俺が言っておく。」

「感謝します遠山君。」

天草はそう言っただけで理子に電話を入れてその事について電話するところから返した。

『良いよ、りこりんも関係あるんだし。殻金見たいし』

SSR入ってみたくらい!!』

それを聞いて了承した後キンジは『八坂』にこの事伝えると『八坂』も

了承してくれて理子と合流した後『八坂』達と共にある部屋についてノックした。

その部屋の主は・・・彼女。

「はああい、どなたでしょう・・・キンちゃん!!」
白雪であった。

話し合い

「ええええ何でキンちゃんがここにつてもしかしてやっど私の所に」

「いや違うぞって言うか白雪今回は俺じゃなくて……こつちだ。」
そう言つてキンジは後ろに下がるとそこにいる……玉藻と八坂を見るや否や

驚いてぴよんぴよんと飛び退いて巫女服の裾を広げつつ着地と同時に土下座した。

「これはこれは玉藻様に八坂様！いらっしやるとは露知らず

何の準備もせずに……申し訳ございません!!」

そう言つたと八坂がこう答えた。

「いえ良いんどす、今回は何も言わずにここに来たうちらに非があるんやから

頭をあげてやす。」

「其れにその誤り癖はまだ治つとらんようじやのう、ほれ頭をあげい。」

そう言つて玉藻は……胸を思いつきり持ち上げて頭を上げさせる
と

白雪の膝の上に乗つてこう聞いた。

「共学でも何とか通えているようで良かったわい、所でじゃが白雪。

琴は上達したか？自転車には乗れるようになったか？」

「そ……そんな、子供の頃の話をされないで下さい。」

白雪は玉藻に対してほんわかと笑いながらそう言つたと八坂がこう続けた。

「そうですねよ玉藻、白雪も今年で17。いい加減に昔事は言わんよ
うにせんと

更に老けるぞ、只でさえお主『九重』に対して玉藻お姉さんツて
言わせてるそつやないですか？」

「ぬぐ！何故それを」

「鞍馬の大天狗が言つて居つたぞ。」

「あの・・・口軽爺・・・!!」

玉藻はそれを聞いて何やら怒っている様であるがまあそれはそれと

八坂がそう言うと言白雪に向けてこう聞いた。

「それにしても遠山侍と星伽巫女が同じ年とはいえ白雪・・・何時までも

今の地位で甘んじておると横から搔つ攫われるぞ? そのシスタクメーヤは

既に遠山に対して同居しておるらしいぞ?」

白雪はそれを聞いて目を大きく・・・まるでバケモノかと言わんばかりの

顔になると玉藻はこう続けた。

「それにじゃがくりすと言ったかのう? そ奴も同居しておるぞ??

然もジャンヌとも一つ屋根の下じゃ。」

「ヒヒヒヒヒヒ一つ屋根ねねねねねのおおおおのおおおおのおおお!」

それを聞いて白雪はムンクの如き顔になっていると・・・止めを刺した。

「それにじゃがこ奴の周りの女子は全員それなりに強いぞ?」

松葉に詠と言ったかのう?? 下手したらお主・・・取り残されるぞ?」

それを聞いて遂に魂が抜けたかのような顔になると仕方ないと玉藻がそう言つてハイハイしながら離れると取敢えずと言つて・・・腹

を殴った。

「ふー!」

「ほれ、説明しないといかんから早く起きよ。」

そう言うと言玉藻は覚醒した白雪に対して戦役の説明を始めた、結界についての説明と殻金を奪われたことを話すとそれを聞いて

愕然として

頭を下げてこう言った。

「申し訳ありません、玉藻様、八坂様、嘗ての星伽巫女が殻金をもつと強く固めておけば」

「星伽巫女のせいではない、お前達はよくやっておる。」

「然し先般は私と一心同体であるべき……この色金殺女をパトラに奪われたことから始まりそのせいでh」

「そこまでじゃ星伽巫女、ここには遠山侍がおるのじゃ。立場を弁えんと……取り返しがつかなくなるのじゃ。」

「は……ハイ。」

白雪はそれを聞いて黙るとキンジは一体何だと思つて聞こうとする……

天草がそれを止めてこう言った。

「止めておきましょう遠山君、聞いたとしても今君が同行できるとか

そういう問題ではないでしょう。それに……方が一の時には僕たちが

側にいますから。」

それを聞いてキンジは天草に対してありがとうと言うと

玉藻はさてとと言ってこう続けた。

「アリアには儂から話しておくとする、殻金を戻さなければいけませんし

遅かれ早かれ知ることとなろうからな。」

そう言うのと八坂がこう続けた。

「でしたらうち他妖怪たちに伝えて奴らの居場所を追わせるように

しておきますわ、何かあればうちが鳥使つて知らせときますんで。」

それで良いなと言うと八坂がこう言った。

「ほなウチはアリアハンの迎えの準備しなきゃいけまへんでこれで失礼。」

「そうじゃな、それじゃあ儂も失敬するが白雪。ちゃんとするんじゃないぞ。」

そう言つて2人共出て行くのを確認するとキンジも立ち上がつて

こう言った。

「それじゃあ俺も出て行くわ、やることあるしダイアナ。聞きたいことが」

「戦役についてでしたら今からお話しできますけど?」

そう言うとお雪を見て・・・溜息ついてこう言った。

「それじゃあ聞くが戦役で言ってた『求め、奪い合う』は?」

そう聞くと・・・ミシエラがこう答えた。

「言った通りだ、物や人。そこら辺は表と何ら変わらないが裏では宝物や

伝説の武器などが該当されて今は色金だ。これが物で人とは組織だ、優秀な兵士を奪って手に入れると言う奴で負けた人間は殺されなように寝返る事もある。」

「じゃあ・・・戦役が終わる条件は?」

そう聞くと・・・ダイアナはこう答えた。

「どちらかの兵が全滅するまでです、無論条件付き降伏も出来ません。」

「・・・どちらにしても俺達は戦いに巻き込まれたような物か。」

最悪だなと言っていらが仕方ないと思ってキンジは今後の事を考えていた。

「其れでじゃが姉上、遠山侍に言わないで良かったのかのう?あの事?」

「・・・今は良いのじゃ、今はな。」

玉藻の言葉に八坂がそう答える中である事を思い出していた。

今より700年前に緋緋神が妖怪変化を起こして戦を起こさせた
が故に・・・

遠山侍と星伽巫女によつて撃ち殺されたと言う事実は・・・

言わないで良いだろうと八坂はそう思っていた。

アリアがそうならない事を・・・信じて。

祭り巡り

そして次の日、キンジはミシエラ、クリス、メーヤを引き連れて祭りを

楽しんでいる中で全員出し物に熱中していた。

「キンジ、これ・・・良いですか?」

「クリス? ああそれは葉莢のストラップ: スナイプライフルの奴か、ここじや棄てる奴だがまあリサイクルだな。一つ買ってやるよ。」
「ありがとうございます!」

メーヤ

「これは何ですか?」

「そいつはリラ○クマの偽物だな、大方パチモンを安値で買ったんだろうな。」

「あの・・・これ良いでしょうか?」

「偽物だぞ? 本物を買う位なら持つてるぜ?」

「いえあの・・・これで良いので買ってもらっても」

「・・・分かった、そいつで良いなら。」

「ありがとうございます!」

ミシエラ

「遠山、何か行われているがあれは何だ?」

「あれはイケメンコンテストだな、不知火駆り出されてるぜ。」

「ご苦労な事だな。」

「確かに。」

ホラーハウスの中。

「ひやああああああ!!」

ミシエラが突然として出てきた足元にべつとりと血糊が付いているのを見て

飛び起きるかのようにキンジを抱きしめるとキンジはこう聞いた。

「お前こ言うの平気じゃねえのか!？」

「無理だ・・・こ言うのは・・・!!」

ミシエラはそう言っただけで震えながらキンジを抱きしめているが・・・
当人は

お化けどころではなかった。

「(アアアアア胸が!こいつの胸がダイレクトにー！ー！！)」

そう思っていた、クリスマスやメーヤ、詠みたいに暴力的ではないが形がよく

然もちゃんとした柔らかさを持っているがために感じてしまいやばいと

思っている中でメーヤとクリスマスは何を考えたのであろう・・・

抱き着いて来たのだ。

「(アアアアアア!左腕と背中に柔らかい物が

然も埋まってくー！ー!!)」

キンジは3人の6つの柔らかさにこのお化け屋敷はやバいと思っ
ていると・・・

赤色灯が灯ったのだ。

「!!!」

キンジ達が驚くとその前に・・・中身が入った死体袋があるのが見
えると

クリスマスがキンジから離れて・・・死体袋に向かって行くと中から・・・

「グアアア・・・」

ゾンビに扮した一年が現れるもクリスマスはそれに対して・・・冷めた目で

見ているとこう続けた。

「何で死んだのか分からないけど死因ははっきりしてからゾンビにならないと

リアリティーが不足するわよ。」

こんな風にねと言って・・・股間に目掛けて靴を脱いでそれで殴ったのだ。

「!!!」

それを喰らった一年とキンジは内股になるのを見るとクリスマスはキンジの所に

戻ってこう言った。

「じゃあ行こう。」

そう言うのを聞くがキンジは内心恐ろしい奴だと思っていた。

そして机の上にいるナース服の一年生がこっちを見ると・・・

通路ではない所から子供の声が聞こえてきたのだ。

するとメーヤはそっちに向けて・・・十字架で祈ってこう言った。

「主よ、この者の魂を安らかに見守って下さい。」

「・・・こいつにはこう言うのに意味がないだろうな。」

キンジはその光景に対してそう呟くが何だか機械の声じゃないな
と思っているとキンジはこう言った。

「ちよつと行ってくる。」

「・・・気になるのか遠山？」

「ああ、通路じゃない所だから気になるんだ。」

「・・・分かった、一緒に行く。」

「よし行くぞ。」

キンジがそう言うって行つて見ると・・・6歳ぐらいの女の子が迷子になっていたのだ。

何やってんだここはと思つてしているとメーヤが抱きしめてこう言つた。

「大丈夫ですよ、お母さんは必ず見つけますからもう泣かないで。」

それを聞いて女の子は少し泣き止むとキンジが抱えて全員外に出た。

そしたらその親が受付口にいたので合わせると女の子は走つて母親を抱きしめてこう言つた。

「おかーさんー！」

そして母親が頭を下げると女の子はメーヤに向けてこう言つた。

「お姉ちゃんありがとう！またねえ!!」

「はい、又です。」

そう言つて手を振つて去つて行くのを見てメーヤはこう呟いた。

「良い子でしたねキンジさん。」

「まあな、それにしても腹減つたな。何か食うか？」

キンジがそう言つて歩いていっているとそこで見たのは・・・

「美味しい美味しいたこ焼きだよー！食べてみてー！ー！！」

武藤の妹『武藤 喜希』がたこ焼きを焼いていた。

「あ、遠山キンジ」

「先輩付けろや！」

キンジは『喜希』に向けてそう言うのと『喜希』はキンジに向けてこう言った。

「でき、何個買ってくれるの？ウチは宗教的な理由とかお国柄を考慮して

『明石焼き』もあるよ。」

そう言うのと見せたのは見た目はたこ焼きだが中身は餅とかチーズを

代用した奴だよと見せるとキンジはミシエラ達に向けてどうだと聞いた後に

こう言った。

「じゃあたこ焼き一つと明石焼きが3つで全部チーズ入りな。」

「それで・・・何個入り？」

そう聞いて来たのだ、何せ最大20個入りの奴が滅茶苦茶高い為誰も

買わないのであろうがキンジに対してはぼったくってやりたいとそう思っているようだがキンジはこう答えた。

「・・・8」

「えー？？」

そう言うって『喜希』が乗り上げるとキンジはこう続けた。

「・・・1ダース」

「ええええー！！轆いちやうぞー？？」

「・・・じゃあ買わん。」

「・・・分かったよ、1ダース8個入りで全部合わせて96の所を四人分で20個入り4箱分お買い上げく〜く〜！！」

それを聞いてキンジは内心畜生と思いつながらそのたこ焼きと明石焼きを

買うしかなかったのだ。

そしてソースとマヨネーズ、青のり、鰹節がかけられたたこ焼きと醤油、

青のりがかけられた明石焼きを貰い近くのベンチに向かって行っ

た。

鍋

「あむ、美味しいなこのたこ焼きと言うのは。」

「明石焼きも美味しいですよ、チーズも中々良いですね。」

「私餅入りが好き。」

ミシエラ達はそう言いながらたこ焼きと明石焼きを食べていると……

メーヤとクリスが明石焼きを刺している爪楊枝をキンジに向けて……

差し出してきたのだ。

然も2人はキンジに向けてこう言った。

「Say. ah。」

英語でそう言つて2人は赤面で……恥ずかしそうにしながら見せるのを見て

キンジは……どうしようかと思つて遂に観念して順番に食べたのだが緊張しすぎて味など理解できなかつたのだ。

そしてその後はお返しとしてたこ焼きをやったら2人は喜んで食べたけど……

終始ミシエラの表情が無だったのは……怖くて言えない。

そして最後に打ち上げ会となるのだがこれが……悪夢だ。

武偵校では打ち上げの際に夜体育館を解放して……『武偵鍋』と言う闇鍋を

執り行うのだ。

食材はアタリとハズレの2種類のチームに分けて執り行う事となったため

3年であるが何処にも所属していないメーヤはキンジ達のチームに加わつた。

鍋の方は肉類は松葉が野菜と魚は天草とメーヤ、デザートは詠が担

当となり

残ったキンジ、ミシエラ、ダイアナ、クリスの4人が闇鍋担当となり鍋について

最も多分理解してないのが・・・クリスだと思っているのだ。

何せ戦場暮らしであったがために通常時に鍋料理には入れないと言ふあたりで

何を出すのか見当がつかないためキンジ監修のもとで持つてこさせた。

そして普通ならば奇数の担当は調味料だが偶数である為松葉が担当となった。

そしてこの鍋も普通ではない、蓋はシルクハットみたいな形状で天井部分には

開閉可能な小窓がありそこから具を取り出すと言う明るい所でも闇鍋を

行わんがために開発したと言っても過言ではないものである。そして松葉がそろそろねと言って調味料を入れた。

「入れるのはこれ・・・鮫肉を数時間煮込んでそれを片栗粉で溶かして

トロメタ奴、これを鍋に・・・投入！」

そう言った瞬間に一瞬だが匂いが・・・鮫特有の匂いがキンジ達の嗅覚を

刺激して!!・・・悶絶した。

「!!!!!!」

その匂いぢもうヤバいと思っっている中で続いて行き更に投入が続いた。

「次に入れるのは大豆、それで最後に・・・ポンカン入れてハイ終わり。」

「・・・もう何が何なのか分からないぞこの鍋、俺クリスの奴しか知らんぞ。」

キンジがそう云う中で・・・数分して鍋から匂いが経ちこんできたため

先ずはと言つて予め決めた・・・キンジから始まった。

「じゃあ・・・行くぞ。」

南無三と言つて取り出すと出てきたのは・・・洋食でよく使つてい
る

牛脂だった。

恐らくはミシエラだと思つているともう一つ入つていた。

それは・・・鮫の煮凝りであった。

「・・・畜生。」

キンジはそう呟いて食べてみて・・・

「うぶう!?!」

あまりのまずさに吐きそうになつていた、牛の油のきつさに鮫の煮
凝りの

溢れ出てくる臭さが鼻を突き抜けたがために意識が飛びそうに
なつていた。

「では次は僕ですね。」

そう言つて天草が出したのは・・・ポンカンであった。

「・・・これですか。」

天草はそう言つて食べて・・・甘さと臭さが際立つそれにぞわつと
していた。

「じゃあ次は私・・・!!」

次に松葉だと言つて出したのは・・・コーンであった。

まだマシねと思ひながら食べていると今度はミシエラが取つて出
てきたのは・・・大豆の山、詠は何やら草の様な物があったので何だと
思つて食べるとクリスが

こう言つた。

「あ、それ。私が武偵校のビニールハウスで見つけた奴。」

「?!?!」

それを聞いて顔を真っ青にしていた、あそこにあるのはダキユラが
使う

拷問用の奴で中には毒性の強い者が含まれていたはずだぞと思っ
ているとキンジがこう続けた。

「大丈夫だ！俺がちゃんとチェックしたから大丈夫だ!!」

な！と言っているが詠は・・・今にも泣きそうな表情で食べ続けて
いた。

次にダイアナの番になって取り出したのは・・・アップルパイであっ
た、

まさか自分が入れた物を自分が食うと言う展開に恐ろし気に食べ
て・・・心の中で断末魔を上げていて最後にメーヤだと思っていると
メーヤはこう言った。

「神よ、私はこれより禁忌に触れます。願わくば・・・私にお救いを
!!」

そう言っ出て出したのは・・・豆であったが何だか少し・・・黒いな
と思っっていて食べてみて・・・震えるのを見てキンジは内心謝っ
た。

「(すまないメーヤ、それ俺が持つてきた・・・黒豆だ。)」

然も黒い液体も入れた奴をなと思いながら食べているのを見届
けた後に

中にある奴を棄てて外で鍋を洗っている中で周りを見たが

既にそのほとんど人間が・・・いなくなっていた。

あのまずさに全員が逃げたのだろう、今頃保健室は満席だろうなと
思っっていると天草は鍋に水を入れ直して今度は鉋路昆布を入れてそ
こからは・・・

普通の鍋料理がやっど執り行われることとなったのだ。

襲来

「それにしても誰だよあんな闇鍋思いついた奴はよ。」

「本当よ！ああまだ舌に味が残ってるく〜。」

松葉はキンジの言葉に応えながらも舌に残る嫌な味が残っていることに最悪だと思っていると天草が鍋を調整して・・・こう言った。

「はい、灰汁は取りましたので皆さま頂きましょう。」

そう言うのと全員が手を合わせてこう言った。

「」「」「」「頂きます。」「」「」「」

そう言うのと後片付けが終わって今帰って来たカイズマスと共に食事が始まった。

「我からはA5ランクの肉を持ってきたぞドンと食うが良い！」

「僕からはお世話になってます農家さんから規格外だからと言われて

捨てる予定でした野菜を貰いました。」

「魚は俺とダイアナが選別したぞ。」

「私からはマロニー。」

「私にもやしを。」

「デザートは私達海外組で残った者達で作ったから食べておけ。」

そう言うて出てきたのは・・・青りんごゼリーであった。

そして全員美味しく食べて解散して・・・そこから難問だったとはまだ

誰も知る由もなかった。

「はあ・・・食った食った。」

「食べ過ぎだぞ遠山、皆黙って食べる訳ではないぞ？」

「そうだけだよ？滅多に喰えねえ肉だったから美味くてついな。」

ミシエラに向けてキンジがそう言いながら歩いていると・・・ダイアナが

こう呟いた。

「ご主人様・・・敵の気配を感じます。」

「ああ・・・嫌な予感がしているって思っちまったぜ、場所は分かるか？」

キンジがそう聞いた瞬間に・・・ダーん！と言う音と共にメーヤが大剣で何かをばきん！と弾く音が聞こえた。

「!!!」

全員構えてミシエラとクリスはペンダントを取って構えるとキンジは

メーヤに向けてこう聞いた。

「メーヤさん！今のは何処か分かりますか!？」

「今のは・・・前から3つ目のビルの屋上！剣で弾いた弾丸の角度から

恐らくそれです!!」

そう言った瞬間にキンジはインクルシオを纏うと

赤外線センサーモードにして辺りを見回すと・・・言ったビルから裏側から

出てくる人影を見つけた。

「そこか!!」

キンジはそう言ってノインターターを持って逃げる相手の手前に向けて投げると相手は動きを一時的に止めた瞬間にキンジはビルの壁と壁の間を跳躍して

その相手を・・・抱き着いた。

「よしーこれで逃げられ・・・!!」

キンジは自身の腕が掴んでいる・・・柔らかいナニカを感じてヤバいと思っ

離れようとした瞬間に・・・叫び声が聞こえた。

「キャアアアアアア!!」

何処からか聞こえるその声に何だと思っているとキンジが墮ちた場所付近で

誰もいないのに・・・声が聞こえた。

「ちよつとあんた胸触るなんて何考えてんのよこの変態!!」

そう言っている間にその姿が・・・まるで蜃気楼が晴れるみたいに姿を現したのだ。

これは何処かで見たことあるぞと思っているとその全体像が明らかとなった。

金色の髪のスインテール。

年齢は自分と変わらない位。

瞳の色は緑色

メリハリがしっかりしていて・・・両腕で隠しているが隠しきれない巨大な胸部

まるで猫みたいいなヘッドセットをつけた女性が現れた。

するとキンジはええとと云ってこう聞いた。

「悪い態とじゃなかったんだ・・・」

「当たり前だよ！隠れてたこっちにも非はあるけどこれは無いよ!!」

そう言うと金髪の少女はキンジに向けてこう言った。

「私の胸揉んだんだから責任取ってよね!!」

「責任って隠れてたお前が」

「ともかく！責任とってよね!!」

そう言いながら腹が立ってんだぞーと怒るような仕草を取っていると

キンジは・・・少女に向けてこう聞いた。

「それで・・・誰なんだお前は？」

そう聞くと少女はこう答えた。

「アメリカ武偵でこっち風に言えばアムドの『ポーナ・ネイト』……

……アンタらの仲間を仕留めて遠山キンジ、アンタを誘い出せつ
て

「言われたんだ。」

敵地へ

「俺を誘い出す・・・他の皆は!？」

どうなってるんだと言うとポーナはこう答えた。

「分からないよ・・・だけど集合地点は分かっているからそっちに行くよ。」

ポーナの言葉を聞いてキンジはそれが本当なのか？嘘なのかと思っている・・・ミシエラがこう言った。

「遠山、ここは言う事聞くぞ。相手が分からない以上

こちらも対応のしようがないからな。」

「・・・だけどアイツらがやられたって証拠も何も無いぞ。」

「だからこそだ、我々は奴らの情報を知らないのだ。奴らの正体を知るには敵地に乗り込むことを是としなければいけないのだ。」

それを聞いてキンジはどうしようかと思っているが暫くして・・・こう答えた。

「・・・分かった、連れて行ってくれないか？」

「良いけど・・・胸揉まないでよ。」

「もう揉むか!」

それを聞いてキンジはふざけるなど思っていると・・・

メーヤとクリス、ミシエラ、ダイアナがジト目で睨みつけているとキンジは

何だよと言うと4人はそれぞれこう答えた。

「遠山さん・・・汚らわしいです。」

「キンジさん・・・最低です。」

「お前・・・何やってんだ？」

「ご主人様・・・良ければ今夜私を伽に」

「待ってやめろってダイアナお前は黙ってる!」

ジオ品川

バブル期に着工されたがバブル崩壊における資金難により会社は倒産し

その後逆円錐形に大きく掘った状態で放置されていたがその後再開発と称して

半ば無理やりに造られたが空き地、廃ビル、掘削工事中に中断された

地下道等が多くある土地柄都市屈指の治安が悪く裏社会の人間たちの

たまり場となっていたのに・・・今や更に酷い光景となっていた。「何があったんだ・・・これは。」

キンジはそう言つてその惨状に・・・口を開ける事も出来なかった。辺りには血がへばりついており中には死体が多くあった。

無論こう言う所では裏社会の抗争で死人はよく出るがそれでも・・・酷い物であった。

するとポーナはその光景に対して・・・こう呟いた。「こんなのアメリカの裏町じゃよくあったよ・・・けどここ迄・・・!!」

酷くなかったと言いながら周りを見渡していた。

いかがわしい店の看板にはやくぎの死体が貫いていたりネオンサインは

消えていた代わりに・・・血がへばりついていたのだ。

然も斬り殺されていたり撃ち殺されていたり殴り殺されたりと酷い物であった。

そんな中でその7階にある贅の限りを尽くした外装のビル前に付くと・・・

正面玄関には誰もおらず其の儘中に入るとポーナの道案内で

其の儘シアタールームに入るとそこで目にしたのは・・・ボロボロになった天草と何故かそこにいた理子と松葉、詠、カイズマスが倒れているのを見ると

キンジは慌てて天草達の所に駆け寄ろうとすると・・・ダイアナが

前に出た瞬間にがきん！と音がしたのでキンジは何だと思っているとダイアナがこう言った。

「ご主人様気を付けてください、敵がこの中に既に潜んでおります。」

「!!」

それを聞いてキンジはインクルシオの剣を構えると・・・ぼやーつと体が

見え始めたのだ。

そこから現れたのは・・・プロテクターを身に着けた・・・

あの時のピエロみたいな服を着ていた男であった。

そしてもう一人現れると・・・男の方がこう言った。

「ワシントン・コロンビア特別法5509D、上院邦8807。ワシントンDCより

ライセンスを受徳した武偵はいかなる状況においても人間を殺すことを禁ずる・・・まあ俺達は附則で認められてるしどうせここはこの国の政府が新しく作り直して

遊園地とかに作り直すらしいけどまあ俺達には関係のない事だな

!!」

ギヤハハツハと笑っていると・・・もう一人現れたのだ。

舞台上にある渡された照明用のレールの上から声がしたので何だと思っているとそこにいたのは・・・少女であった。

自分よりも一つくらい年下の茶髪の少女が現れると少女はキンジに近づいて・・・こう呟いた。

「・・・やっぱり・・・サイコー、背徳く〜。」

そう言うのを聞くとポーナが全員に向けてこう言った。

「もう良いでしょ？ 私達のやるべきことは終わったんだから さっさと帰るわよ。」

そう言う・・・男の方がポーナに向けてこう言った。

「うぜえよポーナ、って言うかお前負けた癖に何指揮してんだよ？ さっさと失せろよ。」

「はああ!!何言ってるのよ!こいつ滅茶苦茶強いしそれに・・・」

ウウウウウウ／＼／＼／＼／＼

ポーナはそう言いながら胸を押さえつけるかのようにキンジを睨みつけるが

言いにくいなとキンジはそう思いながらどうするべきかと思っている。少女は・・ポーナに向けて攻撃しようとするのを感じてキンジはインクルシオの剣で

受け止めると少女はこう聞いた。

「何でそいつ助けるの『お兄ちゃん？』？どうせ敵なんだから良いでしょう？」

「お兄ちゃんって俺は妹とかいねえよ!!」

「ええ〜？私達姉弟何だよ血の繋がった」

「俺には姉弟なんて・・いねえって言っただろうが!!」

そう言うときンシエラがキンジに向かってこう言った。

「遠山逃げるぞ！ここから逃げるぞ!!」

キンジはその言葉を聞いて・・ポーナをお姫様抱っこして抱える
と

ポーナは赤面してキンジに向けてこう言った。

「ちよちよちよアンタ何して」

「死にたくなけりやあ逃げるぞ!!」

そう言うときンジ太刀はミシエラが出したダイヤモンドダストの霧で

隠れるかのように天草達と共に消えて出て行った。

「良いのかよ『ジーフォース』？アイツ逃げたぞ？」

「良いじゃない『ジーサード』！これでさ・・楽しみが増えたんだから!!」

そう言う少女の言葉は悪びれなくそして・・悪意が滲み出ていた。

会議

あの後キンジ達は先ず天草達を病院に送った後ポーナを尋問するがために

ミシエラ達はキンジの家に向かつて行つた。

「それでだが・・・アイツら一体誰なんだ？」

キンジがそう聞くとポーナはこう答えた。

「・・・知らないよそんなの。」

「貴様らは仲間のはずであろう？ 知らん筈ではない？」

ミシエラがそう聞くとポーナはこう答えた。

「知らないって本当に！ 名前どころかアイツが何処にいたのかさっぱり

分からないんだよ!! 上からの指示でアイツらと一緒にこの日本に来てそれで・・・あんな惨殺をし始めてやめろって言ったんだけどアイツらライセンス持ちでそれにあの2人気味悪かったし。」

そう言いながらも段々と声が小さくなるのを感じてそうかと思つていと・・・

キンジはポーナに向けてこう聞いた。

「お前・・・これからどうするんだ？」

「知らないわよ、もうあいつらの所に戻るなんて嫌だし。」

ポーナがそう言うとキンジは・・・こう言つた。

「だったらここに住むか？」

「!!!」

ミシエラ達とポーナはそれを聞いて驚いていたがキンジはこう続けた。

「アイツらが出て行くまでの間だが匿つてやるよ、まあ済むにはちよつと手狭だけどまあ大丈夫だろ？」

「だが・・・此の儘奴らが見過ぎくと思うか？ 奴らはアメリカ大使館から

圧力を加えて我々の居場所を特定される危険性があるのではないか？」

ミシエラがそう聞くと・・・ダイアナがこう答えた。

「でしたら方が一に備えてM I 6に頼んでポーナさんの監視をして貰えば

宜しいのでは？」

「・・・良いのか？」

助かるがと聞くとダイアナはこう答えた。

「構いません、ご主人様のお役に立てるようになるのがメイドのお務めです。」

それを聞いてそうかと思っていると・・・ポーナがキンジに向けてこう聞いた。

「・・・良いのここに居て？」

「まあ・・・袖振り合うも他生の縁だ、ちよつとは甘えても

罰当たらねえだろ？」

「・・・ありがとう。」

ポーナはお礼を言うのとそれじゃあと行って全員が眠りについた。

翌日この日はハロウィンと言う事もあってキンジ達は仮装して

(武偵校からの指令) で出て行くと全員かそうで出て行った。

キンジⅡ囚人衣装

ミシエラⅡ右目の下に雪結晶のキラキラシールを貼って、

黒いとんがり帽子を被って先つちよに星の付いたステッキを持った

見たまんまの魔女

ダイアナⅡ狼の毛皮衣装 (見た目はF a t eのマシユ)

クリスⅡ着崩した衣装に鼠の耳が付いた奴

メーヤⅡ胸元を大胆に露出させたドレス

ポーナⅡメツキの鎧

そして目の前には・・・玉藻が座っていた。

「よく来たの遠山侍、仲間については残念じゃがまあ死んではおらんし

何とかなるじゃロウ、それでじゃが・・・こ奴ら連れてきたぞ。」

玉藻がそう言つて目の前に見せたのは・・・仮装したアリア達であった。

「何よアンタ！アンタが何で来てんのよ!!」

「あれれれキー君じゃああーりませんか！シー君は何処かなあ？」

「キンちゃんやつと会えたね！まあ邪魔者はあるだろうけど・・・直ぐにね。」

「・・・」

約一名ヤバイ目つきをしているがキンジは嫌だなあと思っている

と妖精の格好をしたアリアがキンジに向けてこう聞いた。

「そう言えばだけどアンタの仲間やられたんだっけ？そんで半壊つて

大したもんよね本当に。」

「手前・・・!!」

キンジは天草達が馬鹿にされていると思つてギロリと睨んでいると・・・玉藻がキンジに向けてこう言った。

「すまぬの遠山侍、今回こ奴らと呼んだのはこ奴らも師団に

所属しておるからじゃ。お主等とは浅はかならぬ因縁がある事は聞いておるが

ここは大人しく手を組んでくれ。会議のメンツは重要じゃからの。」

玉藻がそう言うのとアリアに向けてこう言った。

「アリアお主もじゃ、こ奴らのやられた仲間達は必死の戦いじゃつた。

不意打ちだったとはいえ戦士に対しての流儀を欠けて追つてはこれからの戦に

障害しか残らぬ、同じ師団の面々としてそこは改善せん後々で禍根を

残す羽目となるぞ?」

「ぬぐ……ふん!」

アリアはそれを聞いて鼻息荒らして顔を背けると玉藻はやれやれと言つて

キンジ達に座らせるとこう言つた。

「それではこれより会議を執り行ふ、内容は……アメリカ武偵についてじゃがキンジお前さんは確か一人捕虜にした様じゃな?」

玉藻がそう言うとその視線の先……鎧を身に纏つたポーナに目を向けると

ポーナは……頭の鎧を剥ぎ取つてその顔を曝け出すとポーナはこう聞いた。

「誰なの遠山キンジ、このガキ?」

「ああ……玉藻つて言つてちよつとな……」

「ふ……、そんでき。あのちびっこ一体誰?」

「誰がチビデスツテ誰よアンタ!」

アリアがそう聞くとキンジはポーナの事を軽く紹介するとアリアはふ……んと

目付き鋭くさせているとキンジはこう続けた。

「それじゃあだが会議についてデアイツらと会つたが……ヤバい奴らだ、

ジオ品川にいたヤクザ共が全滅していたんだ。」

「!!!」

それを聞いてアリア達は驚いているがそれにと言つてこう続けた。

「奴らはアメリカから人殺しのライセンスを持つているんだ、

奴らは俺達武偵の……敵として考えた方が良いぜ。」

それを聞いて全員がう……んと思つているが玉藻はこう言つた。

「それでもじゃが奴らの実力は既に強いようじゃ、ここはポーナを味方に

付けられたことが大きな収穫じゃつたがそこでじゃ……儂はお前達

に

提案したいことがある。」

それを聞いてキンジは嫌な予感がすると思っ
ていると・・・玉藻が
こう提案した。

「アリアとキンジ・・・お前達同盟を組んで奴らを倒せ。」

同盟について

「俺とアリアが……」

「私とキンジが……」

「同盟を組む……!!」

「無理だろそんなの！俺とアリアはとんでもない程仲悪いしそれに俺達は

コンビ組んだ事なんて一度もないんだぜ?!」

「じゃからこそじゃ、お前達が組まなければあのジーサードとジーフォースに

勝つ方法が見つからないのじゃ。」

「確かに……そうかもしれないか……いや無理だ、確実に負ける確率が」

「分かったわ、組みましょう。」

『!!!』

アリアの言葉を聞いてキンジ側が驚いているがアリアはこう続けた。

「そいつらの強さキンジ以上なんでしょう？だったらそいつを倒せれば

アタシは……曾お爺様を超えたことになるわ。」

「アリアよ、お主の曾祖父は確かに強かった。じゃがやり方を間違えては

それは間違えた結果を招く」

「……それが何ヨ？例え間違えていたとしても私はその答えしか興味がないわ。」

「経過ではなく結果か、まあお主はお主のやりたいようにすればよからうて。」

それでじゃがお主はどうするのじゃ？戦力が半減になつとるこの

状況で奴らと戦って勝てるのか？」

玉藻がそう聞くとキンジは・・・畜生と思いながらこう答えた。

「・・・分かった、だけどこいつらが」

「分かつとるわい、お主等はお主等のやり方がありおるわい。それで互いに

足を引つ張り合わない様にするのじゃ、それにしても敵方の一人をよく引き込めたのウ？」

玉藻がそう言つてポーナを見つめていると・・・ポーナは何？と思いながら

見ているとこう続けた。

「全く見目麗しい者達を悉く手中に収めるとは中々どうして上手くいつておる、雪音クリスにその娘にジャンヌ。全くどうやって手中に収めていたのか

見てみたいのウその方法。」

「・・・俺だつて聞きたいよ、何でこうなっているのか。」

キンジは俯きながらそう言うのを聞いて玉藻は少し可哀そうに思ひながら

こう言つた。

「それじゃあ頑張るんじゃぞ、敵はアメリカの最新技術の塊を保有しておるからこちらも武器を揃えるべきかと思うが。」

「それでしたら『M16』から武器を提供出来ます。」

「こっちもアメリカの知り合い頼つて武器揃えておくよ。」

「私の方でもヴァチカンから武器を提供できないかどうか聞いてみましょう。」

外国勢で然も組織所属の面々から言つたその言葉にキンジはマジかよと

そう思つていると玉藻がこう言つた。

「それではこれで同盟は締結じゃ、後は各々の思うがままに行動せよ。」

そう言つて出て行くのを見るとキンジはアリアに向けてこう聞いた。

「それでだがどうやって戦うんだ？アイツらの実力は俺達は見ているけど」

厄介過ぎだしそれに連中はポーナから聞いた話だが殺しのライセンス持ちだから

気を付けろよ。」

「殺しのライセンス持ちね・・・となると必要な物があるわ。」

「何だ？」

キンジがそう聞くとアリアはこう答えた。

「武偵弾よ、あれをそれぞれワンセット要求よ。金はポケットマネーから

出すわ。それと武器なんだけど登録させたいのよ、銃器を幾つか。」

そう言うと言つてこう続けた。

「相手は最先端技術をたんまり持っているのだからこっちは高威力な武器を

使うわよ、先ずはレキに対しては『バレットM82』、理子には銃器検査登録制度を使って散弾銃の使用許可、白雪に対しては『M60マシンガン』を

それぞれ提供させて欲しいのよ。」

「!!お前それ全部対人戦に対して禁止兵器じゃねえか!?降りると思つてんのかそれが全部!!」

キンジがそう言うが当たり前だ、それぞれ全部が戦争用の兵器なのだから。

「降りさせるのよ、MIGのダイアナにヴァチカンのメーヤがいるつて事は

海外から圧力を加えることが出来るわ。それに敵の情報を知っている

ポーナ？だっけ、そこから相手の弱点を聞き出せれるはずでしょ？」

「お前自分が何言っているのか分かっていいのか・・・ポーナに裏切れつて

言っているようなもんだぞー！」

それを聞いてキンジが・・・まるで自分事のように怒っているとポーナは・・・

キンジに向けてこう聞いた。

「何で・・・アタシの事をそこまで・・・」

「当たり前だろうが！例えお前が敵だとしても・・・俺はお前に対して守るって約束しちまったんだ・・・だから最後まで俺はお前を守るぜ・・・!!」

「キンジ・・・／／／／／／／／」

ポーナはキンジのその言葉を聞いて赤面して顔を俯かせるのを見て・・・白雪は何か呟いていた。

「ウフフフフ・・・キンちゃんに群がる悪い虫がまた一人・・・

(∩∪、*)ウフフ。」

黒い笑みを浮かべながらそう言うのを聞いてミシエラ達は少し顔を

引きつらせていた。

するとアリアはこう言った。

「・・・分かったわ、だけどこっちは勝手に奴らを調べるからそのつもりで

いなさいよ。それと今言った武器は必ず許可書出して貰う事!!良いわね!？」

アリアがそう言って・・・妖精姿だったが出て行くのを見ると

キンジは全員に向けてこう言った。

「じゃあ俺は病院に行くわ、松葉達の見舞いしなきゃいけないな。」

「ならば我々も行こう、我々は仲間なのだから。」

ミシエラがそう言うのと全員納得して行こうとすると・・・理子がこう言った。

「じゃありこりんも行くね！シー君のお見舞いしたいし!!」

そう言う・・・白雪もこう言った。

「私も行く！キンちゃんがまた狙われる可能性があるし!!」

それにとまって・・・ミシエラ達を睨んでいるとキンジはしかたいと行って

こう言った。

「じゃあ行くか・・・仕方ねえが。」

そう言うのとダイアナが使っている車とタクシーを使って病院に向かって行った。

病院にて

キンジ達は病院に行つて天草達のお見舞いに向かつて中に入ると・・・全員何故か病院服ではなく仮想衣装になっていた。

天草Ⅱ白衣の医者

松葉Ⅱ猫娘

カイズマスⅡFateのカイズマスの衣装

詠Ⅱサキュバス

天草はキンジから玉藻の提案でアリア達との同盟について報告すると

天草はこう答えた。

「・・・正直もしこの体でなければすぐにでも参戦したいところですが

この状態では戦えませんしそれに元々神崎さんの緋緋色金を元の戻すというのが

目的ですから対象が近くにいれば守れやすいですね・・・

この際フォーメーションは組まずに互いに利害の一致という形で考えた方が

良いでしょうね。」

天草はそう言いながら今後について考えていると・・・松葉はポーンに向けて

こう聞いた。

「それで、アンタはどうするのよ？どちらにしても裏切りになるんだから

あなたの立場厄介めいたことになるわよ？」

「・・・確かにそうかもしれないけど・・・アタシああいう奴ら嫌いなんだ、

力づくで他人を屈服させて逆らえば殺すような武偵の恥更しみたいな奴。」

「・・・まあ良いけど後で連中が持っている・・・アンタも持っているから

それアタシの知り合いのアムドの奴に紹介状書いておくから
そいつの所に行きなさい、銃器とそうね・・・その武器に対抗でき
る奴を

見繕わせるけど金は半々よ。」

「分かってる、寧ろ私がお願いしようかと思ってたんだから。」

ポーナは松葉に向けてそう言うと言ったのと言ってこう続けた。

「それじゃあこの話はこれで終わりだけど一つ言うわよ。」

「?。」

ポーナは何だと思っていると松葉は・・・重く口を開けてこう言っ
た。

「キンジなんだけど・・・アイツとは関わるとしても少なめにしなさいよ、

下手したら沼に嵌るみたいにアイツに心許して最悪どつかの誰か
さんみたいになっちゃうんだからね!」

松葉はそう言いながらも・・・赤面してそっぽを向いた。

「?。」

一体何でと思っているが・・・数日後にそう言う意味だったんだな
と

確信する日が来るとは思ってもみなかった。

そして暫くすると・・・病院の扉が開いて開けたのが・・・

武偵校の制服を着たジーフォースであった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

それを見て全員が武器を構えるとキンジはジーフォースに向けて
こう聞いた。

「お前・・・何しに来たんだ。」

「私達を今度こそ殺す為ですか?」

詠がそう言いながら近くにある天草の刀の一本を抜くと・・・

ジーフォースはキンジに対して・・・屈託のない笑顔を見せると

キンジの方目掛けて歩いて・・・ダイアナがナイフを投げたが

それをジーフォースは・・・何も見ずに取るが其の儘ダイアナは

大剣を抜いた瞬間にジーフォースは持っているナイフで応戦した。
がきん！という金属同士がガチ合う音が病院内に響き渡るとダイ
アナは

ジーフォースに向けて攻撃しながらこう聞いた。

「何が目的なんでしょうか？」

「ええ？それ聞いちやうのオネエサン??・・・」

・・・『妹』が『お兄ちゃん』に会うのに理由なんてあるのかな
!？」

「其れは貴方だけでしょう?ご主人様は貴方の事を家族とは思
っておりません。」

「なあに言ってるのかな?私はちゃんとお兄ちゃんの妹なんだよ?
ほら、

血縁関係はちゃんと」

「そんなの関係ないよ。」

「・・・はあ!？」

ジーフォースは横から言う・・・ポーナを見てガンギマリするがポー

ナは

こう続けた。

「家族って言うのはさ、血じゃない・・・心と心の繋がり何だよ！
アンタの言っているのは単なる自己満足の言葉だ!!」

ポーナはそう言いながら腰から拳銃を構えた。

「(多少改造されてるがあれは『ウインチェスター・M1887の
『ソードオフ・ショットガン』のリボルバー型が？弾込めの時間短縮を
意識しているのか?)」

キンジはそう言いながらその拳銃を観察していると・・・ジーフオー
スは

ポーナに対してこう言った。

「へえ、よく言うね弱いくせに・・・それだったら・・・

アンタはもういらないね♪」

「!」

それを聞いた瞬間にジーフオースは持っているナイフを使って・・・
ポーナ目掛けて放つと同時に背中から大型のブレードを出して
斬りかかろうとした。

「(ヤバい！ナイフを避けるとブレード、避けなかったら急所!!)」

ポーナはそう思いながらどうしようと思った瞬間に・・・キンジが
ナイフを

叩き落とすとミシエラとメーヤがブレードを防いでクリスが

ジーフオースの頭めがけて拳銃で放とうとしていた。

「・・・お兄ちゃん、何でそいつを守るの?」

理解不能だよ♪という・・・キンジはこう答えた。

「簡単だ、守るって決めたからな。俺は、だからこそ俺は

ポーナを守るために全力で戦うって覚悟決めてんだからな。・・・
例えお前が

俺の妹だろうと何だろうと俺の仲間には指一本触れさせねえぜ!」

それを聞くとジーフオースは・・・ブレードを収めるとミシエラ達
に向かって

こう言った。

「私ってさ、鼻がよく聞くからさつきお兄ちゃんの家に入った時お
前達の

匂いがしたけどさ・・・家族じゃないのにいるなんて『あり得ない』・・・!!

家において良いのは家族だけなんだ!!だからお兄ちゃんは必ず取り戻すから・・・覚悟しとけよ・・・!!」

そう言いながらジーフォースは・・・部屋から出て行った。

調査依頼

その後キンジ達は病院から帰宅して今後のことを話し合つて次の日。

「初めまして、私の名前はポーナ・ネイト！皆仲良くねえ〜!!」

《《イいええええええええええい!!》》

それを聞いて生徒全員（特に男子勢）が勢いよくそう答えた。

そして高天原先生はポーナに向けてこう言った。

「それじゃあ席は・・・ミシエラさんの右隣ね。」

そう言うのとポーナは其の儘席に座つた。

そして昼休み

「なあなあキンジ聞いて良いか？」

「何だよ武藤?」

キンジは詰め寄つて来た武藤に向けて何だと聞くと武藤がこう聞いた。

「お前さ・・・妹ツている?」

『!!!』

それを聞いてミシエラ達も驚いていると武藤はこう続けた。

「何でも未だ14歳なんだけどアメリカからのインターン生で滅茶苦茶可愛くて

それだけじゃなく滅茶苦茶強いらしいんだけどお前となんか関係

あるのか？」

そう聞くとキンジはこう返した。

「……いや、俺は知らねえよ。」

「そうか？じゃあ名字が同じだけって事か。」

其れじゃあなあと言つて武藤が出て行くのを確認するとキンジは……

ミシエラ達と一緒になつてこう言つた。

「どう思う？」

「恐らくは本人と見て間違いないかもしれん、強いと言つていたからな。」

天草達をたった一人で相手どれる程ともなればその実力は高いはずだ。」

「何故来たのでしょうか？」

「まさかアタシを殺すために……!!」

「待つて、それだったらもう手を出しても可笑しくないはずだよ？
なのに何で未だ動いてないんだろう？」

金次の問いにミシエラ、ダイアナ、ポーナ、クリスの順で互いに
そう言つていると……キンジはこう呟いた。

「……柳生、いるか？」

そう聞くと背後から……声が聞こえた。

「何時でも宜しいです師匠。」

柳生がそう言つてトマトソースたつぷりのスパゲッティを食べて
いるとキンジは柳生に向けてこう言つた。

「依頼したいことがある、その俺と同じ苗字の奴について調べて欲しい。」

「……御意、依頼料は何時もの口座に。」

「ああ、分かっている。」

そう言ったと同時に柳生は・・・何処かにへと姿を晦ました。

「あれが貴様のアミカか、中々優秀そうだな。」

「まあな、ちゃんとと言う事聞くとし実力も申し分ねえのに未だ俺を慕っていやがるから何でって思うぜ。」

キンジがそう言っているとポーナはこう答えた。

「多分だけどき、信頼してるんじゃないのかな?」

「?」

「師匠って言っているけど尊敬してるし信頼もしている、

そういう人って中々いないしキンジって何だかさ・・・誰かを守りたいとか

助けたいとかを地でやるような・・・裏で何考えているとかそういうのが無いから頼られるのが嬉しいって思うんじゃないのかなって・・・どしたのみんな?」

ポーナの言葉を聞いて全員が（。ㇿ。）ポカーンとしていると・・・ミシエラがこう言った。

「お前普通に考えてだが・・・よくそんな恥ずかしい事を、それも男に対して

プロポーズみたいなことよく言えるなと思って。」

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

それを聞いてポーナは赤面して俯くとキンジを見て・・・慌ててこう言った。

「ああああれどき、今のはそう・・・あれよあれ!そう、

それがキンジの良い所って言うか何て言うか・・・あう／＼／＼／＼

等々ポーナはトマトみたいに顔を真っ赤にして俯いてしまったのだ。

そして放課後の公園に於いてキンジは柳生の報告を聞く為に向かつて行くと・・・キンジは柳生を呼んだ。

「柳生、今何処にいるんだ？」

そう言う・・・こう答えた。

「師匠、既におります。」

そう言うと木の上から現れたのだ。

「柳生、そいつから疑われてなかったか？」

「大丈夫です、万が一を込めて他生徒の顔のマスクを付けて成りすまして情報を引き出してきました。」

それがこれですと言って出してきたのは・・・転入生の資料であった。

遠山 かなみ

14歳

アメリカ武偵庁より留学依頼で日本に来た。

科目 アサルト・CVR

家族構成 兄 遠山 金一

「何勝手に俺と兄さんの名前使ってんだあいつ!!」

それを見てキンジは何て奴だと思っていると柳生はこう続けた。

「その御言葉を聞く限り如何やら嘘であるようすな、如何やら先生方の中にも疑っているお方達がおるようですが放置する辺り害はないと考えたようです。」

「全く、何考えているんだあいつは。」

キンジがそう言うのと経歴を見て・・・頭に?マーク付けてこう聞いた。

「なあ聞いてえんだが・・・12歳で大学卒業して・・・マジか?」

「そちらは本当です、衛星通信を介した授業でマサチューセッツ工科大学を

卒業していることは既に確認はとれているそうです。」

「マジかよ。」

「マジです。」

柳生がそう答えるとこう続けた。

「そういえばデスが女子とは話しますが男子とは距離を置く傾向が見て取られました。」

「男子とはか・・・掴みどころがねえな本当に。」

「師匠、後これは忠告ですが彼女は合理的思考が強い為・・・何をするか

分かりませんのでご注意を。」

柳生はそう言いながら・・・近くの茂みに目を向けると

何やらガサガサと音がしたと同時に音が消えるのを確認すると柳生はこう言った。

「師匠、今後はおひとりで歩かれるのはやめたほうが宜しいかと。」

「?・・・分かった、じゃあな柳生。」

「では。」

柳生がそう言って離れるともう一度その茂みの方に目を向けて……
立ち去った。

「あぶなああい、あの子結構やるじゃん。」

そう言いながら藪の中で女の子の声……誰もいないのに聞こえていた。

そして周りには……折れた枝しかなかった。

買い物

その翌日、キンジはポーナと共に身の回りの物を買うためにお台場で

買い物をしていた。

他の武偵校生達からあらぬ噂を出さない為に要注意しながらポーナの服や日用品

そして・・・下着売り場

「いや何でだよ！」

「・・・入らないでよねキンジ。」

「入るか！」

キンジがポーナに向けてそう言つて下着売り場前で仕方ないと思つて待つて

暫くすると・・・ポーナがいそいそと現れたのだ。

「お待たせ！後はもうないけど・・・どうする？」

そう聞くとキンジはそうだなと言つて・・・こう答えた。

「さつき映画の時刻表見たがもうすぐ始まりそうなやつ一つ見つけたからそれでも見るか？」

「オツケー！じゃあそれね!!」

ポーナが了承して其の儘映画館に向かつて行つた。

そんで映画だが・・・これがあれであつた。

タイトル『情けは武士の誉れ、慈愛は姫君の特権』

この映画は頼りないが心優しい侍がとある事情で我儘な姫君を更生させる中で

恋愛に迄発展しつつ笑いを織り交ぜた物語である。

それを見終わった後キンジとポーナはコーヒー屋でひと時を楽し

みながら

先ほどの映画についての感想を述べていた。

「それにしても良かったなあ映画。」

「うん確かにね、時代劇って言うから堅苦しいかなって思ってたけど」

今風にアレンジしている所があったしああいうのも面白かったよ。」

そう言いながらエスプレッソを飲んでいる中でブラックコーヒーを飲んでいる

キンジは携帯電話から音が鳴るのを感じて何だと思っていると・・・ダイアナからメールが届いたのだ。

彼女は今イギリス大使館にいるM I 6の職員にアメリカ武偵局から出向してきた

男の方の捜査を頼んでおりその結果をキンジにメールで送信したのだ。

内容はこうだ。

『ご主人様、先ほどですが男についての報告がありますのでお帰りになった際にお伝えしておきます。』

PS・もし朝帰りするのでしたら今のうちに精の付く食べ物を所望したほうが

宜しいかと思われます。』

「・・・ナンダこれ?」

キンジは取敢えずまあ良いかと思いつながらポーナに向けてこう聞いた。

「そんじゃあ昼飯なんだが・・・奢るぜ何処が良い?」

そう聞くとポーナはこう答えた。

「ええ良いの!そんじゃあねえ・・・ステーキ!!」

そう言うのと近くにあるステーキハウスでそれなりに高いステーキ

を食べて

家路についた。

「お帰りなさいませご主人様、ポーナ様。今夜の夕食ですがハンバーグにするかそれともひき肉の入ったかぼちやの煮物にしようかと思われませんが

どういたしましょう?」

そう聞くとキンジは後者の方にするというのでダイアナは畏まりましたと言つて

台所に向かおうとするとキンジはこう聞いた。

「それとだがアイツについて何か分かつたって言つてたが何か分かつたのか?」

キンジがそう聞くとダイアナはこう答えた。

「はい、でしたら・・・今すぐにでも。」

そう言うのでダイアナは全員を呼び出してとある資料を差し出した。そこには日本語で書いてこう綴られる。

『他国危険人物調査書・アメリカ編・Bランク機密文書相当』

「Bランク機密文書つて・・・何だよこいつは・・・!!」

キンジはそれを見て驚いているとダイアナはこう答えた。

「こちらに書かれていらつしやいますのはアメリカにおける

機密についてでありましてBというのは大統領と上層部全員が知っている報告書でございます。」

「大統領……一体どんなものなの？」

クリスがそう聞くとダイアナは資料を取り出してそれを全員に向けて見せた。

「名前ですがコードネームは『GⅢ（ジーサード）』、生まれはロスアラモスの日本人とアメリカ人のハーフ。アメリカでは名の知れた武偵でランクは……

Rでした。」

「R……だと……!!」

キンジがそう呟くとポーナは驚いた様子でこう言った。

「嘘でしょ?!それって確か世界でたった7人しかなかったことが無くて

一人で一個大隊相当の戦力になるって有名どころじゃないの!？」

そう言うときミシエラがこう続けた。

「然しそれほどの男が何故この極東戦役に?そこ迄の実力であるとするなら

直ぐに行動しているはずだ。」

「それですが恐らくは……大統領命令かと思われれます。」

これがその写真ですと言って見せたのは……第44代大統領のボディーガードをしているジーサードの写真であった。

「マジかよ……相手はアメリカと相手どるような物じゃねえか……!!」

キンジがそう言っているがダイアナはこう言って否定した。

「いえ、彼らはアメリカに所属しているのではなく契約としてだそうです。」

「契約……一体何していたんだ連中。」

そう聞くとダイアナはこう答えた。

「ではまずですが皆様はイ・ウーの最終目標は何か知っておりますか?」

そう聞くとミシエラはこう答えた。

「互いに情報を共有し合って天才を造る、そうだったな?」

「はい、そしてその思想は戦後敗北した後にドイツからアメリカに

亡命した

「科学者によって明らかとなり今なおアメリカで研究されています。
作戦名は『ロスアラモス・エリート』……」

科学の力で天才を造らんがために人工子宮から生まれた人間を使
うという

「神の所業を犯したのです。」

報告かい

「科学って……つまりあいつらは人工的な出産で誕生したって事か？」

「ハイそのとおりです、彼らは人工出産で生まれる前に遺伝子的改造を

施されて産まれましたが彼は成功例であると同時に失敗例だったのです。」

「失敗例って……何があったんだ？」

キンジがそう聞くとダイアナはこう続けた。

「彼は……脱走したのです、資料に於いては発狂したと書かれていますが確かにそうだったのですよ……当時にいた研究者たちを皆殺しにしたのです。」

「皆殺しって……そんな！」

ポーナは嘘でしょうと思っているとメーヤはこう呟いた。

「命とは主がその後意志を持って誕生し、そして死した時に主の下に送られるべき言わば主の分身その物。それを人の手で生み出すことは全ての自然に対する

侮辱その者です、彼らはその自然の倫理に背いた罰でしょう。」

「お前なあ……ここでもぶれねえな。」

キンジはメーヤに向かってそう言うたダイアナはこう続けた。

「始めは成功でした、IQは290でそれによってロスアラモスの研究機関の教員達を生徒にしてしまい程の学力と十代前半でオリンピックの世界記録を幾つも塗り替えてしまったが故に……彼は烏滸がましくなってしまうし嚴重警戒していた

完全武装の軍人たち全員をその手で殺しました。」

「……何て奴だ、全員を皆殺しかよ……!!」

「そして彼はアメリカ政府から一流の暗殺者たちを送り込まれて

その対象となりましたがその悉くを殺された又は自分の手下として使われています、その後アメリカ政府はこれ以上の人員が不足する事を恐れて交渉して

彼とその仲間達をアメリカ武偵の人間として迎え入れました。」
記録は以上ですねと言うのがキンジからすれば厄介な敵としか言い
ようがない。

だが謎がまだ残る、何故彼らは自分の名前を遠山と言うのか？
そしてジーフォースが何故自分のことを兄と呼ぶのか??

全てにおいて謎が残っているこの状況、どうやって切り抜けること
も

考えないといけない中武力もどうするかと考えている中で・・・
メーヤがこう言った。

「武器の方はこちらから銃弾や武器等を供与出来ます。」
そう言うのとダイアナがこう言った。

「其れとですがジーサードはあの時と或る武器を持って逃げたそう
です。」

「武器？何だそいつは??」

キンジがそう聞くとダイアナは・・・こう答えた。

「・・・最強の人造兵器。『コード《P》』」

そしてジオ品川

「それで、こいつは何時目覚めるんだ？」

「もう少し時間が掛かります。」

研究者の一人がそう言うのとジューサードがこう言った。

「さっさと急げよ、じゃねえと間に合わねえからな。」

「・・・分かつてる、だがあと少し待ってくれ。こいつの調整は時間
が

掛かるんだ。」

そう言うところかよと研究者に向かってそう言って立ち去るの
見て

ジューフォースはそれを見ているとジューサードが入ってこう聞いた。

「ねえさ・・・本当にこいつを目覚めさせるの？」

「あんだ、お前は俺に何か言う事があんのかよ・・・？」

そう聞くとジューフォースはそれに恐怖して慌ててこう言った。

「そそそそそそうじゃないよジューフォース！けどさ・・・あそこから
出した

アイツって使えるの？」

「使えなきやそこ迄だ、俺達の力を見せつけるには

これが手っ取り早いからな。」

そう言うのとジューサードは巨大な容器の中にあるナニカを見ていた。
人型の・・・仮面が付いたバケモノみたいな風体をしたナニカが。

運動会・前編

あれから数日後、キンジ達はカナメの行動を柳生経由で聞いた後作戦を考えて

武装を取りそろえると云った状況を何度か進めている中の日曜日の朝。

武偵校生徒全員における体育祭が行われようとしていた。

このイベントの為に全ての捜査や強襲等は無理やり取り消され

当日の朝5時に集められて教師全員の監視と脅迫の元リハーサルして・・・

直ぐに本番という考えなしな企画であった。

「私達選手一同は、武偵憲章に則り！最後まで諦めずに競技を行う事を

誓います!!」

一年生の選手がそう言うのと生徒達は紅組白組の組み分けでやるのだが

普通考えてみる。

武器があつて暴力団真つ青な戦闘をする武偵校生達が全員・・・非武装なのだ。

嘘だろうと誰もがそう思うであろうが真実なのだ！

何せ今この体育祭を見るがために・・・東京都教育委員会が視察という名の監視を執り行っているのだ。

何で来ているのかというと・・・以前の体育祭で古代ローマの剣闘士宜しくな

過激競技が目白押しで不詳者続出な喧嘩祭りであったのだ。

某国民的学園ドラマの『金〇先生』にあつた不良同士の闘い（どちらかと言えば『東〇ベ』に近い）みたいな感じであつたのだがそれを聞いた教育委員会が

ブちぎれてしまつて監視することとなつたのだが・・・武器を保有する学園の

運動会でそこ迄監視するのかと言いたいくらいであろう。

誰のおかげで平和が保たれているんだと当時の武偵校教師陣は怒り心頭であつたがこのままでは廃校にされかねんと考えてこの様になつた。

『体育祭の第一部は普通と何一つ変わらない競技をする、武器はご法度。』

暴力厳禁とする』という指示が出ている。

然も違反すれば体罰フルコースと言う最悪なものであるが為全校生徒達は

取敢えず第二部までの我慢だなど言つて過ごしている。

第一部後半個人競技にてキンジはチャリで向かっていると・・・ある物が見えた。

既に殆どの生徒達がゴールしているのに白雪だけが・・・酷かった。高飛びのバーに足を引っかけると簿箱に頭から突っ込み、あらゆる障害物で酷い目に遭つていた。

「あいつ・・・運動神経あつたはずだよなあ。」

キンジがそう呟いていると・・・ウオオオオオオオオ

オオオオオオオオオ!

男性陣がある方向を見て吠えていた。

いや、何で吠えていたのかというと・・・理由がこれだ。

「ダイアナさんすげえ！もう直ぐ一番だぜ!!」

「それにしてもあの胸の躍り具合最高だぜ！」

「やば！鼻血出るわ!!」

体操服を身に纏っているダイアナが綱くぐりで颯爽と抜いて行く様を見ているがキンジはそれを見て・・・危ないと感じて逸らした。

先ほどの綱くぐりの際に胸の谷間が地面に接着して潰れて

形を変えていたところを見て血が厚くなるのを感じたからだ。
そしてそこから速攻で逃げて行った。

続けてラケットスポーツのコート

「先輩！私のタオルを使ってください！」

「いいえ私の！」

「私はレモンジュースを持ってきたので飲んでください！」

「私本体を！」

「「お前何しれツと告ってんだ!!」」

「と、遠山！ヘルプミー！」

ミシエラが何やら助けてと言っている様であるがキンジはそれを見
て……

御免と心の中でそう呟いてそこから立ち去って行った。

この裏切り者ー!!と言っているのが聞こえたがそれでもだと思
って

離れて行って……雪音クリスがレキ相手に戦っていた。

流石にイヤホンを取っているなど感心してるがレキは……

バツテイングマシン宜しくデ玉を勢いよく飛ばして……場外と
なった。

そこから同じようであった為レキチームが負けてクリスが勝った
が……

勝った気がしなかったなと後日そう答えてくれた。

エクストリーム・スポーツ会場に入るとアリアがインライン・ス
ケートを使ってアクロバティックな事していると詠は如何かなと
思っ
て見て見ると……

ボードを使って様々な技を見せていた。

当人によれば子供頃は木の板を使って坂を下りて行ったりして遊んでいたと

言っていたが・・・家が貧乏であったからというのが正しいであろう。

その後キンジは資料を情報科テントに提出して点差を確認した。

紅865点

白856点

勝敗は全体協議の100人リレーで決まることとなった。

そしてそのリレーで・・・紅は負けた。

理由は・・・中空知の存在であった。

空砲にビビるわ転ぶわでまあ色々あったがそれを見たポーナは昼休みにキンジに向けてこう聞いた。

「異常聴覚障害？」

「うん、多分その可能性があるねあの子。」

そう言いながらミートボールを食べているとそう言えばとミシエラが

こう答えた。

「奴の耳の聞こえ方は情報科でも随一だと松葉から聞いたことがある、

本来機械を使わなければ聞こえないような小さな音を聞き取れることが

出来るほどだ、異常聴覚障害だとするならば合点がいきそうだな。」

「でしたら彼女をこちら側に引き込む」

「駄目ですダイアナ、彼女は表の存在。裏の戦争に態々巻き込ませる

道理などありません。」

メーヤがダイアナに向けてそう言うときンジはそうだなと言ってこう続けた。

「もう直ぐ天草達は退院するって聞くし退院したら俺達は対ジースードに備えて戦力を充填させて備えるぞ。」

そう言つて食事を再開した。

「無理だよお兄ちゃん、ジースードは本当に・・・強いんだよ。」

その光景に対してジースードは小さな声でそう言いながら飴を舐めていた。

運動会・後編

そして昼休憩が終わって表の体育祭が終わると同時に教育委員会は帰って行った。

公務員の仕事が5時迄と言う逆手を取って本番を執り行うのだ。ここからだが生徒達の性別を考慮して種目が分かれている。

男子は『実弾サバゲー』

女子は『水中騎馬戦』

男子の方は読んで字の如くであり実弾ありで防弾制服のみであるが

何発ぶち込んで良し、背中が地面に着いたら負けというナニコレ何この地獄ゲームとでも言いたい感じの奴ですけど何ともまあ武偵校生らしい奴だなどでも言うしかあるまい。

然もコノ失格条件を成すために格闘技のあれこれも出来るが為常に生傷が絶えない戦闘となるのだ。

女子の方は水中と言っているが実際は泳がず騎馬戦で鉢巻を取る奴なのだが

こちらも上記と同じで徒手格闘が基本となっている。

そして我がキンジはそんな中で・・・セコンドの役割を押し付けられたのだ。

これは各騎馬チームに一人ずつ軍師を置いて（男性女性関わらず）指示を出す奴なのだが何でと思いつながらキンジは用具室で海パン姿になって

1・2年生合同の水中騎馬戦の会場となっている屋内プールのプールサイドに着くと

それを見た女子たちが口々にこう言った。

「うわ、噂通り来たよたらし。」

「あのたらしキモイシ。」

「垂らし伝説に新たなる1ページだね。」

「俺だつて来たくなかったわこんな所!!」

キンジがそれを聞いて大声でそう言うのと全員がやんやんにやと

言い始めてきたのもう帰りたいと思っていると・・・ズドン！と音が聞こえた。

『!?!』

女性陣達は何だと思って振り向くと・・・ダイアナがクリスの拳銃を使つて

発砲したのを聞くとダイアナはこう言った。

「これ以上ご主人様に何か粗そうなことを言うのでしたら・・・その方々は永遠にお口を閉ざすこととなりますよ?」

そう言った瞬間に冷ややかな視線を向けた瞬間に何か言っていた女性陣達が

びくりとして何も言わなくなった。

すると蘭豹先生が全員に向けてこう言った。

「はいはいホイ！そこ迄だお前ら!!準備体操しておけよ!?!それとだが

各チームに一人男女構わずと言ったはずだがお前ら・・・アタシの言う事に

ケチ付けたいのか?」

競泳水着を着た蘭豹先生がそう聞くと女性陣達は顔面蒼白して首を横に振っていた。

誰も彼女に逆らいたくないからだ。

「ようし！準備体操開始!!」

蘭豹先生がそう言ったと同時に女性陣達は前屈運動と言って前屈したと同時に

もう嫌だと思つて壁に顔を向けた。

そして全員が騎馬戦に備えて準備していると高天原先生がうんしょ、うんしょと言つて何か持ってきたのだ。

「遠山君、非殺傷弾（ゴムスタン）とはいえ水中騎馬戦では銃も使うからこれを使つていいですよ。」

そう言つて出てきたのは・・・SATが使う大型防盾

（バリステイック・シールド）を出してきたのだ。

「あ・・・ありがとうございます！」

キンジがそう言うと同時に其の重い盾をプールサイドにごスンと盾て片膝ついて身を隠した。

安全な視界封鎖が可能となり必要ならばスリット越しからプールを見れば

良いのだと思っていると反対側のスリット越しから高天原先生がこう言った。

「水着がずれちゃった女子が恥ずかしがると思うからこれ渡しておくね、

ああそれとだけドシールドは後でアムドに返却しておいてね。」

それじゃあねと高天原先生がそう言って回れ右して立ち去ると……殆ど同時に花柄ビキニから零れ落ちそうなほどの爆乳が揺れるのが見えてヤバいと感じて

視線を逸らすと……ポーナがいた。

然も上下青と白のストライプガラのビキニを着て。

「いや何でここに居るんだよ!?!」

「しようがないじゃん? アタシ何処にも入ってないからここで待機。」

そう言ってよいしょと言って座って……と同時にその大きく柔らかそうな

高天原先生以上の胸がぶるんと揺れた。

「!!」

何でここに座るんだよと思っているとポーナがこう聞いた。

然も体育座りで脚が胸に当たって柔らかく変形していた。

「それにしてもキンジって変わってるよね? 普通だったら

鼻の下伸ばしてるじゃん?」

「生憎だが俺はそう言うのは遠慮したいんだ、女子だからって誰でも彼でもない。」

「それじゃあさあ……好きなタイプっている? 異性とかの。」

そう聞いて来たのでキンジは知らんと返すと目の前に……ミシエラ達が

現れたのだ。

「遠山、作戦会議するから来たぞ。」

そう言つて白のワンピースタイプの水着を着たミシエラが言う
今度はフリルがふんだんに使われた緑色の水着を着た詠がこう聞
いた。

「それにしてもこうやってメンバーで水着で集まってありませんか
ら

新鮮ですね。」

そう言つたと黒の上下で胸の中央部分に穴が開いている水着を着た
ダイアナが

こう言つた。

「ご主人様、我々は貴方の命令に忠実にお聞きします。どうかご命
令を。」

そして赤にフリルが散りばめられた水着を着たクリスがこう言つ
た。

「は・・・早く作戦決めよう、この格好恥ずかしいよ・・・！」

そう言いながら両腕で隠しているとそれを聞いたキンジはそうだ
よな！と言つて

考えた。

運動会が終わって

「使用弾はゴムスタン！ステイツキー！！アンカケや！？マガジンはプールの底に仰山ばら撒いたで！それを騎馬が拾って使えや！！先ずは1年入水！二年進水！」

蘭豹先生がそう言ったと同時に先ずは一年が、次に二年生が入ると全員水が冷たいとかキャツキャツと黄色い声を上げながらプールに入っていくのを

キンジはスリット越しで其れを見ているがスリット越しであったことからか

どうか分からないがヒス二はならなくて済んだそうだ。

「両軍突撃！撃てー！！ドンドン殺せー！！」

蘭豹先生が大型拳銃（M500）の実弾号砲をぶっ放していた、何せ銃声を聞いて

興奮しているのかどうか分からないがウキウキしながらそう言っているが

フィールドは・・・混沌としていた。

「あ、あわ、あわわわわわ・・・ぶく。」

コネクトやインフォルマで組まれている中空知は戦う前から崩れて・・・沈んでいった。

「・・・あいつって異常聴覚障害以前に運動神経が無いんじゃないやねえのか？」

「・・・御免、アタシもちよつとそう思う。」

ポーナも流石にであろう、今を見てそう思っていた。

「ホヨトホー！ホヨトホー！！ハイアハー！？」

（それぞれ、それぞれ、やれやれー）。

ワルキューレの騎行を合唱しているのは・・・CVRの面々で戦闘力0の彼女達は歌で戦意高揚を凶っているが・・・綺麗どころな少女達が水着である為ヤバいと

思っていると・・・今度はアニメ声の少女がこう言った。

「わハハハハ！圧倒的ではないか我が軍は！！」

そう言っているのはアニメーション同好会の会長『鐘撞 友美』、
レザドの二年生だ。

幼児体型（アリアとさほど変わらない）である為子供に化けて潜入
することが

出来るのだ。

そんな中キンジは白組のミシエラ達を見てこう言った。

「ダイアナ！足元にマガジンがあるからそれを拾うんだ!!詠!?

左から4人来るぞ！クリス!!左から4時の方向から9時に迄範囲
攻撃しろ!?

ミシエラ！氷を少し放って相手の攻撃を奴らの動きを制限するん
だ!!」

キンジがそう言った瞬間にミシエラ達はそれを聞いて頷いて応戦
すると・・・

右からアリア達が現れたのだ。

如何やらあちらは敵側らしくアリアはスク水を着ている理子、

マイクロ水着を着た白雪、普通の水着のレキ、そしてセパレート水
着を着た

アリアが現れると・・・ミシエラのファンであろう一年生たちが現
れると

ミシエラが一年生に向けてこう言った。

「フォロー！ミー！敵は腕利きだが兵力は少ない!!偃月陣にて対応
せよ!?

A字型になって一点突破せよ！我らが寡兵とテ恐れるな!!天の加
護は

我が軍にあり!?

「・・・あいつ何だかご先祖様みたいになって来てねえか?」

「まあ彼女の場合は演劇みたいな感じになっているから結構良いん
じゃない?」

2人はその光景を見てアハハと・・・乾いた笑みを浮かべていた。

そしてその後の実弾サバゲーも白組が勝ちこちらではミシエラ達が間一髪で

勝利して第一部との点数も相まって2つの競技の得点はそれぞれ1万点である為

合計して20886対865でこちらの勝利となった。

その後賞品は1人1ダースの銃弾・・・マガジン一つ以下と言う最悪なもので

中にあるのは安物で品質最悪なタイプである為これは酷いと思つたキンジ達は

溜息ついて弾丸の調整と称して廃棄することとした。

そしてその儘家に帰っていると・・・電話が鳴った。

電話は非通知となっており誰だと思つてかけて見ると・・・聞き慣れた声が

聞こえた。

『やつほ・・・ー・・・お兄・・・ちや・・・ん。』

「お前・・・ジーフォースか！一体何で俺の電話番号つて何があつたんだ！」

キンジがそう聞くとジーフォースは・・・途切れ途切れにこう答えた。

『ちよつと・・・ね・・・ヤバいつて・・・言うか・・・危険な・・・奴が・・・ガハ』

「おいなんだ！危険つて何だよ!？」

『逃げて・・・お兄・・・ちゃん・・・こいつ・・・やば・・・いぎや!？』

「おいジーフオース！どうしたジーフオース!!」

クソがとキンジがそう言っているのとダイアナに向けてこう言った。

「ダイアナ！車を出してくれ!!何か可笑しい!?今の場所を松葉・・・」

ああいないんだった！こんな時に!!」

キンジはそう言いながら頭をガシガシとしていると・・・誰かの気配を感じた。

「誰だ・・・ナンダ中空知か。」

中空知を見てそう呟くと・・・ミシエラがこう聞いた。

「中空知貴様に聞きたいことがある。」

「あああははははははひ」

「お前の耳で今キンジが電話した場所から追跡できるかどうか聞きたいんだが

出来るか?」

そう聞くと中空知は暫くして・・・こう答えた。

「たたたたたた分出来るかかかかと」

「ならばスキヤンを頼む！キンジ!!場所が分かったら電話で送信するから

お前達は武器を持って出撃してくれ!？」

「分かった！必ず合流する!!」

そしてキンジ達が中で準備していると大量のお酒を持って既に飲み始めていたメーヤを見るとキンジがこう言った。

「メーヤさん準備してください！ジーフオース達が何かしようとしている!!」

「！分かりました!!」

メーヤはそれを聞いて準備を行った。

そしてとある場所

『wくえt r t Y U I O I P ☒』

何やら聞いたことが無い分からない言語を喋っているナニカがジ
オ品川にて

辺りにいる兵士を皆殺しにすると・・・ボロボロになって虫の息と
なっている

ジーフオースを足元からどかすために蹴るとジーフオースは
ナニカの足を掴んでこう言った。

「い・・・行かせない。」

『S A D F D d s d g h f j k h : : k』

それを見てそう答えた瞬間に長い槍を取り出して・・・其の儘突き
刺した。

「ガハ・・・お兄・・・ちゃん」

そう言つてジーフオースの眼の光が・・・永遠に消えた。
それを見たナニカは其の儘・・・突如として姿を消した。

悪夢

キンジが携帯電話の着信履歴から誰か電話がしたのかなと思って見て見て……

突如として知らない電話番号から通話が来た。

「誰だ？」

何だと思つて出て見ると……玉藻が出てきたのだ。

『遠山か！電話機に何度も出んから心配しておつたのだぞ!!急いで具足と』

『鎧竜剣を持つて直ぐにじゃ!?!』

「具足……装備つて事か?どうしたんだ?」

キンジがそう聞くと玉藻はこう答えた。

『どうもこうも無いのじゃ!もう始まつて……いや、厄介な事が起きているのじゃ!?!』

「?」

『儂の式神が報せを送つて来たのじゃ!ジーソードが東京に戻つたと同時に何かをそれを追つて来ているのじゃ!!』

「ジーソードが!それに何かつて一体何が来てるんだ!?!」

キンジがそう聞くと玉藻はこう答えた。

『場所は品川火力発電所東南東!直ぐに向かうのじゃ!!そつちにはアリア達が向かつておる!?!』

「分かつた!兎に角俺も出るから他の……今残っている面子を呼ぶ!」

『アイ分かつた、じゃが気を付けておけよ?ジーソードを追つてい
ると思われる』

相手は儂すらまるで知つた事もない未知の手合いじゃ。気を付けよ。』

キンジはダイアナ達にこの事を伝えてメーヤが所属している教会

から貰った

武偵弾頭数式分と防弾チョッキを装備してその後詠達も来て早急に準備すると

全員ダイアナの車に乗って火力発電所二向かって行った。

「水路は厳しそうだ、ボートは用意されてねえし湾岸は橋と水門で行き止まりだらけで車に至っっちゃ年末が近いから道路工事シーンで

東京湾トンネルが工事中。一般道で芝浦に行っただとしても20分はかかる。」

そう言うときんじの電話から・・・白雪の通話が届いた。

「白雪・・・何だよ一体！」

キンジはそう言うて見て見ると・・・アウトカメラ映像が届いた。

「こいつは・・・テレビ電話会議の情報データか！」

キンジがそう言うとき映像に映っていたのは・・・厳めしいペインティングをし、サングラスの様なHMDをかけて現代的デザインをした漆黒のプロテクターを

体の各所に装着しその装甲と組み合わさった黒いコートを風に靡かせて

そのどちら迄もが金や金糸で飾られた・・・右腕が無く所々に返り血であろう、真っ赤な体となっておりボロボロとなっていたのだ。

そしてコンテナヤードの片隅のクレーンの上でライトブラウンの防弾ロングコート・編み上げブーツと言う戦闘服を着た・・・カナが調と共に

ジーサードと共にいるが何故か2人共・・・ボロボロであった。

「兄さん迄・・・一体誰と!？」

キンジがボロボロになっているカナを見て驚いてそう言った。

これ迄最も強いカナがあそこ迄ボロボロなんだと思っているとその瞬間に・・・白雪から少し離れた場所で爆発が起きた。

『キャアアアアアアア!!』

白雪の悲鳴と共に何だと思っていると・・・アリアが何もない場所に

そして暫くするとアリアの声が聞こえた。

『理子！レキ!!無事!?!・・・動けないのとドラグノフが・・・壊れたつて

ああもう!!』

そして暫くしてその場所に着くとキンジがその目で見たのは・・・
とんでもない光景であった。

「何だよ・・・これ。」

倒れている理子とレキ、白雪

壁に思いつきりぶつかつたのであろう凹んだ壁の下にて倒れているアリア

ボロボロになって座り込んでいるカナ、調

そして・・・其のナニカによって首を締めあげられているジーサー
ドが見えた。

其のナニカがキンジを見た瞬間にキンジは何かを感じて・・・
鎧竜
剣を構えて

インクルシオを顕現させた。

音を鳴らして・・・長くなったのだ。

そしてその儘伸ばす様にキンジは蛇腹剣の如くナニカに向けて投げ放った。

すると何も無い所から・・・がぎゃんと言う音と同時に当たった場所が赤くなり

ナニカが一瞬だけ見えた。

すると右側にマウントされているキャノン砲を透明化したまま攻撃しようとするもキンジは翼を広げて空高く飛んで全て回避してノインターターで

貫こうとすると

ナニカは槍を棄てて・・・受け止めたのだ。

「な！・どんだけの馬鹿力ナンダこいつ!？」

キンジがそう言った瞬間にナニカは其の儘投げ飛ばすかのよう叩きつけた。

「ぐは!？」

そして動けなくなった一瞬を突いてナニカはクローを出してキンジの喉元に

突き刺そうとするとキンジはリボルバーを起動させて・・・互いに拳を

ぶつけ合った。

その瞬間に爆発が起きて互いに離れて行った。

「何なんだ・・・この戦いは。」

ミシエラはそう呟きながらその闘いを見ていた、原始的であるが確実に

相手を殺すことに特化したその攻撃に見入っていると・・・中空知から

通信が来た。

「何だ？」

『私です、先ほどの通信を各ステーションから算出した結果ジオ品川だと

言う事が確認が取れたことをお伝えしたいのですが遠山キンジ様は？』

「奴は今戦闘中だ、敵は如何も我々を相手どるといふ事はしないよ
うだから・・・分かった、ダイアナ、ポーナ、クリス。お前達は向こう
に行ってくれ、

私と詠はここに残り」

「いえ、それは私と調が行くわ。」

「カナ・・・!!」

ミシエラの言葉をカナが遮るかの様にそう言うときカナはこう続けた。

「私が一人で向こうに行くわ、調はここに残って見守って。もしキンジが

負けそうになったら・・・お願いね。」

「うん、分かったカナ。」

調がそう言うとき首にぶら下げている・・・ミシエラやクリスと同じ
ネックレスの宝石部分に手を付けていた。

「じゃあ行ってくるわ、其れとだけどアリア達を宜しくね。」

そう言うときカナが立ち去ると同時にミシエラ達はアリアを救出し
始めた。

ナニカはそれを見て此の儘叩き潰してやると言わんばかりに勢いよく力を

出しているときんじは・・・もう片方の足のリボルバーを作動させて爆発させて

ナニカを驚かさせた。

「!?」

ナニカは何だと思ってきんじから離れたと同時に・・・きんじの姿が土煙が

晴れたと同時に消えていたのだ。

「・・・・・・」

ナニカは辺りを警戒して左腕を構えていると・・・その左側からきんじが姿を現したのだ。

「!!」

ナニカはそれを見て右腕の剣を使おうとするも一歩遅くナニカはノインテーターに頭をぶち当たられたのだ。

「(浅いか!ヘルメットに当たった位!!・・・・・・!?)」

きんじはそう思っているとヘルメットが外れナニカの顔が露わになったと同時にきんじは驚いていた。

それはミシエラ達も。アリア達も同じであった。

「何だ・・・アイツは・・・?」

ミシエラがそう言って見たそれは・・・バケモノであった。

二対四本の爪状口器

棘みたいな太い眉

大きな眼窩

小さな眼

そして何よりも・・・まるで甲殻類の様な顔立ち

人と言う物ではないナニカがきんじをじろりと睨みつけておりナニカは

きんじを見て・・・遠吠えを放った。

戦いの中の閑話。

「おいジーサード、貴様あ奴を知っているのだろう！何なのだアレハ！」

ミシエラはジーサードに向けてそう聞くとジーサードは力なくこう答えた。

「・・・ねえよそんなの。」

「ないとはどう言う事だ！アイツは貴様らの仲間のはずであろう！！」

「だから知らねえんだよ！アイツは俺が生まれる前からあって一体あれが何なのか分からねえけどアイツの武器が珍しかったからあいつらが製造してただけだ」

俺があの研究所ぶっ潰して出てきてからあいつを蘇らせようとして復活させたら

研究所の連中を皆殺すは俺の仲間が殆ど全員が死ぬは俺は右手失っちゃって最後には俺を逃がすためにジーフォース達が時間稼ぎしてたんだが・・・。」

「恐らく奴がここに来たと言う事は・・・そういう意味であろうな。ミシエラがそう言うのとポーナがこう続けた。

「それってさ・・・皆死んじやったって事・・・!?」

「恐らくそうでしょうね、神に対する咎を今受けたという事でしょうね。」

「お前・・・何言ってる！」

「止めようポーナ！イマハこの戦いをどうするべきか考えようよ！！」

クリスがメーヤに向けて殴りかかろうとしているポーナを止めようとしている中で其のナニカはキンジに対して武器を構えていた。

そしてカナはその中にいる少女・・・ジーフオースの遺体に近づくと

目を手で閉ざしてこう言った。

「済まないな、俺にはこう言う事しか出来ないんだ。」

そう言っつて離れると近くにある割れた巨大な水槽の様な物に近づいた。

『これがそうなのね。』

そう言っつてカナはそれを触っていた。

戦いの後

ギャギャギャギャギャギャギン！

キンジのノインテーターとナニカが保有する大剣の金属音が奏でるその世界は正に今の時代から逆行している様子であった。

近接武器を持つ者同士におけるその闘いはただ単に・・・美しかった。

正に強者同士での戦いに於いて見届けるべきだと誰もがそう思っている中で・・・ジーソードが動こうとした瞬間にナニカは大剣を・・・伸ばして

ジーソード相手に叩きつけた。

「!!」

キンジは何でだと思って振り向くとジーソードが何かしようとしていたので

叩きつけて威嚇したのだ。

「GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

何やら邪魔するなど言わんばかりに吠えているのが見て取れた、

そしてキンジに向けて大剣を振りかざすとキンジもノインテーターで

攻撃しようとして互いに攻撃を再開した。

互いに当たる中でノインテーターの刃が・・・深く左足に食い込んだ。

「GUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

その痛みにナニカは咆哮するもナニカは何としてでもそれでも戦うという

意志が滲み出ていた。

ノインテーターからは黄緑色の液体が滴り落ちている中でキンジはナニカに向けてこう言った。

「もうこれ以上は戦うな、これ以上はお前だって只じや済まないぞ。」

そう聞いてきたのだ、右腕は恐らく骨折、左足は既に使えずに後は

口を始めた。

「あが……！」

キンジはそれに対する痛みで肺から空気が無理やり出るような感覚を覚えるも

キンジは其の儘互いに拳と拳での戦いとなった。

血が噴き出し、鎧が壊れる戦場の中キンジは腕のリボルバーを最大限に迄

起動させると其の儘……殴り飛ばす前にこう言った。

「悪いが……ここ迄だ！」

そう言つて拳を振るうとナニカも殴つて……キンジの顔の鎧が碎け散つた。

然しキンジの方の拳は……左腕で少し上になって躲された。

ナニカはまるでニヤリと笑うかのような声を轟いていると頭部の鎧が碎けて血が噴き出すとキンジは其の儘……頭を振りかざしてこう言った。

「これが俺の……最期の切り札だ！」

そう言つた瞬間にキンジの頭突きが……ナニカに当たつたのだ。

「もう……！」

そう言つたとキンジの攻撃を再び受けてしまったナニカはふらふらとしているのを見てキンジはもう一度その拳で……殴つた。

「GU……GAAAAA」

そしてその儘ナニカは倒れてしまった。

そしてキンジも倒れた。

「キンジ！」

ミシエラ達はキンジに向かつて行くとミシエラがキンジに向けてこう言った。

「貴様は全く……何していたのだ本当に。」

「すまねえだがこれしか方法が無くてな。」

痛てててと言いなながらミシエラの治療を受けていると詠がキンジに向けてこう聞いた。

「然しこれは一体何なんでしょうか？」

「分からねえ、だけどこいつは俺達が知っている人間とは……何だ？」

この音はとキンジがそう言った瞬間に上を見ると……ヘリが来るのが見えた。

「何だアイツは？」

キンジがそう言った瞬間にジーサードがこう答えた。

「あれは米軍の戦闘機だ、大方俺とこいつを捕まえようとしてるんだろうな？」

『!!』

それを聞いてキンジ達が驚いていた、何せ何故今だと思っているが理由は

明らかであった。

「ジーサードとこいつの回収。」

ポーナがそう言うのとそれかと思っていた、何せ世間に出ては不味い案件だと

思っているのだ。

ジーサードは人口人類である為その戦闘力の高さと出自、今倒れる奴は恐らくアメリカにおいて最も公に出来ない相手だと思っているのだ。

ヘリが数機で現れてくるので自分達もかと思っているとそのヘリが……

ドカンと吹き飛んだのだ。

『!!』

一体何だと思った瞬間に3機ほどいたヘリが全機……墮ちてしまったのだ。

「一体……何？」

ポーナがそう呟いた瞬間に……ソレガ現れた。

巨大で……まるでSF映画に出てくる宇宙船と思うかのように思っているとジーサードはこう呟いた。

「何だ……アイツは？」

そう呟いた瞬間に……キンジを除いた全員が構えるとクリスがこ

う言った。

「皆構えて！ナニカが起きそうだよ!!」

そう言うとナニカが・・・立ち上がった。

『!!』

全員嘘だろと思っっている中でナニカが片足を跪いているのを見た瞬間に・・・

それはハッチの様な物が開いた瞬間にそれが現れた。

ナニカと同じ様な体つきをしつつも異様なオーラを感じるそれは只

キンジを見ているとそしてナニカに対して何か言っているとナニカに

試験管みたいな形状をするのを突き刺すと其の儘立ち上がった。

そして左腕のを操作すると・・・ナニカはキンジに向けて言うとその儘

立ち去って行った。

長の会話

「お前ら・・・一体何なんだ？」

キンジがそう聞いてきたのだ、何せ相手は見たこともない存在。見た目からしても妖怪と同じなのかと思っていると近くにあったナニカが

被っていたマスクを取って暫くすると・・・音声が流れた。

『我々は君達と戦う理由はない』

『!?!』

それを聞いてキンジ達は本当なのかと思っていると音声を伝えているナニカは

こう続けた。

『我々は星から星へと渡り歩き、その種族を狩猟する狩人。

だが滅ぼす為ではない事を承諾して欲しい。』

「・・・狩猟・・・何のためにだ？」

ミシエラがそう聞くとナニカはこう答えた。

『我々はその星の種族の中で最も力ある手合いを狩る事で自らの力を仲間に

見せつけ初めて一人前だと認識させるのだが我々にはそれに伴いルールを

設けている。』

「何でしょうか・・・そのルールとは。」

メーヤが聞くとナニカはこう答えた。

『大まかであるが①我々は武器を持たぬ年寄りや女子供、妊婦相手には攻撃せず

武器を保有する者だけを目標とせよ。②勇敢な戦いで相手には賞賛し性別に関係なく対等に戦う事、③味方の手は借りるな、④敗北し

たら自ら命を絶て、決して敵の

傀儡になれ果ててはならぬの4つだ。その男は勇敢にも雄々しく戦い

捕まったその恥を注いでくれた、礼を申す。』

「別に……って言うか自爆ってたかが1回程度の敗北で」

『君達にとってはたかかかもしれんが我々にとってはそれ戦士としての侮辱と

同じだ、彼は此の儘死ぬ。それが掟だ。』

そして遠くに行ったナニカは左腕にあるリストバンドで何か操作している

暫くして海の中に入って行った。

暫くの間は海に黄緑色の血が出ていたがその後直ぐに……自爆した。

大爆発の音がしてキンジ達は振り返ると大柄のナニカはある物をキンジのもとに置いた。

「何ですこれ?」

クリスがそう聞くとナニカはこう答えた。

『我々の同胞に名誉ある戦いを示してくれた礼としてそれをやろう。』

そう言って置いたのは黒い・・・ハンドバングルみたいな形状をした

何か分からない物であった。

すると大柄のナニカはキンジに向けてこう言った。

『我々はこの星にまた来るであろう、それまでに研鑽を積み。更に己に

磨きをかける事だ。』

そう言って離れようとする・・・ジーサードがナニカの目の前に立って

こう言った。

「おいマテや、俺と戦えよ。」

そうやってきたが大柄のナニカはこう答えた。

『生憎だが私は戦わない、そう言う掟だ。そしてお前には武器が無い、

そう言う者とは戦わない仕来りだ。』

「武器ならあるぜ・・・これだ。」

ジーサードはそう言って左腕を構えるが・・・近くにいた他のナニカが

ふんと言って・・・蹴りを喰らわした。

「ごぼー」

其の儘ジーサードは壁にめり込んで其の儘倒れるとそのナニカは

大柄のナニカに向けて膝を曲げ地についていると大柄のナニカはこう言った。

『今回は大目に見るが・・・次は無いぞ。』

そう言うのと其の儘全員宇宙船に乗って其の儘・・・立ち去って行った。

後に残るのはボロボロになったキンジとバスカービルとジーサードだけで

あった。

あの後だがキンジは怪我の事もあり一日様子見で入院したがその次の日が

テストだったがために入れ違いで退院する天草によって一夜漬ける勉強を

余儀なくされ疲労が残っている中で試験に臨むこととなった。

ジーサードについてだが・・・結論から言えば彼は姿を晦ました。同じ病院にいたはずだが如何やらその日の早朝に・・・キンジ達が起きた時には既にいなかったらしい。

彼が何処に行ったのかは誰にも分からない、無所属とも相まって情報

報はそこで途絶えてしまったからだ。

ジーフォースの遺体は研究員も含めてだが金一が何処かのお寺の無縁仏として

弔ったそうだ。

ナニカキンジに対して言いにくそうなことがあったがそれは当人が

言うであろうと思つて何も言わなかった。

だが悪い事だけではなかった。

先ずはポーナが正式にキンジ達のメンバーに加わった事。

そしてナニカが放棄した武器が手元に残った事である。

透明化はないがそれ以外の武器が幾つも手に入ったのだ。

プラズマキャノン、槍、レイザー・ディスク、ブレードと言った武器と長から貰ったりリストバンドみたいな奴。

最後のはキンジが貰った奴であり一体何なんだと思つていた。

すると天草は全員に向けてこう言つた。

「まあ、それは何かあつた時に良いでしょうと問題はこつちですね。」

そう言つて目の前にあるのは・・・幾つか刃毀れや割れた個所がある

鎧竜剣である。

「この剣は正直な所直すにしても鍛冶師見つけることから始めないと

いけません、確か京都に其の専門がいたはずですからそちらに送つておきます。」

ですので遠山君、決して使わないでくださいね。」

危険ですからというキンジはそれに対して了承した。

それと戦利品は今回全部キンジに所有権があると言う事でキンジの物となり

アムドの平賀に一度提出して再開発させているのだが当人は驚きながら

こう言つていたそうだ。

「凄いのだこの武器！全部今の技術では不可能なもの満載なのラ!! 点検がてら再開発するから暫く仕事は休んでこれを専門にするのラ!?!」

そう言つて暫くの間平賀の部屋は何やら色んな金属音が聞こえているのは蛇足であろう。

そしてこれから暫くは平和が続くかなと思つていたが・・・高天原先生から

呼び出しを喰らつた。

「遠山君、重要な連絡がありますからこれから一緒にマスターズに行きましようね。」

インケスタの授業を終えた後に呼び止められたキンジは一体何だと思つて

付いて行つてエレベーターで・・・5階にへと上がつて行つた。

「(5階か・・・始めて行くな。)」

キンジはそう思いながら上に向かうとキンジは高天原先生に向けてこう言つた。

「遠山君にはこれから校長先生にとある依頼が来ていますので。」

「・・・校長先生？」

キンジはそれを聞いて何だと思つて思い出そうとしても・・・

思い出せなかつた。

何時も会つているはずなのにと思ふだろうがそれは彼・・・

『緑松 武尊』の特技なのだ。

『『緑松』さん失礼します、遠山 キンジ君を連れてきました。』

「はいはい、どうぞ。」

扉の向こうからの声を聴いて見えたのは・・・お兄さんともオジサンとも

つかない男がデスクについていた。

『緑松 武尊』、またの名を『見える透明人間』

一見すれば特徴のない只のヒトで然も矛盾しているかのよう
に聞こえるが

実はこれが彼の恐ろしさなのだ。

彼は心理学的方法で自分を透明・・・つまり印象を残さない
様にしているがために出会えば最後、何故？という間に終わるとい
うある意味幽霊よりも厄介な存在なのだ。

すると『緑松 武尊』はキンジに向けてこう言った。

「遠山キンジ君、君に指名でクエスト依頼です。」

「依頼・・・俺Eランクのインケスタ」

「それは貴方が試験をボイコットしてますからね、それにここ最近
の

君の戦果には目を見張りますからね。」

「・・・知ってたんですね、俺は貴方の事知らないのに。」

「校長ですから。」

『緑松』はそう言うが正直な所完全に彼に対しては敵わないと直感
で察知して

比較的逆らわない様にしようと思っているとそれではと言って
ある資料を渡した。

「依頼者はロシア国防大臣、暫く日本に滞在するらしいから

その間の娘さんの護衛だとある学校に行ってもらいたいんだ。」

『緑松』にそう言われてその学校に関する転入手続き書と共に

その学校のチラシが入ってあった。

其れにはこう書かれていた。

『桜学園』

これがキンジにとってある意味試練の始まりだったとは・・・
言うまでもなかった。

ホテルへ

『「桜学園」、確か金持ちが通っているマンモス高校でしたね。』
「そうです、一つの街全てが学校の関連施設でありそこに通っているのは全員が

有名どころな企業や国家奉仕者・・・つまり国家議員の二世だったりとあらあら

とんでもない程の宝庫でしてね、そこでは全生徒達は武器を所持しています。が所詮は素人に毛が生えた程度が殆どです。襲い掛かる手合いはいません。そう言う事も

あつて今入学しているその護衛対象は今でも平穩無事なんです
が・・・

最近その学校で変なシステムが流行っているらしくてその調査に君と不知火君が

選ばれたのです。」

「・・・不知火もですか？」

キンジはそれを聞いて二重警護かと思っているが緑松校長はこう続けた。

「いえ、彼は別件で確か・・・エマニユエル学園に行ってますよ。」

「エマニユエル・・・そこって確か名門ですよね？」

「ええ、そこそこの名門でしてそこのお嬢様のボディガードをしていますよ。」

「となると・・・助っ人はなさそうですね。」

「その通りです。」

キンジの言葉を聞いてアハハハツハと緑松校長は笑っているとキンジは

こう聞いた。

「因みにですけどチームから同行者は」

「ああそれは駄目です、女性が中心に狙われているらしく男性で然も実戦経験が

豊富で腕が立って女性に乱暴狼藉しないという条件が合うのは

君だけだったの。」

「・・・ああ、そうでしたか。」

キンジはそれを聞いて納得した、退院したとはいえ未だ病み上がりな天草と

カイズマス、知り合いに声を掛けようにも武藤は・・・没だ、何かしらの問題

起こしかねんとそう思っていた。

「じゃあ・・・受けますこのクエストって単位どんくらいですか？」
そう聞くと緑松校長はこう返した。

「そうですね、護衛代金は既にロシア通貨で1ルーブル1円としてボディーガード代1億6千万円。今回のシステムを解析すれば単位として6単位ですかね。」

「6単位!？」

キンジはそれを聞いて驚いていた、6単位など大ごとな事件であっても

2〜3単位なのにその倍と言う事に驚きを禁じ得ないが其れには理由があった。

「実は『桜学園』はその特性上公にしてはならない案件が多数存在するため

それにおける配慮ですよ。」

「・・・さいですか。」

一気に責任重大ポジションになってしまったと思うが仕方ないと思つて

こう答えた。

「分かりました・・・引き受けましょう。」

「そうですかそうですか、でしたら護衛対象はこの茶封筒に入っていますので

確認のほどを。」

そう言つて緑松校長は茶封筒をキンジに手渡すとそれではと言つてこう続けた。

「制服は今晚貴方が泊るホテルに届きますので、部屋は通常の部屋

ですが

今回の時様に予算としてそれなりに良い部屋ですので。あ、それとですが

この任務は長期になるであろうことも覚悟してくださいね。」

そう言う和高天原先生がキンジに向けてこう言った。

「それでは失礼しました。」

そう言つて2人は校長室から出て行つた。

「という訳で長期任務になりそうだから家の方は宜しく頼むぞダイアナ。」

キンジはダイアナに向けてそう言うが当の本人はそれを聞いて以降……

こんな感じであつた。

「ご主人様が……いない……クビ……必要……されて……ない……フフフフ。」

「……もう完全に壊れてるわ。」

クリスがそう呟くとミシエラはどうしたんだと聞くとポーナがこう答えた。

「ああ、ミシエラだったら今日は女子寮で泊りがけの趣味事するって

言ってたよ。」

「そうか・・・じゃあ後でメール打つとくわ。」

「遠山様・・・如何か神のご加護有らんことを。」

メーヤがキンジに向かって祈りを捧げるのを見てああ・・・とそう答えた。

そして暗雲の如く俯いているダイアナは放っておいてキンジは其の儘・・・今日泊まるホテルにへと向かった。

ホテルは小さいが其れなりにサービスはちゃんとしていたので満足している中でキンジは『桜学園』のブレザーの制服を着ていた。

防弾防刃であることは同じだが黒っぽい事から防弾チョッキに見えるなど

思いながらそう言えばと思って茶封筒の中を確認するとあったのは・・・

銀髪の自分と同じ年位の女の子・・・。

「ロシア人で然も飛行機乗りね。」

どんな奴かなと思っていると武偵校からメールが届いた。

「何だ・・・ええと何々。」

そう呟くと・・・こう書かれていた。

『護衛目標は既にホテルのロビーにいますので早急に監視すべし。』

「もうかよー！」

早いぞと思いがながら仕方ないと思ってキンジは渋々・・・出て行っ

てしまった。

ホテルのロビーに入るとそこでは多くのお客さんが……。ん。
ポカーンと

その少女を見ていた。

銀髪で首回り程度のボブカット

灰色の瞳

端正な顔立ち

纏っているのはロングの冬物のコート

だがここで目にしたのは……。キンジにとって最悪であった。

「む……。胸……。!!」

キンジはそれを見て嘘だろうと思っていたのだ、そう胸が……。でかいのだ。

それこそダイアナ以上ともいえるそれを見てヤバいと顔を青くしてどうする

どうすると思っていると徐に少女が立ち上がった。

それと同時に無論だが胸が大きく揺れるがそんなのお構いなしと言わんばかりにキンジの下に来ると少女がこう聞いた。

「貴方が『トオヤマキンジ』?」

「あ……。ああそうだ。」

キンジがそう答えると少女はにこりと笑って……こう答えた。

「初めまして、私が『ヴェルカ・ヴァレンティーナ』よ。今日から貴方が私のボディガードってパパから聞いてるから……宜しくね♪」

にこやかにそう言うがキンジは彼女の見た目を見て……ヤバいと感じてこう思っていた。

「(あの校長……誰だったか忘れたが絶対に文句言ってやるからなあ!)」

そう思いながら既に顔を忘れた緑松校長をキンジは呪っていた。

話し合い

「それじゃあ簡単にだけど自己紹介って・・・もう分ってるでしょ私の事。」

「ああ・・・まあな。」

キンジはヴェルカに向けてそう言う中で周りでは・・・鬼気迫る物を感じた。

「おいなんだあのパツとしねえ男。」

「あの子の彼氏かよ・・・ふざけんな何だよあの野郎・・・!!」

「お似合いじゃねえよあんなさえない奴なんか。」

男衆がこんな感じに対して女衆はこんな感じ

「え？何あの胸！あんなにでかいなんて普通じゃないわよ!!」

「どうせシリコンで大きくしているだけじゃ」

「待って！あれもしかしたら自前って可能性もあるわよ!!」

「そんな！私なんてあそこ迄努力しろなんて無理じゃないのよ神様は何時だって不平等だー!!」

そんな事を言っているのが聞こえる為キンジはヴェルカに向けてこう聞いた。

「・・・場所変えませんか？」

ここだと目立つからというヴェルカはこう答えた。

「そうねえ、だったら・・・近くのカフェなんてどうかしら？」

あそこの和菓子絶品よ♪」

そしてカフェに着くがそこにはカップルが何組かいて楽しんでいたが

ヴェルカを見て男どもが其れはまた・・・鼻息荒らしていた為女性

陣達が揃いも揃って頬をつねったり拳骨したりとまあ・・・嫉妬の攻撃が様々。

キンジは俺知らねえと思いつながら席に着くとヴェルカは突如・・・上着を

脱ぎ始めた。

「嫌なんで脱ぐんだお前!？」

「エエエエ!暑いから脱ぎたいのよ〜〜!!」

「脱ぎたいのは分かるけど話は!？」

「お茶飲みながら話しましょ♪」

そう言いながら上着を脱いで席に置くが先ほど以上に・・・威力が跳ね上がった。

今まで上着で抑えてたのかよと言わんばかりにバルン!と更に大きくなったような感じで揺れるのを見てキンジはアアアアア!と心の中で

断末魔を上げてこう続けた。

「良し・・・取敢えず何が飲みてえんだ?奢るぜ。」

「え?それだったら・・・お構いなくね♪」

それを聞いてヴェルカは上着をお座敷で自身の隣の席に置いて注文書を

確認しているとキンジも頼んでいた。

「スイマセン、緑茶とわらび餅。」

「私は何時ものね。」

「畏まりました、ヴェルカ様には何時もの抹茶オレとお饅頭で餡子は大目で

宜しかったですね?」

「うん、ありがとう♪」

それを聞いて店員が立ち去るのを見るとキンジはそれじゃあと
言っ

て

こう聞いた。

「仕事の話なんだが護衛で良いんだよな。」

「ええ、契約期間はクリスマス前まで。学校内での護衛が主で私と

同じ

『飛行機部』に所属してもらおうわね。」

「『飛行機部』・・・何だそれは？」

鳥人大会でも出るのかよと聞くとヴェルカはにこりと笑って・・・こう答えた。

「簡単よ、自衛隊や各国からの旧式の戦闘機や飛行機を操縦する部よ。」

「・・・ナンダその部？」

部活以前のレベルじゃねえかよと内心そう思っていた、用は払い戻し兵器を

貰っているのだというが武偵よりもヤバい学校じゃないよなと思っっているが

ヴェルカはこう続けた。

「・・・最近ね、クラスメートもだけどアイツの周りにいる女の子たちが

何だか・・・魅了？？されている様な感じがしてこれなんかおかしいなって

思っているとパパがこっちに来るから方が一に備えて

ボディーガードを付けるって事になってたからそっちにお願いしたの。

だからその・・・お願い！パパの会談と用事が終わるまで!!」
そう言うとキンジはこう答えた。

「分かってる、俺はこの仕事を了承したんだからな・・・やってやるよ。」

「ありがとうキンジ！」

ヴェルカはそれを聞いてにこにここと笑っているのを見てキンジは今まで

見たことないタイプだなとそう思いながら赤面になっていた。

窮地をどうやって脱するのかという事で頭が一杯一杯なのだ。

「(どうする！此の儘逃げる・・・いや駄目だ部屋を変えようとして
も

ここ以外は予約していないから部屋代掛るしそれ以前に何て言う
んだ!? 『今から部屋変えようぜ♪』とか言うか・・・やめよ、何だか
嫌な予感がする。)」

そう思ってじゃあどうするんだと思っているとシャワー室から
ヴェルカが・・・出て来てしまった。

「キンジ入る?」

「ええと・・・俺は・・・!?!」

キンジはヴェルカの方に目を向けて・・・最悪だと思っていた。

今のヴェルカの格好は・・・大胆なのだ。

青色のネグリジエなのだろうが正直な所・・・目のやり場に困って
しまう。

その爆乳超えて超乳の胸が大胆に半分ほど露出しており然もそれ
だけではなく

そのスタイルの良さが際立っているのであろう色々ヤバいと
思っている

キンジはヴェルカの・・・顔に視線を向けてこう言った。

「じゃあシャワー浴びとくから寝とけよお休み!」

そう言ってキンジは素早くシャワー室に入って行った。

「ふうくん、パパの言った通り。私の顔をちゃんと見てたんだ・・・

これは期待できそうね。」
クスクスとヴェルカはひそやかに笑いながらキングがいるであろ
うシャワー室に目を向けていた。

いざ一桜へ。

次の日の朝、ヴェルカはベッドの上で体を伸ばしながら起きた。

「ん~~~~~!いい天気ねえ。」

そう言うヴェルカはソファアにて・・・雑魚寝で寝ているキンジを見て

こう呟いた。

「全くもう、依頼者優先だからって理由でそんな所に寝なくても良いんじゃないかしら?」

クスクスと笑いながら近づいてキンジの顔を見るとこう言った。

「へえ・・・寝顔は可愛いじゃないの。」

そう言いながらぶにぶにと頬を指で突いているとキンジはそれに気づいて・・・

目を開けると目の前にあったのは・・・。

「おはようキンジ君♪」

目の前でドアップで然も・・・胸の谷間が諸見えのヴェルカがニコニコしているのが見えた。

「?!?!」

それを見て血液が逆流するかのような感覚を覚えたキンジは速攻でソファアから

転がり落ちてしまおうが天性の石頭が功を奏して其の儘立ち上がるとヴェルカに向けてこう言った。

「ちよちよちよちよ何やってんだアンタハ!」

「あら?起こしてやったのに酷いイグサじゃないの~~~~!」

ヴェルカはキンジの言葉を聞いてむ~~~~と頬を膨らませているとそれはそれだ!と言ってキンジはこう続けた。

「さっさと着替えて・・・俺が出るからちやんと制服着ろよな!!」
キンジはそう言って慌てふためいた表情で出て行くのを見て暫くすると・・・ヴェルカはにこにここと笑ってこう呟いた。

「(、▽、*)ウフフ、本当に面白い子ね♪」

キンジはヴェルカが着替え終えた後、簡単に朝食を済ませて学校に向かう事となったが登校するにもリニアトレインで向かうのだ。学園そのものが一つの街として機能している為学園迄の電車及び一般交通網が

これだけなのだが周りには防犯カメラが多数配備されておりまた警備員も常駐していた。

その中にキンジとヴェルカが向かっていると警備員の一人が現れてこう聞いた。

「スミマセンが学生証を確認したいのですが」

「はい、これね。」

ヴェルカがそう言って手渡すと警備員は機械を使って確認して・・・こう言った。

「はい、確かにご本人デス・・・其れとですが彼は?」

警備員はキンジの方に何やら怪しいなという目つきをしていた。警察の中でも戦闘力が高いエリートのみがここに所属することが許されている為キンジが只の学生でない事に気づいているのである。う懐に手を入れていると

ヴェルカがこう答えた。

「彼は今日から転入する私のボディガードよ、パパが帰るまでの

1か月間

滞在するからはいキンジ学生証。」

ヴェルカがそう言うのとキンジは荷物と共に入っていた学生証を見せると警備員が確認してこう言った。

「確かに期間限定の学生だな、部屋は・・・ヴァレンティーナさんと相部屋。」

「ハアアアアアアアア?!」

キンジはそれを聞いて驚いていると警備員がこう続けた。

「この機会には学生証から個人情報や武器構成、部屋まで記載されるんだけど君は特別のようだね。」

「・・・マジかよ。」

キンジはそれを聞いて項垂れているとヴェルカはキンジの手を取って

こう言った。

「さあ！速く入りましょ!!」

「おおおおおいちよつと待てよ!?!」

キンジはヴェルカに引っぱられるまま中に入って行った。

「さてと、貴方の教室は一応私と同じ教室なんだけど部活はそうねえ・・・私の助手として一緒にいて貰うからね。」

「ああ分かってる、それにしてもガラガラじゃねえかこの中?」

客俺達だけだろと言ってリニアトレインの中を見ていた。

辺りには誰もいないぞというヴェルカがこう答えた。

「簡単よ、一般用で使うだなんて私みたいに許可を貰わないとね。」

「許可？」

「そ、この電車は使用許可書を出してもらわない限り運行しない電車ですね。」

今日は生徒会から許可を貰って特別運行してもらっているのよ。」

「じゃあ他の生徒達は？」

何処にいるんだよと聞くとヴェルカはこう答えた。

「全員寮暮らしだけど皆自分の部屋を一つずつ持って・・・そろそろ着くわよ。」

ヴェルカがそう言って窓の外を見て見るとそこは・・・正に町であった。

幾つものタワーマンションが聳え立ち中には数百もの店が軒を構えていた。

「ここが『桜学園管轄都市』『桜街』よ。」

『『桜街』・・・完全に街じゃねえかこれ!？」

キンジはその光景を見て驚いていると駅に着いたのか扉が開くとヴェルカが

こう言った。

「降りるわよキンジ。」

ヴェルカがそう言うのとキンジも外に出て行った。

「今から生徒会長に会いに行くわよ。」

「生徒会長って・・・何でだ？」

普通教師だろと聞くとヴェルカはこう答えた。

「この街じゃあ生徒会長が大体運営を決めるのよ、未来の会社経営者としての

訓練の一環としてって言うらしくて大体が生徒会長が決めて後は理事会で

予算を決める程度って所ね。」

「・・・ナンダその決め方って完全に子供が牛耳ってんじゃねえのかこの街？」

キンジは頬を掻きながらそう呟いているとヴェルカがキンジに向けて

こう言った。

「キンジ、生徒会長がいたわよ。」

「!!」

それを聞いて身なりは大丈夫だよなと思いつつ外に出ると待ち構えていたのは・・・。

「君がヴァレンティーナちゃんのボディガードだね？」

「ああ・・・アンタは？」

キンジは目の前にいる理子よりかは背は高いがそれでも低いという印象を持つ

桃髪ツインテールの・・・爆乳の少女が立っていた。

「初めまして〜♪みんなのアイドル『二狐崎 璃恋』で〜す！今日から

宜しくね遠山キンジ君☆」

「・・・コレガ生徒会長か？」

キンジはその様子を見て一抹の不安を感じてしまう事に・・・まあ普通だよなと思っていた。

自己紹介

キンジとヴェルカは迎えに来てくれた二狐崎と共に車に乗るとキンジは

二狐崎を見てこう思っていた。

「この子が生徒会長・・・ヴァレンティーナの話によりやあこの一桜街の

全責任を背負っているにしちゃあ・・・何だろ理子を思い出すような

テンションなんだよなあ。」

そう思いながら共通点もあるよなと思っていた。

「(低身長でロリっ子馬鹿っぽそうで胸・・・!!)」

そう思いながら胸の方に目を向けて・・・最悪だーと思っていた。正直な所理子とは比べようにもならない程の・・・爆乳が目の前にあった。

胸の前で両腕を組んでいるその姿は正に厄介だと思っっているからだ。

然し胸を強調するその姿はキンジにとって最もヤバいと感じてキンジは

二狐崎の体ではなく顔の方に目をむいていると二狐崎はへええとにやにやと笑ってこう言った。

「大体男子って胸とかそういう所に目を直ぐに向けるのに君は違うようだね、

うん。君ならヴェルカちゃんや他の皆を守れると見て取れるね。」

「イヤ俺はヴァレンティーナの護衛が主。」

「主だった目的はそっちで良いんだ、但至少他のみんなにも目を向けて

欲しいんだ。」

「そーいやだがヴァレンティーナから聞いたんだが生徒の何人かがどっかの

誰かに依存し始めているって聞いたことがあるんだがそれ関係か

？」

「・・・まあね、実はヴェルカちゃんのクラスとは違うけど既に3人くらいが

既に人格が変貌しているというか何というか・・・依存しているよ
う

なんだねえ。」

「依存か・・・厄介だなそいつは。」

キンジはそれを聞いてヤバいと感じていると二狐崎はこう続けた。

「それじゃあだけど当面の間君は彼女を守ってくれ、私達は出来る
限り

サポートに回るからね。」

そう言うとき先ずはねと言うと一緒についていた少女達を紹介した。

「先ずは右側の薄茶色のロングヘアの女の子は風紀委員の

『白峰 澄花』ちゃん、学園にいる間君の・・・監視をする事となつて
ね。」

「監視って何で?!」

キンジはそれを聞いて何でと聞くと白峰は目をきつくしてこう答
えた。

「簡単です、男は皆獣というのが常識なんです！それを一つ屋根の
下でおおお男の人とつて・・・そんな不純な事認められますか!!」

「(そうだその通りだもつと言ってやれ!)」

キンジはそれを聞いて内心もつと言ってやれと思っていると左に
いる紺色で髪を三つ編みにしている眼鏡をかけた少女がこう言った。

「まあまあ、『白峰』さん。生徒会長が認めただから良いじゃない
?」

「ですが『辻林』さん!こう言う時はちゃんと置いて置かないと!!」

「ええと・・・あんたは?」

キンジは雰囲気から見て松葉に似た雰囲気の少女に向けてそう聞
くと少女は

こう答えた。

「ああ、初めまして。私は『辻林 祥子』、問題のクラスでクラス長

を

しているんだ。」

「そうか、宜しくな（何か見た感じ松葉によく似た女の子だな）」
そう思うとキンジは安心するなと思っていると取敢えず趣味は何
だと聞くと

『辻林』はこう答えた。

「うん？私こう見えてアニメとかが好きでね、結構詳しいよ。」

「ああ・・・俺の知り合いに同じ奴がいてな、そいつもアニメとかが
好きでよく買わされるんだよなあ。」

「へえ？それさ・・・内容は？」

『辻林』がそう聞くとキンジは最近のを思い出してこう答えた。

「最近じゃあ『精霊使いのガンズミス』、『異世界ガールズバー』、

『赤の陰陽師』だったかなあ。」

そう言って内容を思い出していた。

最初のは魔法が世界で主立っている中で銃使いの少年が精霊を退
治しながら

中世世界の中で近代文明を再現させるために戦うバトルファンタ

ジー+

ハーレムもの。

2番目のは異世界転移したガールズバー職員の男性が色んな種族
の少女達を

スカウトして荒稼ぎして色々危ない事もするブラックアウト
シーンも多数ある。

最後のは陰陽師なのにまあ・・・笑いながら敵対陰陽師や妖怪相手
にボコボコに血まみれで殴ったり相手を刀で斬り捨てたり陰陽師な
のに・・・式神使わずに

戦闘をするある意味問題作。

「へえ、結構コアね。ちなみに私は『4世界伝説』、『ハックファイ
ター・

アサルトブレイカー』、『8マシン』ね。」

「ちよっと待て、直ぐに調べる。」

キンジがそう言つて携帯電話を操作していると『辻林』が説明した。「最初のは4つの世界の住人が手を組んで神を殺す物語、2つ目はコンピュータのハッカーが兵器を操つて人類が滅ぶ姿をハハハと笑いながら

殺戮するんだけどそんな中でAIの一つが其れに疑問を感じて反乱をするつて話で

最後のは8体の機械だけになった世界で体がボロボロになって体が崩壊していく中で再生する自然と世界、そしてその中で生まれる命と共に

自分たちの存在を問う物語なんだけど途中で生き残った人類がいてその子供たちを見守る中で機械たちが自分の存在意義を認識して自分たちがいる意味が

分かったと同時に自分達が朽ちてしまう前に子供が『ありがとう』つていう所が

感動シーンでそれで」

「おお・・・ちよつと待てよく分かったから。」

キンジは『辻林』の熱のこもったその言葉に押され気味になつていた。

すると二狐崎はキンジに向けてこう言つた。

「そろそろ着くよ、あそこが私達の学園だよ。」

二狐崎がそう言つるとキンジはその学校を見た。

「あそこがか。」

キンジはそう言つて今後を考えていた。

学園に来て

一桜学園に着いたキンジ達は二狐崎の後について行く中で何やら声が聞こえていたのでそれとなく聞くとこの様な言葉が聞こえた。

ーねえねえ、また胸大きくなってんじゃない？

ーちよつとやめてよつて嫌だもう。

ーねえさ、最近馬締の周りつて女の子可笑しくない？

ーああ、(U R U*)ウンウン知っている、初音ヶ丘さんに上坂さん、如月さん、馬締先生とかがそうよね。

ーそれどころかクラスの半分くらいが馬締側つてのが気になるよね、

アイツよくエロ本とか普通に持って来てるしなんかいかわしい物持つては

白峯さんに怒られているのにへらへらしてるよねえ。

「・・・何かきな臭い匂いが立ちこんでるな。」

キンジがそう呟くとヴェルカはどうしたのと聞いてきたのでキン

ジは

こう答えた。

「いやちよつとな、そう云や俺はヴェルカと同じクラスだけど基本的に

クラス内じゃあどうするんだ？」

キンジがそう聞くと上坂がこう答えた。

「簡単です、貴方はクラス内では期限付きの転校生扱いとなっています。」

「期限付き？」

何だそいつはと聞くと辻林がこう答えた。

「この一桜街つてさ、在校生が殆ど全員大会社の社長や上層部の子息女だったり

各国の在日領事館の子供だったりと或るんだけど海外から来た子供達が多くいてさ。

その為か国の事情で帰国しなきゃならない時や任期満了だったりの時にいちいち

退学届けを出さないとここから出れないなんて非効率でしょ？

だからそういう生徒達は期限付きで入学することが出来るのよ。

ヴェルカなんてそれだもん。」

「ヴェルカもか？一体何でだ??」

キンジがそう聞くとヴェルカは（*、σー、）エへへと言つてこう答えた。

「私こう見えてパイロットでね、近々この日本で行われる

『レッドブル・エアレース』の予選に出場する為にここに来たのよ。」

「・・・ロシアじゃやらねえのかよ?」

キンジがそう聞くとヴェルカはこう答えた。

「嫌ね、向こうだと私の父親の影響力とか権力とかで代表にされそう
う

だったから・・・私は自分の力だけで出場したいの、その為にこの
国に

来たんだから。」

ヴェルカはキンジに向かって目を見てそう答えるとキンジはこう
思っていた。

「へえ、中々芯の強い奴じゃねえか、子供っぽいかと思いきや自
分の力を

最大限に使うために家柄とか気にしないで自分の力・・・あれ？何
かいたな

そう言う奴。」

キンジはアリアの事を思い出していると辻林がこう続けた。

「まあその為には仲間募らなきゃいけないんだけどヴェルカちゃ

んってこんなスタイル良いから男子勢から人気良すぎて然も性格が良いし見た目も

滅茶苦茶良いから女子ですら仲間にも出来ずに一人でご飯とか食べてるけどね♪」

「ちよつと辻林さん！それ言わないでよね!!」

ヴェルカはもくくと言いながら怒っているがキンジはこうも思っていた。

「(あ、やっぱりアリアに似てるわこいつ。)」

そう思いまさか奴隷とか言わないよなとそう思っているながら生徒会室に来ると

二狐崎が入るとそれじゃあと行ってキンジに向けてこう言った。

「武器とかの書類はここで書いてね、万が一偽装されない様に武器は

全て出す事。この部屋には入った時に金属探知機が仕込まれていてね、

誤魔化そうとしても入力するとその情報と探知機のデータから偽装かどうか

見極められるから嘘はなし。例え金属探知機に引つかからなかったとしても

Xスキャンも同時にしてあるからねえ♪」

「随分嚴重って・・・まあこの価値とか考えたらそうだよな。」
キンジはそう呟きながら出された電子版に武器を記入して提出する

ると

二狐崎はこう言った。

「うん、出された資料に今書いた奴。探知機と今出されている武器と全て同じ、大丈夫。ようこそ一桜学園へ。」

そう言って登録するとそれじゃあと行ってこう続けた。

「もう直ぐ授業・・・今からなら二限目って所かな、白峯さん、案内宜しくね。」

「はい生徒会長、こっちよ遠山キンジ君。」

白峯がそう言ってキンジとヴェルカを連れて出て行くのを見ると

辻林は

それじゃあと行ってある物を手渡した。

「ナニコレ?」

「君が言ってたんだろ? 遠山キンジ君のレポートだよ。」

「あああつたねそんなの。」

「アンタ本当に一度でいいからぶん殴りたいわいやマジで・・・!!」

辻林はそう言いながら拳をグーにしているが二狐崎はページを開いている中で

ある物を見てこう聞いた。

「ねえさ辻林ちゃん良いかな?」

「何よ? 何か用かしら??」

辻林は不機嫌そうに聞くと二狐崎はこう聞いた。

「これなんだけどさ、チームメイトだっけ? 君にそっくりって言うか趣味まで

同じとかマジ笑えるwwwwww」

「よしそこに座ってなさい殴ってやるから!」

どっせーと言って殴りかかろうとして二狐崎はその腕を掴んで……
ぽいと

投げ飛ばすが辻林は壁を蹴って着地するが二狐崎はそれを見ず
こう続けた。

「然し中々の面子だねえ、其れに活躍している事件も相応だしこれ
なら……」

解決できるかもねエ。」

二狐崎はニヤニヤと笑っているのを見て辻林はいそうですかと
適当に言って

出て行くと二狐崎は窓の外を見てこう呟いた。

「さてと、この風は何処に流れ着くのやら。」

そう呟きながら外を眺めていた。

転校

「ここが貴方の入る教室ヨ、今は休憩時間中だから二時間目のチャイムが鳴ったら入りなさい。」

白峯がキンジに向けてそう言うのとキンジはヴェルカと共に了承すると白峯は

キンジを見ずチャイムが鳴ってこう言った。

「じゃあ一緒に入るわよ、その前に一つ言うわよ遠山キンジ君。」

「何だ？」

「・・・若しヴェルカさんに馬締君の様にナニカしたら私は貴方を許さないから。」

そのつもりでねと冷ややかな目つきをしてそう言うのでキンジはおお・・・と少し怖いなと思いつつながら白峯が入ると少ししてヴェルカが入るとこう言った。

「皆くくおはようく。」

『おはようヴェルカちゃん!!』

男子勢の声が聞こえると確かに人気だなとそう思っていると小柄でやせ型の男性が現れるとこう言った。

「ええとね、ちよつと良いかな？」

「あ、はい。スミマセン。」

「君は確か期間限定付きの転入生だったね。」

「はい、そうです。遠山キンジと言います。」

「そうですか、でしたら一緒に入りましょう。」

そう言うのと先生が教室に入ると同時にキンジも入ると周りにいる生徒達が

少しガヤガヤとしていた。

「誰だあいつ？」

「え？誰あの人?？」

そう言う声が聞こえると教師がこう言った。

「ええとですね、今日から期間限定の転校生を紹介するね。『遠山キンジ』君、

当面宜しくね。」

「遠山キンジです、宜しくお願い致します。」

そう言うのと周りの面々がガヤガヤと喚いていた。

「何だよ男かよ。」

「へえ結構いい男じゃないの。」

「そうかなあ、まあまあジャナイノ？」

そう言う声が聞こえる中で生徒の一人がこう聞いた。

「何か一発芸をやって見せてよ！」

「一発芸な……」

キンジはそれを聞いてうくんと考えて……あれかなという
教師に向けてキンジはこう聞いた。

「あの先生、ちよつと拳銃使うが良いでしょうか？」

「構いませんよ、ですけど使うのは模擬弾です。」

そう言うって懐から出すと何であるんですかと聞くと教師はこう答
えた。

「何かあるといけませんからね、それに決闘だと言つて抜く時が多々ありますし彼らは素人ですから万が一に備えて教師全員保有しているのです。」

「……大変ですね。」

「慣れればそうでもありませんよ。」

教師がそう言うって渡すとキンジはそれを何発か装填するとそれを
まず一発放つて嫌さずにもう一発放つとその弾丸は吸いこまれるか
のようにその弾丸に当たった。

は？

今何があったのかというのと更に全弾放つて全て命中した。

「これが特技だな。」

それを聞いて全員オオオオオオオオオオオオオオオオオオと言っている
と更に

こう続けた。

「趣味は何ですか!？」

「趣味か……テレビで映画を見る事かな。」

「得意な事は何!？」

「特技はそうだな・・・まあ今のと同じだし他にもとなるとバタフライナイフの連続開閉あたりかな?」

それを聞いてへええと言っていると生徒の一人がこう聞いた。

「親は何の仕事をしているのですか?」

そう聞くとキンジはええとという・・・ヴェルカがこう言った。

「ええとさ、授業始めない?そろそろ半分もないよ?」

それを聞くと白峯がこう続けた。

「確かにですね、皆さんそろそろ授業を始めますよ!」

それを聞いてちえーと言いながら座るのを見るとキンジはヴェルカ達に向けて

ありがとうと目で言っていると白峯はふん!視線を逸らしヴェルカは

にこりと笑って手を振ると男性生徒がこう聞いた。

「ええとさ・・・ヴァレンティーナさんと転入生とはどういう関係なので

しょうか?」

それを聞いてキンジは暫く考えようとするのでヴェルカが突如として

キンジの腕を掴んで密着してこう答えた。

「私とキンジは・・・こう言う関係よ!」

慌てながら赤面でそう言うと言った生徒たち全員が・・・悲鳴の如き絶叫を上げた。

『『ナニ——!!』』

それを聞いて全員やんやんやと悲鳴を上げていた。

ーウソダ!ヴァレンティーナさんが転入生と付き合っているだ
と!

ーええ嘘でしょ!一体何処で!!

ーウソダ・・・俺達のマドンナがー!?

何やら断末魔めいたものをあげているがキンジはそれどころでは
なかった。

今キンジはこの状況に・・・内心慌てていたからだ。

「(ヤバいやばいやばい！ヴェルカさんの胸が挟まってってこの人ダイアナなんて目じゃない程じゃねえか!!)」

ヤバいぞ本当にとそう思っている和白峯が慌ててこう言った。

「皆さん落ち着いてって言うか皆授業が始められませんか!!)」

白峯がそう言うが誰も聞くことなく其の儘時間だけが悪戯に進んでしまい教師はいつの間にか退室していた。

「今日は自習で構いませんね。」

そしてキンジがヴェルカの隣に座るが昼食迄男子生徒からは嫉妬の視線を

向けられて女子生徒からは色々と質問されまくりそして昼食。

この学園では食堂ではなくショップピングモールみたいに色んな店舗が

軒を連ねている中でキンジとヴェルカは白峯と辻林と共に

某有名ハンバーガーチェーン店(額はとんでもないし内装は滅茶苦茶高い)で

食べていると辻林は笑いながらこう言った。

「アハハハッハーそりゃあ遠山君完全に敵を増やしてしまったね嫌哀れ！」

「笑ってるなら・・・何とかしてくれよ。」

キンジがそう呟きながらハンバーガーを食べていると白峯は頭を悩ましている様子でサラダを食べているとポテトを食べながらこう言った。

「だって私と遠山君がずっといられるようにするにはこう言うしか方法が

ないじゃないの?」

「だったらマシな方法はなかったのかよ?」

キンジがそう呟いているが仕方ないとそう思いながら食事を再開するが

他から来る視線を気にしながら食べていることに腹が痛いと思っていた。

部活動

キンジにとって一般校の授業はとてつもない程・・・きつかった。武偵校の授業がどれだけ薄かったのがか理解できるほどにだ。然も今まは護衛なので音・・・其れも金属音には注意しなければいけないため

授業すらまともに聞ける状況ではなかったのだ。

「つ・・・疲れた。」

「大丈夫キンジ？」

「おお・・・何とかな。」

キンジが机の上で項垂れているのをヴェルカは心配するかのように見ていると

ヴェルカはキンジに向けてこう言った。

「これからスカイレース予選に向けて特訓するから飛行場に行こうと

思ってるんだけど疲れてるなら地上で」

「いやついて行くぞ、仕事だしな。」

キンジがそう言って立ち上がるのを見てヴェルカはそっかと言つて

ついて行った。

学園の中に飛行場がある・・・普通可笑しくねえかと誰もがそう思うであろうが

誰もそれにはツツコミは入れない。

「凄いな、飛行機だけで世界中の奴があるんだな。」

「そうよ、各国のまあ旧型機を仕入れてるからだから私ここに来たのよ。」

「成程な、これほどなら機体を選び放題だな。」

キンジは辺りにある飛行機を見てそう呟いた。

中国の殲撃8Ⅱ「潘陽」

ロシアのMi g 23「ミコヤン・グレビッチ」

イスラエルの「ネシエル」

日本の「三菱F1」

フランスの「ダツソー・ミラージュF1」

アメリカのF115「ストライク・イーグル」

今では普通ならば軍の練習機として扱われるその機体たちは今でも現役として

戦えるぞと言わんばかりに勢ぞろいしていた。

「これ武藤が見たら目を輝かせて喜んでいるな絶対。」

キンジは武偵校で今頃寝ているであろう武藤を思い出しているとヴェルカの機体に辿り着いた。

「こいつがアイツの機体・・・『Su-47 ベルクト』か。」

そう言つてその戦闘機を見ていた。

当人の話によればこの機体は実験機扱いとして10年前に1機開発されたきり

倉庫で死蔵されていたのをヴェルカの父親が見つけてモスボールされて復活した後ヴェルカの専用機となったらしい。

機体カラーも本人の意向で黒だった機体カラーは紫色に変わり戦闘機としては

完全に狙われること間違いないと当人は笑つてそう言っていた。

キンジは彼女から借りた取扱説明書を見ながら機体の中で怪しい所が無いか

調べていると暫くしてヴェルカがやって来てこう言った。

「キンジ、終わりそう?」

「ああ、後はコックピット・・・!」

キンジはヴェルカの今の服装を見て驚いていた。

機体と同じく薄紫色のパイロットスーツ

繋ぎがある事からこれは全身タイツと同じような形状だと思われるがキンジはヴェルカの・・・胸を一瞬見た後にこう思っていた。

「こいつ！やっぱだが着やせする奴だぞイヤ本当に!!」

制服でも際立っていたその爆乳がパイロットスーツという薄皮一枚の如き

ピッタリしたその格好にキンジはやばいと思いつつながら視線をヴェルカ本人に

向けるとキンジはこう聞いた。

「それじゃあだが俺は・・・コックピット見てくるからここで待っててくれ！」

そう言つて中に入ってチエックしようとする・・・ヴェルカがキンジの

すぐ後ろまで近寄ると一緒にコックピットの点検をしようとして近づいたのだが

キンジにとってそれは・・・悪手であった。

「(アアアアアア！胸が！胸が密着してつて言うか何だかシャンプーの匂いもするつて言うか背中に柔らかいのが滅茶苦茶当たつてつていや待つて

本当にどいてくれ頼むから誰か助けてー!?)」

そう思いながら素数を思い出しながら作業しているとヴェルカはそれを見た後にこう言った。

「それじゃあ後は・・・飛んでみましょ♪一緒に行きましょキンジ。」

「・・・・・・は？」

キンジはそれを聞いて何でと思っっているがヴェルカはキンジに向けてそう言うとその儘・・・背中を押してコックピットの中に入ってしまった。

「ぬお！おいマテコレッテ一人乗りじゃねえか!!」

「だからこそよ、一緒に乗って乗り心地を確かめましょ♪」

「シートベルトは!？」

「キンジが私に抱き着いていれば問題ないでしょ？それに貴方がいた方が

私一人じゃ対応できない時にちゃんとできるでしょ?」

ヴェルカはそう言いながらキンジに・・・密着させるかのように一緒に

後頭部から甘い匂いが立ちこんでくるのでキンジは・・・更にこう思っていた。

「(アアアアアア！匂いが!!女子の良い匂いが鼻についていかん血が逆流してきた!?!此の儘じゃああの状態になってやってはいけない事

してしまうぞ！依頼者とそう言う関係になっちまったら先生共から殺されること

間違いねえだろく特に蘭豹先生)。落ち着け落ち着くんだ俺先ずは計器類とかを

思い出すんだ気を逸らすんだー!?!)」

そう思いながら思い出しているとヴェルカがキンジに向けてこう言った。

「ねえ、シートベルトそっちなんだから・・・ぎゅーってしてよね?」

「ぎゅーって・・・お前なあ・・・!!」

キンジはこの我儘娘と思いながら仕方なく抱きしめるとヴェルカは

キンジに向けてこう言った。

「それじゃあ飛ぶわよ!!」

そう言ってエンジンを吹かしている中でキンジはこう思っていた。

「頼むから速く何とかして終わらせてくれー!!?」
そう思いながら今日の空はムカつくほど清々しいなと思いつつながら
空を飛ぶこととなったキンジであった。

菓子を食べるがために

「や……やっと終わった。」

キンジはそう言いながら……完全に疲れている様であり項垂れていた。

何せ爆乳の中でも自身が知っている中で最も大きいタイプで然も密着されるが為

その精神的苦労は絶大であった。

「どうしたのキンジ？もしかして疲れたのかしら??」

「ああ……まあな。」

殆どお前のせいだけだかなと思いつながらキンジはズルズルと足を引きづりながら

ヴェルカの後をまるでひよこみたいな感じについて行くのを見てヴェルカは

こう思っていた。

「(本当に面白い子ね♪普通だったら生唾飲んで襲い掛かるんじゃないかって

思ってたけど本当に無害なのね?……もしかして男好きなのかしら?)」

まあ、邪魔しなければそれでいいわけだしね。」

そう思いながらヴェルカは疲れているキンジに向けてこう言った。

「それじゃあ疲れてるだろうから私が美味しいお菓子ご馳走してあげるわね♪」

「お菓子……『揃い踏み』って言う菓子とかあるか?」

「ううんどうだったかしら? 私何時も和菓子だけどソウイウノハ見たことないわね。」

好きなのと聞くとキンジはこう答えた。

「ああ……子供の頃からな。」

そう言うのと学園の中にある和菓子屋を見て驚いていた。

お客さんが多くいて(殆ど男性陣)何やら注文しているようだがキンジは

あれ何だと聞くとヴェルカはこう答えた。

「あああれね、あれは毎日だけどよく飽きないわね？」とある伝説があるのよ。」

「伝説？」

「そう、昔あそこにある最中を食べた生徒がああ『甘猫庵』の看板娘？・・・

だったかしらその人が態と彼の最中に自分の家の番号とかを書いた紙を

入れていてね、それからと言う物その男子生徒と付き合ってたって聞いたわよ。」

「其れとこの混雑の何が関わってたよ？」

そう聞くと背後から・・・白峯が現れてこう続けた。

「その伝説を聞いた生徒があることない事風潮したせいで取敢えずは

紙は入れるけど個人情報とかは入れない様にして商品券とかその店の店員との

相談とかで監視カメラ付きの部屋でお茶会とかするのよ、因みにだ

けど

その伝説の由来は」

そう言っていると今度は辻林が出てこう続けた。

「由来はね、当時は女から告白すること自体が無かったから出会う場所とかを書いた紙を最中に入れたからそう言う風習が生まれたんだよね。」

「・・・何でお前ら来てんだ？」

キンジは2人に向けてそう聞くと辻林がこう答えた。

「いやねえ、君がヴェルカちゃんと一緒に飛行機に乗っていたって聞いたから

何したんだらうなああって思って見に来たら・・・如何やら扱き使われた

ようだね。」

「・・・分かってくれて光栄だぜ。」

「ちよつと！何で疲れるのよ納得いかないわよ!!只抱きしめてって
言って

答えてくれただけじゃないの!？」

「二人用の飛行機の中で何でそんな事するんだ考えてくれよ!!」

其の儘言い合いになって行くのを見て白峯と辻林がこう言った。

「・・・如何やら会長の云う通り危険はなさそうね。」

「ほらね、言った通りじゃない?」

そう言っていると言わずしてキンジはこう答えた。

「疲れたから・・・取敢えず・・・菓子買ってからだ。」

「良いわよ・・・受けて立つわ。」

そう言いながら子供の喧嘩かよと思いつつながら2人は少し子供だな
と感じているとキンジとヴェルカが店に來ると何か書かれていた。

内容はこれ。

そう答えるとヴェルカは店先に行こうとすると突如として客の一人が

ヴェルカを見てこう言った。

「ヴあヴあヴあヴあヴあヴあヴあヴあヴあアレンティーナさん！」

『!?!』

「いいいい一体何しにここに!?!」

「今日はキンジと一緒に菓子買いに来たのよ♪」

それを聞いて全員ぎろりと睨みつけているとキンジはまたかよと思いながら

睨まれている中溜息付いていると全員ヴェルカから離れるかのよう

にしているのを見てまるでモーゼだなど思っていると白峯はキンジに向けて

こう言った。

「貴方が初めてヨ、あの子に対して普通にいられるのは。」

「?。」

「あの子ってさ、滅茶苦茶美人だから何て言うか・・・高嶺の花扱いだからさ。ちやほややって言うよりも遠ざけられるって言うの?・・・其れであの子

友達がいなくなっってその上辛気臭い奴もいるからあの子からしたらアンタみたい

に普通にくれてくれる奴がいることが幸せなのよ。だからちよつとくらしいの我儘くらい大目に見なさいよ。」

「・・・内容によるだろ。」

キンジはそう言うがまあ確かにと思っていた。

ホテルでもであったが近づきたい美人特有のオーラを放っていたがために

近寄りがたかったのがキンジがいるだけで楽しくなったことに幸せを

感じていることをキンジは知らなかった。

そしてヴェルカが店から出るとキンジは最中を一つ取って食べる
と・・・ナニかくシヤと感じたので何だろうと持つて見てみると・・・
紅い紙が入っていたので

何だと思っっていると外にいた店員がキンジの持っている紙を見
て・・・大声で

こう言った。

「大当たりー!?見事獲得したその男子生徒には我が『甘猫庵』の
看板娘とのひと時だー!?」

『ナニー!?』

それを聞いて男衆たちはキンジに対して睨むと一目散に逃げよう
と思つて

ダツシユしようとして・・・店員達に両腕掴まれると白峯に向けて
こう言った。

「という訳で生徒会長!例の部屋を!!」

「・・・分かったわ、準備しておくわ。」

「凄いわねキンジ!ハイって早々に当たるなんて何かいいこと
あるんじゃないの!?!」

「良い事!?!これがか!!」

キンジはヴェルカの言葉を聞いてふざけるなど言いながら引きづ
られていった。

看板娘現る

会議室

ここは監視カメラが存在し会議の際における不正がないかをチェックすることが

出来ると同時にいかがわしい事が起きない様にさせるためにある部屋の中で

キンジは項垂れながら部屋の机に顔を突っ伏していた。

「何で・・・こうなっちゃったんだ？」

キンジはそう呟きながら部屋にあるキングサイズのソファの上で・・・

寝転がりながらふけようかなと思っていると・・・ノックする音が聞こえた。

「すみません、遠山キンジ君はこのお部屋でしょうか？」

「!! (来ちゃったよもう少し遅く来いよ!!)」

そう思いながらキンジは一応身だしなみ揃えよと思って整理すると言った。

「はあい、こっちです。」

「失礼いたしますね。」

そう言っ現れたのはフリルをふんだんに使った緑色の着物を着た

黒髪の美女が現れたのだ。

「ああこれは初めまして・・・!!？」

キンジは現れた女性光咲姫を見て挨拶するが或る一部分を見て・・・ぎよっとしていた。

ヴェルカや白峯程ではないが其れでも大きな胸を見てしまっヤバいと思っ

キンジは光咲姫の顔を見てこう続けた。

「初めまして！俺は今日転校してきた遠山キンジと言います!!今後とも・・・

まあ色々宜しくお願いします。」

「(ハ、V、*)ウッフ、二狐崎さんの言う通り本当にちゃんと私達の顔を

見てくれているのね嬉しいわ♪」

「いや当たり前だろ？普通人の顔を見るのは？」

キンジがそう聞くが光咲姫はううんと首を横に振ってこう答えた。

「私小学生の時から胸が大きくてね、だからよく胸を見られていたから視線で

何処に目がいつているのか分かっちゃうのよね。だから貴方が初めてなの、

私の顔をちゃんと見てくれた人は。」

光咲姫はそう言って微笑んでいとさてとと云ってお茶を準備し始めた。

「お茶なんだけど緑茶で良いかしら？紅茶とかもこの部屋完備してるから。」

「ああ、じゃあそれで宜しくお願いします。」

キンジがそう言うのと光咲姫は急須にお湯を入れて準備をしているとキンジは

光咲姫に向けてこう聞いた。

「あのう・・・聞いて宜しいですか？」

「何です？」

「どうして今回この企画を思いついたんですか？」

「・・・どうしてって其れは」

「正直聞きますけど俺が当たったから良かったんですけど俺以外でしたら

間違いなく下心がありまくりな奴らが来ますから何かあっても不思議じゃねえぜ？何せアンタみたいな美人さんといられるなんて普通に考えたら何かあっても

不思議じゃねえぜ？」

「わー！私が綺麗!!・・・でしよるか？」

「いや美人だぜ？本当に綺麗だし何より俺が知っている奴よりかは大人しそうだし。」

「知り合いにどんな人がいるんですか？」

光咲姫がキンジに向けて聞くとキンジはこう答えた。

「ああ・・・俺に女の子が一緒にいるだけで暴力に訴えるような奴がいてな、

幼馴染何だがどこで何があつたのやら。」

聞きたくねえぜとそう言いながらキンジ菌目の前にあるお菓子里に目を付けていた。

大量の和菓子がありどれも高そうな感じなのだ。

すると光咲姫はキンジに向けて緑茶の入った椀を置きながらこう言った。

「宜しければどうぞ、それは『甘猫庵』で作っている新作のお菓子ですよ。」

一先ず味見してみてください。」

光咲姫の言葉を聞いてキンジはじゃあと行ってきんつばらしきものを食すると

キンジはこう答えた。

「このきんつば・・・黄色いのはきな粉か？」

「その通りです、きな粉でまぶしてその中には餡餅が入っております。」

おはぎの要領で作ったので他にもいろいろありますのでどうぞ。」
それを聞いてじゃあと行って・・・10分が経過した。

「ご馳走さまでした。」

「お粗末様です。」

光咲姫がキンジに向けてそう言って緑茶のお代わりを入れている

とキンジは

光咲姫に向けてこう聞いた。

「なああんた、何で緑茶飲まないんだ？」

苦手なのかと聞くと光咲姫はこう答えた。

「ううん・・・実はですね、親からこう言われてるんですよ。『お前は

誰かがいる時は緑茶を飲むんじゃない!!』って怒られまして何故だ

が分からないんですが禁止されてましてここでもなるべく一人の時

に飲んでいる様になっているのです。」

何故でしょうねと言うと光咲姫の言葉を聞いてキンジはよいしよ

と言つて

こう言った。

「じゃあ一緒に飲むか？」

「何かあつた時に俺がいりゃあ何とかなるし暴れるなら寧ろ俺が適

任だろ？」

う答えた。

「そうですね？でしたら一杯だけ。」

そう言つて急須の中の緑茶を少し飲むとこう言った。

「やっぱり誰かといたほうが美味しいですね。」

「まあ当たり前だろうがな。」

キンジはその言葉を聞いて当たり前だろと言いながらお茶を啜つ

ていると

暫くして光咲姫が・・・こう言った。

「…………ひっく。」

「ひっく?」

キンジは何だと思っていると声の発生源でもある光咲姫にどうしたんだと聞くと光咲姫は……顔を真っ赤にしてこう言った。

「遠山君……美味しそう♪」

「はあ……何言って」

るんだと言う前にキンジの唇が光咲姫の唇によって……

…………キスされて言葉を出せなくなってしまった。

きス魔

一方監視カメラルームでは。

「さてと、ソレデはこれより遠山君の監視を始めようと思います。」
「これって犯罪じゃないかしら？」

ヴェルカがそう言うのが白峯はこう返した。

「何言ってるんですか！男と女が部屋の中でその……ナニカ有るとは考えませんか!？」

「えとき……私何もなかったんだけど？」

「それは……タイプじゃなかったから？」

「何ソレそれ本当だったらショックなんだけど!？」

ヴェルカは白峯に言葉を聞いて最悪でしようと思っていると辻林がこう続けた。

「けどき、彼って私達に対して下心ないんじゃない？だからこそヴェルカちゃんへの護衛を引き受けたわけだしまあ言いたかないけどあの生徒会長の

人を見る眼だけは確かな訳だし私達がああだこうだ言った処で何かするって

訳じゃないでしょ？」

そう言うのが白峯は信じきれないようで尚も監視映像を目を開けるかのように

がっちりとみていたが……こう呟いた。

「ねえき……何も起きないわね？」

「だから言ったでしょ！キンジは優しいんだって!!」

ふんすかとヴェルカは鼻息荒らしてその大きな胸をバルンと揺らすかのように

そう言うのが辻林はああハイハイそうですかとノンケだなど思っ

聞いているふりをしていると白峯は頭を？にした感じで何だと思っていたので

どうしたのかと辻林が聞くと白峯はこう答えた。

「え……ええ、遠山君が何か言っ……コップを持ってきました

ね、

それを茶山さんに渡して飲んでますね2人共。」

「大方一緒に如何？感覚で飲んでんじゃないの?？」

「けどどうやったのかしら？茶山さんってあまり緑茶とか飲まないような

感じだったのに?」

どうしてだと思っていると茶山が立ち上がるのが見えた。

「?」

3人揃って何だと思っているとキンジが近づいてどうしたんだと思っ

近づいたようだがすると茶山はキンジの首元に腕を絡ませて其の儘・・・

キスしやがったのだ。

「アアアアアアアアアアアアアア!!」

白峯とヴェルカはそれを見て驚くと速攻に部屋から出て行く序にこう言った。

「遠山君！やはり貴方は危険人物でしたねー!!」

「キンジー!!何やってんのよー!!」

互いにそう言って走って行くのを辻林は見送ってもう一度見ようとすると辻林はこう呟いた。

「あれ?こつちから見ても遠山君って薬入れた様な感じしないな。」
なんでだろと思っ取敢えず電話を掛けた、相手は・・・

「あ、生徒会長。ちょっと聞きたいんだけど良いかな?」

二狐崎であった。

「む・・・ムグぐググ!?」

「む~~~~~~~~♡」

キンジは茶山によって熱いキスをかましている中で血液が沸騰していくような

感触を感じてヤバいと思っていた。

「(やばい!あれが近くなってる!!今あれになったら取り返しがつかんぞ!)」

キンジはそう思いながらドウヤツテ剥がそうかしていると暫くして・・・茶山はキンジから離れたのだ。

「(よし離れてくれたなって何かあったのかって言うか何でキス!!)お・・・おい、大丈夫か?」

キンジがそう聞くが茶山はキンジに向けて・・・こう言った。

「遠山君の唇・・・美味しい~~~~の~~~~♡もつとチューするに~~~~♡」

「いや待て落ち着けて言うか何でキスって待てやめろ!!」

「チュー~~~~チューすりゆの~~~~♡」

「ホントに落ち着けて誰か助けてくれー!?」

キンジが大声でそう言った瞬間に扉が勢いよく開いたのだ。

「白峯!ヴェルカ!!」

キンジは2人を見て救いの神だと思って助けに来てくれと思っているが

その表情は・・・違っていた。

「キンジ・・・アンタ何しているのかしら~~~~・・・!!」

「ヴェルカさん？」

「遠山君・・・貴方って人は・・・一体何しているんですかー!?!」
「俺が知りてえよ!!」

キンジは白峯に向かってそう言うが茶山はキンジの方から・・・
白峯達の方に目を向けると茶山はこう言った。

「あああ・・・ヴェルカちゃんに白峯ちゃん。」

「あ、大丈夫でしたか茶山先輩！早急にこの事は生徒会長に」

「チューしよ~~~~♡」

「ふえ!？」

茶山の言動を聞いて白峯は驚いているが茶山は知る由も無しと言わんばかりに

白峯目掛けて走ってきたのだ。

「チューしよ~~~~♡」

「キヤアアアアアア!!」

流石の白峯もこの言動に何で!?!と思っっているようであったが

それをキンジは・・・しがみ付いて拘束すると茶山はキンジに向けてこう言った。

「チューしよチュ~~~~♡」

「ああもういい加減にしてくれて何だこれ完全に酔いどれじゃねえか!!」

キンジがそう言うとなんかじゃあどヴェルカが言って水を入れるとそれをキンジに手渡してこう言った。

「これ飲んだら落ち着くんじゃない？」

「そうか！助かるぜヴェルカ!!」

保健室での語り合い

あの後暫くすると辻林と二狐崎が現れるが何があったのか聞いた後二狐崎は

キンジに向けてこう言った。

「ちよつと悪いけどコップは回収して君は事情聴取ね♪」

「マジでか!？」

キンジはそれを聞いて俺無実だぞと言いながら其の儘連れ去られていった。

そして保健室

ここでは簡易的だが色々と検査ができる場所で病院としても機能している。

そんな中でキンジと茶山が飲んでいたコップをあらゆる機械で検査していた。

その隣の部屋では茶山がぐつすと時々（*・σー、）エへへと笑いながら寝ているのと何やら赤面で魘されながら寝ている白峯がいた。

「ウウウウウウ・・・キス・・・ウウウウウウ。」

そう魘されていたが関係ないとキンジは一蹴してどうなるんだと思っている・・・保険医でもある『馬締 理沙』が現れるとこう言った。

「取敢えずだが・・・薬は検出されなかった。」

「ええと先生・・・其れってマジ？」

「マジだ。」

『馬締 理沙』が辻林に向けてそう答えるがじゃあ何でと思っっている・・・

『馬締 理沙』はこう答えた。

「監視カメラを見る限りだが恐らく・・・泥酔だな。」

「「いや待て緑茶で酔うのかこの人!」「」

それを聞いてキンジ達が驚いているがまあ体質なのだろうと
言っ

こう続けた。

「取敢えずは様子見で今日は・・・ああ起きたか。」

「ううん・・・。」

「大丈夫か!？」

キンジが茶山に向けてそう聞くと茶山はこう答えた。

「ええと遠山君・・・ココって・・・あれ私何してたんだけ？」

確かお茶飲んでと言うとキンジ達はすつと・・・視線を逸らす

『馬締 理沙』を見てこう聞いた。

「あの先生、私一体何がどうなって」

「それは遠山 キンジに聞いてこい。」

「ふえあ!？」

何でと思っていると『馬締 理沙』はこう答えた。

「当事者に聞きなさい、これは貴方達の問題なんだから。」

それじゃあねと言って去っていくとキンジ達はえええ・・・と思っ
ていた。

何せ緑茶を飲んできス魔になったなど誰が信じるんだと思ってい
ると・・・

白峯も起きたのだ。

「う・・・ううん・・・。」

「あ、白峯も起きた。」

ヴェルカがそう言うのと茶山とキンジを見て・・・アアアアアア
!!と

悲鳴交じりの声をあげてこう言った。

「遠山キンジ! 貴方という男は見損ないました!!」

「?」

「おいマテお前」

「ちよつと待って! 今それは」

「貴方はクスリを使って茶山先輩とキスしたでしょーーー!!」
それを聞いて暫くすると茶山は・・・

「つふえー!」

ボふんと赤面して嘘でしょーと思っていると・・・二狐崎がこう言った。

「ええとき・・・監視カメラの映像見る?」

「おいマテアンター!ここであの唐突なシーンを見せる気か!」

「だってさ、百聞は一見に如かずって言うんだしどうせ言うよりかは見せた方が速いって。」

そんじゃあ取って来るねえと言って二狐崎が出て行くと茶山はキンジに・・・

赤面しながらこう聞いた。

「ええと・・・本当なの其?」

そう聞いてきた、ウルウルしているしもしかしたら本当に薬でっと思っているのであろう少し疑惑の表情が伺えるが・・・辻林はあっけからんと

こう答えた。

「薬は違うわよ?貴方緑茶を飲んで酔っ払ってキンジにキスしたのよ?」

「きききつききききききキス!／／／／／／」

「おい辻林やめろ!色々と混乱起きるぞ!」

「其れだけじゃなくて白峯さんにも迫ったしね。」

「あうううあうううあうあうあうあう!!」
何やら慌てふためいているがキンジはもうどうしたら良いんだよ
と

思っていると・・・二狐崎が現れてこう言った。

「持ってきたから皆で見よ〜♪」

そして数分後。

「////////////////////」

完全に赤面して黙る茶山と同じく・・・俯いているキンジがいるが
二狐崎は

茶山に向けてこう続けた。

「取敢えずなんだけどこれで誤解が解けたって事で良いね? 白峯
ちゃん。」

二狐崎は白峯に向けてそう聞くと白峯は赤面しているがキンジに
向けて

こう言った。

「まあ・・・未だ貴方を信用したわけじゃないから・・・けど貴方の
事を

悪く言ったことについては謝るわ・・・ゴメンナサイ。」

白峯がそう言って謝るとキンジもそれを聞いてまあいけどなと思
いながら

取敢えずはお開きにするかという茶山はキンジに向けてこう
言った。

「ええとね・・・その・・・色々ゴメンナサイ遠山君!あの私その・・・
自分がそう言う体質だつて知らなくてそれで・・・本当にごめんなさ

い！」

キンジに向けて頭を下げるとキンジはこう返した。

「いや俺だって緑茶を飲ませた原因だしそれに・・・ファーストキス奪っちまったし。」

「はう・・・／／／／／／／／／／」

それを聞いて茶山は更に赤面して俯くと取敢えずとヴェルカがこう言った。

「今日はこれでお開きにしない？どうせだったら今日はキンジと晩御飯食べようよ!!」

「いや待てこの面子でか!？」

「当たり前でしょ？白峯さんがキンジの事を知ってもらうにはちやんと

見ておかないといけないでしょ!!はい決定だから!？」

そう言うヴェルカは立ち上がってこう言った。

「さあ！パーティーよ!!」

家に来て

「けどよ、パーティーなんてどこで開くんだよ？」

キンジはヴェルカに向けてそう聞いた、場所すら決まっていらないのに

一体何処でやるんだと聞くとヴェルカはこう答えた。

「簡単よ！私の部屋で開くのよ!!」

「お前の部屋・・・何処だよそこは？」

「この近くにあるタワーマンションよ！あそこだったら無茶しても大丈夫よ!!」

「あのタワーマンションか・・・防音設備とかは充実してんだよな？」

「勿論ヨ！エアレースに備えてシュミレーションルームに

トレーニングルーム完備よ!!」

「・・・流石金持ちだぜ。」

キンジはそれを聞いて庶民にとっては夢のまた夢だなど思っている

それじゃあと行って全員に向けてこう言った。

「今すぐ買い物して家に集合よ！楽しみ楽しみ〜♪」

ヴェルカはウキウキした様子でそう言っていると茶山がこう聞いた。

「あの・・・私も良いでしょうか？」

「勿論ヨ先輩！大歓迎よ!!」

ヴェルカは笑顔でそういうとキンジはこう言った。

「そんじゃあ飯の準備とかするか。」

そう言って取敢えずはと買い物に付き合うこととなった。

「大きいなこのマンション。」

「そうでしょ！パパ曰く高かったらしいわよ!!」

そう言っただけの目元にある……タワーマンションを見ていた。

10階は軽く超えるであろうそれは中々どうして大きなものであった。

「それで、お前の部屋って何階なんだ？」

荷物置かなきゃなと言うとヴェルカは……何言っただけのと言っただけ答えた。

「これ全部私の部屋よ？」

「……は？」

あまりの言葉に何言っただけだと思っているとヴェルカはこう続けた。

「パパがね、安全の為とか言っただけ全部買ったのよ。もし私が向こうに戻ったら

其の儘経営者として残すんだってさ。」

買い物かばんねと言っているとキングは……ヴェルカに向けてこう聞いた。

「え……お前の部屋って……これ全部？」

「そうよ？言っているじゃない??」

「シミュレーションルームは？」

「三階と四階全部ヨ、戦闘機だけじゃなくて戦車に戦艦、潜水艦とかも

出来るって。」

「トレーニングルームは!？」

「6階よ、その儘ジムとしてでも使えるし5階は大きな大浴場でサ

ウナ付きよ♪」

「……ここって合計して何階なんだ？」

キンジは恐る恐る聞くとヴェルカは……あっけからんところ答えた。

「全部合わせて21階よ、その内下半分全部が私名義の部屋で1階は

私の家でもあるわ。キンジは私と相部屋で武器とか入用があったら7階と8階に

倉庫として武器奥とかあるからそこから適当に好きなもの持って云って良いわよ。」

ミサイルとかもあるからというときンジはヴェルカに向けて……更にこう聞いた。

「一体どんだけの武器があるんだよ？」

そう聞くとヴェルカは……こう答えた。

「ええと確か……地下に装甲車とかもあるから全部合わせて……9個大隊分くらいの武器があるはずヨ？」

「ここは戦場かって言うか武器屋の店かお前の家は!？」

戦争にでも行くのかよとそう言っていると……白峯達がやって来た。

「遠山君、何大声で言っているんですか？近所迷惑ですよ。」

「まあ近所って言ったってここら辺全部ヴェルカちゃんみたいに海外から

来ている子達いるけど皆ヴェルカちゃんのオーラに押されてあまり出ないんだよねえ。」

「私ここ来るの初めてですよ、こう言う所なんですね？」

「まあ他とあまり違わないけど国際色豊かにするように幾つか各国の関連施設も造ってるからそっちに行ってると思うよ？」

そう言っつて白峯・辻林・茶山・二狐崎の順で話していた。

そして全員タワーマンションを見てオオオオオオ!と言っている
と

ヴェルカがこう言った。

「それじゃあ・・・皆入るわよー!?」
そう言つて扉を開けた。

「おいおいおい・・・ホテルかよここは？」

キンジはそう言いながら周りを眺めていた。

完全に一流ホテル並みの光景じゃないかと思つてしているとキンジに
向けて

こう言つた。

「それじゃあキンジ！台所は奥にあるから調理器具好きなものだけ
使つてねえつて・・・調味料ロシア語だけで分かる？」

「・・・分からねえ。」

「じゃあ私も入るから一緒に調理しましょ♪」

「じゃあ私も手伝います、料理でしたら得意ですから。」

「でしたら私もです、迷惑かけてしまったお礼もしたいですし。」

「でしたら私が見張りに立ちます！男一人だけだと何するか分かつた
ものでは

ないですし!!」

「いい加減に認めてくれよ本当に!!」

キンジは白峯に向けてそう言うが当の本人はまるで信頼なしと言
わんばかりに

目を背けた。

そして残つた辻林と二狐崎はと言うと・・・これであつた。

「二狐崎先輩・・・今日こそ決着付けるわよシユミレーシヨン
で。」

「良いねえ・・・負けないよ私。」

「よっしや決闘じゃ!!」

そう言つて2人は其の儘シユミレーションルームに行った。

「そんじゃあ・・・料理の準備でもするか。」

天草みたいに出来るかなとそう思いながら台所に入つて行つた。

そして別の場所では。

「あの男ヴェルカと一緒にだなんて・・・気に食わねえから消すための手段

考えるか。」

女の子の酒池肉林の光景の中で危ない笑みを浮かべていた。

その男の名前は・・・『馬締 聖人』・・・特殊なアプリ・・・

『催眠エロアプリ』で外道な事をする男である。

とある朝

「それではこれより遠山キンジの歓迎会を執り行いと思いまゝす！」

ヴェルカがいいええええ！と言いながらジュースの入ったコップを片手に

乾杯すると全員も腕を上げて乾杯した。

「それにしても何で俺なんかの為に歓迎会何て開くんだよ？」

「良いじゃない？こう言うのは大勢の人間で楽しんだ方が良いでしょう？」

ヴェルカは悪びれない声色でそういうと茶山はアハハと笑いながらも用意された洋菓子を食べているとこう言った。

「私仕事以外でも洋菓子食べる機会が無かったものですから私嬉しいですよ？」

「え？茶山先輩って家でも和食なんですか？」

「はい、家の新商品の味見とかでチョコとかは縁遠い食べ物でしたから

嬉しいんですよ。」

「お家の為に頑張るなんて茶山先輩って本当に頑張り屋なんですね。」

白峯は茶山に向けて誉め言葉を言っているとキンジは女しかいない事から

肩身狭いなど思いながら麦茶を飲んでいるがこの光景を見て少し笑みを

浮かべていた。

次の朝、キンジは周りの建築事情を考慮して走っているとある少

女が見えた。

青い髪を短髪にした少女が自転車を漕いで走っている姿を見ていると

その少女を見過ごした後もう少し走るかと思つて公園まで走っていると・・・

声が聞こえた。

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!! 止まって止まってー!?!」

「今のは・・・あつちか。」

キンジはそう言つてその場所に向かつて走つて行くのである少女が見えた。

「さっきの女の子か! 自転車から見て・・・まさかブレーキが壊れているのか!」

キンジはそう考えて不味いと考えて坂を素早く走り下つて合流すると

キンジは自転車に乗っている少女に向けてこう言った。

「おい! 俺が自転車からお前を救うから自転車から飛び降りろ!!」

「そんな! これ特注で高いのに」

「今は自分の命が大事だろうが! 俺が掴むから・・・俺を信じろ!」
キンジがそう言うのと・・・少女は暫く考えて・・・こう答えた。

「分かった・・・行くよ!」

少女はそう言つて跳び出すとキンジはその少女を真正面から・・・抱きしめるかのように掴むと自転車は其の儘坂に下つて・・・柵にぶつかった。

「・・・大丈夫か？」

「あ、はい・・・ありがとうございますって・・・アアアア！私の自転車!!」

少女は大声でそう言うがキンジは仕方ないと言ってこう続けた。

「あのままだとお前あの柵に当たって死んでたんだぜ？今大丈夫なだけ
ましだぜ？」

キンジはそう言うが少女はアアアアと言ってこう続けた。

「あれ・・・特注で然も民間にさえ出ていない最新モデルなのにー
!？」

「いやお前本当に自転車が大事なんだな。」

まあ良いけどなどと言うと少女は暫くしてキンジに向けてこう言った。
「助けてくれてありがとうございます、私『嶋乃 まつり』って言います。」

一年生で自転車部の部員です。」

「自転車部・・・じゃあ今まで練習していたのか？」

「はい、何時もは部の格納庫に入れてあるんですが今日も練習していたのですが突如としてブレーキが効かなくなっただけで今に。」

「そうか・・・心当たりとかはないか？恨まれたりとかは？」

キンジがそう聞くと『嶋乃』は暫く考えて・・・こう答えた。
「いえ、恨み言とかはあまり聞いたことないですし私達は

そう言う事したとしても学園の生徒会長は黙っています。」

「成程な・・・アイツなら確かに黙っていなさそうだな。」
キンジはそう言って二狐崎を思い出していた。

理子みたいな軽そうな感じであるが同じだと言うのなら仁義もありそうだなと思っていた。

「そんなじゃあだが・・・帰る時どうするんだよ？チャリねえぞ？」
キンジがそう聞くと『嶋乃』はこう答えた。

「うん・・・ちよつと歩かなければいけないけど帰れると思うよ。」
そう言っただけで歩こうとすると・・・突如として足を抱えて蹲った。

「いた・・・」

「おいお前大丈夫か？もしかしてあの時に怪我したのか!？」

「うん・・・多分ね、けどくじいたただけだから暫くしたらまた歩けるようには

なると思うんだけどね。」

そう言っただけの木に寄りかかろうとして・・・キンジが『嶋乃』に向けて

こう言った。

「俺が手を貸すぞ。」

「え?」

「ここであつたのも何かの縁だし俺が今住んでいる場所まで送るぞ?」

「良いの・・・迷惑じゃないの?」

「良いんだよ、こうなっちまったのも俺のせいだし俺が連れて行くぜ。」

キンジの言葉を聞いて『嶋乃』は小さくありがとうと言ってキンジの手を取った。

「よし、肩を貸すから行くぞ。」

キンジはそう言っただけ『嶋乃』を担いでいく中で『嶋乃』はこう聞いた。

「ええとさ・・・助けて貰って何だけど一つ良いかな?」

「?」

「・・・何でおんぶとかじゃないんだろうなと思ってね。」

「・・・ノーコメント。」

キンジはそう言う理由が・・・彼女の胸部であった。

ダイアナと同じくらいその胸部装甲は抱きしめた際にその柔らかさを

感じてしまって不味いと思っただけからだ。

「其れでだけどき・・・何で女の子持ってきたの？」

「・・・ノーコメント」

「攫ってきたの!?!」

「違うわ!!」

危ない着替え

「今回は助けてくれてありがとうございます！」

「いや良いんだって・・・自転車の事は済まなかった。」

「いえもう良いんです！こうやって助けて貰ったんですから!!」

嶋乃がキンジに向けてそう答えるとご飯の準備をしているヴェルカが現れてこう言った。

「ご飯まだなんですよ？一緒に食べましょ？」

そう言う目目の前にあるパンとミニハンバーグ、ポテトサラダがあった。

するとキンジはヴェルカに向けてこう聞いた。

「お前・・・これ如何したんだ？」

そう聞くとヴェルカは普通にこう答えた。

「え？私が作ったのよ？こう見えて私料理はちゃんと出来るんだから♪」

「お前って良い家のご令嬢だろ？何でそんな事」

「何言ってるのよキンジ、幾らどれだけの家だとしても私達は女の子ヨ？手作りのご飯を男の人に食べさせて貰いたいのよ！」

「・・・何でだ？」

「昔からよく言うでしょ！『気になる異性に対しては先ず胃袋を掴むこと』だって話ヨ!!」

「それ・・・ロシアでもそうなのかよ？」

まさかの日本のことわざは今やワールドランクかよと思いたくなるその言葉に

頭を悩ませているが仕方ないと思って3人は揃って食べ始めた。

そして食べ終えて学校に行こうとするとヴェルカがキンジに向けてこう聞いた。

「ねえキンジ、嶋乃ちゃんの服どうするの？私の服じゃブかぶかに

トを着ているがあまりの光景にキンジは何か言いづらくなると嶋乃がキンジに向けてこう聞いた。

「ええと……如何したら良いんだろ？」

「……どうするんだよ？」

キンジは腹から力を出す様に……絞りだすかのようにそう言うとヴェルカがこう答えた。

「じゃあさ！私のジャンパー着てみる？あれなら入ると思うわよ??」

それを聞いて嶋乃は宜しくお願いしますと言って暫くして出てきて……学校に向かった。

学校までは徒歩或いはバスか電車であるがキンジはボディーガードという事でヴェルカが家から持ってきた車『ラーダ・ニーヴァ』で学校迄行くこととなった。

大型車で車体が大きい事から操作に難点があつたがキンジは取敢えず

乗っていると嶋乃は何やら目を輝かせて外を眺めていたので如何したんだと聞くと嶋乃はこう答えた。

「だって私何時も自転車で通学してましたからこうやって車越しで見ると

入学式以来なんですよ!!」

「そうなのか？」

キンジはそれを聞いてそうなんだと思っていて見て見ると……ヤバいと

感じた。

シートベルトを付けているためかその胸が強調されて今にもずれかねんと思つて前に集中しようとする．．．今度はヴェルカがこう言った

「キンジ、そろそろ左折したほうが良いわよ？学校の生徒用駐車場は広いけど

他の生徒も使うから今のうちに入れないと大変な事になるわよ!!」

「オオ分かつてる．．．!!!」

「?どうしたのキンジ??」

ヴェルカはキンジが突如として自身から視線を完全に逸らしたことに何でと

思っているがその理由が．．．これだ。

「(何で胸の谷間つて言うか大き過ぎてシートベルトで強調されるぞ!)」

そう思っているが無理はない、何せ嶋乃以上の爆乳通り越して超乳であるが為

少しの身じろぎで胸の大きさが分かってしまうからだ。

一体どうしてとヴェルカは今の自分の状況を分かっていないが為こう言った。

「ねえキンジ!何で私から視線を逸らすのよ!!こっち向いてよ!!!」

「いや待て今運転中だからってこっち首動かそうとするなあ!!」

そう言いながらキンジは車を運転していた。

そして着いて見ると嶋乃はキンジに向けてこう聞いた。

「あのキンジ・・・先輩、そのですね・・・この服・・・ちゃんと洗つて

返しますからその・・・これ！」

というと何かの数字が書かれた紙を手渡すところ言った。

「私の電話番号ーちやんと連絡しますんでキンジ先輩の電話番号もよろしく願いました!!」

それを聞くとキンジも了承して互いに電話番号を好感した。

君塚について

それからキンジはヴェルカの護衛をしつつだがそれなりに有意義な時間を

過ごしていた。

白峯からは監視されているが茶山のお菓子を食べたりヴェルカの機体を

チエツクしつつ駄弁つたり二狐崎のちよつかいでちよつとだが：：苛ついたり

嶋乃のサイクリングを見ては挨拶したりして比較的温和な日々を過ごしている中で

とある少女達の一団が見えた。

「何だアレハ？」

キンジがそう呟くとヴェルカがこう答えた。

「ああ、あの人だからとなると『君塚』君辺りね。」

「『君塚』？」

キンジがそれを聞いてみると僅かだが確かに見えた。

青みが掛った黒髪的美男子がそこで女子たち相手に挨拶していた。

「あいつか？」

「そう、『君塚 翼』。『君塚会』って言う確か大手の船舶の開発会社だっ

聞いているわよ？」

「へえ・・・『君塚会』ねえ・・・。」

キンジはそう言いながらヴェルカと共に立ち去った。

そして放課後、キンジは松葉に電話した。

『キンジ！アンタ今まで電話に出ないで何してるのよ!!もう直ぐ
《修学旅行Ⅱ（キラババン2）》が始まるって時に未だ護衛任務してる
の!?!』

「仕方ねえだろ？下手したら今月いっぱいはこうなるかもしれね
えって天草から聞いてねえのかお前？」

『アンタの事だから事件に巻き込まれて其の儘解決してすぐに戻っ
て来るって思ってたからよ。』

松葉が何やらぶつくさ文句垂らしているとキンジは松葉に向けて
こう聞いた。

「悪いが調べて欲しいことがあるんだが良いか？」

『調べて欲しいって・・・何ヨ？緊急案件??』

「まあ・・・何か起きたとしても大丈夫なように取敢えず準備してお
きたいし

それに・・・奴を見ていると何だかワトソンを思い出すんだ。」

『ワトソンってアイツに似ているって何かあるって事?』

「まあな。」

只の勘だがなと言うと松葉はこう答えた。

『・・・分かったわ、分かり次第メールで伝えるわ。』

松葉がそう言い終えると同時に電話が切れたのでキンジは取敢え
ず準備だなど思っている・・・ヴェルカの声が聞こえた。

「いい加減にしてヨ！私は今忙しいの!!」

「ヴェルカ？」

一体何があつたんだと思つて見て見ると何やら言い争いになつて
いた。

「何言ってるんだよヴェルカ？俺は君とお茶がしたいだけであって」
「だーかーら！私は今忙しいのよ!!もう直ぐ予選会が始まるんだから」

お茶なんてしてる場合じゃないのよ!？」

聞いているのと聞こえるのでキンジは近くにいる言い争いしている男性を見た。

身なりも良いし顔立ちも良い男性だがキンジはその男性の目を見て

こう思っていた。

「何だ？アイツのあの目、まるでヴェルカをまるで・・・」

・・・テレビ画面越しから見ているようなそんな感じがするな?」
キンジはそう思いながら現れてこう言った。

「ちよつと待ってくれお前ら!こんな所で言い争いするな!!」

「キンジ!ねえ聞いてよキンジ!!『馬蹄』って奴が《そんな子供っぽい事

しないで俺とお茶して過ごさないか?》何て事言うのよ!!」

酷いって思わないと聞くとキンジはそれを聞いて確かになと思っ

て

キンジは『馬蹄』に向けてこう言った。

「取敢えずだがお前本人が嫌がってるんだから無理やり誘うのはよくねえぞ?」

「手前何もんだ!」

「俺か?俺はヴェルカのボディガードだ。」

「は?ボディガードだ??だったらお前は俺より下だから俺に従うべきじゃねえのか?」

「何で俺がお前に従わなければいけないんだ?訳わからねえぞ?」

「俺は上流階級の人間だ！だったら下級の民間人でパンピーは俺達上流階級に

従うべきだろうが!!」

「上とか下とかかってそんなの大昔の話じゃねえか？今は平等社会だ、

それを忘れてんじゃねえだろうな？」

「ふざけんな！平等何て下民の戯言だろうが!!世の中力ある奴が何時だって

国の中枢なんだ!?!だから俺がお前を社会的に抹殺する前にヴェルカを俺に」

「手前大概にしねえと・・・たたむぞ。」

キンジがそう呟いた瞬間にぞわつとだが・・・寒気を感じた。

「な・・・ナンダこいつはよ!?!」

行き成りの事で『馬蹄』が少し後ずさると暫くして・・・大声が聞こえた。

「先生！こつちに無理やりヴェルカ先輩を連れ去ろうとする人がい

ます!!」

「な!?!」

「どうするんだお前?このままじゃあお前・・・捕まるぞ?」

キンジが何やら意地悪そうな笑みを浮かべてそう言うのと『馬蹄』はクソと言つてこう続けた。

「きよ・・・今日の所は見逃してやるが手前は絶対に俺が完膚なきまで潰すからそのつもりでいろよな!!」

そう言つてまるで・・・小悪党の様に去つていった。

「別にいいよ、どうせ覚えねえから。」

キンジがそう言つて『馬蹄』が去つていった方に向けて舌を出すと声の主・・・嶋乃が現れた。

「大丈夫ですか先輩?!」

「オオ大丈夫つて・・・ありがとうございます助けてくれて。」

「いえいえ!前に助けて貰いましたのでお返しですよ。」

嶋乃がそう言つて微笑むとヴェルカもお礼を言った後こう言った。「ああもうイライラする!こんなコンディションじゃ上手く飛べる自信がないから今日は終わった後『甘猫庵』でお菓子食べ放題よ!!」嶋乃ちゃんもどう?と聞くと嶋乃も了承してこう続けた。

「では私は練習があるので。」

「じゃあねえ、あ。キンジありがとうね♪後でお菓子奢るから。」

お礼ねと言つて機体の方に向かうのを見ると・・・電話が鳴った。

「松葉・・・速いな?」

キンジがそう言つて電話を取ると松葉がこう言った。

『キンジ、頼まれてた案件幾つか終わったから報告に来たわよ。』

「もうか!速くねえか!?!」

『まあね、情報の取得は情報科の特権よ。それで《君塚会》について何だけど

これ・・・』

「待て、別の場所で聞きてえ。ここだと誰かに聞かれる。」

キンジはそう言つて移動する為に電話を切つて何処かに誰もいなさそうな

部屋が無いかと思って暫くすると・・・男子更衣室が見えた。
授業では使うが他では使わないからびったりだと思ってその部屋
の前で

電話を掛けると松葉がこう続けた。

『それじゃあ続けるけど《君塚会》何だけど』

キンジは松葉の声を聴いていたが途中で・・・止まった。

何故かというそれは・・・目の前にある光景であった。

「・・・・・・・・へ?」

「・・・・・・・・は?」

それは目の前で半裸になっている・・・

『君塚 翼』によく似た少女が上半身裸で着替えていたのだ。
然も・・・どうやってついたんだと思わんばかりのヴェルカクラス
の・・・

超乳を携えて。

「いやああああああああああああああああ!!」
この時空き部屋に『君塚』の悲鳴が鳴ったのは・・・言うまでもない。

ロッカーにて

拝啓兄さんへ、今俺は聞きたいことがあります。

・・・目の前に如何やってその胸を小さく出来たんだって言うか今すぐもう一度やって下さいお願いします！

キンジ、心の言葉。

「いやあああああああああああああ!!」

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

君塚の悲鳴と同時にキンジも悲鳴を上げると何やら外から・・・声が聞こえた。

「ー今なんか聞こえたか？」

「ー悲鳴みたいだったな？」

「ーこつちかな？」

「ー(ヤバイやばいやばい!此の儘じゃこの状況から見て俺が犯人だって思われちゃうぞいやマジで!?)」

『ちよつとキンジ!今の悲鳴って一体何があったのよ!?!』

「悪い又かけ直す!!」

『ちよ』

松葉が何か言いかけたが仕方なくキンジは電源をオフにすると君塚目掛けて

素早く移動すると其の儘・・・開いていた君塚のロッカーの中に入ってしまった。

「む(む)む(む)!!」

「イヤ本当にすまん!後で甘猫亭でなんか奢るから!!」

キンジが耳打ちでそう言うが君塚はそれを・・・感じていた。

「ひやう／＼／＼／＼」

「いや何で変な声出してんだよいやマジで!？」

ひそひそ声でそう言う中で・・・生徒が何人か入って来た。

「あれ?ここだよな?？」

「いないぞ?。」

「気のせいかしら?？」

そう言いながら暫くして彼らは何処かにへと行った。

「・・・もう良いようだが大丈夫か?。」

キンジがそう聞くと当の本人は・・・。

「／＼／＼／＼／＼／＼」ゴゴゴゴゴゴゴ

と・・・何やら怒ってますと言わんばかりに睨むとキンジに向かっ

て

こう言った。

「速く・・・出て行ってー!!」

「はいーなー!!」

キンジはそれを聞いて慌てて出て行った。

そして仕方ないと思って男子トイレに入って携帯の電源を再起動

させると松葉がこう言った。

『あんだ・・・何してたの？』

何やらむっとしたような口調であったが為ヤバいと感じたキンジはこう答えた。

「まあな、色々あってな・・・それで頼んだ奴だけど？」

『時間があったからもう少し詳しく調べ解いたわ、今から言うからよく聞きなさい。』

そう言うとき松葉は『君塚会』についてこう説明した。

①君塚会は古くは江戸時代から続く商船の重鎮であったが其れと同時に

裏社会におけるまとめ役であった。

②明治以降は商船で各国と取引がてらマフィア共繋がりを持っていたが

第二次世界大戦後マフィアから手を切られて一度は衰退した物の今は復活している。

③表向きは流通系の商船を主にしているが裏では海外から違法薬物を

売買しているという噂がレザドら辺からも聞いている。

④君塚会の後継者がいない事から内部抗争の兆候ありと言われている。

「随分とまあ・・・きな臭いな。」

『そうよ、だから何があつたとしても絶対に！手を出さない事ヨつて言うか』

子供いたの!?!』

「いるんじゃないのか？どうせ娘なんだし。」

『君塚会は男性しか跡が継げないからそれで抗争一歩手前なのよ。』

「・・・どうにかならねえかな。」

そう言っていると電話が鳴っているのが分かるとキンジは松葉に向けて

こう言った。

「悪いヴェルカからだ、こっちはまあ何とかするからまた欲しい情報があつたら頼む。」

『・・・お礼としてアニメDVD限定販売の欲しい奴があるから

それあんたのポケットマネーで買いなさいよ。』

じゃと言って電話を切ると待機状態になっている電話を掛けるとヴェルカは・・・大声でこう言った。

『何やってんのよキンジ！嶋乃ちゃんと途中で一緒になった白峯ちゃんと一緒に茶山先輩の所にいるんだからキンジも速く来なさいよね！!!』

「わ・・・分かつたって!」

そんなに大声出すなよとキンジはそう思いながら甘猫亭に行こうとすると

目の前に・・・君塚がいた。

「こんにちは先輩。」

「よ・・・よう。」

キンジは少しぎこちなかったがそう答えると君塚はキンジの肩に手を置いて・・・にこやかに、捉えようによっては怒っているように感じるその笑みに対して

キンジはアハハと言いながらこう思っていた。

「(考えたらこいつ背高いな、俺と同じ・・・いや、ちよつと俺より

も高い。

「こんだけ高いならスナイパーとしても何とか出来そうだな。」
キンジがそう思っていると君塚はキンジに向けてこう聞いた。

「み……見ましたか今の?」

それを聞くとキンジは暫くして……こう答えた。

「わ……悪い。」

／＼／＼／＼／＼／＼／

それを聞いて君塚は顔を赤面していると君塚はキンジに向けてこう聞いた。

「遠山先輩、今日は空いてますか?」

「ええとだな……比較的俺はヴェルカのボディガードだから」

「でしたらヴァレンティーナ先輩も一緒に良いですので

今夜7時迎えの車寄越しますので僕の家に来てください!」

絶対ですよと言うとキンジは見えない圧に押し込まれるかのよう

に……

YESとしか言いようがなかった。

すると君塚はキンジから離れてこう言った。

「では僕はこれで、また後で。」

そう言っ素早く立ち去って行った。

「……何だったんだ一体?」

キンジはそう呟くしかなかった。

尚あまりにも遅かったのでヴェルカからお叱りを受けたのは言うまでもない。

レストランにて

その後キンジはヴェルカと共に外にいと・・・リムジンに乗っている翼が

窓を開けるとこう言った。

「来ましたね、僕の家が経営しているレストランがあります。そちらで

お話いたします。」

翼がそう言うのとキンジ達はリムジンに乗って移動した。

「ここが僕の家のお店です。」

そう言っただけ来たのは・・・小さな店だった。

多分だが会員制であろうその店だ、見た目は廃ビルみたいに見えるが金持ちが

大勢にいるこの一校学園が運営している街に似合わないであろう店であったが

恐らくは怪しまれない様になっているのだろう。

その小さな店に入ると・・・巨大な水槽がある気品が良さそうな生徒達が

食事しているとキンジは翼に向けてこう聞いた。

「ここって・・・高校生が入って良い店なのか？」

キンジがまるで大人向けの店じゃないのかと耳打ちでそう聞くと翼がこう答えた。

「大丈夫です、TPOは弁えていますのでお酒は出さずにそれここで裏社会の事を正式に知っている人間はここにはいませんので気にしないでください。」

「これはこれは坊ちやま、今日は当レストラン《マリンスター》によく来てくださいました。然し当店に来てくれたのは何故？」

そう身なりが綺麗なバーテンダーがそう聞くと翼はこう答えた。

「僕が招待した人間だ、礼の部屋に2人を案内させてくれ。」

「でしたらドレスとタキシードを用意いたしましょう、何せあの部屋は

VIP専用な物ですから。」

「分かった・・・後で僕も着替えるから彼らだけを案内してくれ。」

「畏まりました、お二人はこちらへ。」

バーテンダーがキンジとヴェルカに向けてそう言うと言名は着替えの為に

部屋に入った。

「これで良いかな？」

キンジが鏡の前でそう言うて今の自分の姿を見ていた。

何せパーティー用のスーツなど着る事なあまり無い為対象が分からないのだから。

そして部屋から出ると目に映ったのは・・・小さなテーブルがそこにあつた。

「へえ、それなりに良い部屋だな。機能美に優れてんだな。」

キンジがそう言うと言と暫くして・・・扉が開いた。

「？来たのかヴェ・・・」

ルカと言いかけるがキンジはヴェルカを見て・・・声を失った。

赤色のドレス

胸元は大きく開いて

簡素だがその綺麗さが際立っていた。(見た目は『アズールレーン』

の

『大凰』のパーティードレス)

「どう……似合うかしら?」

ヴェルカがそう聞くとキンジはこう答えた。

「おお……似合ってるぜ本当に。」

「本当?」

「ああ……正直見惚れてた。」

「そ……そうなんだ。」

ヴェルカはそう言つて頬を赤めらせると又もや扉が開いた。

「あら来たのね?」

「よう翼つて……」

キンジは翼を見て驚いていた。

何せ今まで男性用の服しか着ていなかったのに今は女性用の衣服なのだから。

白いチャイナドレス

胸の谷間を最大限に見せたドレス

首には十字架が付いたチョーカー

そして頭には菊の花を模した髪飾り

それらが翼を女性だと分かるかのような見た目であった。

「ええと……どうかかな?」

翼がそう聞くと……キンジがこう答えた。

「ええとだな……その。」

「良いんですよ、どうせ僕なんかが女の子の服装なんて」

「いや……似合うぞ本当に。」

「……え?」

キンジの言葉に翼は嘘だと思つてしているとキンジはこう続けた。

「いやマジで女だぞ?それに……凄く綺麗だぞ。」

「……………」

キンジの言葉を聞いて翼は赤面して顔を俯いていると翼がこう答えた。

「あ……ありがとうございますキンジ先輩。」

そう言うのとそれじゃあと行って座るとキンジとヴェルカも座った。

「それでは改めて初めまして、『君塚会』の次期後継者『君塚 翼』です。」

翼がそう言うところ続けた。

「何故僕……いえ混乱しそうですので私と申しましょう、私達『君塚会』は

関東を中心に幾つもの港湾都市を支配下に置く極道です。」

「ああ、それは既に知ってるぜ。調は付いている。」

「極道って……あれよね『ジャパニーズマフィア』って奴で

『ニンキョウ』とかで有名よね!!」

「……まあそうです、一時は僕達『君塚会』にもそう言う時がありました。」

翼が気まずそうにそう答えるところ続けた。

「ですが今の『君塚会』は……昔と違うのです。」

そう言うときんじがこう説明した。

「確か今の『君塚会』は昔と違って色々……悪い噂が絶えてねえよな?」

「はい……僕達『君塚会』には今2つの勢力があります。一つは今まで通り

夜の店のしよ場代を中心に堅気……つまり表社会の人間に迷惑を掛けない様に

過ごす穏健派とこれ迄とは違って堅気すら巻き添えにして海外の麻薬を

日本中に安値でばら撒いて資金を稼いで組を大きくするという大義名分を基に

好き勝手すると言った過激派がしまして僕は前者ですが・・・今の家は嫌いです。元々極道は嫌いですしそれに僕と姉さん・・・姉さんは僕よりも年上で今は海外で頑張っていますが僕は・・・継ぎたくはないんですあの家だけは・・・！」

翼のその悲痛な言葉に・・・キンジ達は聞くしかなかった。

食事かい

「見て分かる通り僕は女の子ですが家の都合で男装させられたんです。」

「家の都合・・・後継者か？」

「はい遠山先輩、実は僕の上には先ほど言った通り姉がいますが姉は継ぐ気なく

消去法で僕になるのですが過激派は『女が後継者なんて認められない!!』と言ってこつそりと戸籍を偽装して僕を男として育てていたんですが小学生の・・・

中ごろから急激に胸が大きくなってそれに・・・生理が来て自分は女だったんだと自覚してしまっただです。」

「・・・成程な、ショックでつて事か。」

キンジがそう言うと言われ翼ははいと力なく答えてこう続けた。

「ですが家は僕を継がせる気満々で男物の服を用意されたり

ヤクザとしてと言われて阿漕な商売所連れて行かれたりして・・・

僕はもう・・・

嫌なんですあの家が。」

翼が等々泣いてしまうのでヴェルカがハンカチを手渡すと翼はありがとうと言って貰った後に目をぬぐってこう言った。

「ですから一桜学園に入った時に何れは家から出る為にこうやって家が

経営している店から情報を抜き取って・・・警察に報告するつもりです。」

「!!」

それを聞いて2人は驚いていた、それはつまり家の闇を暴いて家を壊すという事だ。

だがそれがどう言う意味かは分かっているはずだとキンジは翼に向けて

こう言った。

「お前それしたら卒業したとしても間違いなく追われる身になるん

じゃ」

そう言うのと翼はこう答えた。

「大丈夫です、姉は今中国にいましてそこで日本の商品専門店で働いているんです。ですから何れはそっちで手伝いたいと思いまして。」

「・・・例え上手くいったとしても海外生活は過酷だ、中国ともなれば

反日が横行すればお前只じゃ済まないぞ?」

其れでもとかと聞くとヴェルカがこう続けた。

「ねえ、君の覚悟は分かっているけど海外生活はきついなのよ? 生活環境なんて

180度代わるしそれに食生活に時間とかも国民性とかも違いが出るのよ?!

それでも・・・海外に行きたいの?」

ヴェルカがそう聞くが恐らくは実体験であろう、今までとは違う生活で

自身も苦勞したからこそそう言えるのだと思っているが翼はこう答えた。

「・・・はい、僕は海外でもう一度自分の人生を掴みたいんです。

本当の意味で。」

そう言う翼の瞳は・・・力強かったのでヴェルカはキンジに向けてお手上げだと言って肩を透かすとキンジは・・・はああつと溜息ついてこう言った。

「それでだが・・・何の情報持つてるんだ? 内容次第じゃあ俺達武偵も

出張る事になりかねねえぞ?」

「協力してくれるんですか!?!」

「まあ・・・聞いちまった以上は手を貸さなきゃ言えねえような感じだしな。」

キンジは頭を掻きながらそう言うのと翼はこう答えた。

「はい、今の『君塚会』は海外を中心にしています。港湾都市を

縄張りにはしていますからそういう商品を搬入しやすいんです、ここ最近では

中国から特殊なガスを受け取る際に偽装して京都に送った事が

「京都だと!？」

「うわ!？」

「ちよ!どうしたのよキンジ!？」

突如として机に乗り上げるのでヴェルカは何だと思っているとキンジは

こう切り出した。

「中国から京都って言ってたよな!それって9月位だったか!？」

「ええええ・・・ええと。」

「答えてくれ翼!」

「ヒヤウ!?!/////////」

キンジが翼の顔に殆ど零距离で近づくので翼は顔を真っ赤にしていると翼は

小さくこう答えた。

「は・・・はい、確かに京都で9月でしゅ。」

「その時受取人って・・・ツインテールした中学生くらいのガキだったか?」

「ええと・・・僕は見てないから分からなかったけど良い金になったって

言っていました。」

「そうか・・・ありがとよ。」

キンジはそう言って下がるとヴェルカはキンジに向けてこう聞いた。

「ねえ、もしかしてアンタと関係ある奴?」

「まあな、前に一度な。」

そう答えて席に座ると翼はこう続けた。

「他にもその・・・色々和阿漕な事を過激派がやってまして・・・

元々『君塚会』は最初は小さな子会社だったのを当時の船舶会社はその殆どが

荒くれ者がいたので用心も兼ねてがどンドン吸収して大きくなつてバブルで

更に大きくなりすぎて・・・バブル崩壊しても色々と闇の深い事を
さんざん

やってしまつて警察に目を付けられてるんです・・・もうそんな生
活が

嫌なんです!」

それを聞いてキンジは何かできないものかと思つてしているとヴェ
ルカが

こう答えた。

「海外ともなればロシアも関係ありそうね、パパに頼んで聞いても
らうわ。」

「良いんですか先輩!」

「勿論ヨ、可愛い後輩の為なんだし頑張りましたよキンジ!」

それを聞いてキンジは了承した後互いに食事で・・・

今回の会合は終わった。

そして2人は家路に・・・というよりもヴェルカが酔っていたのだ。

「うへへへへキンジ抱っこ〜♪」

「お前俺の背中に乗るなつて!」

只でさえ当たつてるのにと背中に思いつきり当たる巨大な胸が背
中に

押し込まれてるのに気づいて血が沸騰しそうな感覚に襲われてヤ

バいと

思っていると・・・横から声が聞こえた。

「全く今代の遠山侍は本当に女子には苦勞しないようじやな。」
そう言つて現れたのは・・・この少女であつた。

「何でここにいるんだ・・・玉藻。」

「ようキンジ、少し用があつての・・・来たのじや。」

玉藻が来た。

「その前に聞くがこの様な時に鬼払结界から出るとは何をしているのじゃお前は！この戦中に他国の女子と乳繰り合っている場合か!!」

「そうじゃねえよ、依頼で」

「ああそれは既に天草から聞いたとるワイ。」

「じゃあ何で聞くんだよ?」

キンジがそう聞くと玉藻はこう答えた。

「ただ単に面と向かって言いたかっただけじゃ、それとじゃが
鎧竜剣について少し厄介な事があつての。其れの報告がてら来た
んじゃ。」

「・・・ナニカあつたのか?」

キンジがそう聞くと玉藻は何やら言いづらそうにこう返した。

「まあそれは・・・聞けば分かる。」

そう言うときんじはこう提案した。

「じゃあ俺と一緒に来るか?これからヴェルカを寝かさなきや
いけねえからな。」

「キンジく、だくくれく?」

ヴェルカが眠気眼でそう聞くとキンジはこう返した。

「ああ、こいつは・・・まあその知り合いの子ども。」

「誰が子供じゃキンジ! 儂はかm!」

玉藻が言いかける前にキンジがその口を塞ぐとこう続けた。

「どうも武偵関係で電話じゃ話せないらしいから態々来た様な
だ、

後で俺が外に送っておくからお前は先に」

「いやく、一緒に寝るのく!」

「子供かお前はつて速く帰って色々聞きたいことが」

「・・・仕方ないのウ、そ奴の家で良いか? どうせ寝かすのなら眠っ
てた方が

良かろうし一緒に場所ならばお主の警護に丁度良いしのう。」

「玉藻?!」

「こうなれば堂々巡りじゃぞ!?それならば其の部屋にて語った方が速いわい!」

玉藻の提案を聞いて暫く考えてキンジは・・・こう答えた。

「分かった、じゃあ帰るぞヴェルカ。ベッドで寝かせるからな。」

「一緒が良いの〜!」

「我儘言わない。」

キンジは仕方ないと思いつながら玉藻と共に帰ることとなった。

そしてキンジ達が帰宅するとヴェルカは其の儘ドレスで寝てしまったので

キンジは半ば無理やり離れて応接室に入った。

「ほほお、中々の豪邸じゃわい。キンジここならばいくらくらい賽銭が

来るのかのう?!

「神様が金の話すんじゃねえよ!全く意地汚ねえなあ本当に・・・

それでだが・・・鎧竜剣について何か問題が出たんじゃねえのか?」

そう聞くと玉藻はウムと言つてこう答えた。

「鎧竜剣に罅が入っていた事は既に知っておろうな?」

「ああ、あのなんか分からねえ奴との戦いでああなったのは覚えてるぜ。」

キンジはそう言つて嘗て戦った敵『P』の事を思い出してそう答えた、

どう見ても今の科学技術では造る事なんて不可能な奴ばかりだったからだ。

あの時手に入れた武器は全て平賀が保有しておりその解析に明け暮れてるだろうなと思っていると玉藻はこう続けた。

「鎧竜剣はその剣その物が竜の力を持っておりその魂もまた剣である、それも知っておるような？」

「いや、それは知らなかったが何かあったのか？」

キンジがそう聞くと玉藻はこう答えた。

「先ず剣の刃毀れや罅を直すためには鉄と高位の陰陽師が数日間祈禱しながら

鉄を叩くのじゃがその鉄に問題が出たのじゃ。」

そう言うのと玉藻はこう続けた。

「あの剣は妖刀、それを打つともなると必要となるのは特殊な妖刀を造れる

鍛冶師じゃが今時分その様な鍛冶師は京都におるがそれを打つに必要な

妖刀用の鉄が無いのじゃ。」

「無いって・・・そもそも妖刀用の鉄って何だよそれ？」

「知らぬのか？妖刀用の鉄は怨霊や悪霊が犇めく山中に僅かながら取れると

言われる『御霊石』と呼ばれる石でな。それでしか妖刀が造れるのじゃが近頃は

自殺対策等で警察が見ておるもんでな、昨今取れぬのじゃ。」

じゃあ良かったじゃねえかとキンジはそう思っているが言わぬが何とやらと

思つて何も言わなかったが更に玉藻はこう続けた。

「もう一つは陰陽師じゃ、あれの剣を封印状態で剣を打たせるともなると

維持できるほどの霊力が必要となるがそれほどの霊力となるとそれこそ

数人規模の陰陽師が数日掛けてやっとじゃ。・・・という訳で代用策を

考えたのじゃが聞くか？」

「いや聞くだろそんなのって何だよ代用策って?」
キンジがそう聞くと玉藻はうむと言ってこう答えた。

「簡単な話じゃ、剣を二振りにするんじゃ。」

「……は?」

「いやな、鉄についてはお主が持っているその小刀を出してくれるならば

助かるのじゃ。」

「……こいつをか?」

キンジはそう言つてバタフライナイフを見せるとうむと玉藻はそれを
見て

こう答えた。

「キンジよ、これに使われとる鉄は特別な奴じゃ。よつてこれで代
用したいが

良いかの?」

「まあ別になわねえが陰陽師はどうするんだよ? 竜の魂を維持さ
せるには

膨大な霊力があるってアンタ言つてたよな?」

キンジがそう聞くと玉藻はこう答えた。

「うむ、実は剣を2振りにする事で竜の魂を分割し霊力を
半々にさせるといふ狙いがあるのじゃ。これならば2人デ十分成
り立つ。」

玉藻がそう答えるので其れと云つてこう続けた。

「気を付けよ、どうも嫌な霊力を感じるし中国とイギリスから見

知った奴が

来ておる。用心せよ。」

良いなと言ってベランダから出ようとするのとキンジに向けてこう言った。

「ああそうじゃキンジこれは忠告じゃ。」

「？」

一体何だと思っていると玉藻はこう言った。

「女子の趣味は勝手じゃが子供を作るんじやったら白雪にせよ。」

「あんたに言われる義理はねえだろ？」

「まあな、じゃが何れお主は知らなければいけん真実がある。」

遠山侍と星伽の関係をお主の代で途絶えさせたくないからの。「じゃあなと言って立ち去って行くとキンジはこう呟いた。

「俺と白雪が？・・・そんなの知るかってんだ。」

悪意の

暫くの間平穏無事であったが然し事件は・・・突然として起こった。

「・・・電話、相手は・・・二狐崎生徒会長？」

一体何なんだと思っていると・・・馬締の声は何故か聞こえた。

『よう、遠山キンジ。』

「手前は確か・・・何の用だ？・・・何故お前が二狐崎生徒会長の電話で

出るんだ？」

そう聞いてきたのだ、二狐崎とデキていると言う噂などこの学園に来て

一度も聞いた事すらないからだ。

『ああそれな？・・・答えはこいつだよ？』

そう言っつてメールが届くとそこに写っていたのは・・・

「皆!?!」

二狐崎を含むキンジが関わっていたヴェルカを除く少女達であった。

「お前何でこいつらを」

『手前に用があるんだよ、ヴェルカを連れてきてここに連れて来い。手前一人で来るんじゃないやねえぞ!』

良いなというと地図の場所が・・・場所であった。

「ここって・・・翼が会食に使った時の。」

そう言っつてチェックすると・・・キンジは武器を出してこう呟いた。

「ヴェルカを連れだすわけにはいかねえな、何せアイツは俺の護衛対象だからな。それに俺が関わったからこうなった訳だから……」

何とかしねえと。」

そう言っ出て行くと……扉の前でヴェルカはこう呟いた。

「キンジアンタ私を守ろうとしているようだけど……私だって自分の身位は

自分で守れるんだから……!」

そう言いながら自身の銃器『PP2000』を出すとヴェルカもキンジの後を

付いて行くためにGPSで見について行った。

白い息を吐きながらキンジは翼と会食したレストランに着くと近くの電柱で

身を隠しながら辺りを見渡していた。

「それなりに人がいるな、然も女の子ばかりで銃器を持っているけど」

全員素人……いやまだいるな。」

そう言っ店から出てくる男達を見て……うげと思っていた。

何せその男性たちは全員……ヤクザだったのだ。

「くそ……何でこんな連中まで。」

そう言っっていると……背後から声が聞こえた。

「へえ、やっぱりここに来てたんだ。」

「・・・何でいるんだヴェルク」

大声でそう言いかけるとヴェルクはキンジの口に・・・手で塞いでこう言った。

「あら？私だって仲間を助けたい気持ちは一緒ヨ？それに・・・私だって

戦えるんだからそれなりに信頼しなさいよね。」

そう言いながらヴェルクは『PP2000』を見せるとキンジは暫くして・・・

こう答えた。

「駄目だ、お前は護衛対象だしそれに武器持っても素人」

「こう見えて私軍の訓練をちゃんと受けてるわよ？」

「・・・それでも駄目だろ？例え受けてたとしてもお前は」

「・・・信じなさいよ私の事をさ、私だってやれること位あるんだから。」

そう言って・・・真剣な表情でそう言うのを見てキンジは・・・仕方なしと

思っただけで言った。

「分かった、だが条件として・・・俺と行動を一緒にするんだ。安全上という

意味でな。」

「分かったわ、だったら私をちゃんと守りなさいよ？」

そう言うのと了解と言って一緒に向かって行った。

「おい手前、何来てんだごら?」

「良い女じゃねえか?俺らと今夜一緒にホテルで」

もと言いかけた瞬間にキンジはヤクザの・・・腹部目掛けて一撃を重く当てた。

「うほ」

「手前!」

「おせえ。」

キンジはそう言ってもう一人の男性を首元に一撃与えると・・・其の儘倒れるが少女達が武器を構えてこう言った。

「そこまでよ遠山キンジ!」

「馬締様の為に死になさい!」

そう言つて全員が構えた瞬間にキンジは畜生と思つているとヴェルカが・・・

胸の谷間から音響手榴弾を出して・・・破裂させた。

「キンジ耳塞いで!」

「もうやつてるよ!」

そう言いながら伏せると大きな音が辺り一帯に響いた。

「あぐ・・・耳が」
「い・・・痛い・・・」
そう言いながら耳を塞いでいると立ち上がったキンジとヴェルカは

立ち上がつて・・・其の儘店の中に入って行った。

「(こ)よね?」

「ああ、どうやらヤクザが結構いるな。」

キンジとヴェルカがそう言いながら店の周りを見ていた、大勢のヤクザがいるので如何するべきかと思いつながらキンジはこう思っていた。

「(糞・・・こう言う時にインクルシオがあれば透明化して全員戦闘不能に

出来そうなのに。)」

間が悪いぜと言いつながら何とか突破する手段を考えていると・・・ヴェルカの悲鳴が聞こえた。

「きゃあ!?!」

「ヴェルカ!」

キンジはどうしたんだと思っているとヤクザがヴェルカの口を塞がせているのが見えた。

「ヴェルカ!」

「おおつと遠山キンジ、動くなよ。手前にはあのお方が呼んでるんだからな!」

そう言うチャライ男がそう言うのとキンジは畜生と思っていると背後から

恐らく幹部クラスであろう強面の男が現れてこう言った。

「悪いが武器を置いてもらうぜ、何せアンタハ武偵。」

武器のスペシャリストだからな、悪いが一緒に来てもらうぜ。」
そう言つてキンジは畜生と思いつながら武器を置くと自身のリストバンドを

見せると男はこう言った。

「そいつは武器じゃねえな、持ってる。」

そう言いながら男がある部屋に着くとその男を見てキンジはこう呟いた。

「てめえヤクザ迄仲間にしてたのか馬締。」

そう言うのと馬締は笑いながらこう答えた。

「まあな、手前について色々と聞きてえからな・・・遠山キンジ。」

そう言いながら馬締はニヤリと・・・嫌な笑みを浮かべていた。

聴取

「俺に聞きたいことだ?・・・何が聞きてえか知らねえが茶山さん達は
何処にいるんだ?」

キンジが馬締に向けてそう聞くと馬締はにやりとこう答えた。

「ああ、彼女たちなら今僕の女の子たちと共に僕についてを語ってくれてると

思うよ?僕の偉大さをね!」

「(こいつ頭大丈夫なのか?偉大さとかってこいつにそういうのがあるのか?)」

どう見ても小物感が漂うがなと思つて周りの人間たちが持っている銃器・・・

小型のマシンガンを見ていた。

「(全員持っているのは『AK-47【カラシニコフ】か、旧ソ連時代に

開発されて中国でもライセンス開発されてる精度は低いがマシンガンだから

セミオート出来る。それをやくぎの連中も入れて大体60丁。よくもまあ揃えれたもんだぜ。)」

キンジはそう思いながら取られた拳銃とナイフを思い出しそして・・・

腕に付けてあるリストバンドを見てこう思っていた。

「(唯一取られなかったのはこのリストバンド、鉄だけで取られなかったのが

不幸中の幸いと言いたいけどこれが何なのかすら判らねえから期待はしねえほうがいいな。)」

そう思っていると馬締はさてと云つてキンジに向けてこう聞いた。
た。

「お前は誰だ?どこから来たんだ??もしかしてだけど

最近『江田島女学園』の女と一緒にいるあのイケメン男の仲間か?」

「イケメン?・・・知らねえな俺は。」

「そうか、まあまた聞けばいいか。次に質問だ・・・ヴェルカちゃんとは

どういう関係だ?」

「は?」

「ヴェルカちゃんだけじゃない、白峯さんに茶山先輩に二狐埼生徒会長、

一年生の嶋乃ちゃんとの関係は何だ?」

「どうって・・・まあ知り合い程度・・・だな。」

「嘘つくな!」

「?!」

いきなり大声を上げてきたのでキンジは一体何なんだと思っ
ているが馬締は

こう続けた。

「お前がいるせいであの子たちに『アレ』を使うことなんてできない
し

辻林に至っては効果がなくて僕を怪しんでるから近づけられない
!

僕のハーレム生活をよくも邪魔してくれたな!!」

そういうと馬締はキンジを蹴り飛ばしてこう続けた。

「お前はここでぼろ雑巾みたいにしてあいつらの前に突き出してそ
のあとに

こいつを使って僕の物に・・・ああ君塚も頂こう。ほかの女の子た
ちは

そうだな・・・飽きたし姉さんと一緒に売り飛ばそうかな中国に。い
い金が

入りそうだないや良いねえ本当に!!」

「手前・・・自分の家族まで売り飛ばす気かよ!」

「はあ!?僕のために働いてくれてたんだ!どうせ快く快諾してくれ
るよ!!」

何せ僕にはヤクザすら操ることができるとあるんだから!!」

そう言つて馬締は懐からピンク色の・・・スマホを見せつけるとあれなのかと

キンジはそう思っていると馬締は周りにいる男たちに向けてこう言った。

「おいお前らこいつを別の空き部屋にぶち込め、まだ洗脳できていなかったら

このアプリを使つて・・・くくくく。」

そう気味悪い笑みを浮かばせているとそのままキンジは空き部屋に

連れていかれた。

「あまり痛くねえが糞、携帯取られちまった。」

ついてねえなとキンジはそう思っているとリストバンドを見てこう呟いた。

「・・・一体どうやって使うんだこいつは？」

キンジはそう呟きながら触っていると・・・カチカチと音が鳴った。

「な・・・なんだ一体?!」

キンジは一体何なんだと思っていると突如としてリストバンドがどんどんと

キンジを・・・覆うように包み込み始めたのだ。

「一体何なんだよこれは?!」

そう言っていると外から声が聞こえた。

足音も聞こえてきたのでやばいと思っている間にも体に纏うかのよう覆って

とうとう頭にまで達したと同時に・・・男たちが現れた。

「何してんだ手前・・・は。」

「うるせえよ黙って・・・ろ。」

男たちはその姿を見て・・・ぽかんとしていた。

何せ目の前にあるのは黒い・・・あの宇宙人たちが着ていた鎧と同じ形状を

身にまとっているキンジが目の前にいるのだから。

「な・・・なんだよこいつは。」

キンジはそう言いながら自身の今を見ていた。

「これ・・・あのエイリアンと同じ鎧か?・・・だけどこれどうやって使うんだ?」

武器とか無いのかよと思っていると男たちはキンジの鎧を見て・・・慌ててこう言った。

「なんだこいつは?!」

「とにかく撃て撃て撃ち殺せ!!」

そう言つて『カラシニコフ』で攻撃するがそれは・・・効かなかった。

「・・・へ??」

何でと思つているとキンジは頭部のデータ情報が現れると同時に武器の形状と

同時に何か文字が現れたのでなんだと思つた次の瞬間に両肩から大型の・・・

キャノン砲がせりあがると同時に赤外線が出て男たちの頭部に狙

いを定めていた。

「おいおいおいおいマテ殺すなって糞どうするんだよこれ!!」
そう言っていると言語が変わって・・・日本語が変わった。
「うおおお、便利だなこいつはってキャノン砲を閉じさせて
代わりはないかと思っていると両腕のクローが現れた。
「ないよりは・・・ましだなおい!」
そう言ってキンジは男たちめがけて攻撃を始めた。

馬締の目的

「然しこいつら全員のしたとしても残りが多いし俺一人だどできること
限られつちまうな。」

キンジはそう言いながら倒れているやくざ達を見ていた。

何せあのエイリアン達の技術で造られたであろうこの鎧は間違いない

殺傷能力以前にある意味戦略級兵器に該当されるであろうオーバーテクノロジーを

ここで見せるわけにはいかないなと思っているとそういえばと思つて彼らの

携帯電話を押収して調べようとすると仮面のデータ情報がアップロードされ始めた。

「こいつは・・・ハッキング能力か！それにしてもこのデータと発信から見て・・・持つているこいつらの位置情報か、俺の武器を奪った奴の画面もあるのか・・・全く便利だな本当に。」

キンジはそう言いながら取りあえずと言つて場所を特定して・・・行動するために体を透明化させた。

「誰もばれてねえか、全く本当に便利だなこの透明化は。」

キンジはそう言いながらあの時のことを・・・ジーサードを思い出していた。

「あいつ・・・大丈夫なのかな？腕斬られてたし。」

そう言いながらある部屋に到達した。

「ここは確か・・・ヴェル力達ここにいるのかよ?！」

砲を
キンジはそう言って武器よりも人質救出だと考えて・・・キャノン

展開して・・・扉を破壊した。

数分前

「大丈夫ですかヴェルカちゃん？」

「はい、茶山先輩。ごめんなさい・・・本当なら救出しなきゃ
いけなかったのに。」

「大丈夫よ、けどあの男随分と強引な手段を使ってきたわね。」

辻林がそう言っていると二狐埼が全員に向けてこう言った。

「とにかく今は脱出する手段を考えよう、遠山君が今どこにいるの
かも

含めてね。」

そう言っていると白峯はとにかくと言ってこう続けた。

「今はとにかく私たちができることを考えましょう、何とかしてこ
こから

脱出して彼の暴挙を食い止めなきゃ！」

そういうと嶋乃がですけどと言ってこう続けた。

「通信手段は無いし武器も奪われて・・・どうしたら。」
そういうと突如として扉が開いた。

「それで・・・どいつだっけ？」

「あそこの栗色長髪の女だ。」

「然しそれにしても全員別嬪だよなあ、畜生俺にもおこぼれほしいぜ。」

「なあに後であの女どもを食べれるんだからいいだろ?」

そう言いながら男たちは両腕を縛られてる白峯を掴んで立ち去るのを見て

ヴェルカがこう言った。

「ちよつとあんた達白峯さんをどこに連れていく気よ?!」

「ああ!? どうせお前も同じ場所に行くんだから黙ってるよ!」

「良いじゃねえか? どうせ全員同じなんだからそいつも連れて行くこ
うぜ!」

そう言つて茶山先輩達がヴェルカ達の名前を呼ぶがヴェルカはこ
う言った。

「大丈夫、直にキンジが助けに来てくれるから・・・それで君塚さん
は

何処にいるの?」

ヴェルカは男たちに向けてそう聞くと男たちの一人がこう答えた。

「ああ、若様ならお前らが行つているところと同じ場所だよ。」

そしてキンジが二狐埼達が閉じ込められてる場所目がけて攻撃す
る30秒前。

「ようこそ僕の可愛い可愛い彼女たち。」

「貴方の彼女になった記憶はないわよ。」

白峯がそう言うが馬締はははははと笑つてこう続けた。

「いや君たちはなるんだよ・・・こいつでね。」

そう言つて自身のスマートフォンを見せつけるとそれが何なのかしらと

ヴェルカがそう聞くと馬締は笑いながらこう答えた。

「くくくく、これは僕が彼女たちやこいつらを僕の意のままに出来る」

特殊な奴さ。こいつで僕はハーレムを作つて世界に君臨するんだよ!!」

そう言つて光が出る寸前に馬締はこう言つた。

「ああこれはね、少し時間がかかるんだよ他人の男を知つていてそれが大切な人間だったらそれが邪魔してこの催眠アプリが機能できにくくなるんだよねえ・・・君塚さんみたいだね。」

そう言つて馬締はベッドの上で魘されている君塚を見ると君塚は魘されながら・・・こう呟いた。

「・・・遠山・・・先輩。」

そして・・・現在

「うおりゃあ!」

キンジがそう言つてキャノン砲で扉を破壊するとそこにいた茶山先輩が

それを見てこう言つた。

「だ・・・誰ですか貴方は?!」

茶山先輩がそう聞くとああそうだなと言つてキンジがこう答えた。

「お、俺ですキンジです!!」

「遠山キンジ?!何であんたがつていうか何その恰好・・・仮装大会に

でも

出る気なの？」

キンジを見て辻林が何か言いたげであると同時に少しほっとしているのであろう涙目になっているとキンジはクローを展開して縄を斬りながらこう聞いた。

「済まない、この格好には理由があつてな。それで……白峯さんとヴェルカは」

どこにいるんだと聞くと嶋乃がこう答えた。

「大変なんです！白峯先輩とヴェルカ先輩がどこに連れていかれて！！」

「どこかに……どんな奴が連れてったか分かるか?!」

そう聞くと茶山先輩がこう答えた。

「確か……一人はインテリア風の若い男性、もう一人はホスト風でした。」

茶山先輩の言葉を聞いてその情報を基にして場所を推移してキンジは

こう言った。

「よし……俺が先導して」

「いや、私たちがこいつらと一緒にここに残るよ。あんたがちゃん

と来てくれるって知ってるからね。」

二狐崎がにひひと笑っているとこう続けた。

「それに……舐めないでもらうよ？私たちがだつて護身術
持つてるんだからさ……頑張って救ってね。」

二狐崎がそう言うのとキンジは分かったと答えて出ていこうとする
と茶山先輩と

嶋乃がキンジに対してこう言った。

「キンジさん……気を付けてください。」

「遠山先輩！ヴェルカ先輩たちの事！よろしくお願いします。」
それを聞いてキンジはこう答えた。

「……ああ、帰って皆で飯食って帰ろうぜ。」

そう言ってキンジは透明化してヴェルカ達のいる場所に……向かって行った。

思い出

「あ……あああ。」

「う……ぐうううううう!!」

「ぎ……が……あ……!?!」

ヴェルカ、白峯、君塚の3人は馬締から放たれた催眠アプリなるものによって

精神が作り変えられるという中で3人が耐えているのを見て馬締は畜生と言って

こう続けた。

「こいつらただけあの男を想ってたよ!時間がもったいねえやねえか!!」

そう言いながらその苦しむ姿を見ながら馬締はそうだと行って……こう続けた。

「このまま犯してやる、遠山キンジなんて忘れてしまうほどの快楽で刻んでやる!誰がお前たちにとつての一番なのかをな!!」

そう言いながら舌なめずりして……白峯を見てこう言った。

「お前はイツモいつも俺に目をつけていたからな……
気に入らなかつたんだよな。」

「だから何よ……貴方が……卑猥なもの……持ってくる……
からで……しよう?!」

「うるさいんだよお前は!」
「あぐー!」

馬締はそう言って白峯の髪を乱暴につかみ上げながらこう続けた。

「良い体つきしているくせに会長会長ってまるでレズビアンみたい
に喧しくて

喧しくてその想いすら俺のものにしてから生徒会長も犯してやる
よアンアン

言って俺の腰の上で喘ぐお前の声をBGMにしてな!!」
そう言いながら馬締は白峯の制服の胸元を強引に破いたのだ。

「いや……!」

「やめ・・・なさい・・・!」

ヴェルカがそう言うのと馬締はああと言ってこう続けた。

「君も後でいい声上げさせてやるよ、遠山キンジの目の前でね、
だけどまず最初は・・・こいつだ。」

あはははと笑いながら白峯を押し倒して制服を破き始めたのだ。
いやとか助けてと白峯はそう言いながら天井を見ながらこう思っ
ていた。

「(ああ・・・犯されるんだ私、こんな形で初めて奪われるなんて・・・
私会長にまだ気持ちを。)」

そう思っていると二狐崎の事を思い出すと・・・その途中である人
間を

思い出した。

「おい、大丈夫か白峯?」

「遠山君?」

白峯はあれと言っているとキンジがこう続けた。

「お前生徒会の仕事が多すぎだぞ? さつき二狐崎先輩から

『遅くなるといけないから白峯ちゃん送ってくれない♪(――)――

☆』って

メールが来て丁度ヴェルカの部活が終わりそうだからほら送るか
ら。」

そう言うが白峯はこう返した。

「生憎ですが結構です、家までは走れば余裕で間に合う」

そう言いかけるとキンジはこう返した。

「そうは言うがもうすぐ暗くなる、一応だが男がいたほうが防犯に

良いぞ?」

そういうがしつこいと言ってこう続けた。

「貴方が優秀で女の子に対してちゃんとしているのは理解していますが私は

貴方の事を許したつもりは・・・!!」

そう言いかけていると机にもたれかかった際に机の上にあった資料に

重心が向いてしまったので・・・滑って転げ落ちそうになったのだ。

「きゃー!」

「危ない!!」

キンジがそう言ったと同時に・・・ばさばさと資料が下に落ちた。

「あれ・・・痛くない?・・・何で。」
白峯がそう言って目を開けようとするどよいしよと言う言葉と共に・・・

キンジが自身の目の前にいたのだ。

「と・・・遠山君!?!」

「おお、大丈夫か? ケガしてねえか??」

キンジが目の前にいたのだ、然も足が地についてない感覚であったがために

何でと思って近くにあった棚の硝子部分を見て・・・目を大きく見開いていた。

何せ今自分はキンジによって・・・お姫様抱っこされていたからだ。

「なななななななな！」

「ああこいつはな、お前が転ばないようにっておい暴れるな！」

「放してください降ろして!!」

「おろす降ろすってだから落ち着けて・・・おわああ！」

キンジは暴れている白峯に対して制止するように促すも当人は聞く耳持たずで

其の儘キンジは白峯毎バランスを崩したのだ。

「いたた・・・痛くない？」

「いててて・・・大丈夫か？」

キンジがそう言つて痛がつていない白峯に向けてそういうと白峯は

今の状況に驚いていた。

何せ今自分はキンジによって抱きしめられていたからだ。

「どうして・・・私を」

「いや当たり前だろ？お前が怪我したら二狐埼が困るからな、それに・・・」

「・・・目の前に危なっかしい奴がいたら助けるのが普通だろ？」

「・・・」

それを聞いて白峯は暫く黙っているとキンジがこう続けた。

「そんじやあ立てるか？送ってくってヴェルカからメール・・・今終わったから帰ろう？ってメールだけでもう遅いし一緒に帰ろうぜ？」
キンジが白峯に向けてそう聞くと白峯は暫くして・・・こう答えた。
「・・・わかったわ、帰るわよ。」

そして帰りの帰路で廊下を歩いていると白峯はキンジに向けてこう聞いた。

「ねえ・・・聞きたいことがあるんだけど良いかしら？」

「？」

「もしよ・・・もし私に何かあったとしても・・・助けてくれるかしら？」

そう聞くとキンジは暫く考えて・・・こう答えた。

「わからねえな、俺は任務でいるから何時までなんてわからねえよ。」

「・・・そう」

「けどな・・・もし助けてって思ってたらまあ・・・電話してくれ助けに来る。」

「助けに・・・来てくれるの？」

白峯は何やら疑い深くそう聞くとキンジは平然とこう答えた。

「ああ助けるさ、約束だ。」

キンジはそう言ってにこやかに笑いながら指を出すと白峯は・・・
クスリと

笑ってこう続けた。

「今時指切りなんて・・・意外に貴方ってロマンチストなのね。」

「そうか?・・・わかりやすくして良いだろ?」

「ふふ・・・なるほどね。」

そう言って互いに指を混じらわせた。

「へへ・・・いい体じゃねえか本当に。」

馬締の言葉が聞こえる、恐らく全裸にされているのだろう。

このままこいつに犯されるんだと思って泣きそうになりながらも
右手の

小指を見て・・・あつと思いついた。

あの時キンジと交わした約束。

自分に何かあつたら助けるという約束だ。

来ないなんて分かりきっている、それでも縫りたいほど願いたい。
キンジが助けに来てくれるのを。

「・・・けて」

「は?」

「・・・すけて」

「何言ってるのかわからねえけどその声で俺を求めてくれるようになるのを」

期待しているぜ〜。」

そう言いながら馬締は下半身を露出しようとズボンをパンツ毎脱
ごうと

動いている中で白峯は・・・こう言った。

「助けて・・・キンジ・・・!」

か細く聞こえるその言葉に・・・どこからか声が聞こえた。

「ああ、約束だもんな。」

そう言つてズドン!と音が鳴つたと扉が破壊されたのだ。

そこから現れたのは・・・プレデタースーツを身に纏ったキンジであつた。

「だ・・・誰だ手前は?!」

馬締がそう言うのとヴェルカがこう呟いた。

「キンジ?」

その声と共に白峯もこう言った。

「遠山君?」

そう呟くとキンジはこう返した。

「ああ、前に言った約束・・・果たしに来たぜ。」

そう言つて小指を出すと白峯はあつと・・・そう言いながら涙を流し始めたのだ。

そしてキンジは馬締に目を向けて・・・こう言った。

「どけよ手前。」

そう言つたと同時に全裸になりかけた馬締をキンジは・・・

・
・
・
・
その顔をぶん殴って吹き飛ばした。

守る

「うばあ!？」

透明化したキンジが馬締を思いっきり殴り飛ばすと馬締は其の儘吹き飛んでいった。

「・・・遠山・・・君ナノ?」

白峯どこかにいる・・・恐らく目の前にいるであろうキンジに向けてそう聞くと

透明化を解いて現れたその姿に白峯は大きく目を見開いて息を飲んだ。

「!!」

それは近くにいたヴェルカも同じであつたが白峯はそれを見て・・・こう聞いた。

「遠山君・・・なんでしょ貴方?」

そう聞くとキンジはこう答えた。

「ああ、そうだ。」

「・・・!!」

それを聞いた瞬間に白峯は目から涙を流してそのまま・・・抱きついたので。

「うわあああああああ!怖かった!!怖かったよ～～!!」

うわああああああああと泣きながら抱き着いているがキンジ先ほどの

白峯の姿を見てドキマギしていたのだ。

「(あああああああ!胸が!!それに全裸ってうわあああああああああ
ああ

ヤバイやばいやばいって完全になっちまうっていやマジで!?)」
心臓の中の血液が沸騰するような感じが来てしまいもしかしたらアレになると

思っていると殴られた馬締が殴られた頬を摩りながらこう言った。

「いてえええええな手前!よくも僕の顔を殴ってくれたな!？」

「いてええって手前が白峯を裸にさせるからだろうが。」

キンジは当たり前前なことを言うが馬締はふざけるなど言っつてこう続けた。

「お前がいるせいで僕の計画は全然進歩してねえんだぞ！どうしてくれるんだよ

お前のせいでハーレムが全然できてねえじゃねえか?！」

「ハーレムって・・・お前女の子がいるんだから別に良いじゃ」

「あんな奴ら只の駒だ！僕が欲しいの綺麗で爆乳な女の子をハブラせてこの学園を僕の天下にするつもりだったんだ!!それなのに一年時じゃあ女の子は

僕から引いてて幼馴染ですらいやな顔していたんだ!!姉に至っ
ちやあ

僕の事なんて完全無視なんだよ!？」

「それは貴方が学校に関係ないものと言うよりも女性人たちが嫌悪するものを持つてくるからでしょう!？」

「うるせえな！男のあふれ出るリビドーを抑えるためにやあそういうのが

必要なんだよそういうのを使う女の子を妄想して俺は今まで何回トイレの中で

自分を慰めていた男の気持ちなんてお前らにはわかるかよ!？」

「(トイレぐらい皆使うだろうが何言っつてんだこいつ?)」

男ならばわかることだがキンジはそう言うのとは避けて生きていたがために全然わかっていなかったが馬締は更にこう続けた。

「そういう中で俺はチャンスに恵まれたんだ・・・ある日黒猫を助けたら

お礼とか言われて催眠アプリを手に入れたんだよ!」

「・・・何ですかそれ?完全に頭が壊れたのですか??」

「(・・・玉藻ならわかるだろうな。)」

妖怪関連かなとキンジはそう思っていると馬締は・・・気持ち悪い
笑みを

浮かべてこう言った。

「こいつを手に入れてから俺の人生はバラ色なんだよ！幼馴染も姉

貴も俺の事を見てくれて言うことを聞いてくれる!!今の俺は夢のよ
うな生活を送って

さあこれからって手前が現れて全部がパーだ!?狙った女の子たち
は

皆お前の事喋っているって聞いて俺はムカついてお前は俺より上
なんだと

言おうとしていてその前にあの教師が来そうだったから逃げた
が・・・

今度はそうはいかねえぜ!

そう言ったと同時に部屋の中に50人近くの男たちや銃を持った
少女たちが

現れたのだ。

ショットガンにマシンガン等を持っておりこいつはどうするべき
かと

思った瞬間にキンジは白峯が抱き着いていない腕に何か柔らかい
ものが

当たっているのに気づいたのだ。

何だと思っただけで見るとそこで目にしたのは・・・ヴェルカが
抱き着いていたのだ。

「(むむむ胸が腕につけて白峯と一緒に両腕が挟まって!?)」

そう思ったと同時に血流がさらに早まって等々・・・なってしまっ
たのだ。

「(ああ・・・なっちまったよこれ完全に。)」

そう思っているとキンジは仮面を取ると白峯とヴェルカを左右か
ら抱き寄せて

自分の頬を2人の左右の頬とくっつけるとキンジはこう言った。

「何か言ってくれないか？」

「??」

それを聞いて何をと思っているとキンジはこう言った。

「乙女の祈りは何者よりも強いんだ、俺はヴェルカと白峯……いや、澄花の祈りが俺を強くすることが出来るんだ。」

「!？」

それを聞いて2人は赤面しているとキンジは2人に向けてこう聞いた。

「さあ……言ってるらん？」

そう言ったと同時に2人は赤面しながらこう呟いた。

「じゃ……じゃあキンジ……助けて……皆を……この学園で

馬締に

捕らわれている皆を……助けて……!」

「お願いよ遠山君……ううん、キンジ君。みんなを助けて……この学園にいる生徒たちを助けてそして君塚さんも助けて……お願い!」

それを聞いてキンジはにこりと笑ってこう答えた。

「わかった、聞くよ君たちの祈り。確かに届いたよ。」

「」

2人はそれを聞いて更に赤面するとキンジは2人を遠ざけて仮面をつける

馬締に向けてこう言った。

「さてと馬締・・・お前がこれまでやったこと白状させて償わせてやるから

覚悟しろよ、この状態での俺は。」

そう言った瞬間にキンジはキャノン砲を展開してこう言った。

「男に対して手加減できねえんだ。」

「手前ら奴を殺せー!!!」

そう言ったと同時に砲火が部屋中に轟いた。

戦い

だだだだだだだだだ！と銃声が響き渡る中でキンジはヴェルカと澄花を

守るために盾となつてその場に立っていた。

「よし良いぞ！このまま撃ち殺せ!!」

「こんなやつへっちやらだぜ!!」

男たちがそう言う中で銃声が・・・止んだ。

「へ・・・役立たずだったな。」

見掛け倒しかよと馬締がそう言つて立ち込める煙が晴れると見え
たのは・・・

「嘘だろ・・・。」

「何であいつ・・・平気なんだよ。」

無傷で然も尚も2人を守っていたキンジがそこにいた。

「大丈夫か2人とも?」

「え・・・ええ。」

「こっちは大丈夫よ!次は貴方のターンよ!」

ヴェルカがキンジに向けてそういうとキンジはそうだなと言つて
全員に向けて

こう言つた。

「さてと・・・次は俺の番だ。」

キンジがそう言つた瞬間に両肩にキャノン砲が現れてそれらが
きゅいいいんと音を鳴らして光つた瞬間に男たちが持つてい
た銃火器が

一瞬で・・・破壊されたのだ。

「ぎゃあああ!」

「ぐおあ!」

「いてええ!!」

男たちは爆発によつて痛みを伴いながら吹き飛ぶのを見て馬締はポカンとしていたが数瞬で・・・目を大きく見開いてこう続けた。「な・・・何だよ手前! 一体何しやがったんだ?!」

馬締がそう言うのとキンジはこう答えた。

「教えるかよ大馬鹿野郎。」

そう言った瞬間にキンジは透明になると暫くして男たちが全員・・・殴り飛ばされたかのように吹き飛んでいった。

「ぐやあ?!」

「いっば。」

「ほんぎやあああああああ!」

断末魔を上げるかのように吹き飛んでいくので馬締はそれを見て何が何なのか

意味が分からないと思っていると馬締の周りに姉を含んだ4人の少女が姿を

現したのだ。

「馬締君には指一本触れさせないわ!」

「馬締君逃げて!」

「私たちがこいつを倒すから。」

「お前には指一本触れさせない!」

そうやって立ちふさがるがキンジはそれを見て・・・透明になりながら

こう続けた。

「あんな男のために君たちが体を張る必要はないよ。」

「「「?」」」」

一体何だと思った瞬間に少女達が突如として倒れたのだ。

どさりと音がした瞬間にキンジが透明化を解くと馬締はキンジに向けて

こう言った。

「う・・・動くな手前! こいつがどうなっても良いのか?!」

馬締はそう言って君塚の頭に拳銃を出して構えているとキンジは

馬締に対して

こう言った。

「最低だなお前は、女の子を人質にしなきゃ何も出来ねえのか？」

「うるせえー！こうなったらこいつを人質にしても生き延びてこの学校じゃないどこか・・・女学校でハーレム築いてやらあ!!何せ俺にはこいつが」

あると言って例のスマホに目を向けた瞬間にキンジはそのスマホが入ってある

ポケットごとキャノン砲で・・・破壊した。

「これで手前は手詰まりだな。」

そう言った瞬間にキンジは腰から少し長い槍を持つとそれで馬締の拳銃を

持っている腕ごと・・・破壊して貫いたのだ。

「ぎゃあああああああああああ！痛いよ痛いよ!!」

「そこでじっとしてろ、後で手前を警察に突き出してやる。それとお前に

力を与えた奴がどういうやつか問いただして」

「それはご奴ではないか？遠山の。」

そう言っただけ後ろにある唯一入れる扉から黒髪の猫耳少女を引き

づつてきた・・・玉藻が現れたのだ。

「玉藻！お前何でここにいたんだ!？」

帰ったんじゃないのかと聞くと玉藻はこう返した。

「いやのう。この街に妖気を感じて調べておつたらこ奴がここから少し離れた空きビルで生気を吸収しておつた黒猫を見つけて少しばいてみれば

こ奴少し前に煩惱がとてつもなく強い男に自分の妖力を与えた携帯電話を経由して生気を蓄えておつてのう。それで問いただせばここに来たというわけじゃ。」

ほれこ奴じゃと言って玉藻はボロボロになった黒猫娘を投げ飛ばすと当の本人はふにや・・・とか・・・ごぺんあざいとか意味不明なこと言っているのだが馬締はそれを見てああああと言つてこう続けた。

「ぼ・・・僕の・・・僕の力が・・・」

そう言つて項垂れていると玉藻の後ろから茶山先輩達が現れたのだ。

「キンジさん！大丈夫ですかって白峯ちゃんなんて恰好を!!誰か服を!？」

そう言つて茶山先輩は白峯に何かないかと思つて慌ている中でキンジが鎧を解くとキンジは上着を澄花に羽織らせてこう言った。

「ほら、これで寒くなくなったね。もう大丈夫だよ。」

「う・・・うん／＼／＼／＼／」

キンジの言葉を聞いて澄花は顔を赤面していると君塚が目覚めましたのだ。

「と・・・遠山・・・先輩?」

「やあ翼、もう悪い奴はいないよ。もう君は自由だ。その名前のごとく

羽ばたく事が出来るようになったよ。」

「・・・そう・・・よかった。」

翼はそれを聞いてほつとしてしていると二狐崎がキンジに向けてこう言った。

「さてと・・・さつさと警察に電話しましょつか、逃げないでよね馬締君。」

君には聞きたいことが山ほどあるんだから・・・さ。」

「う・・・うううううううううう。」

それを聞いて馬締は泣きそうになっているのでそれを見たキンジは終わったと思つてほつとしていると・・・聞きなれた声が聞こえた。

「おや？これはもう終わったのでしょうかね？」

『?!』

それを聞いて全員が振り向くとそこにいたのは・・・中華服を着た男性であつた。

「お前は確か・・・宣誓会議にいた。」

「これはこれは遠山キンジ、私の名前は『諸葛静幻』。今回はお荷物を

取りに来ただけなのです。」

「荷物・・・翼か？」

それを聞いて全員が構えると『諸葛』はこう答えた。

「いえいえ、私が言う荷物は・・・貴方ですよ馬締。」

追いつかれた

「お・・・俺？俺に何かって言うか助けてくれ！俺が目的だったら金でもなんでも好きに出す!!女だって好きだけあるから助けてくれ!?!」

「手前・・・仲間を何だと思って」

キンジが馬締に向けてそういうと諸葛はこう言った。

「いえいえ、金は良いので私が欲しかったのは貴方の

その洗脳能力だったのですがその大本はもうなくなりましたし我々に武器の輸出や薬を頼むために呼んだのにその代金はいつ払ってくれるのですか？」

諸葛の言葉にキンジはこう聞いた。

「薬・・・一体何なんだ？」

そう聞くと諸葛はこう答えた。

「ええ、睡眠薬と麻薬・・・最近私どもの造った特殊タイプでしてこれが評判でして今まで女の子達に飲ませて彼に依存させるようにしていたのです。これはちよつと特別でしてこれを飲むと最初に見た人間に対して恋愛と

言うよりも依存に近い状態にさせるのですがお高くて・・・支払いほどの様に？」

諸葛がにこやかに・・・だが恐怖心が見える笑みを浮かべると馬締は

震えながらもこう反論した。

「そそそそれは今まで払ったじゃないか!?!」

そう言うが諸葛はこう反論した。

「あのお金は貴方ではありません、私どもは支払いは必ず支払う人間の口座から支払いさせるのが鉄則なんですよ。ですが貴方は必ず現金払いなんですよ、

最近口座から警察が調査しますがそれを利用して我々はペーパーカンパニーを

幾つも流してから我々に来るようになっていきますので今までの支

払い

未納額占めて・・・205万円支払ってもらいます。」

「205万円・・・そんな額・・・あ、けど父さんに頼めば」

「それはいけませんよ？貴方が手にかけて女の子達だって全員大企業や

各国の大使館のご令嬢さん。この事が公になったら間違いなく終わりですよね貴方の会社。」

「ひいひいひいひいひいひい！」

それを聞いて馬締は震えていると諸葛はキンジに向けてこう言った。

「それとですが貴方にお会いしたいって言う人がいます、来ていいですよ。」

そう言っつて現れたのは・・・小5くらいの黒髪長髪で褐色肌の

名古屋武偵女子高の服を着ている少女が現れたのだ。

だが名古屋武偵女子高の服装は見た感じ・・・痴女となんら変わらない

恰好なのだ。

何せ臍どころか胴体丸出しで下乳も僅かに見えていたのだ。

だがそれだけではなくその気配が・・・違うからだ。

「(こいつは間違いなく・・・人間じゃない、玉藻と同じ別の類だ!)」
キンジがそう思っていると玉藻はその少女を見てキンジに向けてこう言った。

「遠山の！お主はそのお方相手に戦うべきではない！お主は仏相手に

戦う気か!？」

玉藻がそう言うときンジは仏と聞いて一体何だと思っていると・・・

玉藻は震えながらこう続けた。

「あ・・・あのお姿は『猴』、日本の鳳と同レベルの、化生界の巨頭じゃ。

天竺で闘戦勝仏と相なられた・・・しよ、正真正銘の・・・このお方と

戦うというのはあらゆる唐の化生を敵に回すというのと同じ」
そう言っているとその間に『猴』は頭上に金色の粒子を頭頂部に
まるで天使の輪の様な光が密集して回転し始めるとキンジはマス
クにある

索敵システムがエネルギーを感知して反応していると玉藻は『猴』
に向けてこう言った。

「き……『きんこかん』……『猴』！静まり給えー!!!」

玉藻がそう言って止めようとしたと同時にキンジはプラズマキヤ
ノンを

最大出力にして展開すると『猴』の背後から音がしたと同時に……
声が聞こえた。

「キンジさん！伏せてください!!」

そう言ったと同時に光の輪が……断ち切れたのだ。

「!?!」

それを見て一体何なんだと思っていると現れた少女を見て……キ
ンジは

こう言った。

「お前は……メーヤさん!?!」

「お久しぶりですキンジさん！今はこの敵をお相手します!!」

そう言うと玉藻が……大声で反論したのだ。

「お主らやめるのじゃ！そのお方は神と同クラスなのじゃぞ!!」

そのお方は……

闘戦勝仏・・・『孫悟空その人なのじゃぞ!』

妖集結

「孫悟空・・・こいつがか!」

キンジは玉藻の言葉を聞いて驚いて孫悟空を見た。

見た感じ只の小学高学年の少女にしか見えないが今のあの光がもしも

こつちに来ていたら耐えきれていたかと思っていると何やら孫悟空らしき少女が

前に倣えして何かしようとするのを見て玉藻は慌ててこう言った。

「こう! 静まり給え!! ここは倭ぞ!?! これ以上の攻撃は倭と唐の化生における

全面戦争となろう! 静まり給えー!!!」

そう言っているがそれでも攻撃しようとしてくるのでやばいと思っていると・・・声が聞こえた。

「ダメやで孫悟空、戦いたいんならもつとちやんとしたところでやりい。」

そう言ったと同時に孫悟空の周りに幾つもの光の柱が囲い込むかの様に巡るので

孫悟空は後ろを振り向くとそこにいたのは・・・

細目の陰陽師みたいな服装を着た男性が現れるとこう続けた。

「そないに殺気強くせんほうがええで? さもないと・・・うちの主があんたを殺すかもしれへんで?」

そう言つて更にその後ろにいたのは・・・妙な小刀を持っている中学生くらいの少女と・・・更にもう一人が現れた。

腰まで届くであろう白と黒の長髪を持った男性が……小太刀を持って孫悟空の視線の後ろ側に……キンジ達の前に突如として現れたのだ。

「！」

それを見てキンジとメーヤが驚いている中で男性は孫悟空に向けてこう言った。

「やめな孫悟空、これ以上やるってんなら……俺達『奴良組』が相手するぜ？」

そう言うのと辺りに何か嫌なものを感じてキンジはヴェルカ達のすぐ近くまで

行くとその周りには……異形の存在がずらりとそこにいた。

「(こいつら一体どうやってこの中に入ったんだ!?)」

そう思っている中で孫悟空は何やら更に好戦的笑みを浮かび始めてきたので

こんな中で戦うのかよと思っていると……諸葛が孫悟空に向けてこう言った。

「いけませんよ孫悟空、我々の目的はあの坊に借金返済してもらわないと

いけないのでこれ以上の戦闘は不許可となっていますよ？」

「……!!」

孫悟空が何やら言いたいような眼をすると諸葛が何やら唱えていると……

突如として孫悟空が頭を抱えて痛がり始めたのだ。

そして孫悟空に向けて諸葛はこう続けた。

「分かりましたか?こちらは貴方の動きを制限できるのでこれ以上の勝手は

こちらの予定を狂わされるんでこれ以上は……目を瞑れませんよ?」

「……!」

それを聞いて孫悟空は何やらこくこくと首を大きく振っているとそれではと言って諸葛は馬締に向けてこう言った。

「さてと馬締さん、一緒に来てもらいますよ？借金はこれまでの分併せてと」

それと彼女たちの感謝料にもし子供が出来ている場合の諸経費または墮胎費、

そして今回武器を買ってもらいましたので」

「ちよつとマテよ！そつちは君塚だ!!だから払いだつたら」

「ええ無論そのつもりですよ？まあ正確には貴方が操ってましたから

そつちに全額奪いますからそのつもりで♪」

「そ．．．そんなあ．．．!」

それを聞いて馬締は泣きそうな顔で青い顔していると諸葛は長髪の男性と細目の男性に向けてこう言った。

「それでは私たちはこれで失礼させていただきます、孫悟空。そいつを引きづつて貰いますよ。」

「．．．」
「んぐ」

それを聞いて孫悟空と呼ばれている少女が頷くと孫悟空と呼ばれている少女は

馬締の右足を掴むとまるで軽いものを持つかのようにひょいっと引きづつていく中で馬締は泣きながらこう言った。

「い．．．嫌だ．．．嫌だ！せつかくここまで来たのに!!オレの．．．

俺の青春はここから薔薇色になるはずだったのに!?!ここから．．．
ここから．．．いやだ．．．嫌だこんな結末何て嫌だ俺は．．．俺は――
!!!」

そう言いながらも馬締は泣きながら引きづられていった。

そして目的を果たしたのか諸葛は全員に向けてそれではと云って立ち去ると

男性と少女も立ち去ろうとするのを見てキンジは2人に向けてこ
う聞いた。

「札を言いたいんだけど・・・お前らどうやってここに来たんだ？」
そう聞くと2人はこう答えた。

「うちは二狐崎っていう女から除霊してほしいって頼まれたんや、
学生の行動がどうも宗感染みてるからってな。」

「俺は普通に入っただけだぜ？」

「いや待て男の方はそれ無理が」

「いや遠山の、それは可能じゃ。何せこやつはそう言うことに関し
ては

特殊な能力を持っているからのう。」

玉藻がそう言うとうこう説明した。

「そ奴は『奴良組』の若頭、かの有名な『ぬらりひよん』の孫じゃ。」

『ぬらりひよん』・・・孫!？」

キンジはそれを聞いて今日何度目の驚愕を覚えると『ぬらりひよ
ん』の孫は

こう答えた。

「俺が今回ここに来たのはちよいつとばかり強い妖気を感じたから
な、

それで来たってわけだ。手前ら引きあげるぜ。」

そう言うのと先ほどまでいた異形たちが全員・・・消えたのだ。

すると何やら足音が聞こえたので『ぬらりひよん』の孫はこう言っ
て消えた。

「じゃあな、俺はこれで消えるから後はお前さんの仕事だぜ？」

そう言っただけで消えると少女の方もほれ帰るで!と云って札を投げる
とそれが巨大な障子になって開いたと同時に消えたのだ。

「何だったんだ・・・あいつらは。」

キンジはそう呟くしかなかった。

そして後日談

あの後一桜学園警備部の面々がやってきて君塚組の組員を拘束したのち生徒たちを保護した。

馬締の性対象となっていた少女たち全員・・・妊娠が発覚して中には発狂したり

自殺未遂して墮胎してしまった者たちが多数現れた。

さらに言えば馬締の家に対して抗議が殆どあり馬締の会社はどうにかして

隠蔽しようとするも情報が何処からか・・・メディアによってそれが世間に

明らかになった。

日本中の企業・・・それも馬締の手にかけて少女たちの親の会社達は賠償責任を

訴えてさらに言えば誘拐まで発覚しヴェルカの家であるロシア国防司令部から大使館経由で、さらに言えば二狐崎や茶山、白峯、嶋乃や多くの企業によって訴訟が

起こされ馬締家は・・・事実上の経営倒産と自己破産を持って終了となった。

だが当の本人は・・・行方不明となっていた。

今どこなのかと被害者各家は裏事情に詳しい情報屋を使って捜索するも・・・

今現在どこにいるのかは分からなかった。

そしてキンジはと言うと・・・。

「と言うわけで君の護衛任務は先ほど向こうから解除するって事になっっている

けどそれでいいかい遠山君？」

「ああ、それでいいぜ。」

そう、ヴェルカの父親から娘の救出に協力してくれたことから代金を

支払ったのち今回の依頼を終了することとなった。

「君の依頼金は既に口座に振り込んでいてさらに言えば・・・君に対して

ロシアにいる父親から話があるようだけどそれはヴェルカちゃん本人に

聞いたほうが速いだろうね。」

「？」

二狐崎の言葉にキンジは何だと思っているが二狐崎は更にこう続けた。

「それとだけど嶋乃ちゃんの家からはお礼として家から新型の自転車1台、

辻林ちゃんの家からは編集局経由で君のお兄さんに対する不評の取り消しと同時にネットの悪評の削除等に尽力、茶山ちゃんの実家からは最新作のお菓子を

送ってくれるってさ、そんで君塚ちゃんからは実家が潰れたらしいけど今回の事で海外、特に中国での移動や船舶等の使用については都合付けるって。」

そう言うのとそれとと言ってこう続けた。

「私からは家はアミューズメントパークや健康ランドを中心にしているから・・・来年の春からオープンする新型施設の無料招待券をプレゼントするから。」

ハイこれねと言って渡されたのは許可証であった。

「後で一緒に来る人たちもいるんだったら電話して、融通利かすから。」

そう言ってそう言うところ締めくくった。

「後これは私用・・・皆を守ってくれてありがとうね遠山君。」
本当にと言つて頭を下げるのを見てキンジはこう返した。

「良いですよそんな！俺はただ自分の仕事をやっただけなんだから
！」

そう言つて頭を上げるようにと言つと二狐埼はこう言つた。

「それでもさ、君には恩があるんだから。今後私たちも君には何か
しらの便宜を図らせるから。」

これは只の私たちの勝手なお礼だからねと言つてキンジはこう返
した。

「・・・分かった、何かあつたら。特に日本にいるときは頼む。」
それを聞いてうんうんと言つと二狐埼はこう言つた。

「話は以上、荷物はもう用意してあるんだよね？」

「ああ・・・今までありがとうな二狐埼生徒会長。」

「じゃあね・・・皆のヒーロー。」

それを聞いてそうかといつて生徒会から立ち去つて出ていくのを
見て

二狐埼は部屋の中でこう呟いた。

「・・・じゃあね、私の・・・初恋さん。」

そう呟いて窓の外を二狐埼は只眺めていた。

「キンジくく！こつちよくく!!」

「ヴェルカ!？」

キンジは学園の前で待っていたヴェルカを見て何でだと思つていとヴェルカがこう答えた。

「何言つてんのよキンジ！貴方は私たちの恩人なんだから!!それに迎へは

私たちも同行するんだつて二狐崎先輩に言つたんだから！」

キンジに向けてヴェルカは大声で詰め寄るとキンジは胸が当たつてやばいと

感じているとキンジは意識をそらすために他を見て・・・白峯を見ると

白峯は近寄つてこう言つた。

「ほら行くわよ！貴方には言わなきやいけないことがあるんですから！」

そう言つて白峯はキンジの右腕に・・・胸が挟まるかのように密着すると

ああ！と言つて今度はヴェルカが左腕に密着すると茶山先輩と嶋乃が目を見開いてこう言つた。

「何してるんですかもう！」

「せせせせ先輩！私だつて!!」

そう言つた瞬間に嶋乃が前に、茶山先輩が後ろに抱き着くとキンジは・・・内心こう思つていた。

「(ああああああああ！胸が!!胸が体中に密着して体温が!?)

俺の体に柔らかいものがー!!!)」

そう思いながらこう言つた。

「お前らしい加減にしろ！歩きづらいだろうがー!!」

そして車に乗るとそう言えばと言ってキンジは鳴乃と茶山先輩に
向けて

こう言った。

「そう言えば俺のために色々融通かせてくれたようだな、あり
がとうな。」

「いいえそんな!」

「そうですよ先輩! 私たちがそうしたいって思ってたんですから
!!」

そう言うとき今度はヴェルカと白峯がこう言った。

「それじゃあ私たちが貴方にプレゼントよ♪」

「プレゼント?」

キンジはヴェルカの言葉に耳を傾けることとなった。

報酬について

「プレゼント何だけどね、まずは澄花ちゃんからね♪」

「ええ！何で私なのよ!!そこはヴェルカさんでしょう!？」

白峯が慌てた様子でそう言っているとヴェルカはこう返した。

「私はね・・・最期って決めてるのよ♪、だってその方が楽しみが増えて

良いじゃない。」

「な!・・・貴方って人は本当に・・・!!」

「(本当に色々と苦勞がかかってんなア白峯。)」

キンジはそう思っていると白峯はええとねと言ってこう答えた。

「あの時さ、私を助けてくれたことにお父さんがね。その・・・」
「?」

「・・・と・・・遠山君のスポンサーになってもいいって話が来てるの。」

「スポンサー?」

キンジは何だと思っていると白峯がこう説明した。

「ええとね、武偵校って色々悪いわさが絶えないって言うじゃない。」

「それはそうだな、寧ろ今回についてちやあ俺が武偵校からの転入生だって

言っていないらしいじゃねえか。」

「そうよ、貴方の通っている高校はそれなりの名家が通う人間で警備隊としての

実績持ちって触れ込みで入れてるんだから。こっちは色々苦勞したのよ。」

「それはまた・・・済まねえ。」

キンジがそう言って謝ると気にしないでと白峯がそう言ってこう続けた。

「貴方がいたから私たちは助かったのよ、お礼を言うのは私達。だからあの時迄の苦勞は報われてるから大丈夫よ。」

それでねと言つて白峯はこう続けた。

「私の家は父が警察所属で上層部にいるのよ、貴方なら知つていないでしょ？」

『白峯 清草』。あの人が私の父親よ。」

「おいおいそれつて警視庁刑事局長クラスじゃねえか！武偵に対しても

でけえ影響力持つてるエリートだろ!!」

「そうよ、私は父から『常に正しく模範となり悪い行いを見過ごすな』つて

言われて育つたの。だから馬締君については積極的に注意していったの、

まあこうなつちやつたけど遠山君のおかげつて事もあつて父から貴方に対して

感謝の言葉ともし貴方が困つていたら全面的に協力するつてことになつてるから。」

「警察が武偵に協力つて・・・またとんでもないことになりそうだなおい。」

キンジがそう呟くには理由があつた、武偵と警察は元来より法律関係等で

不仲であり今ではまあ互いに生徒の交換とかして互いの緊張緩和に努めているが

結局不仲は相変わらずであつた。

「父はこれは今後の武偵と警察が組むうえで重要な状況だつて事もあつて

貴方を通じて協力関係結びたいつて言つてるの、私もそれには賛成よ。

貴方の人柄は私がよく知つてるからね。」

そう言つて笑つてると白峯は最後にこう言つた。

「だから何かあつたら遠慮なく言つて、協力するから。」

「ああ・・・その時は力になつてもらはうぜ。」

キンジが白峯に向けてそう言った後に白峯が何か言いたげな感じがするので

何だと思っただけ聞いた。

「白峯、お前何か言いたいことあるのか？何か落ち着かねえけど。」
「べっ、別に何も無いわよ！ほらちゃんと前見て!!はい最後はヴェルカさん!」

白峯が頬を赤めらせてそう言うのとヴェルカはそうねえと言ってこう答えた。

「私からもだけどパパから貴方をスポンサーとして、
そしてロシア武偵局職員としての推薦するって言ってたわよ。」

「はっ!」

それを聞いてキンジは唾を吐きそうであった。

他国から武偵局職員になってほしいという推薦は数える程度でしかなく

大抵は自国の武偵局に入るのが通常である。

「いや待ってヴェルカ何でロシアの武偵局職員何だってロシアとか中国の

武偵局職員は政府直属の特殊部隊兼内部調査官扱いだっただけ知ってるのかよ!」

「ええ知ってるわよ、だって私パパの仕事見たことあるもん。」

「自分の娘だからって入れすぎだろおい。」

キンジはそれを聞いて頭を抱えていた、中国やロシア等の共産主義国家は

独裁系が多くあり国内で反乱があつたりしたらその間の治安維持が困難となるため武偵局総本部があるイタリアはある決断をした。

『共産主義国家の武偵は内部調査権限を持つ代わりに特殊部隊としての責務を

果たすこと。』

つまりは政府の自浄作用になる代わりに軍人としても働けという取引の下で

行われたのだ。

それでもロシアの大統領が変わらないのは何故なのかが今や武偵局での

不思議情報となっている。

「私ね、キンジがいたからこそここまでやれたんだよ。貴方がいたから私は一人じゃなくなつた、今まで私は・・・一人だったわ。生まれとかでやっぱり誰も聞かれづらかったからずっと一人で行動してたけどキンジが・・・」

貴方がいてくれたおかげでこうやって楽しくいられるから・・・ありがとうね

キンジ♡」

そう言った瞬間にヴェルカはキンジの左頬に・・・キスをしたのだ。

「!!!」

それを見てキンジ達は目を見開いて驚いているとヴェルカはえへへと笑いながらキンジに向けてこう言った。

「これ、私の初めてのキスだから記念よ。大切になさい。」

そう言うとはやらヴェルカに向けてああだこうだ言っている白峯達を他所に

キンジはこう思っていた。

「・・・嘘だつて言つてくれ。」

そう呟くしかなかった。

何せ武偵は・・・依頼人と恋仲になつてはいけないからだ。

いざ母校へ

まあ車中にてそういう事があったもののキンジ達一行は一桜学園内の駅に着くと

キンジは荷物を持って電車に向かい中に入ろうとすると・・・ヴェル力達から

声が聞こえた。

「『キンジ（さん）（先輩）遠山君!!!』」

「?」

それを聞いてキンジは何だと思った瞬間に両頬に柔らかくて少し熱いナニカと

両腕に温かいものが挟まるの感じるとキンジは・・・目を大きく見開いていた。

何せその原因が・・・これだからだ。

「うふふ・・・キンジさん。前のファーストキスの記憶は覚えていませんが

成程こういうのですね、参考になりました。」

「（*・σー、）エへへ、先輩の頬のキスしてみました。」

そう、それは茶山と嶋乃のキスと同時に腕をその胸で挟まれていたからだ。

そして2人が少し離れると今度は白峯が前に出てこう言った。

「遠山君ありがとね、車の中でも言ってたけど貴方がいなかったら私達あいつにどういう風にされていたのか考えたくないけど・・・これだけは言わせて・・・ありがとう本当に。」

そう言いながら近寄って耳打ちしてこう言った。

「あの時の車の話の続きだけどね、お父さん貴方の事気に入ってね……」

「……お嬢さんにしてやってもいいって。」

「は？」

それを聞いて何言ってるだと思って聞こうとした瞬間に口が塞がれたのだ。

何せ今キンジの唇は……白峯の唇によって塞がれてしまっているからだ。

「!？」

「「あああああああ！」」

それを見つづるとヴェルカがそう言っているが白峯はキンジの首を両腕で

引っ掛けるようにしていると少し離れてこう言った。

「好きよ遠山君……ううん。キンジ、又来てね。今度は友達として……」

私たちの大切な人として。」

総言つて手を振った瞬間に扉が閉まって走り出すとキンジは呆然と

突っ立っていて・・・暫くしてこう呟いた。

「何で・・・こうなったんだ。」

そう言うしかなかったのだ。

キンジは武偵校から戻るためにクリスマススムードの台場から学校に戻ると

高天原先生がニコニコしながら教務員室から移動しますよと言つて

暫く付いていくとたどり着いたのはキンジの教室であった。

そして座ってくださいといふとキンジは座り高天原は向かい側の席に座ると

それではと言つてこう続けた。

「先ほどですけど遠山君にこれが2通ほど届いていますよ。」

そう言つて差し出したのはそれぞれロシア語と日本語で書かれて
いる

書類があるので何ですかと聞くと高天原先生はこう答えた。

「それらは全て遠山君に対してのスポンサー契約です！」

「スポンサー……向こうじゃあロシアの場合は武偵局の推薦状でしたよ。」

「そうですけど君の様な優秀な武偵の場合は他国からも欲しがる要素が

ありまして現に君がいない間にアメリカ・イギリス武偵局でも

君をスカウトしたいって話でもちきりなんですけど君の体は一つ。

そして君がどっちに決めたとしても禍根が残ることは間違いありません。」

「は……はあ。」

話を読みづらいなと思っているとそれですよと言って高天原はこう答えた。

「君に対しては先ほどの三国の会社から君を広告塔として武器または

車両を使ってPRしてほしいという要望がありましたアメリカからは既に新兵器、

イギリスからは最新の機材を無償で配備させることが決定しております！」

「へえ最新のなあ……ポーナとダイアナが聞いたら喜びそうだな。」

「そしてロシア何ですが……そちらは何と言うかその……ね。」

高天原先生が何やら言いにくそうだったので何ですかと聞くと高天原先生は

暫くしてこう答えた。

「ロシアからは自由捜査許可証、日本の警察本部からは特殊部隊の使用許可書と言ったものと毎年ですがロシアからは30000ルーブル

(120万円)で日本からは200万円ほどが給与されるらしくあ、それと写真も同封されてますよ。」

何なのかは見てませんがと言ってキンジに手渡すとそこに写っていたのは・・

ヴェルカと共に写っている自分と白峯と共に生徒会の仕事しながら帰っている

自分の姿と共にこう書かれていた。

「今後とも娘の事を末永くよろしくお願いいたします

(泣かしたら分かってるよね)」

最後に脅しも含めた文章があり嫌な顔をしながらキンジは内心こう思っていた。

「……本当に勘弁してくれ。」

もう泣きそうといわんばかりであった。

すると高天原先生はそれとねと言ってこう続けた。

「これまでの君の活躍を考慮して近々国際武偵連盟（IADO）が二つ名（ダブ）付けが審議中らしいからね、もうアンオフィシャルに呼ばれている名前もあるからそれを公式化するって話らしいけど凄いわね遠山君！

17歳で二つ名、在学中のこの東京武偵高等学校でなんて初めてなんだから

頑張って!!」

「は……はあ。」

キンジはそれを聞いてそう言うしかなくなるとそれじゃあと言つて

こう締めくくった。

「それでは長期任務ご苦勞様、これからも頑張つてね。」

「はい！ありがとうございます。」

そう言つてキンジは教室から出て行った。

帰還

「帰るのは久しぶりだな。」

キンジはそう呟きながら目の前にある自宅に入ろうとするとキンジは

何かを感じついて扉に手をかけかけようとして離れると・・・扉の前から声が聞こえた。

「おや遠山侍、お帰りになっっているのに何故入らないのじゃ？」

そう言っけて開けてきたのは金髪の女性・・・八坂がそこにいた。

それを見て嘘だろと思いつながら重い気持ちでこう聞いた。

「あの・・・何でここに？」

そう聞くと八坂はこう答えた。

「今回玉藻が中国の孫悟空を相手取ったと聞きましたがメーヤさんからの

報告もありましてご苦労でしたな。」

「それは遠路遙々どうもって言うか・・・向こうが引き上げたから何もしてなかったぜ俺は？」

「それでも生きて帰ってきたのですから行幸です、向こうでは皆さんが

お待ちですよ。」

ほらと言っけて入っけて見るとそこで・・・ダイアナが現れてこう言っ

た。

「お帰りなさいませご主人様！よくぞ・・・よくぞご無事で!!」

「いや泣くほどじゃねえぞって言うかメーヤさんから聞いてなかったのかお前？」

キンジは泣いているダイアナに向かってそう聞くがダイアナはこ

う返した。

「お生憎ですが私は自らの目で聞いたことしか信じられませんので
こうやって

ご主人様をお迎え出来ることに感激いたしております!!?」

「そ．．．そうか。」

キンジはそれを聞いて冷や汗混じりでそう答えると今度はミシエ
ラが来て

こう言った。

「よく帰って来たな遠山、それでだがお前に聞きたいことがあるの
だが

良いか?」

「何だよ?」

キンジはそれを聞いて何だと思っていると．．．ミシエラはこう答
えた。

「お前．．．また女を引っ掛けたな? 然も5人。」

「ぶ!」

それを聞いてキンジは唾を噴くがミシエラはこう答えた。

「私が占いしてな、松葉から言われて仕方なくだが．．．お前5人も
女を引っ掛けるとは何したんだお前と言うかどんな連中か吐いた
ほうが良いぞ。」

武偵は依頼相手と恋愛関係になるのは禁止だからなと言われて内
心．．．

冷や汗だらだらと掻いていた。

もしばればれば蘭豹から体罰フルコースセットがやってくるからだ。

そして暫くするとキンジは・・・こう返した。

「俺と関わった連中でいいか?」

「ああ構わない、さあ話せ。」

ミシエラはそう言うത്それじゃあなと言ってキンジはこう答えた。

「ヴェルカに澄花、辻林、二狐崎生徒会長、茶山先輩、鳴乃・・・つて
て

ところかな?」

「よし、次は見た目で。」

「ヴェルカは依頼主で子供っぽいところはあるけどちゃんと謝るところは謝るしムードメーカーみたいだな。辻林は別のクラスだけど生徒会の仕事とかで

雑用があるとよく手伝ってくれてそれに本人は漫画研究会にいるから

俺を主人公にした漫画で売れてやるって言ってたけど・・・大丈夫かなそれ。」

「良いのではないか?武偵局にとっては良いイメージアップの材料に

なりそうだしな。」

「二狐崎生徒会長は俺の事知っている人の一人で小柄で見た感じ理子と

同じなんだけど・・・ある意味違うんだよなあ。」

「どこが違うのだ?」

「・・・悪いパス。」

「そうか、それじゃあ次だな。」

「次は茶山先輩何だけだな、学園の中に喫茶店があつてな。たまに
だけど菓子を食べに来てな、結構よくやってくれたんだけど一つ癖
が・・・」

「何だその癖は?」

「・・・個人的な弱点だからパス2。」

「いや待てお前さつきもパスしたよな」

「よし!続き行くぞ!!」

「おい遠山」

「次に嶋乃なんだけど一つ年下で自転車部に所属していてな、偶に一緒に登校する程度だな。それで次に君塚・・・松葉に聞いているなら

わかるかもしれないねえけどそいつが俺達に組の破壊を依頼してきてな、

まあ紆余曲折あって今は姉がいる中国に行っている所だろうな。」

「お前何か・・・隠しているだろ?」

「いやその・・・最期行くぞ。」

キンジがそう言うところ言った。

「白峯 澄花って言うてな、そいつは俺の事を最初は

警戒心バリバリだったんだけど最後は認めてくれてな。そいつとヴェルカの親が

俺とスポンサー契約することになったんだ。」

「ほうスポンサー契約ともなると依頼主はロシア、そして白峯ともなると

警察の人間だから私たちの今後にも大きく行動範囲が広がりそうだな。

私たちはこれから中国に行くところだからな、それでお前は中国にいる連中相手と戦うのか?」

「ああ、相手が相手だが俺達は何時か戦う相手だからな。」

そう言うのと八坂が割り込んでこう言った。

「ですが相手は神とも呼ばれる存在、どないして戦うんです?」

そう聞くとそれだよなと思っっているがキンジはこう続けた。

「相手は神ともなるが存在は人間と同じだから・・・何か方法がある
と

思うんだ。」

そう言いながら今後を考えていると・・・ポーナがこう言った。

「その前にさ、遠山達って・・・パスポートあるの?」

そう聞くとキンジは・・・あつと言っところ続けた。

「パスポート・・・ねえな。」

そう言っていると仕方ないと言ってこう続けた。

「まずはパスポートの取得と飛行機の予約は・・・松葉がしているから

お前がやることと言えば作戦の詰めだ。」

ミシエラがそう言うときんじはそうだなと言って・・・無理やりだが話し合いを終わらせるがミシエラはこう思っていた。

「(あいつ・・・絶対に何かあったな。)」

いざ中国へ

そして時は過ぎてキンジ達チーム金龍はキャラバンⅡの目的地である

香港行きの飛行機・・・否、カイズマスが保有するチャーター機で向かう事となった。

やはり金持ちだなとキンジ達はそう思いながら向かっていくと・・・とある少女に出会った。

背丈的に言えばカイズマスよりも少し背が高くらしいのモデルみたい

高身長の少女であるが・・・凄い目立っていた。

何せ胸が・・・巨大すぎるのだ、バルンバルンと揺れるその胸は多くの男性たちの鼻を伸ばしたり凝視したりしているので少女は何やら居づらいような

感じになっていたがキンジはあれはと思って声をかけた。

「お前もしかして・・・翼か？」

「え・・・あ！遠山先輩！」

そう言つて少女・・・君塚 翼が大きな荷物を持って近寄ってくるとキンジは

こう聞いた。

「お前何でここにいるんだ？一桜にいたはず。」

「はい、実は組が解散することになりましたのでそれで姉のいる

中国の香港に行こうかと思ひまして・・・そちらの方々は？」

翼がそう聞くとあなと言つて紹介した。

「俺の武偵での仲間だよ。」

「天草 信一郎です。」

「松葉よ。」

「カイズマスだ。」

「詠と申します。」

「ミシエラ・J・ダルクだ。」

「ダイアナと申します。」

「あの・・・私・・・クリスマスって言います。」

「ポーナだよ、宜しくねえ。」

互いに自己紹介して自身も紹介した後にそう言えばとミシエラがこう言った。

「お前か、君塚会の次期後継者と呼ばれていた。」

「アハハ、今は一桜を辞めて姉のいる中国に厄介になろうと思いついて。」

「行先は何処なのだ？」

ミシエラがそう聞くと翼はこう答えた。

「香港です、姉はそこで組が使っていた薬物ルートを利用して雑貨商売をしています。」

今でも中国中を飛び回ってますよと言うが・・・ルートが薬物と言うのには

武偵からしたら見過ごせないなあと思っているとカイズマスがこう言った。

「我々も香港に行くところなのだ、どうだ翼殿。我々の飛行機に乗るか？」

空きなど十二分にあるぞ！」

「ええええその・・・良いんでしょうか私も一緒で？」

仕事の迷惑じゃないんですかと聞くとキンジはアハハと言って・・・説明した。

「クリスマスの予定作りで修学旅行って・・・普通じゃありませんよ

ね。」

「ああ、悲しいことにこれが武偵高等学校の現実だ。」

そう言っている他の奴らはと聞いてええと翼はこう答えた。

「ヴェルカさんは帰国しました、この間の大会で好成績修めてましたし」

それにあんなことがありましたから。」

「ああな・・・確かに家族からしたら帰って来いって言いそうだな。」

キンジはそう言っって馬締が起こしたあの事件の事を思い出した、

当の主犯格はランパンによって連れ去られ更に言えば家も潰されて家族は

バラバラになったと聞く。

「何でも大統領に頼み込んでスパイを使って操作しているって

噂らしいですよ。」

翼が耳打ちでそう言うがキンジはそれどころではなかった、その理

由が・・・

これ。

「(胸が・・・胸が当たって色々柔らかいのが・・・!!)」

今でも胸の谷間がこれでもかと思せつけるかのような服装を着ているのに

更に近づいたので人肌まで感じてやばいと思っっているとそれじゃあ他はと聞くと

翼はこう続けた。

「嶋乃さんは今でも自転車部です、二狐埼生徒会長と辻林さん、白峯

さんは

何時も通りで3人とも正月は向こうにいるそうです。それと茶山先輩は京都に

戻って実家のお手伝いをしているそうですよ。」

「そうか・・・皆無事でよかった。」

キンジがそう言っているとカイズマスが飛行場を見てこう言った。

「皆着いたぞ！」

そう言っって目の前にあるのは大型の・・・ジャンボジェット機である。

「これが・・・お前のか？」

「そうだ！俺はこれで入国したしな!!」

ハハハハと笑っているが全員がこう思っているだろう。

『（・・・流石金持ち。）』

「私でもセスナクラスで下よ。」

『（いやお前あるんかい!?!）』

翼の言葉にマジかよと思っっているとさあ乗れとカイズマスがそう言っうと

全員が飛行機に入ると内装は・・・凄かった。

「・・・ホテルでしようかここは？」

詠がそう呟くが無理はなかった、内装はまるで高級ホテルだからだ。

座席は10あれば良いところで大型テレビにチエークッション、冷蔵庫、

カラオケ迄色々あったからだ。

「皆座席についてくれ、後で食事としよう。今日の食事は中国に行く事から

洋食のフルコースが待っているぞ！」

ハハハハハと言うのを聞いてもうツツコムノやめようと思って座ると

キンジはあることを思っていた。

「(ランパンのアジトは確か中国にある、緋弾を取り戻さなきや神崎は

緋緋神になって世界を戦乱に包ませようとするって玉藻や八坂さんが言ってた・・・今までは迎え撃つだけけど今度はこっちから来るんだな・・・問題は孫悟空・・・あいつを何とかするには・・・こいつだよな。)」

キンジはそう思いながら竹刀袋に入っているそれを見ていた。

鎧竜剣を分割した双剣。

「(やるしかないな。)」

そう思っているとカイズマスがこう言った。

「全員離陸するぞ！」

そう言って飛行機は飛んで行った。

中国・・・そこで待ちかねているのは一体何なのか・・・未だ知るものは

誰もいない。

そう・・・誰もいない。

アリアですら。

香港に着いて。

現地時間正午

12月とは思えない陽射しの中キンジ達は香港に辿り着いた。

20℃近くある気温の中武装者入国審査（アームド・イミグレーション）を

済ませた後先ずはと言って全員に向けてこう提案した。

「先ずだが作戦会議を何処ですかだか。」

「あのう・・・私の家はどうか？」

『?』

全員は翼の声を聴いて何だと思っていると翼がこう続けた。

「私の姉の店は日本商品専門店ですけどそこには食料品もありまして偶にですが近くの店で荷下ろししてしまっていてそこでどうでしょうか?」

翼の声を聴いてキンジ達はどうしようと思っているとカイズマスがこう答えた。

「ならば我々が守ればいいだろう?我々がそこら辺の連中に負けるほど

弱くは無いらしそれにこの者の好意を無下に出来んだろう?」

そう言うのとキンジは暫く考えていると・・・翼を見てこう答えた。

「分かった、じゃあ厄介になるわ。」

「では案内しますね!」

翼がそう言うって案内してくれたのは裏町にある小さな商品店であった。

「ここか?」

「あ、はい。元々が君塚会のダミー店舗として使われていましたが姉が

ここに來てからは本格的に始動して今は他の商店とも連携しているんです。」

そう言うって内部に入ると確かに日本商品が山ほどあった。

乱雑しているように見えてちゃんと商品の種類ごとに商品が並ば

れていた。

そんな中で店内の向こうにあるレジ場所にて……寝ている女性がそこにいた。

長い黒髪

小柄な体躯

そして最後に……理子クラスの体つきの癖に胸部はそれ以上と言
うふざけた

見た目にキンジは内心嫌な顔をしていると翼はその少女に向けて
こう聞いた。

「姉さん、姉さん。起きてください、翼ですよ。」

翼はそう言って少女の体を揺すると暫くして……薄く垂れ目の目
を開いて

こう答えた。

「……うにゅ〜、おはよう翼ちゃん。」

そう言って再び寝ようとして……翼は更にこう言った。

「姉さん起きてください！店番放棄して何やってんですか？って本当
に……

起きてくださいー！」

そう言って頭を思いつきり……叩くとうにゃ！と言って頭を摩つ
て

こう言った。

「何するのよ翼ちゃん〜んって……アレ何で翼ちゃんいるの！

日本にいるはずなんでしよう?！」

アイエエええ！と驚いている中でキンジは内心こう思っていた。

「(……何で忍者語?)」

「成程ねえ、まあ何れはこうなるって思ってたし父さんと母さんが死んでからは内乱状態だったから丁度良かったよねえ。」

「そうですね、それにしてもまあ姉さんまた店の中商品増えてませんか？」

「そう言うとうんと言つて翼に向けてこう続けた。」

「そうだよお、最近じゃあ日本の商品が売れ行き良くて家の伝手以外に色んな

裏組織が来て日本と行き来するがてらその組織の流通利用して国内の商品も

取り扱うようになったんだよ。」

「そう言いながら周りを見て〜と言つてきたのでキンジ達は周りを見渡すと

確かにと思つていた。

店内の中には日本語だけではなく中国語の袋もあり結構色んな所からも

商売してるんだなと思つていると少女はキンジを見て翼に向けて耳打ちして

こう聞いた。

「ねえねえ翼ちゃんあの男の子・・・彼氏？」

「な／＼／＼／＼！」

「私的には結構好みだしそれにき・・・武偵でしょ彼？」

「！・・・ハイ。」

「もしかして翼ちゃんを助けてくれたのは彼なんですよ？」

「は・・・ハイ／＼／＼／＼／＼」

「それじゃあ私にとつても恩人なんだからお礼しないとねえ。」

「そう言ううと少女はキンジに対してこう言った。

「初めまして、私の名前は『君塚 空』。こう見えても君たちよりも年上だよ〜。」

そう言うへえとキンジは生返事するとキンジはこう続けた。

「あのうすみませんが店……と言うか話し合いがしたいので場所を提供してほしいんですけど。」

そう聞くと『君塚 空』はこう答えた。

「それじゃあねえ、この近くに私が商品提供している店があるからそっち案内するねえ。」

そう言うところちだよと『君塚 空』の案内に着いていくかのよう

に着いていくと辿り着いた先にあったのは……小さな食品店であった。

「ここか。」

「うんそうだよおっ、ここ私が品卸している店で確かこの店には裏社会の人達がよく使う会議場があるからそっち使えないかどうか

聞いてみるねえ。」

そう言う『君塚 空』は其の儘店内内部にいる店員に歩いていると

暫くして……キンジ達に手で招いているとキンジ達は内部に入っていた。

中は小汚いがそれなりに繁盛しているのであろう店内に案内され

ると

会議場と呼ばれる部屋を見ると・・・豪勢であった。

どちらかと言えば成金志向な内部で金びかな部屋、そして何よりも海外からの

調度品であろう色々な商品が並んでいる中でキンジ達は席に座ると店員が

こう聞いた。

『何かご注文いたしますか？』

中国語でそう聞いてくるので『君塚 空』は中国語でこう答えた。

『大丈夫よ、後で貰うから。』

それを聞いて店員が下がるとそれじゃあとキンジは全員に向けてこう言った。

「それじゃあ・・・始めるぞ。」

会議です

「先ず今後についてだが俺は前にランパオの連中と出会った、この間一桜でな。」

『・・・』

「これまで二度俺はランパオと遭遇した、そしてそれは全て受けだったがお前らも天草から聞いていると思うが神崎が持っていた緋弾の殻を取り戻すことが

重要となっている。無論奴もそう思っているが向こうだつて待ち構えている、

それでだが拠点として・・・翼、ちよつといいか？」

「ああはい、何でしょう？」

翼がそう聞くとキンジはこう答えた。

「当座の拠点としてあの店の近くにしてえんだが良いか？迷惑は絶対にかけないって誓う！」

だから頼むと頭を下げようとする・・・空がこう答えた。

「良いよ〜、隣に私が使っているアパートがあるからその空き部屋好きに

使つてよ。君は翼ちゃんの恩人なんだし好きにしてよ〜。」

「良いんですか姉さん!？」

「うんまあね、ランパオつて私嫌いなんだよねえ。構成員の下っ端が雑魚臭いのと言い寄ってくるからやつちやっつていいよ〜。」

私も雲隠れするからという何でと翼が聞いてきたので空はこう答えた。

「そろそろさ、手持ちの金が貯まったし流通も一人で出来るようになったから

これを機に中国から今度はロシアに拠点を構えようと思つて

丁度良かったよ〜。」

「ロシア・・・俺の名前を使つてくれ、ヴェルカの親父さんが国防関係の

お偉いさんだから便宜は図つてくれると思うぜ?。」

「ありがとう〜!」

そう言っているとそれじゃあねえと空は全員に向けてこう言った。

「ランパンについてなんだけど裏側については私知ってるから教えようか?」

『?!』

それを聞いてキンジ達は驚いていた、流石に中国の幾つかの輸送路を

持っているだけあってそれなりに知っているよと言うと空はこう説明した。

「ランパオって昔は海賊組織だったのが陸でも商売するために生まれれた組織で、

香港島と九龍半島の周囲を根城にしているって聞くよ、構成員は100万人。」

『100万人!?!』

それを聞いてキンジ達は驚いているが更に空はこう続けた。

「ランパンは企業・財界・教育・司法・政治に幾つも勢力があつて系列会社も

含めるとまあ大体がその程度だねえ。」

「100万人か・・・きついぞそれ。」

キンジは嘘だろと思つていますがと天草はキンジに向けてこう続けた。

「運がいいことにこの戦役では末端構成員まで戦う必要はありませんし

ここが敵の本拠地ともなりますと我々を既に監視しているという事も

考えないといけませんからここは2人一組で行動致しましょう、戦闘力が

あまりない松葉さんとそうでうねえ・・・仕方ありませんから僕とミシエラさんが空さんのお店の近くにあるアパートに入りましたよ。」

「悪かったわね戦闘力が無くて!」

「そしてカイズマスさんは・・・ダイアナさんすみませんが組んでくれませんか？洋上に足を使うのにダイアナさんの言語能力が

必要なので。」

「うむ確かに、我一人では交渉が難航しそうだしな。」

「ええ！ですが私はご主人様の・・・」

「・・・ダイアナ・・・頼めるか。」

「畏まりましたご主人様。」

「速！」

天草はキンジの言葉に対する問いに速いなと思っているとそれではと

気を取り直してこう続けた。

「クリスさんは詠さんと組ませましょう、狙撃が出来るクリスさんで監視させて詠さんは観光客の振りをさせます。そして遠山君はポーナさんと一緒です、

聞いた話ですと遠山君の腕のバンブルですが例のエイリアンと同じ武装が

使えるそうですので隠密戦も考慮した戦闘が出来ますからそれでいきますよう。」

良いですねと聞くと全員が了承してこう続けた。

「それでは行動を始めましょう、課題もありますので同時進行ですよ。」

天草がそう言ったと同時に作戦が開始された。

そう聞くと空がこう答えた。

「ああねえ、晩御飯まだかなあつて思つて作つたから皆で食べよう
と

思つてねえ。」

迷惑だったかなと聞くが天草はいいえと答えるとそれじゃあと
言つて

2人共はいると持つてきた中華で食事を始めた。

「ここにすね。」

「はい。」

「明日お迎えに参りましょう、孫が暴走しないうちに。」
そう言つて監視している・・・諸葛が笑いながらそう呟いた。

武藤と出会う

次の朝、キンジ達は武器の点検班とランパオのメンバー索敵をしている中キンジはポーナと共に回っていると大衆食堂なのだろうごつちやとした中で……

キンジに声をかける声が聞こえた。

「ようキンジ！お前もこっちだったのか!!」

「……武藤か。」

キンジはそう言っつて武藤を見ると4人で20人前分食べている中でこいつら

観光客としては鴨なんだなあと思っつているとその中で巨漢で肥満体質の男性が

キンジに向けてこう言っつた。

「遠山も、一杯食えよう。残したら貰うぜ〜。」

「悪いな、もう既に食事は終わっつてる。っつて言うかお前いい加減にしろ、

前の身体検査でお前殆ど赤で下手したら来年には病院治療だぞ。」

「うるせえー俺はこれくらい食べなきゃ仕事なんて出来ねえんだよおばちや〜くん、飲茶お代わり〜〜!」

「……言っつても駄目だな。」

そう言っつているがキンジは彼に対してこう続けた。

「(こいつは平賀さんが『高額で時間はかかるがどんな超兵器でも調達』するのに対して『安斎』の場合は『よく使われる装備を早く、安く、確実に調達』と言う

コンセプトであるためある意味対照的なタイプだなと思っつているとそっういやあと

武藤はキンジに向けてこう聞いた。

「そっういやお前平賀さんに難問レベルの武装をやっちまっつたようだな?」

「あああれか、……もしかして平賀さんアンタ出所」

「言っつてないのだああっつて言うか出所何て私も知らないのだああ

!!

「そーいやあそーうだつたな・・・で？解析はどのくらい進んでるんだ？」

キンジがそう聞くと平賀はこう答えた。

「もう少しわかりそうなのだ、武器もそうだけどあれが使われてるパーツ何て

未知の物が多すぎて代替えするにも時間がかかるのだ。」

「そうか・・・まあ何時でも良いんだ、けどちゃんと返してくれよ。」

「分かっているのだから、けど解析が終わってもその後のライセンス代金の交渉は

少し安くしてほしいのだ。」

そう言っていると武藤はキンジに向けてこう聞いた。

「そーいやあお前今何処に泊ってるんだ？お前が香港のホテルに泊まってるって情報が無いんだけどよ？」

そう聞くとキンジはああなど言っただけでこう続けた。

「俺今前に潜入捜査した学校の後輩の姉が経営している店で住み込みで働くのを条件に住まわせて貰ってるんだ。」

「へえ・・・お前まさかその子とデキてるんじゃないやねえよな？それだったら

俺は今すぐお前を・・・嫉妬で殴り飛ばせそうだ。」

「いや嫉妬かよってねえよそんなもん！」

キンジがそう言っただけで反論して言い返そうとしたときに・・・声が聞こえた。

「キンジさー！ーん！こんな所にいたんですね、探しましたよ。」

そう言っただけで現れたミニスカチャイナ服を着た翼が現れると全員が・・・

特に男子勢は翼の格好に鼻息荒していた。

「おいお前ら、直ぐにどっか行け。これは見世物じゃねえぞ！」

キンジがそう言うのを聞いて大衆食堂にいた男性人たちが慌てて食事に戻るが

武藤と安齋は近くの為ポカ〜くんしていると平賀と鹿取はニコしながら・武藤と安齋の首を絞めると2人がうぐぐぐと息が出来ないと言っている

『鹿取』は安齋に向けてこう言った。

「あんたらその鼻を下の息子共々へし折って再起不能させるよ。」

「……………!!!」こくこく

安齋はそれを聞いて頷いているとそうだねと『鹿取』は締技を解き放つと

平賀に対して『鹿取』はもういいよと言って解き放させようとする
と武藤が・・ガクンと失神したのだ。

「ありやま、まあ良いけど遠山。あんたまたとんでもねえ美人さん
と

出会ってるねえ、そのポーナさんも然りだけど他にもいるの？」

『鹿取』がそう言うど何でだよとキンジがそう言うが『鹿取』は
速く答えなどと言うとキンジは仕方ねえと言いながらヴェルカ達の
事を説明した後に『鹿取』はへええと言いながらこう続けた。

「全くとんでもないビッグメンバーじゃないかい？然もロシアの国
防大臣と

日本の警察の上役が揃いも揃ってあなたのスポンサーになりたい
なんて

全くあんたは予想外だねえ。」

そう言っていると『鹿取』は翼を見てこうも聞いた。

「で？あんたはその女キラー」

「誰が女キラーだ！」

「……………こいつと何かしたのか？」

そう聞くと翼はええとと云ってこう続けた。

「私はキンジさんに君塚会・・皆さんは知っているとありますがやく
ぎでしたが潰れましたが私キンジに頼んでそれに助けてもらってえ
えとそれでその・・何か恩返しできないかなと思ってそれでその・・

／／／／／

そう言いながら赤面しているのを見て『鹿取』、平賀、ポーナは

こう思っていた。

「(「あ、これは完全に落ちている。」)」

そう思っているの外で何やらがやがやと声があるので何だと思っ
ていると

現れたのは・・・諸葛であった。

「お前は・・・諸葛！」

「お久しぶりです遠山キンジ君、君を招待しに来ました。ああ貴方
方もどうぞ？私は歓迎いたしますよ。」

それを聞いて全員やったーと言っているとキンジは諸葛に向けて
こう聞いた。

「それは・・・他の連中・・・仲間も良いか？」

「構いませんよ、寧ろお仲間さんが来るんでしたら大歓迎ですよ？
腕が強い人たちは大歓迎ですよ。」

そう言っていると翼を見てこう言った。

「ああ貴方もどうぞ、お姉さまも良いですよ・・・わがランパオの要
塞に。」

いざ敵の城へ

キンジ達は武藤達を引き連れてリムジン・フォード・リンカーンに乗ると

その背後にあるもう一台の黒い車を見てあれなんだと思つていと諸葛が

こう答えた。

「あれに乗っていますのはアリアさん達ですよ。」

「あいつらも来てんのかよ!?!」

「はい、殻金を持っているから香港に来なさいってメールしたらいの一番に

こちらに来て直感だけで私のいるランパオが経営している店に直接お仲間様と

乗り込んで・・・」

「・・・・・・・・」

キンジは車の中でぐくりと唾を飲んで諸葛は・・・あつけからんとかう答えた。

「孫にコテンパンにやられまして昨日迄私達の支部の一つに監禁させてもらいました（笑）。」

それを聞いてキンジ達全員がずでつと転ぶ感じがした中で車が動く諸葛は

こう説明した。

「あちらの君塚の店主から聞いていると思われませんが私達は既にこの香港を

ランパオが殆どその手に収めていますので日本ともコンタクト取

りつつ

香港だけではなく中国全土に流通網を表裏関係なく人脈を広げています空さんと

業務提携したかったのですが部下共が勘違いしていましたね、交渉ではなく

命令口調であれやこれやらやっていますよこの間私がお灸をすえた後に中国の

片田舎に頭を冷やしにいかせてますからもう大丈夫です。」

諸葛がそう言うのとキンジは諸葛に向けてこう聞いた。

「そう言えばだがお前らが送ってきた中国武偵だが」

「ああ、ココ三姉妹ですか？彼女たちでしたら頭冷やさせるために今はドイツのカツエさんのいる魔女連隊で雑用仕事させてもらっていますよ。」

何せ中国武偵局には中国共産党黨員もいますから党の面子を潰されたからと

言われて彼女たちの資格を四女を除いて全員が国外追放とは名ばかりの

スパイ仕事として裏社会に送られました、今頃は不得意なドイツ語を

勉強しているでしょうね。」

ハハハハと笑っているがキンジは待てと言ってこう続けた。

「四女・・・あいつらまだ家族がいるのか?!」

そう聞くと諸葛はこう答えた。

「ええ、装備の点検や売買を主にした裏方ですが交渉技術は

なかなか良いのですが貴方が来ると聞いて何やら企んでいるのですがまあ私が

いますから大丈夫でしょう。」

ハハハハと笑っているがキンジは勘弁してくれよと頭を悩ませていた。

下手したら闇討ちされかねないと今のうちに武器をチェックするかと

考えている中キンジ達は香港島西部に来た。

ここは急峻すぎて人家が建てづらいことからプライベートビーチが

多数存在しており中には山の中にシエルターを造って政府高官が避難先兼

遊び場として使っているようだ。

そして日が傾き始めたころキンジ達は『深湾遊艇會（シャンワンマリナー）』と言うヨット・ハーバーでリムジンから乗り換えて船に乗ると諸葛はこう説明した。

「聞いていると思われませんが我々ランパオは起源は海賊です、その為最初は

小さな無人島から始まって今では皆様がいる学園島と同じメガフロートの小型版『マリネフロート』となっております。」

そう言いながらほらあそこですよと諸葛の言葉を聞いてキンジ達は其処に

目を向けて・・・啞然としていた。

「おい・・・何だあれ？」

「あははは・・・何でしょうね・・・。」

「眩しくてサングラスが欲しいわ。」

「前に来た時もそうだったがいっつも見ても慣れないな。」

「あれ全部でもやし・・・何億個分あるのでしようか?!」

「貴公が気にするのは其処なのか?!だが我が家にもああいうのはあるがな、

少し控えめだが。」

「ご主人様・・・凄すぎです。」

「何て言うか・・・成金趣味ね。」

「君塚でもあんなの建てませんよ。」

「苦情が出そうだよねえ。」

キンジ・天草・松葉・ミシエラ・詠・カイズマス・ダイアナ・ポーナ・翼・

空の順でアハハと乾いた笑みを浮かべるが仕方あるまい。

何せランパオ城は・・・豪華絢爛で成金趣味拔群な建築物なのだから。

洋上にどっぴり浸かる3階建ての巨大な建築物で屋根瓦は藍色、優雅に反った棟に鯨ではなく金色の中国龍、外壁は朱色を基調に薄青緑・白・金で彩っておりそのほぼ全面には龍・虎・亀・鳳がびっしりと施されていた。

するとその部分を見て天草は諸葛に向けてこう聞いた。

「諸葛さん一つ宜しいでしょうか？」

「はい、何でしょう？」

「あそこにある龍とかですがあれは四聖獣を模って魔術的な防護壁となつているのですよね？」

「ほお・・・何故そこがお分かりに？」

「簡単です、反った棟の龍。金色なのは金運向上。朱色は鳳、つまりは朱雀。」

白は白虎、薄青緑は玄武、金は青龍、本来でしたら蒼を基調とすべきですがこれは八卦などで運勢等を向上させるもの。龍は幸運を呼び残りの三体が守護、青龍が

守るはずの東側が入り口という事はあそこは守護する価値はない、そうなれば

残るは3つ、それが守る場所という事で良いでしょうか？」

「・・・素晴らしいですお見事、遠山様はどうやらお仲間様に恵まれて

羨ましい限りですねえ。」

諸葛はそう言いながら船でランパオ近くまで行くと周りにあつたのは・・・

仰々しい程の船舶と護衛用船舶の数であつた。

民間ボートから四角の帆ジャンク船、水上警察警備艇までもが往来していた。

香港においてここがどれほど重要なかは理解できそうであつた。そしてタグボートに着くと諸葛は全員に向けてこう言った。

「ようこそ、ランパオ城へ。」

ランパオ城に来た

「さあどうぞ、御入城を。」

諸葛がそう言う入り口の左右に飾られている龍の像からチャイナドレスの女の子2人が入り口を開けると同時に屈強な男たち2人が何人か現れてキンジ達を船から

優しく降ろして貰い諸葛の案内の元着いて行き玄関ホールに入ると

そこにあつたのは・・・象牙・翡翠・珊瑚の彫刻が天井に埋め尽くされていて

更に奥に進むとヴィクトリア湾が一望できると言われる2階の貴賓室に案内されるとキンジは廊下を見て・・・驚いていた。

「うおおお・・・。」

「これはま・・・。」

「贅を尽くしてるってこの事よね。」

キンジを始め、天草・松葉がそう言うってその光景を眺めていた。

大理石の床には柄付きの赤絨毯が敷かれていて円柱には黄金の龍が

螺旋を描くかのように立派に飾り付けられており鏡張りの壁には朱色の彫刻が

重ねられており目がチカチカするので上に視線を向ければ鳳凰を模った

金色のシャンデリラが紅い紐飾りと共に垂れていた。

「・・・もういい加減にしてほしいものだ。」

ミシエラがまるで勘弁だと項垂れていた。

そして貴賓室に辿り着く前に諸葛は全員に向けてこう言った。

「それでは皆様お洋服ですが中華式のを用意しておりますのでそれに着替えてからそれでお入りくださいね。」

それではと諸葛が立ち去ると貴賓室の隣の部屋を見ると確かに色々と・・・服が合った。

「それじゃあ・・・着るか。」

キンジの言葉を聞いて全員着替えた。

そして全員着替え終わると男性陣は女性陣の服装に……とおおおと

(特に武藤) 鼻息荒していた(キンジ・カイズマス・天草は違う)

レキは中国の時代劇に出てくる高貴な身分の子女っぽい服装

ミシエラはチャイナドレスだが膝が丸見えでミニスカートだったのが嫌なのか

うろううと前かがみになっていた。

松葉は桃色、詠は緑色、ポーナは黒色、空は青色、理子は藍色、白雪は緋色、

鹿取は茶色のチャイナドレスであったがダイアナと翼は……規格外であろう

とんでもないものであった。

ダイアナは下乳の谷間が露出している特注型のチャイナドレス

そして翼は……無かったのであろうが早急に特注で仕立て上げた白色の

ウエディングドレスを合わせたかのようなチャイナドレスを着ていた。

キンジはあああと……翼を見てこう聞いた。

「お前……其れなんだ？」

そう聞くと翼はええとと言ってこう続けた。

「これはその……普通でしたら特注なんです……時間がないからと

言われてあり合わせで御免なさいと言われて私のチャイナドレス

を合わせて……この間結婚式があったらしくて……其れでこれを。」
「……そうか。」

キンジはまあそうだよなと言って頭を抱えているとダイアナが……
こう聞いた。

「ご主人様……その……どうでしょうかこの格好。」

そう聞いて前かがみになるとキンジはええとと言ってこう答えた。

「あ……ああ、似合ってるぜ（こっからだと胸の谷間が見えないか
ら

平気なんだよなあ）」

下から見なければなと思っているとキンジはアリアを見て……
ほっとしていた。

見た目完全にココ三姉妹と同じ格好で子供っぽいからだ。

そしてキンジはここで待つようにと言われているので座るとカイ
ズマスは

キンジに向けてこう言った。

「さてさて、我らの運命はどう動くのであろうな？」

「さあな……だが武藤達は序だと思いが神崎達も一緒だとすると
やっぱり緋弾関連だろうな。」

「緋弾か……それを巡った戦……制限時間付きのこの戦は勝てる
と

思うか？」

「……それでも何とかするしかねえだろ。」

そう言っていると諸葛が現れて……こう言った。

「皆様準備が整いましたのでどうぞ。」

そう言う声が聞こえてキンジ達は全員移動した。

『うおおおおおおお・・・凄い。』

キンジ達はそう言って呆然としていた。

目の前にあるのは・・・満漢全席であった。

中国全土に伝わる御馳走が全部出る至高の贅を尽くしたメニューである。

テーブルの上には次々と山海珍味が載り始めて手が込んだ香りからして

旨そうであった。

然も諸葛の指示であろう日本人の口が合わないような除外してあった。

「サービス精神が結構ありそうだな。」

「そうだな・・・毒は無いのだな諸葛？」

「ははは、でしたら毒見役を用意いたしましょうか？皆様の食事分が

減りますが？」

諸葛が笑いながらそう言うのと安齋が・・・慌てるかのように言った。

「そんなの反対だ！俺達が全部食おうぜ!!」

そう言っしてしゅばつとその体系からは考えられないようなスピードで向かうと

その机には・・・既にアリアがもふもふともまんを食べていた。

「・・・ねえキンジ、一つ良い？」

「何だよポーナ・・・。」

「あいつらってさ・・・緊張感無いの？」

「ああ・・・全然だな。」

キンジの言葉に阿保らしいねと言いながら席に着くと諸葛が全員に向けて

こう言った。

「それでは皆様、わがランパオ城へようこそ。もうすぐクリスマスです……」

ゆるりと楽しんでください。」

そう言つて乾杯と言つと全員も乾杯して食事が始まった。

諸葛を見つける

乾杯した後からほとんど全員が飲み食いしていた。

まあキンジ達の方は少し警戒していてミシエラと翼、空、ダイアナ、ポーナ、

天草・松葉、カイズマス、詠は少しずつ食べていた。

無論キンジも同じでそっちはダイアナが取った食事を貰って食べていた。

然しアリア達と武藤達は違っていてがつついておりこれは駄目だなど思っている。と理子が何やら朱塗りの瓢箪から切子グラスにジュースを注いで飲むと理子は大声で

こう言った。

「うわああああ！これ超美味しいー！！」

そう言いながらまたもやとくとくと注いでいるのでマジかよと武藤達も注いで

飲むとうおおおおおと言いながら飲みまくっているとそれを見ていたアリア達も飲み始めるとキンジはそれを手に取って匂いを嗅いでいると空がキンジに向けてこう言った。

「それ見せて~~~~？私が飲んでみるから。」

そう言うってどれどれと言って空が少し注いで飲むと空はああこれかと言って

こう続けた。

「これ『藍莓酒（ランメイチュウ）』って言うってお酒だから

飲みすぎない程度に飲んだほうが良いよ〜、さもないと・・・あなるからね。」

空がそう言うって指さすとそこで見たのは・・・酷い光景であった。

「ういえええええん！白雪が虐めるくく！」

「このピンク武偵がくく！きんちゃんは渡すかごらああ!!」

「……」くらくら

「あひやひやひやひやうおおお世界が回るくく！」

「もともつとご飯出せくく!!」

「ぐくくくく。」

「おらおらおら暴れろお前らー！ー！」

「……駄目だこいつら。」

キンジはそう言って飲んでしまつて悪酔いしたアリア達と武藤達を見て

呆れていると理子はと言うと……。

「うおほほほほほこれは面白いですなああ！」

大笑いしながら撮影しているのを見てこいつら駄目だこりやと思っていると

キンジはどうしようかと思っていると天草に向けてこう聞いた。

「天草、済まねえが俺とポーナはちよつとばかし隠れて行動するか
ら

他の皆はこいつら……頼むわ。」

そう言うのと天草は素面面である理子に向けてこう聞いた。

「理子さん、貴方は……酔ってないですよね？」

「……(*、σー、)エへへばれたか。」

「すみませんが彼らを何とかするのを手伝ってください、僕たちは

ちよつと

遠山君達のサポートしなければいけないので。」

そう言うとなかなかないと聞いてこう続けた。

「それじゃあさ、お正月はりこりんと一緒に過ごしてほしいんだけど?」

「・・・分かりました、でしたら正月はゆつくりと教会のミサで信者たちと」

「ぶつぶー!りこりんはしーくんと!2人で!!過ごしたいの?!」

「・・・ミサが終わってからで宜しいですか?」

「うん!」

それを聞いてよっしや働くぞー!と理子は猛スピードで向かうのを

見届けるとキンジとポーナはこの中で本当の意味で透明になれるため先ずは

部屋の外に向かおうとするとダイアナが前に立ってこう言った。

「申し訳ありませんが先ず私が部屋の外を見張りますのでそれから。」

そう言うて先ずダイアナが出てくると周りを見渡して・・・こう答えた。

「異常ありません、主様。本来でしたら私も行動を共にするべきなのでしょうがご主人様たちの目的を達するためには隠密行動が一番・・・武運を。」

「おおよ、お前も気を付けろよ。」

「ダイアナちゃんもね。」

そう言うて2人は外に出た。

「それじゃあだが・・・お前透明になる為にはあのスーツ着なきやいけないが・・・あるのか。」

「あるにはあるけどさ・・・覗かないでよ?。」

「覗くか!。」

キンジがそう言うのとポーナはむっとした表情で其の儘廊下の角に向かつて行って暫くすると全身を例の黒いぴっちりスーツで身を纏ったポーナと例の装甲を

身に纏ったキンジを見るとポーナがそれ?と聞くとキンジはこくりと頷くと同時に其の儘2人は透明化になって移動を始めた。

「それで?どこから見つけるの?。」

「先ずは諸葛を見つけるのが先だな、松葉にこの建物一体の防犯カメラから

ハッキングして調べさせてくれ。連絡は・・・俺がやる。」

「それだけでけどネット回線ハッキングだなんてやると先ずは配線からね、そこから新たにログインしたほうが良いわね。それじゃあやっつくから・・・」

気を付けてよね方が一の時にはクリスと詠を送っておくから頑張りなさいよ。」

そう言つて松葉が電話を切るのを確認すると其の儘幾つもの階段を昇りながら調査を始めた。

先ずは幾つもの部屋を確認しつつ行動をしていると松葉から通信が入った。

『今確認が取れたわ、諸葛はどうやら別棟ね。今いる場所とは違う棟に入るのが監視カメラから分かったけど後はあんたらの仕事よ、モニターでルート

確認しといたから後を頼むわよ。』

そう言つと切断されたがキンジはデータを確認するとポーナに向けて

こう言つた。

「ポーナ、こっから別の棟に行くぞ。諸葛は其処にいる可能性が出た。」

「私にも確認が取れたわ、行くわよ。」

そう言つと同時に2人は諸葛がいるであろう部屋に向かつて行った。

諸葛との対談

キンジとポーナはその後もう一つの棟にある建物に向かい内部に入って

諸葛の部屋を探そうとして・・・声が聞こえた。

「やつと来たやつと来た、お前たち侵入者だろ？」

「!!」

その声を聴いてキンジとポーナは揃ってその声が聞こえた方向に目を向けると

そこで目にしたのは・・・孫悟空であった。

「孫悟空・・・!!」

「見えないようにしているようだが見える、殺気を感じるぞ？」

もう少し気配消せ。」

そう言いながら胸ポケットから小さな・・・爪楊枝の様なものを出すとそれを宙に飛ばした途端にどんと大きくなって・・・棒になった。

「何・・・それ。」

ポーナがそう呟くと孫悟空はにやにやと笑いながらこう続けた。

「これ如意棒、私の武器。お前たち・・・倒す。」

そう言っつて構えた瞬間に・・・新たに声が聞こえた。

「駄目ですよ孫さん、このお方たちは私のお客さんなんです？」

「!?!」

ここでまさかと思って視線を向けたその先にいたのは・・・諸葛であった。

「何で・・・お前が」

キンジがそう言った瞬間に諸葛はこう答えた。

「ここは私が使っている棟ですので私がいることは当たり前ですよ？」

それとですが・・・こんな所で立ち話も何ですから部屋に来ませんか？」

「……………は？」

「さあどうぞ、ゆっくり寛いでくださいね。孫さん、ケーキは如何ですか？」

「食べる！」

諸葛の言葉に孫悟空はにぱーっと笑いながらそう答えるのを聞いて

それではと言って諸葛はコーヒーマーカーを……何と自分で操作していたのだ。

「私はコーヒーが好きなんです、最近では中国でも流行いたしました甘めですが私はこれが好きなんです。」

さあどうぞと言って手渡すとキンジは暫く考えて……飲むと確かに甘いなと思っていた。

無論ポーナも最初は怪しんでいて少し口を含むところを見てニコニコと

諸葛は2人に向けてこう言った。

「(・)・D　フムフムお二方は中々注意深く行動しておりますね、ですが私は

ここ迄入られた以上は何も小細工はしませんので堂々と事の様子を見守ります。」

諸葛はそう言いながら冷蔵庫からバウヒニアの花を模ったケーキを出してまるでパティシエみたいに更に盛り付けている中でキンジは諸葛に対する印象を

こう思っていた。

「(随分ひ弱そうな体系、髭もないしお姉系じゃない声高めの男性。それに服装や見た目にも気を配るところから見てもファッションセンスは良し、

それに家事だって得意そうだな周りの資料もそうだけど物だってちゃんと

置かれているしそれにこいつ鼻歌歌いながら作業して・・・

比較的温厚なのか?)」

そう考えていると諸葛はケーキを3人の前に出すと孫悟空は一目散に食べ始め

キンジは諸葛に向けてこう聞いた。

「あんた、俺達を招待して・・・何がしたいんだ?」

そう聞くと諸葛は暫くして・・・こう答えた。

「遠山キンジさん、私は貴方にこの香港ランパオの未来を託したいのです。」

「未来……どういう意味だ？」

キンジがそう聞くと諸葛はこう答えた。

「今香港ランパオは次世代に必要な素養を持つ存在が欠落しております、

その欠落した人間を手に入れるという意味においてこの極東戦役は私からすれば

まさに天の祝福に他ならないのです。」

「……何なのそれ？」

ポーナがそう聞くと諸葛はこう返した。

「カリスマ性です、相性や金銭で決まるのは中間管理職程度。普段は

どのような人物であれ 有事の際には人を導き、纏め、敵ですら味方に変えてしまう存在……それを遠山キンジさんは持っております。」

「高く見すぎだ、そんなもんが俺にあるとでも」

「貴方の武偵でのお仲間様は全員が強者、そしてジャンヌ、

そちらのポーナさん、クリスさん、ダイアナさん、メーヤさんと貴方は時には

敵として出会った出会った人間ですら今や味方となって戦う存在

を多く

保有しております。これでカリスマ性がないとは言い切れませんしトップは

それだけの懐を持っていなければやっていけません。中国共産党だってそういうカリスマ性の高いお方を頂点としております。」

そう言うってははと言いなからこう続けた。

「貴方には多種多様な人種・思想を一つに纏め上げそして未来へと歩める存在、私といたしましては貴方方とは今は敵対関係ですが同盟を結んでほしいと

思っています、あらゆる集団が一つの奔流となれば争う必要性は無くなり

恒久和平への道筋が見えます。そしてその起点として私は貴方に期待しているのですよ。」

それを聞いてポーナはああねと言ってこう続けた。

「それって中華思想って奴？だからこそ他国に対して色々とお金を渡して

有利に事を進めていたのね？全ては一つになって世界から争いを無くすという

願いの為に。」

不可能じゃないのと聞くと諸葛は笑いながらこう答えた。

「ハハハ、確かに不可能の様に聞こえますが我が一族は劉備玄德から代々『主と仰いだその人の作る世界を見たい』と言う思いが受け継がれております。ですから私は決めたのです・・・」

……貴方の作る未来を香港ランパオの皆に見せてやってくだ
さい。

お願いします。」

戦の前触れ

「……悪いがその話だがこのランパオを引継ぐ事に対して俺は断る。」

「そうですねか……まあ良いでしょう、私が貴方に対して聞いたのは只の確認です。私が貴方とお会いしたのは……こちらです。」

諸葛がそう言って懐から小さな螺鈿の宝石箱を出すと諸葛はこう言った。

「こちらがアリアさんの殻金でございます。」

「ー。」

諸葛の言葉にキンジとポーナが驚いていると諸葛は本物ですよと言って

こう続けた。

「ですがそれは既に結晶化していますので元に戻すにはそれ相応の手配が

必要になりそうですのでどうです遠山様、貴方がランパオを手に入れることが

出来れば人員についての問題は解決出来そうなのですが？」

「手前……交渉のタイミングが滅茶苦茶良いなって言うか初めからこれ狙いだろ？」

「（*?▽?）フフフツ♪、昔から敵地に入るのでしたら敵が交渉する際に最も

気を付けなければいけないのは相手が最も欲しいものを出してか
らが

厄介なのですよ?。」

諸葛は笑いながらそう言っていると諸葛は更にこう続けた。

「それに今我々ランパオにとってこの極東戦役は只の抗争の一つに過ぎません、

その他にも対処すべき案件は沢山あります。それにこの戦役は長引けば長引くほど

中国全土から何人でも敵の将兵が来てしまう、そうなれば彼らに支

払う報酬は

計り切れるものではなくこの場合は講和が良作なのでしてそして今後の事を考えて貴方にランパオを率いてもらいたいのです。」

どうしますかと聞いて面倒くさいと思っているとキンジはこう返した。

「・・・一先ずは同盟で良いか？」

俺達とランパオのと聞くとフ〜と考えて暫くして・・・こう答えた。

「良いでしょう、我らランパオは貴方方金龍と同盟を締結しましょう。」

そう言つて螺鈿の宝石箱を手渡そうとして横から・・・孫悟空が現れて

それを奪つて行つた。

「てつめえー！」

「何するのよ?!」

「孫・・・何する気なのでしょうか？」

諸葛は低い声でそう聞くと孫悟空は知れた事と言つてこう続けた。

「遠山キンジ！我はあの時からお前と戦いたかつた!!今こうやつて戦う機会が巡りあつて戦わない・・・我慢できない!？」

そう言つて孫悟空は武器を構えると諸葛は溜息付いてこう言つた。

「すみませんが遠山さん、ここは私があれば」

「いや・・・孫悟空、手前の誘い・・・乗つたぜ。」

「!!」

それを聞いてポーナと諸葛は目を見開いて驚いているとキンジはこう続けた。

「正直な話こいつは多分俺が戦わないとあれを手渡す気はなさそうだし

それに・・・此の儘じゃあ埒が明かなさそうだしな。」

そう言っていると仕方ないと諸葛は溜息付いてこう言つた。

「仕方ありません、ならば屋上に行きましよう。あそこでしたら誰にも近づくとはありませんから。」

そしてキンジ達は屋上に辿り着くと孫悟空はキンジに向けてこう言った。

「それじゃあ遠山・・・やるか。」

そう言つて棒を振り回すとキンジは竹刀袋から日本の刀を抜いた。

「そいつは確か・・・お久しぶりな鎧竜『インクルシオ』。」

「!・・・こいつの事を知っているのか?」

キンジがそう聞くと孫悟空はにやりと笑つてこう答えた。

「そうだ、そいつは異界から倭の国にやってきた異形の龍。その力は

あらゆる環境に適応しあらゆる事象すらも己のものにすることが出来る神の如き

暴竜。それをお前の始祖はそいつを都にて病をばら撒いていたところを打ち倒し

その肉体をこの世から排除しようと考えていたところを邪法を極めし

刀鍛冶によつてその骨を砕き、その命を刀身に宿して生まれたのがその鎧竜剣であつたがその意思は最早・・・無きに等しいな。刀身を

分かつてしまったがために本来の力は失われ只の刀に成り下がっているのが

分かるな。」

「そうか・・・こいつはもう。」

キンジはそう言つて鎧竜剣を見てそう呟くと孫悟空は仕方ないと言つて

こう続けた。

「鎧の方は前に見たあの鎧は持つておるか？」

そう聞くとキンジは腕に付けてあるバングルを見せつけると孫悟空は

こう続けた。

「よしそれを纏え、少なくとも我は一方的な勝負は好かん。」

それを聞いてそうかよと言いながらキンジはバングルに向けて力強く

感じようとして其の儘・・・プレデターの鎧を身に纏つた。

「ほお・・・異界の力の次は異なる星の鎧、お前たちはどうやら異なる力を

引き付ける事に関しては血の宿縁の用だ。」

そう言いながら孫悟空は棒を振り回しながらこう続けた。

「我は今まで多くの猛者共とやりあつた、呂布、張飛、趙雲、関羽、夏侯惇。

多くの強者がごまんといる中我は生き抜いて戦い抜いた、じゃから初めて

出会つたときに直感したんじゃ。お前は間違いなく我を楽しませてくれると。」

そう言うとおあそうだと言つてある刀をキンジに見せつけた。

「これは嘗て我が日の元にいた時に手に入れた妖刀・・・歴史から忘れ去られた刀鍛冶が造りしこれは鎧竜剣を造りし者と一緒・・・さあやろうぞ遠山キンジ・・・我らの戦を！」

そう言つたと同時にキンジは恐る恐るだがそれをとに取つたと同時に・・・

『ほお……お前さんが儂を起こしたのか？』
声が……聞いたことない声が聞こえた。

刀との語り

「何だ・・・今のはってここ何処だ!？」

キンジはそうやって周りを見渡していた、暗い暗い漆黒の世界、そんな中で

とある男を見つけた。

時代劇に出てきそうな服装を着た大柄な男性がそこに立っていたのだ。

「ほほう、お主儂に会いに来たのか？嬉しいのう。まさか数百年ぶりに使い手が

見つかるとはこの『鍔』に儂の意識を憑りついたかいがあつたものじゃわい。」

飄々な口調でそう言いながら男はキンジの持っている双剣を見てこう言った。

「ほほう、儂の変体刀『命刀（鉈）』を持っておるのかお主は？」

『命刀（鉈）』・・・この鎧竜剣の事か？」

キンジがそう聞くと男はそうじゃと言ってこう続けた。

「それは儂が『源 頼光』が討ち倒した異形の龍を使って出来た

番外式変体刀じゃ。」

『源 頼光』!?!なんてそんなのが家にあるんだよ!そんな国宝級の刀が

何で!？」

キンジはそう言って慌てているとはははと男は笑いながらこう答えた。

「それはお前、お前の家が『源 頼光』の一族の者じゃからじゃないのか?」

「いやいやいや待て!俺はそんな事兄さんから聞いたことがねえぞ!!家は

遠山家で江戸時代位に始まった」

「成程のう・・・ならば母親方の血筋ならばどうじゃ?」

「母さんの・・・血筋・・・?」

「まあ良いわい、丁度退屈しておったしここら辺でその体を・・・と言いたい」

お前に憑依する前にお前さんが今纏っておるこの鎧には刀鍛冶として

絶大な興味がある。」

「お前今物騒な事言ってなかったか!？」

「気にするな、この鎧は異国と言う次元ではない。異なる技術を持つ異なる星から現れた異形のこの力に儂は興味を持つ、どうじゃ『命刀（鉋）』の使い手？」

儂と取引せんか??無論お主の体を乗っ取るといったことは一切せん。」

どうじゃと聞いてキンジは少し警戒していた、刀の事も然りだが何故その刀鍛冶がここにいるんだと思いつながらこう聞いた。

「幾つか聞いて良いか?」

「良いぞ良いぞ、今まで暇じゃったんじゃから何でも聞け聞け。」

「じゃあ第一だが何でお前がここにいる?大昔の人間が何で?」

そう聞くと男ははははと笑いつながらこう答えた。

「簡単じゃ坊主、今お前さんが持つとるこの『毒刀（鍔）』には儂の意識情報を取り込ませとるんじゃ。」

陰陽術でなと言うとマジかよと思いつながらこう続けた。

「陰陽師ってそんな事ツて言うかお前刀鍛冶がじゃなかったのかよ?」

「ははは、儂は刀鍛冶ではなく陰陽師。刀鍛冶は序で儂の本文はただ一つ・・・」

……歴史の改編じゃ。」

「歴史の改編……だと……！」

キンジはそれを聞いて何言ってるんだと思っていると男はこう返した。

「簡単じゃ、儂は陰陽師としてこの国の未来を占った際に幾つもの未来が

見えてしもうた。戦争、革命、そして世界の未来が見えた時に日本が誤った道に

進まぬように儂は幾つもの刀を造った。そしてそれを何千男百と言ったそれを儂の子孫たちに伝え日本全域にばら撒かせた、全てはこの国の為と言う大義名分の為に放ったそれは何時の間にか他国に流れておる。取引と言うのはお主に世界中に散った数ある中でも厄介な12本の完成形変体刀を回収してもらいたいのじゃ。」

取引がそれなと言うとキンジはこう続けた。

「そしてお前は俺の体に乗っ取らないって条件か？」

「その通りじゃ、それに加えてこの分かたれた『命刀（鉋）』の機能を

元に戻させるといっておまけ付きでじゃ。」

「!!・・・そんなことが・・・可能なのか・・・?!」

「可能じゃ、儂はこの刀を造った。儂は無理と言う物が嫌いじゃから何でも

造り切ったのじゃから。」

ははははと言って笑っているがこれが天才なのかもなと思いがらキンジは

こう続けた。

「・・・分かった、依頼を受ける。インクルシオが直るんなら成立だ。」

「おおありがたいありがたい！それじゃあ回収してもらいたい完成形変体刀の

名前はこうじゃ。」

①あらゆる鉋物を取り入れ混ぜ込み折れることも曲がることもない『絶刀 鉋』

②抜刀術に特化した『斬刀 鈍』

③大量生産である刀を全て同性能にした『千刀 ？』

④薄く軽く脆いがそれ故に使いこなせば超一流であることが証明される

『薄刀 針』

⑤全身を西洋式鎧で包み込んだ防御性に優れた『賊刀 鎧』

⑥刀の中で最も重く刀と言うよりも刀に似せた金槌に近い『双刀 鎚』

⑦大量の電流を刀身に纏い突き刺せば持ち主の体の身体能力を上げる

『悪刀 鏹』

⑧絡繰り技術を応用して造り上げた人型の全身刀の『微刀 釵』

⑨霊峰富士にある霊木を削り取って打ったと言うよりも刀に似せた木刀

『王刀 鋸』

⑩持ち主の中にある心の刃を収め、自らの荒ぶる意識を鎮めさせることが出来る『誠刀 銚』

⑪2つで一つ、拳銃型で片方はリボルバーでもう片方はマガジン式の二丁拳銃『炎刀 銃』

⑫人を斬らず物や武器を破壊することが出来る『透刀 鉄』

「以上となる、世界中で散らばっておるこれら全てを日本に戻せば後は

お前がどうするか決める事じゃ。」

「良いのかよ？俺はそれを壊すかもしれないぞ？」

「構わん構わん、俺は依頼をするがようは悪用されんようにすればそれで良いのじゃ。壊れようが何しようが後はお前さん次第じゃ。」

そう言うときとてと言ってキンジに向けてこう言った。

「さて、『命刀（鉋）』を直そうかのう。」

「どうやってだ？お前死んでんだろ？」

キンジがそう聞くとははははそうじゃなと男は笑ってこう返した。「確かに死んだるが意識だけじゃからやれることもあるのじゃ。」

そう言うときとて男はキンジに向けてこう言った。

「さて、お前は目覚めてまず初めにやるのは『命刀（鉋）』を使う事じゃ。」

それと同時に『毒刀（鍔）』を解放して俺に・・・

「. . .あの鎧と融合させる。それでこやつは意識を取り戻すの
じゃ。」

戦い

「あの鎧か・・・そう言えばお前あれに興味があるって言ってたな。」
「まあな、儂は探求心が強いものである。見たこともないあれを感じたいからな、それで・・・伸るか反るかお主が決めれ。」

男がそう言うときンジは暫くして・・・こう答えた。

「・・・分かったがお前を信じることは出来ねえ、・・・力は借りるし

依頼をこなすことは約束する。」

「良いじゃろう、依頼料は回収した刀の所有権の譲渡。これで成立じゃ。」

そう言つて手を差し伸ばすとキンジは・・・手を出さずにこう返した。

「さっき言ったけど俺はお前を信頼してねえからな。」

「よいよい、所詮は利害関係じゃから。それでは・・・始めよう。」

そう言つて世界が白くなり始めるとキンジはそう言えばと言つてこう聞いた。

「そーいやああんたの名前は一体!？」

そう聞くと男はこう答えた。

「儂の名か？儂の名は・・・」

・・・『四季崎 季々』。それが儂の名じゃ。」

そう言つて再び視線が元に戻ると目の前にいたのは・・・孫悟空であつた。

「ほう、儂相手に意識を飛ばすとは・・・舐めるなよ小童。」

孫悟空はそう言つて前に出て棒で攻撃しようとするもキンジはそれに対して

背面部から短い棒が出てくるとそれがいきなり長くなつてキンジの

身長ほどもないが双剣の如き槍が出てきてそれで防御したのだ。

「ほう・・・これを防ぐとなると・・・奇!!」

そう言つて孫悟空は回転蹴りで後頭部を打ち込もうとすると今度は刀の峰で

防御すると其の儘弾き飛ばした。

「これすらも受け止めるとなれば・・・本当に面白いのうお主!」

そう言つて孫悟空は棒で屋上の床を突いて駒の様に回つて・・・こう言つた。

「旋斧廻剋(シャンフーフイエーン)!」

そう言つて飛び蹴りするかのようになりながら向かうとキンジはそれを鎧で

防ぐとへえと言いながらこう続けた。

「これも防ぐというのなら・・・使うかのうこれを。」

そう言つて孫悟空は印を結ぶかのように手を動かして暫くすると・・・

こう言つた。

「では行くぞ・・・これが儂の本気じゃ!」

そう言つて何やらむくむくと成長し始めて・・・10歳くらいの少

女からキンジと同年の女に姿を変えた。

スタイル的には白雪とためが張れる程に姿を変えておりその黒髪は腰まで

長くなっていた。

にやりと笑った成長した孫悟空はキンジに向けてこう言った。

「これが儂の本気じゃ、お前をここで確実に殺すために己の体を成長したが

この体には・・・ヒビイロカネが入っておる。」

「あいつと同じか！」

「そうじゃ、そのせいでこ奴の体は10歳で成長を止めてしまうたがその間に

儂の妖力を注ぎ込みこの力を得ることが出来た。じゃがこの体は一時的なもの、

制限時間付きでそうじゃなあ・・・7分が限界。おっと、服は殆ど意味がないから新しくしないとな。」

孫悟空はそう言っただうしようかのうという・・・諸葛がこう言った。

「これならどうでしょう？私が用意しておきましたから。」

「お主・・・その体になってから未来予知らしきものが出来るようになったのか？」

「まさか、万が一に備えてです。」

「そうか・・・まあ良いじやろう。」

孫悟空はそう言っただ新しい服、チャイナドレスを着るとにやりと笑って

こう言った。

「それでは・・・続きと洒落こむぞ。」

「ああ・・・そうだな。」

キンジはそう言っただ槍を投げ捨て鍔を構えると刀から・・・声が聞こえた。

『遠山よ、儂の準備は既に出来ておる。さあ・・・始めようぞ。』

「分かった・・・やってくれ。」

キンジの言葉と同時に鎧竜剣……いや、命刀（鉋）の双剣が輝くと

キンジは孫悟空にこう言った。

「孫悟空、手前がそうするのなら俺も……こいつを使うぜ。」

そう言ってキンジは鉋を構えると孫悟空は笑ってこう言った。

「馬鹿かお主は？それは最早使えんと言ったはずじゃが？」

「やってみなきゃあ……分からねえだろうが！」

キンジはそう言って剣を構えて……こう言った。

「インクルシオーー!!」

そう言う声を発したと同時に背後から……インクルシオの鎧が現れると

鎧の口が裂け始めて目の部分が複眼と変わった。

そしてぐおおおおおおおお！と言う声が聞こえるとそれらがキンジの体に

纏わり始めたのだ。

シャールックホームズ戦の時とは違う……新たなる鎧であった。

全身は漆黒の鎧

胴体は剣を更に鋭くしたような翼

両腕には小型の盾の様な形状をし両手には双頭の剣が付いた武器
両足にはリボルバーが付いており更に進化したのであろう腰には
マガジンみたいな武器があった。

そして頭部にはインクルシオの顔がまるで龍の如き形状となつて

いた。

「それが新たななるインクルシオ・・・常に環境に適応しようとして己の体を

造り変える正に今の己のようじゃのうキンジ？」

そう言つて棒を振り回して構えるとキンジも両腕の武器を構えた。

「それでは・・・第二試合とするぞー！」

「そんな時にはお前は倒れてるぜ。」

キンジはらしくねえなど思いながらと同時に・・・互いに攻撃が始まった。

闘い

成長した孫悟空の攻撃は手足が長くなり攻撃範囲が広がっただけではなく

格闘におけるパワーも上がっている。

その蹴りや拳から来る攻撃力は格段に向上し其の強さは例え強化装甲を

身に纏ったとしても普通に考えたらそれ事貫かれて終わりだろうが今のキンジが

纏っているインクルシオは・・・只の強化装甲ではない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「はあああああああああああ!!」

キンジと孫悟空との決闘は正に死闘である、今のインクルシオは

毒刀・鍍の能力。

・・・憑依によりインクルシオには四季崎 季々の意識はインクルシオが

残っている分かたれたことで消えた魂がブーストされただけではなくその武装も

インクルシオの能力である適応により強化された。

今までは腕部と脚部にあったリボルバーは消えて脚部しか無くなった代わりに

その両腕には小型の盾を使って防御すると持っている空となった鍍と同化した

双頭の剣の槍で攻撃すると孫悟空は持っていた棒で防御するがその棒は・・・

斬り落とされたのだ。

「ほう……ならばー」

孫悟空はそう言つて少し位置が浅いトライアングルチョークを仕掛けると孫悟空はきききと笑つてこう続けた。

「遠山、お前は本当に面白い奴だったが遊びは終いじや。だが中々程度では

この攻撃……『鬪體剪剪脚（ジューロジャンジャンジュ）』を完璧に

極められる様な弱い男は嫌いじやから……今ここで殺つちやうか。そう言つて孫悟空は足で絞殺そうときちぎちちとしているが鎧からは

音が出ないどころか……頭部鎧からきゅいいいいと音が鳴り始めたのだ。

「何じやこれは？」

何の音じやと思つてしていると目部分のバイザーが淡く輝き始め嘗ては大剣が

装備されていたそこから……キャノン砲がせりあがり更にキャノン砲の

接続部分からピピピピと言いながらふわふわと浮遊するナニカが……円盤の様なナニカが現れたのだ。

「何じやつて……!!」

孫悟空はそう言つてしていると一瞬で目を見開いて驚いたのだ、円盤の様なナニカは変形し数本物刃が現れて鋸のように変形して襲いかかったのだ。

「くう……これではー」

孫悟空はそう言つて回避ししていると幾つもの浮遊型鋸はピピピピと言つて

まるで花開くかのように姿を変えると同時にエネルギーキャノンから

巨大なエネルギーが出ようとしているのが確信したのか孫悟空も目から如意棒で

攻撃しようとして身構えてバチバチと互いにエネルギーが光り輝

き始めそして・・・攻撃した。

「きゃあああああああああ！」

ポーナの悲鳴が屋上にて響くがそれすらも互いは聞こえなかった
のであろう

バチバチとエネルギーのぶつかり合いが襲い引けない戦いだとい
互いに

そう思っているがそれは・・・直ぐに形勢が変わった。

何と孫悟空の如意棒が・・・負け始めたのだ。

「なん・・・じゃと・・・！」

如意棒が負けそうな等今までなかった孫悟空は・・・はハハハハハ
と

内心笑いながらこう思っていた。

「まさか俺がここ迄負けそうになるとは・・・じゃがこれ程とは

俺も驚いたわい、あの刀を渡したのが運の尽きじゃわい。」

そう思つて鍔を見つめてこう思っていた。

「(のう四季崎よ、お主は何時でも笑いながら何時も未来を見つめ
とつたのう。今ではなく明日を・・・未来を夢見とつた・・・今お前
は笑顔か・・・)」

そう思いながら孫悟空は迫りくるエネルギーの奔流を見つめる事
しか・・・
できなかつた。

「この戦、遠山様の勝ちのようですね。」

諸葛はそう言って倒れた・・・ぶかぶかのチャイナドレスを身に纏った孫悟空を寝かせながらそう言っているとそれではと言ってこう続けた。

「遠山様、貴方は孫悟空に勝ちました。そして貴方を頂点とした新たなランパオは諦めます、そして私達は貴方を・・・遠山様の部下として

所属して貴方達を支援します。」

「・・・良いのかよ？色々と問題が出るんじゃないか??」

「構いません、それにこれでアジアでの極東戦役は間違いなく勢力
図を

一変させるでしょうね。」

諸葛がそう言っているとキンジ達に対してこう続けた。

「アジアが貴方方の所属・・・無所属と言う事はこれでこの戦争は今や第3勢力が他2つが所属している勢力にとって脅威となるでしょう。」

そうなんだと思っているとそれではと言ってこう続けた。

「では貴方方に色々と情報がありますのでご報告いたします。」

そう言っていると諸葛は携帯電話を操作して報告した。

「今のヨーロッパ帯はカツエ達が傭兵を雇っているらしいです、
それにより

バチカン所属のエクソシストにM I 6・リバティー・メイソンは
壊滅状態らしいです。この報告は既にメーヤさんは受け取つてい
るらしく

既に向こうにいるらしいです。」

「!!」

それを聞いてキンジとポーナが驚いている中諸葛はこう続けた。

「私が貴方方をシルクロード経由でお送りします、直ぐに準備を」

諸葛はそう言っている間に何故だが・・・霧が立ちこみ始めており
何だと

思っていた。

そして暫くすると霧の中から・・・其れが現れた。

「あれは・・・タンカーだと・・・。」

キンジはそう言ってそれを見ていた、それはまるで・・・戦いの感じでした。

犯罪予告

キンジは其のタンカーを見て驚いていた。

嘗て武藤から聞いた話だが大規模Ⅱ種石油タンカー、然も空母よりも大きい

巨大船舶であった。

然も水面順から赤、黒、甲板上からは白と言う典型的なカラーリングであるが

赤い部分から殆ど見えない程に喫水線が深い程石油を満載しているのである

その船の国旗の部分を見るとキンジどころかポーナはそれを見て目を大きく

見開いていた。

「・・・鉤十字（ハーケンクロイツ）・・・!!」

それは嘗て第二次世界大戦にて一大勢力を担い世界の中で最も悪名高い組織・・・ナチス党の紋章であった。

そしてその下には赤地に白い盾と内側には黒い獅子が施されていた。

「あのマーク・・・レギメント・ヘクセの旗だよ!」

ポーナな言葉にマジかよとキンジはそう思っていた、あの魔女の恰好をした少女。カツエの事を思い出すと諸葛はこう説明した。

「レギメント・ヘクセは元々第二次世界大戦後にイ・ウーに逃亡したハインリヒ・ヒムラーが育成してたアーネンエルベのステルス部隊のみで

構成していいいます、カツエはその9代目ですその二つ名は・・・

『厄水の魔女』と言う異名持ちです。」

そう言っていると・・・下から声が聞こえた。

「飛んで火にいる夏の虫って言うのはこの事だわ！風穴開けて捕まえてやる！」

ママの冤罪96年分はイ・ウー時代のアイツの罪なんだからね!!」
そう言いながら二丁拳銃を向けると上空から・・・何かが現れたのだ。

それはぶよぶよとした訳が分からないゼリーの様なものが乗っていた。

少し白身がかかったほぼ透明のスライムであつたが諸葛はあれはと言つて

こう続けた。

「厄水形ですか、あれは殆ど水と変わりませんから攻撃は無駄ですね・・・

一部を除いてはですがね。」

そう言った瞬間に諸葛は携帯を操作して暫くするとヘリか勝手に・・・

動き出したのだ。

然しスライムはそれを飲み込むと同時にキンジに向けてこう言つた。

「今ですよ遠山さん。」

そう言ったと同時にキンジはインクルシオのプラズマキャノンを使つて

攻撃すると直撃と同時に・・・消滅したのだ。

「どれだけ倒せないものでも攻略手段は幾らでもありますから。」

そう言うのと今度は鳥が現れたのだ、そして鳥は持っていた携帯電話を置いて

出て行くと上空に舞い戻つて行つた。

そして携帯電話から・・・声が聞こえた。

『諸葛ーーーー!!手前何壊しやがるんだーーーー!!』

「二体何の用なんでしょうか、カツエさん?こちらはまあ色々あります。まして金龍に鞍替えします。」

そう言うとカツエはそれを聞いてこう続けた。

『手前分かってんのか？西はテイーンのM I 6、東はグレナダのランパン。』

この2つがどちらも遠山キンジ側に加わった・・・もうこいつらは只の中立派じゃねえ、第3勢力・・・言うならば『戦主（パーティー）・・・』

そいつらは今後そう呼ぶがあたしらはそいつをそこ事・・・破壊する。』

『!?!』

それを聞いてキンジ達は驚いていると諸葛はこう続けた。

「ここを破壊する・・・一体どうやってですか？」

そう聞くとカツエはこう答えた。

『・・・タンカージャック。』

それを聞いて上に辿り着いた理子がこう呟いた。

「タンカージャック・・・手前ここを火の海にする気か!？」

それを聞いて全員が一体どうということだと思っていると理子はこう続けた。

「イ・ウーにいた時あたしはここから爆弾戦術を、カツエからは乗っ取り戦術をあたしに教えてもらった・・・それでタンカージャックだけどこいつは

テロリストがやるような爆破戦術じゃない。ニュースとかで聞いたことねえか

原油流出事故？あいつはまずそれを人為的に起こして湾内に広げるんだ、あれの総重油量は15万トン。それが辺りに流れてもしそこが温暖な海なら

ジャンジャン揮発していくんだ、原油は海水よりも比重が軽いから浮かぶし

もしそれが1、3%に達すれば空気は全て・・・導火線になりやあどうなるか

思う？」

理子の言葉を聞くと上から天草が現れてこう続けた。

「・・・爆発すれば空気中の酸素は消滅します、そして・・・一酸化炭素中毒と窒息死！」

「そうだ、ナチスが開発していた『真空爆弾』・・・その現代版だ。」
それを聞いて全員が驚いていると松葉がこう言った。

「厄介ね、あの船の航路が載ってないわ！」

それを聞くとアリアは諸葛に向けてこう言った。

「諸葛！ここで一番速い船を頂戴!!それでタンカーに」

「無理だよアリア、あの船までいけないよ。」

白雪がそう言うところ続けた。

「海の・・・波と潮流を操作している、多分タンカーの中にいる魔女が

やってるんだと思う。」

それを聞くとならばどうするんだと思っているとポーナがこう言った。

「あたしたちのスーツにはハンググライダーと同じスーツが付いてある、だからいけるのはあたしと・・・オリジナルを持つてるキンジね。」

それを聞いて全員がキンジ達を見るとアリアはキンジに向けてこう言った。

「キンジあたしを運びなさい！ママの冤罪を造ったカツエをこの手で」

そう言いかけるが諸葛はこう返した。

「無理ですよ、貴方では彼女には勝てません。」

言い合い

「無理って・・・今アンタあたしに向けて言ったのそれ？」

「ええそうですよ、貴方ではカツエには指一本も触れられません。」

「生憎だけど私は『無理』、『不可能』は嫌いな言葉なのよ。それにまだ戦ってもないのに勝てないなんて何で言い切れるのよ！」

アリアは諸葛に向けて大声でそう言うのと諸葛はこう答えた。

「先ずは戦力差です、あちらは恐らく魔法使いで構成された傭兵部隊。然も

カツエの別名は厄水、つまり海や水が多くある場所は彼女にとってホームグラウンドそれに貴方一人で何が出来ますか？」

「二人じゃないわ、キンジにポーナがいる。こいつらの実力は私がよく知っているわ。」

「知っているとは訳が違います、貴方の実力では2人の足を引く張るだけです。」

「そんなのやってみないと分からないでしょ！」

「やってみないと分からない・・・土壇場でうまく行くほど世の中甘くありませんしそれに貴方は香港にいる数百万人の命を背負うのです、

貴方はそんな状況で戦えますでしょうか・・・？」

「戦えるわ！こいつらを使えばタンカーの一つや二つ」

「いい加減にしろ神崎！今言い争いしている場合じゃねえぞ!!」

キンジが大声でそう言うのとアリアはキンジに対してこう言った。

「何よ！あそこにはママの冤罪を被せた奴がいるのよ!!今すぐにも

行きたいのに船じゃいけないしヘリコプターは今ぶっ壊されたのよ!?!もうあなたに頼むしか」

アリアはキンジに向けてそう言うがアリアの背後から理子が現れてこう言った。

「もういい加減にしろよアリア！時間がねえんだ!!先ずはキンジと

ポーナを

連れて行かすとしてこいつらがアンタを連れて行けるのかよ!？」

理子に対してアリアがそう言うがけどアリアが言うがポーナは理子の言葉に

対してこう答えた。

「あたしのスーツは一人用、キンジのは…何人までならいける？」

ポーナの言葉にキンジは恐らくと言ってこう答えた。

「多分だが…一人迄ならいける。」

「ならあたしを」

「駄目だ、お前と一緒にいてもコンビネーション出来るかどうか分からない。

相手が超偵だとして俺が遊撃、ポーナがその援護、後は…ジャ
ンヌとお前だ。」

「私…成程な、水ならば私が相手取ったほうが有利だな。それに
内部に

入った時に作戦を考えるのに私が適任だな。」

「ああ、頼む。」

それを聞いてジャンヌは分かったと答えるとキンジはジャンヌ
を…

お姫様抱っこした。

「あああああああああああああ!」

白雪がそれを見て大声でそう言うがキンジは諸葛に対してこう
言った。

「諸葛頼みが」

「分かっています、皆さんと翼さんと空さんをここから離れさせま
す。」

「濟まない…それじゃあ皆」

「遠山さん!」

すると翼が前に出るとキンジに向けてこう言った。

「あ…死なないで。」

「…分かった。」

キンジは翼に対してそう答えると武藤がこう言った。

「後の事は任せな、お前が仕事出来やすいように俺達がいいつらを安全な場所に避難させるからよ。」

任せろと言うとキンジは任せたぞと言って・・・ポーナと共に空高く飛び立つとジャンヌはキンジに向けてこう言った。

「遠山、そう言えば今日はクリスマスイブだな。」

「ああ・・・そうだったな。」

「後で祝うぞ、皆で。」

「ああ・・・ケーキを皆で食べようぜ。」

そう言う言葉と共にキンジ達3人はタンカー向かって飛び立っていった。

帰還

キンジ達が降り立つと降りてきた先にいたのは……複数の人型の水であった。

「同じ奴らか。」

「だがこいつらの行動パターンは把握できる程度でしかない。」

だからと言ってミシエラは床に手をついた瞬間に……水の人型が一瞬にして……氷結したのだ。

「行くぞー！」

「おおー！」

「ええー！」

ミシエラの言葉にキンジとポーナがそう答えて敵がいるであろう場所に向かって行った。

内部は数週間もの間滞在するタンカーであったがため簡素なビジネスホテルの様な内装となっていた。

無論内部には人型の水が多くあったがミシエラの魔法により氷結された。

そしてその儘操舵室に向かうと中にいたのは……カツエであった。

「ようお前ら、たった3人でよく生きてこられたな。」

「貴様の魔法がコントロール能力が皆無だったからな。」

ミシエラがそう言うのとそうかよとカツエがそう呟いているとポーナはカツエに

向けてこう聞いた。

「貴方……どうやって私達がここにいと誰に聞いたのよ？」

「……」

「あんた達は確か西ヨーロッパを主立っていたはずだけどランパオから

連絡がなければこんなに早く来られなかったはずよ、それにここ迄大規模なテロ何て出来ないはずなのに一体誰からの報告でここに来たのよ？」

ポーナの言葉に暫く無言でいる中カツエは外にいる鳥に向かって

口笛を吹くと・・・多くの鳥を引き連れて現れるとカツエは其の儘鳥の大群の中に突っ込んで

こう言った。

「あばよ手前ら！今度は西ヨーロッパで決着だ!!」

「何もしねえのかよ!?!」

「当たり前だ！けどこの船を爆発させる運命は決まってるからな!!」

そう言って暫くして・・・消えて行った。

「糞が・・・あいつ何処に消えたんだ!」

「今は奴よりもこの船を何とかするのが先決だろうが!」

ミシエラの言葉に畜生と思いつながらキンジは船の操舵部分を見るが見事に・・・破壊されていた。

すると海の向こうから・・・声が聞こえた。

『遠山さん!』

「!?!」

何だと思つて見て見るとそこで目にしたのは・・・大量の船であつた。

『これから船を使って引つ張ります!ですので遠山さん達はこちらが止めている間にあの鎧を使って海の中に入って舵を破壊してくだ

さい!!』

「!!・・・分かった!ドン位なら止められそうだ!?!」

キンジがそう聞くと船の上にいる諸葛が暫くして・・・こう答えた。

「今こちらにありますのは50艘程ですが武偵校の生徒方達も

参加してくださいますので後・・・20分は持てそうです!」

「そんだけあれば十分だ!行ってくる!!」

キンジはポーナに向けてそう言っているとポーナはキンジに向けて

こう反論した。

「私も行くよ、ここにはミシエラもいるしそれに何より・・・一人よりも

二人の方がやりやすいだろ？」

それを聞いてキンジは暫くして・・・こう答えた。

「分かった・・・頼む！」

キンジの言葉にポーナもOKと言って互いに海の中に入って行った。

船の舵と言うのは船の下にアルのでキンジ達は船底に潜って舵の方を見た。

「まだ回っているな、壊すとなると・・・これか。」

そう言っつてキンジは槍を抜くとポーナもナイフを抜いて構えると2人は

攻撃して・・・舵が壊れて行った。

「爆発した・・・今です皆さん！引っ張って下さい！」

諸葛の言葉に船にいた全員が船を動かすとローブで船の柵に固定して引っ張ってそして・・・動きが止まった。

そしてその日の夕方

「それでは皆様、お気をつけて。」

諸葛がそう言うのとキンジの前に翼が現れてこう言った。

「遠山さん、今までお世話になりました。姉と共にこれからロシアに

渡ります、あちらではヴェルカさんのお父さんが私達の為に家を用意しているらしいのでそちらで生活します。」

「そうか・・・落ち着いたら連絡してくれ、もしかしたら

何か手伝えることがあるかもしれねえからな。」

「ありがとうございます、ですけど姉と一緒にですし何より・・・私自身で

出来ることを最大限にしたいので。」

そう答えるとキンジはそうかといってそれじゃあなと言うと諸葛が前に出ると

キンジに向けて手で招くのを見て何だと思っていると諸葛は耳元で囁くように・・・こう言った。

「遠山様気を付けてください、彼らがどうやって我々の居場所が分かっていたのか

分かりませんが・・・裏切り者出た時の対策はしておいて損はないですよ。」

「裏切り者って・・・俺達の中にあるって言うのか？」

「それか・・・曹操三姉妹かもしれません、彼女たちは一応ですが

連絡要員として定期連絡していますので恐らくは。」

「だけど俺達がこの国に来る事知っているのって俺達含めたとしても・・・後は教師陣か？」

「恐らくでしょうね、この極東戦役・・・何かあっても不思議ではありませんよ。」

以上ですよと諸葛がそう言うのとキンジ達はそうかといって其の儘全員飛行機に乗って日本に向かって飛んで行った。

そして日本で新年を祝った、メーヤは未だ帰還していなかったが大丈夫だろうと思っていたが新年の矢先・・・とある言葉が玉藻によってもたらされた。

「メーヤが攫われた、目的は不明じゃが欧州は最早グレナダによって支配される寸前となっている。」

欧州へと

「メーヤさんがつて一体誰が!?あの人の強さお前が良く知っているはずだろ!」

「知つとるわい、じゃが真実じゃ。欧州はグレナダとカツエ率いる魔女連隊と

もう一つ……新たな第4勢力が欧州を支配しとる。」

「第4勢力……俺達みたいに極東戦役の会議に出席していなかったのか?」

「そうじゃ、出席していない無所属によって欧州の裏社会は今や戦場で

敵対勢力じゃつた連中は……皆殺しにあつてもうて既に半分以上の裏組織は

崩壊しとる。それだけではない、今魔女連隊は他国の魔女も従えてその第4勢力とやりあつとる。メーヤは中でも魔女連隊にやられて

連れ去らわれたのじゃ、現在バチカンと十字教会はメーヤ救出に作戦を

練つとるようじゃが兵力が足りん。現在同盟を結んどる中で十二分の戦力を

保有するお前たちにお鉢が回つた事になるがお前たち金龍が総出で行けば

怪しまれる故……若干名出したいがお前姉上から聞いたが単位とやらは

十分なのか?」

玉藻が珍しくもそう聞くとキンジはこう答えた。

「俺の単位は十分だ、ここ最近は色々任務が立て込んでいたしこの間の

タンカージャックでのテロ未遂の功績もあつて俺は自由行動が

出来やすくなつてる。後動けるのと言えば……ダイアナ、ミシエラ、ポーナだ、クリスは途中入学でまだ単位が足りてねえから金龍は

今ので全員。

天草、松葉、詠、カイズマスは別用で今は新年での行事で忙しいんだ、

だから行けるのはそれだけだ。」

「そうか・・・ならばこの国に残らせるのはそうじゃな・・・今言つた連中で

半分くらいがベすとと言つたところじゃな。」

「となると欧州で顔が聞くのはダイアナとミシエラ・・・

どっちにするかだな。」

キンジがそう呟くと玉藻はふむと言つてこう答えた。

「それならばダイアナはどうじゃ？あ奴はお前さんに忠誠を誓つてるし何より

あ奴はM I 6のメンバー、欧州はあ奴にとって庭同然じゃ。無論ミシエラも

魔女に対抗できるがあ奴は裏社会では色々と問題があるからそつちの方が

良いかもな。」

「そうか・・・旅券はいつ買えばいいんだ？」

キンジがそう聞くと玉藻はこう答えた。

「そうじゃな・・・三が日を終えたらすぐに行くといい、仲間にも説明するんじゃぞ。」

それを聞いてキンジは分かつたと答えると同時に玉藻は姿が消える

と
キンジは外を見てこう呟いた。

「はあ……こいつはまた厄介な事になりそうだな。」

「そうか、ならば私は後方支援に回るが万が一の時には援軍を寄こすように」

「言え。少なくとも欧州は私にとつても庭同然の場所だから何とか手を貸されるかもしれない。」

「ありがとう……ダイアナ済まないが。」

「分かっております、早急に旅券の準備を始めます！では私はこれで。」

ルンルンと鼻歌歌いながら電話を取りに行くのを見てキンジは嬉しそうだなど

思いながらステーキを頬張った。

食後キンジは武器の準備をしていると……電話が鳴り始めた。

「はい、どちらさまって……高天原先生。どうしたんです？」

『うん御免ね遠山君、実は君に報告する案件があるのよ。』

「案件って・・・もしかして仕事だったら済みませんが」

『あら？もしかしたら何か用事があったのかしら？』

「ええ、実は事情がありまして欧州に行こうかと。」

『あら任務だったら仕方ないわね、それだったら遠山君に報告する事ね。』

実は緑松校長先生からいう事があったのよ。』

「へえ、俺らん所って校長がいたんですね。」

『いたのよう、それでんだけどなんとなんと遠山君に2つ名が与えられたんですよ〜！』

それを聞いてキンジは心の中からもへえと思っていると高天原先生は

こう答えた。

『遠山君の2つ名はへエネイブル、不可能な事を可能にして未来の一つとして加えられる。ちなみに二だけど感じは・・・分からないから言わないわ。』

何せ常用外漢字だしそれに君は既に日本の警察庁とロシアの外交部が君に対して

好印象なんだけどイギリスとアメリカは何だか君に対して色々といちやもん

付けているのよ〜、中国政府は色々君に対して恩義があるから取りあえずは

アメリカに対して何とかその文句を取り消せるように努力するってね。』

「ああ・・・まあ俺は構いませんけど。」

『それとね、君にお願いがあったんだけど欧州に行くんなら

お願いできるかしら？』

「・・・内容によりますが。」

キンジがそう聞くと高天原先生はこう答えた。

『実は問題のグループがあつて君には監督者として彼らの監視を願いたいよ、キャラバンIIで落ちた子がいてその子たちの救済策って意味でヨーロッパに

行ってほしいのよ。』

「何したんですかそいつら？普通堕ちないでしょこれ?!」

そう聞くとええとねと言ってこう答えた。

『メンバーは3人でチーム名はへコンステラシオン、メンバーは
へ中空知さん、へ島 苺さん、へ京極 めめさん、何だけど

全員シンガポールにいて期限内に戻れなかったからこのままいけ
ば留年確実だからお願いねえ出来るかしら〜?』

高天原先生の困った声を聴いてキンジはううんと唸りながら・・・
こう答えた。

「分かりました、微力を尽くします。」

空港にて

正月気分が抜けきれぬ1月5日の朝、キンジはコンステラシオンの
監査役として

ダイアナと共に総武線直通の横須賀線・特急で成田空港第2旅客
ターミナルに着いて待ち合わせ場所である国際線出発ロビー内のN
AAランデブープラザにあるスタバに入って行くとそこには既に……
先客がそこにいた。

コンステラシオンのリーダー、中空知 美咲がそこにいた。

もさくてでかいスーツケースを向かいの席に乗つてとある本を讀
んでいた。

それが……これ。

『『会話が上手く行く21の習慣』って……あんなの讀んで
何になるんだよ?』

「恐らくはあれで気を紛らわせているんじゃないかと思われま
す
が。」

「あれって……効くのかよ?」

「さあ、どうでしょう。」

キンジの問いにダイアナがそう答えるとキンジは仕方ないと言っ
て向かうと

キンジは中空知に向けてこう言った。

「よう中空知、おはよう。」

「おはようございます中空知様。」

「ー」

その声を聴いて中空知はびくつとしてばしん!と力強く本を閉じ
て自らビビって

の言動皆がじつと見ているぞ。」

それを聞いて中空知は周りを見て・・・ぼふんと顔を赤めらせて慌てて

こう言った。

「しゅしゅしゅしゅしゅしゅみましえんええええとそによhgkjhk:k:k;ljhkkjghfgdsdふあ!!」

「お前・・・ちよつと黙つてろいや本当に。」

キンジはそう言つて黙らせるとダイヤモンドがカモミールティーを持って

現れてきたのだ。

「遠山様、カモミールティーと珈琲をもって来ましたのでどうぞ。」

「お前・・・作つたのか?」

「いえ、流石に店内の機材を使う事を許可されませんでしたので作り方を

お教えして差し上げて見た所中々好評だったら幸いですのでそれで今回は

特別に試作品として提供させていただきます。」

「そうか、聞いたな中空知。少し落ち着くぞ。」

「ひゃひゃひゃひゃい!」

そう言つて中空知は座ろうとして対面の席にあつた自分の荷物をどかさうとして・・・だばあとスーツケースが開いて中からぐしゃぐしゃにして

入れてあつた服やら本やらヘッドホンやらそして・・・拳銃がごろんと言つて

現れたのだ。

「お・・・おい中空知、銃は流石についてお前・・・これつて・・・!!」
「コルト・アナコンダ、然も最長8インチの銃身を誇るシリンダーに

難がある

初期バージョンですね。」

「ああ・・・確かにな。」

「?。」

中空知は何だろうと思っているとキンジはマジかよと思っていた。熊や水牛ですら一撃で殺すことが出来る44マグナム弾（フォーティフォーマグナム）をぶっ放す大型リボルバー拳銃である。然しシリンドラー、つまりは回転する弾倉に難があると言うリボルバー式拳銃の中でも最も重要な場所に難があると言う最悪なタイプであった。

「お前……こんなゲテ物使えるのかよ?」

そう聞くと中空知はええとと言って……こう続けた。

「う……撃つたことはありません。」

「いや待ておい、じゃあ何でこれにしたんだよ?」

キンジがそう聞くと中空知はこう答えた。

「じゅ……銃は怖いので……あまりよくあまり知らないもので……調べるのも怖くて……ですから……あまりよく知らないで……でも校則で持っていないといけないので……鉄砲屋さんに薦められて……これを……」

お安くして頂きました……然も3割引きで。」

中空知はそう言いながら大人の下着をスーツケースに入れていると……

キンジはああなと思ってこう思っていた。

「(こいつ……何で武偵校に入れたんだよいやマジで。)」

フランスへ。

あの後から暫くしていると一人の少女がやってきた。

目測で135cmのアリア以下の少女で背中には女児用のリュックを背負っていてでかいリボンの付いた20cmのピンクのエナメル靴を履いていた。

そしてその服は前進んがピンクと白のリボンとフリルの幅が・・・体よりも

多く滅茶苦茶広くなっている程の改造制服を身に纏っている・・・武偵校生徒が

そこにいた。

「ええと・・・君は？」

誰と聞くと少女はビシツと敬礼してこう答えた。

「監査役様お初にお目にかかりますの、私の名前は『島 苺』ちゃんですの！」

「・・・え？」

マジかよと思っていると確かに制服の僅かな隙間からエンブレムが見えた。

「あああああのねおとこやまくん『島』さんは」

何やら中空知は慌てた様子で何か言っている様であったがキンジは慌てるなよと思っているとダイアナがこう答えた。

『島 苺』さん、ロジでランクはA。2年の武藤様のライバルと評されております。」

尚これは武偵校では当たり前ですよと言うとへえとキンジは少し疑っているが

其の儘流すと最後の一人は何処だと思っていると中空知の電話から音が鳴った。

「あ、はい。中空知です・・・あの・・・ダイアナさんお言伝を。」

「分かりました、ご主人様。レピアの『京極 めめ』様なのですが先ほど

医療班からお電話がありましたして過呼吸を起こして入院しているら

しいです。

どうも通信教育で今まで家の中にいたそうですが久しぶりの外出で

過呼吸になったそうです。」

「ちよつとマテ・・・前の時はどうだったんだ？」

キンジがそう聞くと中空知がダイアナに耳打ちするところ言った。

「如何やら彼女が前に出れたのは今まで精神医療と薬物で

誤魔化せていたようですが今日は突然の事だったようですので

何も準備出来ていなかった様です。」

「・・・もう脱落者が出ちまったぞ。」

「そうですがこればかりは仕方ありません、後でこのチケットを別の

私達のチームの誰かに与えましょう。」

「俺達のチーム・・・ミシエラ、ポーナで今行けそうで欧州で普通に活動できるのはポーナになりそうだな。」

「はい、でしたら電話をかけてみますね。」

そう言つてダイアナが電話を掛けると暫くして電話の向こうからポーナが

こう答えた。

『OK、任せてよ。今すぐに出て次の便でそっちに現地合流するよ！』

向こうで会おうと言つて電話が切れるのを確認するとそれじゃあと言つて

キンジは全員に向けてこう言った。

「それじゃあ俺達は欧州へと向かう、目的はコンステラシオンの補習の完了。」

「それじゃあ全員・・・行くぞー！」

「ハイー！！」

そして全員がフランスのシャルルドゴール空港に着陸するとコンステラシオンは其の儘入国審査を終えて暫くすると・・・ポーナもやってきた。

序にミシエラも。

「何で!?お前来てるんだ!!」

「いやその・・・私は反対したんだがポーナが『一人でいるなんて寂しいじゃん!裏社会に関しなきゃいけない!!』と言われてな・・・」

「お前・・・押しに弱いだろ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キンジの言葉を聞いて何やら無口になると成程など言っつて溜息付くと

ダイアナを經由して中空知に向けてこう言った。

「悪いが一人追加って事で頼みたいんだ、どうせキャラバンVは一人一人で最低2班で行動する奴だから現在6人いるから中空知は島とミシエラはブリュッセル、

俺はダイアナとポーナと組んでパリで行動する。言つとくがこのキャラバンVは

基本各自やりたいことをして誰も何も強制しないが・・・これからの世の中の

あらゆる物事が年々国際化していくから武偵だつてその例外じゃない、

この修学旅行のもう一つの目的は街を観察しテロや戦闘等で遭遇戦になった時でも対処できるようにすることが目的って事を忘れるなよ。」

そう言っているがもう一つ目的があった。

この修学旅行Vにおけるもう一つの目的はメーヤの奪還とグレナダの

戦闘における現在の状況を把握するのが目的である。

この極東戦役において関係ないコンステラシオンの護衛もかけてミシエラを

中空知達の方に回して自分達はメーヤ奪還を計画していたのだ。するとミシエラがキンジに近づくとこう言った。

「それとだがもし逃げる時があつたら北に行け、ブリユツセルには車でも

電車でもすぐ抜けられるが万が一陥落していたら更に北のアムステルダム、

其れが駄目ならばロンドンだ。今やここはグレナダのテリトリーになっていいるから撤退戦は慎重に行動しろ。もし手伝いがいるのなら私に連絡しろ、フランスには私が今まで使っていた隠れ家も幾つもある。そこで身を潜めろ、メーヤを

見つけたとしても同じように隠れ家に入って連絡してくれ。」

良いなと言うとキンジは分かったと了承してダイアナ達と行動する事となった。

そしてミシエラ達が出て行くのを確認するとキンジはダイアナとポーナに向けてこう言った。

「よし、俺達の目的は知っての通りだと思いがメーヤさんを救出するぞ。そしてメーヤさんと一緒に日本に行くぞ。」

「了解！」

その言葉と同時にキンジ達は行動した。

フランス支部へ

その後キンジとポーナはダイアナの案内の元高速郊外鉄道（RE）で

パリ市内へと向かって行った。

そして京成スカイライナーみたいな形状である電車で

パリ北駅（ガールデユノール）に着いて・・・ぞっとした。

本来ここは旅行者でありふれているであろう場所なのにその場所は薄暗い・汚い・冷え冷えとした最悪の3拍子が揃っていて周りにはホームレスや薬物中毒者等が

壁際に陣取っており更にその周りには迷彩服をきた警備員がブルバップの

マシンガン（FAIMAS）で武装しながら巡回していたのだ。

「ここまで治安が悪いのかよここ。」

「こんな場所じゃアメリカの黒人街の方がもっと平和的な場所だよ。」

「前に来た時はそれほどは無かったですけどやはり極東戦役が尾を引いている様ですね。」

「極東戦役って・・・あれは表には関係ないんだろ？」

「普通でしたらですが今や戦争状態、そうなると裏社会でもマフィアとかが

ひしめき合いますので薬物に地上げ等も横行しておられますそれに伴い

この様な状況となっているのです。」

「成程な・・・だから治安が悪いのか。」

「そうです、それに気を付けてください。ここら辺にはすりか横行しておられますのでポケットに物は比較的に入れないようにお願いしますね。」

それを聞いて2人は気を引き締めるとそう言えばとポーナはキンジに向けて

こう聞いた。

「クリスちゃんは良いの？呼ばなくて。」

「ああそれな、今回は少数精鋭って事もそうだけど向こうに連絡役を

用意しなけりゃあいけねえだろ？」

「確かにね、けど援軍がいるときはどうするの？」

「向こうで準備させている、スナイプとしての実力が必要な時に呼ぶ。」

「そっか・・・じゃあ方が一に備えておくか。」

ポーナはキンジに向けてそう言ってよっしゃーと思っているとそれではと

ダイアナはキンジとポーナに向けてこう言った。

「それでは皆様私達M16が使用している宿があります、そこで先ずは作戦会議を始めます。」

そう言うとなんやら黒い車がこっちに近づいてきた。

「何だあれは？」

キンジがそう呟くと車が前に停まって出てきたのは・・・

メイド服の少女であった。

紫の髪でダイアナとは正反対のスレンダーに見えるがクールそうな少女が

現れると少女はこう言った。

「ダイアナ先輩お久しぶりです。」

「貴方は確か候補生の・・・『デヴァン・シャーロット』ですね？」

「はい、現在は医療班に所属しております。」

「医療班ですか、貴方は確か毒物等に関しては天才的でしたしね。」

「はい、それとですが今回は皆様のお迎えと現在の戦闘状況について説明いたしますので。」

『デヴァン・シャーロット』がそう言って全員を車に乗せるとそれではと言って『デヴァン・シャーロット』はそれではと言ってこう続けた。

「現在の戦闘状況ですが・・・私達『ディーン』は今切迫しております

す。」

そう言うところ続けた。

「現在欧州の戦闘状況は最悪に近いです、教会側では強襲されたことで

立て直しに時間がかかりますしメーヤ氏が今何処にいるのか

把握できていません。」

「そうか・・・分かったら俺に伝えてくれませんか？俺はメーヤさんを

助けに来たんですから。」

「申し訳ありませんが貴方は」

『『デヴァン・シャールロット』、遠山様は私の主なのですよ。』

連絡してもらわなければ我々M I 6の名に傷がつくことになりま

す。」
「・・・分かりました、では襲撃してきたのはドイツの魔女連隊です

が
現在彼女たちが何処を拠点としているのは不明です。彼女たちは

幾つもの
近代兵器を保有し其の隠し場所にメーヤさんがいるかもと言われ

ておりますが
彼女たちは魔術も含めてでしょうが巧妙に拠点を隠しております
ので場所が困難としておりますので私達M I 6の持っている情報を

元手とし確認したところ
カツエは現在パリのストラスブールにいるという事が発覚してい

ますが
それ以上の事は未だ。」

「分かりました、でしたら私達の目的地はストラスブールです。」

明日一番にチケットを手に入れたいですね、ですがフランスの首都

にいると
言うのが分かりません。あそこには確かミシエラさんの故郷です、
彼女の故郷ともいえる場所で何を？」

「そいつはミシエラに聞いたほうが速そうだな、後で連絡してみよ

うぜ。」

キンジは今の事を聞いて後で連絡してみようと言うと

『デヴァン・シャーロット』は車を暫く運転して・・・とある場所に着いた。

「ここか？」

「はい、ココが私達M I 6のフランスでの行動拠点です。」

ダイアナがそう言った目の前にあったのは・・・小さな食堂であった。

「ここなのか？」

「けどこういうところならまさかこんな所に基地があるなんて思わないでしょう？」

ポーナがそう言うのとダイアナ達は『デヴァン・シャーロット』と共に入ると中にいるのは・・・食堂の従業員であった。

「何か御用でしょうか？」

従業員の一人がそう聞くと『デヴァン・シャーロット』はこう言った。

『『フィッシュアンドチップス』のクリーム煮込み、クリームはホワイトポテト和えで。」

「・・・お味のほどは？」

「ポテトは少し冷えたので。」

「・・・こちらへどうぞ。」

そう言つて従業員は席を案内するがそれは・・・外に通じる扉であつ

た。

「では……武運を。」

そう言っ外に出て近くにアルごみ箱を開けて中には……通路があった。

すると『デヴァン・シャーロット』は全員に向けてこう言った。

「では参りましょう、MI6のフランス支部へ。」

フランス支部にて

「・・・これが・・・基地なのかよ?」

「はいご主人様、こここそM I 6のフランス支部でございます。大きく口を開いて（。D。）ぽか〜んとしているキンジに対して内心だが

ダイアナは得意げにそう答えた。

ゴミ箱に擬態しているかのようになっていた入り口から降りて行った先に

あつたのは・・・まるで秘密基地みたいな空間が広がっていたのだ。大勢の職員が働いている中でポーナはダイアナに向けてこう聞いた。

「ねえダイアナ、もしかしてだけど・・・他にもあつちやつたりする・・・

かな♪」

「ありますよ、欧州だけではなくいろんな国に。」

「うわああお。」

ポーナはマジかよと思いつながら天井に目を向けている中で今度はダイアナよりも

年下であろう薄い金髪に片目が隠れている少女が現れた。

「ダイアナ隊長、お久しぶりです。」

「久しぶりですね、『シルフィ』。変わりはありませんか?」

「未だです、現在把握するのには明日の朝までかかると推定されます。」

「そうですか・・・ホテルの方は?」

「敵が来たとしても対応できますようにモーターを一施設分レンタルさせてもらいました、それとですが武器一式分も手配済みです。」

「教会側からは?」

「・・・それがですが部隊を送るにしても既に疲労がピークになっているのが

大多数らしく救援には来られないそうです。」

「・・・こんな時に限って使えないとは・・・一体どれだけ資金援助を

受けてもらったと思っているのやら。」

ダイアナは『シルフィ』の言葉を聞いて頭を抱えてそう言った。

現状戦力不足と言う最悪な展開に頭を悩ませているとダイアナはキンジに向けてこう言った。

「ご主人様、如何やら私達3人しか出来なさそうです。戦闘部隊の方々は各地に散っておりまして今いるのは諜報部隊程度ですが・・・如何いたしましょう?」

そう聞くとキンジは暫くして・・・こう答えた。

「よし・・・武器があるって言ってたがどんなのがある?」

「こちらです。」

ダイアナはそう言ってキンジに武器庫迄案内した。

「こちらが武器庫でございます。」

「うわあ・・・凄いな。」

キンジは武器庫を見て・・・凄いと思っていた。

古今東西の武器が所狭しと並んでいたのだ。

その武器の量は武偵校ほどではないが大した数であった。

「場所によつてですがそうですね、ご主人様は多種多様な武器をお使いしますので必要なのは・・・こちらになります。」

そう言って渡されたのはボールペン・・・型の通信機であった。

「こちらの中にはアルインクがニトログリセリンとなっておりますので落とせば大爆発することが出来るものです。」

「危ないぞこれ！」

「大丈夫です、中身は入っておりませんから。」

「いやそもそも何であるんだよこれ?!」

「・・・暗殺用です。」

「没だ！相手を殺す奴なんて武偵憲章違反だ!!他のは?!」

キンジがそう聞くとでしたらと言つてあるものを出した。

それは小さな・・・眼鏡であつた。

これ何だよと思つて使うと目の前にあつたのは・・・幾つもの

監視カメラの映像であつた。

「こちらは監視カメラの映像から敵を特定するのにつかわれる

特殊レンズ内蔵型です、これで相手が逃亡した際には特定するのは

至極簡単かと。」

「・・・他のは?」

キンジがそう聞くとそうですねと言つてこう続けた。

「ネクタイがあります、こちらのは中に特殊金属で造られたブレー

ドが

ありますのでネクタイを引っ張ると其れが出ます。靴には色々と

ありまして

壁渡りする時用、ナイフを出すタイプ、靴底に小型煙幕装置がある

タイプなど

様々ですが。」

「・・・状況によつてはいりそうだな、取りあえずはメーヤさんの居

所が

分かつたらその場所です使える武器を持っていきつてえ。」

「分かりました、でしたらその時までにはモーターに参りましょう。

既に部隊が展開済みです。」

それを聞いてキンジはそうだなと言つてポーナと共に出て行つた。

モーターは目立たない空き店舗が多い店の一角にあつたが誰も目につかない

場所であるためキンジ達の隠れ家には丁度良いなど思っているとダイアナは

それではと言つてこう続けた。

「ここのお部屋は一人一部屋となっております、ですのでご主人様を中心に右にポーナ様、左が私となっております。ご主人様！何時でもダイアナのお部屋に

入つても私何時でも受け入れる準備が」

「そんなじゃあお休み。」

キンジはダイアナに向けてそう言うのと其の儘部屋に入るのを見てダイアナは

ポーナに向けて・・・涙混じりでこう言った。

「私・・・ご主人様に嫌われることをしてしまったのでしようか!？」

「いや多分今の言葉じゃない?」

ダイアナの言葉にポーナは・・・あほな子を見るような目でそう言った。

次の朝キンジが目を覚めて起きるとダイアナが扉の前でコンコンとノックして

こう言った。

「ご主人様、先ほどデヴァン・シャーロットから居場所が分かったという

報告が。」

「！・・・場所は?!」

キンジがそう聞くとダイアナは・・・こう答えた。

「正確には居場所を知っているであろう人間を特定致しました。」

「・・・誰だ一体？」

キンジがそう聞くとダイアナはこう答えた。

「対象はカツエ、明日の朝型にルーブル美術館に向かう事が分かりました。」

作戦準備

「ルーブル美術館……メーヤさんはそこにいるのか？」

「多分ですが……そこで私達は明日の朝ルーブル美術館に向かう為準備を

行いますのでもう一度武器庫にて準備を行います。そこで必要な物を用意して

出撃致しますので今夜は戦いの英気を養うために今晚行われる社交パーティーに

参加するのは如何でしょうか？」

「パーティーって……そんな事するために俺はここに」

「今急いでも解決いたすことは困難です！」

「?!」

ダイアナがいきなり大声を上げるのでキンジがびくりとするがダイアナは

キンジに向けてこう続けた。

「焦りは禁物です、人質救出で一番してはいけないのは慌てることで事を

仕損じる事です。メーヤさんを助けたいという思いに走って最悪なパターンを

想定した状況になってしまいます、今は落ち着いて私達が出来るところを

しましょう。先ずは力を蓄えて明日ルーブル美術館に向かう。そうしましょう。」

「……悪い、気を掛けてしまつて。」

キンジがダイアナに向けて謝るとダイアナは……笑顔でこう答えた。

「構いません、私達メイドは常に主が最大のポテンシャルを發揮させるために常に少し後ろで見守りそして支えることがお仕事ですから。」

それを聞いてキンジは初めてダイアナの事を本当の仲間なんだな

と実感する中・・・ポーナが現れてこう言った。

「それじゃあまづは・・・ドレス選びだね♪」

「ここが社交パーティー・・・なのか？」

「はい、正確には仮面パーティーです。」

ダイアナがそう言うのとそれではと言つてあるものを出した。
それは動物を模した・・・仮面であつた。

「これがか？」

「はい、遠山様のは犬、私は猫、ポーナ様は熊でございます。」

そう言つて手渡すとそう言えばとキンジは目の前にアル建物・・・
ガルニエ宮がそこにあつた。

「ガルニエで仮面・・・俺達はいつからオペラ座の怪人になつたんだ
？」

「確かにそうですがオペラ座と言うの p は歌劇場の総称でございます
ですのでここはあくまでもガルニエ宮でございます。」

「つてなるとき、クリステイヌは誰になるかって話だよね。」

「となればクリステイヌは・・・メーヤさんですね、不本意ながら。」

「じゃあ何か？カツエがエリックつてなるぞ??あいつ仮面・・・
あああいつ眼帯付けてて中二病的な奴だったな。」

そう言つてキンジはカツエの服装を思い出した、魔女その物みたいな
服装で然も烏付き。どこからどう見ても中二病だなど確信してい
る中ある事を思い出した。

「・・・オペラ座の怪人つて確か死人出るよな、3人くらい。」
「あ。」

それを聞いて3人はあ・・・と思ひ出してしまった。

このままいけば全員メーヤさんに会うまでに死ぬんじゃないかと言おう

不吉な言葉に・・・最悪な気分になりかけるがダイアナは慌ててこう言った。

「そもそもそんなの迷信ですよ皆様！あれは物語なんですから気を落とさずにさあご主人様、参りましょう!」

ダイアナは慌てながらそう言った。

今更であるがダイアナとポーナはドレスに着替えておりダイアナは紫色の胸元は上は見えないようにしているが下は・・・谷間が良く見えるので多くの人達が見え

ちらちらと見ていた。

そしてポーナはと言うと肩ひもが付いた黒いドレスで何時もは

ツインテールしていた髪形はポニーテールにして最後に首にはネックレスが

付けられていた。

其の儘3人が中に入ると既に多くの人々が喋っていた。

如何やら表だけではなく裏社会の人間もいるだろうと察するとキンジは

近くにあつたシャンパンが幾つもあったお盆が来るとキンジは3人分取るとそれをダイアナ達に手渡すとキンジは2人に向けてこう言った。

「・・・戦いの勝利を祈って。」

「戦いの勝利を祈って。」

そう言つて3人はシャンパンを飲んで机の上に置いた。

次の日、フランス支部。

「それではルーブル美術館は貴重な品々が多くありますのでそれが傷つかないように武器は全て近接格闘用の絞られます。」

そう言っ出てきたのは幾つもの武器であった。

ルーブル美術館は絵画や美術品が多くあり下手したら国家レベルの財産を

抛出しなければ修復できないものがあるかもしれないという事を想定した上での

武器の選択であった。

「先ずは剣、伸縮自在ですが耐久性に問題があります。槍の方も同じくです、

警棒ですが最もふさわしい武器となります。それですが服の方は

防弾・防刃に対応してしまして中にはポケットが入っています、小型の手榴弾・・・威力は爆竹程度ですからカツエの視線を逸らす程度は可能です。」

ダイアナがそう言うときンジは剣、ポーナは警棒を装備するとそれではと言っ作戦を説明した。

「私達はこれから獅子の門（ポルト・デ・リオン）から入館します、観光客ですらあまり知られていない場所ですので並ばずに入る事が出来ます。我々は其処に入りカツエを発見次第攻撃を開始します、そしてカツエに

メーヤさんの居場所を吐かせて彼女を救出しましょう。」

それを聞いてキンジとポーナは互いに頷くとダイアナはこう言った。

「では……参りませう。」